バカと天眼の賢者と召喚獣

天叢雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと天眼の賢者と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ５４２６Ｍ

【作者名】
天叢雲

【あらすじ】
ごく普通の一般人（？）な主人公天水鏡護は、世界中から注目を集めている『試験召喚システム』の試験校たる文月学園に通っている。そんな彼が、訳あって所属することになったＦクラスの仲間たちと『戦争』を起こすことに・・・・・・
原作を知らない方でも読める内容を心がけて作っていく予定なので、気軽に立ち寄ってください！

プロローグ（前書き）

はじめまして、天叢雲です。小説は今回が初投稿です。更新はおそらく不定期になると思いますが、ご容赦ください。

※　諸注意※

・　オリ主もの（弱チート系）です。
・　一部原作の設定をいじるかもしれません。
・　一部原作キャラの性格、設定が違います。

上記を了解した上で読んでくださる方がいたら嬉しいです。

それでは、本編スタートします！

プロローグ

春、それは新しい出会いの季節。
早いもので、僕が文月学園に入学してから2度目の春がやってきました。満開の桜に彩られた坂道を僕こと天水鏡護（あまみきょうご）は文月学園へ向かってのんびりと歩いています。まだ生徒たちが登校してくるには多少早い時間のせいか、辺りを歩く人の数は少ないです。

僕が通う文月学園は世間一般の高校と違い、“とあるシステム”の試験校です。
それは『試験召喚システム』といい、科学とオカルトと偶然によって完成したシステムです。
これは各自のテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦わせることができるというもので、教師の立会いの下でのみ行使が可能となります。

また、文月学園では点数の上限がないテストが採用されていて、1時間という制限時間と無制限の問題が用意されています。
そのため、各々の能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができるし、それに伴って召喚獣も強くなるのです。

さらに、生徒の勉強に対するモチベーション向上を図るために、召喚獣を使ったクラス単位の戦争―『試験召喚戦争』（略して試召戦争）と呼ばれる戦争があります。

＊　　＊　　＊

やがて見えてきた校門の前には1人の人物が立っていました。

「おはようございます、西村先生」

「ああ、おはよう。今日も早いな、天水」

スポーツマン然としたがっしりした体格の男性に挨拶します。この人は、生活指導の鬼として生徒たちに恐れられている西村先生です。よく『鉄人』なんて渾名で呼ばれていますが、その由来は先生の趣味がトライアスロンであるところによるらしいです。

しかし、西村先生はちゃんと生徒たちのことを考えてくれる人であり、なおかつ生徒に対してフレンドリーに接してくれる人でもあるので、僕個人としては尊敬すべき先生だと思っています。

「ところで先生がここにいるってことは、アレは先生からもらうってことですよね？」

「そうだ。早速だが、これがお前のだな。まあ、お前も結果は知っているだろうが」

「そうなんですけどね」

そう言って先生は僕に名前入りの封筒を渡してくれました。

ここ文月学園では、生徒１人１人に対して所属クラスの通知を手渡しするという変わった方法を採っているのです。

「そういえばふと思ったんですが、このやり方って割と面倒ですよね？やっぱり何かしら意図があってのものなんですか？」

「まあその通りだな。ウチは世界中から注目を集めている最先端システムの試験校だからな。これもその一環といったところだ」

「そうですか」

そう返事をして、僕は自分の持っていた封筒の封を切ります。

ちなみに、この学校にはどの学年にもＡからＦまでのクラスがあるですが、２年生以上になると前年度に行われる振り分け試験の成績によって所属するクラスが決められます。ちなみにＡが最高で、最低がＦです。クラスごとにその教室設備も異なり、ＡクラスとＦクラスではまさに月とスッポン、いやむしろ比べることがおこがましいと思われるほどに待遇が違います。

「しかしお前も惜しいことをしたな。お前ならＡクラス入りは間違いないと先生方の間でも話題になっていたというのに」

「まあ、試験前日にテレビを見ていたままソファーで寝てれば風邪をひくのも当然ですから。自分でも今回は仕方がなかったと思っています」

文月学園では、試験中に退席した場合は如何なる理由があろうとも０点扱いとなります。

実は、僕は昨年度に行われた振り分け試験を最後まで受けることができず、その結果Ｆクラス所属となることが決まっていました。

「そうだな。まあ、お前ならどこでもやっていけるだろう。とりあえず、今年は一年間Ｆクラスで頑張れ」

「はい。ありがとうございます」

先生と別れて校舎へ入っていく僕の手に握られていた紙には

『天水　鏡護……Fクラス』

そう書かれていました。

プロローグ（後書き）

あとがき

作者「いよいよ始まりました。『バカと天眼の賢者と召喚獣』！」

鏡護「ちゃんと更新できるんですよね？」

作者「大丈夫！・・・・・・多分」

鏡護「うわ、いきなり弱気宣言」

作者「うるさーい！ちゃんと書いてやるから待っとけ！」

鏡護「え、逆ギレ！？」

作者「さて次回ですが、主人公についての設定なんかを書こうと思います」

鏡護「そしてスルーされた！？」

作者「まあまあ。えー、私自身初の作品ゆえ、拙い部分も多々あるとは思いますが、温かく見守ってやってください。ご意見・ご感想などいただけると嬉しいです。それでは、」

作・鏡「「次回をお楽しみに！」」

主人公設定（前書き）

こんにちは、天叢雲です。

前回の予告どおり、今回は主人公について書いてみました。

（１０／７／２０　一部再々々加筆修正）

主人公設定

名前　天水（あまみ）　鏡護（きょうご）

性別　男

誕生日　９月１９日

身長　１７５センチ

容姿　肩口まで伸ばした銀髪で、虹彩異色（右が黒で、左が蒼）。普段左目には特殊なカラーコンタクトをしている。
体の線は細いが、筋肉がないわけではない。
中性的な顔立ち（本人に自覚なし）で、女装すると綺麗系美少女に早変わり。

性格　普段は穏やかで真面目。
基本的に丁寧口調だが、親しい者とはくだけた口調で話す。
一人称は「僕」。
明久や雄二の起こすバカ騒ぎを止めようとしては、いつも結局巻き込まれるお人好し。
ただし、自分と自分の大切な人たちに危害が及んだときには普段の調子から一転して、周囲の空気をも凍てつかせるほど冷酷になる。
また、同時に口調も変化し、強気で雑になる。一人称も「俺」に。

学力　得意科目…文系科目全般
　苦手科目…数学（※あくまで他科目と比較して。Ｂクラス中堅程度の点は取れる）

召喚獣　本人そっくりの姿で、蒼いローブに背丈大の万年筆を持っている。

腕輪能力　今後、本編中で明かします。

追記　読書が趣味で、ジャンルを問わずさまざまな本を読む。また読んだ本の内容はたいてい覚えている。
　学園の図書室にある本を1年間で全制覇したことから《図書館（ブック）の主（クオーナー）》と呼ばれるようになる。
　また文章を書くのも好きで、偶に簡単な小説を書いたりしている。
　学園入学後にこの才を買われて、「ムッツリ商会」にＢＬ、ＧＬ短編小説他を卸すようになる（要注文）。
　ペンネームは空乃（そらの）　月夜（つくよ）を名乗っている。

　木下姉弟とはご近所さん、瑞希とは両家の親が友人同士、ということで幼馴染である。また明久とも小学校時代に知り合っている。

　生まれつき色の違う左目は、神経を極限まで集中させることで効果を発揮する天眼（てんがん）。

ちなみにこの天眼は、何故か召喚獣ともリンクしているようで・・・・・

主人公設定（後書き）

あとがき

作者　「はい、というわけで主人公設定でした。」

鏡護　「こうして見ると結構設定が細かい、のかな？」

作者　「うーん。確かにもっと大雑把でもよかったかもな。」

鏡護　「それにしても召喚獣の武器が万年筆って。」

作者　「いや、万年筆をバカにしちゃいかんて。あのペン先意外と殺傷力高いんだぞ。」

鏡護　「別にバカにしたわけじゃないんだけど・・・・・
　知り合いはみんな剣みたいなちゃんとした武器だったからちょっとね。」

作者　「まあそのうち気にならなくなるって。」

鏡護　「わかったよ。ところで、次はいよいよFクラスのみんなが登場だね。」

作者　「そうなるな。しかし、あのメンバーを上手く動かせるかどうか・・・（ブツブツ）」

鏡護　「なんか作者さんが思考の海に沈んでいっちゃったので、予告は僕がやります。

次回、第1問『僕とFクラスと自己紹介（仮）』

お楽しみに～！」

試験召喚戦争ルール（前書き）

こんにちは、天叢雲です。

正直今更な感は否めませんが、今日は試験召喚戦争のルールを説明いたします。

原作を知らない皆さんには、お待たせして本当にすみませんでした。

試験召喚戦争ルール

一、原則としてクラス対抗とする。各科目担当教師の立ち会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立ち会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各一体のみ所有。この召喚獣は、該当科目において最も近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減算され、戦死に至ると０点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受け直して点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を呼び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径１０メートル程度（個人差あり）。

七、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

八、戦闘の勝敗は、クラス代表の敗北をもってのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

第1問　『僕とFクラスと自己紹介』（前書き）

バカテスト　化学

問　以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希・天水鏡護の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険である点。

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、お二人は引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われましても。

第1問　『僕とFクラスと自己紹介』

とりあえず校舎内に入った僕は靴を履き替えて、2年生の教室がある3階を目指します。

「せっかくだから他のクラスの教室でも見てみようかな」

誰に聞かせるでもなくそうつぶやくと、1人教室巡りツアー（笑）をすることに決めました。

＊　　＊　　＊

「・・・ここは一体どこの高級ホテルなんだろ？」

階段を上がって最初に目に入ったのは2年A組の教室でした。
まず驚いたのはその教室の広さです。少なく見積もっても一般教室の4倍強あります。
さらに教室の前面には黒板の代わりに超大型プラズマディスプレイが配置されています。
また、壁には高そうな絵画や観葉植物がところどころに置かれていて、高級感を煽っています。
極めつけは生徒たちが使う机周りの設備です。ノートPC、個人エアコン、冷蔵庫、その上リクライニングシートまで完備とは恐れ入りました。なんて贅沢なんでしょう。

僕は軽い羨望を覚えつつ、残りの教室を適当に見て回ってから自分の教室へ向かいました。

＊　　＊　　＊

「ここか……」

新校舎から渡り廊下を通って旧校舎へ。
そうしてたどり着いた「２－Ｆ」のプレートのかかった教室を前にして、愕然としました。
既に外観からしてそのボロさが滲み出ています。これは酷いですね。
とりあえず、教室の外でいつまでも突っ立っているわけにも行かないので中に入ります。

「これは……廃屋、…いや墓場かな？」

そして扉の内側を目にした僕は一瞬にして絶望感と虚無感に襲われました。
普通の教室にあるような机・椅子は存在せず、そこにあったのは卓袱台と座布団。
床はフローリングなどではなく、傷んでカビ臭い畳敷きでした。
想像の遥か斜め上をいく惨状に、試験を早退した自分を思わず呪いたくなってしまいました。

しばらくの呆然自失状態から抜け出した僕は、まだ誰もいなかったのを良いことに適当な所に腰を下ろすと、知り合いが来たら起こしてくれることを期待しつつ目を閉じました。
現実を見ていたくなくて夢の世界に逃げたわけでは、決してないことを誓っておきます。

「……、…遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

どこかで聞いたことのある明るい声と、それに続くこれも聞いたことのある罵声が聞こえて目を開けると、なにやら周りが騒がしいです。

寝起きで意識のはっきりしないまま、周囲を確認してみるとどうやらだいぶ時間が経っているようでした。

「おお、起きたようじゃな」

そして隣からはこれまた聞き覚えのある独特の爺言葉が。

声につられてそちらを向くと、やはり知った顔ですね。

「あれ、秀くん?」

まだ僕の頭は完全に覚醒してないようで、ついつい昔の呼び方で呼んでしまいました。

僕に声を掛けてきたのは幼馴染の木下秀吉（きのしたひでよし）でした。

彼とは家が近所で、最近でもよく互いの家に遊びに行ったりしています。

本人は嫌がっていますが、女子と見間違えるような可愛らしい顔をしています。そのため初対面ではまず男と思われないのが悩みだそうです。

ちなみに、彼には双子の姉の木下優子（きのしたゆうこ）がいます。二人は二卵性双生児らしいのですが、非常によく似ています。この辺も誤解の助長に一役買っていると言えるでしょう。

「そうじゃよ。あまりに気持ちよさそうに寝ておったので、起こさずにおったんじゃが」

「そうだったんだ。誰も起こしてくれないから、てっきり知り合いはいないと思ってたよ」

「ははは、まあこうして同じクラスになったんじゃ。1年間よろしく頼むぞい」

「うん。こっちこそよろしく。…そういえば優ちゃ――優子は？」

「姉上ならAクラスじゃ。お主と同じクラスでないと知って不貞腐れておったがの」

「う……。後でご機嫌取りしておくよ」

「それがよいじゃろう。…む、担任が来たようじゃな」

「ほんとだ。じゃあまたあとでね」

「うむ」

ちょうど寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえない風体のオジサンが教室に入ってきたところでした。

「えー、おはようございます。担任の福原慎（ふくはらしん）です。よろしくお願いします」

黒板の方に向き直り、名前を書こうとして、やめました。どうやらチョークすらないようです。

続いて設備に不備があるか聞いているが、生徒たちに対しては「我慢してください」、「自分で何とかしてください」といった感じの返答しかしていません。教育機関と

してそれはどうなんでしょう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

廊下側からというと・・・・・最初は秀吉でした。

『木下ーっ、好きだっ、付き合ってくれーっ！』

『お前抜け駆けすんなよ！俺も大好きだーっ、木下ーっ！』

相変わらず秀吉に対するこの学校の男子の対応はおかしいと思います。・・・・・さて次は誰でしょう？

「……土屋康太（つちやこうた）」

おや、彼も僕の知り合いです。相変わらず口数が少ないですね。彼は体こそ小柄であるが、運動神経は素晴らしいです。しかし、やはり商売上目立つのは避けたいみたいですね。彼は僕のバイトの雇い主でもあるのですが、この話は今はしなくてもいいでしょう。

「――です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は――」

そうこうしているうちに次の人に移っていました。声からして女子のようですが。

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

おおっ、なんとピンポイントかつ物騒な趣味なんでしょう。自分のことではないのに背筋が薄ら寒くなりました。

「はろはろー、吉井！今年もよろしくね」

そんな彼女もまた、僕の知りあいだったりします。島田美波（しまだみなみ）さんです。

彼女が手を振る方に目を向けると“彼ら”もいることがわかりました。

こうしてみると、知り合いが多い気がします。なんたる偶然でしょう。しかしFクラスに固まってるっていうのは歓迎してもいいんでしょうか。微妙なところです。

そうこうしているうちに僕の番が回ってきました。まあ無難に済ませましょう。

「天水鏡護です。趣味は読書と料理です。よろしくお願いします」

そう言って軽く一礼してから席に着きます。

その後もクラスメイト達の自己紹介が続いていきます。

しばらく目で追っていると、“彼”の番が来ました。

「えーっと、吉井明久（よしいあきひさ）です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『『ダァァーーリィーーン！！』』

瞬間、クラス中の男子による（※鏡護、秀吉を除く）野太い声の大合唱。

・・・・・これは思った以上に気持ち悪いです。ちょっと吐き気が・・・・・うぅ。

「――失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

吉井明久。彼ももちろん僕の友人です。小学校の頃からなので、１０年近い付き合いになります。

いつも明るくムードメーカー的な存在だけど、勉強はちょっと苦手だったりします。

ガラッ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

明久が自分の席に着いたちょうどそのとき、教室のドアが開いて誰かが入ってきました。

『えっ！』

その姿に教室中（というか男子たち）から驚いたような声が上がります。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さ

んもお願いします」

「は、はい！姫路瑞希（ひめじみずき）といいます。よろしくお願いします……」

少し緊張しているのか、体を縮こませて途中から自己紹介が尻すぼみになっていく彼女。

普段なら、そんな彼女の小動物を連想させる様子を見て可愛らしいと和むところだが、今の僕にはそんな余裕はありませんでした。

「はいっ！質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

いきなりの自分への質問に驚きあたふたする彼女。あ、見てたらなんか落ち着いてきたかも。

「なんでここにいるんですか？」

聞く人によっては大変失礼な質問ですが、この場面では適切な質問ともいえました。

姫路瑞希。

彼女は人目を引くほど可憐な容姿の女の子で、

昨年度の試験においては、常に学年上位1桁以内に名を連ねていた程に高い学力の持ち主。

そしてここ数年はちょっと疎遠でしたが、僕の幼馴染でもあります。

そんな彼女がFクラスのクラスメイトとして目の前にいます。

一体どういうことなんでしょう？

第1問　『僕とFクラスと自己紹介』（後書き）

あとがき

鏡護　「ねぇ、ちょっとほんとにどうなってるの？」

ガクガク・・・（首が揺すられる音）

作者　「説明するから落ち着けって。ウグッ、ヤ、ヤメレ、首が締まる～」

ガクガク・・・・・・

作者　「マ、マズッ。も、もう息が……」

ガクガク・・・・・・・・・・　キュ～（作者がノビた音）

鏡護　「ねぇ、聞いてる！？……って、あれ、作者さん！？」

蘇生作業中・・・・・　しばらくお待ちください

作者　「…ひどい目にあった」

鏡護　「ご、ごめんなさい」シュン・・・

作者　「ええい、そんな落ち込むな。こっちが悪いみたいだろ」

鏡護　「うぅ。…で、結局どういうことなの？」

作者　「…切り替え早いね、別にいいけど。そして説明だけど……」

鏡護　「いや、引っ張らなくていいから。みのも○たじゃあるまいし」

作者　「……ざぁんねん。次回のネタバレになっちゃうからできません、テヘッ」

鏡護　「（怒）」

作者　「いやぁ、ほんとはその辺まで今回分に入れちゃおうと思ってたんだけど、
どうせまたひと悶着あるんで、次回に回すことにしたんだよね～」

鏡護　「……ちょっと、頭冷やそうか……」

作者　「え、あれ、なんでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩフラグ立ってんの！？」

鏡護　「人が真面目に聞いてたのに、理由がそんなだなんて、納得できると思ってるの？
ねぇ？ネェ？」（艶の消えた目）

作者　「うぉぉ！？なんかしらんがヤバイ！？それでは今日はこの辺で。

次回、第2問『いざ試験召喚戦争！これが勝利のカギだっ！（仮）』

よろしくお願いします！」

第2問　『いざ試験召喚戦争！これが勝利のカギだっ！』（前書き）

バカテスト　国語

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。
『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え
『（1）弘法も筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

天水鏡護の答え
『（1）河童の川流れ』
『（2）踏んだり蹴ったり』
教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『猿も木から落ちる』、（2）なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
『（1）弘法の川流れ』
教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』
教師のコメント
君は鬼ですか。

第2問　『いざ試験召喚戦争！これが勝利のカギだっ！』

―Ｓｉｄｅ　瑞希

「なんでここにいるんですか？」

クラスの誰かからそんな質問を受けた私は、小さくそっと息を吐きました。
Ｆクラスに行くことになったときから、この質問が来ることは予想できていました。
ところで、急いで来たのでよく見ていなかったのですが、改めてクラスを見渡してみると教室内には男の子がたくさんいます。
考えてばかりではいけないと思い、先ほどの質問に答えようとしますが、やはり緊張してしまいます。

「そ、その……、振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

私の言葉を聞いて、クラスの皆さんが『ああ、なるほど』とうなづいています。
私は昔からあまり体が強くなかったため、よく体調を崩しては学校を休んだりしていました。
そして昨年度の振り分け試験中に私は急に体調を崩して、学校を早退してしまいました。
それ故、私の試験結果は学園の規則に従って０点扱いとなったので、Ｆクラスに振り分けられることになって現在（いま）に至る、という訳です。

すると、私の説明に納得のいった様子だった皆さんからもちらほらと声が上がってきました。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』
『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』

うふふ、皆さん冗談がお好きなんですね。
ところで、そろそろ終わりにした方がいいでしょうか？いいですよね？そう自問自答して自己紹介を締めようとして、

「で、ではっ、一年間よろしくお願いしましゅ……／／／／」

あぅぅ・・・・・噛んでしまいました。

恥ずかしくなった私はそそくさと逃げるようにして空いている適当な席に着きました。

「き、緊張しましたぁ～……。」

そうして私は席に着くなり安堵の息を吐くと、卓袱台に突っ伏してしまいました。

「大丈夫だった、瑞――姫路さん？」

「えっ？……えぇっ！？」

誰か聞き覚えのある声で横から話しかけられた私は、慌ててそちらを向き、声をかけてきた人物を確認してびっくりしてしまいました。

「そんなに驚かなくてもいいんじゃない？でも、僕もさっきまで驚いてたからおあいこかな」

そう言って苦笑している彼は、私の幼馴染の――

「きょ、鏡――天水くん……」

私は思わず昔のように名前で呼ぼうとしましたが、結局言い直してしまいました。

「やあ、同じクラスになるのは小学校以来だよね。久しぶり」

そう、彼は私の幼馴染の天水鏡護くんでした。

私と彼の両親は古くからの友人同士で、家族ぐるみのお付き合いをしていたんです。

体の弱い私を気遣いながらもよく一緒に遊んでくれた彼に、単なる幼馴染以上の感情を抱き始めたのはいつの頃からだったでしょうか……？

小学校までは同じクラスになることが多かったのですが、中学に上がってからは一度もありませんでした。

それでも時々彼と同じクラスの友達から話を聞いたり、遠くからその姿を目で追ったりしては、温かな感情が胸一杯に溢れてくるのを感じていました。

ちょうどその頃からお互い両親の仕事が忙しくなったこともあり、今ではすっかり疎遠になっていました。

それでも昔のように声をかけてくれた彼に、私は嬉しく思いつつも複雑な感情を抱いたまま、それを悟られぬように努めて明るく応え

ました。

「はいっ、お久しぶりです！そういえば天水くんはどうしてＦクラスに？」

そして私は先ほど驚いたもう一つの理由について聞いてみることにしました。

彼は私と同じかそれ以上に勉強ができます。そんな彼がなぜＦクラスにいるのか、気になったんです。

「ああ、それは―かくかくしかじか―で……」

「そうだったんですか……」

なんと彼も私と同じように振り分け試験を早退したんだそうです。偶然だとしても、彼と同じクラスになれたことにちょっぴり運命めいたものを感じてしまいます．．．／／／／

それから色々お話していると、小学校の頃の知り合いで振り分け試験では隣の席だった吉井くんやクラス代表の坂本くんが挨拶に来てくれました。

その後、先生が軽く叩いただけで崩れてしまった教卓を取替えに行くというハプニングがありました。

そう言えば、先生がいなくなってる間に吉井くんに坂本くん、それに天水くんも廊下に出ていきましたが、何かあったのでしょうか？

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

先生が代えの教卓を取りに出ていった後、明久と雄二が教室を出て行くのが見えたので、僕は少し後から二人を追いかけることにしました。
あの二人のこと、何か変なことでも企んでいなければいいのですが。毎度止めようと頑張ってる僕の身にもなって欲しいよ・・・・・・などと考えながら会話に混ざることにします。

「明久に雄二、二人して何の話をしているの？」

「…おお、誰かと思ったら鏡護じゃないか。どうした？」

そう言えば彼の紹介はまだでしたね。今僕に声をかけたのは坂本雄二。
ここ文月学園に入ってから知り合った僕の友人の一人です。
１８０センチを超えるくらいの高身長で、細身だけど鍛えられて引き締まった身体。
意志の強そうな目をした野生味たっぷりな顔で、短い髪はツンツン立っていてまるでたてがみのようです。

「どうした、じゃないよ。また騒動でも起こそうとしてるんじゃないだろうね？」

「それこそまさか、だな。俺たちがいつ騒動を起こしたっていうんだ？」

「よく言うよ、まったく」

軽く雄二を睨んでみることにしました。

「おいおい、そんな怖い顔をするな。俺たちはちょっと『試召戦争』の話をしてただけだ」

「そう。で、どこを相手にする気なの？」

「当然、Ａクラスだ」

「…本気？でも一体どうして？」

「ああ、それなんだが――」

そう言って雄二は明久を指差して、

「こいつが姫路の「ワーワーワー！」ために設備をどうにかしたいと言い出してな。まあ俺自身としても、Ａクラス相手に『試召戦争』をしようと思っていたから話に乗ってやることにしたんだ」

明久が途中で割り込んできたので誰のため、という部分ははっきりしません。しかし、

「なるほど。そういうことなら僕も協力するよ。仲間はずれになんてしないよね？」

自分以外の誰かのために『戦争』を起こそうという明久が、本当に“彼らしい”と思えた僕はそう口にしていました。

「もちろんだ。Ａクラスに勝つための作戦も思いついたしな」

雄二が心底楽しそうに笑っています。それなら、と僕ももう一言言っておくことにしました。

「あ、それと僕の『眼』についてクラスに話してもいいよ」

「鏡護！？」

「……いいのか？」

「戦争をしようっていうのに背中を預ける仲間に隠し事はしたくないからね。」

「……わかった。説明は任せる。いいな？」

「うん、りょーかい。……っと、先生が来たよ。戻ろう」

「ああ。戻るぞ、明久」

「あ、うんっ！」

「――Ｆクラスはａクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

壇上に上がった雄二は、自己紹介もそこそこに爆弾を投下しました。

即座にクラスのそこかしこから難色を示す声が上がります。

『勝てるわけがない』
『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
『姫路さんと木下がいたら何もいらない』

まあ学力最低のFクラスが頂点のAクラスに挑もうというのだから躊躇するのもわかるし、もし仮に負けた場合は設備のランクが1つ下がるのだから当然の反応でしょう。僕も現状以下の設備なんて想像したくもありません。

「そんなことはない。このクラスには『試験召喚戦争』に勝てる要素がそろっているからな。今からそれを説明してやる」

しかし雄二は不敵な笑みを浮かべたまま、自信満々にそう返しました。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで出て来い」

「……！！（ブンブン）」

「は、はわっ！？」

姫路さんが慌ててスカートを押さえて遠ざかると、顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、必死に顔と手を振って否定のポーズを取る康太と呼ばれた少年が前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがかの有名な寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」

「……！！（ブンブン）」

ムッツリーニという名が出た瞬間、クラスが俄かにざわつき始めました。
その名は男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以って挙げられています。

完全に余談ですが、彼の運営する『ムッツリ商会』は学生たちに大人気です♪

『ムッツリーニだと……？』
『馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？』
『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』
『ああ。ムッツリに恥じない姿だ……』

「？？？」

ただ1人、姫路さんだけは頭の上に幾つも疑問符を浮かべているみたいです。

「姫路のことは説明するまでもないだろう。皆もその力は知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ！？」

「ああ、うちの主戦力（エース）だ。期待している」

当然でしょう。余程のことがない限り、彼女の敵になるような生徒はそうそういません。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』
『彼女ならAクラスにも引けをとらない』
『ああ、彼女さえいればなにもいらない』
『なら木下は俺のものだ』

誰でしょう？先程もそうでしたが、このクラスには危ない思考の持ち主がいるようです。

「木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす」

次に、学力はそれほどでもありませんが、優等生である双子の姉と演劇部のホープということで有名な秀吉の名前を挙げ、そして自身もまたクラス代表として名乗りを上げました。

『確かになんだかやってくれそうだな』
『ああ。木下といえば、Aクラスの木下優子の弟だったよな』
『それに、坂本は小学生の頃は神童って呼ばれてなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと一緒で体調不良だったのか』
『つまりAクラスレベルの実力者が二人もいるってことだよな！』

徐々にクラスに前向きな意見が広まり、士気が高まっていくのがわかります。そして――

「それに、吉井明久だっている」

・・・・・シ～ン――

水を打ったようにクラスが静まり返ります。ある意味見事ですね。ところで、自らの名前をオチ扱いされた本人はというと――

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を出すのさ！そんな必要ないよね！？」

まあ、当然怒りますよね。もし同じ立場になったら僕もそうするでしょう。

『お前、聞いたことあるか？』
『いや知らん。有名なのか？』
『聞いたことがないぞ』

「ああもう！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてる！僕は雄二達と違って普通なんだから、普通に扱って――って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

さて、まだ僕の名前を挙げていないのに明久のことを話したということは、ですよ？
僕の紹介によってもう一度クラスに爆発を起こす前のワンクッションを意図しているのでしょうね。
持ち上げて↓落っことして↓前より更に持ち上げる、という論理です。

こう言ってはなんですが、僕につけられた『とある名前』は起爆剤としての役目を果たすのに十全過ぎるくらいには有名だったりします。

こういう時の頭の回転の速さはさすが雄二、といったところです。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

あ、バラしましたね。

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かがそんな致命的な一言を漏らしました。

「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な１６歳につけられる愛称で――」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

やはり姫路さんは知らなかったみたいですね。雄二が彼女に説明しています。

ではここでちょっと説明しましょう！

《観察処分者》とは、学生生活を送る上で少々問題のある生徒に対して課せられるペナルティのことです。

具体的には教師の雑用係で、力仕事などの様々な雑用を、特例として物理干渉が可能になった試験召喚獣でこなすといった感じです。

一般的な試験召喚獣が触れられるのは他の召喚獣だけなので、一見大きなアドバンテージを持っているように見えますが、世の中そんな上手い話があるわけがありません。

当然デメリットが存在します。
教師の立会いの下でしか召喚できないのは他と共通ですし、さらには召喚獣に掛かった負担の何割かが召喚者にフィードバックするのです。
凄くもなければ便利でもない、正に先生方以外にとっては誰得な罰です。

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』
『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが1人いるってことだよな』
『どうする？少ない戦力がさらに少なくなっちまうぞ……』

クラスに不安の声が広がります。雄二はどう収拾をつける気でしょう？

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

バッサリ切り捨てましたね・・・・・少しくらいフォローしてあげても良かったんじゃないでしょうか。
案の定、明久が雄二に食って掛かっています。

そんな明久を適当にあしらいながら、雄二がこちらに視線を向けてきました。
いよいよ出番のようです。

「次で最後だな。……こいつは俺達の切り札（ジョーカー）だ。鏡護、出てきてくれ」

「は～いよっと」

『誰だよあいつ？』
『知らねぇな』
『でも代表が切り札だって言うくらいだから、凄いヤツなんじゃないか？』
『いや、だとしたらさっきの自己紹介はあまりに普通だったぞ』
いや～、どうしましょう。凄い注目されてますね。
「自己紹介を聞いてたとは思うが、改めて紹介する。こいつは天水鏡護」
そう言って雄二はいったん言葉を切りました。勿体つけますね。
「……《天眼の賢者》の正体だ」
『『なぁにぃぃいいいいいっ！？』』
ぅおわっ！一瞬教室が揺れましたよ！
『何でも見通す眼を持つっていう“あの”天眼の賢者か！？』
『まさか本当に実在していたのか……』
『ああ。俺もただの都市伝説だと思っていたんだが……』
む、人のことを捕まえて都市伝説呼ばわりとは酷いです。僕は実在の人物ですよ。

「そう。お前達も一度は耳にしたことがあるだろう、“あの”天眼の賢者だ。昨年度の振り分け試験ではわざわざ今回の俺の計画に協力するためにわざと早退した男だ」

・・・・・ちょっと待ってください、雄二。それは僕のうっかりが原因なんですから、勝手に捏造しないでください。

『ってことは、だ。俺達実はとんでもないクラスにいるんじゃないか？』

『確か天眼の賢者もＡクラスに匹敵するどころか、圧倒しちまうような成績だったよな』

『こりゃあ相手がＡクラスでも勝てるんじゃないか』

期待してくれるのは嬉しいんですが、同時にあらぬ誤解も広がってしまっています・・・・・

「鏡護、あとは任せた」

「任されました」

さぁ、それでは皆さんに説明しましょう。僕が持つ『異能の眼』について、ね。そうして僕はおもむろに左目のコンタクトを外しました。

「改めてよろしくお願いします、天水鏡護です。皆さん、僕の左目が見えますか？……大丈夫そうですね。それでは、僕が《天眼の賢者》と呼ばれる所以たるこの『眼』についてお話します」

「この『眼』は僕が生まれた時から僕が持っていたもので、世間的には『天眼』と呼ばれるものだそうです」

「この『天眼』は、僕の集中力が極限まで高まったときにその効果を発揮します。使える効果は以下の3つで、任意に選択することができますが、2つ以上を同時に使うことはできません」

「1. 解析（アナリシス）

文字通り、あらゆる物体の構造や構成物質などを瞬時に把握することができます。

また、物体を透過して『視る』ことも可能です。

2. 複写（トレース）

『眼』で見た人の動きを、同じように自分の身体で再現できるようになります。

一度でも使ったことのあるものは記憶され、その後も使うことができます。

しかし、これには最長で3分という制限時間が付きます。

3. ――禁則事項――

すみません。これだけはどうしてもお教えすることができません。

ただ1つ言える事は、これを使うと重いペナルティが課されるということです。

滅多なことでは使えません」

「……っとまあこんなところですね。皆さんに対して1つ秘密を持っているというのは申し訳なく思いますが、それでもFクラスのために僕も全力を尽くすことを誓います。世の中勉強のできるヤツばかりが偉い訳じゃないってことをAクラスの連中に思い知らせてやりましょう！」

そう締めくくって、僕は口を閉じました。その瞬間――

『『うおぉぉぉおおおお！！！』』
『『天水ーっ、最高だぜーっ！！！』』
『『《天眼の賢者》、バンザーイッ！！！』』

教室中から大歓声が返ってきました！また教室が揺れてますね。崩れてこないか、ちょっと心配です。
ですが、せっかくなのでもうちょっと煽っておきましょうかね。こういうのはノリが命ですっ♪

「諸君！今の待遇は大いに不満だろう？」

『『当然だ！！』』

「よろしい、ならば戦争だ！全員筆（ペン）を執れ！出撃準備だ！」

『『おおーーっ！！』』

「俺達に必要なのはこんなボロい卓袱台などではない！Ａクラスのシステムデスクこそが相応しい！」

『『うおおーーっ！！』』

「お、おーっ……」

あぁっ、姫路さんまで周りの空気に当てられたのか、若干引き気味ながらも拳を揚げてくれています。なんていい娘なんでしょう！
非常にノリのいいクラスメイトたちに満足しながら、壇上から引き

揚げました。

「ご苦労さん。見事だった。よくやってくれたな」

「そりゃよかった。……そういえば宣戦布告の使者は誰を出すの？」

「ああ、それなら……おい、明久ちょっと来い」

「何？どうしたのさ、雄二？」

「お前にはＤクラスへの宣戦布告の使者をやってもらう。無事に大役を果たせ！」

明久を呼んだ時から嫌な予感がしていました。雄二は明久を生贄にする気だったんですね。

「……下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。ヤツらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を信じろ、明久。俺は友人を騙すような真似はしない」

既に騙しておいてよくそんなセリフが言えますよね。

「……わかったよ。それなら僕が行ってくる」

「ああ、頼んだぞ。」

クラスメイトの歓声と拍手を背中に受けて、明久は毅然とした態度で教室を出て行きました。

哀れ明久、君ってヤツは・・・・・。

僕は数刻後の光景がありありと目に浮かんできて、涙を浮かべずにはいられませんでした。

第2問　『いざ試験召喚戦争！これが勝利のカギだっ！』（後書き）

あとがき

作者　「なんと、今回はスペシャルゲストをお招きしています。…それでは、どうぞ！」

??　「よ、よろしくお願いします」

作者　「はいっ！本日のゲストは拙作の正ヒロイン、姫路瑞希さんです！」パチパチパチ

瑞希　「わ、わっ。緊張しますね……」

作者　「いやぁ、それにしても姫路さん。本編ではなかなかいじらしい本心を大暴露してましたね？」

瑞希　「あ、あれは……／／／　……というか、暴露されたのは作者さんのせいですよね？」

作者　「まあまあ。…ちなみに今後も姫路さん視点の時はあんな感じでいきます（コソッ）」

瑞希　「？作者さん、何か言いましたか？」

作者　「いえ、何も。私はもちろん応援してますから、頑張ってくださいね」

瑞希　「あ、ありがとうございます。頑張りますっ！」

作者　「さて、次回からいよいよ『試召戦争』がスタートします」

瑞希　「私は興味半分、不安半分って感じです……」

作者　「まあ、大丈夫ですよ。…それでは次回予告、行ってみよー！

次回、第3問『作戦会議！そしてDクラス戦始まる！（仮）』

を、」

作・瑞　「「お楽しみに！！」」

第3問　『作戦会議！そしてDクラス戦始まる！』（前書き）

バカテスト　英語

問　以下の英文を訳しなさい。
［This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.］

姫路瑞希・天水鏡護の答え
［これは私の祖母が愛用していた本棚です。］
教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え
［これは　　］
教師のコメント
訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え
［☆●◆▽「♪※×　　］
教師のコメント
できれば地球上の言語で。

第3問　『作戦会議！そしてDクラス戦始まる！』

―Ｓｉｄｅ　明久

「騙されたぁっ！」

命がけで廊下を走り、教室に飛び込んだ僕。
こ、殺されるところだった！Ｄクラスの連中、ものすごい勢いで殴りかかってきたよ！
息を切らせて床にへたり込む僕に雄二が視線を落とし、

「やはりそうきたかｗ」

なんて平然と口にしやがった。しかも笑ってるよコノヤロー。

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれろよ！」

「まあ落ち着いて。雄二が酷いのは今に始まったことじゃないんだから」

慰めてくれる鏡護の優しさが嬉しいよ・・・・・グスッ。
顔は可愛いし、性格も優しいし、やっぱり鏡護って実は女の子なん

じゃないかな？

「吉井君、大丈夫ですか？」

「本当に大丈夫、吉井？」

いい感じにぼろぼろになっている僕の様子を見て、姫路さんと島田さんが心配して来てくれた。
まあ見た目ほど酷くはないから、お礼を言っておかなきゃね。

「あ、うん。ほとんどかすり傷だから平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、よかった……。ウチがまだ殴る余地はあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

前言撤回。島田さんはやっぱり雄二側の人間だった。

「…明久、立てる？」

「え？あ、ありがとう」

鏡護が差し出してくれた手を取って立ち上がる。

「いつまでも遊んでるな。それよりさっさとミーティングに行くぞ」

そう言って歩き出した雄二を先頭に、僕たちは屋上に向かって移動し始めた。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

雄二に連れられて屋上にやってきた僕らは、適当に座ると早速ミーティングを始めました。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

「うん。一応今日の午後に開戦予定だって言ってあるけど」

「じゃあ、とりあえずは昼ご飯ってことでいいのかな？」

「そうだな。おい明久、今日くらいはまともな飯を食えよ？」

「そう思うなら、パンでもおごってくれると嬉しいんだけど？」

彼、吉井明久は生活破綻者です。
彼は１人暮らしで、親からは十分な仕送りをしてもらっているのだが、それを後先考えず趣味に注ぎ込んでしまうため、常に金欠状態なのです。
どれくらい酷いのかというと・・・・・・

「あれっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

そんな事情は知らないだろう姫路さんが驚いた顔をして明久を見ています。

「いや…、一応食べてはいるよ？」

「……あれは食べていると言えるのか？……お前の主食は水と塩だろう？」

すかさず雄二がツッコミを入れています。

「きちんと砂糖だって食べているさ！」

明久・・・・相変わらずですね。しかしそういう問題ではないと思いますよ？

あ、ちなみに僕のお昼はお弁当（※自作）ですが何か？

「あのっ、それは食べるとは言わないと思いますよ……」

「表現としては舐める、が正解じゃろうな」

その場にいる全員が明久を憐れみの目で見始めたので、助け船を出してあげることにしました。

「「しょうがない（あの）、僕（私）が作ってあげようか（りましょうか）？」」

「ゑ？」

「「えっ？」」

明久、それは字が違いますよ．．．。それよりも驚きました。どうやら姫路さんも僕と同じことを考えていたようです。．．．もしかして明久に気があるのでしょうか？

「二人とも本当にいいの？僕、ちゃんとした昼ご飯を食べるのは久しぶりだよ！」

．．．．．本当に明久の食生活はどうにかした方がいいように思えてきました。

「はい。明日のお昼で良ければ」

「姫路さんが作るなら、僕は今回は遠慮しようかな」

「いや、お前が作ってくれるなら俺は食べたいんだが……」

「そうじゃな。ワシも久しぶりに鏡護の作る料理が食べたいぞい」

「……二人と同意見」

なぜか僕の料理も大人気です。別に味は普通だと思うのですが．．．

「わかった。それならみんなで食べられるくらい作ってくるよ」

「ウチにも作ってくれるの？」

「うん。どうせ手間を考えたら1人2人増えたところで変わりないからね。でも、明久は姫路さんの弁当があるから僕のはいらないよね？」

「えっ！うーん……それは惜しいような……いや、でも……」

明久が悩み始めてしまいました。・・・・・・あまり欲張るとバチがあたりますよ？

「……そういえば瑞希って吉井に『だけ』作ってくるのね？」

心なしか殺気を纏いながら、島田さんが面白くなさそうに呟きました。

おや、嫉妬でしょうか？どうやら島田さんも明久に好意を抱いているようですね。

さて、これを聞いた姫路さんはどうするのでしょう？

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

あらら、日和りましたね。まあ、彼女ならそうだろうと思っていましたが。

「俺達にも？いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

そういえば先程から何か大事なことを忘れているような気がしてならないのですが、一体何なんでしょう？

「それは楽しみじゃのう」

「……（コクコク）」

「……お手並み拝見、ね」

まあ余程大事なことならそのうち思い出すでしょうから、今は置いておくことにしましょう。

「わかりました。それじゃ、皆に作ってきますね」

どうやら話も纏まったようです。それにしても、やっぱり姫路さんは優しいですね。などと昔のことを思い返していると――

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな……」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き――」

「おい明久。今振られると弁当の話は無しになるぞ」

「――にしたいと思ってました」

ブフゥッ!?あ、明久!君はなんてことを口走っているんですか!

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になるときがあるよな」

「だって……お弁当が……」

明久・・・・君はどれだけ食に飢えてるんですか・・・・・

「……っと、話がだいぶ逸れたな。試召戦争に話を戻すぞ」

ああ、やっと原点回帰しましたね。長い寄り道でした。

「雄二。そういえば気になっておったんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そういえば、確かにそうですね」

「まぁな。もちろん考えがあってのことだ」

雄二が説明し始めようとしています。・・・せっかくですからその役目、横取りさせてもらいましょう。

「そうだね。まずEクラスを攻めない理由だけど、簡単だよ。今の僕らの力なら戦うまでもないからね。明久、君の周りの面子を見てみて」

「えぇっと……美少女が3人と馬鹿が2人とムッツリが1人いるね」

「誰が美少女だと！？」

「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」

「……（ポッ）」

「ムッツリーニまで！？どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れないよ！」

「まぁまぁ。落ち着くのじゃ、雄二にムッツリーニ」

「そうだよ。それに明久、君も美少女が3人っていうのは誰と誰と誰のことを言ったんだろうね？」

秀吉がカオスになりかけた場を収めてくれます。さすがです。

ついでに以前から時々明久が僕のことを女子として見ているような節があったので、釘を刺しておくことにしました。“イイ笑顔”と一緒に。

「う……笑顔が怖いよ、鏡護……」

「コホン。まあ要するに僕と姫路さんに問題がない今なら、Eクラスとは正面から戦っても勝てるってことだよ。それに最終目標がAクラスである以上、Eクラスと戦うのは時間の無駄だからね」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「そうだね。確実に勝てるとは言えないんじゃないかな」

「だったら最初からAクラスに挑んでも同じなんじゃない？」

「確かにそうかもしれない。でもDクラス戦にはちゃんと意味があるんだよね、雄二？」

ここでようやく話の主導権を雄二に返します。いやぁ、楽しかったです。

「まったく。ここまで俺のセリフを横取りしておいて今更俺に振るか？」

「まあそう言わずに。大事なところはちゃんと代表さんに花を持たせてあげるんだから」

「ハァ…お前はたまにそうだよな。」

そうして雄二は皆の方に向き直ると説明を始めました。

「今回は初陣だからな。派手にやって今後の景気付けにしたいだろう？それに、さっき言いかけた打倒Ａクラスの作戦に必要なプロセスなんでな」

なるほど、廊下で話していたときに聞いたヤツですね。詳しい内容までは聞けませんでしたが。

「あ、あのっ！」

「んっ？どうした、姫路」

「えっと、その……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それならついさっき明久から姫路のためにって――」

「それはそうと！」

また大事なところで明久の邪魔が入りました。ですが今の会話の流れから、明久が誰のために戦争を始めようとしたのか理解できました。

「さっきの話だけど、Dクラスに勝てなかったら意味がないんじゃない？」

「負けるわけがないさ」

雄二が明久の心配を笑い飛ばします。

「お前らが協力してくれれば必ず勝てる。いいか？ウチのクラスは――最強だ」

雄二がそう言うと皆もいよいよやる気になったのか、場が活気づいていきます。

「よし。それじゃ、早速作戦を説明しよう」

僕も頑張らないと、ですね。

＊　＊　＊

午後の授業が始まると同時に決戦の火蓋が切って落とされました。

しかし、僕の姿は前線にはありません。何故かと言うと――

「終わりました。先生、次をください」

「わかりました。はい、どうぞ」

「先生、私も終わりました。次の問題をください」

「ちょっと待ってください……どうぞ」

現在、別教室にて補給テストの真っ最中だからです。僕と姫路さんは振り分け試験を早退したので点数が無い状態でした。さすがにそれでは戦場に出て行けないですからね。

「「先生、次の問題をお願いします」」

・・・・・という訳でFクラスの皆さん、もうちょっと待っててください。

＊　　＊　　＊

「終わったよ～！雄二、戦況は？」

「お疲れさん。今のところは前線部隊と中堅部隊で戦線は維持できているが、そろそろヤバイかもな」

「そっか。」

テスト終了後、僕は教室に戻ってすぐに雄二に現状の確認をしました。

皆さんDクラスを相手になかなか善戦しているようです。

「僕と姫路さんも出る準備をした方がいいのかな？」

「いや、大丈夫だ。それに姫路には後で出てもらうにしても、今回お前を出す気はない」

「なんでさ?」

「言っただろう?お前はウチの『切り札』なんだ。そう簡単に手札を見せるつもりはない」

「それじゃあ僕がつまらないんだけど」

「まあそう言うなって。その分次戦からはたっぷり働いてもらうからな」

「わかったよ。しょうがないなぁ……」

むぅ、出番がないなんて面白くありません。そうして1人不貞腐れていると……

ガラッ!

「坂本はいるかっ!」

誰かが教室に駆け込んできました。あれは確か須川君でしたか?

「どうした、須川」

「吉井隊長から先生方に向けて偽の情報を流して欲しいと頼まれたんだが、どうする?」

「ふむ、そうだな……。よし。須川、耳を貸せ」

雄二が須川君に何事かを吹き込んでいます。どんな話をしているん

でしょう？

「……アハハッ、それは最高だ！よし、任せとけ」

「ああ、よろしく頼む」

やがて話が終わったのか、須川君が笑いながら教室を出て行きました。

「雄二、須川君に何を話したのさ？」

「ん、ああ。ちょっとした作戦をな。まあちょっと待ってろ」

ぴんぽんぱんぽ～ん♪

おや、校内放送ですね。もしかして先程雄二が話していた作戦でしょうか？

《連絡致します。船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

ぴんぽんぱんぽ～ん♪

い、今のはなんて恐ろしい放送だったのでしょう。もしこれが作戦だとしても、雄二は鬼か悪魔の類だと思います。

船越先生（４５歳♀独身）といえば、婚期を逃して、ついには生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになった、“あの”船越先生のことでしょう。
今の放送を聞けば間違いなく先生を足止めできますが、明久に貞操の危機が迫ってしまいました。

『……す、須川ぁぁあああああっっ！』

あ、遠くから明久の魂の叫びが聞こえてきました。南無．．．．．

それからしばらくして雄二の率いる本隊が明久たちの部隊を回収するために出ていき、帰ってきたところで戦闘は一時中断されました。すっかり憔悴しきった顔の明久と清々しいまでの笑顔を浮かべた雄二を見て、どうして２人が友人関係を続けているのか疑問に思った人はきっと僕だけではないでしょう。

第3問　『作戦会議！そしてDクラス戦始まる！』（後書き）

あとがき

作者　「さあ、いよいよ始まりました。Dクラス戦です！」

鏡護　「……戦闘描写が1つもない（ボソッ）」

作者　「うっ…。いいんだよ、後半戦に入ったらガンガン書いていくから」

鏡護　「……僕は戦場に出ないのに？」

作者　「そこはほら、戦場に出てる人の視点から書かせてもらうから」

鏡護　「……僕、主人公だよね？」

作者　「そうだけど、今回は諦めんさい。……っていうかいい加減テンション低いのはやめい！」

鏡護　「…わかったよ。ところで次回はDクラス戦決着ってことでいいの？」

作者　「そうだ。カッコイイ戦闘描写がバンバン出てくるからな」

鏡護　「自分からハードル上げて自分の首絞めてるけど大丈夫かな、作者さん……（ボソッ）」

作者　「何か言ったか？……まあいいや。それでは次回予告！

次回、第４問『Ｄクラス戦決着！交渉は鮮度が命！（仮）』

を、」

作・鏡　「「よろしくお願いします」」

第４問　『Ｄクラス戦決着！＆テンプレなイベントって大事だよねっ！』（前書き）

バカテスト　物理

問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（　）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』
教師のコメント
よくできました。

土屋康太
『寄せては返すの』
教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
『勇者の武器』
教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

天水鏡護の答え
『破壊光線』
教師のコメント
先生はポ○モンも好きです。

第４問　『Ｄクラス戦決着！＆テンプレなイベントって大事だよねっ！』

――Ｓｉｄｅ　明久

教室に戻ってきて、化学のテストを受け直した後、

「明久、よくやった」

僕はクラスの総大将である雄二から、らしくもなく褒められていた。
おかしい。普段の雄二なら僕を素直に褒めるなんてことはするはずがない。
疑問に思って雄二の顔を見た。
・・・・・笑っている。それもムカつくくらい、メチャクチャ楽しそうに。
もしかして――

「校内放送、聞こえてた？」

「ああ。もうバッチリとな」

やっぱり！僕の不幸を喜んでやがる！許せん！
本当ならここで雄二にも何らかの制裁をくわえたいところだけど、
今は雄二には構っていられない。
コイツよりも先に、もっと粛清をくわえなければならない重要人物がいるからね・・・・・

「……雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

僕が今最も逢いたい、愛しい愛しい彼はドコダロウ・・・・・
包丁はさっき家庭科室からパクってきたし、念のため靴下に砂も詰めてある。
あとは彼が姿を見せればジ・エンドだ！

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「やれる、今の僕なら殺れる……」

「いや、殺るなって」

ああ、須川君・・・・・。逢いたい、早くアイタイヨ・・・・・

「あ～、ちなみに、だが」

雄二が何か言ってるけど、この際後回しだ。それよりも今の最優先事項は――

「あの放送を指示したのは俺だ」

コイツだぁぁっ！

「死にさらせぇぇ！」

あらかじめシミュレーションしていたように、避けにくく致命傷になりやすい肝臓目掛けて包丁を突き出す。
右手に隠した即席ブラックジャックは死角となる雄二の頭上から――

「あ、船越先生」

ちぃっ！命拾いしたな、運のいいヤツめ！雄二の始末も大事だけど、今は僕の身の安全が第一だ！

途中邪魔だった卓袱台を蹴散らしながら、掃除用具入れの中に飛び込んでドアを閉める。これなら僕の姿は外からは見えないはずだ。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけにいくか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合いじゃの」

「……（コクコク）」

「よし、野郎どもっ！Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『『おうっ！』』

本当なら僕も行きたいところだけど、船越先生がまだ近くにいる以上、僕は迂闊にここから出ることはできない。

くそっ！このままでは雄二を取り逃がしてしまう！

「あの～、明久？」

雄二たちが教室を出ていってしまったその時、教室に残っていた鏡護が僕に話し掛けてきた。

「どうしたの？」

「えっと…船越先生が来たっていうのは雄二の嘘だよ」

――嘘！？

慌てて掃除用具入れの格子窓から教室を覗くと、先生の姿はない。

――騙されたぁっ！

「雄二め、逃がさんっ！」

Dクラスに総攻撃を仕掛けるってことは、戦場はさっきの渡り廊下になるはず！

今から行ってもまだ十分ヤツを殺るチャンスはあるっ！

僕は掃除用具入れのドアを蹴り開けると、急いで教室を飛び出した。

「下校している連中に上手く溶け込め！取り囲んで多対一の状況をつくるんだ！」

渡り廊下に出た僕に倒すべき敵の声が響き渡る。

『そっちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む！』

『なら俺は古典勝負を……』

『日本史で……』

Fクラスの皆が渡り廊下のあちこちでDクラスの生徒1人を取り囲んでいる姿が目に入ってくる。

下校中のドサクサに紛れて敵に近づき、取り囲んで各個撃破していく。実に姑息な作戦だ。

『Dクラス塚本、討ち取ったり！』

戦場に一際大きな声が上がった。
先程まで苦戦を強いられていた塚本君を討ち取ることができたようだ。
けど、それよりも早く僕は雄二を探さないと。

「雄二、どこにいるっ！首を洗って――」

下校中の生徒の中に特徴的な髪型のヤツの姿を探していると・・・・

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

くっ！あれはDクラス代表の平賀君！

『Dクラスの本隊が動き出したぞっ！』

うちのクラスの誰かの声が聞こえる。
これでFクラス・Dクラス両方の主力が集まったことになる。いよいよ最終決戦だ！

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて撹乱するんだ！」

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！残ったメンバーは囲まれている奴らを助けるんだ！」

両クラスの代表から、それぞれ同時に指示が飛ぶ。
確かに明らかにうちのクラスの旗色が悪くなっている。雄二の判断は正しいだろう。

「個人同士の戦いになればこちらの負けはない！絶対に逃がすな！追い詰めて討ち取るんだ！」

平賀君から更に指示が飛ぶ。
見れば本隊の人たちも分散してFクラスの掃討にかかっているみたいだ。クラス代表が負けたら勝敗の決する『試召戦争』において、優先すべきは敵代表の首だからね。
その分平賀君の周りは守りが薄くなっているが、囲まれなければ自分は討ち取られないという自信があるのだろう。

こそこそと逃げ回っていた僕の視界に、平賀君の姿が入った。もう間に邪魔な近衛部隊が見当たらない程に防御が薄くなっている。

「チャンスッ！」

今は雄二を殺ることが難しい以上、僕も試召戦争の方に集中しなければ。
そうして素早く平賀君の下へと駆けていく。よし、このまま・・・・

「向井先生！Fクラス吉井が――」

「Dクラス玉野美紀、試獣召喚（サモン）」

「なっ！近衛部隊！？」

「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

勝ち誇った平賀君の顔。

「ち、ちがう！あれは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さあ玉野さん、彼に祝福を」

「わかりました」

「ちくしょう！あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「何を言うかと思えば、彼氏クン？いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの人間が近づいてくれれば近衛部隊がくるに決まっている。それにお前程度の点数じゃ俺を倒そうなんてどのみち無理な話だよ」

平賀君がフンッと鼻を鳴らして僕を一瞥した。うぅっ、ムカつく！だから、僕も対抗して片目をつぶる。さぁ、終わりにしよう。

「確かに、僕じゃ無理だろうね。だから――」

勿体つけるように一息入れて、

「後はよろしくね、姫路さん」

「は？」

僕の言葉に呆然としている平賀君の肩を姫路さんが控えめに叩く。

「あ、あの……Ｆクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「へ？」

平賀君は未だ現状を認識できてないみたいだ。

「その……Ｄクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はぁ。どうも……」

「えっと、その……さ、試獣召喚（サモン）です」

『Ｆクラス　姫路瑞希　ＶＳ　Ｄクラス　平賀源二
現代国語　３３９点　ＶＳ　１２９点』

「えっ？あ、あれっ？」

戸惑いながら平賀君も自身の召喚獣を喚び出し、相対させる。
けど、相手にならないんだろうなぁ・・・・・。姫路さんの召喚獣は見るからに強そうだ。

「ご、ごめんなさいっ」

背丈の倍以上ある大きさの剣を構えると、その姿からは想像も付かない速さで平賀君の召喚獣に接近して、一刀の元に斬り伏せた。決

着だ。

Dクラス代表　平賀源二　　討死

『『うおぉぉーっ！』』
『『あぁぁぁぁ……』』

その知らせを聞いて、Fクラスからは勝鬨（かちどき）が、Dクラスからは悲鳴が上がった。
それらは混ざり合い、耳をつんざくような大音響となって放課後の校舎内に響き渡った。

『凄ぇよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』
『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』
『ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな』
『坂本雄二サマサマだな！』
『姫路さん愛してます！』

代表である雄二を褒め称える声があちこちから聞こえてくる。

『坂本、握手してくれ！』
『俺も！』

凄いな、もう英雄扱いだ。よし、僕も雄二のところに行って皆と一緒に喜びを分かち合おう！

「雄二！」

「お？明久か」

雄二がこちらに振り向く。そこに颯爽と駆け寄って、

「僕も雄二と握手を！」

僕は手を突き出した。

ガシッ（雄二が僕の手首を掴み）

グリッ（僕の手首をねじる）

カランカランッ（包丁が落ちる音）

「……」

「……」

周囲に沈黙が流れる・・・・・

「僕、皆で何かを成し遂げた達成感がこんなにも素晴らしいものだなんて、知らな関節が折れるように痛いぃっ！」

「今、何をしようとした」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるように痛いぃっ！」

「おーい。誰かペンチを持ってきてくれー」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「……チッ」

あ、危なかった・・・・・。それにしても、ペンチを何に使うつもりだったんだろう？

「……生爪……」

二度と逆らうまい。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

背中から誰かの声。

振り向くとそこにはヨタヨタとこちらに歩み寄ってくる平賀君の姿があった。

「あ、その、さっきはすいません……」

違う方向からは姫路さんも駆け寄ってくる。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

そう。これはまさしく戦争なのだ。

今回は騙し討ちっぽかったけど、姫路さんが謝る必要はないんだ。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でいいか？」

敗戦の将か。なんだかちょっと可哀想だ。これから彼は再び試召戦争ができるようになるまでの3ヶ月間をあの最低設備の教室でクラスメイトに恨まれながら過ごさなくてはならない。勝てば英雄のように扱われるのが代表なら、負ければ戦犯のように扱われるのもまた代表なんだから。

「いや、その必要はない」

「え？どうして？」

雄二の予想外の返事を聞いて、僕は思わずその理由を訊ねてしまった。

「Dクラスを奪う気はないからだ」

雄二の言いたいことがさっぱり理解できない。

「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「でもそれなら、なんでAクラスを標的にしないのさ？おかしいじゃないか」

「お前はいちいち人に聞かないとわからないのか？そんなだから近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな中途半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「おっとすまん。近所の小学生の間違いだったな」

「……人違いです」

「ま、まさか……本当に言われたことがあるのか……？」

み、見ないで！お願いだからそんな目で僕を見ないで！

「と、とにかくだ。Ｄクラスにはある条件さえ呑んでくれれば、設備には一切手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたい話だが……いいのか？……その条件とは？」

「なに。そう大した事じゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるＢクラスのエアコンの室外機を動かなくしてもらいたい。それだけだ」

学校の設備を壊すのだから、当然教師ににらまれる可能性はある。だけど上手く事故のように見せかければ厳重注意程度で済み、３ヶ月もの間をあの教室で過ごすという状態から開放されるのだ。悪い取引であるはずがない。

「それくらいならこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のＢクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を呑ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰っていいぞ」

どうやら話はついたみたいだ。交渉成立、だね。
そういえば誰か忘れてるような気がするんだけど、誰だろう？

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「皆、遅いなぁ……」

廊下からＦクラスの皆のものであろう歓声が聞こえてきたから、既に戦闘は終わっているんでしょう。
しかし、しばらく待ってみても誰も帰ってきません。もしかして、僕の存在は忘れられているんでしょうか？
戦場に出て来ないように、と雄二から言われた言葉を律儀に守っていたのですが、この扱いはあんまりにもあんまりじゃないですか？
こうなったら、もう帰ってしまいましょうか。そうですね。そうしましょう。
自問自答して、僕は１人帰宅の途につく事にしました。べ、別に悲しくなんてないんですからねっ！

＊　　＊　　＊

途中で弁当箱を教室に置き忘れたことに気付いた僕は、今再び学校に戻っていました。

あまり家に帰るのが遅くなるのは嫌なので、ささっと用事を済ませて帰りましょう。
上履きに履き替え、急ぎFクラスへと向かいます。

「全員、手を上に揚げて動くなっ！」

「ひゃ、ひゃいっ！」

どうせもう皆帰ったと思って勢いよくドアを開け、偶にはボケてみようかと変な茶目っ気を出してみたら何だか反応が。
うぅ、やってしまいました・・・・・

「あ、天水君？」

「えっ、姫路さん？」

驚きました。中にいたのは姫路さんでした。

「ごめん。誰かいるとは思わなくて。びっくりしたよね？」

「い、いえ。そ、それより、ど、どどどうしたんですか？」

・・・・？おかしいですね？なぜ姫路さんは慌てているんでしょうか。

「いや、ちょっと忘れ物を取りに、ね」

「そ、そそそうだったんですかっ」

フフフッ。こんな時に、姫路さんは慌ててる姿も可愛らしいですね、なんて考えてしまうのは不謹慎でしょうか？

おやっ？そういえば彼女のいる席（？）を見てみると、可愛らしい便箋と封筒が用意されていました。

「あっ！これはですね、そのっ」

「？？？」

「えぇっと――ふゃっ」

コテン、と卓袱台に躓いて転んでしまう姫路さん。

その拍子に隠そうとしていた手紙が僕の前に飛んできて、その一文が目に入ってしまいました。

《あなたのことが好きです》

「……」

「……」

一瞬にして場の空気が凍りました。

「……」

耳まで真っ赤に染めてうつむく彼女。

・・・・・・さて、どうしましょう？

「……とりあえず、そのー、おめでとう？」

「ふぇ！？」

僕の言葉に過敏に反応する姫路さん。

最近疎遠だったとはいえ、自分の幼馴染の女の子に好きな異性ができたというのは、とりあえず喜ぶべきなんじゃないかと思ってそう口に出してみましたが、逆効果だったようです。

「えぇっと、その。……深呼吸でもしようか、お互い。」

「あ、……はぃ」

2人して数回吸って吐いてを繰り返します。

・・・・・少しは落ち着きましたかね？

「……ふぅ、それで姫路さん、非常に聞きにくいんだけど、それってやっぱり……」

「あ、はい。……その、ラブレター、です」

「だよね……。それなら、ここで相手まで聞いちゃうのはルール違反かな」

「あ、いぇ、それは……そのぅ」

「大丈夫。でも、その人のどんなところがいいの？やっぱり外見とか？」

これくらいなら、と軽い気持ちで聞いてみました。僕だって人並みには恋愛に興味があるんです。

「あ、いえ。外見じゃなくて、あっ、もちろん外見も好きなんですけどっ！」

慌てる姫路さんを見て、ちょっと微笑ましくなってしまいました。

「外見もってことは、その人の内面もいいの？」

「はいっ。いつも明るい笑顔で、とっても優しくて、温かい……私の憧れなんです」

嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑う彼女の笑顔が本当に綺麗で、僕は思わず魅入ってしまいました。

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事がもらえるといいね」

そう言って僕は教室を後にしました。

偶然にも姫路さんのラブレターを見てしまった僕は、一瞬このことを忘れようと考えていました。自分でも何故かはわかりません。ただ、別れ際に見た彼女の笑顔が頭に浮かぶ度に、胸の奥が締め付

けられるような痛みを感じるんです。

そう、僕はあんなにも真摯に愛情を向けられている彼女の想い人のことを、心の底から羨ましいと思っていたんです・・・・・

彼女と別れた数十分後、家に帰った僕が学校に戻った本来の目的を忘れていることに気付き、慌ててもう一度学校に行くハメになってしまったのはここだけのヒミツです。

第４問　『Ｄクラス戦決着！＆テンプレなイベントって大事だよねっ！』（後書き）

あとがき

作者　「Ｄクラス戦終結、しかしそこに主人公の姿はなかった……」

鏡護　「うわぁぁぁんっ」涙

作者　「まあいいじゃん。代わりって言っちゃあなんだけど、ステキ個別イベントがあったんだから」

鏡護　「グスッ。でもあれだって結局誰宛なのかって考えたら……」

作者　「（こいつ、あれが実は自分宛だって知らないんだよなぁ……）」

鏡護　「……うわぁぁぁんっ。やっぱり僕は主人公じゃないんだぁぁっ！」ダッ

作者　「あ、おい。鏡護、どこに行く！？鏡護、カ～ムバァァ～ック！」

作者　「申し訳ありません。鏡護のヤツがどこかに行ってしまったので、今回はここでお開きとさせていただきます。
　次回あとがきまでには必ず連れて帰ってきますので、どうぞお許しください。」

作者　「気を取り直して、次回予告、いきます！

次回、第5問『女の子の手作り弁当はそれだけで男の浪漫（仮）』

ですっ。お楽しみに！」

補習第1問　『謝罪には誠意をもって臨むべしっ！』（前書き）

こんにちは、天叢雲です。

今日は本編ストーリーを補填するサイドストーリーをお送り致します。

またいつものバカテストをお休みして、皆さまにお知らせがございます。

今回の更新以後、大学のレポートと試験勉強に取り掛かるため、しばらく更新が遅れることを、この場をお借りしてお詫び申し上げますｍ（＿＿）ｍ

全てが終わりましたら、これまで以上に頑張って更新していこうと思います。

今後もどうぞ拙作をよろしくお願い致します。

補習第1問　『謝罪には誠意をもって臨むべしっ！』

ガバァッ！

「忘れてたぁぁっ！」

あ、皆さんおはようございます。天水鏡護です。
今日はDクラス戦の翌日、ただ今の時刻は午前6時です。
って何を暢気に挨拶なんてしてるんですか、僕！
・・・・・っとノリツッコミをしている場合でもありません。
大変です！これはマズいです！ヤバいです！
昨日は色々とショックなことが重なったせいで、重要な用事をすっぽかしていたことにたった今気付いたんです。
その用事とは・・・・・僕の幼馴染の1人、優子への謝罪です。（※第1問参照）
彼女の機嫌を損ねたまま日をまたいでしまった・・・・・このままでは恐らく、いえ間違いなく私刑確定です。
うぅ、考えただけで寒気がします・・・・・
とにかく、できる限り事態を好転（具体的には私刑の回避）させるために、何か策を講じなければなりません。
さて、何か使えそうなものはないでしょうか・・・・・？

・・・・・！！ありました！これならなんとかなるかもしれません！

僕は今日のお昼に待っている、とある特別なイベントに思い至りました。

皆さんも思い出しましたよね？そうです。昨日約束した通り、今日は皆のお弁当を僕と姫路さんが作ってくることになっているんです。

（※第３問参照）

今回はこれを利用させてもらいましょう。題して『美味しいお昼であの娘の機嫌も元通り！作戦』ですっ！・・・・・ってそのまんまですね（笑）

そうと決まれば、量も必要な訳ですから早速お弁当作りを始めなければいけません。

今日はいつも以上に腕によりをかけて作るとしましょう。なにせ僕の命が懸かってますからね。

そうして僕は手早く身支度を整えると、文字通り命懸けのお弁当作りに没頭していきました・・・・

――木下家玄関前

「さあ、ある意味ここからが本番だ……」

はい、現在僕は本日のラスボスが住まう城の目の前に来ています。

ちなみに時刻は午前７時３０分を少し回ったくらいです。

この時間なら間違いなく木下優子（ラスボス）及びその弟は起きています。今頃朝ご飯でも食べているでしょう。
ここからの行動の選択如何によって、僕の寿命が決まると言っても決して過言ではありません。
僕は一度大きく深呼吸をすると、インターホンに指を伸ばしました。

ぴんぽ～ん！

「は～い！どちらさまかの？」

インターホンに出たのは優子の弟の秀吉でした。・・・・・助かりました。もしここでいきなり優子本人が出て来ていたら、即座にゲームオーバーでしたね。
まずは一命を取り留めたことを神様とかそういう類のものに感謝しておきます。

「おはよう、秀吉。天水です。」

「何じゃ、鏡護か。珍しいの。どうしたんじゃ？」

「実は昨日優子のところに顔出すの忘れちゃってさ……」

「……なるほど。それで昨夜も姉上の機嫌が悪かったんじゃな」

「……やっぱり？参考までに、どんな感じだった？」

「うむ、とりあえず全身から真っ黒なオーラが出ておったの。今朝は多少収まっておるが」

「うっ……」

「まあ、今朝はそのために出向いて来たんじゃろ？」

「ああ。上がってもいいかな？」

「うむ。待っておれ。今カギを開けにいくからの」

「ありがとう」

しばらくそのまま待っていると、秀吉が出て来て中に通してくれました。

玄関から廊下を進み、突き当たりにあるリビングへと続くドアの前で足を止めます。

「ごめん、秀吉。ちょっと待って。まだ心の準備が……」

「フフッ。相変わらずお主は姉上を苦手としておるんじゃな」

「仕方ないだろう？なにかあると毎回私刑と称して関節技の餌食にされるんだから……」

「（姉上も大変じゃな。姉上にも原因があるとはいえ、想い人がこの様子じゃからのう）」

そう。学校ではＡクラスに所属し、優等生の見本と言われる程に成績優秀・品行方正を地で行く彼女ですが、それは決して真実の姿で

はないのです。まあ、あそこまで徹底しているのはある意味尊敬に値しますが。

彼女の本当の姿は普段の家の中で見ることができます。端的に表現するならズボラでとにかく面倒臭がり。

まず、家の中をジャージ（以前聞いたところによると、秀吉と二人の時は下着）姿で歩き回るなど、年頃の女の子的恥じらいは皆無と言って差し支えありません。

また彼女の趣味は乙女小説を読むことで、その登場人物についても１２歳以下の美少年がストライクゾーンという、正直コメントしにくい（したくない）感じです。

さらに割と沸点が低くて、怒り出すと問答無用でサブミッション（関節技）を仕掛けてくるのですから始末に負えません。往々にしてその矛先は僕か秀吉に向ってくるので、潜在的に恐怖を刷り込まれているのです。

そういう訳で、僕は彼女に対して第１級指定危険人物の認定をしています。

そういう意味では、学校での猫を被った彼女しか知らない大多数の生徒達を非常に羨ましく思っているんですよ・・・・・

「……よし。行くぞ」

そうして気合を入れてドアを開け、リビングに踏み込んだところで――

「おはよう、鏡護。今日はどうしたのかしら？」

「――ッ！？」

刺すような視線でこちらを睨みつける優子に出迎えられて僕の時間は止まりました・・・・・・

・・・・・ってマズい、早く何か言わないと殺される！頭の中でレッドアラートがガンガン鳴り響きます。

「あー、えーっと、そのー、……優子様っ、大変申し訳ございませんでしたぁっ」ガバッ

僕は勢いよくその場で土下座を敢行しました。背に腹は代えられません。男のプライド？何それ？おいしいの？

「えー、振り分け試験でのことをご報告していなかったのはひとえに私めの落ち度でございます。僭越ながら優子様の本日のお昼をご用意させていただきましたので、よろしければどうぞお納めください。それでも足りないようでしたら、今度優子様のおっしゃることを何でも1つ聞かせていただきます。ですからどうかご容赦を」

とにかく間に一言も挟まれないよう一気に喋ります。

・・・・・何も反応がありません。やはりダメでしょうか。

そう思って恐る恐る顔を上げると、

「……ハァ、わかったわよ。もういいから土下座は止めなさい。あ

と様付けも止めて。なんかムカつくわ（……それにその捨てられた子犬みたいな目、反則よっ／／／／）」

・・・・・やりました！正義は必ず勝つのです（？）！生命の危機は去りました！

「ありがとう、優子！」抱きっ

すぐさま土下座を止めると、そのまま優子に抱きついてしまいました。

「ちょ、ちょっと鏡護！アンタ何してるの！？　（キャーキャー／／／／鏡護に抱きつかれちゃった／／／／）」

なにやら優子が喚いていますが、そんなの気にしません。とにかく今は生きている幸せを噛み締めていたいんですっ！

しばらくそうした状態が続いていましたが、僕が状況に気付くと、2人して顔を真っ赤にしてお互いすぐさま距離をとりました。

「うぁ、その、なんかごめん」

「う……あ、謝らないでっ。べ、別に怒ってないから（ほんとはもっとして欲しかったんだし……／／／／）」

「そうか、よかった。」ニコッ

拒絶されるかも、と思った僕はそう言ってくれたことが嬉しくて、

優子に微笑み返しました。

「……ッ／／／／そ、それよりさっき言ったこと、本当なんでしょうね？」

「もちろんだよ。お昼の方なんだけど、休み時間になったら迎えに行くから教室で待っててくれる？」

「わかったわ」

「うん、じゃあそういうことで。もう1つの方は決まったら連絡してよ」

「ええ、そうね。フフッ、何をしてもらおうかしら？」

「うっ……。一応僕のできる範囲にしてよ？」

「それくらいはわかってるわよ。安心しなさい」

「……素直に安心できないから言ってるんじゃないか（ボソッ）」

「……鏡護、何か言ったかしら？」

「いいえ。滅相もございません」

「そう。でもね、やっぱり何かムカつくからお仕置きよっ！」

「ちょ、ちょっと待て。絶対さっきの聞こえてたんだろ！？この地獄耳が――って、や、止めろ優子っ！その関節はそっちには曲がらな……っ！」

結局その後優子にボロボロにされた僕は、二人と共に登校することになりました。
道中、僕の腕の関節を極めながら上機嫌で歩く優子を見て、僕は思わず心の中で呟きました。

・・・・・なんでさ？

補習第1問　『謝罪には誠意をもって臨むべしっ！』（後書き）

あとがき

作者　「えー、本日もスペシャルゲストをお迎えしております。……どうぞ、お入りください」

？？　「よろしく」

作者　「なんか素っ気ないですね……。コホン、本日のゲストは拙作のもう1人の正ヒロイン、木下優子さんです！」パチパチパチ

優子　「私には気にせず進めて頂戴」

作者　「うわぁ、バッサリ斬られました。……仕方ありません、ここは対木下優子専用決戦兵器を使うとしましょう……」

ジャジャジャ～ン！鏡護' ｓベストショット（盗撮）写真集～！

優子　「……ごめんなさい、何でも聞いていいわよ？」ニコッ

作者　「スゲェ……。恐ろしい変わり身の早さだな……」

優子　「もちろん、そちらの品はいただけるんですよね？……Ｎｏって言ったらどうなるか、わかるわね？」

作者　「ッ！？サー、イエスマム！」

優子　「よろしい。では始めましょうか」

作者　「ありがとうございます（※直立不動、最敬礼）！早速ですが、優子さんは鏡護氏のことが好きなのでありますか？」

優子　「――ッ／／／／そ、そうよ！悪いっ！？」

作者　「いいえ、とても素敵なことだと思いますっ！しかし、ライバルがいらっしゃるようですが……」

優子　「へぇ、それは初耳ね。……いったいどこの誰なのかしら？」

作者　「申し訳ございません。これは個人のプライベートに関わりますので、申し上げることはできません！」

優子　「ふぅん……。まあいいわ。それで、もちろん応援してくれるのよね？」

作者　「いやぁ、実はまだどうするか決めてな――も、申し訳ありません、う、嘘ですっ！だからそこはそんな風には曲がら……っ！」

優子　「次やったらその命、無いものと思いなさい」

作者　「ハァ、ハァ……。こ、これだから暴力女は……」

優子　「……余程死にたいようね。いいわ。望み通りにしてあげましょうっ！」

作者　「あ、ご、ごめんなさい、もう言いませんからこれ以上は勘弁……ってギャァーーッ、無理っ、無理だからっ、それ以上はヤメテェーーーッ！」

お見苦しい場面が続いております。しばらくお待ちください……

優子　「皆さん、申し訳ございません。作者さんは急用ができたためお帰りになられました」ニコッ（※全身を返り血で紅く染めながら）

優子　「ですので、今日の次回予告は私が代行させていただきます。それでは、

次回、第5問『女の子の手作り弁当はそれだけで男の浪漫』

を、よろしくお願いします！」

第5問　『女の子の手作り弁当はそれだけで男の浪漫』（前書き）

バカテスト　化学

問　以下の問いに答えなさい。
『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え
『C６H６』
教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え
『ベン＋ゼン＝ベンゼン』
教師のコメント
君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え
『B‐E‐N‐Z‐E‐N』
教師のコメント
あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

天水鏡護の答え
『B‐z』
教師のコメント
それは国民的アーティストの名前です。

第5問　『女の子の手作り弁当はそれだけで男の浪漫』

「うあー……づがれだー」

そう言って隣で明久が卓袱台に突っ伏しました。
今はとりあえず4教科の試験が終わったところですが、それだけで明久がここまで疲れるわけはありません。
では何故かと言いますと、昨日の放送の件で朝から船越先生とひと悶着あったからです。ちなみに、船越先生には明久のご近所のお兄さん（39歳独身）を紹介してあげたそうです。

「うむ。疲れたのう」

いつの間にやら秀吉も近くにやってきました。
朝一緒に登校した時から疑問に思っていたのですが、今日の彼の髪型は何故かポニーテールです。
そういう風に無意識に男の嗜好をくすぐる様な事をするから、余計に女子扱いされることになるんですよ。秀吉もいい加減気付きなさい。

「……（コクコク）」

そして康太。君はもう少し喋りましょうよ。さもないと存在感が薄すぎてそのうち本当に忘れちゃいますよ？

「よし！昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄二がまるで疲れを感じさせない様子で勢いよく立ち上がります。

しかし今口にしたメニューが全て主食だとは、いったいどのような体の構造をしているのでしょう。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒していい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「……（コクコク）」

そこに島田さんも加わってきました。最近はもうこのメンバー＋αで動くことが多いですからね。

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりを……」

明久、どんなに恰好付けて言ったところでそれは所詮塩水ですからね。

ところで皆さん、どうやら今日のイベントのことがすっかり頭から飛んでいるみたいです。

「あ、あの。皆さん……」

皆が食堂に行こうとしたところで、姫路さんが声を掛けました。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

一緒に学食に行く？ではありませんよ、明久。さすがにちょっとイラッとしますね。

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

「おお。そういえば今日は弁当があるんじゃったの」

いち早く秀吉が気付いてくれましたね。ここで介入するとしましょう。

「そうだよ。みんな忘れたのか？今日は僕と姫路さんが弁当を作ってくるって話だっただろ？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

と、姫路さんが身体の後ろに隠していたバッグを差し出しました。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。すまん、すっかり忘れてた。ありがとう」

「そうですか？良かったぁ～」

そう言ってほにゃっと喜びの笑顔を見せる姫路さん。やっぱり自分で作った料理を誰かに食べてもらえるのは嬉しいことですからね。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……」

そして島田さん、怖いですよ。早くその殺気をどうにかしてください。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上にでも行くとするかの」

「そうだね」

どうやら屋上で食べることに決まったようです。
それでは、僕も優子を迎えに行くとしますか。

「秀吉。僕はゲストを迎えに行ってくるから、皆に説明よろしく。それと先に始めてていいからね！」

「承知した。では先に行っておるぞ」

「ああ」

そうして僕は皆と別れ、優子の待つＡクラスへと急ぎました。

＊　　＊　　＊

「すいません。木下さんを呼んでくれませんか？」

Ａクラスの教室にやって来た僕は、丁度教室に入ろうとしていた女の子に声を掛けました。

「……あなた、誰？」

すると、その女の子から逆に質問を返されてしまいました。確かに、クラスメイトが知らない人間に呼び出されたら警戒するのも当たり

前ですね。まずは名乗りますか。
それにしても綺麗な人ですね。腰まで伸ばした黒髪といい、端正な顔つきといい、まるで日本人形を髣髴とさせる美しさです。

「これは失礼しました。僕はFクラスの天水です」

「……そう。ちょっと待ってて。呼んでくる」

そう言って彼女は教室に入ろうとして、

「……あれっ、代表？どうしたの、こんなところで……ってキミは？」

その場に現れたもう1人の女の子によって呼び止められてしまいました。

「あ、えーっと、Fクラスの天水です。木下さんに会いに来たんですが」

「そうなんだ。あ、ボクはAクラスの工藤愛子です。よろしくね！ところで優子に用事？何かな？」

「いえ、今日お昼を一緒に食べる約束をしてたんです」

「そうなんだ。あ、それで代表に声掛けて呼んでもらうところだったんだね」

「はい。そんなところです」

と、この嵐のように突然現れた少女、工藤さん、でしたか。

改めて彼女を見てみると、彼女もまたなかなかの美少女でした。短く切り揃えられた髪と、クリッとした大きめの目が彼女の活発さを表しているようです。

「……代表に愛子？どうしたの、２人して」

２人と話しているうちに、どうやらお目当ての人物自ら来てくれたようです。

「や、優子。待ったかな？」

軽く手を挙げて優子に挨拶します。

「あれっ、なんで鏡護がＡクラスに来てるのよ？」

「おいおい。朝の話を聞いてなかったのか？昼になったら迎えに行くって言っただろう」

「……そういえばそうだったわね。そういうことなら大丈夫よ。行きましょう」

「ああ。……そういえば、付き合わせてごめんね。工藤さんと、ええっと……」

「……霧島翔子」

「ありがとう。霧島さんもね。」

「ボクは気にしてないから別にいいのに」

「……平気」

「ん。じゃあまたね」

そうして2人に別れを告げて、僕は優子と2人で屋上へと向かいました。

＊　　＊　　＊

屋上にやって来た僕の目に最初に映ったのは、床に突っ伏したまま痙攣している雄二の姿でした。

いったい、僕が優子のところに行っている間に何があったんでしょう。

何故か突然頭に鳴り始めた警報を一時無視して、事情を知っていそうな2人のところへ行きました。

ちなみに一緒に来た優子は目の前の光景が信じられないのでしょう、ドアのところで固まったまま動く気配がしません。

「明久、秀吉。これは何があった！どうして雄二が倒れてるんだ！？」

「うわぁ、鏡護、声がデカい！抑えて！」

明久がそう言うので、とりあえず音量は落として事態の説明を求めることにします。

（で、何があった？……というか、何でコソコソしなきゃいけないんだ）

（それが、実は姫路さんの弁当には毒が入ってたみたいで、それを全部食べちゃった雄二がああなってるんだよ。それにこんな話、姫路さんには聞かせられないからね）

（まあ起こったことをより正確に言うなら、明久が姫路の弁当を雄二の口に無理やり押し込んで食べさせた、じゃがな）

（……っ！なるほど。ありがとう、秀吉。明久は後で話があるからな……）

（えぇっ！？ちょっと待ってよ！）

（聞く耳持たん。お前は友人の命を何だと思ってるんだ！）

明久には後でたっぷり地獄を見てもらうとして、２人の話を聞いた僕は昨日の昼から頭の隅に引っ掛かっていた違和感の正体にやっと気が付きました。そして気付くと同時に、僕は全身から冷や汗が吹き出してくるのを止められなくなりました・・・・・

それはもうずいぶん昔のことです。
まだ天水家と姫路家の交流が盛んだった頃、僕達家族が姫路家の夕食の席にお呼ばれされたことがありました。
その時振る舞われた料理の中に１品だけ姫路さんが作った料理があったのですが、当時の僕は初めて同年代の異性の手作り料理が食べられるとあって、それはもう浮かれに浮かれていました。
しかし、それこそが僕の最大の過ちだったのです。

その料理に手をつけた僕は数瞬意識を手放していたことが、後で両親に聞いた話から判明しました。
もうおわかりでしょう。姫路さんの、彼女の料理はリアル生物兵器（バイオハザード）なのです。しかも性質の悪いことに見た目や匂いはごく普通の料理なので、高確率でそれと気づかずに口に入れてしまい、被害を被ります。

何故このように重要な事を今の今まで忘れていたのか疑問に思いましたが、すぐに理解しました。僕の頭が無意識のうちに記憶を封印していたようです。人の脳は嫌な記憶をすぐに忘れようとします。
それが今回は完全に裏目に出たのです。
僕がもっと早く思い出していれば、そもそも忘れていなければ、今日の惨劇は防げたはずです。
それに気付くと、僕の頭は自分にも事態の責任の一端があるのだと考え始めてしまうのでした・・・・・

「う……うぅ……。こ、ここは……？」

思考の海に沈もうとしていた僕の耳に雄二の声が聞こえた気がしました。

「……雄二っ！気が付いたか！？」

「その声は……鏡護か？というか俺はどうして倒れて……ハッ！そうだ明久、テメェよくもっ」

「うわぁぁっ！ごめんなさいっ！」

「ゴメンで済んだら警察はいらねぇんだよっ！いいから歯ァ食い縛れぇっ！」

「ストップだ雄二！明久を殺るのは後でいいっ！」

「きょ、鏡護まで何言ってるのさ！っていうかそれは字が違うよねぇっ！」

「落ち着け！落ち着くんじゃ３人とも！」

秀吉からタオルが入り、とりあえず場が収まります。
つい熱くなってしまいましたが、ここにいる３人には事情を話しておくべきでしょう。僕はそう考えて３人に向き直ります。

（３人とも、ちょっと聞いて欲しい）

（？どうした、鏡護）

（そうだよ。急に真面目な顔してどうしたのさ？）

（何かはわからんが、大事な話のようじゃな）

（実は――）

僕は自分が姫路さんと幼馴染であること、実は以前彼女の料理を食べた事があってその危険性を知っていたこと、今日この時間になるまでそのことを忘れてしまっていたことを説明し、謝罪しました。

僕が全てを話し終えると３人は、

「「「そうか（だったんだ）（じゃな）」」」

と言うだけでした。てっきりもっと色々言われることを予想していた僕は拍子抜けしてしまいました。

「おい、鏡護。面白いアホ面をしてるぞ」

「あ、ああ……ってそうじゃない！何も言わないのか？」

「ん？まあ姫路と幼馴染ってのは許しがたいことだが、それだけだな」

「そうだね。正直僕もそれだけは納得がいかないよ」

「うむ。それはワシも初耳じゃったしの」

「……ありがとう」

「さて、なんのことだかな」

・・・・・本当に彼らが僕の友人で良かったと、この時僕は3人に対して心の中で頭を下げていました。

その後、まだ手をつけていなかった僕のお弁当を広げて、皆で食べ

ることになりました。
すっかり放置してしまっていた優子はというと、いつの間にか島田さん、姫路さんと仲良くなっていたようで、お互いに名前で呼び合う姿が見られました。

「じゃあ鏡護、お前は姫路だけじゃなく木下姉弟とも幼馴染だったのか」

食べ始めてからしばらく経ち、何故か話題が僕の幼少期の話になりました。

「あー、えっと、実はそうなんだ。別に隠すつもりはなかったんだけど、なんか言う機会がなくてね……」

「天水君、私初めて聞きましたよっ！」

「私だってそうよ、鏡護っ！何で黙ってたのよ」

で、現在僕は姫路さんと優子に左右から挟まれて尋問（？）されている最中です。ちなみに僕は正座させられています・・・・・涙
ああ、神よ。何故僕はこのような目にあっているんでしょうか・・・・

「いやぁ、それぞれと知り合った時期が微妙にズレてたせいで一緒に遊んだりとかもしなかったからなぁ……」

「そんな昔のことはいいんですっ！……というか、ズルいです！何で優子ちゃんは下の名前で呼び捨てなのに、私のことは苗字で呼ぶんですか？昔は私のことも……」

「……確かにそうね。瑞希の言う通りだわ。どうしてなのかしら？」

「えーっと、優子サン？なんで準備体操などしているのでしょうか？」

「あら、特に意味はないわよ？」

「……嘘だっ！絶対僕を殺る気だろうっ！」

「……まあ鏡護の返答次第、といったところかしらね？」

ヤヴァいです。・・・・・間違えました。ヤバいです。

ここでもし下手な事を口走れば、その瞬間に僕は間違いなくＢＡＤＥＮＤに急降下一直線でしょう。

ですが、ここで嘘を吐いて難を逃れたとしても、後々僕は自分の幼馴染に向かって嘘を吐いたという罪悪感に苛まれる事になるはずです。

この場だけで終わる肉体的苦痛と、一生背負うことになる精神的苦痛。ここで僕が選ぶべき答えは――

「姫路さんとはここ最近ちょっと疎遠になってたから、昔みたいに軽々しく名前で呼べなかったんです……」

僕は正直にその理由を口にしました。やはり幼馴染に嘘を吐くなど言語道断なのです。

「……ふぅん、そう。瑞希、アナタはどうしたい？私はアナタに判

断を任せようと思うんだけど？」

「……ありがとう、優子ちゃん。でしたら、天水君。私の事も昔みたいに名前で呼んでください。今回はそれで許してあげます」

「……へっ？ほんとに？ほんとにいいの？イィィヤッホゥッ！……んっ？でも待てよ？“今回は”って事はまだ何かあるの！？」

まさかの無罪放免という判決に、僕は思わず諸手を揚げて喜ぼうとしましたが、ついつい余計な詮索をしてしまいます。

「……アンタって男は……。瑞希がいいって言ってるのに疑うの！？……それともやっぱり死にたいのかしら？」

「め、め、滅相もございません。私が悪うございました」

「……フンッ。わかればいいのよ。ほら、瑞希のこと、早く呼んであげなさい」

・・・・・んっ？あのー、優子サン？なんであなたはちょっと不機嫌そうなんでしょうか？

思わず口に出そうになった言葉を慌てて飲み込みます。ついさっき睨まれたばかりなのにまたやってしまったら、今度こそ僕の命が消されてしまうでしょう。

「あ、ああ……しかしいざとなるとやっぱり恥ずかしいな……。え、えっと、その……」

「ひゃ、ひゃいっ！」

いきなり声を掛けられて驚いたのでしょう、姫路さんの声が裏返っています。

「あー、えー、うー、……み、瑞希……」

うあぁぁぁっ！言ったっ、言ってしまいましたっ！な、なんでしょう。ものすごく恥ずかしいです。間違いなく今、僕の顔は過去最高に真っ赤になっていることでしょう。

「……っ！は、はいっ！」

・・・・・ハッ！な、なんという破壊力なんでしょう！今、僕の魂がきっかり3秒間身体から抜け出していましたよ！？

すっかり気が動転してしまいましたが、今の瞬間に彼女が見せた笑顔は、この間のラブレターの時に見た笑顔と同じくらいの輝きを秘めていました。

この笑顔が見られるのなら、名前で呼ぶことの恥ずかしさなんて全然気になりません。むしろこれからはたくさん名前で呼んであげたい、そんな風に考えている僕がいました・・・・・

こうしてまた、昔のように姫路さ――瑞希を呼べるようになった僕の中に、これまたどうしようもない願望が顔を覗かせました。

今なら、今のこの状況でなら許されるんじゃないか、そう思って、僕はその“お願い”を口にしてみました。

「あ、あの、瑞希？僕からもお願いしたいことが1つあるんだけど、

いいかな？」

「はいっ！いいですよ。今なら私、なんでも叶えちゃいますっ！」

僕から名前で呼ばれるのが余程嬉しいのでしょう。瑞希がそう言ってくれます。

「えっと、じゃあ言うね？……僕の事も昔みたいに呼んでくれないかな？」

「……へっ？私が、天水君を、ですか？（え、えぇぇっ！？ど、どうしましょう／／／／）」

「うん、そう。ダメかな？」

「……ッ！ダ、ダメな訳無いですっ！むしろ私も呼びたかったくらいで……（ボソボソ）」

「……？大丈夫、瑞希？」

最後の方がよく聞き取れなかった僕は、思わず瑞希の顔を覗き込んでしまいました。

「えっ？……ふゃぅっ！？（……ッ／／／／わ、私の顔の目の前に天水君の顔があります……／／／／）」

「あ、ごめん。驚かせちゃった？」

「だ、だだ大丈夫れすっ！（……／／／／あ、あぅぅ。噛んじゃいました……）」

「そう？ならいいんだけど。で、どうかな？」

「ひゃい？（……？何のことでしたっけ？）」

「だから、名前だよ。僕の」

「あ、あぁ、そ、そうでしたね。えっと、じゃあ、その……（うぅ……ドキドキします……／／／／／）」

「うん」

「……きょ、鏡護、君……（キャーッ／／／／／言ってしまいましたっ／／／／／）」ボッ！

・・・・・凄いです。瑞希の顔どころか全身が一瞬で熟れたトマトのように真っ赤に染まりました。さっきの僕もきっと似たようなものだったんでしょうね。

・・・・・っと、冷静に状況を観察してる場合ではないですね。瑞希が困ったようにこっちを見ています。ちゃんと返事をしてあげないといけません。

「うん、ありがとう。瑞希」

こうして数年間のブランクが作り出した僕と瑞希との間にあった溝は、呆気なく（？）埋められることになりました。

実は僕らがこんなことをしていた裏で、雄二とのジャンケンに負けた明久がBクラスへの宣戦布告の使者に選ばれていたらしいのですが、それはまた別の機会に、ということにしましょう。

第5問　『女の子の手作り弁当はそれだけで男の浪漫』（後書き）

あとがき

鏡護　「イィィヤッホゥッ！ああ、人生って素晴らしい！」

作者　「……あのー、鏡護さん？」

鏡護　「瑞希が僕を名前で呼んでくれた！やったぞーーっ！」

作者　「もしもーし？聞こえてますかー？」

鏡護　「バンザーイ！バンザーイ！バンザーイ！」

作者　「……怒」

鏡護　「今日は記念すべき日だ！お祝いをしなくちゃ！」

作者　・・・・・ｐｒｒｒ「あ、もしもし、私です。……はい、はい、……ええ、そうです、はい、……よろしくお願いします」ピッ

・・・・・ドドドドドドドドッ

鏡護　「そうと決まれば善は急げ、だ。買い物に行こう」ガシッ！

？？　「きょ～う～ご～？ちょーっとハシャギ過ぎよ？」

鏡護　「え、あれ、なんで○○がここに!?」

??　「とある親切な人がね?ちょ～っといいことを教えてくれたのよ」ニコッ

鏡護　「ハッ!それってまさか作――ギャァァァッ!」

申し訳ございません。ただ今少々お見苦しい光景が繰り広げられております。
しばらくお待ちください・・・・・

??　「ふぅ。さて、依頼通り目標への制裁は終了したわ。報酬の方をいただこうかしら?」

作者　「ハッ!こちらをお納めください」

テッテレ～!『貴女の知らない天水鏡護写真集（ｆｏｒ　Ｙ.Ｋ.）Ｖｏｌ.１』!

Y.K.　「――ッ／／／／さすがは作者さん、わかってるじゃない♪」

作者　「お褒めに預かり、恐悦至極」

Y.K.　「何かあったらまた呼びなさい。今度は○○も連れてくるわ」

作者　「ハイ。よろしくお願いします」

そうして去っていくＹ．Ｋ．氏．．．．．

作者　「え～、それでは主人公が（天国への）旅に出てしまったので、今回はこの辺で。
さて次回予告ですが、

次回、第６問『対Ｂクラス電撃作戦！そして忍び寄る魔の手！（仮）』

を、よろしくお願いします！」

第6問　『対Bクラス電撃作戦！そして忍び寄る魔の手！』（前書き）

――昼食会後の放課後／教室

「言い訳を聞こうか……」

午後のテストも終了した放課後。
Bクラスへ宣戦布告に行って、案の定ボロボロにされた明久が雄二に詰め寄っています。
ブレザーの袖が片方千切れかかっているのを見るに、今回はなかなか派手にやられているようです。

「予想通りだ」

そんな明久に、雄二が事も無げに答えます。

「くきぃー！殺す！殺し切るーっ！」

逆上した明久が雄二に飛びかかろうとしています。助けに入ってあげますか。

「「落ち着け（こうね）明久」」

「ぐふぉぁっ！」

あ、2人して同時に拳を鳩尾に叩き込んでしまいました・・・・・
大丈夫でしょうか？

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

爽やかにそう言い残して、雄二はさっさと教室を出て行ってしまいます。仕方ありません、フォローは僕がしておきましょう。

「ごめん明久。大丈夫？」

「大丈夫じゃないよ……。うぅ……お腹が……」

さすがに少しばかりやりすぎてしまったようです。

「じゃあ、昼の件はこれでチャラにしてあげるから」

「うぅ……まあ、それなら……」

明久からお許しをもらったところで、肩を貸してとりあえず立ち上がらせます。

「とりあえず保健室に運ぶってことでいいかな？それともこのまま帰る？」

「……保健室で少し休んでくよ」

「了解」

教室にはもうほとんど人が残っていない状態でしたが、ふと視界の端に瑞希の姿が映りました。鞄を抱え込んでキョロキョロと周囲を見回しています。かなり挙動不審ですが、何かを警戒しているようにも見えます。

・・・・・ああ、そういえば昨日手紙を書いていましたね。もしかして、アレをどこに置こうか考えているのでしょうか。だとしたら彼女が気付いていないとはいえ、いつまでもここにいてはいけませんね。

「よし、それじゃ行くよ明久」

「よ、よろしく～」

そうして、僕は明久を連れて教室を後にしました。

第6問　『対Bクラス電撃作戦！そして忍び寄る魔の手！』

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆を見回しています。

今日も午前中はテストで、ついさっき全ての教科のテストが終わって昼食を取ったところです。一昨日のDクラス戦では総合科目勝負をしたらしく、皆は少々お疲れのようです。

かく言う僕はといいますと、そのDクラス戦には参加していなかったこともあって皆より受けたテストが少なかった分、点数は元より、気力も充実しています。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『『おおーっ！』』

前回から全く衰えることのないモチベーション。僕達Fクラスの唯一の武器（笑）と言ってもいいでしょう。

「今回の戦闘は敵を教室内に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『『おおーっ！』』

「そこで前線部隊の指揮は姫路瑞希、天水鏡護の両名に取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張りますっ」

『『うおおーっ！』』

男子のノリについていけないのでしょう。瑞希が若干引き気味ながらも一歩前に出ます。

さあ、いよいよ僕も試召戦争デビューですね。張り切っていきますよ！

「さあ、Ｂクラスに目に物見せてやろうぞ！諸君、合言葉は？」

『『サーチ＆デスっ！！』』

「上等だっ！出るぞっ！」

『『おうっ！』』

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴り響きます。Ｂクラス戦、戦闘開始です。

「よし、言ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『『サー、イエッサー！』』

敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いが重要になります。

僕達は全速力でＢクラスへと向かう廊下を駆け出しました。

今回の廊下戦は絶対に負けられないということで、Ｆクラスの全戦力である５０人のうち４０人を注ぎ込んでいます。そこには学年次席の強さを誇る瑞希と、敵方には何の情報もない僕も入っています。これならまず負けはないでしょう。

今回のこちらの主武器は数学。Ｂクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生の召喚可能範囲が広いというのが理由です。一気に勝負をかけたい時には非常にありがたい先生ですね。他にも英語のライディングの山田先生と物理の木村先生もいます。立会いの教師を多くして一気に駆け抜けます！

『いたぞ、Ｂクラスだ！』
『高橋先生を連れているぞ！』

正面を見ると向こうからゆっくりとした足取りで歩いてくるＢクラスの先遣隊が姿を現しました。人数は１０人程度です。まずは様子見、といったところでしょうか。

「生かして帰すなーっ！」

なんとも物騒な台詞を皮切りに、Ｂクラス戦が開始されました。

『Ｂクラス　野中長男　ＶＳ　Ｆクラス　近藤吉宗
総合　１９４３点　ＶＳ　７６４点』

くっ、流石はＢクラス！Ｄクラスとは桁が違います！

『Ｂクラス　金田一祐子　ＶＳ　Ｆクラス　武藤啓太
数学　１５９点　ＶＳ　６９点
物理　１５２点　ＶＳ　７７点』

『Ｂクラス　里井真由子　ＶＳ　Ｆクラス　君島博

「Ｆクラスの皆は絶対に１対１で戦わないように！人数はこっちの方が多いから、とにかく多対１で確実に殺すんだ！」

とにかく被害を最小限に抑えようとして、急いで指示を出します。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

息を切らせて瑞希がやってきました。さすがに男子の全力疾走にはついて来られませんよね。瑞希は元々あまり体力もありませんし。

『来たぞ！姫路瑞希だ！』

Ｂクラスの誰かが叫びます。
やはりＢクラスにはもうバレていますね……。入念に下調べをしていたのでしょう。
声を聞いたＢクラスの生徒の目が変わりました。明らかに瑞希を警戒しています。

「瑞希、来たばかりで悪いんだけど……」

「は、はい。行って、きます」

そのままトタトタと戦場に紛れ込んでいく瑞希。こんな些細な動作すら可愛く見えてしまうのも、ある種の才能でしょうね。

「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

早速勝負を挑まれる瑞希。当然、向こうとしては早く潰しておきたい相手なんでしょう。

「律子、私も手伝う！」

その後ろから、さらにもう一人Ｂクラスの女子が召喚を開始しました。Ｂクラスは１０人しかいないのに２人がかりとは、向こうも必死ですね．．．．．

『試獣召喚（サモン）！』

喚声に応えて３人の足下に魔法陣が展開して、おなじみの試験召喚獣が顔を出します。

Ｂクラスの２人の召喚獣はそれぞれ剣と槍を構え、瑞希の方は身の丈の倍程の大剣を軽々と持っています。

瑞希の召喚獣を初めて見ましたが、やはり強そうですね．．．．．

そんな3人そっくりの召喚獣ですが、

「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「流石は瑞希。やっぱり腕輪持ちなんだね」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

明久の指摘通りデフォルメされた瑞希には、大剣の他に左手首に綺麗な腕輪をしていました。

「そ、それって！？」

「私たちで勝てるわけないじゃない！」

向こうの2人がそれを見て顔色を変えます。

あー、なんと言いますか、ご愁傷様？（補習室行き的な意味で）

腕輪をしているということはつまり――

「じゃ、いきますね」

瑞希が小さな手をギュッと握り込みます。その動きに合わせるように、瑞希の召喚獣が左腕を敵の方に向けました。

「ちょっと待ってよ！？」

「律子！とにかく避けないと！」

大袈裟なくらいに慌てて横に跳ぶ2人の召喚獣。その直後、瑞希の

召喚獣の腕輪が眩い光を発しました。

キュボッ！

「きゃあぁぁーっ！」

「り、律子！」

左腕からまるでレーザーのような一筋の光線がほとばしった瞬間、逃げ遅れた召喚獣の１体が炎に包まれました。

『Ｆクラス　姫路瑞希　ＶＳ　Ｂクラス　岩下律子&菊入真由美
　数学　４１２点　ＶＳ　１８９点　＆　１５１点　』

ここでワンポイント・レッスン！

テストで４００点以上を取った人の召喚獣は、特殊能力を使える腕輪を装備して出てくるというルールがあるのです。ちなみに、そのような生徒のことを《腕輪持ち》などと呼んだりします。
召喚獣が腕輪をしているということはつまり、特殊能力を持っているということです。
また、腕輪の特殊能力は個人個人で全く異なるものなのですが、瑞希の能力は何でしょう？先程の戦闘を見るに、『光線』でしょうか。

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

そして、先程大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄して大剣を振り下ろす瑞希の召喚獣。防ごうとした相手の武器ごと一刀両断して、勝負は一瞬でカタがつきました。

『い、岩下と菊入が戦死したぞ！』
『なっ！そんな馬鹿な！？』
『姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！』

Bクラスの残り8人に衝撃が走ります。まあ目の前であんなのを見せられたら無理もありません。
というか、瑞希が強すぎます。

「皆さん、頑張ってくださいっ！」

『やったるでぇーっ！』
『姫路さんサイコーッ！』
『姫路さん愛してますーっ！』

瑞希の激励で、Fクラスの士気は大幅にアップします。
それより最後の人、何ドサクサに紛れて告白してるんですか。シバきますよ？

「瑞希、お疲れ様。とりあえず下がっててていいよ」

「あ、はい。ありがとう、鏡護君」

敵の戦意を大幅に削ぐことができたので、瑞希には一旦下がってもらうことにしました。腕輪の特殊能力は、その絶大な威力故に消耗

もまた激しいのです。
既に瑞希を抜きにしても、敵の前線部隊が崩壊するのは時間の問題でしょうからね。

「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

Bクラス側からそんな声が聞こえました。とりあえず狙いは成功ですね。相手を徐々に下がらせて、目的のBクラスに釘付けにするくらいで今日の戦闘は終了するでしょう。これも瑞希のおかげですね。
感謝感謝。

「鏡護、明久、ワシらは教室に戻るぞ」

「ん？なんで？」

戦況を眺めていた僕と明久のところに秀吉がやってきました。
教室の方で何かあったのでしょうか？

「Bクラスの代表のことなんじゃが……」

「うん」

「誰なんだ？」

「あの根本らしい」

「なっ！それは本当か！？」

「根本って、あの根本恭二？」

「うむ」

根本恭二という男は、とにかく評判の悪い男です。噂ではカンニングの常連だそうです。目的の為には手段を選ばないらしく、『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩には刃物は当然装備（デフォルト）』だとか言われています。それ故、彼には《卑怯者》の名前がつけられているのです。

その根本がＢクラス代表ということは、当然何か仕掛けてくるでしょう。用心に越したことはありませんね。

「なるほど。確かに戻っておいた方がいいね」

「雄二に何かがあるとは思えんが、念のためにの」

瑞希に一言報告して、僕と明久と秀吉は何人かを連れて教室へと引き返しました。

―Ｓｉｄｅ　明久

「……うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「まさしく《卑怯者》、だな」

教室に引き返した僕らを迎えたのは、穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムだった。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

それにしても、なんか、根本君って器小さいなぁ・・・・・

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

「雄二がそう言うならいいけど」

なんか微妙に気になる。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのに気付かなかったんだ?」

鏡護が雄二を問い詰めている。

確かに昼休みまでは見慣れた教室だったはずだから、戦闘開始から今までの間にやられたんだろう。

でも、それなら教室にいたはずの雄二が気付かないわけがない。

「協定を結びたいという申し出があってな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと?」

「ああ。４時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前９時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「明久、僕達には瑞希がいるだろう？」

あ、そっか。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力の方が重要になる」

局所的な戦闘になるってことだろうか。それとも、Ｄクラス戦みたいに姫路さんが止めを刺すとか。

「だから受けたの？　姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとってかなり都合が良い。切（ジョーカー）

り札があるとはいえ万全を期したほうが良いに決まって――」

「いや、これはマズいよ……」

これまで沈黙を貫いていた鏡護が、雄二の言葉を途中で遮った。

「何!?」

「どういうことじゃ鏡護?」

「確かに普通に考えたらその協定は僕達に都合の良い内容だよ。雄二の判断も正しいと思う。でも、今回の相手は“あの”根本なんだ……普通なわけがない」

「何が言いたい鏡護?」

「まず、条文の後半。試召戦争に関わる一切の行為についてだけど、その具体的内容は話した?」

「そういえば何も決めてないな」

「……やっぱり。なら、今から言うことを4時過ぎてやったら全部協定違反だよ。教室の修繕、作戦会議、他クラスへの接触、勉強……」

「いやいや、いくらなんでもそれは大袈裟だろ」

「じゃが、相手は根本じゃぞ?」

「やりそうで否定できないね……」

なんと言っても、根本君だからなぁ・・・・・

「それにこれだけ協定違反になる要素が多いってことは、それを利用した罠を仕掛けてくることも充分予測できる」

「「「罠っ！？」」」

「ああ。根本のことだから、ただそれらの行動を起こしただけで協定違反を持ち出してはこないと思うんだ。……僕らが言い逃れもできないような状況にならない限りは、ね」

「つまり、根本はその状況を作り出す罠を用意していると？」

「多分」

「ふむ、なら対策を考えないとマズいな。鏡護、付き合え」

「元からそのつもりだよ」

「それと明久と秀吉は前線に戻ってくれ。向こうでも何かされているかもしれん」

確かに教室がこの調子なら、戦場の方でも何かやられている可能性は充分に有り得る。

「わかった。行こう秀吉！雄二、鏡護、あとはよろしく」

「おう。とりあえずシャープや消しゴムの手配をしておこう」

手を挙げる雄二に背を向けて、秀吉と一緒に教室を飛び出す。
次はどんな姑息な手で来るんだろう。とにかく気を引き締めよう。

「吉井！　戻ってきたか！」

僕らを出迎えてくれたのは須川君。あれ？　部隊は副官の島田さんが指揮をとっているんじゃないんだ。

「待たせたね！　戦況は？」

「かなりマズイことになっている」

「え！？　どうして！？」

向こうから本隊が出てきた様子もないし、戦力的には負けるはずがないのにどうして。

「島田が人質にとられた」

「な！？」

今度は人質か！　卑怯な手段の王道じゃないか！

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする？」

現在、僕の部隊はそのせいで敵と睨み合いになっているらしい。

「……そうだね。とりあえず状況が見たい」

「それなら前に行こう。そこで敵は道を塞いでいる」

須川君が前を歩き、僕が後に続く。
僕の部隊の人垣を抜けると、そこには須川君の言うとおり二人のＢクラス生徒と捕らえられた島田さん及びその召喚獣の姿があった。
そして、そばには補習担当の教師もいる。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

なんだかドラマみたいだ。

「そこで止まれ！　それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

島田さんを捕らえている敵の一人が僕を牽制してくる。
そうか。数少ないウチの女子をただ戦死させるんじゃなく、人質にとって補習室送りをちらつかせ、こちらの士気を挫く作戦か。上手いやり方だ。
このまま攻め込めば、僕らが相手を倒す前に島田さんに止めを刺され、補習室送りにされて辛い思いをさせてしまう。

……問題ないな。

「総員突撃用意ぃーっ！」

「隊長それでいいのか！？」

「須川君、仕方ないよ。戦争に犠牲はつきものなんだ！決して日頃痛めつけられている仕返しなんかじゃない！」

思わず本音を熱弁してしまった僕。そうだ、これは指揮官として必要な判断なんだ！

「ま、待て、吉井！」

あまりの出来事に敵からもちょっと待ったコールがかかる。往生際が悪いな。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「バカだから」

「吉井……殺すわよ」

え？何？どうして人質にされているはずの島田さんから強烈なプレッシャーを感じるの？

「コイツ、お前が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて１人で保健室に向かったんだよ」

なんだってっ！？

「島田さん……」

「な、なによ」

島田さんの顔がほんのり赤くなってる。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「違うわよ！」

恐ろしい。これじゃオチオチ保健室で昼寝もしていられない。

「……ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？これでも心配したんだからね！」

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぷいっと顔を背ける島田さん。

普通ならここは感動する場面なのかもしれない。だけど……

「へっ、やっとわかったか。それじゃ、おとなしく―」

「総員突撃ぃーっ！」

「どうしてよ！？」

「あの島田さんは偽者だ！変装している敵だぞ！」

誰だか知らないけど、変装するべき相手を間違えたね！島田さんが僕を心配するはずがない！むしろ嬉々として僕を殺りにくるに決まってるじゃないか！

「おい待てって！コイツは本当に本物の島田だ！」

狼狽するBクラスの生徒。

「黙れ！見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当に――！」

とりあえず、突撃の号令で動いた須川君達が死にかけ2人を撃破！

召喚獣に止めを刺す！

「ぎゃぁぁぁー……！」

「たすけてぇー……！」

近くにいた補習講師に連行されていく2人。良い気味だ。

さて、残りは――

「皆、気をつけろ！変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

この島田さんモドキだ。

「よ、吉井、酷い……ウチ、本当に心配したのに……」

「まだ白々しい演技を続けるのか！この大根役者め！」

本物の島田さんがそんな台詞を吐くわけがない！

「皆で取り囲むんだ！いくらBクラスでもこの人数でなら勝てるか

ら」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

「包囲中止！コレ本物の島田さんだ！」

こんな嘘に騙されるのは彼女以外有り得ない。

「島田さん、大丈夫だった？くそっ、Ｂクラスめ、なんて卑怯な真似を」

床に座り込む彼女に手を差し伸べる。

「……」

素直に僕の手に掴まり、立ち上がる島田さん。珍しい。

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……」

「教室に戻って休憩するといいよ。疲れているでしょう？」

「……」

「それにしても、卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……」

島田さんの反応がない。なんかやりにくいな。

「あー、島田さん。実はね」

「……なによ」

やっと反応を返してくれた島田さん。

こちらを向いてくれた島田さんに対してお礼の気持ちを込めて、僕の出来る最高の笑顔を作る。

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いていたんだよ？」

殺されかけた。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

午後４時を過ぎて本日の戦闘が終了した後、教室に戻ってきた皆の中に血だるまになった明久の姿がありました。

「明久に何があったっ！？」

「わかりません。気づいたら、廊下倒れてまして……」

「おいおい、まるで散々殴られたあげくに頭から廊下に叩きつけられたような怪我じゃないか！？すぐに手当てをしないと！瑞希、悪いがハンカチか何かを濡らして持ってきてくれ！」

「はっ、はい！」

とにかく何とかしないと。そう思って僕はすぐに瑞希に指示を出しました。

「うっ……」

と、どうやら明久が気が付いたようです。

「……ここはどこ？」

「気が付いたようだな。大丈夫か明久」

「いくら試召『戦争』じゃからといって、本当に怪我をする必要はないんじゃぞ？」

雄二と秀吉が近くに寄ってきます。

「ちょっと色々あってね。それで試召戦争の方はどうなったの？」

ちょっと何かあった程度であのレベルの怪我を負うことはないと思います。

「４時を過ぎたから協定どおり休戦中だ。続きは明日だな」

「戦況は？」

「一応計画通りじゃ。教室前に攻め込んだのじゃが、こちらの被害も少なくはないのう」

まあ、それでも予想の範囲内だからなんとかなるでしょう。

「ハプニングはあったけど、今のところ順調って訳だね」

「うん。ただ、それだけにこれからが本番だろうね」

そう、相手はあの根本なのです。絶対に何か企んでいることでしょう。

「……（トントン）」

ふと気が付けば、康太がそばに来ていました。

今日の康太には情報収集の任務が当てられていた為、戦闘には直接参加せずにいたのです。

「ふむ、Ｃクラスの様子が怪しいだと？」

「……（コクリ）」

雄二に報告する康太の話によると、どうやらＣクラスが試召戦争の準備を始めているとのことです。

「鏡護、どう思う？」

そうですね・・・・

「まず、Aクラスと戦うのが目的ではないはず」

「すると、漁夫の利を狙うつもりか？」

確かにその可能性はあります。疲弊した相手なら戦いやすいですからね。

「ふむ。それならCクラスと協定でも結ぶか。連中も俺達が勝つとは思っていないだろうし、Dクラスをけしかけるとでも言えば難しくないだろう」

「いや。雄二、今Cクラスに行っちゃダメだ」

「なんだ鏡護。どういう意味だ？」

「Cクラスの代表は小山さんなんだよ」

「それがどうした」

「彼女は根本と付き合ってるらしい」

「なにっ！？それは本当か？」

「間違いないと思うよ。僕のところに注文が――ゲフンゲフン」

あ、危なかったです。うっかり秘密のバイトのことをバラしてしまうところでした。

そうなんです。実はそのバイトのおかげで、この学園内の“そうい

う”人間関係について僕が知らないことはありません。

「？まあいい。つまりこれは根本の罠ということか？」

「ああ。まず間違いないだろうね」

「ふむ。しかし例えそうだとしても行かないとな。このままじゃ面倒なことになる」

「そうだね。早く行かないとCクラス代表が帰るかもしれないし」

いえ、おそらく根本の罠である以上それはないですよ明久。

「んじゃあ、行くか」

「うむ。行くのじゃ」

「いや、すまんが鏡護と秀吉は残ってくれ」

「ちょっと待って雄二。まさか……」

「ああ。もし本当に罠だった場合にはさっきお前と考えた作戦を実行しなきゃならんからな」

「ううう……。僕はできれば遠慮したいんだけど……」

「まあそう言うな。じゃあ行ってくる」

そう言って雄二、明久、瑞希、康太の４人が教室を出て行きました。

「ハァ……他人事だと思って……」

「？鏡護は何に気落ちしておるんじゃ？」

その後しばらくして雄二、瑞希、康太の３人が、さらにその十数分後に明久と島田さんが教室に戻ってきました。

あの後教室を出たところで島田さん、須川君と鉢合わせ、一緒に連れて行ったそうです。

そしてやはりＣクラスの件は根本の罠でした。須川君は雄二達を逃がすため、真っ先に盾になったとのこと。須川君、君の勇気ある行動に僕は感動しましたよ。

あと、いったい何があったのかはわかりませんが、島田さんが明久のことを『アキ』、明久が島田さんのことを『美波』と呼ぶようになっていました。２人の仲が少し進展したようで、ちょっと嬉しかったです。

第6問　『対Bクラス電撃作戦！そして忍び寄る魔の手！』（後書き）

あとがき

鏡護　「そういえばこの間、補習の時にしばらく更新が遅れるとか言ってたのに、
　2日連続で次話投稿なんかして学校の勉強は大丈夫なの？」

作者　「……。さあ、試召戦争も2戦目！だいぶ盛り上がってるんじゃないか？」

鏡護　「（あ、スルーした。まいっか）そうだね。でもさ、作者さん……」

作者　「ん？どうした？」

鏡護　「戦場に出してくれたのはいいけど、僕まだ召喚獣を喚んでないよ！？」

作者　「ああ、そのことか」

鏡護　「そのことか、じゃないよ！どうしてなのさ？」

作者　「よく言うだろ？真打は最後に登場するって」

鏡護　「む、確かに……って納得できるかぁっ！」

作者　「チッ！……いいじゃん。次回は全編に渡って鏡護無双になる予定だから」

鏡護　「い、今舌打ちした！……えっ、それほんと？」

作者　「んー、どうしよっかな～？やっぱり止めようかな～？」ニヤニヤ

鏡護　「クッ……生意気言ってすいませんでした。どうかよろしくお願いします」

作者　「フッフッフッ。わかればいいのだよ」

鏡護　「……この下衆がっ！（ボソッ）」

作者　「おや～？何か言ったかね？」

鏡護　「……何でもありません」

作者　「（いやぁ～楽しいねぇ）さて、それでは次回予告に行きましょう！

次回、第7問『怒りの鏡護！解放される天眼の力！（仮）』

を、」

作・鏡　「「お楽しみに～！」」

第7問　『怒りの鏡護！解き放たれた天眼の力！』（前書き）

バカテスト　英語

問　以下の問いに答えなさい。
『ｇｏｏｄ　および　ｂａｄ　の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希・天水鏡護の答え
『ｇｏｏｄ　－　ｂｅｔｔｅｒ　－　ｂｅｓｔ
ｂａｄ　－　ｗｏｒｓｅ　－　ｗｏｒｓｔ』
教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え
『ｇｏｏｄ　－　ｇｏｏｄｅｒ　－　ｇｏｏｄｅｓｔ』
教師のコメント
まともな間違え方で先生驚いています。
ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾にｅｒやｅｓｔを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え
『ｂａｄ　－　ｂｕｔｔｅｒ　－　ｂｕｓｔ』
教師のコメント
『悪い』『乳製品』『おっぱい』

第7問　『怒りの鏡護！解き放たれた天眼の力！』

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、登校した僕達に雄二はそう切り出しました。
ハァ・・・・・。やっぱりやるんですね。

「作戦？でも、開戦時刻はまだだよ？」

確かに現在の時刻は午前８時３０分、開戦予定時刻は９時でしたね。

「Ｂクラス相手じゃない。Ｃクラスの方だ」

「あ、なるほど。それで何をするの？」

「秀吉と鏡護にコイツを着てもらう」

そう言って雄二が鞄から取り出したのは、文月学園の女子制服（冬服）。
赤と黒を基調としたブレザータイプの制服で、他校の生徒にも人気のある逸品です。

・・・・・ツッコみません。ええ、絶っ対にツッコみませんよ？何で雄二が女子の制服を、しかも２着も持っているかなんて。

「それは別に構わんが、ワシらが女装してどうするんじゃ？」

秀吉、君は男性なんですから大いに構って下さい。だから君は女性に見られ・・・・・（ｒｙ

それに僕としてもかなり嫌なのですから・・・・

今この場で話しを聞いた秀吉が賛同して、昨日のうちに話を聞かされていた僕が反対したら、僕がＫＹみたいじゃないですか。

「ああ。秀吉には木下優子として、鏡護にはその付き添いの女子として、Ａクラスの使者を装ってもらう」

「つまり、Ａクラスの使者として偽の圧力をＣクラスにかけるってこと？」

な、なんて珍しいことでしょう！明久が自ら頭を使っています。

「そういうことだ。２人とも、準備してくれ」

「う、うむ……」

「……仕方ない。覚悟を決めるよ」

そうして雄二から制服を受け取った僕達は、その場で着替えを始めます。

「……！！（パシャパシャパシャ！）」

・・・・・何故か康太が指よ擦り切れよといわんばかりのスピードでシャッターを切り続けています。

男の着替えなんて撮っても意味がないと思うのですが。

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

秀吉の台詞に反応して教室を見回すと、何故かクラスメイト達はとても複雑な表情をしていました。

「さぁな?おれにもよくわからん」

「おかしな連中じゃのう」

「そうだね」

秀吉と2人して首を傾げてしまいます。本当にどうしたというのでしょう?

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「はーい」

雄二が先導して、僕達がついて行きます。

「あ、僕も行くよ」

明久が僕達の後を慌てて追いかけてきます。

教室の配置の関係で、FクラスとCクラスはかなり離れています。

そのまましばらく歩き、もうじきCクラスというところで雄二が立ち止まったので、僕達もそれに倣います。

「さて、ここからはすまないが二人だけで頼むぞ、秀吉、鏡護」

Aクラスの使者になりすます以上、Fクラスの明久や雄二が同行することはできません。
よって二人は少し離れた場所から様子を窺うことになります。

「気が進まんのう……」

あんまり乗り気ではない様子の秀吉。やはり優子の姿になって他人を豹(だま)すのは気が引けるのでしょう。僕も同感です。

「そこを何とか頼む」

「むぅ……。仕方ないのう……」

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。お前らならできるはずだ」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達者だからこの役割はわかります。
でも僕は演技なんてしたことがないんですが・・・・・

「はぁ……。あまり期待はせんでくれよ……」

「同じく。ド素人なんだから期待しないでね……」

溜息と共に力なくCクラスに向かう僕達。はぁ、鬱ですねぇ・・・・・

「……行こう」

「……うむ」

秀吉が扉に手をかけてガラガラガラ、と開いていきます。

そして一言。

「静かになさい、この薄汚い豚ども！」

「……木下さん、それは豚に失礼だよ」

いきなり失礼な言葉から演技は始まりました。

秀吉、変わりすぎ．．．．．

「な、何よアンタら！」

正面から高い声。この人がＣクラス代表の小山さんですね。

入ってきて早々、いきなり豚以下にされたら誰だって怒りますよね．

．．．．

「話しかけないで！豚臭いわ！」

「そうだね。環境に悪いよ」

自分たちから入ってきておいてそれはないだろうと思ってしまう僕達の台詞。

「アンタ、Ａクラスの木下と……誰？……まあいいわ。ちょっと点

数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！」

「あれぇ～、負け惜しみ？」

「ふん。私達はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？」

「むしろ教室すら必要ないかも」

「いいわね、それ。貴女達程度は青空教室で充分よ！」

それはもう凄い勢いで失礼なことを言って怒らせていく僕達。
もう冷静に観察してる余裕もないでしょうし、そろそろ終幕といきましょう。

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの」

「よかったね。感謝してよ」

笑顔で外道なことを言う僕。ちょっと楽しいです。

それにしても、演劇部とはここまで出来ないとダメなんでしょうか？
隣で堂々と演技を続ける秀吉を見て、僕はそんなことを考えてしまいました。

「ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！」

「バイバーイ♪」

そう言い残して、靴音をたてながら僕達はCクラスを後にしました。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした表情の秀吉。口調も元に戻ってます。

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「凄かったよ、秀吉」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスから小山さんのヒステリックな叫び声が飛んできました。
作戦の為とはいえ、本当に申し訳ないことをしました。

「作戦も上手くいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「そうだね。行こう」

余計なことに気を取られている暇はありません。あと十分で今日の試召戦争が始まります。

僕達は足早にＦクラスへと向かいました。

＊　　＊　　＊

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛びます。
あの後午前９時よりＢクラス戦が開始されて、僕達は昨日中断されたＢクラス前という位置から進軍を始めました。
雄二曰く、『敵を教室に閉じ込めろ』とのこと。
そんなわけで指示通りに戦闘をしているんですが、ここで一つの問題が発生しました。
瑞希の様子がおかしいのです。
本来は戦線の総司令官を任されているはずの彼女ですが、今日は一向に指示を出す気配がありません。
それどころか何にも参加しないようにしているような節すら窺えます。なにかあったんでしょうか。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

「１対１には絶対になるな！」

そんなわけで、今部隊を指揮しているのは副指令の秀吉と僕。今のところはなんとかやれていますが・・・・・

『左側出入り口、押し戻されています！』
『古典の戦力が足りない！援軍を頼む！』

押し戻された左の出入り口にいるのは古典の竹中先生でした。
マズいです。Bクラスは文系が多いので、強力な個人戦力で流れを変えないと一気に突破されてしまう恐れがあります。
危うい均衡の上にある今の状況では、僕も身動きが取れません。しかし、ここは僕が行くしかないでしょうか・・・・・

「姫路さん、左側に援護を！」

明久からの要請が瑞希に届きます。普段の彼女なら迷わず行くのでしょうが・・・・・

「あ、そ、そのっ……！」

彼女は戦線に加わらず、泣きそうな顔をしてオロオロとしています。
やはり動きません。・・・・・っ、いけない！突破されてしまいます！

「だあぁっ！」

掛け声と共に、人ごみの中へと駆け出す明久。
そのまま左側の出入り口で立会人をやっている竹中先生の耳元でボソッと何かを囁きます。

「っ！！」

すると急に頭を押さえて周囲を警戒するような挙動をとる竹中先生。

「少し席を外します！」

なんとかこれで時間を稼げます・・・・・

「明久！そのまま僕と指揮を代わって！」

「了解！古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！消耗した人は補給に回って！」

明久が代わりに指示を出してくれます。そのまま明久には副指令（仮）として指示を出してもらいましょう。
その間に僕はこっちを・・・・・

「瑞希、いったいどうしたんだい？」

瑞希に声を掛けます。先程から様子がおかしいのは明久でも気づいているはずです。
今は彼女の抱えている事情をはっきりとさせなければ、動きの取りようがありません。

「そ、その、なんでもないですっ！」

ブルブルと大きく首を振る瑞希。その度に彼女の長い髪がふわりと広がります。しかし、そんなにオーバーに反応されては何かあるのがバレバレです。

「そうは見えないよ。何かあったなら話して？それ次第では作戦も大幅に変更する必要があるから」

「ほ、本当になんでもないんです！」

強い否定。ですが、泣きそうな顔は相変わらず。絶対になにかあります。

『右側出入り口、教科が現国に変更されました！』
『数学教師はどうした！』
『Ｂクラス内に拉致された模様！』

右側の方でも動きがありました。しかもまた文系科目に切り替えです。

「私が行きますっ！」

ついに瑞希が戦線に加わろうと駆け出しました。しかし、

「あ……」

急にその動きを止めてうつむいてしまいました。
なんでしょう？何かを見て動けなくなったような――。

瑞希が見ていた方に視線を向けてみます。

その先には窓際で腕を組んでこちらを見下ろしている《卑怯者》――根本の姿がありました。
ここからでは少し遠くてはっきりはしませんが、彼の手元を目を凝らして見ると――

「ッ！！」

見えました。彼の手にしている物が。
それは何の変哲もない、手に入れようと思えば普通に手に入るものですが、逆にいくらお金を出しても買えないものでもあります。
彼が手にしていた物。

それは三日前の放課後に瑞希が恥ずかしがって僕から隠した、あの封筒でした。

――そういうことか。

パチンッ。頭のどこかでスイッチの切り替わる音がした。

昨日の協定の話を聞いた時点でおかしいと思った。あの《卑怯者》が、こちらに有利になるような提案をしてくるなんて。

結局ヤツにはあの時点で既に瑞希を無力化するカードが手元にあったのだ。

であるならば、あの協定のことも合点がいく。瑞希が参加できないことがわかっていれば、あの協定はBクラスにとって圧倒的に有利な条件だからな。

正直やられた、とは思う。合理的でかつ何も失わず、これといったリスクも見当たらない。

――だが、1つだけ。たった1つだけ、ヤツはミスを犯した。

「瑞希」

「は、はい……？」

いつもより強い語気に気圧されたんだろう。瑞希が戸惑っているが、構わず続ける。

「具合が悪そうだからあまり前線には出るな。まだ試召戦争は終わりじゃないから、体調管理もしっかりしろ」

「……はい」

「じゃあ、俺は用があるから行く」

「あ……！」

瑞希が何か言いたそうだったが、無視して走り出した。大事な用事ができたからな・・・・・

「根本……お前には絶望を見せてやるよ……」

そうして俺は左目のコンタクトを外した・・・・・

＊　　＊　　＊

「雄二っ！」

「うん？鏡護か？どう、し……」

教室に駆け込むと、俺を見た雄二がノートに何かを書き込んでいた状態で固まった。

「話がある」

「……わ、わかった。わかったからその殺気を抑えてくれ。それとお前の後ろで明久がノビてるんだが……」

「すまん。……しまった、そういえば忘れていた」

ここに来る途中で明久の首根っこを掴んで連れてきたのだが、どうやら気絶してしまったようだ。
明久を近くに寝かせてから雄二の方に向き直った俺は、改めて話を切り出す。

「戦後の根本の処理を俺に任せてくれ」

「……いいだろう、それくらいはやらせてやる。他には？」

「瑞希を戦線から外して欲しい」

「理由は？」

「言えない」

本来なら少なくとも雄二には話すべきだろうが、今は伏せる。

「どうしても外さないとダメか？」

「ダメだ」

雄二が顎に手を当てて考えている。
たしかに俺は今相当な無茶を言っている。瑞希抜きでのＢクラス攻

略など、俺達には自殺行為にも等しい。もしそれが原因で負けることにでもなれば、その責任を取るのはクラス代表である雄二だからだ。

「……いいだろう。ただし、もちろん条件がある」

「……なんだ」

「姫路が担う予定だった役割をお前達がこなせ。明久を連れてきたということはコイツにも何かさせる気なのだろうが、やるからには必ず成功させろ。いいな」

「もちろんだ。具体的には何をすればいい」

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛けろ。科目は任せる」

「援護は？」

「ない。しかもBクラスの入り口は今の状態のままだ」

「ふむ。ところで、殺ってしまって構わんのだろう？」

「ああ。できるもんなら、な」

「了解した。それなら早速行動に移る」

「頼んだぞ。俺はDクラスに指示を出してくる。例の件でな」

そう言って雄二は教室を出て行った。

「ねぇ鏡護」

すると、今まで黙って状況を見守っていた明久が話し掛けてきた。

「どうした明久」

「鏡護はどうして僕を連れてきたの？」

「今回俺がやろうとしている作戦にはお前が必要不可欠だからだ」

そうして俺は明久に作戦の内容を説明した・・・・・

「……えぇっ！僕そんなことするの！？嫌だよ！」

「頼む、明久。多分これしかヤツらを確実に殺れる作戦がないんだ」

駄々をこねる明久を、俺は何とかして説得しようと試みる。

「さっき雄二には答えなかったが、実は瑞希が根本に脅されてる。お前も戦場で瑞希の様子がおかしかったのには気付いてただろ？」

「う、うん、確かに……ってそうだったの！？」

「ああ。俺は脅されている瑞希に戦闘を無理強いしたくなかった……。お前はどうだ？」

卑怯だと思ったが、俺は取って置きの情報を明久に明かした。これでも動かなければ、本当に俺１人で何とかするしかない。

「……痛そうだよなぁ」

声が聞こえた方を向くと、明久が顔を歪めている。ダメか……

「――よっしゃ！あの外道に目に物見せてやる！」

「あ、明久……」

パチンと頬を叩いて、自らを奮い立たせる明久。

「よし、ならそっちは全てお前に任せる。ちゃんとタイミングを計って出てきてくれ」

「うん！」

「さあ、反撃開始といこうじゃないか！」

そうして明久と別れた俺はBクラスへと向かった。

＊　　＊　　＊

「待たせたな！ここからは俺が行く！」

Bクラスの出入り口に着いた俺は大きな声で皆に告げる。

『誰だ、アイツは！』

『わからん！奴のデータがないぞ！』

『なんだとっ！』

『だが所詮はFクラスだ！俺達の敵じゃない！』

Bクラスの連中にしてみれば、今だ自分の召喚獣を曝していない俺は未知の存在であるらしい。
まさかこんなところで役に立つとはな・・・・・

『天水っ！今までどこ行ってたんだ！？』
『救世主（メシア）だっ！我らの救世主が来てくれたぞ！』
『頼む、Bクラスのヤツらをブッ飛ばしてくれ！』

そして、Fクラスの仲間達からは2割の叱責と8割の激励をもらった。
大丈夫、任せておけ。Bクラスの連中が大手を振っていられるのもここまでだ。

「さて、手始めにそこにいる5人！俺に付き合ってもらおうか！」

『ハッ、Fクラス風情がほざくなよ！　試獣召喚（サモン）！』
『そうよ、返り討ちにしてやるわ！　試獣召喚（サモン）！』
『後悔しても知らねぇぞ！　試獣召喚（サモン）！』
『まあ自業自得だがな！　試獣召喚（サモン）！』
『違いねぇ！　試獣召喚（サモン）！』

「Fクラス天水鏡護だ！いくぞ！　試獣召喚（サモン）！」

俺の足下に魔法陣が現れ、そこから俺の召喚獣が出てくる。
向こうにも5つの魔法陣が出現し、それぞれから召喚獣が姿を現す。

『Fクラス　天水鏡護　ＶＳ　Bクラス　生徒×５
現代国語　１０６４点　ＶＳ　合計　７８２点』

そして彼我の点数が表示された。

『バ、バカな！何だこの点数は！？』

『なんでこんなのがＦクラスにいるのよ！？』

『姫路瑞希よりも上だとっ！？』

『奴は人間かっ！？』

『くそ、これじゃ５人がかりでも勝てねぇ！』

おーおー、驚いてんなぁ。だが、それじゃあただの的だぜ？

Ｂクラスの連中が俺の点数に呆けているうちに自分の召喚獣を操作する。

ちなみに、今の俺は常時天眼の機能が使える状態にある。

そしてたった今召喚獣を喚び出してみてわかったんだが、どういうわけか俺の左目は召喚獣の左目とリンクしているらしい。自分の目の前に敵の召喚獣がいるように“視えて”いるのだから、間違いないだろう。

しかも俺の思考がダイレクトに召喚獣の動きに反映されているところを見ると、神経も繋がっていると思っていいだろう。

俺はまず召喚獣の武器である万年筆をペン先を敵に向けて横に振った。すると・・・・・

ピュンッ――

――ボンッ！

何かが空を切る音がして、一番近くにいた敵召喚獣の頭が消し飛んだ。

『な、何が起きたんだっ！？』

召喚獣を消されたヤツが驚いている。ハハッ、ざまぁみたか。
ちなみに今のは振ったペン先から中のインクを飛ばしたのだ。
この攻撃は1回1回インクをチャージしてから万年筆を振らなきゃならないので、本来なら遠距離からの狙撃くらいにしか使えないのだが。

今のショックでようやく動き始めたヤツらの召喚獣。だが遅い。
俺は左目に意識を集中すると、その『力』を解放する鍵（コード）を口にした。

「複写（トレース）、起動（アウェイクン）。記憶出力（ダウンロード）、槍兵（ランサー）：クーフーリン！」

以前見た「運命」という名前のアニメに出ていた全身青タイツの槍兵の記憶を呼び出す。

瞬間、俺の召喚獣の姿が敵の前から消える。

「……複写（トレース）、終了（オーバー）」

そして俺がそう告げた瞬間、残っていた4体の召喚獣は全て跡形もなく消し飛ばされた・・・・・

一瞬で教室内を静寂が支配する。そして次の瞬間――

『『うわぁぁぁっ！ば、化けもんだぁっ！』』

『『うおおっ！すげぇぇっ！』』

Bクラスの連中が恐慌状態に陥り、Fクラスの仲間達からは大歓声が上がる。

その後も俺は手当たり次第に敵の召喚獣に近づいては薙ぎ払っていった・・・・・

――ドンッ

しばらくして、隣のDクラス側の壁から何かを叩くような音が聞こえた。

「おっ、始めたか」

現在の時刻は、午後2時57分。作戦開始時刻まで後3分だ。

ドンッ！

更にもう一発、同じような音が響く。

「お前らいい加減諦めろよな。昨日から人の教室の出入り口に群がりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？軟弱なＢクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」

「はァ？　ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

ドォンッ！！

さっきよりも音が大きくなった。刻々と開始の時間が迫る。

「そうか？頼みの姫路さんも調子が悪そうじゃないか？」

「お前ら相手に姫路を頼る必要なんてないさ。むしろお前らじゃ役不足だ」

「けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ」

「負け組？それがＦクラスのことを言っているのなら、もうじきお前が負け組代表だよ」

ドォンッ！！！

これで４度目。そろそろか？

「……さっきからドンドンと壁がうるせえな。なにかやってるのか」

「さあな。それにしても人望ないな。余所のクラスから嫌がらせなんて」

「けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「……体勢を立て直すぞ！一旦下がれ！」

「どうした、散々ふかしておいて逃げるのか？」

そして、時計の針が３時を指す！

「あとは任せたぞ、明久、鏡護」

「だぁぁーーっしゃぁーっ！」

ドゴォッ！！！！

豪快な破砕音と共に、明久の召喚獣が壁を打ち壊して姿を現した。

それを確認すると同時に俺も走り出す。

「ンなっ！」

驚く根本の声が聞こえる。
だが、俺は気にせずＢクラスの教室内を疾駆する。

「くたばれ、根元恭二ぃーっ！」

明久を先頭に、Ｆクラスの遊撃部隊が根本に攻撃を仕掛けようとするも、近衛部隊に行く手を阻まれる。
幸い俺の方には注意が向いていないのか、今のところ戦いを挑まれることはないが、時間の問題だろう。
俺と根本の間にはまだ２０メートル程の距離がある。時間にして３秒弱。

俺は躊躇うことなく、最後の『力』を使う為の鍵（コード）を紡ぐ。

「時間統御（クロノス）、起動（アウェイクン）！異能（モード）：凍結（フリーズ）！」

『時間統御（クロノス）』――それは俺が皆に隠した『天眼』の第３の能力。
その名の示す通り、時間を操ることができる。ただし、もちろん無制限に力を使えるわけではない。この能力の使用限界は１０秒だ。
その代わり、１０秒までなら時間の停止も加速も思いのままだ。

『力』を解放した瞬間、周囲の時間が止まる。
そして、俺は止まった時間の中を目標まで一気に駆け抜ける。

「時間統御（クロノス）、終了（オーバー）」

時が再び動き出す。

「なっ！どうしてお前がここにいる！？」

『『っ！』』

突然背後に現れた俺に根本が、次いで教室内にいた全ての人間が驚く。

「今はそんなことはどうでもいい。……Ｆクラス天水鏡護」

「キ、キサマ……！」

「……Ｂクラス根本恭二に英語勝負を申し込む」

「クッ、クソォォーッ！」

「――試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　天水鏡護　ＶＳ　Ｂクラス　根本恭二
英語　１２８５点　ＶＳ　２１４点』

俺の召喚獣が神速の勢いで肉薄して万年筆を一閃すると、根本の召喚獣の胴体に大きな風穴が開いた。

そして今ここに、Ｂクラス戦が終結した。

第7問　『怒りの鏡護！解き放たれた天眼の力！』（後書き）

あとがき

作者　「まさに鏡護無双だったな」

鏡護　「当たり前だ。瑞希を脅すヤツに容赦などいらん」

作者　「おお、怖っ！というか、ほんと性格変わりすぎだよね」

鏡護　「そうか？」

作者　「だって、いつもの印象だとなんか気弱そうっていうか」

鏡護　「……よくわからん」

作者　「まあいいや。そういえば終わったな、Ｂクラス戦」

鏡護　「確かに戦いは終わったが、全てが終わったわけじゃない」

作者　「そうだっけ？」

鏡護　「……まだ根本のヤツへの制裁が残っているだろう？」

作者　「ああっ！そうだった！……忘レテタワケジャナイヨ？」

鏡護　「なぜカタカナなんだ。……で、次回は？」

作者　「うむ、Ｂクラス戦の全ての後始末をつける！」

鏡護　「それは楽しみだな」

作者　「ちょっぴりムフフ、なイベントもあるよ♪」

鏡護　「んなっ！どういうことだ！」

作者　「それでは今日はこの辺で。次回予告！

次回、第８問『《卑怯者》の末路と、ねぇコレなんてラブコメ？（仮）』

を、よろしくお願いしま～す！」

鏡護　「おいっ！無視するな！話は終わってないぞ！……

第8問　『《卑怯者》の末路と、ねぇコレなんてエロゲ？』（前書き）

バカテスト　保健体育

問　以下の問いに答えなさい
『女性は（　）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え
『初潮』
教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え
『明日』
教師のコメント
ずいぶんと急な話ですね。

天水鏡護の答え
『エッチなのはいけないと思います！』
教師のコメント
これはテストですから、真面目に答えてください。

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が１．５ｋｇ に達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均１２歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに

影響される』
教師のコメント
詳し過ぎです。

第8問　『《卑怯者》の末路と、ねぇコレなんてエロゲ？』

「明久、随分と思い切った行動に出たのう」

終戦後、Ｂクラスに入って来た秀吉が明久に声を掛けていた。

「うぅ……。痛いよう、痛いよう……」

明久の方はと言うと、血だらけになった両手を抑えて呻いている。いくら作戦の為とはいえ、やはり少々無理をさせ過ぎてしまったようだ。

「なんとも……お主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もっと褒めていいと思うよ」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

明久、正解だ。

それに校舎の壁を壊してしまったのだから、問題にならないわけがない。明久の放課後の予定は先生方との生活指導面談（ハートフルコミュニケーション）で埋まってしまったことだろう。

「ま、それが明久の強みだからな」

そこへ雄二が歩み寄って、明久の肩をバンバンと叩く。

明久はバカが強みと言われてショックを受けていた。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

「……」

先程までの強気が嘘のように力なく床に座り込んでいる根本に、雄二が声を掛ける。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に周囲の生徒達がざわつき始める。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここは通過点に過ぎない」

雄二の言葉にＦクラスの面々は納得がいったのか、それぞれに頷いている。

当然だ。俺達が目指すのは頂点だけなのだから。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問う。

さあ、楽しい楽しい制裁（パーティータイム）の時間の始まりだ。

俺が雄二の方に目線を送ると、雄二は何も言わずに首を縦に動かした。

「条件？それはお前さんだよ、《卑怯者》」

「俺だと？」

「お前さんには散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったからな」

「チッ……」

「Bクラス諸君、お前達に特別チャンスをやろう」

俺は根本を無視してBクラスに語りかける。

「Aクラスに行って『試召戦争の準備が出来ている』と宣言してこい。そうすれば今回の設備については見逃してやる。ただし、宣戦布告はするな。宣戦布告すると戦争は避けられなくなるからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えろ。いいな？」

Bクラスの連中が再び騒ぎ出すが、それも無視する。

「……それだけでいいのか？」

訝るような根本の声。

んなわけがあるか。世の中そんなに甘かねぇよ。

「ただしBクラス代表が『コレ』を着て言った通りに行動してくれたら、だがな……」

そうして俺は今朝自分が着せられた女子の制服を見せた。

「それにそうだな。せっかくだから、ついでにその恰好のまま写真撮影をしてもらおう」

さらに俺は追い打ちとして、笑顔で死刑宣告を言い放つ。

「バ、バカなことを言うな！どうしてこの俺がそんなふざけたことを……」

当然拒否しようとする根本。しかし――

『Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！』

『任せて！　必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの仲間達は快く協力してくれるようだ。これだけで根本が今までどのような行動を取ってきたのかがよくわかるな。

「んじゃ、決まりだな」

「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅっ！」

「とりあえず黙らせました」

「うむ。ご苦労」

Bクラスの男子の1人が根本の腹部を拳で打ち抜いて沈めた。

それを確認した俺は明久に声を掛けた。

「おい明久、コイツの着付けを頼んでもいいか？」

「うんっ！任せてよ！」

さっきまで落ち込んでいた明久は、ストレスの発散先が見つかったのが嬉しいようで生き生きしている。

「う、うぅ……」

ん？根本のヤツが目を覚ましそうだな・・・・・

「チェストッ！」

ゴスッ！

「ぐはっ！」

念の為鳩尾に1発叩き込む。これでもうしばらくは動かないだろう。

「それじゃ、後は任せたぞ」

剥ぎ取られた根本の制服を手に取ると、ゴソゴソとポケットを漁る。確かこの辺だったはず・・・・・

「……あったあった」

見覚えのある封筒を取り出し、自分のポケットに入れた。

さて、残った制服はどうするか？――ふむ、未練が残ってはいかんな。折角だ、根本には家に帰るまで女子制服の着心地を楽しんでも

らうとしよう。

そうして俺は焼却炉にヤツの制服を放り込んで、Ｆクラスの教室へと向かった。

＊　　＊　　＊

俺は瑞希の鞄に封筒を戻す為、教室に戻ってきた。

「さて、落し物は持ち主に返さんと――っ！？」

フッ――

扉を開けて中に入ったところで、強烈な立ち眩みが俺を襲った。

クソッ、よりにもよってこんなときにっ！

Ｂクラス戦の最後に使った力『時間統御（クロノス）』には、その絶対的性能故に、以前少し触れたと思うが（※第２問参照）ペナルティが存在する。

――そのペナルティとは、極度の疲労と全身の筋肉痛。

使用した時間次第ではあるが、最短１時間、最長で半日の間、眠っていないと回復しない程の激しい疲労と、丸一日は安静にしていなければならない筋肉痛が残る。

しかもそれらは一様に使用直後に来るという訳でもなく、それぞれが時間差で来たりする。

今回はどうやら疲労だけが先に出たらしい。

目の前が真っ暗になり、俺はそのまま意識を手放した・・・・・

――ポタ、ポタ

んっ？

どれくらいの時間、意識を失っていたのか。
自分の顔に何かが当たったような気がして、俺の意識は浮上していった。

「……ここはどこだ？」

自分の置かれている状況がわからず、声が漏れる。

「……っ！気が付いたんですか！？」

自分のすぐ近くから、誰かが驚く気配と声がした。
ゆっくりとそちらに顔を向けると――

「……っ、グスッ、よ、よかった……。もしかして起きないんじゃないかと……」

涙で瞳を濡らした瑞希の姿があった。

目に映った光景が理解できず、思わず慌てる。

「な、え、えぇっ!?なんで瑞希が泣いてるんだ!?」

横たわっていた体を勢いよく起こす。

そうして改めて見た瑞希は、畳にお姉さん座りという姿勢だった。

ポクポクポク・・・・・チーン!

ハッ!?まさか俺は今の今まで瑞希に膝枕をされていたのか!?しまった、もうちょっと堪能しておけば――

ガバッ!

「ほわぁぁぁっ!」

なんともしょうもない欲望に染まりかける思考を遮るかのように、突然瑞希が抱きついてきた。

・・・・・思わず変な声を出しちまった。恥ずかしい。

「あ、ありがとう、ございます……!わ、私、ずっと、どうしていいか、わかんなくて……!」

と、そんな俺に構う様子もなく瑞希が喋りだす。

「あ～、瑞希?とりあえず落ち着け。それとお前に泣かれると俺が

困る」

ナデナデ・・・・・

「は、はい……／／／／」

とりあえず頭を撫でて落ち着かせながら、抱きついている瑞希を引き離す。

女の子特有の柔らかい（特に胸の辺り）身体といい匂いをこれ以上身近で感じていたら、俺の理性がどうにかなってしまう。

名残惜しく思わなくもないが、それはそれ、これはこれだ。

「いきなりすいません……」

そう言って涙を拭う瑞希。

「大丈夫だから気にするな。」

「はい……。あの……」

「ん？どした？」

「手紙、ありがとうございました」

俯きがちに小さな声で言う瑞希。

「別に大したことはしてないさ。たまたま根本の制服から瑞希の手紙が出てきたから戻そうとしただけだよ」

「それってウソ、ですよね？」

「……そんなことはないぞ？」

瑞希に図星を指されて一瞬言葉が遅れた。

「フフッ。やっぱり鏡護君は優しいです。昔から私が困っているときには必ず助けに来てくれましたし……」

「なっ！昔の話は今は関係ないだろう！」

恥ずかしくなって思わず大きな声が出てしまう。

「そんなことありません。だって鏡護君がいつも“そう”だったから私は……」

瑞希が何か言っていますが、後ろの方は声が小さ過ぎて聞き取れなかった。

・・・・・なぜだろう。なんだか妙にむずがゆさを感じる。その空気に耐えられなくなった俺は、話題を逸らそうと試みる。

「そ、そうだ！その手紙、上手くいくといいな！」

「あ……。はいっ！頑張りますっ！」

そんな俺に応えたのは、瑞希の満面の笑み。その笑顔を見て思った。瑞希は本当にその人の事が大好きなのだと。そして、やはり俺は名も知らぬその男のことを羨ましく思う。

「で、いつ告白するんだ？」

下世話だとは思ったが、聞いてみた。これくらいはいいよな?

「え、ええと……全部が終わったら……」

瑞希は真っ赤になりながらもそう答えた。

「そっか。それなら手紙よりも直接口で伝えた方がいいかもな」

「そ、そうですか?鏡護君はその方が好きですか?」

何故俺に聞くんだ?・・・・・瑞希の意図がわからないが、とりあえず答える。

「あ、ああ。俺なら直接顔を合わせて言ってもらえた方が嬉しいな。」

「本当ですか?今の言葉、忘れないでくださいね?」

「え?あ、ああ」

瑞希はまるで金言を得たかのよう嬉しそうにしていた。

「……そういえば今何時なんだ?」

今更ながら時間が気になる俺。

「今はもう6時を過ぎたところですよ」

「なにっ！？」

だいぶ時間が経っていたようだ。見れば、外も暗くなっている。

「……まさか瑞希はずっと付き添っててくれたのか？」

「そうですよ」

「それは悪いことをしたな。すまない……いや、ありがとう、と言うべきかな？」

「はい！どういたしまして」

「……ふむ、そうだな。お礼といっちゃなんだが、送って帰ろう。どうだ？」

「へっ？……いいんですか？」

「ああ。遠慮なんかするなよ？」

「はいっ！それじゃあお願いします。」

「お任せください、姫」

ちょっと冗談めかしてそう言うと、瑞希も笑ってくれた。

やっぱり彼女には涙ではなく笑顔が似合う。そう思う俺だった。

第8問　『《卑怯者》の末路と、ねぇコレなんてエロゲ？』（後書き）

あとがき

作者　「これで本当にＢクラス戦終了～！」

鏡護　「うむ。根本はさぞ素晴らしい経験が出来ただろう」

作者　「ところで女装男子の写真なんか撮ってどうするの？」

鏡護　「無論、写真集を作る。発行部数は３部の予定だ」

作者　「３冊？その用途は？」

鏡護　「一応鑑賞用、保存用、脅迫用、だな」

作者　「誰も見たがらないと思うし、保存する意味もわからないけど、脅迫用って？」

鏡護　「次に根本が何かやった時にコレで脅す」

作者　「……根本君は本当にご愁傷様です」

鏡護　「それより作者。後半のアレはなんだ」

作者　「アレ？……ああ、アレね」

鏡護　「そうだ。……どうして瑞希とあんなことになった？」

作者　「あるぇ～？そんなこと言っちゃって、ほんとは嬉しかったんだろ？」

鏡護　「っっ／／／／あ、あれはだな。そ、その……」

作者　「真っ赤になっちゃって。このムッツリが」

鏡護　「……。……お前を殺して俺も死ぬ……」

作者　「……って、えぇーっ！？ちょっと待て！早まるな！」

鏡護　「うるさいっ！大人しく俺に殺されろっ！」

作者　「イヤだよっ！誰がハイそうですか、なんて答えるかっ！」

鏡護　「くっ！どうすればいいんだ！？」

作者　「どうもしなくていいよ！……もう次回予告いこうかな……。コホンッ！

次回、第９問『ｖｓＡクラス？　脅迫？いいえ交渉です（仮）』

を、お楽しみに～！」

鏡護　「うおぉーーっ！俺はどうすれば……

第９問　『対Ａクラス宣戦布告と恋する乙女達の密談』（前書き）

バカテスト　生物

問　以下の問いに答えなさい。
『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え
『？脂質　？炭水化物　？タンパク質　？ビタミン　？ミネラル』
教師のコメント
流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え
『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧き水』
教師のコメント
それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え
『初潮年齢が１０歳未満の時は早発月経という。また、１５歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに１８歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』
教師のコメント
保健体育のテストは１時間前に終わりました。

天水鏡護の答え
『？両親　？幼馴染　？友人　？恋人　？本』
教師のコメント
不正解ですが、人間関係を大事にする君らしい解答ですね。

第9問　『対Aクラス宣戦布告と恋する乙女達の密談』

あの後、瑞希を家まで送っていった僕は、家に帰るとすぐにベッドに潜り込み、そのまま深い眠りにつきました。
翌日は起きようとすると全身に激痛が走って一歩も動けなかった為、学校を欠席しました。反動の筋肉痛が出たのです。

そして補給テストも終わった3日後の朝。
いよいよ残るはAクラス戦のみとなった僕達は、もうじきお別れになるだろうFクラスの教室で最後の作戦会議をしています。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

雄二が人に素直に頭を下げるなんて珍しいですね。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

ですがこういう風に振舞えるからこそ、リーダーとしては一流なんですよね。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝つ！勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を教師どもに突き付けるんだ！」

『『おおーっ！』』

『『そうだーっ！』』
『『勉強だけじゃねぇんだーっ！』』

今やFクラスの心は1つになっています。これこそが僕達の強さの源です。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を着けたいと考えている」

僕を含めたいつものメンバーは先日話を聞いていたから驚きませんでしたが、そうでない皆は当然の如く驚いています。

『どういうことだ？』
『誰と誰が一騎打ちするんだ？』
『それで本当に勝てるのか？』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がパンパンと手を叩いて皆を落ち着かせます。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表霧島翔子さんと、Fクラス代表坂本雄二。クラス間の戦争を代理で行うのですから、代表同士が戦うのは当然です。

「そんなっ！バカの雄二が勝てるわけなぁぁっ！？」

口には出しませんでしたが、正直僕も明久と同意見です。雄二には何か秘策でもあるんでしょうか？そこら辺は僕達も聞いてないのでわかりません。

・・・・・というかですね、雄二。冗談にしても友人に向かってカッターを投げるのは止めてください。

「次は耳だ」

・・・・・どうやら本気だったようです。

「まぁ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

あれ？そこを認めてしまうんですか？

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

確かにそうでした。ですが実際には、僕達はこうして勝ち進んできていますね。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

最初は誰もが勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いてきた雄二の言葉。

例え無理に思えても、その言葉を否定する人はもうこのクラスにはいません。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今こそ皆に見せてやる」

『おぉぉーーーっ!!』

1つになったクラスの声。それは皆が雄二を信頼している証です。

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

・・・・・日本史？

霧島さんが日本史が苦手と言う話は聞いたことがありませんし、雄二が得意だと言うのも聞いたことがありませんが、どうしてでしょう？

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は１００点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり？ますます雄二の考えがわかりません。

「でも、同点だったら、きっと延長戦だよ？そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二に厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

明久の言う通りです。

今のところ、雄二が霧島さんに勝利するイメージは全く想像できません。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

「？？それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

確かに、霧島さんなら教師の監視の目がある中での妨害程度で集中力を乱すことなどないでしょう。

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしてもいいじゃろう？」

クラスの皆も、そしてもちろん僕も秀吉の言葉に頷きます。

「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。今回俺がこの方法を採った理由はただ1つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると俺が知っているからだ」

ある問題、ですか。何でしょう？

「その問題は――――『大化の改新』」

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと――――――何年に起きた、とかかな？」

「ビンゴだ鏡護。その年号を問う問題が出たら、俺たちの勝ちだ」

なるほど。ちなみに大化の改新が起きたのは６４５年ですね。

「大化の改新が起きたのは、６４５年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

・・・・・雄二、その明久が思いっきり顔を明後日の方角に向けてますよ？

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とはおさらばって寸法だ」

雄二の作戦は理解しました。

しかし、件の問題が出なかったら前提から崩れてしまいます。そこは運頼みですか・・・・・

ところで、さっきからずっと気になっていたんですが――

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路？」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

そうなんです。さっきから雄二は霧島さんのことを『翔子』とか『アイツ』とか呼んでいます。余程親しい間柄でなければ、そんな呼び方はしません。

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「総員、狙えぇっ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

男子生徒全員が一斉に両手に上履きを抱えて投擲の構えを取ります。
なんて無駄な団結力なんでしょうか。

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

しかもいつの間にか明久が隊長になっています。

「くそっ、なら道連れを増やしてやる！おい皆、鏡護は姫路、木下姉弟と幼馴染だぞ！」

『『なにぃーっ！？』』

瞬間、クラス全員が驚愕の声を上げました。

「攻撃部隊を半分に分けて鏡護にも攻撃用意！！」

『『サー、イエッサー！』』

途端にこちらにも向けられる殺気。

「ちょっ！？雄二、なんてことしてくれたんだ！」

「うるさい！俺だけがやられてたまるか！」

もう雄二はただの八つ当たりですね。酷いです。

「あの……鏡護君？」

「瑞希？どうかした？」

「鏡護君は霧島さんが好みなんですか？」

「うーん。確かに美人だとは思うけど……」

「……」

「えっと、瑞希サン？どうして君は僕に向かって攻撃態勢を取るのかな！？ってか島田さんもなんで明久に向かって教卓なんてものを投げようとしてるのさ！？」

あれはどう見てもオーバーキルです。

「まぁまぁ。落ち着くんじゃ、皆の衆」

パンパンと手を叩いて、秀吉が仲裁に入ってくれました。ありがとう、秀吉。持つべきものは理解ある幼馴染ですね。

「む。秀吉は雄二と鏡護が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」

・・・・・ああ、確かに。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

僕達の視線が一人に集中します。

「な、なんですか？もしかして私、何かしましたか？」

慌てている瑞希。大丈夫です、あなたは何もしていません。何もしていませんが、何かされる可能性が高いだけです。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

昔は《神童》などと呼ばれていた雄二が間違えるとは、珍しいこともあったんですね。

「アイツは一度教えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

なるほど。しかし今回はそれを逆手に取るというわけですね。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

『『システムデスクだ！』』

＊　　＊　　＊

「一騎討ち？」

「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎打ちを申し込む」

ただ今、Ａクラスで宣戦布告中です。ちなみにこちらのメンバーはいつもの仲間達です。

「うーん、何が狙いなの？」

現在雄二との交渉のテーブルに着いているのは、秀吉の姉で僕の幼馴染の優子です。
そう、何故かクラス代表の霧島さんではなく、優子なんです。

「もちろん、俺達Ｆクラスの勝利が目的だ。」

まあ優子が疑うのも当然です。最下位クラスである僕達が、一騎討ちで学年主席の霧島さんに挑もうと言うのですから。何か裏があると考えないはずがありません。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからといってわざわざリスクを犯す必要もないかな」

「賢明だな」

しかし、ここまでの進行は予定通り。ここからが交渉の始まりです。

「それよりCクラスはどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったわよ？ああ、一つ面白い話が聞けたわね」

ゾクッ！

マズいです。頭の中で警鐘がガンガン鳴っています。

「あー、その、優子サン？その件について後でお時間をいただいても？」

戦争なんかより自分の命の方が大切です。

「鏡護、何を言ってるんだ？」

不思議そうに雄二が首を傾げています。

「ごめん。これは僕の命に関わるんだ。説明は後でするから」

「そ、そうか……」

さあ、優子の返答は？

「いいわ。それじゃあ後でじっくり話し合いましょう？」

それを聞いて、僕はホッとしました。とりあえず釈明する機会はくれるようです。

「それなら、Ｂクラスとやりあう気はあるか？」

「Ｂクラスって……、昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

意地悪く雄二が笑います。

「でも、ＢクラスはＦクラスと戦争したから、３ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

試召戦争の決まりの一つ、準備期間。
戦争に敗北したクラスは３ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことができません。
これは負けたクラスがすぐさま再選を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めです。

「知っているだろ？実情はどうであれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』となっていることを。規約には何にも問題もない。……ああ、Ｂクラスだけじゃなくて、Ｄクラスもな」

そう、これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法です。

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

まあこの交渉の仕方は、どう見ても悪役（ヒール）ですからね……

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「え？本当？」

優子の返事を聞いて明久が声を上げてしまいます。
折角の交渉がふいになったら、明久のせいですよ？

「だって、あんな恰好をした代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

なんとも多分に私情の入った理由でした。
僕もそっちの立場なら絶対に嫌ですけど。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、お互い5人ずつ選んで、一騎討ち5回で3回勝った方が勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「う……」

流石は優子。そのあたりは抜け目がありません。

「なるほど。こっちから姫路や鏡護が出てくる可能性を警戒しているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて瑞希や鏡護が絶好調だったら問題次第では万が一があるかもしれないし」

そう言ってこちらに視線を向ける優子。

幼馴染なんですから、当然僕のことも知っています。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ」

これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す優子。

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

と雄二のあっさりとした返事が。

とりあえず妥協点、といったところですね。

「ホント？嬉しいな♪」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

こちらにしてみれば当然の主張です。

このままではこちらにとって少し不利でしたからね。

「え？うーん……」

またもや悩む優子。

クラスを代表して交渉のテーブルに着いたのですから、慎重になっ

てますね。

「……受けてもいい」

「ぅわぁ！」

明久が突然大きな声を出しました。な、何事ですか！？

「……雄二の提案を受けてもいい」

突如現れた静かで、聞き覚えのある凛とした声。
いつの間にか霧島さんが近くに来ていました。
まさか、気配を消すことが出来るとは驚きです。

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

明久の返事に頷く霧島さん。
そのまま無言で雄二を見た後に姫路さんを値踏みするかのようにじっくりと観察します。
そして、雄二に顔を向けて言い放ちます。

「……負けた方は何でも１つ言うことを聞く」

・・・・・これは、色々と問題があるんじゃないでしょうか？主に

瑞希に、ですが。

「……（カチャカチャ）」

「ムッツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！」

何故かものすごい勢いでカメラの用意を始める康太。

それを見た明久が止めに入ります。

・・・・・というか、康太がカメラを準備する＝僕達の負け、というのはいつ決まったんでしょうか。

「じゃ、こうしよう？勝負内容は５つのうち３つをそっちに決めさせてあげる。その代わり２つはうちで決めさせて」

まあ、無難な妥協案でしょう。

（姫路さん、いいの？）

（え？何がですか？）

（何が、って。もし僕達が負けちゃったら姫路さんは……）

（何の事だかわからないですけど、きっと大丈夫ですよ）

（でも、もし負けたら、姫路さんは霧島さんに――）

明久が瑞希と小声で話しています。確かに僕もちょっと心配です。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

雄二があっさりと決めてしまいました。本当に大丈夫ですか？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない。」

自信満々のようですが、そこまで勝利を確信しているのでしょうか。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。１０時からでいいか？」

「……わかった」

「よし。交渉は成立だ。教室に戻るぞ」

「そうだね。皆に報告もしなくちゃいけないし」

そうして優子に話がある僕を残して、雄二達は先にＡクラスを去ろうとします。そこへ・・・・・

「瑞希。悪いんだけど、あなたとも話したいことがあるから少し残ってくれる？」

はて？何故か優子が瑞希を呼び止めました。

「優子ちゃん？……わかりました」

多少疑問に思いながらも、瑞希はその場に留まります。

「どうした優子。瑞希も関係があるのか？」

とりあえず疑問をぶつけてみることにします。

「いいえ。瑞希にはアンタの話とは別件で用があるの」

僕とは別の用事？・・・・・よくわかりません。

「じゃあ、とりあえず僕からでいいかな？」

「ええ。どうぞ」

わかりませんが、そういうことなら自分の用件をさっさと済ませてしまおうと思って優子から許可を取ります。

「まずはごめんなさい。Cクラスの件は作戦だったとはいえ、優子には不快な思いをさせちゃっただろうし」

「そうよ。どうしてか私がCクラスを豚呼ばわりした高慢女ってことになってたんだからね」

「うん。ごめん。秀吉と一緒になって煽った僕にも責任はあるよね」

「本当ならこの場で全身の関節を逆に曲げてあげてもいいんだけど、条件付きで許してあげないこともないわ」

さらりと恐ろしいことを言われましたが、なんと優子から救いの手が。

「……条件を聞かせてください」

僕には選択肢など存在しません。迷うことなく命が助かる道を選びます。

「試召戦争で私と戦いなさい」

「へっ？」

「だから、この後の試召戦争で私と戦って」

「えっ、それだけ？」

驚きました。まさかそんな軽い条件でいいなんて。

「もちろんまだあるわよ？私と戦って、鏡護が勝てたらこの件は不問にしてあげる。その代わり私に負けたら１つ言うことを聞きなさい」

・・・・・ですよね～。まあそんなことだろうとは思いましたが。

「わかった。その条件を呑むよ」

「決まりね。じゃあアタシは瑞希との話があるから、アンタは帰りなさい」

「わかった。それじゃ、また後で」

そうして優子と別れ、僕はＦクラスへ戻りました。

―Ｓｉｄｅ　瑞希

「……さて、瑞希。待たせて悪かったわね」

鏡護君を見送った優子ちゃんが私の方に向き直ると、そう切り出しました。

「大丈夫ですよ。それより、私に話って何ですか？」

私には思い当たる節がなかったので、素直に優子ちゃんに聞いてみます。

「話っていうのはね、瑞希。鏡護のことよ」

「鏡護君のこと、ですか？」

「ええ、そうよ」

まだ彼女の言いたいことがわかりません。

「それって――」

「単刀直入に聞くわ」

私の言葉を遮って優子ちゃんが“それ”を口にしました。

「瑞希。あなた――鏡護のことが好きなんでしょ？」

「ふぇっ！？そ、それは――」

「ちなみに誤魔化しても無駄よ。この間の昼食会の時に確信したから」

「うぅ……」

咄嗟に誤魔化そうとした私は、彼女に機先を制されて何も言えなくなります。

「さあ。正直に話して頂戴」

そう言って、優子ちゃんは私に『答え』を求めてきます。

私は優子ちゃんの真意を知ろうと思い、彼女の目を見ました。

――彼女の目は真剣そのものでした。その目は私に一切の言い逃れなど許さないと言っているようです。

そして、私は彼女のそんな瞳を見ているうちに、“あること”に気が付きました。

そうか、優子ちゃんも“そう”なんですね・・・・・

それがわかってしまった私は、彼女には自分の素直な気持ちを打ち

明けなければダメだと思いました。

「……そうです。私は鏡護君のことが大好きです」

「……やっぱりね」

「でも、それは優子ちゃんも同じですよね？」

「っ！？……はぁ、そりゃわかっちゃうわよね」

「はい」

やっぱり私の考えは当たっていました。同時に、彼女の考えていることもわかりました。

「先程の鏡護君とのお話、優子ちゃんは自分が勝ったら鏡護君に告白するつもりですね？」

「っ！？……驚いた。それもバレちゃうんだ」

「はい。もしかしたら、くらいのつもりだったんですが」

「うん。それも正解。それで瑞希。それを知ったあなたはどうする？いえ、どうしたい？」

「……私は――鏡護君のことは諦めたくありません。……実は私も、今回の試召戦争が終わったら鏡護君に告白するつもりでした」

「……そうだったんだ」

「はい。……だから、優子ちゃんが告白する時は私も鏡護君に告白しますっ！」

「そう……って瑞希、それ本気！？」

「はい！私は本気です！」

「……なんか瑞希には驚かされっぱなしね。……だったらいっそのこと、２人して鏡護に面倒見てもらっちゃいましょうか♪」

「えっ！？……いいんですか？」

「そりゃ、私もちょっとは不満だけどね。でも私も瑞希もお互いに譲る気はなさそうだし、私は瑞希だったら許せちゃうわ」

優子ちゃんの提案した未来を想像してみた私は、確かにそれもいいかも、なんて考えてしまいました。

「……そうですね。私も優子ちゃんだったら許しちゃうと思います」

「ふふっ」

「ははっ」

そうして私達はお互いに顔を見合わせると、どちらからともなく笑い出しました。

ひとしきり２人で笑った後、私は優子ちゃんに言いました。

「それじゃあ鏡護君と戦う時だけ、こっそり優子ちゃんを応援しますね」

「ありがとう。瑞希の応援があれば百人力よ」

「はいっ！お互い頑張りましょうね！」

「ええ」

最後に優子ちゃんと固く握手を交わして、私はＡクラスを後にしました。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第9問　『対Aクラス宣戦布告と恋する乙女達の密談』（後書き）

あとがき

作者　「は～い、今回もスペシャルゲストをお呼びしてます！正ヒロインのお2人です！」

瑞希　「よろしくお願いします」

優子　「よろしく」

作者　「え～、早速ですがお2人にはお聞きしたいことがあります」

2人　「「何でしょう（かしら）？」」

作者　「ぶっちゃけ主人公ハーレムルートってどうよ？」

瑞希　「えーっと、私としては2人で決めたことだから特に気にしてませんけど」

優子　「私もよ。瑞希とお互いに納得しあったんだから、それでいいの」

作者　「え～？もっと2人でドロドロの愛憎劇を期待したんだけど」

瑞希　「私達に限ってそれはないですよ。……というか昼ドラの見過ぎじゃないですか？」

優子　「そうね。私達は互いに互いの幸せをちゃんと願っているも

の」

作者　「なんか信じられん。……では次にお2人が鏡護を好きになったきっかけは？」

瑞希　「私は小学生の時にクラスで苛められてたところを助けてもらって……／／／／」

優子　「私は……そうね。安心して自分の素を見せられるから、かしら／／／／」

作者　「おおーっ！なんかいかにも青春、って感じですね！」

瑞希　「ち、茶化さないでくださいよぅ」

優子　「そ、そうよ」

作者　「はいはい、ご馳走様でした。それでは次回の内容ですが」

瑞希　「Aクラス戦スタート、ですね」

優子　「私と鏡護のバトルがあるわね」

作者　「台詞盗られた……グスン」

瑞希　「……あれっ？作者さんが落ち込んじゃいましたよ？」

優子　「いいのよ、そんな奴放っとけば。それより次回予告、やりましょう？」

瑞希　「わかりました。それでは……」

２人　「「次回、第１０問『Ａクラス戦開幕！因縁に終止符を！（仮）』

を、よろしくお願いしま～す♪」」

第１０問　『Ａクラス戦開幕！全ての因縁に終止符を！』

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はここ数日の戦争でも大変お世話になっていた、学年主任兼Ａクラス担任の高橋洋子先生が立会人を務めてくださるようです。
ちなみに高橋女史は知的な眼鏡とタイトスカートからスラリと伸びる脚線美が素晴らしい、とても綺麗な女性（ひと）です。

「ああ」

「……問題ない」

一騎討ちの会場はＡクラスということになりました。確かにこちらの方が広くていいですからね。

「それでは１人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

Ａクラスからは優子が出てきました。それならば――

「僕がやるよ」

約束通り僕が相手になりましょう。

「科目はどうしますか」

「じゃあ、総合科目で……」

「ちょっと待って」

教科を伝えようとしたところで、優子が割り込んできました。

「？……どうした優子？」

「ごめんね、鏡護。秀吉、ちょっと話があるんだけど」

秀吉？・・・・・・っ！？ま、まさか！？

「なんじゃ、姉上」

「アンタ、Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

・・・・・やっぱりそうでしたぁーーっ！

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

ダメだ秀吉っ！今優子について行ったら君は・・・・・！

『姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴むのじゃ？』

『秀吉、アンタＣクラスで一体何をしてくれたのかしら？どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているの

かなぁ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらなっ……』

・・・・・本来人体からは聞こえてはいけないような音が鳴っております。申し訳ありませんが、少々お待ちください・・・・・

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻ってきました。――返り血のついた手をハンカチで拭いながら。

「秀吉、急用ができたから帰るってさっ」

「……優子。世間一般では、急用じゃなく救急と呼ぶんじゃないか？」

「用事も済んだし、始めましょう？」

「わかった。もう何も言わないよ」

優子の笑顔が怖いです・・・・・

「それでは、一応……」

そう言って高橋先生が手元のノートパソコンを操作すると、壁一面の大型ディスプレイに何かが表示されました。

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　木下秀吉
生命活動　ＷＩＮ　ＶＳ　ＤＥＡＤ　』

まだ生きています、とはとてもじゃないけど言えませんでした。というか高橋先生ってそういうキャラでしたっけ？

「改めて、科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「わかりました。……それでは始めてください」

高橋先生によって開始のゴングが鳴らされました。
同時に、僕は左目のコンタクトを外します。

「いくぞ優子。当然手加減はナシだからな！　試獣召喚（サモン）っ！」

「それはこっちの台詞よ鏡護！　試獣召喚（サモン）っ！」

そしてお互いに召喚獣を喚び出す俺と優子。

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　天水鏡護
総合科目　４２９５点　ＶＳ　７４５８点』

少し遅れて俺達の点数がディスプレイに表示される。

「やっぱりアンタの点数っておかしいわよね」

「ハッ、お前こそだいぶ点数を伸ばしたじゃないか」

「そりゃ、アンタを倒すために必死で勉強したからね」

「嬉しいねぇ。まあ今はそんなことはどうだっていい。戦ろうぜ！」

「望むところよっ！」

そうして槍を手にこちらへ突っ込んでくる優子の召喚獣。
俺は万年筆でそれを受け流させると、すれ違いざまに万年筆を振ってインク弾を飛ばす。

「喰らえっ！」

「そう簡単にやられるもんですかっ！」

優子がギリギリのところで召喚獣を回避させる。
俺は着地でバランスを崩すことを見越して召喚獣を突っ込ませる。

「隙アリ、だっ！」

「……フッ。かかったわね！」

「なにっ！？」

優子の言葉に驚いた俺は慌てて自身の召喚獣を見る。

突進の勢いそのままに優子の召喚獣を貫くはずだった俺の召喚獣の片腕がなくなっている。
しかも優子の召喚獣は無傷でそこにいた。・・・・・どういうことだ？

「特別にネタばらしをしてあげましょうか？」

事態についていけていない俺に、楽しそうに優子が話しかけてくる。

「……そうだな。ぜひご教授願いたい」

「それはね」

ふと優子の召喚獣を見てみると、左腕に光が見えた。

・・・・・まさか。

「……その様子だと、どうやら思い至ったようね。そうよ。私は腕輪の特殊能力を使ったの」

やはりそうか。というかむしろそうでなければ説明がつかない。

「……その能力は」

俺は優子に問う。

「『物理反射（カウンター）』、よ」

短く優子が答える。

『Ａクラス　木下優子　ＶＳ　Ｆクラス　天水鏡護
総合科目　３９６４点　ＶＳ　４３９２点』

ディスプレイに映し出された点数が変動している。今ので２０００点以上削られたようだ。
優子との点差が一気に縮まり、圧倒的戦力差は今はもうない。

「なんだ、その反則的な能力は」

「そんなことないわ。持ち点２０００点（単科なら２００点）につき１回っていう回数制限があるもの」

「それでもお前のような点数を取るヤツが持っていい能力じゃないだろ」

「あら、その辺は召喚システムの方に文句を言って頂戴」

「クソッ、理不尽だ」

「そんな事言うなら、アンタも腕輪を使えばいいじゃない」

「……その言葉、後悔するなよ」

「えっ？」

「俺の腕輪能力はヤバいからな」

「フ、フンッ！いいわ。やってみなさいよ」

「いいだろう。そこまで言うなら見せてやる！『神の剣（アメノムラクモ）』！」

そうして、俺は腕輪の能力を発動した。
召喚獣の腕輪が光ると同時に召喚獣の目の前に魔方陣が出現し、そこから光り輝く剣を引き抜いた。

俺は取り出した剣を構えさせると、優子の召喚獣へと斬りかかった。
優子はその剣に何かを感じたのか、自身の召喚獣の腕輪能力を使わせようとする。

――無駄なんだよ。

先程と同じように俺の召喚獣にダメージが反射すると思っていた優子は、

「えっ！？」

何故か自身の召喚獣の右腕が切り落とされたことに驚いている。

「クックック。驚いているな。俺も教えてやろう。俺の腕輪能力は『神の剣（アメノムラクモ）』。全てを断ち切る剣だ。相手の腕輪能力でさえ打ち消すことができる」

「ちょ、ちょっと！それも充分反則じゃないっ！？」

「さっきの言葉をそのまま返してやるよ。文句ならシステムに言え、とな」

「くぅ……」

「さあ、どうする？この剣の前ではお前の『物理反射（カウンター）』も意味を成さないぞ」

「だからと言ってまだ負けたじゃないわっ！」

優子が自身の召喚獣を俺の召喚獣に向けて突っ込ませてくると――寸前で俺の召喚獣が姿を消した。

「えっ？あれっ？」

「しまった。無駄話が過ぎたな」

優子は何が起こったのかわからない、といった顔をしている。
正直俺も驚いたが仕方ない、説明してやるか。

「『神の剣（アメノムラクモ）』は点数消費が激しいらしい。短時間で勝負をつける必要があったようだが、今回は初めてだったんでな。ちょっとお喋りをしてたら点数が無くなった、というわけだ」

「はあっ！？」

「というわけで、この勝負はお前の勝ちだよ」

「……なんか納得いかないけど、いいわ。もちろん、約束はキッチリ守ってもらうわよ？」

「わかってるさ」

こうして俺と優子の因縁の対決は、俺の負けという形で終止符が打

たれた。

「では次の方、どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスから出たのは佐藤美穂さん。そして我らがFクラスからは……

「ならばこちらは明久を出そう」

「えぇっ!?僕っ!?」

明久ですか。さて、正直結果は見えているんですが……

「大丈夫だ。俺は信じているからな」

雄二、言葉が抜けていますよ。明久が負けることをって。

「ふぅ……やれやれ、僕に本気を出せってこと?」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか?』

『いや、そんな話は聞いたことがないぞ』

『いつものジョークだろ?』

味方であるはずのFクラスの皆から上がる声。

「吉井君、でしたか？あなた、まさか……」

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は全然本気なんてだしちゃあいない」

対戦相手の佐藤さんは明久の言葉に何かを感じ取ったのか、警戒し始めました。

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――」

明久が一呼吸挟んで、この場にいる全員に告げました。

「――左利きなんだ」

『Aクラス　佐藤美穂　ＶＳ　Fクラス　吉井明久
物理　３８９点　ＶＳ　６２点』

流石は明久、ブラボーです。
本当に無駄なカミングアウトをありがとうございました。

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！フィードバックで苦しんでる僕を更に殴るのは勘弁し

て！」

自業自得なので、誰も止めに入りません。

「雄二？」

「ああ。勝負はこれからだな」

念の為雄二に確認してみましたが、やっぱり今の勝負は最初から捨ててましたね。

「３人目の方、どうぞ」

「……（スクッ）」

高橋先生の言葉に応じて、康太が立ち上がりました。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Ａクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出て来ました。おやっ？彼女は・・・・・

「１年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

やっぱりそうでした。いつぞやＡクラスに来た時にお会いしましたね。

「科目は何にしますか？」

「……保健体育」

もちろん、康太の唯一にして最強の武器が選択されます。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技でね♪」

・・・・・・もの凄い爆弾発言ですね。何故か隣の明久がときめいているようですが、気にしない方がいいでしょう。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

「ふっ、望むところ――」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！吉井君には永遠に必要ありません！」

「……」

「島田さんに瑞希！やめてあげて！明久が死ぬ程哀しそうな目をしてるから！」

それ以上の言葉は本当に明久を死に追いやりかねません！

「そろそろ召喚を開始してください」

「はーい。試獣召喚（サモン）っと」

「……試獣召喚（サモン）」

2人の声に合わせて魔方陣が浮かび上がり、それぞれの召喚獣が姿を現します。

「なんだあの巨大な斧は！？」

工藤さんの召喚獣は巨大な斧を装備していました。破壊力が高そうですね。おまけに腕輪もしています。なかなかの高得点なのでしょう。

対する康太の召喚獣は、忍者装束に小太刀の二刀流です。こちらももちろん腕輪をしています。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ！」

工藤さんが艶っぽく笑いかけるのと同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動き出しました。

「バイバイ、ムッツリーニくん」

得物からは想像もつかないスピードで康太の召喚獣に詰め寄り、その豪腕で斧を振るいます。

「ムッツリーニっ！」

思わず、といった様子で明久が悲鳴を上げます。

斧が康太の召喚獣を両断しようとした瞬間――

「……加速」

康太の腕輪が輝き、康太の召喚獣の姿がブレました。

「……えっ？」

工藤さんの戸惑う声。

康太の召喚獣はいつの間にか相手の射程外にいます。

「……加速、終了」

ボソリと康太が呟くと、一呼吸置いて工藤の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れました。

『Ａクラス　工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太
保健体育　４４６点　ＶＳ　５７２点』

５００点超えっ！？本当に恐ろしいですね・・・・・

「そ、そんな……この、ボクが……！」

負けた工藤さんは床に膝をつき、ショックを隠せないでいます。

余程自分に自信があっただけに、それを上回る力を見せ付けられたのだから無理もありません。

「これで2対1ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めています。Aクラスの生徒が負けても動揺した様子はありません。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらから出るのは瑞希です。頑張ってください！

「それなら僕が相手をしよう」

そう言ってAクラスから歩み出たのは、久保利光君。

「やはり来たか、学年次席」

雄二が言うように、久保君は現在の学年次席です。瑞希が前回の振り分け試験をリタイアした為、学年3位の実力の持ち主だった彼が繰り上がりで次席の座にいるのです。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二の心配する理由は簡単です。実は瑞希と久保君の実力はほぼ互角なのです。

過去の総合科目の点数差は僅かに20点程度でした。

しかも瑞希はここまでの連戦で疲れているはずなので、負ける可能性もありえないわけではありません。ですが、

「瑞希なら大丈夫だよ。雄二」

「どうして言い切れる？」

「う～ん、幼馴染の勘ってヤツ？」

「なんだ、確証はないのか」

「いいや。瑞希は負けないよ。これは絶対だ」

「？？」

雄二が頭に疑問符を浮かべていますが、放っておきます。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「よろしくお願いします」

本日２度目の総合科目対決。しかも戦うのがこの２人ということは、事実上の学年次席決定戦です。

「それでは……」

高橋先生が前と同じように操作を行い、２人の召喚獣が喚び出されます。

そして、勝負は一瞬で決着がつきました。

『Ａクラス　久保利光　ＶＳ　Ｆクラス　姫路瑞希
総合科目　３９９７点　ＶＳ　４４０９点』

『マ、マジかっ！？』
『いつの間にこんな実力を！？』
『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

教室の至る所から驚きの声が上がります。

点差４００点オーバー。
さすがにここまで差が開いてるとは思いませんでしたが、やっぱり瑞希は凄いです。

「ぐっ……姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」

悔しそうに瑞希に尋ねる久保君。
つい最近まで拮抗していた実力がここまで離されれば、気になるのも当然ですね。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです！」

瑞希の言葉に、Ｆクラスの皆は感動しています。
僕もその言葉を聞いて、温かい気持ちで胸がいっぱいになりました。

「これで2対2です」

高橋先生の表情にも若干の変化が見られました。
瑞希の急成長に驚きを隠せない、といったところでしょうか。

「最後の1人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは霧島さんが出てきます。
そしてうちのクラスからは当然、

「俺の出番だな」

クラス代表の雄二が出ます。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けることはないと思っているのでしょう、Aクラスの皆は落ち着いた様子です。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は１００点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

しかし雄二の発言で、Aクラスにざわめきが生まれます。

『上限ありだって？』
『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』
『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

僕達に勝利への可能性が示されました。
そして、それがわかったAクラスの皆はざわつきます。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。
少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていきます。
教育熱心な高橋先生のことです。小学生レベルのテストも資料として持っていたりするのでしょう。

それを見送った僕と明久は雄二に近づいていきました。

「雄二、後は任せたよ」

「同じく。僕達の夢、雄二に預けるよ」

グッと雄二の手を握ります。僕達に出来ることは全てやりました。
後は雄二の勝負で全てが決まります。

「ああ。任された」

グッと力強く握り返されました。

「……（ピッ）」

康太が歩み寄ってきて、ピースサインを雄二に向けます。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……（フッ）」

康太は口の端を軽く持ち上げて見せて、元の位置に戻りました。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

戻ってきた高橋先生が両クラス代表に声をかけます。

「……はい」

短く返事をして、霧島さんが教室を出て行きました。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

瑞希に送り出されて、雄二も最後の戦場に向かいます。

泣いても笑っても、これで僕達の試召戦争が終わります。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋先生が機械を操作すると、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出されました。

先に霧島さんが席に着き、次いで雄二がやってきます。

『では、問題を配ります。試験時間は５０分、満点は１００点です』

画面の向こうで日本史の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま2人の机に置きました。

『不正行為などは即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているさ』

『では、始めてください』

2人の手によって問題用紙が表にされます。

「鏡護君、いよいよですね……！」

いつの間にか隣に来ていた瑞希が話掛けてきました。

「うん。いよいよだね」

「これで、あの問題がなかったら坂本君は……」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

もし出ていたら、僕達の勝利です。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出されます。

果たして出ているのか、出ていないのか・・・・・

《次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。》

（　　）年　平城京に遷都

（　　）年　平安京に遷都

穴埋め形式の年号問題はありました。

これなら出ているかもしれません・・・・・

（　　）年　鎌倉幕府設立

（　　）年　大化の改新

「あ……！」

出て、いました……。

「き、鏡護君っ」

「ああ！」

「これで私たちっ……！」

「これで僕達の卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったＦクラス全員の言葉。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うぉぉぉっ！』

明久の声で、教室を揺るがすような歓喜の声。

《日本史勝負　限定テスト　１００点満点》

《Ａクラス　霧島翔子　９７点》

《Fクラス　坂本雄二　５３点》

VS

Fクラスの卓袱台がみかん箱になりました。

第１０問　『Ａクラス戦開幕！全ての因縁に終止符を！』（後書き）

あとがき

※

・優子の召喚獣の腕輪能力は作者のオリジナルです。

・コンタクトを外した鏡護の性格が変わったのは、それがスイッチの１つだからです。

以上、どうぞご了解ください。

※

鏡護の召喚獣の腕輪能力の詳細を説明いたします。

『神の剣（アメノムラクモ）』

全てを断ち切る剣。

以下の能力を秘めています。（※今後増えるかもしれません）

1. 敵腕輪能力の無効化・無力化
2. 空間断絶による衝撃波攻撃

しかし、使用コストも凄まじく、

・剣の維持に５００（単科１００）点／１秒

・無効化能力発動に１０００（１００）点／１回

・衝撃波攻撃発動に１５００（１５０）点／１回

以上のようになっています。

次回はいよいよ試召戦争編の最終回です。どうぞお楽しみに。

第１１問　『夢物語の終焉～僕達の明日はどっちだ！？～』（前書き）

バカテスト　歴史

問　次の（　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え
『１５４９年』
教師のコメント
正解です。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え
『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った１９９３』
教師のコメント
ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

第１１問　『夢物語の終焉～僕達の明日はどっちだ！？～』

「３対２でＡクラスの勝ちです」

視聴覚室に雪崩れ込んだ僕達を出迎えたのは高橋女史の締めのお言葉でした。

ええ、わかっていますとも。僕達の負けです。

「……雄二、私の勝ち」

そして霧島さんからも勝利宣言が。

床に膝をつく雄二に近づいていきます。

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「明久、落ち着いて！」

放っておけば言葉通りに雄二に襲いかかろうとする明久を後ろから羽交い絞めにします。

「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

「それについて否定はしない！」

明久、それは否定してください。聞いているこっちが悲しくなるでしょう？

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！どうして止めるんだ３人とも！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「明久、それは体罰じゃなくて処刑だ！」

３人がかりで必死になって明久を止めます。

しばらくして明久が落ち着いてから、僕も雄二に一言だけ言います。

「でも、明久の言うことも一理あるよ。雄二が油断せずちゃんと勉強していれば負けなかったんだから」

「言い訳はしねぇ」

やっぱり図星でしたか。

「……ところで、約束」

おおっと。そういえば霧島さんの事をすっかり忘れていました。

・・・・・何でも１つ言うことを聞くって約束でしたよね。

「……！（カチャカチャカチャカチャ！）」

僕の横で、康太がもの凄い勢いで撮影の準備をしています。

・・・・・僕も手伝った方がいいんでしょうか？

「わかっている。何でも言え」

潔い雄二の返事。これだけを見れば恰好いいんですが、本当に大丈夫なんですよね？

「……それじゃ――」

霧島さんが瑞希に一度視線を送って、再び雄二に戻します。

そして、小さく息を吸って、

「……雄二、私と付き合って」

言い放ちました。

・・・・・おや？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

なるほど。霧島さんは2人がまだ小さい頃から一途に雄二の事を想い続けていたんですね。

「その話は何度も断っただろ？ほかの男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」

・・・・・ほほう。つまり、霧島さんが異性に興味がないという噂は雄二という想い人がいたからであり、瑞希の事を見ていたのは雄二の近くにいる異性が気になったから、ということだったのでしょう。

「拒否権は？」

「雄二、ここで拒否するなんて男らしくありませんよ。それに――」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに――」

ほんとに雄二は往生際が悪いですね。霧島さんのような美人に好意を向けられているのにそれを拒むなんて、万死に値します。

ぐいっ　つかつかつか

しかし、霧島さんが抵抗する雄二の首根っこを掴んで教室を出て行ってしまいました。

「……」

「……」

「……」

教室にしばしの沈黙が訪れます。
皆あまりの出来事に言葉が出ないようです。

さて、もうこれ以上することもないでしょうから帰りましょうか。
僕は視聴覚室から立ち去ろうとしました。そこに――

「待ちなさい、鏡護」

「ぎくぅっ」

失敗です。今なら誰にも気付かれないと思ってたんですがねぇ。
後ろを振り向くと、僕の予想通りの人物の姿が。

「ゆ、優子……」

「アンタ、今皆に気付かれないうちに逃げようとしてたでしょ」

どうやら完全にマークされていたようです。

「バレてたのか……仕方ない。降参するよ」

「っていうかそもそも逃げるという選択肢を消しなさいよ」

「いやぁ、ごめんごめん。で、僕を呼び止めたってことは」

「そう、約束の話よ」

「わかった。聞かせて」

僕はどんな命令が来ても甘んじて受け入れる覚悟をしました。

「その前に――瑞希っ！」

「あ、はい！」

「えっ？」

どうして瑞希が呼ばれるんでしょう？

残念ながら、僕はその疑問に対する答えを持ち合わせていません。

大人しく事態の推移を見守ることにします。

「鏡護、お弁当の時の約束は覚えてる？」

「ああ。あの時も何でも言う事を1つ聞くって言ったな」

「そうね。で、今回はそっちも使わせてもらうわ」

まとめて2つ。一体どんな無理難題が吹っ掛けられるんでしょうか。

「それじゃ、言うわね。瑞希」

「はいっ」

「「アタシ（私）と付き合いなさい（ってください）！」」

「へっ？」

２人は今何と言いました？

・・・・・自分達と付き合え？

混乱した頭で、何とかそれを理解した僕は――

「え、えええぇぇっ！？」

それはもうもの凄い勢いで驚きました。

「もちろん、『付き合う』っていうのは恋人になるってことだからね？」

「あ、ああ。それはわかってるけど……」

そりゃあ、こんな風に言われたら意味するところはそうなんですが・・・・・

「ふ、２人はそれでいいの！？」

自分の恋人が二股を掛けることを許してくれるのでしょうか？

普通なら絶対にあり得ません。あり得ないんですけど・・・・・

「いいわよ」

「はい！2人で話し合って決めましたから！」

・・・・・2人がそう言うならいいんでしょうか。

・・・・・いいということにしましょう。

釈然としませんが、僕は無理やり自分を納得させて答えを期待して待っている2人に返事をします。

「僕でよければ、よろしくお願いします」

「「――っ／／／／／やったぁー！」」

2人はお互いに抱き合うと、飛び上がって喜びを表現します。

そういえば――

「ねえ瑞希？もしかして瑞希が手紙を出そうとしてた相手って」

「――っ／／／／／はいっ、鏡護君です！」

「っっ／／／／／」

真正面からそう答えられて、思わず顔が熱くなりました。

や、やっぱりそうだったんですね・・・・・

なんか凄く嬉しいです・・・・・

「あら、瑞希ってばそんなことしようとしてたのね」

「ゆ、優子ちゃん……」

優子が新しいおもちゃを見つけた子供のように楽しそうな表情をしています。
これは瑞希をイジるつもりですね。
ここは助けてあげますか。

「優子はどうして僕に告白したの？」

「えっ！？／／／／」

聞いた途端に優子の顔が真っ赤に茹で上がります。おおっ、面白い。

「え、えっとね、その、鏡護は家族以外で唯一私が安心して『素』を見せられる相手だったから……」

だんだん声が小さくなっていくけど、しっかりとそう答えてくれました。

「そっか。ありがとう瑞希、優子」

「「あ……はい（うん）！」」

2人とも満面の笑顔で返してくれます。

・・・・・絶対に2人を幸せにしてあげなくちゃ。

僕は改めてそう決意を固めました。

そうして僕が幸せを噛み締めていると、

「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ」

西村先生がやってきました。

「あれ？西村先生、僕達に何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思ってな」

ん？我がFクラス？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『なにぃっ!?』』

クラスの男子生徒全員が悲鳴を上げました。・・・・・そんなに嫌がることですか？

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来ると

は正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。全てではないからと言って、蔑ろにしていいものじゃない」

確かにその通りです。
それに、雄二が必要最低限の学力を身につけていれば、西村先生もこんなことは言わなかったでしょうし。

「吉井。お前と坂本、ついでに天水は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯、及びその懐刀だからな」

「そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「今回ばかりは明久に同意です！というか“ついで”で巻き込まれるなんて納得できません！」

「……吉井、お前には悔い改めるという発想はないのか。それに天水、お前は去年テストの時に手を抜いていただろう。あんな点数の持ち主だとは先生方も知らなかったんだぞ？」

・・・・・あら、バレてしまっているようです。
西村先生の言う通り、実は昨年のテストでは常に中の上くらいを狙って取っていたんです。あまり注目を集めるのは好きじゃありませんからね。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやろう。天水は特別に高橋先生が見てくださるそうだぞ」

なんですと!?

「どうして僕だけ特別扱いなんですか!?」

「先生がお前の才能を埋もれさせるのは惜しいとおっしゃってな」

「その通りです。天水君の補習は私が面倒を見てあげます」

「そんなっ!?」

「高橋先生っ!私も鏡護君と補習をしていただけませんか?」

瑞希が高橋先生に詰め寄ります。

「姫路さん?……そうですね。貴女もFクラスにはもったいない逸材ですし」

・・・・・やった!これでただ苦しいだけの補習ではなくなります。

「……先生。私も2人と一緒に補習を受けてもいいですか?」

「木下さんもですか?……ええ。特に止めはしませんが」

「ありがとうございます」

どうやら優子も一緒に受けてくれるようです。嬉しいですね。

まあ確かに3ヶ月後にはまた試召戦争ができるのですから、それまではしっかり学力を磨いておくことにしましょう。

そうして意気込んでいると、瑞希と優子が歩み寄ってきてこう言いました。

「さあ、鏡護。補習は明日からみたいだし、今日はこれから3人でデートに行きましょう！」

「そうですね。それなら私、観たい映画があるんです！」

「映画か……そうね。久しぶりに行ってみましょう！」

「はいっ！」

「え、えっ？」

僕を置いてどんどん話を進めていく2人。僕の都合はお構いなしのようです……

「はぁ……わかったよ、2人とも。デートに行くから僕を除け者にしないでよ」

「「やったーっ！」」

僕が白旗を揚げると2人は満面の笑顔。

仕方ありません。彼女達が僕を好きでいてくれるように、僕も彼女達が大好きなのですから。

僕達の近くでは明久が島田さんに言い寄られているようでしたが、良かったですね明久。

「いやぁぁっ！生活費が！僕の栄養がぁっ！」

そんな明久の魂の叫びが聞こえたような、聞こえなかったような・・・・

第１１問　『夢物語の終焉～僕達の明日はどっちだ！？～』（後書き）

あとがき

作者　「祝っ！試召戦争編終了！」

鏡護＆瑞希＆優子　「「「ワー！パチパチパチ～！」」」

作者　「というわけで終わりましたね、お３方」

鏡護　「いやぁ、長いようで短かったような」

瑞希　「そうですね……色々なことがありました」

優子　「まあでも、最後は大団円だったじゃない？」

鏡護　「そうだね。こんなに可愛い彼女が２人もできたし」

瑞＆優　「「――っ／／／／／」」

作者　「おーおー、２人とも顔を真っ赤にしちゃって。この天然ジゴロが」

鏡護　「そんなことないよ。本当のことを言っただけだもん」

瑞＆優　「「／／／／／」」

作者　「……ダメだこりゃ」

鏡護　「ところで、これからはどんな展開になっていくの？」

作者　「うむ。今回で原作第１巻の内容が終わったからな。次は２巻だ。」

瑞希　「その前にまた番外編が入ったりしますか？」

作者　「２本程入れようかと考えている」

優子　「そう。それはまた楽しみね」

作者　「うむ。期待しててほしい。では次回予告、いってみよう！」

全員　「「「「次回、補習第２回『デートでわかる男の甲斐性（仮）』を、よろしくお願いしま～す！」」」」

作者　「これからも引き続き、拙作をお楽しみください！」

補習第2問　『デートでわかる男の甲斐性』（前書き）

こんにちは、天叢雲です。

予告通り、今回及び次回更新はサイドストーリーをお送りします。

それでは、どうぞお楽しみください。

補習第2問　『デートでわかる男の甲斐性』

―Ｓｉｄｅ　明久

試召戦争を終えた僕は、鉄人の姦計（？）によって美波と一緒に映画館に来ている。

美波は僕の意見は全て無視して、週末には駅前の喫茶店でクレープをおごる事も決められてしまった。

どうしてこうなったんだ・・・・・

僕の食費が・・・・・（涙）

僕の少し前を歩く美波を見てみると、凄い上機嫌だ。

まあ彼女の嬉しそうな顔を見ていると少しくらいの出費は我慢しようか、なんて思ってしまう。

だけど・・・・・・

『一般１８００円、大学・高校生１５００円、小・中学生１０００円、幼児（３歳以上）９００円、大金持ち７５８９０円、酔っぱらいお断り、団地妻ＯＫ、未亡人ＯＫ、ご用の方は劇場スタッフまで……』

映画館の受付前に掲げられている料金案内を見て愕然とした。

さらに視線を併設されている売店に向けると――

『コーラMサイズ３００円、ポップコーンSサイズ４００円……』

なんて恐ろしい場所なんだ、映画館！

学割が効くとはいえ、チケット1枚１０００円、飲み物と食べ物で７００円の合計１７００円を2人分だって！？

ダ、ダメだ・・・・・

僕は思わずその場に膝をついてしまった。

「う～ん……ねえ、アキはどれが見たい？……って何してるのよ」

後ろを振り返った美波が僕を見てそう言ってきた。

「ははは……ちょっと映画館という場所に絶望してただけさ……」

「……諦めろ明久」

あれ？この声は――

「男とは……無力だ」

後ろを振り向くと、そこには鎖でグルグル巻きにされて転がっている雄二とその鎖の端を両手で握り締める霧島さんの姿が。

・・・・・それ、なんてプレイ？

「ゆ、雄二……」

何故雄二がそんな格好をしているかわからなくて動揺する僕を置いて、２人は何を見るか話し出す。

「……雄二、どれが観たい？」

「早く自由になりたい」

「……じゃあ、『地獄の黙示録：完全版』」

「おい待て！それ３時間２３分もあるぞ！？」

「……２回観る」

「１日の授業より長いじゃねぇか！？」

「……授業の間、雄二に会えない分の埋め合わせ（ポッ）」

「やっぱ帰る」

雄二は鎖で巻かれた姿をしたまま、転がりながら逃走しようとするけど――

「……今日は帰さない」

霧島さんがどこからともなく取り出したスタンガン（２０万ボルト）を手に雄二に襲いかかる。

バチバチバチバチ……

「な、なんだ翔子!?な、それは、や、ちょ、ヤバ……」

避ける間もなく、スタンガンをくらって黒コゲになり、気を失う雄二。

そんな雄二を霧島さんは受付まで引き摺って行き―

「……学生２枚、２回分」

「はい学生１枚、黒コゲ鎖巻きの学生１枚、無駄に２回分ですね」

チケットを購入した。

えっ!?それでいいの!?

鎖にスタンガンだよっ!?

いくらなんでもそこまで営業スマイルを守らなくてもいいんじゃな

い！？

「憧れるよねぇ」

その様子を見た美波は、目をキラキラさせながら羨ましそうに2人を見送る。

……皆、何か間違ってると思うよ。

それにしても、霧島さんってあんなにも過激だったんだ。すごい意外だ。

「へぇ。霧島さんって、なんていうかアグレッシブだね」

そこへまた知っている顔が現れた。

・・・・・鏡護と姫路さんに秀吉のお姉さん？

・・・・・どうしてこの3人が一緒にいるんだろう？

それが気になった僕は、素直に本人に聞いてみることにした。

「ねえ鏡護。どうして鏡護達は3人でこんなところに来たの？」

「ん？なんだ明久か。僕たちはね、付き合い始めた記念に『デート』しに来たんだ」

・・・・・イマ、コイツハナンテイッタ？

「ごめん。よく聞こえなかったよ。……それで、何をしに来たって？」

「だから、『デート』しに来たんだって」

「へぇ……誰と？」

「もちろん、瑞希と優子の２人とだけど？」

・・・・・ほう、そうか。この野郎は姫路さんと秀吉のお姉さんと『デート』か・・・・・

「殺してやるっ！」

「うわぁっ！？」

チッ、初撃はかわされたか。

「あ、明久？いきなりどうしたのさ！？」

「うるさい！鏡護は１人楽しく『デート』だとっ！？誰が許してもこの僕は許さないぞ！」

「メ、メチャクチャだよっ！それに、明久だって島田さんと『デート』に来てたんじゃないの？」

・・・・・な、なんだって！？

「えっ!?僕が美波と『デート』だって!?」

「そ、そうだよ!世間一般では男女が2人で映画館に出掛けることは『デート』と同義だと思うよ?」

・・・・・そ、そうだったのか

僕は衝撃の事実に思わずその場に崩れ落ちてしまった。

「あ、あれ?明久、大丈夫?」

今度は逆に僕が心配になったのか、鏡護が声を掛けてくれる。

「う、うん……大丈夫……ちょっと思わぬ事実に気が抜けちゃっただけだから」

「そう?それならいいんだけど……」

まだ心配そうにしている鏡護に改めて大丈夫だと言って、僕は立ち上がった。

「そういえばさっき“付き合い始めた記念”って言ってたけど、いつからなの?」

とりあえず落ち着く為に何か話をしようと思って、もう1つ気になった事を聞いた。

「えっと……ついさっき、学校の視聴覚室で告白されて……」

・・・・・やっぱりコイツは後日異端審問会の裁判にかけてやろう。
僕は心の中でそう決めると、鏡護と一緒に来ていた2人にも声を掛けた。
「そうなんだ。よかったね、2人とも」
「はいっ！」
「ええ、ありがとう」
・・・・・フッフッフ。鏡護、君にはたっぷりと地獄を見せてあげるよ。
2人の笑顔を見て、さらに決意を固める僕。
「そういえば、3人は何を見るの？」
ここでようやく美波が話に入ってきた。
「僕達は『Ｓｉｎｇ　ｆｏｒ　Ｙｏｕ～或る愛の詩～』を観ようと思ってるんだ（明久との『デート』、楽しんでね）」
「――っ／／／／」
あれ？突然美波の顔が赤くなったけど、どうしたんだろう？
鏡護が耳元で何か言ったからみたいだけど、僕には聞こえなかったしな。
「へぇ。それってどんな映画なの？」

「う〜ん。僕も詳しくは知らないんだけど、瑞希がどうしても観たいって言ってね」

「そうなの？」

「はいっ！とっても感動的なラブストーリーで、前から楽しみにしてたんです！」

姫路さんがここまで言うくらいなんだから、良い作品なんだろう。

「もし2人が決まってないようなら、一緒にどうかな？」

鏡護から思わぬ提案が。

「……いいの？だって3人で見ようとしてたんでしょ？」

「まあね。でもせっかくだからWデートってことにしようよ。2人はどうかな？」

鏡護が姫路さんと秀吉のお姉さんにお伺いを立てる。

「私は構いませんよ」

「私もいいわよ。美波とはまたお話したかったし」

「そっか、ありがとう。……というわけだから、どうかな明久？」

「鏡護達がそう言ってくれるなら……」

正直美波と2人きりでっていうのは僕も避けたかったからね。（主に僕の身の安全の為に）

「（それに半分くらいなら出してあげるよ。どうせ今月もピンチなんでしょ？）」

「き、鏡護……」

ありがたい。正直僕の財布ではギリギリの出費だったのだから。

・・・・・今回はこれに免じて、異端審問会への報告は止めてあげようかな。

さすがに命の恩人を売るのは気が引けたので、僕はそうすることにした。

「じゃあ僕がチケットを買ってくるから、皆はちょっと待っててね」

そう言って鏡護はチケット売り場へ行ってしまった。

・・・・・う～ん、鏡護ってこういう時は男らしいんだなぁ。

なんて素直に感心してしまう僕だった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「いやぁ～、評判以上の名作だったね」

映画館から出てきた僕は開口一番、そう言いました。

瑞希からなんとなくストーリーは聞いていましたが、実際に観るとやはり違いますね。

物語中盤でヒロインが喉を潰して歌えなくなり、恋人と別れてしまった時はどうなることかと思いましたが、ラストは無事に彼女は声を取り戻し、彼も帰ってきたハッピーエンドで終わったので本当に良かったです。

不覚にもちょっと泣いてしまいましたしね。皆には気付かれなかったようで、良かったです。

「さて、これからどうしようか？」

「う～ん、そうね……せっかくだから喫茶店でも行ってもう少しお喋りしたいわ」

「そうですね。なんだかまだまだ話し足りない感じがします」

僕の問いかけに2人がそう応えました。

「明久と島田さんは？」

「ウチは別にそれでいいわ」

「僕はどうしようかな……」

島田さんは快諾してくれましたが、明久は迷っているようです。
おそらく出費が・・・・・などと考えているのでしょう。

・・・・・仕方ありませんね。

「（明久、今日は僕の奢りでいいよ。でも、特別だからね？）」

「（き、鏡護……）僕も行くよ」

そう言って僕を見た明久の目が何故かキラキラ輝いていたのですが、
何かあったんでしょうか？

そうしてこの日は喫茶店に寄って皆でまったりと過ごした後、明久
&島田さんと別れた僕は瑞希と優子をそれぞれ家まで送ってから帰
宅しました。

――翌日

『号外、号外だよ～！』

校門を入って直ぐのところで、そんなことを言いながら登校してく

る生徒達の上に紙切れをばら撒いている人達がいました。

「ねえ、あれってうちの新聞部よね？」

「そうですね。何をしているんでしょう？」

「号外ってことは新聞を撒いてるんじゃないかな」

それにしても、どこぞの時代劇で見るように空に撒くというのはいかがなものでしょう。

ところで、今僕は優子と瑞希にそれぞれ腕を取られた状態で登校しています。

どうしてそんな事になっているかというと、

・朝家を出ようとしたら2人がドアの前に立っていて、
・事情を聞いたら、2人曰く付き合いだした最初の朝は一緒に登校したかったからとのことで、
・そういう事ならと僕が快諾したから、

というわけです。

周りの生徒達からビシビシと嫉妬と殺意の篭った視線を向けられていますが、僕は気にしないことにしています。

僕の両隣を歩く彼女達は、それだけ生徒達に人気があったということであり、そんな2人と付き合っている僕は幸せ者なのですから。

それくらいは甘んじて受けるつもりです。

そうこうしていると、僕達のところにもその号外とやらが降って来ました。

僕はそれを掴み取ると、その中身を確認してみました。

――こ、これはっ！

「なになに、どうしたのよ？」

「何が書いてあったんですか？」

急に動きを止めた僕を不審に思った2人が僕の手に握られた新聞を覗き込んできました。そして――

「「――っ／／／／」」

2人して顔を真っ赤にして、僕と同じようにその場で固まってしまいました。

・・・・・号外の見出しにはこう書いてあったんです。

『「お付き合いしたい2年生女子ランキング」のトップ3に熱愛スクープ！』

そして、記事には次のような文章が。

『「お付き合いしたい2年生女子ランキング」のトップ3、霧島翔子さん、姫路瑞希さん、木下優子さんに彼氏ができたという事実が発覚しました。霧島さんは2－Fの坂本雄二さんと、姫路瑞希さん

と木下優子さんは同じく２－Ｆの天水鏡護さんと恋仲になったそうです。詳しい情報は確認が取れ次第追ってご報告いたしますので、続報をお待ち下さい』

こうして僕達の関係は全校生徒の知るところとなってしまいましたとさ。どっとはらい。

補習第2問　『デートでわかる男の甲斐性』（後書き）

あとがき

作者　「すみません。今回はいきなり次回予告です！

次回、補習第３問『僕と明久の恋文騒動（仮）』

を、お楽しみに～！」

補習第3問　『僕と明久の恋文騒動　～伝えたい「愛してる」のコトバ～』（前編）

文月新聞

2年F組　吉井明久さんのコメント

僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久。泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん・・・・・

これで、いいかい・・・・・？

以上

【女装が似合いそうな男子ランキングNO．1】

【こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNO．1】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキングNO．1】

の3冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

※尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さ

んと天水鏡護さんは審議の結果、アンフェアであるという結論に達した為除外されています。

補習第3問　『僕と明久の恋文騒動　～伝えたい「愛してる」のコトバ～』

「何だろう？コレ」

下駄箱を開けたら手紙が入っていました。
しかもとても可愛らしいデザインの便箋に入っています。

・・・・・これはもしかしなくてもラブレター！？

僕には瑞樹と優子という大切な人がいますから、残念ながら手紙をくれた人の気持ちには答えてあげられません。

・・・・・ですが手紙の書いた人の誠意を雑に扱うことはできませんよね。

・・・・・そ、そうですよ。最低限、手紙の内容くらいは確認しませんと。

なんとなく人には見られたくなくて、僕はこっそり手紙の封を切ろうとして――

「おはようじゃ、鏡護。」

「うぉわぁぁっ！？」

咄嗟に手紙をポケットに突っ込みました。び、びっくりしましたぁー！

「あ、ああ。秀吉か。おはよう。今日もいい天気だよな！いやぁー、今日はイイ1日になりそうだよ！」

「？何をそんなに動揺しておるのじゃ？」

「べ、別に動揺なんかしてないさ？」

「そういえばさっき一瞬手紙のようなものが――」

マズいです！まさか見られていたとは！どうしましょう。ここで誤魔化すのも1つの手ですが・・・・・

・・・・・もしコレのことを瑞希と優子が知ったら、2人は不安に思うかもしれません。

僕は2人の悲しむ姿なんて見たくありません。彼女達の笑顔を守ることが僕にとっての最優先事項なのです。

「……実はラブレターをもらったんだ。返事は決まってるんだけどね」

2人にはこの後すぐにメールを送ることにします。

「なんじゃ、やはりそうじゃったか。」

「うん。とりあえず後で2人と話し合うつもりだよ」

「そこまでする必要はあるのかのう？」

「なんていうか、僕なりのけじめ、かな」

「そうか。お主がそう言うならワシからは何も言わぬ」

「ありがとう。さあ、教室に行こう」

「うむ」

そうして僕達は教室へと向かいました。

「工藤」「はい」「久保」「はい」
「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

・・・・・今日も平和ですねぇ。
静かな教室に穏やかなひとときが訪れています。

新学期開始からしばらくは試召戦争で朝から騒がしい毎日を送っていたので、久しぶりに平穏な時間が――

「坂本」

「……明久がラブレターをもらったようだ」

『『殺せぇぇっ！！』』

雄二の一言によって木っ端微塵に打ち砕かれました。

「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ！」

「否定はしないんだね、明久」

すかさずツッコミを入れてみます。

「う……。そ、それは……」

でも良かったですね、明久。
ついに明久にも春がやって来たようで。

それにしても、明らかに小声だったのにクラスの誰もが聞き逃さなかったとは恐ろしいですね。

『どういう事だ？吉井がそんな物を貰うなんて！』
『それなら俺達だって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみろ！』
『ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』
『もっとよく探せ！』
『……出てきたっ！未開封のパンだ！』
『お前は何を探しているんだ！』

男達の怒号が教室中を飛び交います。
クラス全員が明久への妬みに狂っているようです。

「お前らっ！静かにしろ！」

――シン

西村先生の一喝によって再び静寂を取り戻す教室。
さすがは西村先生です。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

出席簿を捲る音が教室内に響きます。

「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」

・・・・・明久に命の危険が迫っています。

「皆落ち着くんだ！『吉井コロス』は返事じゃないよ！」

「吉井、お前は静かにしろ！」

「先生、ここで注意すべき相手は僕じゃないでしょう！？このままだとクラスの全員が僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジコロス」「根岸」「吉井ブチコロス」

明久の言葉を無視して出席確認を続ける西村先生。
クラスメイト達の返事はさらにエスカレートしていますね。

「よし、遅刻欠席はなしだな。今日も1日勉学に励むように」

出席簿を閉じて、西村先生が教室を出て行こうとします。

「待って先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

もうなりふり構っていられないのでしょう。必死の形相で西村先生を呼び止めようとしています。

「吉井、間違えるな」

扉に手を掛けたまま、西村先生が明久に応えました。

「お前は不細工だ」

「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

その返答は僕もさすがに予想できませんでした。

「授業は真面目に受けるように」

「先生待って！せんせ～い！」

明久の叫びが空しく響きます。西村先生はさっさと教室から出て行ってしまいました。

さて、この様子では1時間目の先生が来るまでに間違いなく教室内で暴動が起こりますね。

「アキ、ちょ～っと話を聞かせてもらえる？」

ほら。早速明久が島田さんに捕まってしまいました。
ただ、明久の肩からミシミシと鈍い音が聞こえているのはどういうことでしょう？

「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？誰からなの？どんな手紙なの？」

愛嬌のある彼女の吊り目がいつもより更に吊り上がっています。しかもその瞳から艶が消えているように見えるのは僕の気のせいでしょうか・・・・・・
彼女のトレードマークであるポニーテールも、今だけは角のように見えますね。

「あー、えっと、そのー」

明久、渋ってないで言ってしまった方がいいんじゃないですか？

「いいから大人しく指の骨を――じゃなくて、手紙を見せなさい」

・・・・・早くしないと君の指が見るも無残な姿に変えられてしまうようですし。

相変わらず男子達は怨嗟の声を上げています。もう教室内はカオスです。

「皆、ちょっと落ち着け」

教壇の方からパンパンと手を叩く音が聞こえました。見ると雄二が立っています。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

・・・・・・まさかこの状況で雄二が明久に助け船を出すとは意外です。

雄二ならここぞとばかりに明久を私刑に処すと思っていたのですが。

「問題は、明久をいかにグロテスクに殺すかだ」

・・・・・・期待を裏切らない素晴らしい答えをありがとうございます。

「前提条件が間違ってるんだよ畜生！」

あ、明久が荷物を掴んで教室を飛び出していきました。逃げましたね。

『逃がすなぁっ！追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！吉井を殺せ！』

『サーチ＆デェース！』

まったく、うちのクラスは相変わらず変なところで無駄に素晴らしい団結力を発揮しますね。

・・・・・・それと最後の方、せめてデストロイにしてあげてください。

さてさて、こうなってはもう授業どころではありませんね。

・・・・・今のうちに僕の方も問題を片づけるとしますか。

「瑞樹、朝メールした件に関して話をしたいんだけど、いいかな？」

「はい、いいですよ。優子ちゃんはどうしますか？」

「今から迎えに行くよ」

「わかりました。じゃあ行きましょう」

僕は瑞樹と連れ立ってＡクラスへと向かいました。

「優子～、朝のメールの件で話がしたいんだけど」

Ａクラスにやってきた僕は、早速優子を呼びました。

すると、声に気付いた優子が顔を真っ赤にして急ぐように走ってきます。

「ちょっと！あんな大声で呼ばなくてもいいじゃない！」

どうやら大声で呼ばれたことがお気に召さなかったようです。

「ごめん。手っ取り早く呼ぶならあれが１番早いと思ったからさ」

「……はぁ、もういいわ。で、朝のメールっていうとアレのことかしら？」

「そうだね」

「じゃあ、さっさと済ませちゃいましょう」

そうして僕達はAクラス横の階段踊り場に移動して、話を始めました。

「2人はもう知ってると思うけど、今朝僕の下駄箱にラブレターが入ってたんだ」

「「はい（ええ）」」

「で、このラブレターへの返事なんだけど――」

「「どうするの（んですか）！？」」

2人が僕に掴みかからんとする勢いで詰め寄ってきます。

「ちょ、ちょっと2人とも落ち着いて！」

「ご、ごめんなさい……」

「す、すいません……」

驚いた僕が慌てて制止をかけると2人は引き下がってくれましたが、その顔は暗く沈んでいます。

「うん。不安に思うのもわかるけど、ちゃんと最後まで聞いてほしいな」

2人が頷くのを確認して、僕は話を続けます。

「結論から言うと、答えはノーだよ」

「「あ……」」

2人の顔がパッと明るくなりました。

「2人にはまだちゃんと言ってなくて申し訳なかったんだけど、僕が僕の生涯を懸けて愛したい、守りたいと思う女性は2人以外にはいないんだ。だから安心してほしい。僕は2人以外の女性と付き合う気はないから」

「――っ／／／」

僕の言葉を聞いた2人の顔が一瞬で真っ赤に染まりました。

「改めて2人に伝えるよ。大好きだ。愛してるよ。瑞樹、優子」

「「き、鏡護（君）っ」」

――ドンッ！

「うわぁっと」

2人して目に涙を浮かべながら僕に飛びついてきました。バランスを崩して倒れそうになりますが、そこは意地でも堪えます。

しばらくそのままの状態で2人をあやしていると、2人はどちらともなく口を開きました。

「……私は不安だったの。私が鏡護に付き合えって命令したから、鏡護は嫌々私と付き合ってくれてるんじゃないかって」

「私もです。私の事も、実はあの時の場の勢いでオッケーしてくれたんじゃないかと不安で仕方なくて……」

「そっか。ごめんね、2人とも。僕がもっと早く伝えていたら2人もそんな不安を抱えずに済んだのに……」

「でもね。今日はっきりとわかったわ。鏡護は本当に私と瑞希の事をちゃんと考えてくれてる、愛してくれてるんだって」

「はい。だから私も優子ちゃんも、もう不安を感じることはありません。絶対です。だって――」

そうして2人は顔を見合わせて笑顔を交わすと、

「「アタシ（私）も鏡護（君）のことが大好きだから（ですから）。愛してるわ（います）、鏡護（君）」」

そう言ってくれました。

僕は2人の気持ちが凄く嬉しくて、自分が出来る最高の笑顔と共に自分の気持ちを言葉にしました。

「ありがとう。僕も何度でも言うよ。いつまでも変わらず2人の事を愛し続けるよ。優子、瑞希」

「「はい」」

その時2人が浮かべた笑顔は今まで見たことのあるどの笑顔よりも光り輝いていました。

その後3人で手紙の内容を確認して、送り主には申し訳ないけど直接会ってお断りする、ということで話はつきました。

ところで明久の方はというと、散々クラスメイトから追いかけ回されたあげくに手紙の差出人がどうやら男子生徒だったようで、ボロボロになった身体を涙の海に沈めていましたとさ。

めでたしめでたし・・・・・？

補習第3問　『僕と明久の恋文騒動　～伝えたい「愛してる」のコトバ～』（後）

あとがき

作者　「はい、というわけで番外短編2つをお送りしました！」

鏡護　「……なんていうか、2編に渡って明久哀れって感じだったね」

作者　「そういうお前は幸せいっぱい夢いっぱいって感じだったな」

鏡護　「確かに自分でもそう思う。否定はしないよ」

作者　「まさに人生勝ち組だよな。ほんと羨ましい」

鏡護　「そう言うなら作者さんも彼女を作ればいいじゃない」

作者　「……グスン」

鏡護　「うわぁっ!?どうしたのさ、いきなり膝を抱えて座り込んじゃって」

作者　「俺なんてどうせ彼女いない暦＝年齢のダメ男さ……」

鏡護　「……なんかごめんなさい」

作者　「勝者が謝るんじゃねぇやい！余計こっちがいたたまれなくなるわ！」

鏡護　「今度は逆ギレされた！？」

作者　「ええい、次回予告いってやる！

次回、第１２問『出し物決めって結局は無難に落ち着くよね（仮）』

を、ヨロシクだコンチクショウめ！」ダッ！

鏡護　「あ、ちょっと作者さん！どこ行くのさ！待って！

……ってもういなくなっちゃったよ。

あ、そうだ！皆さん、次回もよろしくお願いしますね！」

第１２問　『出し物決めって結局無難なトコに落ち着くよね』（前書き）

―Ｓｉｄｅ　？？

「……雄二」
「なんだ？」
「……『如月ハイランド』って知ってる？」
「ああ。今建設中の巨大テーマパークだろ？もうすぐプレオープンっていう話の」
「……とても怖い幽霊屋敷があるらしい」
「廃病院を改造したっていうアレか？面白そうだよな」
「……日本一の観覧車とか」
「おお、相当デカいみたいだな。聞いた話だけでも凄そうだ」
「……世界で三番目に速いジェットコースターも」
「速い上に色々な方向を向いたり、ぐるぐる回ったりするっていうヤツか。どんなモンなのかわからんが、考えるだけでもワクワクしてくるな」
「……他にも面白いものが沢山ある」
「それは凄いな。きっと楽しいぞ」
「……それで、今度そこがオープンしたら、私と」
「ああ、お前の言いたいことはよくわかった。そこまで行きたいなら――」
「……うん」
「今度友達と行ってこいよ」
「……握力には自信がある」
「ぐあぁぁっ！アイアンクローはよせっ！」
「……私と雄二、２人で一緒に行く」
「オープン直後は混みあってるから嫌ぐぎゃぁっ！」

「……それなら、プレオープンのチケットがあったら行ってくれる？」
「プ、プレオープンチケット？ケホッ、あれは相当入手が困難らしいぞ？」
「……行ってくれる？」
「んー、そうだなー、手に入ったらなー」
「……本当？」
「あーあー。本当本当」
「……それなら、約束。もし破ったら――」
「大丈夫だっての。この俺が約束を破るようなヤツに見えるか？」
「……この婚姻届に判を押してもらう」
「命に代えても約束を守ろう」

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第１２問　『出し物決めって結局無難なトコに落ち着くよね』

桜の花びらが徐々に坂道から姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。
僕達の通う文月学園では、新学年になって最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつありました。

お化け屋敷の為に教室を改造し始めるクラス。焼きそばの為に調理器具を手配するクラス。この学校ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。学園祭準備のためのＬＨＲの時間は、どのクラスも熱気を帯びています。

そして我らがＦクラスはというと――

「清涼祭、何やろうか？」

「私は鏡護君と一緒にできれば何でもいいです！」

「フフッ。まったく瑞希ったら。ウチは喫茶店みたいな定番がいいと思うけど」

「それならワシはクラスで演劇をしてみたいのう」

――ガラガラッ

「お～い、お前達。話し合いは進んでいるか？」

「あ、西村先生。どうもです」

「……天水。お前達以外のヤツらはどこへ行った」

「ああ、それでしたら」

そう言って僕は窓の外を指差しました。

すると――

『吉井！こいっ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！』

校庭の方からそんな声が聞こえてきました。

「……アイツらは」

おおっ！一瞬にして西村先生が修羅の表情に変わりました。

「お前達はこのまま教室で待っていろ。俺はあのバカどもを連れ戻してくる」

そう言うと、西村先生は教室を出て行きました。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃならない時期が来たんだが――」

西村先生によって野球を中断された男子達が戻ってきて、早速クラス代表の雄二が話を始めています。
ですが・・・・・・

「とりあえず、議事進行ならびに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を預けるので、後は任せた」

心の底からどうでもよさそうな顔の雄二。
まったく・・・・・相変わらず自分が興味ないことには全力で無気力なんですね。全てを誰かに押し付けて、自分はサボって寝る気なのでしょう。

「鏡護君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

試召戦争以来、僕の隣に席を移した瑞希が周囲の邪魔にならない程度に小声で話しかけてきました。
今日も可愛い笑顔が僕の目に眩しく映ります。

「直接本人に聞いたわけじゃないけど、とりあえず楽しみにしてるって事はなさそうだね。興味があればもっと積極的に動くはずだから」

「そうなんですか……。寂しいですね……」

おや？いつも明るい笑顔の彼女の表情の中に、一瞬ですが翳りが差したように思います。
・・・・・気のせいでしょうか？

「鏡護君は興味ありますよね？」

少しだけ上目遣いで僕を覗き込んでくる瑞希。そ、それは反則です。・・・・・

「もちろんだよ。瑞希や優子と付き合い始めて最初の学校行事だからね。たくさん思い出を作りたいな」

「はいっ！私も鏡護君や優子ちゃんといっぱい思い出を作りたいです！」

「ははっ。瑞希はそんなに学園祭が楽しみなんだ」

「当然です！だって――ケホケホッ」

と、瑞希が急に口に手を当てて咳き込みだしました。顔も赤いようですし、まさか風邪でしょうか？

「大丈夫？」

「は、はい。すいません……」

ちょっと苦しかったのか、瑞希の目が少し潤んでいます。そういえば最近瑞希が咳をするのをよく見る気がします。

試召戦争に負けたおかげで、現在僕達の教室の設備は腐った畳と卓袱台から更にランクダウンして傷んだござとみかん箱になっています。普通の机と椅子に比べると格段に疲れますし、明らかに不衛生です。身体の弱い彼女が体調を崩してしまうことも当然考えられます。

「早く何とかしないとなぁ……」

衛生的な環境と、身体に負担のかからない学習設備。この2つを用意しないと、近い将来瑞希は必ず倒れてしまうでしょう。試召戦争が再び解禁されるまではまだ2ヶ月程あります。できればそれまでに何とかしたいですね。

「んじゃ、実行委員は島田ということでいいか？」

不意に聞こえた雄二の言葉で沈みかけていた思考を引き戻されました。そういえば今は学園祭に向けた話し合いの最中でしたね。

「え？ウチがやるの？う～ん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

突然の指名に難色を示す島田さん。

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？私ですか？」

突然明久に水を向けられて、瑞希が首を傾げています。まったく、いちいち仕草が可愛くて困りますね。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちに時間切れになるだろう」

この場合は雄二の意見が正しいと僕も思います。瑞希は優しすぎる娘ですから、少数を切り捨てることができないでしょう。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「あれ？そうなの？」

初耳だった僕は思わず彼女に聞きました。

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

小さな手をぎゅっと握り締める瑞希。ああっ、だからいちいち仕草が（ｒｙ

「あれって確か学校の宣伝みたいなイベントなのに。２人とも物好きだなぁ」

僕らの通うこの文月学園には、世界中から注目を集めている『試験召喚システム』があります。なんでも今年はそのシステムを世界に公開する場として、清涼祭期間中に『試験召喚大会』なるイベントを企画しているそうです。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってばお父さんを見返すんだって言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Ｆクラスのことをバカにされたんです！許せません！』って怒ってるの」

「ふ～ん。瑞希が怒るなんて珍しいね」

「だって、皆の事を何もわかっていないくせに、ただFクラスだって理由だけでバカにするんですよ?……それにFクラスには鏡護君もいるのに（ボソッ）。許せません！」

「……」

多分今聞こえた小声の部分が理由の大部分を占めてるんじゃないかと思うのは僕の自意識過剰ではないと思います。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

なるほど。確かに学年次席の実力を持つ瑞希と問題さえ読めればそれなりの点が取れる島田さんが組めば、優勝も不可能ではないでしょう。

「4人とも。こっちの話を続けていいか?」

「あ、ごめん雄二。島田さんが実行委員になるって話だったよね」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ?」

「ん～……。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……」

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が2人を選んで決選投票をしたらいいだろう」

皆もいいな、と雄二がクラスメイト達に確認します。すると教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきました。

『吉井が適任だと思う』
『やはり坂本がやるべきじゃないか？』
『いや木下はどうだ？』
『天水がいいと思うんだが』
『姫路さんと結婚したい』
『ここは須川にやってもらった方が』

・・・・・最後から2人目。顔は覚えましたよ。僕の瑞希に手を出そうとはいい度胸です。後で地獄を見せてあげましょう。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

そうして秀吉が明久に1票を投じました。僕も便乗しましょう。

「僕も副実行委員は明久がいいと思うよ」

「ちょっと秀吉に鏡護。僕だってそういう面倒な役はできればパスしたいんだけど」

「それは皆も同じ意見じゃ。ならば適任の者にやってもらうのが良いじゃろう？」

「そうだよ。僕達は明久が適任だと思ったからこそ推薦したんだから」

明久が若干不満そうな顔をしていますが、正直言ってこれは雄二によって仕組まれた予定調和です。始めから明久には選択肢など存在

しないんですよ。

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中の中から2人を選んでくれ」

「そうね～。それじゃ……」

ある程度候補者が挙がったところで、島田さんがボロボロの黒板に決選投票候補者の名前を書き連ねました。

『候補？……吉井』

『候補？……明久』

ふむ。やはり予定調和ですね。島田さんもよくわかっています。

「さて。この2人のどちらがいいか、選んでくれ」

「ねぇ雄二。美波の候補の挙げ方はどう考えてもおかしいと思わない？」

『どうする？どっちがいいと思う？』

『そうだなぁ……。どちらもクズには違いないんだが……』

「こらぁっ！まじめに悩んでるフリをするんじゃない！あと、クラスメイトを平然とクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

明久、君もクラスメイトをクズ呼ばわりしたことに気付いてますか？

「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」

ええ。全くもってその通りです。

「んじゃ、後は任せたぞ。ふあぁ～……」

そして雄二はというと、2人にバトンを引き継ぐと大あくびをして席へと戻ってしまいました。

しばらく皆から意見を募ったところ、次のような案が挙がりました。

【候補?:写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補?:ウェディング喫茶『人生の墓場』】

【候補?:中華喫茶『ヨーロピアン』】

・・・・・明久の斬新過ぎるネーミングセンスには脱帽です。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

そこへ西村先生がやってきて、黒板を見て深くため息を吐くと一言。

「……補習の時間を倍にしたほうがいいかもしれないな」

その気持ち、お察しいたします。しかしクラスメイト達はというと、

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

・・・・・必死で言い訳をしていますね。というか自分達の保身の為に明久を簡単に売るとはさすがＦクラスです。

「馬鹿者！みっともない言い訳をするな！」

西村先生の一喝で静まりかえる教室。

さすがは西村先生。Ｆクラスの皆の態度が気に入らなかったんですね。

「先生は、馬鹿な吉井を選んだ事自体が頭が悪い行動だと言ってるんだ！」

・・・・・一瞬でも感動してしまった僕が馬鹿でした。西村先生もだいぶ思考がＦクラスに染まってきています。

「まったくお前たちは……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

ため息まじりの鉄人の台詞を聞き、皆が目を輝かせる。

『そうか！その手があったか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に活気づく皆。設備への不満を理由に試召戦争を起こした僕達ですから、当時よりも更にランクの低い設備など我慢できるわけがありません。

しかし今更そこに気がつくとは、つくづくバカの集まりと言いますか・・・・・

「み、皆さんっ！頑張りましょう！」

すると瑞希が立ち上がり、胸の前で小さくガッツポーズを作りながら声をあげました。

彼女がここまで積極的に動こうとするとは珍しいですね。何か特別な理由でもあるのでしょうか？

そして彼女の言葉をきっかけに、再び教室内で活発な議論が繰り広げられます。

しかし始めこそ良かったものの、次第に脱線し始めると島田さんが静止を呼びかけても効果なし。

ちょっとコレは良くないですね・・・・・こういう時に頼みの雄二は使い物になりませんし。

仕方ありません。僕が何とかしましょう。

そうして僕はコンタクトを外して、壇上に上がると――

――バンッ！

思い切り黒板を叩いて注目を集めるとクラスメイト達に向かって脅迫を始める。

「いい加減にしろ、お前達！やる気があるのは構わんがこのままでは埒が明かないから、出し物は今挙がっている3つから決めることにする。文句のあるヤツは俺が相手してやるからかかってこい」

『ヤバい。蒼氷の銀狼が起きたぞ』

『触らぬ狼に祟りなし、だな』

『ああ。アレには逆らわない方がいい』

なんだか余計な呼び名がつけられた気がするが今は静かになったことを良しとしよう。

「……いないようだな。島田、先に進めてくれ」

「う、うん。ありがとう天水。それじゃ、写真館に賛成の人！――はい、次はウェディング喫茶！――最後に、中華喫茶！」

島田が声をあげる度にクラスメイト達が手を挙げる。

結局最終的には僅差だったが、Fクラスの出し物は中華喫茶に決まった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

須川、料理出来たのか

「……（スクッ）」

おや、康太？

「康太、料理出来るのか？」

「……紳士の嗜み」

そんな嗜みは聞いたことがないぞ。

しかしどうせ康太の事だ。チャイナ服見たさに通い詰めているうちに覚えたんだろう。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋の所、ホール班はアキの所に集まって！」

・・・・・明久が勝手にホール班のトップにされているんだが、そこはスルーなのか？

「それじゃ、私は厨房班に――」

瑞希が客の命の危険を口にしようとするが、そうはさせん！

「ダメだ、瑞希。君の料理にはまだ合格を出すわけにはいかないからな。これは師匠命令だ」

瑞希の料理の危険性に気付いた俺は彼女と付き合い始めてからというもの、時々料理を教えていた。

最近になってようやくおにぎりと卵焼きをまともに作れるようにな

ったくらいなのだ。
今の彼女のレベルでは、学園祭の喫茶店でお客さんを相手にすることはまだまだ許されることではない。

『鏡護、ナイス！』
『鏡護、グッジョブじゃ』
『……（コクコク）』

見ると彼女の料理の威力を知る皆が俺に向かって親指を立てていた。
ふと雄二を見てみると、寝ているはずなのに小刻みに身体が震えていた。瑞希の料理を夢にでも見たか、雄二？

「うぅ……。さすがに鏡護君にそう言われては仕方ありませんね」

目に見えて落ち込む瑞希。・・・・・少しキツく言い過ぎてしまったな。

「だ、大丈夫だ瑞希。君は可愛いから、むしろホールに出てお客さんをもてなしてくれた方がお店としても利益になるんだ」

「か、可愛いだなんて……／／／／わかりました！鏡護君がそう言うなら、私はホールで頑張ります！」

「そうそう。姫路さんは可愛いんだからそれが1番痛ぁっ！み、美波！僕の背中はサンドバッグじゃないよ！？」

「アキ。ウチは厨房にしようかな～？」

「うん。適任だと思う」

明久よ、お前は自分の命が余程惜しくないと見えるな。

「鏡護はどっちにするのじゃ？」

「俺か？俺は料理ができるからな。当然厨房に入るつもりだ」

「そうか。ワシも厨房にしようかの」

「何を馬鹿なことを言っているのさ、２人とも。秀吉は可愛いし、鏡護も試召戦争の時みたいに女装すれば綺麗なんだからホールに決まってみぎゃあぁ！み、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

自ら更に墓穴を掘るとは、やはり明久はさすがだな。

「明久はああ言うとるが、どうするのじゃ鏡護？」

「まあ女装するのは別に構わないから少しくらいなら接客もするか」

「ならばワシもそうするとしよう」

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そう、ですね……。それが、いいと、思います……」

こんな幕開けで果たして大丈夫なのだろうか。かなり不安だ・・・・

そして放課後。

「アキ、ちょっといい？それとできれば天水も」

明久と僕は島田さんに声を掛けられていました。

「どうしたの、美波？」

「島田さん、何かあったの？」

「えっと、ちょっと相談したいことがあってね……」

深刻そうな顔をする島田さんを見ると、どうやらあまり良い話ではなさそうです。

「相談？僕達で良ければ聞かせてもらうけど」

「そうだね。で、どんなこと？」

「2人ともありがとう。多分2人に言うのが一番だと思うんだけど――その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

・・・・雄二ですか。どうでしょう。話し合いの最中ずっと寝ていたくらいですから、本当にやる気はないんでしょうし。

「う～ん、それは難しいかなぁ。雄二は自分が興味ないことには驚

くほど冷たいからね」

「でも、アキが頼めば動いてくれるんじゃない？だって……アンタ達は愛し合ってるんでしょう？」

わかります。明久が受けで、雄二が攻めですよね。

「もう僕お婿にいけない！」

島田さんも真顔でそんなことを言ってはいけませんよ。

そんなだから――

「どうして僕が雄二なんかと！だったら僕は、断然秀吉や鏡護の方がいいよ！」

ほら、明久がバカなことを叫ぶことになったじゃありませんか。

・・・・・というか秀吉はともかく、どうして僕の名前が出るんでしょうね？

「あ、明久！？」

そこへ偶然近くを通りかかった秀吉の動きが止まります。

なんていうかお約束ですね。

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ほら、歳の差とか……」

秀吉、そこで顔を赤らめて俯かないでください！それに君と明久の

間にある障害は歳の差ではないでしょう？

それに明久！君も万更でない顔をするんじゃありません！

「……それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

島田さんも平然と話を流さないでください！

「え？あ、うん。そういうことになるかな」

「天水はどうにかできないの？このままじゃ……」

目を伏せ、沈んだ面持ちになる島田さん。

「ところで、おぬしらは何の話をしているのじゃ？何やら随分と深刻な話をしておるようじゃが？」

「深刻って程の話じゃないんだけど、喫茶店の経営と設備の改善の話で――」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ……」

「え？どういうこと？」

「そういえばまだ理由を聞いてなかったね。話してくれる？」

「うん……本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だから一応秘密の話ってことにしてよね？」

「う、うん。わかった」

「「了解（じゃ）」」

「実は瑞希なんだけど……あの子、転校するかもしれないの」

・・・・・なるほど。朝から瑞希に感じてた違和感の正体はコレだったんですね。それにしても僕には話して欲しかったですね・・・・・

「み、美波！ひ、姫路さんが転校って、どういうことさ！！」

島田さんに詰め寄る明久。

「どうもこうも、そのままの意味よ。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「転校の原因はやっぱり『Ｆクラスの環境』かな？」

「えっ！？どういうことさ鏡護！」

今度は僕に詰め寄ってきます。

「簡単な話だよ。明久、Ｆクラスの設備は不衛生で快適とはとても言えず、クラスメイトはこう言っては何だけどバカばっかり。親からすれば、体が弱くて成績優秀な娘をそんな場所で勉強させたいとは思わないよ」

「うっ、確かに……」

「うん、天水の言う通りなのよ。だから試召戦争の時みたいに、坂

本にFクラスを引っ張ってもらって喫茶店を成功させたい。そしてFクラスの設備を向上させたいの！」

「なるほどのう。それならば確かに雄二の力が必要じゃな」

「瑞希も両親に抵抗して『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらう』とか考えてるんだけど、やっぱり健康の事を考えると設備をどうにかしないと。アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……？」

島田さんが明久を探るような目で見ます。

明久はその意味に気付いている．．．．．わけがないですね。

「もちろん嫌に決まってるさ！姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、鏡護であっても！」

そんな明久の言葉には満点をあげたいと思います。

「そっか……うん、アンタはそうだよね！」

島田さんは本当に嬉しそうに頷いています。

「わかった。そういうことなら、何としても雄二を焚きつけてやるさ！」

「うん。自分の恋人の事も守れないようじゃ、男として失格だからね」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては、黙っておれ

ん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないと」

明久が携帯を取り出して、雄二に連絡を取ります。

数コールした後・・・・・

「あ、雄二？ちょっと話が……え？雄二、今何してるの？……雄二！？もしもし！もしもーし！」

と、何やら意味不明の会話が行われたらしく、通話が切られました。

「坂本はなんて言ってた？」

「えっと、『見つかっちまった』とか『鞄を頼む』とか言ってた」

「……何それ？」

「多分また霧島さんから逃げ回ってるんじゃないかな」

「そうじゃな。あれはああ見えて、異性には滅法弱いからの」

「そうすると、坂本と連絡を取るのは難しいわね」

「いや、これはチャンスだ」

「え？どういうこと？」

明久の言葉の意味がわからない、といった様子で島田さんが首を傾げます。

僕は明久とアイコンタクトを交わして頷き合います。

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況ってことだよ。島田さんと秀吉にも協力して欲しいんだけど」

「それは良いけど……坂本の居場所はわかってるの？」

「大丈夫だよ、美波。相手の考えを読めるのは、雄二だけじゃないからね」

「じゃあ、明久は雄二を頼むよ。タイミングもそっちに任せる」

「了解」

それからしばらくして、何故か優子と西村先生の声が聞こえたような気がしましたが、なにかあったんでしょうか？

・・・・・２人が戻ってきたら聞いてみましょうか。

更にそれから数分後。

僕の携帯に明久から着信が来ました。

「じゃあ２人とも。作戦通りによろしく」

「本当にこんなことで坂本を引っ張り出せるの？」

「大丈夫大丈夫。さあ、電話に出て」

「わかったわ。……もしもし坂本？……ちょっと待って、今代わるから」

「（頼むぞ秀吉）」

「（了解じゃ）……雄二、今どこ？」

秀吉がそう言った途端、携帯の通話が切れたようです。

「さすが秀吉。相変わらず素晴らしい声真似だったよ」

「そうね。ほんと凄かったわ」

「そう手放しにほめられると、なにやらむず痒いのう」

少しして、雄二を連れた明久が教室に戻ってきました。

2人に途中で優子に会わなかったかと聞いてみたら、雄二が隠れていた女子更衣室で鉢合わせしたという返事が。

・・・・・もちろん2人にはたっぷりと制裁（おしおき）をプレゼントしてあげましたが、なにか？

第１２問　『出し物決めって結局無難なトコに落ち着くよね』（後書き）

あとがき

作・鏡　「「祝っ！ＰＶ４０，０００＆ユニーク３，０００突破～！！」」

作者　「いやぁ～、なんだか知らぬ間にこんなことになってました！」

鏡護　「ちゃんとこまめにチェックしないから今更気付くんじゃない」

作者　「執筆作業に集中してうっかり忘れてたんだよね」

鏡護　「はぁ……。まあ、これからはちゃんとしてね？」

作者　「応ともさ」

鏡護　「それから、ついに感想ももらっちゃったみたいだね」

作者　「そうなんだよ。嬉しかったなぁ～」

鏡護　「これを励みにまた頑張らなきゃね」

作者　「もちろん！感想第１号をくださったｓｉｌｖｅｒさん、本当にありがとうございます！」

鏡護　「ありがとうございます」

作者　「これからも皆さんからのご感想を心よりお待ちしております！」

鏡護　「お待ちしてま～す！」

作者　「それではテンションあげて次回予告、いってみよ～！イェ～イ！

次回、第１３問『目上の人にはきちんと敬語で話しましょう（仮）』

を、」

作・鏡　「「お楽しみに～！」」

第１３問　『目上の人と話す時は正しく敬語を使いましょう』（前書き）

清涼祭　アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください
『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え
『クラスメイトとの思い出』
教師のコメント
成程、お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。
写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え
『Ｈな本（訂正）　成人向けの本』
教師のコメント
取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え
『カロリー』
教師のコメント
この回答に、君の生命の危機が感じられます。

天水鏡護の答え
『恋人達との平穏な日――』
教師のコメント
どうして回答が途中で途切れているのか、先生はとても気になります。

第13問　『目上の人と話す時は正しく敬語を使いましょう』

「そうか。姫路の転校か……」

戻ってきた明久達に制裁（おしおき）をした後で、雄二には早速事情を説明しました。

「そうなると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

オンボロの教室を見回して雄二がそう口にします。

「不十分？どうして？」

明久。君はもう少し自分で考えることを覚えましょうね。

「姫路の父親が転校を勧めた要因はおそらく３つ」

そう言って雄二は３本の指を立てました。

「まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したらその利益でなんとかできるだろう」

「２つ目は老朽化した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「１つ目は道具で、２つ目は教室自体ってこと？」

「そうだ。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教

室自体の改修となると、学校側の協力が不可欠だ」

その通りです。教室の改善など、生徒がお金を貯めたところでどうなるものではありません。

「そして最後の3つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促すことが難しい学習環境ということだ。現在Fクラスで姫路と同等の学力を持っているのは、偶然Fクラスに迷い込んだ鏡護だけだからな」

迷い込んだとは言い得て妙です。確かに僕は本来ならここにいるはずのない、いわばイレギュラーですからね。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。1つ目だけならともかく、2つ目と3つ目は難しいのう」

「そうでもないさ。3つ目の方は姫路と島田で手を打ってあるんだろう？」

そうです。先程2人は召喚大会に出場すると言っていました。もし大会で優勝することができれば、Fクラスでも問題ないと思ってもらえることでしょう。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

そう言う島田さんの表情はいつになく優しい感じに見えます。まる

で面倒見の良いお姉さんですね。もしかして、歳の離れた弟か妹でもいるのでしょうか？

「翔子が参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。姫路と島田の優勝は充分ありえるだろう」

「そうだね。２人ならきっと何とかなるよ」

確かにもし霧島さんが出てくるようだと、当然ペアの人もＡクラスでしょうから、優勝は相当苦しくなるはずです。彼女が召還大会に無関心で助かりました。

「本当なら姫路抜きでＦクラスの生徒が優勝するのが望ましいけどな」

「それはまあ……仕方ないんじゃない？」

「……いや。鏡護、お前ならできるんじゃないか？」

「！そういえばそうだよっ！鏡護も出てみない？」

「えっ！？……確かに瑞希の転校が懸かってるんだもんね。わかった、大会に出るよ。」

「ならばワシが鏡護と一緒に出るとするかの」

僕も召喚大会のようなイベントはあまり好きではありませんでしたが、今回は恋人の転校が懸かっているので、僕個人の好き嫌いなど言っていられませんよね。

するとすかさず秀吉が協力を申し出てくれました。ありがたいです。

「そうだね。お願いできるかな、秀吉」

「もちろんじゃ」

「で、坂本。それはそうと、２つ目の問題はどうするの？」

島田さんの疑問に、雄二は至極あっさりと答えました。

「どうするも何も学園長に直訴したらいいだけだろ？」

「それだけ？僕らが学園長に言ったくらいで何とかしてくれるかな？」

「あのな。ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

確かに雄二の言う通りここは一応教育機関ですから、交渉が上手くいけば３つの問題点が一気に解決する可能性もあります。

「それなら、早く学園長に会いに行こう」

思い立ったが吉日、ですね。

「そうだな。学園長室に乗り込むか。秀吉と島田は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

「あ、秀吉は僕達の召喚大会へのエントリーもしておいてね」

「わかったわ。そっちは任せたわよ」

「了解じゃ」

そうして僕と雄二と明久は学園長室に向かいました。

＊　　＊　　＊

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

新校舎の一角にある学園長室まで来ると、扉の向こう側から誰かが言い争っている声が聞こえてきました。

かろうじて『賞品』、『如月ハイランド』という単語が聞こえてきましたが、何のことでしょう？

「どうした、明久、鏡護」

「いや、中で何か話をしてるみたいなんだけど」

「学園長は中にいるみたいだよ。良かったね、無駄足にならなくて」

「そうか。なら、さっさと中に入るぞ」

「失礼しまーす」

「あ、ちょっと2人とも！」

早速学園長室をノックするや否や、雄二と明久は中へ入っていってしまいます。・・・・・せめて返事があるまで待ちましょうよ。そうは思いましたが、遅れてはいけないので2人の後に続きます。

「本当に失礼なガキどもだねぇ。普通は返事を待つもんだよ」

雄二達もそうですが、この人も大概ですね・・・・・

そう言って僕達を出迎えたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長です。彼女は試験召喚システム開発の中心人物でもあります。研究者寄りの思考の持ち主なので、随分と規格外な所が多い人物です。

「やれやれ。取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

それに相対していたのは、鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い、竹原教頭でした。

メガネをいじりながら、学園長を睨みつけています。

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？　負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

「さっきから言っているように、隠し事なんてないね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう。……それでは失礼させて頂きます」

そう告げると、竹原教頭は部屋の隅に一瞬視線を送ってから部屋を出て行きました。

・・・・・ふむ。これは何かありそうですね。

竹原教頭には実は陰であまりよろしくない噂もついて回っているのです。

曰く、学園長を今の座から失墜させようとしているとか、そのために他校の経営者達と密談の場を持っているとか。

「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があってきました」

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀ってモンだ。覚えておきな」

・・・・・いくら学園長とはいえ、貴女のような人に礼節を説かれるとは思いませんでしたよ。

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二」

「同じく2年F組の天水鏡護です」

「それでこっちが――」

まず雄二と僕が名乗り、そのまま雄二が明久を示し、紹介します。

「――二年生を代表するバカです」

「ほぅ……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と天水と吉井かい」

「ちょっと待って学園長！　僕はまだ名前を言ってませんよね！？」

まさか先程の紹介で明久の名前が即座に連想されるとは、さすがにちょっと明久に同情してしまいます。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

まるで映画の悪役のように口元を歪める学園長。これがこの学園で一番偉い人だと思うと、何となく嫌ですね。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったらさっさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

相変わらず挑発的な学園長の物言い。

それにもかかわらず、雄二の態度や言動が未だに落ち着いたままであることに僕は驚いていました。雄二も意外と大人だったんですね。

「Fクラスの設備について、改善を要求しにきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい限りさね」

「今のFクラスの教室は、学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動に綻びが出始めました。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が高いと思われます」

丁寧な言葉の中に、所々からトゲが覗いています。これは相当キレてますね。

「要するに、隙間風の吹き込んでくる教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババァ、というワケです」

はい。もう完全にいつもの雄二に戻ってしまいました。

そんな慇懃無礼な雄二の説明を受けて、学園長が何やら思案顔になって黙りこみました。

「あの、学園長……？」

沈黙に耐えかねた明久が学園長に問い掛けます。

「……ふむ、ちょうどいいタイミングさね……（ボソッ）」

タイミング？・・・・・一体何のことでしょう？

「よしよし。お前達の言いたいことはよくわかった」

「え？それじゃ、直してもらえるんですね！」

事態が解決するのでは、と期待を持った明久が喜びの声を上げます。
ですが、この流れだと――

「却下だね」

ほら、やっぱり。

「雄二、鏡護。このババァをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。本音が漏れてるよ」

「ハッ！しまったぁっ！」

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババァ」

「そうですね。聞かせてください、ババァ」

「……2人とも、それで本当に話してくれると思ってる？」

学園長も呆れ顔で2人を見ています。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちょろいガキどもが」

「お言葉ですが学園長。このままでは本当に体の弱い子はいつか倒れてしまいます。それに学園としても教室設備のせいで生徒が倒れた、なんて話が外に出るのは好ましくないんじゃありませんか？」

「……まったく無駄に頭の働くガキだね。……いつもならバッサリ斬り捨てるところだけど、今回は特別にこちらの頼みも聞くなら話に乗ってやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

・・・・・しかし交換条件ですか。何やらキナ臭いものを感じますね。

「……」

隣の雄二を見ると、口元に手を当てて考え込んでいます。やはり何か思うところがあるのでしょう。

「その条件って何ですか？」

僕達2人が黙り込んでしまったので、代わりに明久が質問しました。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まぁ」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「え？優勝賞品？」

なるほど・・・・・。あの大会には優勝賞品なんてものがあったんですね。

「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、

副賞には『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」

ペアチケット、と聞いて雄二がピクッと反応したが、どうしたんでしょう？

「はぁ……。それと交換条件に何の関係が」

「話は最後まで聞きな。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「知りません」

「明久……。正解は『乞食』だよ」

「へぇ～。さすがは鏡護」

「……それでこの副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「回収？それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆すわけにはいかないんだよ」

本当に学校経営は竹原教頭に一任しているんですね。召喚システムの方に時間を取られているのは知ってましたが。

「契約する前に気付いて下さいよ。学園長なんだから」

「うるさいガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

学園長が苦々しげに眉をしかめました。口調とは裏腹に、少しは責任を感じているようです。

「悪い噂っていうのはどういうことですか？」

つまらない内容なんだけどね、と学園長は前置きして話を続けました。

「如月グループは如月ハイランドに１つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

「？それのどこが悪い噂なんです？良い話じゃないですか」

「そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやってきたカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、なんだと！？」

すると今の話を聞いた雄二が突然大声を上げました。

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろう！今ババァが言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グル

ープの力で強引に結婚させる』ってことだぞ！？」

「う、うん。言い直さなくても分かるけど」

こんなに動揺している雄二を見るのは初めてですね。ちょっと新鮮です。

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「くそっ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな……」

「え？どういうこと？」

「明久、つまりはこういうことさ。そんな風に話題性溢れる文月学園の生徒が学生から結婚までいけばジンクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことだよ」

雄二は悔しげに唇を噛んでいます。君も大変そうですね。

「ふむ。流石は神童や《天眼の賢者》と呼ばれているだけはあるね。頭の回転はまあまあじゃないか」

学園長の言葉に、僕はちょっと引っ掛かりを覚えました。

「おや。雄二のはともかく、僕のその名前まで学園長がご存じだとは知りませんでしたね」

「いや、アタシも今さっき思い出したんだけどね。やっぱりアンタがそうだったのかい」

「ええ、まぁ。しかし、あまりあちこちに言いふらさないでくださいね。僕は日々を平穏無事に過ごしていたいんですから」

「そうかい。そういうことなら他言はしないよ」

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

明久、その考えは甘いですよ。“あの”霧島さんがそんなことを許すはずがありません。

「……絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……。俺の、将来は……！」

雄二の目が虚ろになっています。大方、霧島さんに『チケットが手に入ったら一緒に行く』などと安請け合いでもしたのでしょう。

「雄二、もしかしてペナルティは『霧島さんとの婚姻届に判を押す』とか？」

軽い冗談のつもりで雄二にかまをかけてみました。

「……鏡護、笑えない冗談はよしてくれ……」

・・・・・どうやら当たりだったようです。

「ま、そんなワケで、本人の意志を無視して、うちの可愛い生徒の

将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

果たしてこの人が本当に生徒を可愛いと思っているかは甚だ疑問ですが。

「つまり交換条件ってのは――」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか。無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前達に召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

「……僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

明久。今返事に間が空いたということは、そういう手段を考えていましたね？

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

両方をお願いするのは高望みが過ぎる、ということですね。

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいい」

「そこをなんとかオマケして設備の向上をお願いできませんか？僕らにとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」

「それで？」

「もしも喫茶店がうまくいかずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって大会に集中できずに僕らも学園長も困ったことに……」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！設備の向上を約束してくれたら大会だけに――」

「明久、無駄だ。ババァに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

「雄二の言う通りだよ、明久。これ以上は時間の無駄だ」

納得がいかない、という顔をした明久をなんとか宥めます。

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

学園長は『計画通り』といった顔をしてニヤリと笑いました。

「ただし、こちらからも提案がある」

雄二がいきなり学園長に話しかけました。

「なんだい？言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一

回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

召喚大会は試合の派手さを出すためにも、毎試合科目を変えて戦うことになっているそうです。もちろん科目は全員共通です。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

まるで学園長を試すかのように雄二の目つきが鋭くなりました。

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

雄二の目つきが更に鋭くなります。

「さて。そこまで協力するんだ。当然、召喚大会で優勝できるんだろうね？」

学園長が念を押してきます。

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

雄二の表情がやる気全開のそれになっていました。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

明久もすっかりやる気モードですね。

「そっちのアンタはどうするんだい？」

学園長が僕に話を振ってきました。

「一応僕も大会にはエントリーしてるので、やるだけやりますよ」

「そうかい。それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「「了解っ！」」」

こうして、今ここに文月学園最低コンビが誕生しました。

――コンコン

「入んな」

「失礼します」

「おや、どうしてアンタがまた来るんだい？話はさっき終わっただろうに」

「学園長にちょっとしたお話がありまして」

「アタシに話だって？」

「ええ」

あの後一度学園長室を後にしてから、僕は再びここに戻ってきました。

「まずはこの部屋にある『邪魔なもの』をどかしてしまいますので、ちょっと待っててください」

そう言って僕はコンタクトを外すと――

「『解析（アナリシス）』、起動（アウェイクン）」

『眼』の力を発動しました。

「……ほぅ。それが噂の『天眼』かい」

学園長が何か言っていますが、解析作業に集中している僕の耳には入りません。

「……『解析（アナリシス）』、終了（オーバー）」

たっぷり１０分程室内を見回して、僕はコンタクトを着け直しました。

そしてグルリと室内を回って、『解析』で見つけた『ある物』を回収します。

「お待たせしました」

――ガシャ

「これは……」

「ええ、そうです。これらはこの部屋に仕掛けられていた盗聴器及び盗撮用のカメラですよ。もちろん、既に動作はしていません」

「わかっちゃいたけど、これ程とはねぇ……」

「安心していいですよ。とりあえず今あった分はこれで全部ですから」

「そうかい。……それにしても、なかなか恐ろしい力だねぇ」

「……まあ昔はコレのせいで周りから避けられたりもしましたからね」

ちょっと昔を思い出してブルーな気分になってしまいます。

「……で、これらを取り除いてまでする話ってのはなんだい？」

僕の雰囲気の変化を気にしてくれたのか、学園長が話を進めます。

「先程の話の続き、ですよ」

「続き？はて、何のことだかね」

「シラを切っても無駄です。学園長がまだ僕達に今回の依頼の本当

の理由を話していないということはわかっているんですよ」

そう。僕が雄二達と別れてここに戻った理由はこれです。先程の学園長の話には引っ掛かる部分が多かったですからね。

「……その根拠は」

「そうですね……挙げようと思えば幾つか出せますが、一番の根拠は僕達に取引を持ち掛けたことですね。単にチケットを回収するだけなら、わざわざ僕達に頼む必要なんてありません。もっと高得点を取ることができて、確実に勝てる優勝候補を使えばいいんですから。それに優勝者に後で事情を話して譲ってもらうこともできたはずですしね。……つまりそこから導き出される答えは1つ。学園長の本当の目的はチケットではなくて、おそらく――」

「ああ、アンタの想像通りだよ。アタシはもう1つの賞品、『白金の腕輪』をあの2人に勝ち取って欲しかったのさ」

「理由をお聞きしても？」

「はぁ……。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね。……実はその腕輪には欠陥があって、入出力が一定水準を超えると暴走しちまうのさ。」

「……なるほど。だから新技術をデモンストレーションする際に、暴走を起こす心配のない『優勝する可能性を持つ低得点者』の存在が必要だったワケですね？」

「……本当に頭の良く回るガキだよ。2つの腕輪のうち片方の召喚フィールド作製用はある程度まで耐えられるんだけどねぇ……。も

う片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性があるのさ」

「もしかして後者は明久専用にするつもりですか？」

「まあそうなるだろうね」

「となると、その腕輪の暴走をわざと起こして学園長を失脚させようとする動きがあるはずです。そうすることで利益を得る連中――他校の経営者とその密通者による、ね」

「ああ。アタシもそれがわかってるから今回の取引を持ち出したのさ」

「ちなみに、その密通者っていうのは竹原教頭ですね？」

「まあ、『こんな物』をこの部屋に仕掛けられるのはアイツくらいだからね」

そう言って学園長は盗聴器とカメラの山を指し示します。

「わかりました。それではこちらにはあらゆる妨害があるものと思って準備をさせていただきます」

「任せたよ。ついでにこの話はアタシら2人だけの内密な話ってことにしといておくれ」

「了解です。あの2人には話しません」

そうして話を終えた僕は今後必要と思われる色々な事を頭に浮かべながら、帰宅の途につきました。

第１３問　『目上の人と話す時は正しく敬語を使いましょう』（後書き）

あとがき

鏡護　「……なんか物騒な話になってきたね」

作者　「まあ、これも今後への伏線の１つだな」

鏡護　「今から先が不安になってきたよ……」

作者　「こらこら。暗くなってばかりじゃ仕方ないだろう？」

鏡護　「でもやっぱり気になるよ」

作者　「大丈夫だって。次回はまだそう大した騒ぎは起きないから」

鏡護　「まだってことはこれから先には起きるんだよね？」

作者　「いい加減ネガティブ思考はやめい！」

鏡護　「……わかったよ。じゃあ次回の内容は？」

作者　「清涼祭初日、中華喫茶の営業風景と召喚大会１回戦の模様をお送りします」

鏡護　「よかった。とりあえず平和そうだね」

作者　「よ～し！それじゃ次回予告、いってみよ～！

次回、第１４問『清涼祭スタート！中華喫茶と召喚大会１回戦！』

を、」

作・鏡　「「よろしくお願いしま～す！」」

第１４問　『清涼祭スタート！中華喫茶と召喚大会１回戦！』（前書き）

清涼祭　アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え
『家庭用の可愛いエプロン』
教師のコメント
いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え
『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながら品品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを――』
教師のコメント
裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え
『ブラジャー』
教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

天水鏡護の答え
『清潔感があってあまり派手ではなく、しかし見る人を惹きつけるような服装』

教師のコメント

食べ物を扱う喫茶店だからこそ、見た目の清潔感は大事ですね。お客さんに対するアピールもできるとなお良い、といったところでしょうか。

第１４問　『清涼祭スタート！中華喫茶と召喚大会１回戦！』

――Ｓｉｄｅ　明久

清涼祭初日の朝。
僕らの教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店へと姿を変えている。

教室の至る所に設置されているテーブルは、他クラスで余った机や演劇部で使っている大道具のテーブルを拝借して、小綺麗なクロスをかけたものだ。
最初はＦクラスにあったみかん箱を重ねてテーブルにするつもりだったんだけど、話し合いの時に鏡護が、

「喫茶店は衛生第一だから、テーブルには他クラスで余った机を借りたりしてちゃんとしたものを用意すべきだ」

なんて熱弁を振るって、実際に他クラスと交渉を進めてくれたから実現したんだ。

「いよいよですね！」

「うん。室内の装飾も綺麗だし、学園祭レベルなら充分過ぎるくらいだよ。これなら上手くいくよね！」

「ええ、そうね。……いつもはただのバカに見えるけど、やっぱり坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「さすがはワシらの代表じゃな」

そしてこれらの作業がスムーズに進んだのは、認めたくないけどやっぱり雄二の統率力の高さによるところが大きかったと思う。

「……飲茶も完璧」

「おわっ！？」

いきなり背後からムッツリーニの声が聞こえてきた。いつもながら気配を消すのが上手いんだけど、常日頃からやる必要はあるのかな？

「ムッツリーニ、厨房の方はどう？」

「……味見用」

そう言ってムッツリーニが差し出したお盆には、陶器のティーセットと美味しそうな胡麻団子が載っていた。

「わあ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらで食べちゃっていいの？」

「……（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路さん、美波、秀吉の3人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いわ！」

「甘すぎないところも良いのう」

と、大絶賛。やっぱり女の子は甘い物が好きなんだなぁ、3人共。

「お茶も美味しいです……ああ、幸せ……」

「本当ね……」

姫路さんと美波の目がトロンと垂れる。そんなに美味しいのかな？

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「……（コクコク）」

ムッツリーニが残った1つを僕に差し出す。

楊枝がなかったから手で摘んで軽く一口頬張ってみたところで、

「コラ、瑞希！勝手に厨房入って料理しただろう！」

奥の厨房から鏡護が飛び出してきた。・・・・・・な、なにぃっ！姫路さんの作った料理だって！？

驚いた拍子に、口に入っていた胡麻団子を無意識に咀嚼してしまい――

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても……んゴパっ！？」

僕の口からあり得ない音が出た。そして目には僕の１６年の人生の軌跡が映る。ああ、あの頃は良かったなぁ・・・・・って、これは走馬灯じゃないか！

「しまった！一足遅かったか……」

本当にあとちょっと遅かったよ・・・・・

「……！！」

「む、ムッツリーニ！どうしてそんな怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするのさ！？無理だよ！これは食べられないよ！」

ムッツリーニが団子の残り半分を僕の口に押し付けてくる。これは走馬灯が見れる特殊な飲茶なんだ！一般人は決して口にしちゃいけない！

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そこに雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？なんだ、美味しそうじゃないか。どれどれ？」

そうして迷いなく僕の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「あ、ちょっと雄二！それは……遅かったか」

「……たいした男じゃ」

「雄二、今キミは最高に輝いているよ」

「？お前らが何を言っているのかわからんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても……んゴパっ」

あ、なんか既視感（デジャブ）。

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した雄二に対して、『これは姫路さんの料理だよ。美波がいるから余計な事は言わないでね？』とアイコンタクトで訴える。目が合ってないから伝わってるかどうかはわからないけど。

「ふっ。何の問題もない」

床に突っ伏したままで雄二が応えた。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

その川はきっと三途の川だろう。

「ゆ、雄二！その川はダメだ！渡ったら戻れなくなっちゃうよ！」

「まさかあの一口で雄二の致死量を超えたの！？」

相変わらずの殺傷力。姫路さん、恐ろしい子！

「え？あれ？坂本君はどうかしたんですか？」

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

普通に美味しい方の胡麻団子とお茶でトリップしてた2人が帰ってきたようだ。どうやら失敗してない方の胡麻団子は相当美味しいみたいだ。これは喫茶店の売り上げへの期待大だ。

「大丈夫だよ、ちょっと足が攣っただけみたい。おーい、ゆーじー、起きろー」

おどけた口調で雄二を起こす仕草をしてみる。だけど実は鏡護が2人には見えない位置で必死に心臓マッサージをして蘇生を試みている。こうなると生死は5分5分だ．．．．！

「6万だと？バカを言え。普通渡し賃は6文と相場が決まって――はっ！？」

やった！蘇生成功だ。こうして人知れず、1つの尊い命がまた救われたのだ。

「雄二、足が攣ったんだよね？」

すかさず余計な事を言い出す前に畳み掛ける。今回はアイコンタクトの余裕もない。

「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の――」

「……もう1つ食わせるぞ（ボソッ）」

「おう。そうなんだ。最近運動不足だからな」

雄二が賢明で助かった。流石の僕でもクラスメイトを殺すのは忍びないからね。

（……テメェ明久、いつか殺す）

（……上等だ。殺られる前に殺ってやる）

笑顔の裏での小声のやり取り。こんな僕らは仲良し2人組さ。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

あ、マズい。以前と似たような状況を美波が怪しんでる。

「ほ、ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？そういう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべぁっ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」

「少しは学習することを覚えようよ……」

「……（コクコク）」

美波の拳を受けた僕に、皆から哀れみの視線が送られてくる。なんか最近こんなのばっかだなぁ・・・・・

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

「ああ、ちょっと話し合いにな」

雄二は学園長室に召喚大会の試験科目の指定をしに行ってきたところだ。

でも、フェアなことじゃないから正直に言うわけにもいかず、雄二は適当に誤魔化していた。

「そうですか～。それはお疲れ様でした」

人を疑うことをしない姫路さんが雄二の言葉を信じて笑みを贈る。

なんていい子なんだ。

「いやいや、気にするな。それより喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……お茶と料理も完璧」

「いつでも開店できるよ」

本当に大丈夫なんだろうか？姫路さん製の飲茶が残っていたりはしないか、一抹の不安がよぎるんだけど。

「よし、なら喫茶店はしばらく秀吉とムッツリーニと鏡護に任せるとしよう。俺と明久は召喚大会の１回戦を済ませてくる」

「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？　あ、うん。色々あってね」

学園長から『チケットの裏事情について誰にも話すな』と事前に口止めされてたから、適当に言葉を濁す。

「そうだったんだ。天水と木下が出るのは知ってたんだけど」

「あれ？鏡護君達も出るんですか？」

「そうだよ。まあ折角だからね」

「もしかして、４人とも賞品が目的なんですか？」

姫路さんが僕達４人に聞いてきたので、代表して僕が応えた。

「う～ん。一応、そう言う事になるのかな？」

まあ詳しく言うと、賞品と教室設備の交換が目的だけどね。

・・・・・そういえばもう１つの賞品、『白金の腕輪』だっけ。あれもやっぱり交換するのかな？せっかくだからあっちは貰えるなら貰いたいな。召喚獣に特別な能力が付くって聞いたし。

「……誰と行くつもり？」

「ほぇ？」

美波の目がスッと細くなった。こ、これは・・・・・攻撃色！？

「だ、誰と行くって言われても……」

美波が言っているのはおそらくペアチケットのことだろう。
・・・・・どうしよう。チケットは学園長に引き渡しちゃうんだけど、約束があるから正直には言えないし・・・・・

「明久は俺と……」

「霧島さんとのデートの為に協力してほしいって、雄二から直々に頼まれたんだよ」

「なっ！？」

雄二がフォローを入れようとした？　のを、鏡護が遮った。
雄二が何を言おうとしたのか気になるけど、ここは鏡護の話に乗っておこう。

「じゃあチケットは、坂本にあげるつもりなの？」

「うん、そうだよ。僕の興味はチケットよりも腕輪だし、チケットなんて貰っても一緒に行ってくれる宛てなんて全然ないからね」

「まあ僕の場合は『ペア』チケットじゃ行くわけにいかないからだけどね」

・・・・・そういえば鏡護は姫路さんと木下さんの2人と付き合ってるんだったね。・・・・・羨ましくなんかないやい！

「おいこら鏡護！俺の人生をなんだと……」

「っと、そろそろ時間だよ雄二。早く行かないと」

「……くっ！　おっ、覚えていろ！！」

まるで小悪党の様な捨て台詞を残して、僕と雄二は教室を後にした。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「ふぅ。行ったみたいだね」

雄二が余計な事を言おうとしたから咄嗟に遮ってあんな事を言ったけど、やっぱり雄二はそろそろ素直になるべきだと思います。

「……鏡護よ、あんな事を言って良かったのかのう？」

「いいんだよ」

「……そうじゃの」

「さあ、それより僕達も直ぐに試合になるからそれまでクラスで頑張ろう！」

「うむ！そうじゃな」

「それじゃ皆！２－Ｆ中華喫茶『ヨーロピアン』、開店だ！」

『『おおーっ！』』

さあ、がんばりますよ～！

「いらっしゃいませ～！」

「中華喫茶『ヨーロピアン』へようこそ～！」

瑞希と島田さんの２人がホールの方で頑張ってくれているようで、開店早々なかなかの数のお客さんが入っています。

『１番テーブル、胡麻団子２、烏龍茶２！』
『６番テーブルの肉まん２つ、まだか～？』
『１番了解！』
『６番は今出るぞ。持っててくれ！』

こちら、僕がいる厨房もひっきりなしに入ってくるオーダーにてんやわんやです。

『オーダー！５番テーブル、小龍包１つ追加！』

『『ウィ、ムッシュ！』』

こんな時でもFクラスのノリの良さは健在です。

・・・・・っと、そろそろ時間のようですね。

「ごめん皆。僕は召喚大会があるから、ちょっと抜けるね！」

『おー、頑張れよ！』
『天水、お前なら優勝できる！』
『頑張ってなー！』

「ありがとう。じゃあ、いってきます」

クラスメイト達の心強い応援を受けて、秀吉と一緒に大会会場へ急ぎます。

そうして校庭に作られた特設ステージへとやってきました。

召喚大会はA～Dの4つのブロックに分かれていて、決勝戦はAブロックとDブロック、BブロックとCブロックの準決勝の勝者で行われます。
明久達はDブロック、僕達はAブロックに配置されていました。最悪準決勝で当たった時は棄権でもするとしましょう。

「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。3回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

というわけでこちらはＡブロックの僕と秀吉。
１回戦の科目は数学です。得意科目というわけではありませんが、多分大丈夫でしょう。

「ワシはあまり力になれんかも知れんが、よろしく頼むぞい」
「うん、頑張ろう」

２人で拳を打ち合わせ、舞台に上がります。
対戦相手は・・・・・２－Ｅの中林宏美さんと上条麻子さんだそうです。

「あれ？中林さんってＥクラスの代表さんですよね？」

「ええ、そうよ。っていうか、天水って“あの”天水かしら？」

「あはは・・・・・まあ」

やっぱり僕の名前は全校に知れ渡っているようです。
付き合いだした次の日に学校新聞で取り上げられれば当然ですよね・・・・あまりその話題を突かれるのも嫌なので、話題の転換を試みます。

「やっぱりクラス代表ともなるとこういう行事は必修なんですか？」

「そんなことないわよ。私は自分の意思で出場を選んだからね」

「そうですか」

「それよりさっさとやりましょう。まあ、Ｆクラスなんて私達の敵

じゃないけど」

「それはわかりませんよ？」

・・・・・どうやら僕の成績の情報はまだあまり外には出ていないようです。

「では、始めてください」

「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

４人の掛け声で、ステージに召喚獣が姿を現しました。

蒼いローブを纏い、手には万年筆を持った僕の召喚獣。

青い袴に長刀という、秀吉の召喚獣がＦクラスタッグとして。

野球のプロテクターを纏い、ミットとバットを持った中林さんの召喚獣。

鈍色の西洋甲冑に両手剣という、上条さんの召喚獣がＥクラスタッグとして。

『Ｆクラス　天水鏡護＆木下秀吉　ＶＳ　Ｅクラス　中林宏美＆上条麻子

数学　１５８点＆７５点　ＶＳ　９４点＆８０点

』

それぞれの点数が参考に表示されます。

「「えっ？」」

予想通りの反応をどうも。

「ち、ちょっとアナタ！本当にＦクラスなの！？」

「Ｂクラス並みの点数です……」

「うむ。さすがは鏡護じゃな」

「そう？でも数学は得意科目ってわけじゃないからなぁ……」

「と、得意科目じゃなくてソレってどういうことよ……」

「お、恐ろしい人です……」

Ｅクラスの２人はすっかり及び腰になってしまったようです。

「じゃあ秀吉は上条さんの方をよろしく」

「了解じゃ」

しかし、今は勝負の最中。攻めてこないならこちらから行きます！

「すいませんが、コレも勝負ですので……」

そう言いながら中林さんの召喚獣に一気に接近させると、万年筆を横一閃に振るいました。

「あっ！？」

中林さんが驚いて召喚獣を操作しますが、ちょっと遅かったですね。
彼女が動かそうとした召喚獣は既に上半身と下半身がお別れした後でしたから・・・・・

「えい、やあ！」
「ぬぅ、はあっ！」

隣を見ると、上条さんの召喚獣の打ち込みを秀吉が上手く流しながら時々攻勢に出る、という試合が展開されていました。
このままいけば秀吉の勝ちでしょうが、どうしましょう？

「秀吉～、加勢は必要かな？」

「いや、大丈夫じゃ。ここはワシに任せてくれ」

「了解。頑張ってね～」

「うむ。はあっ！」

その後も秀吉は敵の攻撃を受け流しながら攻撃を続けます。

「くっ……やあぁっ！」

焦れた相手が先程より大振りな攻撃を繰り出してきます。

「……そこじゃっ！」

しかし、秀吉も機を逃さず攻勢に出ます。
今度は相手の攻撃を完全にかわし、背後に回りこんで長刀を一閃し

ます。勝負アリ、ですね。

「勝者、天水・木下ペア」

立会いの教師から勝ち名乗りを受けた僕達はステージを後にします。

『キーッ！悔しい～！覚えてなさいよ、天水～！』

『ああっ！代表、落ち着いて！』

「……さあ秀吉！早くクラスの方に戻ろう！」

「……それでいいのか、鏡護よ……」

あー！あー！聞こえません。何も聞こえませんよ～。何か変な因縁をつけられたっぽいですけどきっと気のせいです！

そうして僕達は急ぎ喫茶店へと戻っていきました。

第１４問　『清涼祭スタート！中華喫茶と召喚大会１回戦！』（後書き）

あとがき

鏡護　「どうしよう、作者さん！」

作者　「え？何が？」

鏡護　「何が？じゃないよ！何故かＥクラスの代表さんと険悪な関係に……」

作者　「よかったじゃん」

鏡護　「よくないよっ！人と仲が悪くなって喜ぶ人なんていないからっ！」

作者　「別にいいじゃん」

鏡護　「そりゃ作者さんには他人事だもんねぇ！？」

作者　「Ｅｘａｃｔｌｙ！」

鏡護　「こんな時に英語で言わなくてもいいってば！」

作者　「だってなんかカッコよくね？」

鏡護　「どうでもいいよっ！」

作者　「……もう飽きた」

鏡護「僕で遊んだね！？父さんにも遊ばれたことないのにっ！」

作者「ネタが古い」

鏡護「しかもダメ出し！？」

作者「……わかった。説明しよう。あれはフラグだ」

鏡護「急に真面目になった！？……ってあれがフラグだって！？」

作者「おう。ま、後々このフラグが消化されるイベントが起きる」

鏡護「それ絶対僕にとっては災厄だよね」

作者「まあ、フラグがフラグだからな」

鏡護「はぁ……。なんか今から憂鬱だな……」

作者「まあ気にするな。当分先の事だから」

鏡護「だったらまあ……。ところで次回は？」

作者「うむ。ちょっと一波乱起こす予定だ」

鏡護「……聞くんじゃなかった」

作者「まあまあ。そんなに大きな騒動にはならないから」

鏡護「……ほんとに？」

作者　「うむ。保障しよう」

鏡護　「……わかった。その言葉、信じるよ」

作者　「それでは次回予告、いってみよ～！

次回、第１５問『営業妨害と新たなる刺客？と敵情視察！（仮）』

を、」

作・鏡　「「お楽しみに～！」」

第１５問　『営業妨害と新たなる刺客？と敵情視察！』（前書き）

清涼祭　アンケート

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください。
『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？
【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他（　）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え
『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希＆島田美波』

天水鏡護の答え
『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希＆木下優子』
教師のコメント
甲乙つけがたい、といったところでしょうかね。

吉井明久の答え
『【？可愛らしさ】　候補……姫路瑞希（訂正）　木下秀吉（訂正）
島田美波』
教師のコメント
用紙についている血痕が気になるところです。

坂本雄二の答え
『【？その他（結婚相手）　候補……霧島翔子】』
教師のコメント
どうしてＡクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

第１５問　『営業妨害と新たなる刺客？と敵情視察！』

「おい！これはどういうことだよ！」

Ｆクラスの教室が近づいてくると、そんな声が聞こえてきました。

「鏡護よ、どうやらうちのクラスで揉め事のようじゃぞ」

「……みたいだね」

早速きましたか。それにしても営業妨害とはまた何ともありきたりですね。

とりあえず、僕達は急いで教室に入りました。

「マジできったねぇ机だな！こんなので食べ物扱っていいのかよ！」

声のした方を見てみると、わざわざクロスを剥いでクレームをつけているチンピラ風の客が２人いました。服装を見るに、２人ともうちの生徒（先輩）のようです。

いずれも男で、片方は中肉中背の一般的な体格で、小さなモヒカンという非一般的な髪型をしています。もう一方も普通の体格で、こちらは丸坊主です。

「康太、悪いけど雄二達を急いで探してきて」

「……（コクコク）」

雄二達の姿が見えなかったので康太に捜索を依頼して、２人の元へ向かいます。

「お客様、どうかなさいましたか？」

「どうかしましたかじゃねぇよ！なんなんだこの机はよぉ！」

表面に多少キズが付いている机を指して坊主さんが怒鳴ります。

「Eクラスからお借りしたものですが」

「そんなことは聞いてねぇよ！テメェはこんな机で俺達に食事をしろって言うのか？」

何を当たり前の事を聞いているんでしょう？

「はい。そうですが……」

「ふざけんじゃねぇぞ！」

と、今度はモヒカンさんの方が怒声をあげます。

「別にふざけてなどいません。私達は真面目です」

「んだとコラ！」

立ち上がったモヒカンが突然僕の胸ぐらを掴んで、睨みつけてきました。

その時、ふと視界の隅に映った『意外な人物』に気が付きました。

『意外な人物』とは、竹原教頭でした。

教頭は隅の方の席で烏龍茶を飲みながら新聞を広げていました。
・・・・・あの人がただ学園祭の喫茶店に立ち寄っただけ、ということは考えにくいです。この事態の成り行きを見守っているだけなのか、自分も何らかのアクションを起こすのか、判断はできませんがとにかく注意が必要ですね。

ですが、今は目の前にいる2人です・・・・・

「では逆にお聞きしますが、どうしてお客さま方は勝手にクロスを剥がしたのですか？」

「「あぁっ？」」

こういうのってハモられるとウザいですね。

「耳が悪いのですか？何故クロスを剥がしたのか聞いているんです。理不尽な営業妨害でしたら先生を呼びますよ？」

「おいっ！それが客に対する態度か？」

「申し訳ありませんが、当店はあなた方をお客様と認めることができません。あなた方はここへ食事をしに来たのではないんですか？」

2人を睨みつけながら、さらに追い打ちをかけます。

「勝手にテーブルのクロスを剥がして、挙句には理不尽なクレームをつける。当然の事ですが、当店で使用している全ての備品はきちんと消毒してありますので衛生面の問題はございませんよ？」

「そ、それは――」

「客だなんだと言う以前に人のモラルとして、あなた方がとった行動は非常識です。店の備品であるテーブルのクロスを勝手に剥がした挙句に、出てきたのがキズが付いている机だという理由で今私の胸ぐらを掴んでいるのですからね」

なんだかだんだん腹が立ってきました・・・・

「それに言い訳ではありませんが、私達はFクラスです。ここの生徒ならこの意味がわかりますよね?」

そう。今日は見た目こそ綺麗に飾っていますが、ここは普段僕達が使っている2―Fの教室です。

最低クラスだからこその劣悪な環境を誤魔化すのには大変な労力を要しました。

「最低設備のFクラスで喫茶店をやることになって、私達がどれだけの努力をしたかあなた方にはわかりますか?この教室の設備では問題点が山積みだったので、色々な人に頭を下げて備品の多くをお借りしました」

このような営業妨害への対策の意味もありましたが、僕達の『ヨーロピアン』は多くの方々の協力の上に成り立っているんです。

しかし、この2人はFクラスだけでなく、協力してくれた人達をも侮辱しました。到底許されることではありません。

「あなた方が汚いと言ったその机はD、Eクラスからお借りした物です。両クラスの皆さんは快く机を貸し出してくれました。僕達にとって彼らは恩人です。その恩人のクラスの机を侮辱されては黙っ

ているわけにもいきません。あなた方は彼らの親切心を踏みにじったんですよ！」

「う、うるせぇ！黙って聞いてりゃ、コイツめ……！」

「どうぞご退席ください。正直言ってあなた方は目障り以外の何物でもございませんので……」

「調子こいてんじゃねぇぞ、このガキがっ！」

「俺達にたてついた事を後悔させてやるよっ！」

とうとう堪忍袋の緒が切れたんでしょう。
2人して僕に殴りかかってきましたが、その拳が僕の顔に届くことはありませんでした。

なぜなら――

ゴスッ！ドカッ！バキッ！グシャ！

「どうかしましたかお客様？私がこのクラスの代表の坂本雄二です。何かご不満の点でも？」

「よくも鏡護に手を上げようとしてくれたな、この野郎っ！」

康太が探してきてくれた雄二と明久が2人に流れるようなコンボ攻撃をお見舞いしてくれたからです。

「不満も何も、今思いきり殴り飛ばされたんだが……」

「うちのウェイターに手を上げようとした輩を止めただけですが？」

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！」

殴り飛ばされた2人が立ちあがり、場の空気が一気にトゲトゲしいものに変わりました。

いけません！このままではまた――

しかしその緊張状態を打ち破ったのは、意外な所からの声でした。

『お前らいい加減にしろよ！いつまでも嫌がらせなんかするな！』

『そうよ！折角頑張ってるこの子達の努力を何だと思ってるの！』

『食いたくないなら余所へ行けよっ！』

この状況を今まで静かに見守っていた他のお客様方から声が上がったのです。

「お、おい夏川、どうすんだよ！話と違うぞ！どうにかしろよ」

「ちょ、ちょっと待てや常村！俺のせいじゃねぇだろうが！」

すっかり悪役にされてしまった2人が慌てています。

どうやら坊主頭が夏川、モヒカン頭が常村という名前のようです。

覚えておきましょう。

「それで常夏コンビとやら。まだ何かあるか？」

先程は丁寧な口調だった雄二ですが、素に戻りましたね。
それにしても、常夏コンビとは巧い命名ですね。山田く～ん、雄二に座布団1枚。

「い、いや。もう充分だ。退散させてもらおう」

「そうですか。それでは……」

僕は慌てて立ち去ろうとする常村（モヒカン）先輩に近寄ると、

「ご利用ありがとうございました～♪2度と顔出すなよ、ですっ！」

最高の笑顔（営業スマイル）と共に浸透勁を打ち込みました。

――ドンッ！

「ゴハッ！？」

「つ、常村！？お、覚えてろよっ！」

ええ、覚えておいてあげますとも。後でたっぷりお礼をして差し上げないといけませんからね。

倒れた相方を抱えて、夏川（坊主）先輩が捨て台詞を残して走り去っていきました。

どうやらこれにて一件落着、ですね。

「皆様、お騒がせしてしまい大変失礼いたしました。深くお詫び申し上げます」

「代表として私も謝罪致します。できることなら、ご利用中のお客様はこの後もごゆっくりとおくつろぎ下さい」

僕と雄二、2人してお客様に謝罪します。

『気にしなくていい。君達は何も悪くなかったぞ』

『そうよ。このままゆっくりさせてもらうわ』

『そのかわり、美味いもんを出してくれよ?』

「……はいっ!ありがとうございます」

「ありがとうございます」

2人揃って深々とお辞儀をして業務に戻ります。

するとガタリ、と音を立てて席を立つお客様がいました。

「あ、ありがとうございました~」

ん?あれは竹原教頭?

・・・・・そういえば何のアクションもなかったですね。あの2人が失敗したから静観していたんでしょうか?

竹原教頭は無表情のまま、会計を済ませると教室を出ていきました。

「ただいま~」

「戻りました~」

丁度竹原教頭と入れ替わりの形で島田さんと瑞希が帰ってきました。

「2人ともおかえり。試合はどうだった？」

「はいっ。何とか勝てました」

瑞樹がVサインを作ります。普段はあまり勝負にこだわらない性格の彼女ですが、今回は事情が事情ですからね。勝ちにこだわるのも当然と言えます。

「それより、喫茶店の方は大丈夫なの？」

島田さんは喫茶店の方が気になるご様子です。

「大丈夫だよ。ちょっとした妨害はあったけど、上手く収まったからね。まあ雄二達にも助けてもらったし」

「でも、ほんと鏡護に何もなくて良かったよ」

「鏡護君がどうかしたんですか？」

何気なく瑞樹が明久に質問しました。お願いだから下手な事は喋らないでくださいね？

「うん。僕達が教室に帰ってきたら鏡護がチンピラ2人に殴ら――」

ってお願いしてる傍からそういう事を――

「わぁーっ！明久、危ない！（そんなこと言ったら瑞樹が心配するだろう？）」

「え？何？（あ、そっか。ごめん）」

慌てて明久の言葉を遮り、小声で釘を刺します。

「どうしたのよ天水。急に大声なんか出して」

「いや、明久の後ろに蜂みたいなのが飛んでたように見えたんだけど、見間違いだったみたいだ」

「そうなの？まったく人騒がせなんだから」

「ごめん」

「おい、お前ら。お喋りもいいが、いい加減仕事もしてくれ」

「「「「は～い！」」」」

おっといけません。仕事の方もちゃんとしないとダメですね。頑張りますか！

しばらくして、僕と秀吉、明久と雄二、島田さんと瑞希のそれぞれの2回戦がありました。

「ただいま～」

「おかえり。今戻ってきたんだ？」

「うん。無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃな。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「トイレに寄ってくるって言ってたよ」

「そっか」

3組とも問題なく次にコマを進めましたが、明久達の対戦相手が“あの”根本のいるペアということだったので、『アレ』を渡したら効果は抜群だったようです。
ちなみに『アレ』と言うのは、試召戦争の時に撮った根本恭二個人写真集『生まれ変わったワタシを見て！』の事です。役に立ったようで、制作を依頼した僕としても嬉しい限りですね。

そして3人で他愛もない話をしていると、廊下の方から声が聞こえてきました。

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声です。

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

何やら思案顔の明久ですが、どうしたんでしょう？

『んで、探してるのはどんなヤツだ？』

ガラッと音を立てて教室の扉が開き、雄二の姿が見えました。話し相手の女の子の方は雄二の陰に隠れて姿が見えません。

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だなぁ～。ねぇ、５年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたい』

大変です。うちのクラスから犯罪者が出る前に警察に通報しませんと。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ』

女の子は『葉月』という名前のようです。人探しの為に雄二に声を掛けたんですね。雄二はアレで面倒見はいいですから。

『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』

『あぅ……。わからないです……』

『？家族の兄じゃないのか？それなら、何か特徴は？』

名前がわからない相手でも探してあげようとする雄二。意外と子供好きなのかもしれませんね。

『う〜んと、えっと……バカなお兄ちゃんでした！』

・・・・・驚きの特徴ですね。

『ふむ、バカか……沢山いるんだが？』

・・・・・そうですね。否定はできません。

『あ、あの、そうじゃなくって、その……』

『なんだ？他に特徴でもあるのか？』

『その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『『吉井だな』』』

ぜ、全会一致ですか・・・・・あ、明久が上を向いていますよ？

「皆、何を言ってるのさ！僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！絶対に人違い――」

「あっ！バカなお兄ちゃんだ！」

葉月ちゃんが走ってきて明久に抱きつきました。

「絶対に人違い、がどうしたって？」

「……人違いだと、いいなぁ……」

残念ながら、現実はそう甘くはないようですね。

「って、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

明久が葉月ちゃんを優しく引き剥がしながら、そんな事を言いました。ダ、ダメです明久！そんなことを言ったら――

「え？お兄ちゃん……知らないなんて、ひどい……」

ああ、やっぱり。葉月ちゃんが悲しそうに目を伏せてしまいました。

「バカなお兄ちゃんのバカぁっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃん知りませんか？』って聞きながらここまで来たのに！」

・・・・・なんでしょう。急に明久が不憫に思えてなりません。

「明久――じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに――」

ゑ？・・・・・間違えました。改めて、え？今何て――

「アキぃーっ！」

葉月ちゃんが爆弾発言を口にしたその時、島田さんが教室に入ってきて明久の首をねじ切らんばかりに捻りました。

「み、美波！それ以上回したら僕の命が――ギャーーッ！」

「うるさい！小学生に手を出すなんてサイテー！」

「ちょっと待って！結婚の約束なんて、僕は全然――」

「ふえぇぇんっ！酷いですっ！ファーストキスもあげたのにーっ！」

明久、ごめん。もう僕が君の為にしてあげられることは何もありません・・・・・

「坂本は包丁を持ってきて。５本あれば足りると思う」

「お願いひまふっ！はなひを聞いてくらはいっ！」

今度は明久の口を引っ張りながら雄二に包丁を注文する島田さん。

「仕方ないわね。２本刺したら聞いてあげるから、ちょっと待ってなさい」

「あのー、島田さん？包丁は１本でも人体に刺されば致命傷になるんだよ？」

無駄とは思いつつも、一応明久の助命の為に島田さんに進言してみました。

すると仕方ない、といった様子で島田さんが明久からどいてくれました。言ってみるものですね。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

はいっ?葉月ちゃんってもしかして島田さんの妹さんだったんですか!?・・・・・確かに言われてみれば、活発そうな雰囲気やちょっと勝気な目のあたりなんか良く似てますね。

「ああっ!思い出した!あの時のぬいぐるみの子か!」

どうやら、事ここに至ってようやく明久が思い出したようです。

「ぬいぐるみの子じゃないですっ!葉月ですっ!」

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった?」

「はいですっ!」

それから葉月ちゃんを加えて、皆でちょっとしたお喋り会になりました。

まず明久と葉月ちゃんが知り合ったのは、昨年明久に《観察処分者》の肩書きがつく原因となった事件の時だったそうです。

また島田さんと葉月ちゃんが姉妹だとわかった時に明久が驚いていました。てっきり知っているものと思ってたんですが。

さらに瑞樹が葉月ちゃんと知り合いだったようで、仲良く話をしていたのにはちょっと驚きました。いつ知り合ったんでしょう?

そんな話をしていたら、葉月ちゃんが突然思い出したかのようにこう言いました。

「そういえば、この教室って綺麗だよね?」

「葉月ちゃん、それってどういうことかな?」

気になった僕は聞いてみました。

「えっとね、この教室に来る途中で聞いたんだけど、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」

・・・・・間違いなく常夏コンビでしょうね。しかし他所でそんな事をしていたとは。

「ふむ……。おそらく例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

雄二はこの事態を正確に把握しているようですね。

「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ？まさか、そこまで暇じゃないでしょう？」

明久は半信半疑のようですが。

「どちらにしろ、とりあえず様子を見に行く必要はあるよ」

「そうだな。噂がどの程度まで広まっているか確認する必要もあるしな」

校内を歩き回っていた葉月ちゃんが聞いたくらいだから、もしかするとかなりの勢いで広まっているかもしれません。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

葉月ちゃんが明久の手をギュッと握ります。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなくちゃいけないから、あまり一緒に遊んであげられないんだ」

しかし明久は困ったような顔をすると、葉月ちゃんの頭を撫でながらやんわりとその誘いを断りました。

「む～。折角会いに来たのに～」

あらら。葉月ちゃんがむくれてしまいました。

「（雄二）」

「（ああ。いいんじゃないか？）」

「（ありがとう）それなら葉月ちゃんも一緒に行こうよ。飲食店をやってる他のクラスを偵察する必要もあるし」

雄二と短く小声で言葉を交わして、僕は明久にそう提案しました。

「ん～、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ！」

頬を膨らませていた葉月ちゃんは一転して満面の笑みに。天真爛漫とはこういう子の事を言うんでしょうね。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

島田さんの口調も普段とは違って、すっかり優しいお姉さんモード

ですね。

「ふむ。どうせならば皆で行かぬか？召喚大会もあるし、早めに昼を済ませたほうが良いじゃろう」

「そうだね。じゃあ、瑞希と秀吉も一緒に行こう」

「はいっ」

「うむ」

こうして僕達はなかなかの大所帯で出掛けることになりました。全部で7人です。混雑した学園祭の中を動くにはちょっと人数が多いですね。

「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えっとですね……短いスカートを履いた綺麗なお姉さんがいっぱいいるお店――」

「なんだって！？雄二、それは早く向かわないと！」

「そうだな明久！我がクラスの成功の為に、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」

葉月ちゃんの言葉を聴いた瞬間、明久と雄二が全力ダッシュで走り出しました。

「アキ、最低」

「2人とも、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカーっ！」

「まったく、あの2人は欲望に忠実過ぎるんだよなぁ……」

「……そうじゃな」

女性陣の冷ややかな反応など気にした風もなく、2人は行ってしまいました。・・・・・・場所はわかっているんですかね？

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

あの後、2人を追いかけた僕達はその姿をAクラスの教室前であっさりと見つけることができました。

そういえば優子は何をするのか全く聞いていませんでしたが、Aクラスの出し物は・・・・・・

【メイド喫茶　『ご主人様とお呼びっ！』】

・・・・・これではメイドの方が立場が上のような気がするのですが。もしかして客がメイドさんにご奉仕するんでしょうか？・・・・・嫌な店ですね。

「そっか。ここって坂本が大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げるなんてダメですよ？」

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから――」

「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

・・・・・あれ？どうしたことでしょう。僕の目にこの場にいるはずのない人物が映っているんですが。
しかもその人物は指が擦り切れんばかりにシャッターを切り続けています。

「……ムッツリーニ？」

明久がその人物の名前を呼びます。

「……人違い」

・・・・・いやいやいや。そこで誤魔化すのは無理がありますよ！というか厨房責任者のはずの君がどうしてここに？

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「……敵情視察」

・・・・・最近の敵情視察とは、カメラ片手にローアングルから女の子を撮影することを言うようです。

「ムッツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんな事をしたら撮られている女の子が可哀想だと――」

「……1枚１００円」

「2ダース買おう――可哀想だと思わないのかい？」

「明久、普通に注文してるよ？」

それにしても2ダースって。２４００円も出して、生活費の方は大丈夫――なわけがありませんね。はい。

「しまった！？ついいつもの調子で！？」

いつもやってるんですね。

「……そろそろ当番だから戻る」

康太は明久に写真を手渡すと、そのまま教室を出て行きました。・・・・いつの間にプリントアウトしたんでしょうか。

「まったく、ムッツリーニにも困ったもんだね」

「アキ、その写真をどうするつもり？」

こっそりポケットに写真をしまおうとした明久でしたが、島田さん

に見つかってしまいました。

「やだな～。もちろん（じっくり見てから）処分（しっかり保存）するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？もう凄くお腹が減っちゃったよ」

一部明久の心の声が聞こえた気がしました。きっと気のせいではないでしょう。

「ふ～ん。そう」

しかし、島田さんはまだ明久を疑っているようです。

「そうだよ。早く敵情視察も済ませないと――写ってるのは男の足ばっかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃない！」

「ご、ごめんなさギャーッ！足の小指が踏み抜かれんばかりに痛ーっ！」

葉月ちゃんも島田さんと一緒になって明久の脛をつねっています。・・・・あれも地味に痛いですよね。

「フンッ！それじゃ、入るわよ。お邪魔しま～す」

島田さんが1番手でドアをくぐっていきます。

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

出迎えてくれたのは、クールで知的な美人メイドの霧島さんでした。

「わぁ、綺麗……」

瑞希が思わず感嘆の声を洩らします。確かに、霧島さんは綺麗でした。

長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えて、黒のストッキングが彼女の美脚をさらに際立たせています。これなら同性が見ても羨むのがわかります。

雄二は本当にこんな美人さんとお付き合いができて、幸せ者ですね。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ～！」

「うむ。さすがじゃのう」

明久を先頭に、瑞希、葉月ちゃん、秀吉が中に入ります。すると霧島さんは島田さんの時と同じように、

「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と出迎えてくれました。

「……チッ」

雄二も渋々といった様子で入っていきます。霧島さんはやっぱり同じように、

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

・・・・・何故かアレンジされていました。

「霧島さん、大胆です……」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

3者3様の反応を見せる女性陣。
瑞希、君はあんなことはしなくていいですからね？
島田さん、アレを見習って何をするつもりですか？
葉月ちゃん、君はいつまでもその純粋な心を失くさないでください。

最後に僕が入ります。え？何で僕が最後かって？そりゃもちろん雄二を逃がさない為ですよ。

そういえば優子の姿が見えませんが、休憩中とかでしょうか？
などと考えていると――

「お帰りなさいませ、旦那様。旦那様には特別サービスをご用意の上、メイドをお持ち帰りいただけます」

・・・・・あれ？なんか雄二よりもさらに凄いことになってませんか？

「って、優子！？」

「いらっしゃい、鏡護」

爆弾を落とした張本人は優子でした。

「……さっきの台詞は冗談だよね？」

「もちろん本気（マジ）よ」

・・・・・ニッコリ笑顔で返されてしまいました。

「嘘だっ！」

「な、なによ。鏡護は私の特別サービスを受けたくないって言うの？」

そこでちょっぴり涙目＋上目遣いは反則です！

「そ、そんなことあるわけないよ！」

思わず力いっぱい否定してしまう僕。

「そうよね！鏡護がそんな事言うわけないもんね！」

それを聞いて優子の表情がコロッと笑顔に変わりました。しまった！演技でしたか！

「そうと決まれば早く行きましょう？ほら、瑞希も」

「あ、はいっ！」

瑞希、君も満面の笑みですね・・・・・
こうして僕は皆から引き離され、１人個室へと連れて行かれました・・・・・

「鏡護、何食べたい？」

個室に通された僕は早速優子からメニューを手渡されました。
どんなメニューがあるんでしょう。えぇっと――

ふわふわシフォンケーキ……３００円
なめらかチョコケーキ……３００円
しっとりチーズケーキ……３００円
（ドリンクセット……各＋１００円）

ストロベリーサンデー……４００円
チョコレートサンデー……４００円

コーヒー（アイス／ホット）……２５０円
紅茶（アイス／ホット）……２５０円
オレンジジュース……２００円
水（塩／砂糖）……１００円

メイドとの婚姻届……ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ
メイドの特別サービス……ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ
メイドのお持ち帰り……ｐｒｉｃｅｌｅｓｓ
（ただし、相手はメイドが選びます。）

・・・・どこからツッコめばいいんでしょうか。
最初の方はごく普通の喫茶店でもよく見るメニューが並んでいますが、終わりの方がおかしいです。
ただの水でお金取るんですか!?こんなの、まともに頼むのは明久くらいでしょう!?
そして最後の3つ!明らかに僕と雄二をピンポイントで狙ったものですよね!?
「……優子、このメニューを考えたのは誰?」
「ん?代表とアタシ」
・・・・やっぱりでしたーっ!
「クラスの人も当然確認したんだよね?」
「そうよ（脅して無理矢理承認させたんだけどね）」
「Aクラスもバカばっかだ……」
僕はその場に膝をついて崩れ落ちました。
「なによ、失礼ねっ」
「……もういいや。じゃあチーズケーキをアイスティーとセットで」
「はいは〜い!ちょっと待ってて。あ、瑞希は一緒に来てね」

「？何かあるんですか？」

「いいからいいから♪」

注文を取り終えた優子が、瑞希を連れて一旦部屋を出ていきました。

「……それにしてもさすがＡクラス、教室内にこんな個室があるなんてね」

暇を持て余す事になってしまった僕は、改めてクラス間の設備差について考えてしまいました。

「鏡護、おまたせ～」

「遅くなりました」

5分くらい経った頃でしょうか。２人が戻ってきました。ですが――

「ブフッ！なっ、どうして瑞希までメイド服を着てるんだ！？」

「えっと……優子ちゃんに勧められて……もしかして似合ってませんか？」

瑞希も、ちょっぴり涙目＋上目遣いは反則ですってば！

「そんなことないよ。よく似合ってる」

「あ、ありがとうございます」

慌てて僕が褒めると、花が咲いたかのように瑞希が顔を綻ばせます。

「あら?アタシには何もなかったわよね?」

「ごめん。まだ言ってなかったね。優子もよく似合ってる。可愛いよ」

「ふふっ。ありがとう」

優子もまた、僕の言葉を聞いて顔を綻ばせます。

「ご注文の品をお持ちしました、旦那様」

そのまま一旦営業モードに戻って、僕の前にケーキと紅茶を出してくれました。

「そういえば、特別サービスって何なの?」

気になっていたので、僕は聞いてみる事にしました。

「それはね……こういうことよ!」

優子がそう言うと、

「「鏡護（君）、あ～ん」」

瑞希と一緒に2人して僕にケーキの刺さったフォークを差し出してきました。

「えぇっ！？」

もちろん僕はびっくりしましたが２人は構わず、

「「あ～ん」」

と、フォークを近づけてきます。

個室なので誰からも見られてはいませんが、これは恥ずかしいです．

・・・・・

「ちょっと鏡護！早く食べなさいよ！」

「そうですよ！早く食べてください！」

２人が僕に催促してきます。じっと僕の目を見つめながら。

ですから２人とも、涙目＋上目遣いは（ｒｙ

一向に止める気配のない２人に、結局僕は根負けしてしまいました。

・・・・・ええい、ままよ！

覚悟を決めて、２人の差し出すフォークに口をつけました。

――パクッ、パクッ

「「あ……♪」」

僕が食べた時の2人の嬉しそうな顔。

・・・・・これは恥ずかしさを堪えて食べた甲斐がありましたかね？2人の笑顔にそんなことを思う僕でした。

結局ケーキがなくなるまで2人のソレは続きましたが、1度してしまえば意外と恥ずかしさは感じなくなるもので、2回目以降は僕もすっかり状況を楽しんでいました。

その後も3人でお喋りを楽しんでいたら、途中で雄二に呼ばれました。

・・・・・何かあったんでしょうか？

第１５問　『営業妨害と新たなる刺客？と敵情視察！』（後書き）

あとがき

作者　「鏡護が羨ま――ゲフンゲフン、妬ましい」

鏡護　「それ、言い直す必要はあったの？」

作者　「うるせぇ、このブルジョアが！」

鏡護　「いや、それはちょっと意味が違うと思う……」

作者　「彼女から『あ～ん』をされるなんて男の浪漫を堪能しやがって」

鏡護　「いやでもアレは仕方なく……」

作者　「最初は仕方なくでも、結局は楽しかったんだろ！？」

鏡護　「え？……うん。それは、まあ……」

作者　「クキャーッ！殺す！やっぱりお前は殺してやる！」

鏡護　「作者さんが錯乱した！？」

作者　「死にさらせぇーっ！」

鏡護　「うわっ！危なっ！」

作者　「これで終わりじゃーっ！」

鏡護　「……仕方ない。後で恨まないでよ、作者さん？」

作者　「キシャーッ！」

鏡護　「――フッ」

――ドンッ！（浸透勁が作者の身体を伝った音）

作者　「ごパァッ！」

――ドシャ！（作者がその場に崩れ落ちた音）

鏡護　「ふぅ……。これでしばらく起きないはず」

鏡護　「えーっと……読者の皆様方には作者さんのお見苦しい姿をお見せして大変申し訳ございませんでした」

鏡護　「作者さんがいなくなってしまったので、もう次回予告にいきたいと思います。それでは、

次回、第１６問『メイドとチャイナとＫＹは馬に蹴られて何とやら（仮）』

を、よろしくお願いしま～す！」

第１６問　『メイドとお掃除とＫＹは馬に蹴られて何とやら』（前書き）

バカテスト　地理

問　以下の問いに答えなさい。
『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え
『リトアニア　エストニア　ラトビア』
教師のコメント
そのとおりです。

土屋康太の答え
『アジア　ヨーロッパ　浦安』
教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え
『香川　徳島　愛媛　高知』
教師のコメント
正解不正解の前に、数が合っていない事に違和感を覚えましょう。

天水鏡護の答え
『魏　呉　蜀』
教師のコメント
先生も三国志は好きです。

第１６問　『メイドとお掃除とＫＹは馬に蹴られて何とやら』

―Ｓｉｄｅ　明久

「……お席にご案内します」

鏡護が木下さんと姫路さんに連れ去られた後、僕達も霧島さんに案内されて席へと移動していた。

「ね、お兄ちゃん。お客さんがいっぱいだね～」

僕の制服の袖をくいくいと引っ張りながら、葉月ちゃんがそんな事を言ってきた。

確かにその通りで、Ａクラスの広い教室はお客さんでいっぱいだった。メイド喫茶だから客のほとんどは男だと思っていたけど、意外と女性客も多いな。

「……ではメニューをどうぞ」

霧島さんが立派な装丁のメニューを渡してくる。さすがはＡクラス、学園祭でも手抜きは一切しないようだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「葉月も～！」

美波達は仲良くシフォンケーキ。

「ワシは『しっとりチーズケーキ』を」

秀吉はチーズケーキか。

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

お金のない僕は当然水だ。

「んじゃ、俺は――」

「……ご注文を繰り返します」

雄二の声を遮るように霧島さんが割って入った。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を2つ。『しっとりチーズケーキ』を1つ、『水（塩）』を1つ、『メイドとの婚姻届』が1つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねぇぞ！？」

雄二があからさまに動揺している。コイツがここまで翻弄されるなんて珍しい。ここは存分に楽しませてもらおう。

「……では食器をご用意致します」

女の子3人（秀吉含む）のところにはフォークが、僕の前には塩が、雄二の前には実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！コレほんとにウチの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

霧島さんは優雅にお辞儀をすると、キッチンと思われる方向へと歩いていってしまった。

「……明久。俺はどうしても召喚大会で優勝しなくちゃいけないんだ……」

「あ、うん。それはもちろん僕もだけど」

雄二の目からは並々ならぬ決意が感じられる。やる気なのは嬉しいんだけど、ちょっと怖い。

「んで、葉月ちゃん。キミが言ってた場所ってここで良かったの？」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん２人がおっきな声でお話してたの」

葉月ちゃんが元気良く頷く。

嫌な感じの２人ってやっぱり――

『お帰りなさいませ、ご主人様』

『おう。２人だ。中央付近の席は空いてるか？』

と、話している途中で聞き覚えのある下品な声が。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言ってたの」

声の主は、さっき僕達のクラスで妨害工作をしてきた常夏コンビだった。さっきもこの辺で聞いたって事は、もしかして通っているのかな？

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっき行った２－Ｆの中華喫茶は酷かったよな！』

『テーブルは汚い机だったし、キズだらけだったもんな！』

人の多い喫茶店の中央で、わざわざ大声で叫びあう。こんなことをされたら、悪評が広まる一方だよ！

「待て、明久。アイツらを止めるいい方法を思いついた」

そう言って霧島さんを呼んだ。

「……なに？」

呼ばれた瞬間に霧島さんが登場。もしかしてずっと雄二の近くにいたんじゃないか、ってくらい早かった。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じことを言っている」

どうやら、霧島さんたちにとっても迷惑な客みたいだ。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を2着貸してくれ」

「……わかった」

何の迷いもなくそう返事をした霧島さんはメイド服を取りに行った。

・・・・・それにしても雄二。臆面もなく問題発言をするなんて、躊躇いや恥じらいは持ち合わせていないのかい？

『あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？』

『言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな！』

『2－Fには気をつけろってことだよな！』

常夏コンビがまだ言っている。今すぐブチのめしてやりたい！

「……ああ、鏡護か？すまんが姫路と木下姉を連れて俺達の所へ来てくれないか？席の場所は――」

雄二が誰かに電話を掛けた。相手は・・・・・鏡護？

「……島田、櫛を持ってはいないか？」

「ウチは持ってないわ。確か瑞希が持ち歩いてたと思ったけど」

「そうか」

確かに美波はあまり自分の髪を気にしたりとかしてない様に見える。

年頃の女の子なのに。

「……雄二？急に呼び出して一体何事さ？」

どうやら鏡護が来たらしい。姫路さんと木下さんも一緒にいる。

「姫路。櫛と身だしなみ用の品があれば一式貸して欲しいんだが、いいか？」

「構いませんけど、何に使うんですか？」

姫路さんがポーチを手渡しながら、雄二に質問した。

・・・・・そういえば何に使うつもりなんだろう？

「……雄二、これ」

と、霧島さんがメイド服2着を抱えて戻ってきた。

「おう。すまないな」

「で、雄二。これをどうするの？」

手元にはメイド服とポーチ。どう考えてもあの2人を攻撃する武器にはなりそうにない。

「当然着るんだよ。お前と鏡護がな」

「「ええーっ！」」

瞬間、シンクロした僕と鏡護の声。な、なんだってーっ！？

「「そういうことなら、鏡護（君）はアタシ（私）達でやるわ（ります）！」」

こちらもシンクロした木下さんと姫路さんの声。

「ちょっと待って、雄二！優子も瑞希も何を言ってるかわかってるの！？」

鏡護が待ったをかけるけど、誰も聞く気はないようだ。これは僕が言っても同じなんだろうな・・・・・

「これは決定事項だ。諦めろ鏡護」

「そ、そんなぁ～！」

鏡護がその場に崩れ落ちた。

「という訳だ。鏡護の方は木下姉と姫路に任せる」

「わかったわ」

「はいっ。とびっきり可愛くしてあげますね」

「ハハハ……お手柔らかにお願いします……」

鏡護は再び2人に引き摺られるようにして個室へと連行されていった。

「お前は秀吉にやってもらえ。秀吉、すまんが任せたぞ」

「うむ。任されたのじゃ」

どうやら僕の方は秀吉がやってくれるらしい。それだけはせめてもの救いかもしれない。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

ザワ・・・・・ザワ・・・・・！

着替えとメイクの最中、ずっと2人に鏡を見せてもらえなかった僕が個室から出ると、周囲が突然ざわめきだしました。

「？どうして皆こっちを見てるんだ？」

「そりゃもちろん、鏡護が見た目超美人の女の子だからよ」

「はいっ！とっても綺麗ですよ！」

「……そうなの？」

2人はそう言いますが、自分では全くわからないので思わず首を傾げてしまいます。

「でもまさか、ここまでハマるとは思ってなかったわ」

「本当ですね。私もちょっと驚きました」

「……まあいいや。雄二達のところに戻ろう」

「ええ」

「はい」

「雄二、ただいま～」

「おっ、戻ってきたか……ってお前、鏡護か！？」

声を掛けた雄二が振り向いて僕を確認すると、驚きの声を上げました。

「そうだけど……」

何だかこんなに驚かれると自分に自信が無くなってしまいます。

「いや、すまん。……しかし変われば変わるもんだな」

「お姉さん、きれ～」

「なんか、すっごい敗北感を感じるわ……」

葉月ちゃんには僕が女の子に見えるようですし、島田さんは何故か落ち込んでしまいました。

『こ、この上ない屈辱だ……』

『明久、存外似合っておるぞ』

教室の入り口の方から明久と秀吉の声がしました。見ると、そこにはメイド服を着た明久の姿が。
そのまま秀吉と別れた明久がこちらへやってきます。

「お、明久も戻ってきたようだな」

「そういえば、コレで何をすればいいのさ？」

「ちょっと待ってくれ。明久も来てから説明する」

そう言われてしまったので、仕方なく明久が来るまで待ちます。

「はぁ……どうしてくれるんだよ雄二！……って、隣の綺麗な女の人は誰？」

明久まで僕がわからないんですね・・・・・（泣）

「……僕だよ、明久」

「……ええっ!?鏡護なの!?」

「……どうして皆わからないんだろう……」

もういっそ泣いてしまいたいくらいです。

「よし、いいか。今から2人に作戦を説明するぞ。まあ作戦と言ってもやることは簡単だ。あそこにいる常夏コンビをブッ飛ばして来い」

そう言って雄二は教室の中央を指差しました。するとその指差した先に――

『とにかく汚い教室だったよな』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな』

そんな会話をしている常夏コンビの姿がありました。なるほど、あれを殺ればいいんですね・・・・・

「「了解っ!」」

明久と2人、声を合わせて返事をします。さあ、制裁(おしおき)の時間です。

「「お客様」」

明久と2人で常夏コンビに丁寧に話し掛けます。今の僕達はあくま

でウェイトレスですからね。

「なんだ？――へぇ、こんなコもいたんだな」

「結構可愛いな」

舐める様な視線が僕達に纏わりつきます。これは不愉快極まりないですね。

「「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」」

「掃除？さっさと済ませてくれよ？」

2人が席から立ち上がります。僕達のことはバレていないようですね。

「「ありがとうございます。それでは――」」

・・・・・覚悟はよろしいですか？

「ん？何で俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れて」

「おいおい。そういうことは他所で」

「くたばれぇぇっ！」

「せいやっ！」

「「ごぱぁっ！」」

明久が夏川（坊主）にバックドロップを、僕が常村（モヒカン）に1本背負いを繰り出します。

「き、キサマは、Fクラスの吉井……！まさか女装趣味が――」

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

「こっちの人は私のお尻を触りました！」

「ちょっと待て！バックドロップをする為に当ててきたのはそっちだし、大体お前は男だと――ぐぶぁっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎共が！」

痴漢退治の大義名分を得て雄二が登場します。

「何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろ！」

「黙れ！たった今、コイツはウェイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！俺の目は節穴ではないぞ！」

すいません。正直節穴だと思います。

「そこのウェイトレス！そっちの男は任せるぞ！」

雄二が明久を指差してそう言いました。

「え？あ、はい。わかりました」

そう返事をした明久は夏川（坊主）に近付いて、何故かその頭にブラジャー

と瞬間接着剤を――って、ええっ！？

「さて。痴漢行為の取調べの為、ちょいと出頭願おうか」

指を鳴らしながら常村（モヒカン）に近付いていく雄二。捕まえて洗いざらい吐かせるつもりですね。

「くっ！行くぞ夏川！」

「こ、これ、外れねぇじゃねぇか！畜生！覚えてろ変態めっ！」

流石に状況を不利と見た2人は逃げ出していきます。

「逃がすか！追うぞ、鏡子、アキちゃん！」

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

「明久に同じく！」

僕達も2人を追って廊下に飛び出します。

「ところで、ここの会計は？」

「どうせ俺と明久は何も頼んでないだろ！残った連中に任せておけ！」

「僕の分はきっと瑞希が何とかしてくれるよ！」

ただ教室を出て行く間際に、

『……お会計は、野口英世を2枚か、坂本雄二、天水鏡護を1名ずつのどちらかでお願いします』

そう聞こえたのですが・・・・・

まさか僕達、1人1000円で売り飛ばされたりしませんよね・・・・？

常夏コンビを追いかけた僕達ですが、結局召喚大会の時間が来てしまい、途中で諦めざるを得ませんでした。

そうしてやってきた試合会場。3回戦の相手は――

「あら。鏡護と秀吉じゃない」

「……驚いた」

なんと優子と霧島さんのAクラスコンビでした。

「なっ、優子と霧島さんが相手なのか！？」

「むぅ。どうやらそのようじゃのう」

どうしましょう。この2人とは、できれば闘いたくなかったのですが・・・・・

「まあいいわ。早くやりましょう」

優子がそう言います。

・・・・・そういえば雄二が言ってましたが、霧島さんはチケット狙いで出場しているんですよね。優子は付き添いといったところでしょう。

それなら――

「（秀吉、この試合を棄権してもいいかな？）」

「（何かお主に考えがあるのか？）」

「（まぁね。で、どう？）」

「（うむ。そういうことならお主に任せよう）」

「（ありがとう）すいません、先生。この試合、僕達は棄権します」

僕は秀吉と短く小声で言葉を交わすと、そう宣言しました。

「えっ！？ちょっと鏡護、どういうことよ！」

「……どうして？」

Aクラスの2人からは当然疑問の声が。

「説明の前にちょっと確認したいんだけどさ、霧島さんは賞品のチケットが狙いなんだよね？」

「……うん、そう。雄二と一緒に行く約束をしたから」

「そっか。で、優子はその付き添いって感じかな？」

「まあ、そうね。私は『ペア』チケットじゃ行けないから。鏡護もそうよね？」

「うん、そうだね。まあ普通にオープンしたら3人で行こうよ」

「ホント？約束よ？」

「もちろん！……そこで、だ。僕としてはそんな恋する乙女な霧島さんの邪魔をするのは忍びなくてね。それに下手なことをして馬に蹴られたくもないし」

「えっ！それだけの理由で？」

「うん。僕も優子と同じで霧島さんと雄二には上手くいって欲しいからね」

「……ありがとう。天水はいい人」

「そういう訳だから、僕達は棄権するよ」

それに、きっと雄二と明久が決着をつけてくれるでしょうからね。

「では、勝者は霧島翔子＆木下優子ペアです！」

こうして僕の召喚大会は終わりを迎えました。

・・・・・しかし、これで僕は教頭サイドの妨害工作に対して集中して対処できるようになります。
こうなったからには、そうそう貴方達に好き勝手はさせませんよ・・・・

―Ｓｉｄｅ　優子

召喚大会の３回戦で鏡護達が現れた時はどうなる事かと思ったけど、まさか試合を棄権されるとは思わなかったわね。

「まあいいわ。如月ハイランドでのデートの約束はしたんだし。ふふっ、言質は取ったわよ？」

いざとなったら代表に証人になってもらうけど、その必要はないかな。

「鏡護は約束は絶対に守ってくれるもんね」

そうなのだ。彼は１度たりとも私との約束を破ったことがない。それはきっとこれからもそうだろう。

「……優子。幸せそう」

「あら、代表。羨ましいのかしら？」

「……そんな事ない」プイッ

ちょっとからかい過ぎちゃったかな？代表がそっぽを向いてしまった。

「ごめんなさい、代表。でも鏡護もああ言ってくれたんだから、絶対に優勝しましょう！」

「……もちろん」

さあ、アタシも代表の恋を応援している友人の１人として頑張らないとね！

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第16問　『メイドとお掃除とKYは馬に蹴られて何とやら』（後書き）

あとがき

鏡護　「また最後に変な伏線が……」

作者　「気にするな」

鏡護　「……そうだね。もう気にするだけ無駄だよね……」

作者　「そうだぞ。人間は学習する生き物なんだからな」

鏡護　「……じゃあ、いつまでたっても学習しない明久って……」

作者　「その先は言ってやるなよ」

鏡護　「うん……」

作者　「えぇっと、次回で学園祭1日目は終わる予定です」

鏡護　「良かった。これ以上変なことは起きないよね？」

作者　「フッフッフ……そうは問屋が卸さないんだなぁ」

鏡護　「やっぱりか……」

作者　「大丈夫さ！そんな大事にはならんよ、きっと」

鏡護　「作者さんの『大丈夫』は当たった試しがないよね？」

作者　「そうだったかな？」

鏡護　「……もういいや。何があっても切り抜けてみせるさ！」

作者　「よっ！さすが主人公！ついでに次回予告もよろしく！」

鏡護　「わかったよ！……えっと、どれどれ……

次回、第１７問『チャイナと大会準決勝とお姫様を救出せよ！（仮）』

を、乞うご期待ください！」

第17問　『チャイナと大会準決勝とお姫様を救出せよ！』（前書き）

バカテスト　現代社会

問　以下の問いに答えなさい。
『ＰＫＯとは何か。説明しなさい』

姫路瑞希・天水鏡護の答え
『Ｐｅａｃｅ　Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎ（国連平和維持活動）の略。
　国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』
教師のコメント
そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。
余裕があれば覚えておくといいでしょう。

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｋｉ　Ｏｐｐａｉ　の略。
　世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』
教師のコメント
君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え
『パウエル・金本・岡田　の略』
教師のコメント
それはセ界の平和を守る人達です。

第17問　『チャイナと大会準決勝とお姫様を救出せよ！』

「で、3回戦は不戦勝じゃったと？」

「うん。相手が食中毒で棄権したんだって」

僕達より遅く戻ってきた明久達は無事に4回戦へとコマを進めたみたいです。
それにしても食中毒とは・・・・・瑞希の料理は今朝明久と雄二が食べたアレだけのはずなので、ウチのクラスの客ではないと思うのですが・・・・・大丈夫ですよね？

「鏡護達はどうだったの？」

「実は相手がなかなかの強敵でね、惜しくも敗れたよ」

実際は棄権したんですが、とりあえずそう言っておくことにしました。

「そっか……残念だったね」

「うん。でも僕達の代わりに、明久達は頑張ってね」

「もちろん！目指すは優勝だよ！」

実に頼もしい返事をしてくれた明久。本当に頑張ってください！

「ならば、こちらを建て直すのに協力してくれぬか？」

「そうだな。常夏コンビのせいで客が減っているようだし、取り返すためには何かインパクトのあることをやる必要があるな」

そうなんです。今の教室は割と空席が目立つような状態になってしまっています。元凶は潰しましたが、流れた噂には対処のしようがありませんからね。

「うむ。それで何をするか、じゃが……」

秀吉が教室内を見回しますが、使えそうなものはありませんし、できることも特になさそうです。

「雄二、何かアイデアはないの？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大のはずだ」

明久に問いかけられてそう答えた雄二が取り出したのは、刺繍も見事な青と白のチャイナドレスでした。

・・・・・それにしても、本当に雄二はこんな物をどこから調達してくるのでしょう？

「ほう。若干裾が短いようじゃが、これならば確かにインパクトは充分じゃろうな。それでコレを宣伝用に――」

確かにコレを瑞希や島田さんが着て宣伝をすれば、抜群の効果を得られるでしょう。

「ああ。コレを――明久が着る」

・・・・・そ、それはそれで別の意味でインパクト大ですね。

「ちょっ、お願い、それだけは許して！メイド服の次にチャイナまで着たら、僕は皆にきっとホンモノだと思われちゃうから！」

「冗談だ。これは秀吉と鏡護と姫路と島田に着てもらう」

・・・・・はいっ！？い、今なんて言いましたか！？

「あ、なんだ。よかったぁ～」

「ちょっと待って！秀吉はともかくどうして僕まで！」

「……鏡護よ。ワシはともかく、とはどういう意味かの？」

「秀吉は大体周囲には第３の性別『秀吉』ってことで認識されてるからだよ！」

「な、なんと……そうじゃったのか……」

衝撃の事実が発覚した秀吉がその場に膝をついて崩れました。

「雄二、とにかく僕は絶対に着ないからね！」

「ダメだ。女装であんな美人になるんだから、やってもらわんと困る」

褒められても不名誉なことこの上ないですね。

「たっだいま～！ってあれ、アキってばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ……鏡護君もです。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月ももう1回見たいですっ！」

と、そこに島田さん達が戻ってきました。瑞希、僕の気も知らずにそんな事を言わないでください。今また僕に危機が訪れているんですから。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

明久が3人ににこやかに笑いかけます。

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に貢献してもらうぞ」

チャイナを片手に明久がにじり寄りつつ、2人の退路を断ちます。

「へっへっへ……大人しくこのチャイナに着替え痛ぁっ！マジすんませんした！自分チョーシこいてました！」

よ、弱いです・・・・・

腹と頬と腿を殴られて、明久が即座に土下座しました。

「どうしてまた、急にそんな事を言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたじゃない」

予想通りといいますか、やっぱり島田さんが渋ります。

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久、お前はチャイナドレスが好きだよな？」

・・・・・そうだったんですか？初耳です。

「大好――愛してる」

「……明久はほんとに嘘がつけないよね」

まさか、そこまで堂々と宣言されるとは思いませんでした。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

ふふっ。島田さんも素直じゃありませんね。

「あの……鏡護君は好きなんですか、アレ」

瑞希がモジモジしながらそう聞いてきました。そうですね・・・・・

「僕も瑞希が着てるところを見てみたいな？」ニコッ

「――／／／／わ、わかりました！私も着ます！」

瑞希もオッケーのようです。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

どうやら葉月ちゃんも手伝ってくれるようですが、さすがに彼女の

分までは用意していないでしょう。

「……！！（チクチクチクチク）」

「……えぇっと、康太？どうしてそんな凄まじい速さで裁縫を？っていうかさっきまでここにはいなかったはず……」

「……俺の嗅覚を舐めるな」

何故でしょう。格好いい台詞のはずなのに、とても残念な気持ちになります。

「では、３回戦が終わったら着替えますね」

瑞希が時計を確認しながらそう言いました。彼女達はこれから試合なんですね。

「いや、２人には今着替えてもらいたい」

「「えっ？」」

雄二の言葉に２人の声がハモりました。

「宣伝の為だ。それを着て召喚大会に出てくれ」

そういえば、３回戦からは一般公開が始まっていましたね。

「こ、これを着て出場しろって言うの……？」

「それは恥ずかしいです……」

流石にこの雄二の注文には2人も困った顔をしています。ですが、これも瑞希の転校を防ぐ為。是非ともやってもらいたいですね。

「「2人とも、お願いだ」」

奇しくも明久と声が被りました。明久もどうやら僕と同じ気持ちのようです。

「……仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげる。ね、瑞希？」

「えっ？あ、は、はいっ！これくらいならお安い御用です！」

まず瑞希の事情を知っている島田さんが、次いで瑞希が承諾してくれました。

「それならすぐに着替えて会場に向かってくれ。試合では自分達がFクラスの所属であることを強調するんだぞ」

2人がFクラスの所属であるとわかれば、喫茶店の宣伝とFクラスのレベルのPRという2つの目的が果たせます。これは大きいですね。

「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて、2人は教室を後にしました。

「……できた」

「わっ、このお兄さん凄いです！」

どうやら康太の作業も終わったようです。

相変わらず下心が絡んだ時の康太の行動力には驚かされます。しかし小学生まで守備範囲だったなんて、つくづく底の知れない男です。

「ふむ。それでは着替えるとするかの。ワシらも行くぞ、鏡護」

「やっぱり僕も着るんだね……」

「当たり前だ。さっさと着替えてこい」

「うぅ……」

結局僕もチャイナドレスを着せられて働かされることになってしまいました。

喫茶店の方は瑞希たちの3回戦が終わったと思われる頃から徐々に客足が増え始め、2人が帰ってきた今も店内はお客さんでいっぱいです。

僕も忙しく店内をあっちへこっちへと走り回っていますが、意外と動きやすかったチャイナドレスには少し驚きました。

しかし僕が着替えてからというもの、康太はずっとカメラのシャッ

ターを切り続けていますし、お客さんには「キミ、可愛いね」なんて声を掛けられてしまうこと多数です。
さらに瑞希が教室に戻ってきた時には、

「はわっ！鏡護君、可愛すぎです！お持ち帰りしてもいいですか？」

などと言い出すのですから焦りました。

その後もお客さんを相手に注文を取ったり、料理を運んだり、食器を片付けたりと頑張っていたのですが、

・・・・・おや、あれは竹原教頭？

明久を呼び止めてなにやら話をしている竹原教頭の姿が視界に入りました。

・・・・・今度は何のつもりでしょう？

あの竹原教頭が用もなく一般生徒、しかも明久に声を掛けるはずがありません。きっとなにかあるはずです。

明久が島田さんに用事を頼まれて、教頭と別れて教室を出て行くのを目で追っていると、その少し後を見るからにガラの悪い男３人が追っていくのが見えました。

・・・・・そういうことですか。

どうやら空き教室に備品を取りに行った明久をボコにする気ですね。
それなら――

「雄二ー！悪いんだけど、餡子が切れそうだから至急取りに行ってくれる？」

「おう。わかった」

歯には歯を、不良には不良を、です。これで明久は大丈夫でしょう。

それから2時間が経ち、明久達が召喚大会の４回戦に出掛ける時間が来ました。
しかし2人が教室を出て行こうとすると瑞希達も試合があることがわかり、なんと4回戦はこの2組の戦いということでした。

明久が出掛ける時に葉月ちゃんが渋りましたが、雄二が

「良い子にしてたら、バカなおにいちゃんがオトナのデートを教えてくれるぞ」

と言った途端、機嫌を直したようでした。

そしてそんな超弩級の爆弾を落としたものだから、島田さんが明久に対して激怒。
しかし瑞希の「お仕置きは召喚大会で」発言によって、その場は何とか落ち着きました。
・・・・・瑞希の真っ黒発言にはドキッとさせられましたがね。

しばらくして帰ってきた４人に試合の結果を尋ねると

「雄二、かな」

「そうね。坂本の1人勝ちね」

「ですね」

という答えが返ってきたのですが、一体何があったのでしょう？

―Ｓｉｄｅ　明久

４回戦の後、喫茶店を手伝って働くこと1時間。僕達は準決勝の為、ステージに来ていた。

今回も雄二には作戦があるようだけど、今回は相手が相手なだけにどうなるかはわからない。いざという時は僕の考えた作戦を使うことも考えておかないと。

『お待たせ致しました！これより準決勝を始めます！選手の皆さんは入場してください！』

審判を務める先生のアナウンスで舞台に上がる。向かい側からは対戦相手の霧島さんと木下さんがやってくる。

「……雄二。邪魔しないで」

「そうはいくか。俺にはまだやりたいことが山程あるんだ！」

そんなに霧島さんと行くのが嫌なら断れば良いのに。雄二も素直じゃないな。

「……そんなに私と一緒に行くのは嫌？」

うっ、これは女の子の必殺上目遣い！こうまでされて誘いを断るような奴は人間じゃない！

「ああ。嫌だね」

人間じゃない。

「……やっぱり、一緒に暮らしてわかりあう必要がある」

む。霧島さんも負けてない。あそこまでキッパリ断られても諦めないなんて。

「ハッ！残念だが、そんな寝言は俺達に勝ってから言うんだな！」

「……わかった。そうする」

2人の話も終わって、いよいよ準決勝が始まる。

「よし。――頼むぞ、秀吉！」

雄二が何故か木下さんに向かって『秀吉』と呼び掛ける。・・・・・・
そうか！2人の容姿が似ていることを利用した入れ替わり作戦なんだね！

「ふふっ」

「秀吉？もう木下さんの演技はいいから、早く僕らと――」

「秀吉ってあっちに転がってるゴミのこと？」

木下さんがステージの一角を指差す。するとそこには――

「なっ！？秀吉、どうしてそんな姿に！？」

ボロボロにされた挙句、手足を縛られた秀吉の姿が。

「バ、バカな！」

雄二が目を大きく見開いて驚いている。作戦は失敗だ。

「……雄二の考えてることなんてお見通し」

「ま、匿名の情報提供もあったんだけどね」

試召戦争の時とは逆に、今回は向こうにしてやられたようだ。それに匿名の情報提供って・・・・・？

「くっ……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」

立ち上がった秀吉が申し訳なさそうに唇を噛んでいる。

それにしても、チャイナドレスで縛られているもんだからもの凄く目に悪い。何だかいけない気分になってしまいそうだ。

「……！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「ム、ムッツリーニ！いつの間に！？」

カメラを構えたムッツリーニが一瞬で僕らの傍に姿を現した。

「撮影なんかしてないで、早く秀吉の縄を解いてあげてよ《その写真、後で売って欲しい》！」

「明久。本音が混ざっているぞ」

しまった。つい僕の正直な部分が出てしまったようだ。

「……了解」

小さく頷くと、秀吉に駆け寄って縄を解き始めるムッツリーニ。できれば写真の件も忘れないで欲しい。

「大人しく降伏してくれると嬉しいな。弱いものいじめはしたくないし」

「くっ……！」

木下さんの降伏勧告に、苦々しげに顔を歪める雄二。

雄二の作戦は失敗。もしこのまま闘っても、この2人が相手では僕らに勝ち目はない。

――ここはいよいよ、僕の出番だ。

（雄二。僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言って欲しい）

（考え？一体何を――）

（今は迷ってる余裕なんてないよ。とにかくよろしく！）

（お、おう）

僕の指示だとバレないように、雄二の陰にそれとなく身を隠す。それと念の為、ジェスチャーをして秀吉に近くに来てもらった。

（それじゃいくよ。僕が言ったことをそのまま口に出すんだ。棒読みにならないように気をつけてね？）

（わかった。今回はお前に任せよう）

雄二が小さく頷く。よしっ、やるぞ！

〈翔子、俺の話を聞いてくれ〉

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

雄二が僕の台詞をそのまま復唱する。よしよし。

〈お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ〉

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

「……雄二の考え？」

〈俺は自分の力でチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ！〉

「俺は自分の力でチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたい――ってちょっと待て！何だこれは！」

雄二が慌ててこちらを振り向こうとするが、そうはいかない。後ろから強引に雄二の頭を押さえつけてやる。

「……雄二」

霧島さんが雄二のことをうっとりと見つめている。やはり僕の作戦に間違いはなかった。

〈だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう〉

「だっ、誰がそんな事を言うかボケェッ！」

雄二が激しく抵抗する。だが、キサマの反応など予測済みだ！

「くたばれ」

「くぺっ！？」

後ろから頚動脈を優しく押さえる。これで聞き分けも良くなるはずだ。

「……雄二？」

霧島さんが続きの言葉を待ちかねている。大丈夫！その期待にお応

えしましょう！

（秀吉、よろしく）

（うむ。了解じゃ）

ここで近くに呼んでおいた秀吉の出番だ。秀吉の声真似で止めを刺す！

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛している、翔子」

本人と区別のつかない声で、秀吉が最後の台詞を告げる。・・・・・・何故か指示していない台詞まで追加されてたけど、まあいいか。

「……雄二。私も愛してる……」

「ま、待て……。俺は、愛してなど……こぺっ！？」

素直じゃない雄二の首を、反論できないように捻ってやった。

「ふはははは！これで最強の敵は封じた！残るはキミだけだ、木下優子さん！」

「ひ、卑怯な……」

霧島さんは雄二の亡骸に抱き付いて、胸元に顔を埋めている。雄二の手足が力なく垂れ下がっているのは気のせいだろう。

「でも、アタシ1人でも吉井君には負けないはずっ！行くよ――試
サモン

獣召喚っ！」

ムッツリーニに目配せをする。これが元々雄二が考えていた秘策だよっ！

「ふふっ、それはどうかな！いくよっ、新巻鮭（サーモン）！」

「……試獣召喚（ボソッ）」

喚び声に応え、姿を現す召喚獣。それはたとえＡクラスの木下さんでも太刀打ちできない強さを持った――

「えっ！？それ、土屋君の……！」

ムッツリーニの召喚獣だ。これが秘策、『代理召喚（バレない反則は高等技術）』だ！

「……加速（ボソッ）」

「ほ、本当に卑怯――きゃあっ！」

最初から腕輪の能力を発動して一気に勝負を決める。保健体育であればムッツリーニに敵はいない！

『Ａクラス　木下優子＆霧島翔子　ＶＳ　Ｆクラス　土屋康太＆坂本雄二
保健体育　３２１点＆ＵＮＫＮＯＷＮ　ＶＳ　５１１点＆ＵＮＫＮＯＷＮ』

「よしっ！僕と雄二の勝利だ！」

物言いがつく前に勝鬨を上げておく。

『……ただいまの勝負ですが――』

あ、それでも物言いがつきそうだ。仕方ない。

「霧島さん、僕らの勝ちで良いよね？」

「……それは」

「翔子、愛している（※秀吉）」

「……私達の負け」

「ちょ、ちょっと代表！？」

霧島さんが負けを認める。これで自他共に認める勝利だ。

『……わかりました。坂本・吉井ペアの勝利です！』

勝ち名乗りを受け、僕は観客の方に向き直った。けど、お客さんの視線は冷たい。そりゃそうか。

「それじゃ、僕らはこれで！」

一礼をしてから、罵声が飛んでくる前に退散する。

「明久。なかなかの機転であったな」

隣を歩く秀吉が着崩れたチャイナドレスを直しながら話し掛けてくる。もったいない。そのままの方がお客さんが増える気がするのに。

「……作戦勝ち」

「ありがとう。秀吉とムッツリーニの協力のおかげだよ」

これで残すは決勝戦のみ。あと1つ勝てば、姫路さんの転校は阻止することができるんだ！

「ところで、雄二をあのままにしておいて良いのか？」

「え？別にいいんじゃない？」

「そうか。明久がそう言うのなら良いのじゃが」

「あはは。雄二もたまには素直になるべきだと――」

「霧島が雄二に一服盛って持ち帰ろうとしておったので心配になっての」

「き、霧島さん！雄二には決勝もあるからクスリは許して！」

急いで引き返した僕が見たのは、虚ろな目をしてタキシードに着替えている雄二の姿だった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

雄二達が準決勝に出掛けていった後、しばらくしてから僕は着替えるために更衣室に来ていました。

「まったく。雄二のヤツも何てことをやらせてくれるんだ」

着替えている最中、ずっと愚痴りっぱなしです。

「しかも瑞希と優子がやってくれたメイクがなかなか落ちない……」

はじめは水道の水で洗い流そうと思ったのですが、完全に落とすことができません。仕方なく更衣室に併設されているシャワー室で、ついでに汗も流すことにしました。

そんなことをしていたら結構時間を使ってしまったようで、気付けば準決勝も既に終わっているような時間でした。

「マズいっ！早く戻らないと！」

急いで教室へと戻ると、教室の前で話をしている雄二、明久、康太の3人の姿が。

「あれっ？どうしたの3人とも」

「ん？……なんだ鏡護、着替えたのか」

「鏡護！どうして着替えちゃったのさ！」

「……（コクコク）」

「そりゃ着替えるに決まってるよ。ずっとアレを着てたくはないからね」

「わかってない！鏡護は何もわかってないよ！」

「……（コクコク）」

そう言って明久と康太はその場に膝をつくと、涙を流して悔しがりました。何故でしょう？

「それよりどうしたのさ。教室前に集合なんかしちゃって」

「ああ。それなんだが――」

雄二が状況を説明してくれました。

・・・・・説明中・・・・・

「瑞希と島田さんと葉月ちゃんと秀吉が誘拐された？」

「そうだ」

・・・・・チッ、まさか本当にここまで手段を選ばないとは。少々

相手を甘く見ていたようです。
自分自身の見通しの甘さに腹が立ちましたが、それよりも今は４人の方が心配です。

「それで、４人の居場所は？」

「……行き先はわかる」

と、康太がラジオのような機械を取り出しました。

「これは？」

「……盗聴の受信機」

・・・・・オッケーです。この際康太が何故そんなものを持っているかなんて野暮なことは聞きませんよ？

「よし、じゃあすぐに出掛けよう」

「待て、鏡護。何故お前はそんなに冷静でいられる。お前の大事な姫路がさらわれたんだぞ？」

雄二から制止の声が掛かり、そんな事を聞かれました。

「……この状況を予想してなかったわけじゃないからね」

「ほう？」

・・・・・この際ですから話してしまいましょうかね。

「雄二も気付いてるとは思うけど、今回の学園長の依頼には裏がある。僕はそれを最初の時点で本人の口から聞いてたんだ。だから、あらゆる妨害が来ることを予想してたんだよ」

「やはりそうか。だから喫茶店のテーブルの件でもあんな提案を…」

「そういうことだよ。営業妨害なら、ネタがなければ回避するのは簡単だからね」

「なら、お前は今回の黒幕についても知っているということか？」

「まあね。でもその辺は誘拐（コレ）事件を解決した後で、直接学園長に聞くと良いよ」

「そうさせてもらおう」

雄二との話も終わり、いざ行こうとしたところで

「……天水」

「あれっ？霧島さん？どうしたの？」

突然その場に霧島さんが現れました。息を切らせているようですが、何かあったんでしょうか？

「……優子が変な男達にさらわれた」

・・・・・・何ですって！？

「それは本当？」

「……うん。私が声を掛けられたんだけど、一緒にいた優子が私を逃がしてそのまま……」

霧島さんが俯きがちにそう教えてくれました。

「……そっか。わざわざ教えに来てくれてありがとう」

自分も怖かったのでしょう。少し震えている彼女の頭に手を置くと、小さい子にするようにその頭を撫でました。

「……っ／／／／お願い。優子を助けて」

それが恥ずかしかったのか、顔を赤くしながら霧島さんはそう告げました。

「もちろん。……さあ、行こう。これも王子様の役目、ってね」

僕は彼女にそう答えると、明久に向き直って茶目っ気たっぷりにそう言いました。

「王子様の役目って？」

「お姫様をさらった悪者を退治することさ」

―Ｓｉｄｅ　瑞希

突然教室に現れた男の人達は、私達を脅して学園の近くにあったカラオケボックスへと連れてきました。

「さて、どうする？　坂本と――吉井と天水だったか？　そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？」

「待て。吉井と天水ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今は知らないが中学時代は、相当鳴らしていたらしいからな」

「坂本って、まさか《悪鬼羅刹》の坂本か？」

「ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……」

「気持ちは分かるが、そうもいかないだろ？　依頼はその３人を動けなくする事なんだからな」

今は私達の手足を縛って、目の前でなにやら話をしています。

坂本君に吉井君、それに鏡護君の名前も聞こえてきましたが、何が目的なんでしょう？

「お、お姉ちゃん……」

「アンタ達、いい加減葉月を放しなさいよ！」

葉月ちゃんを盾に取られて捕まってしまった美波ちゃん。いまだに葉月ちゃんを放さない男の人に怒鳴りかかっています。

「お姉ちゃん、だってさ！かっわいぃー！」

「ギャはははは！」

弱々しい葉月ちゃんの声に騒ぎだす男の人達。

「ホント、コイツら最低……っ！」

「落ち着くんじゃ姉上！」

私達より後から連れてこられた優子ちゃんと、一緒に捕まった木下君もそんな彼らに憤りを覚えているようです。

・・・・・鏡護君、どうか私達を早く助けに来てください。

そう願わずにはいられない私でした。

「……灰皿をお取り替え致します。」

店員さんが入ってきました。

「おう。で、このお姉ちゃん達どうする？ヤッちゃっていいの？」

「だったらオレ、この巨乳チャンがいいな～！」

「あっ、ズリー！それじゃ俺2番ね！」

私はとにかくこの状況を何とかしようと、彼らに話しかけます。

「あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください！」

「だってさ～。どうする？」

「それはオネーチャン達の頑張り次第だよな？」

そう言って、彼らの1人が私に近づいてきました。

「やっ！さ、触らないで――」

「瑞希っ！」

「ちょっとアンタ達！いい加減にしなさいよね！」

優子ちゃんと美波ちゃんが私を庇って、男の人との間に割って入ってきました。

「チッ、うっせぇんだよ！」

「「きゃぁっ！」」

2人が突き飛ばされて、近くにあったテーブルを巻き込んで倒れてしまいました。

「鏡護君、助けてっ！」

私は思いきりそう叫んでいました。その時――

――バンッ！

「おい、テメェら！俺の女に手をあげてタダで済むと思うなよっ！」

「お邪魔しまーす！」

鏡護君と吉井君がドアを開け放って室内へと入ってきました。

「「鏡護（君）！？」」

「アキ……」

現れるはずのない人物が登場して、私と優子ちゃん、美波ちゃんはそれぞれ驚きの声をあげました。

「ハァ？お前ら誰だよ？」

「明久、やるぞ」

「了解。それでは失礼して……」

「「死にくされやぁぁっ！」」

男の人の質問には答えずに吉井君と言葉を交わすと、鏡護君の姿が消えました。

「えっ？」

私が突然の出来事に声をあげると、

「ぎゃあぁぁっ！」

「ぐあっ！」

「な、何が……っ！」

そんな声が聞こえるのと同時に男の人が3人その場に倒れました。見ると3人を結んだ直線の終点の辺りに、黒い棒のようなものを手にした鏡護君がいました。鏡護君の持っている棒からバチバチという音が聞こえていますが、あれは電気でしょうか？

「テメェら、よくも美波に手をあげてくれたな！全員ブチ殺してやる！」

吉井君も掴みかかってくる男の人達に拳や蹴りを振るって応戦しています。

「コイツら、吉井と天水って野郎じゃねぇか？」

「どうしてここが！？」

男の人達も突然現れた2人に驚きを隠せないようです。

「……ったく、お前ら2人して勝手に突っ込んでいきやがって。俺も混ぜろって――のっ！」

「げふぁっ！」

「さ、坂本まで来ていたのか！？」

まさか2人だけでなく、坂本君まで来ていたなんて。私はまた驚いてしまいました。

男の人達はもう完全に浮き足立ってしまっています。慌てて逃げ出す人も出始めました。

「おい、オマエら！この嬢ちゃんがどうなってもいいのかァ？」

男の人のうちの1人が葉月ちゃんを羽交い絞めにしていました。小学生の女の子相手にそこまでするなんて、何て酷い人達なんでしょう！

「いいか？おとなしくしてろよ？さもないと、ヒデェ目に――」

「……遭うのはお前」

――ゴインッ

「あがぁっ！」

突然白目を剥いて倒れる男の人。その後ろからはクリスタルの灰皿を振り切ったポーズで固まっている小柄な男の人がいました。

騒ぎの直前に部屋に入ってきた店員さんの姿をしていたのは――

「つ、土屋君っ！？」

クラスメイトの土屋君でした。土屋君はそのまま私達を縛っていたロープを切ってくれました。

「お、お姉ちゃん！お姉ちゃーん！」

「葉月っ！良かった……。怖かったでしょう……？」

解放された葉月ちゃんと抱き合う美波ちゃん。本当に良かったです。・・・・・

「鏡護君っ！」

そんな光景に安堵した私も鏡護君へと飛びついてしまいました。

「鏡護っ！」

少し遅れて優子ちゃんも。

「良かった。２人とも無事か？怪我はないか？」

鏡護君が心配そうな表情で私達に聞いてきます。

「はい。大丈夫です」

「アタシも。怪我もないわ」

２人でそれぞれ自分の状態を報告します。すると、鏡護君が安心したように笑ってくれました。

「そっか。なら、ここは雄二達に任せて俺達は帰るとしよう」

「「はい（そうね）」」

そう言った鏡護君の後について、私と優子ちゃんはその場を後にしました。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第17問　『チャイナと大会準決勝とお姫様を救出せよ！』（後書き）

あとがき

鏡護　「……一応、釈明の機会はくれてやろう」

作者　「……それよりも、何故吊るし上げられているのか説明を求める」

鏡護　「それは簡単だ。お前が口約を破ったからだ」

作者　「口約？」

鏡護　「忘れたのか？お前は前回あとがきで『大事は起きない』と言っただろう」

作者　「……ああ！確かに言ったな！」

鏡護　「それが蓋を開けてみたらどうだ？誘拐事件なんて起こしやがって」

作者　「でも無事解決したじゃん」

鏡護　「解決したらそれで良い、で済むはずがないだろう？」

作者　「えぇ～！……ダメ？」

可愛く首をかしげる作者。

鏡護　「男がそれをやってもキモいだけだ」

作者　「畜生！コレでもダメかっ！」

鏡護　「むしろソレでイケると思っていたお前がおかしい」

作者　「なんだとっ！」

鏡護　「……もういい。付き合ってられん」

作者　「あ、や、ちょっと待って――アーーッ！」

・・・・・作者制裁（おしおき）中につき、しばらくお待ちください・・・・・

鏡護　「フンッ！コレに懲りたらもう2度とあんな真似はするなよ」

作者　・・・・・返事がない。ただの屍のようだ。

鏡護　「作者が使い物にならないので、次回予告も俺がやろう。それでは、

次回、第18問『終わり良ければ全て良し？祭の終わりに大輪の華（仮）』

を、楽しみにしててくれ！」

第１８問　『終わり良ければ全て良し?祭の終わりに大輪の華』（前書き）

バカテスト　歴史

問　次の問いに答えなさい。
『冠位十二階が制定されたのは西暦（　　）年である』

姫路瑞希・天水鏡護の答え
『６０３』
教師のコメント
正解です。

坂本雄二の答え
『６０３』
教師のコメント
一体どうしたのですか?驚いたことに正解です。

吉井明久の答え
『６０３』
教師のコメント
君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

第１８問　『終わり良ければ全て良し？祭の終わりに大輪の華』

カラオケボックスから出た後、２人に家まで送ることを提案した僕ですが

「嫌よ。今日は家に帰りたくないわ」

「嫌です。鏡護君と離れたくありません」

優子に瑞希、２人してその申し出を断るのですから驚きました。

「でも僕の家は今は他に誰もいないし……」

そうなんです。今まで言ってませんでしたが、現在我が天水家（木造２階建て、築３０年）に暮らしているのは僕１人なのです。さすがに年頃の女の子を、同じく年頃の男が１人暮らしをしている家にあげるのはマズいと思った僕は２人の説得をしてみます。

しかし――

「そんな事は知ってるわ。それでも自分の家には帰らないわよ？」

「私も別に気にしません。鏡護君は私達と一緒なのは嫌ですか？」

それでも２人は折れる気はないようです。

「そ、それに２人のご両親が反対するんじゃ……」

僕も最後の抵抗を試みますが、

「「……あ、もしもしアタシ（私）だけど（です）、今晩なんだけど（ですが）……」」

突然携帯を取り出して何処かへ電話する2人。

「「許可取ったわよ（りました）」」

あっという間に親の許可を貰ってしまったようです。

・・・・・ご両家の親御さん方、本当にそれでいいんですか？

「あはははは……ハァ」

僕はというと、なんとしても僕の家に来ようとする2人の執念にもう諦めるしかないことを悟りました。

「わかった。今日は家に泊まってくれて構わないよ。ただし家には2人の着替えはないから、それくらいは取りに行こう？」

「「わかったわ（りました）」」

そこだけはこちらも譲れない一線だったので、何とか2人に了承してもらうと僕達は3人で帰路につきました。

＊　　＊　　＊

「ただいま～」

「「お邪魔しま～す♪」」

2人の着替えを取りにそれぞれの家に寄ってから、我が家へ帰宅しました。

「鏡護の家に来るのは久しぶりね～」

「私なんかほぼ10年振りですよ。でも、変わってませんね～」

それぞれにそんな事を口にする2人。

「それじゃ、2人は1階の客間を使ってね。僕は2階の部屋で着替えてくるから」

「「は～い！」」

・・・・・まったく。こういう時は素直なんですから・・・・・

着替えを終えた僕は、今日の夕飯を作り始めました。

幸いな事に冷蔵庫には充分な食料が入っていたので、改めて買い出しに行く必要もありませんでした。

2人には手伝いを申し出られましたが、丁重にお断りしました。（特に瑞希は）

料理でもすれば気が紛れるかもしれないとも考えましたが、それ以上に自分の命が惜しいですからね・・・・・

その後3人で夕食をとりましたが、2人には好評のようで何よりでした。

食事の後は、3人で昔話や今の学校生活について色々な話に華を咲かせました。
特に優子と瑞希がお互いにそれぞれ僕との思い出を語り合っては、互いに羨ましがっていたのが印象的でした。

交代（と言っても僕1人と瑞希&優子という形）でお風呂に入った後、いよいよ後は寝るだけとなったその時、事件は起こりました。

「「鏡護（君）」」

2階の部屋へ帰ろうとした僕の服の裾を2人が掴んで放さないんです。

「？どうしたのさ瑞希、優子？」

訳がわからない僕は、とりあえず2人に理由を求めました。

「「アタシ（私）と一緒に寝てください」」

「ブハッ！？」

まさかの爆弾発言でした。

「ちょ、ちょっと待って！2人とも自分が何を言ってるかわかってるの？」

「もちろんよ」

「はい」

即答されてしまいました。

「……でも、一体どうして？」

２人がそれを言い出した理由が知りたい僕はそう聞きました。

すると――

「「それは……」」

２人して口を噤んでしまいます。何か言いにくいことだったんでしょうか？

「あ、ごめん。話しにくいことだったら無理には聞かないけど……」

咄嗟にフォローを入れます。しかし、

「……今日、アタシ達誘拐事件に巻き込まれたじゃない？」

「……うん」

少し間を取って、優子が話し始めました。

・・・・・しまった。その事だったんですね・・・・・・。２人が言い淀んだ理由が分かり、若干後悔の念を覚えます。

「その時に思ったんです。もしこのまま誰も――鏡護君も助けに来なかったら、私達はどうなるんだろうって」

それでも瑞希が続きを話し始めたので、口を挟むのは憚られました。

「結局は鏡護達が助けに来てくれた。でも、やっぱりあの時身体が感じた恐怖は消えてくれないのよ……」

やはり気丈な態度を取っていても、内心では怯えていたんでしょう。2人とも自分の身体を抱いて震えています。

「だからお願いです！私達に鏡護君の温もりをください。私達はもう大丈夫なんだって、その証をください……」

「お願いよ、鏡護……」

今にも泣き出しそうな顔をした2人をそれ以上見ていたくなくて、僕は2人を抱き寄せるとこう言いました。

「ごめん。2人には本当に怖い思いをさせちゃったね。……わかった。これからは何があっても僕が必ず2人を守る。その誓いの証を2人にあげるよ。いいかい？」

その言葉に2人は小さく頷くと、僕にしな垂れかかってきました……

翌朝。

いつも通りの時間に目が覚めた僕は、習慣って偉大だなぁなどと考えながら両隣でまだ眠っている2人を起こさないようにそっと起き出すと、静かに2階の部屋に着替えに行きます。

布団を抜け出す時に、２人の幸せそうな寝顔を見ながらその髪を指で軽く梳かすのも忘れません。自然と頬が緩むのが自分でもわかります。

そうして、着替えと簡単な身支度を済ませた僕はキッチンで朝食の準備をします。

簡単にサラダとスープを用意しようと料理をしている途中で、客間から人の動く気配が。どうやら２人も目を覚ましたようです。

しばらくすると客間から下着姿の２人が――って、えぇぇっ！？

「ちょ、ちょっと２人とも！お願いだから服を着て！」

慌てて視線を明後日の方角へ逸らしながらそう言います。

「あら。鏡護ったら照れてるの？昨夜はあんなに……」

「ゆ、優子っ！」

「ふふっ。でも真っ赤になってる鏡護君、可愛いです」

「み、瑞希までっ！？」

どうやらここに僕の味方はいないようです・・・・・

「と、とにかく早く服を着てよっ！」

「えぇ～、どうしよっかな～？」

優子が面白がってそんなことを言ってきます。

「あ、でしたら鏡護君が私達に『おはようのキス』をしてくれたら許してあげます！」

瑞希までそんなことを・・・・・これは条件を呑むしかなさそうですね・・・・・

「わ、わかったよ！します、させていただきます！」

「「やったぁー♪」」

・・・・・もう僕は金輪際この2人には勝てる気がしません。

「それじゃ、アタシから。おはよう、鏡護♪」チュッ

「あ、優子ちゃんズルいです！次は私ですよ。おはようございます、鏡護君♪」チュッ

「おはよう、2人とも。よく眠れたようで何よりだよ」

そうして3人で笑い合います。

何があっても僕が必ず2人を守る。その誓いをもう一度深く心に刻み付けながら。

その後の朝食の席で、2人には今回のこれまでの事の顛末を全て話しました。

瑞希の転校の件では、僕が知っていたことに瑞希が驚いたり、話してくれなかったことに対して僕と優子が怒ったりしました。

誘拐事件の事は、僕と明久達が受けた学園長からの依頼の件から全てを話しました。２人からは、

「まったく、鏡護は相変わらずアタシの知らないところで危ない橋を渡ってるんだから」

「本当です。何でも自分１人で抱え込もうとしちゃダメですよっ！」

などと呆れられたり怒られたりしてしまいました。
それから、２人にはもしもの時の為にスタンガン（２０万ボルト）を渡しました。

それらの話が全て済んだ後は今日の学園祭を一緒に回る約束をして、３人で登校しました。

清涼祭２日目は特に妨害もなく、割と平穏に時間が過ぎていきました。
さすがに明久達に召喚大会の決勝まで進まれてしまった以上、小細工は無駄だと思ったのでしょう。

おかげで今日は朝から中華喫茶も大賑わいで、ひっきりなしにお客さんが入ってきます。

そして――

「いらっしゃいませ～！『ヨーロピアン』へようこそ！」

何故か僕は今日もチャイナドレスを着せられて、ウェイトレスとして働いています・・・・・涙

今日の営業が始まる直前、秀吉共々強制的に着替えさせられました。

「すいませ～ん！注文良いですか？」

「は～い！ただ今伺います！」

『あの娘、可愛いな』
『ああ。だが、他の娘達もなかなか……』
『いやー、どの娘もレベルが高いな！』
『料理も美味いし、こりゃ当たりだな！』
『ホントそうだな！』

若干納得がいきませんが、概ね好評のようですから文句も言えません。

その後、休憩時間を利用して瑞希、優子の2人と学園祭を回りましたが、その時も何故か2人は僕が着替えることを許してくれませんでした。

・・・・・神様。僕、何か悪いことしましたか？

そして午後1時からは本日のメインイベント、召喚大会決勝戦が行われました。

明久と雄二の相手は、なんと僕達を幾度となく妨害してくれたあの常夏コンビでした。

さらに場内アナウンスによって、彼らの所属が３－Ａだとわかった時は「ああ、世も末だな」などと思ってしまいました。

あんなのがこの学園の最高学年の、しかも最上位クラスの生徒だなんて信じられませんからね。

４人がそれぞれ召喚獣を召喚し、会場の大型ビジョンに４人の点数が表示されました。

『Ａクラス　常村勇作＆夏川俊平　ＶＳ　Ｆクラス　坂本雄二＆吉井明久
日本史　２０９点＆１９７点　ＶＳ　２１５点＆１６６点』

・・・・・驚きました。

雄二は元神童と呼ばれた男ですから、やればできるとは思ってましたが、あの明久があれだけの点数を取るとは。

一体どれだけ勉強をしたのか。普段の彼を知る僕としては、それが血の滲むような努力だったことは想像に難くありません。

結果はもちろん雄二＆明久ペアの勝利。

手に汗を握る素晴らしい試合を見せてくれた2人には、本当に惜しみない拍手を送りたいと思います。

『ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を開始してください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「……（コクコク）」

放送を聞いた途端、皆して床にへたり込みました。

明久達の大会優勝が決まった後から怒涛の勢いでお客さんが雪崩れ込み、中華喫茶はホールも厨房も上へ下へと大忙しでした。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

「ああ。それなら後夜祭の後に話をしに行くって言ってたよ。まあ結果は大体予想できるけどね」

「そうじゃな。明久達があれだけの活躍を見せたのじゃから、きっと姫路本人にとって良い結果になるじゃろう」

「うん。そうだよね！」

実際にはどうなるか、まだ決まっているわけではありません。しかし、明久達の努力が報われない結果になることはきっとないでしょう。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわね」

「えぇっ!?どうして!?」

島田さんの言葉に明久が過剰に反応します。

「どうして……って言われても、恥ずかしいからに決まってるでしょ？」

「すいません。すぐ戻りますので」

「待って!2人とも考え直すんだ!カームバァーック!」

明久は必死に引き止めようとしましたが、2人は構わず教室を出て行ってしまいました。

・・・・・確かに僕ももう少し瑞希のチャイナ姿を見ていたかったです。また今度個人的に頼んでみましょうか？

ちなみに今日も手伝いに来てくれた葉月ちゃんは、あの格好のままで帰宅しました。・・・・・末恐ろしい子です。

「ふむ。ならばワシも――」

「させるかっ!せめて秀吉と鏡護だけは着替えさせないぞ!」

「……!（コクコク）」

やはりそうきますか!しかし僕もそれを予想してなかったわけではありませんよ!

「残念だったね明久、康太!僕は着替えさせてもらうよ!」

「あっ、しまった！？」

「……！？」

追っ手が掛かる前に早々に教室から駆け去ります。

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ――って鏡護、どこへ行く！」

「ごめ～ん。話はそっちで済ませちゃって！」

雄二に呼び止められましたが、今の僕には一刻も早くこの服から解放されることの方が重要なんです！

学園長とは後日改めて話をさせてもらいましょう。

そんなこんなで着替えとシャワーを終えた僕が更衣室を出ると、

――ドォンッ！パラパラパラ

凄まじい轟音と共に、何かが炸裂したような音が聞こえてきました。

「な、何事っ！？」

慌てて近くの窓から見てみると、校庭の一角からこの更衣室がある新校舎の屋上目掛けて何かが飛んできました。

――ドォンッ！パラパラパラ

今度はその飛んできた何かの正体がはっきりとわかりました。

「これは……花火？」

そう、炸裂した瞬間に色とりどりの綺麗な光を放つそれは、間違いなく打ち上げ花火です。

しかし、誰がこんなことを――

『貴様らぁっ！何をやっているかぁっ！』

『うわぁっ！』

・・・・・なんとなくそうじゃないかとは思いましたが、やっぱり明久達だったんですね。

――ドォンッ！ガラガラガラ

・・・・・た、大変です！最後に飛んできた1発が校舎にブチ当たりましたよ！？

ですが、今花火が当たった場所にあるのは確か教頭室だったはずです。

・・・・・偶々とはいえ、これは良かったんじゃないでしょうか？

『吉井に坂本ぉっ！貴様ら無事に帰ることができると思うなよ！』

『鉄人だ！逃げるぞ明久！』

『おうともさっ！』

『逃がすかっ！今日は絶対に帰らせんぞ！』

最後に聞こえてきたそんな声に2人の無事を祈りながら、僕は学校を後にして打ち上げ会場の公園へと向かいました。

第１８問　『終わり良ければ全て良し？祭の終わりに大輪の華』（後書き）

あとがき

作者　「清涼祭終了～！」

鏡護　「やっと終わったよ～！」

作者　「いやぁ、お疲れさん！」

鏡護　「ありがとう！色々と事件もあったけど、楽しかったよ！」

作者　「……大人の階段も上っちゃ――」

鏡護　「うわぁぁっ！」

作者　「なんだよ。うるさいな。途中で遮るなよ」

鏡護　「そりゃ止めたくもなるよ！何言っちゃってるのさ！？」

作者　「何って今回の冒頭で――」

鏡護　「ストップ！その先は言わなくていいから！」

作者　「当事者の方々にインタビューしてきましたので、こちらをお聞きください！」

作者　『彼との初夜はいかがでしたか？』

Y．K．　『彼ったら意外と激しくって……ポッ／／／／』

M．H．　『でも、とっても優かったです……ポッ／／／／』

鏡護　「わぁぁっ！なんてことをしてくれたんだ！」

作者　「いいじゃないか別に」

鏡護　「僕は良くないよ！？」

作者　「２人の幸せに水を差すのか？」

鏡護　「うっ……。そういうわけじゃないけど……」

作者　「ならいいだろう？幸せいっぱい大いに結構じゃないか」

鏡護　「そ、それはそうだけど……」

作者　「……まあ、これでまた多くの男達を敵に回しただろうがな」

鏡護　「やっぱり良くない！」

作者　「……もう諦めろ」

鏡護　「諦められないよっ！」

作者　「話は変わりますが、なんとＰＶ７５，０００、ユニーク５，０００を突破いたしました！」

鏡護　「……ほんとに唐突だね。でもやったね！」

作者　「ああ。これも全ては拙作を読んでくださっている読者の皆様のおかげです！ありがとうございます！」

鏡護　「ありがとうございます！」

作者　「これからもどうぞよろしくお願い致します！」

鏡護　「よろしくお願いします！」

作者　「次回で清涼祭編（原作第２巻）が終了です。それでは、次回、第１９問『アルコールで性格が変わる人は大抵面倒くさい（仮）』を、」

作・鏡　「「お楽しみに～！」」

第１９問　『お酒でタガの外れたヤツは大抵扱いが面倒くさい』（前書き）

バカテスト　英語

それでは最後に、頭の体操として一風変わった英語のクイズをどうぞ。

【？】と【？】に当てはまる語を答えてください。

『マザー（母）から【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から【Ｍ】を取ったら【ｏｔｈｅｒ】（他人）です』

教師のコメント

その通りです。Ｍｏｔｈｅｒから『Ｍ』がなくなるとｏｔｈｅｒ（他人）という単語になります。こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー（母）から【Ｍ】を取ったら【Ｓ】（他人）です』

教師コメント

土屋君のお母さんが『ＭＳ』でも『ＳＭ』でも、先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

天水鏡護の答え

『マザー（母）から【愛嬌】を取ったら【悪魔】（他人）です』

教師のコメント

ノーコメントでお願いします。

第１９問　『お酒でタガの外れたヤツは大抵扱いが面倒くさい』

『『かんぱ～いっ！！』』

僕が打ち上げ会場になっている近所の公園に着いた時に、ちょうどそんな声が聞こえてきました。

「よかった。ちょうど始まったところみたいだね」

会場に入ると、早速近くにいたクラスメイト達が声を掛けてくれました。

『おっ、天水！やっと来たな！』
『お疲れ～！』
『くそぉぉっ！どうして着替えちまったんだよ！』
『もったいない！何てことをしてくれたんだ！』
『頼む天水！もう１回着てくれ！』

・・・・・このクラスは大丈夫なんでしょうか？若干心配になってきました。

「まったく、皆ちょっと冗談が過ぎるよ？」

『『俺達は本気（マジ）だ！！』』

こんなところで無駄な結束力を発揮しないでください・・・・・

「天水、ホラよ」

そう言って僕にジュースの入った紙コップを手渡してくれたのは須川君でした。

「あ、ありがと」

「今回天水はホールに厨房と正に八面六臂の大活躍だったな」

「そんなことないよ。……そういえば、須川君って料理できたんだね。初めて知ったよ」

「ああ。昔からよく母親の手伝いをしたりしてたからな」

「へぇー」

「立派じゃのう」

「……（コクコク）」

いつの間にやら秀吉と康太が近くに来ていました。

「秀吉に康太。２人もお疲れ」

「うむ。お疲れじゃ、鏡護」

「……（コクコク）」

３人でコップを打ち合わせて乾杯をします。

ジュースを飲んでみたら、少し苦味がしました。・・・・・もしかして安物でしょうか？

「あっ、明久と雄二も来たね」

2人とも顔がいつもの倍くらいまで腫れています。結局西村先生に捕まったようですね。

「お疲れ～」

「先に始めておったぞ」

「……遅い」

「ゴメンゴメン。ちょっと鉄人がしつこくてさ」

やっぱりそうでしたか。

「それにしてもお主ら、もはや学園中で知らぬ者はおらん程の有名人になってしまったのう」

「……（コクコク）」

「そうだね。今や2人は花火で校舎を爆破したテロリストだもんね」

「……コイツと同じ扱いだとは不本意だ」

「その台詞、そっくりそのまま返すよ……」

残念ながら、どちらも五十歩百歩だと思います。

「あれだけのことやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ウチだって気になるし」

おそらく、学園長が手を回したんでしょう。

・・・・・それにしてもこのジュース、もしかしてアルコール入りじゃないでしょうか？

周りにいる皆の顔が一様にほんのり赤く染まっていますし、いつもの3割増しくらいテンションが高い気がします。

「そういえば、お店の売り上げってどうだったの？」

明久が島田さんに質問しました。言われてみれば、僕もまだ聞いていません。

「そうね。そんなに凄いって程じゃないけど、たった2日間の収益にしては結構な額になったんじゃないかしら」

そう言って収支の書かれたノートを見せてくれる島田さん。僕も明久の横から覗き込みます。

どれどれ・・・・・ふむ。確かになかなかの額を稼げましたね。しかし――

「この額だと、机と椅子は厳しいな。畳と卓袱台がせいぜいだろう」

やはり喫茶店では、どんなに人気が出てもお客さんの回転に限界が出ます。学園祭のような短期間の営業ではこれくらいが限界でしょ

う。

「う〜ん……。やっぱりあの妨害が痛かったね」

確かにそれも一理あります。常夏コンビの妨害がなければ、もう2〜3割くらいは上乗せできたかもしれません。

「すいません。遅くなりました〜」

と、可愛らしい声が僕達の後ろから聞こえてきました。どうやら瑞希も遅れて来たようです。

「瑞希、どうだった？」

皆を代表して、僕が瑞希に聞きました。

「はいっ！お父さんもわかってくれました！これも皆さんのおかげです！」

Vサインと共に、瑞希がそう答えました。

「よかったね」

「はいっ！」

2人で笑い合います。後で優子にも教えてあげないといけませんね。

「……ちょっと待て。今姫路は『皆さんのおかげ』と言ってたが、もしかして知っていたのか？」

雄二が僕に聞いてきました。

「ああ、実は今朝家で朝食を食べてた時に話しちゃったんだ」

知られた以上は隠しておく必要もなくなったので、僕は素直にそう答えました。

「……『今朝家で朝食を食べてた時に』、だと？」

「うん。そうだけど？」

雄二が僕に確認を取るようにそう聞いてきます。

「つまり今日、姫路はお前の家で朝食を食べたのか？」

「？そうだよ。ちなみに昨日は瑞希と優子が家に泊まって、今朝は３人一緒に登校したんだ」

「……そうか」

それだけ呟くと、雄二は黙ってしまいました。・・・・・どうかしたんでしょうか？

そしてしばらく沈黙を保ったままだった雄二は、突然こんなことを言い出したのです。

「野郎共！今の話は聞いていたな？これより鏡護を第１級犯罪者として、その抹殺を命ずる！」

『『サー、イエッサー！』』

「え、えええぇぇぇっ！？」

雄二の号令に従って、突然クラスメイト達が僕に襲い掛かってきました。

「ちょ、ちょっと皆！一体どうしたっていうのさ？」

訳がわからない僕は、皆の攻撃をかわしながらそう問いかけます。

すると――

『うるせぇ！姫路さん、木下さんと付き合ってるだけでも許せなかったのに！』

『よりにもよってその2人を自分の家に泊め！』

『あまつさえ朝一緒に登校するなんて！』

『『羨ましいんだよ、コノヤロウ！』』

彼らの魂の叫びが返ってきました。

「……ってそれ、ただの八つ当たりだよね！？」

『『八つ当たりして何が悪い！』』

・・・・ダメですね。僕が喋る言葉は、結果として全て彼らを煽ることに繋がってしまうみたいです。
しかもアルコールが入っているせいか、彼らの攻撃には一切容赦がなく、また動作のキレが異常に鋭いです。

・・・・しかし、こちらも一方的にやられるわけにはいきません。
僕は懐から誘拐事件の時にも使ったスタンロッド（５０万ボルト、通販?で購入）を取り出し、コンタクトを外します。

「いいだろう!掛かって来やがれ!全員返り討ちにしてやる!」

そう言い放つと、俺は逆にクラスメイト達の間に突っ込んでいった。

『ぎゃあぁぁっ!』
『し、痺れるぅぅ!』
『天水、よくも!』
『取り囲んで一気にいくぞ!』
『『うおぉぉっ!』』

「ハッ!無駄無駄無駄ァッ!」

俺は近づいてくるヤツは殴り、身体を掴まれたら棒を押し付けて電撃を放つなどして片っ端からクラスメイトを屠っていく。

「どうしたどうしたっ!この程度で終わりか?」

『くっ!流石は蒼氷(フェンリル)の銀狼!』
『ダメだっ!圧倒的過ぎる!』
『ヤツは化け物か!?』

『俺達ではヤツには勝てないのか！？』

次々に地に沈められていくクラスメイトを見て、一部が怖気づく。

「「鏡護、覚悟ォォッ！」」

そんな叫びと共に、俺の両サイドから明久と雄二が殴り掛かってくる。

・・・・・チッ！普段あれだけいがみ合っているのに、どうしてこんな時だけ息がぴったりなんだ！

2人は実に絶妙なコンビネーションで攻撃を繰り出してくる。

始めは何とかかわしていられたが、だんだん旗色が悪くなってくる。

・・・・・こうなったら『奥の手』を使うまで！

そうして俺は“ある言葉”を雄二にぶつけた。

「そうは言うが雄二！お前だって毎朝霧島が家に迎えに来ているだろう！」

「なっ！どうして鏡護がそれを知っている！？」

フッ。やはり掛かったな。・・・・・というか、まさか本当にそうなのか？

「聞いたか皆の衆！お前達を先導する坂本雄二こそ、真の裏切り者だったのだ！」

『『坂本を殺せェェッ！』』

「な、なにぃぃっ！」

急に皆に殺気の矛先を向けられて、雄二が慌てる。いつぞや道連れにされた恨み、今ここでそっくり返してやる！

俺に突っ掛かってきたヤツらは、明久を含めて全員が雄二の方へ流れていった。いい気味だ。

そうして気を抜きかけた俺だが、

――シュッ！

「うおわっ！」

何かが突然顔を目掛けて飛んできたので、慌てて避けた。飛んできたのは・・・・・カッターナイフ？

「誰だっ！」

俺はカッターが飛んできたと思しき方へと向き直る。そこには――

「……裏切り者に、死を」

「康太……っ！」

まだ手に何本かカッターを持ち、こちらへ投擲しようとする康太の姿があった。

「落ち着け、康太。お前とは交渉がしたい」

「……交渉？」

「ああ。俺の家にあるお宝秘蔵コレクションを全て譲ってやる。だから、今後一切の不可侵条約を結んでくれないか？」

「……交渉成立」

恐ろしい程簡単に買収に成功した。何て扱いやすいヤツなんだ。自分から言っておいてなんだが、本当にそれでいいのか？

「……引渡しはいつ？」

「そうだな。この打ち上げの後すぐに、でどうだ？」

「……わかった」

そう言うと、康太は引き下がってくれた。

「助かったぜ・・・・・ん？あれっ？」

ようやく一息吐く事ができた俺は、急速に意識が闇の底に沈んでいくのを感じた。

―Ｓｉｄｅ　優子

Ａクラスの打ち上げを終えたアタシは、途中で鏡護から送られてきたメールに従って、Ｆクラスの打ち上げ会場へと来ていた。

そこには――

「一体何があったのよっ！？」

公園の至るところに黒コゲになった生徒が倒れてたり、代表の坂本君と思しき人物がボロボロになって倒れてたりと、何故かカオス空間が広がっていた。

「お～い、優子～！」

名前を呼ばれた気がしたのでそちらを向くと、

「鏡護！・・・・・と秀吉？」

秀吉に支えられてこちらに歩いてくる鏡護の姿が。

「そっちの打ち上げはもう終わったの～？」

「随分早い終わりだったんじゃのう、姉上」

「ええ。でも楽しかったわよ。……鏡護、アンタ何か酒臭くない？」

鏡護からは、少しだけどアルコール臭がした。そういえば喋り方も、どこかいつもと違う気がする。

「うむ。クラスの連中がソフトドリンクに混ぜて酒を買ってきたようでの。ワシは飲まなかったんじゃが、鏡護は飲んでしまったようなんじゃ」

「あはははは～！大丈夫だよ秀吉～。僕は酔ってないよ～？」

「秀吉に身体を支えられてる状態じゃ、説得力ないわよ」

見れば、鏡護は顔もだいぶ赤い。これは完全に酔っぱらってるわね。なんて冷静に状況を分析していると、

「わ～い♪優子～！」チュッ

「――っ／／／／なっ！い、いきなり何するのよ鏡護！」

突然鏡護が秀吉から離れて、アタシに抱きつくなり頬にキスしてきた。

「あ～、すまんのう姉上。どうやら鏡護は酔うとキス魔になるようでな。一応相手は選んでおるようで、先程までは姫路にそうしておったんじゃが、今はあの通りでの……」

秀吉が指差した先を見てみると、そこには顔を真っ赤にしながらも幸せそうな表情で倒れている瑞希がいた。

「ふにゃ～。鏡護君、大好きです～。でもこれ以上されたら、私壊れちゃいますよ～。えへへ～」

などと寝言?を言いながら、イヤンイヤンといった風に首を振っている。

・・・・・あの瑞希があそこまで壊れるなんて、鏡護は一体何をしたんだろう。少し怖くなってきた自分がいる。

「まあそういうことで、後は姉上にバトンタッチさせてもらうぞい」

そう言って、鏡護を置いてさっさと行ってしまう我が弟。

「ちょ、ちょっと待ちなさい秀吉!アタシにどうしろって言うのよ!」

「ゆ～う～こ～♪」チュッ

「はぅ……／／／／」

必死に呼び止めようとしたけど、再び鏡護にキスされて身体から力が抜けてしまうアタシ。

結局その後鏡護の意識が覚醒するまで、アタシも色々とやられてしまって気を失っていたらしい。

らしい、と言うのはアタシが気付いた時には自宅のベッドで寝ていたからだ。

後で聞いたところによると、秀吉と鏡護が2人で運んでくれたのだ

とか。

鏡護にあの日の事を尋ねてみると、途中の記憶が抜けていて良く覚えていないと言っていた。
ちょっぴり残念な気もしたけど、覚えていられるのも何だか恥ずかしいので良かったのかもしれない。

また後日瑞希と2人で、偶には鏡護にお酒を飲ませて酔わせるのもいいかも、なんて話したことはアタシ達2人だけの秘密だ。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第１９問　『お酒でタガの外れたヤツは大抵扱いが面倒くさい』（後書き）

あとがき

作者　「清涼祭編、これにてお開き～！」

鏡護　「ワー！パチパチパチ～！……ってそうじゃないよっ！」

作者　「おおっ！ナイスノリツッコミ！」

鏡護　「まさか記憶のない間にこんな事になってたなんて……」

作者　「やったじゃん！」

鏡護　「２人には迷惑かけちゃったかな……」

作者　「いやいや。大丈夫だろ、別に」

鏡護　「そうかな？」

作者　「好きな男にキスされるのを迷惑に思う女はいないって」

鏡護　「そういうもの？」

作者　「そういうものだって。もし気になるなら、またデートにでも誘えばいいだろ」

鏡護　「そっか。そうだよね！」

作者　「うむ。そうだ」

鏡護　「じゃあ作者さん。今回で原作第2巻の内容が終わったけど、次回は？」

作者　「また何本か短編と中編を挟んでから、第3巻に入ろうと思ってる」

鏡護　「なるほど。それはまた楽しみだね」

作者　「おう！大いに楽しみにしててくれ！」

鏡護　「それじゃ次回予告、どうぞ！」

作者　「次回、補習第４問『災厄はいつも忘れた頃にやってくる（仮）』

を、」

作・鏡　「「よろしくお願いします！」」

補習第４問　『災厄はいつも忘れた頃にやってくる』（前書き）

お気に入り登録が５０件を突破しました！

この作品を応援してくださる皆さん、本当にありがとうございます。

予告通り、これからしばらくは番外編が続きます。

こちらの方も、どうぞお楽しみください。

補習第４問　『災厄はいつも忘れた頃にやってくる』

――清涼祭後、ある日の天水家／夜

Ｐｒｒｒｒｒｒガチャッ

「はい、もしもし」

『もしもしキョウく～ん？久しぶり～！』

「えっと、すいません。どちらさまでしょう？」

『あ～、ヒ～ド～い～！キョウくん愛しの可愛い可愛い月ちゃんですよ～』

「……冗談だよ、母さん。っていうか、そろそろいい年なんだから自分で可愛いとか言ってるとイタいよ」

『……キョウくんには久しぶりに月ちゃんの“愛のお説教”が必要なのかな～？』

「申し訳ありません、お母様。私が悪うございました。お母様は永遠の２０代でございます」

『うむ、わかればよろし～い！ところで、みーちゃんとゆっこちゃんと付き合いだしたってホント～？』

「な、なんで母さんがそれを……いや、知ってても不思議じゃないな……まあ、本当だよ」

『やっぱり～！キョウくんってばやるぅ～！さすがは私と星哉さんの子ね～！』

「それで？今日はどうして電話してきたのさ？」

『え～？今の話を確認したかっただけだよ～？』

「切るよ」

『ウソウソ、ゴメン～。えっとね～、実は黎夜ちゃんがそろそろ家に戻るって連絡してきたから、キョウくんにも教えてあげようと思ってお電話したんだよ～』

「うぇっ！？姉さんが帰ってくるの！？」

『あら、な～に～？キョウくんってばお姉ちゃんが帰ってきちゃマズいようなことをしてるのかな～？』

「あ、いや、大丈夫だよ母さん！そんなことあるわけないじゃないか！」

『なら安心だね～。それじゃあ確かに伝えたからね～』

「ありがとう、母さん。ところで母さん達は今どこにいるの？」

『ちょっと待ってね～……星哉さ～ん、ここどこだっけ～？……あ～！そうだったね～……えっとね～、ギアナ高地だよ～』

「一体2人は何をやってるのさ!?」

『それはヒ・ミ・ツ、だよ～』

「はぁ……わかったよ。こっちにはいつ頃帰ってこれるの?」

『う～ん、あと2ヶ月くらいは無理かな～。でも夏休みに入る頃には帰れると思うよ～』

「そっか。まあ、2人とも体には気をつけてね」

『ありがと～、キョウくん。月ちゃんその言葉だけで頑張れちゃうよ～』

「はいはい。それじゃまたね、母さん」

『キョウくんも元気でね～。……若いからってがっついちゃダ・メ・よ～♪』

「――っっ／／／／もう切るからねっ!」

『は～い!バイバ～イ、キョウくん。チュッ』

――数日後／休日

「「鏡護（君）、今日もよろしくね～（お願いします）！」」

「はいはい。２人ともいらっしゃい」

清涼祭の時に１度泊まって以降、優子と瑞希は週末になると家に泊まりに来るようになりました。

さすがに毎週はマズいと思ったので、隔週でという形ではありますが。

「「お邪魔しま～す♪」」

２人とも泊まりに来る週は月曜日からずっとソワソワしているんですが、本当に家に泊まるのが楽しみのようです。

・・・・・２人がそんな様子なので、断るに断れなかった事もあるんですよね。

「荷物はいつも通り客間に置いてね。僕は飲み物を用意してくるから」

「「は～い！」」

そうして２人と一緒に勉強をしたり、ゲームをしたり、お喋りをしたりして時間を過ごします。

「あ、そろそろ夕飯の支度をしなきゃ」

３人であれこれ色々していると、時間が経つのもあっという間に感

じます。それだけ充実しているんですね。

「それなら、今日はアタシも手伝うわ」

「私もやります！」

「え？う～ん……それじゃよろしく」

折角やる気になってくれているのに断るのも悪いと思った僕は、その申し出を受けることにしました。
ちなみに瑞希ですが、僕の目がある所ではもう料理に余計な手（化学薬品）を加えることはしなくなりました。

「「ええ（はい）」」

そうして3人で作った夕飯は、いつもよりも格別に美味しかったです。

食後も3人でまったりと時間を過ごしていましたが、お風呂に入る時に2人から『お先にどうぞ』と言われてしまったので、仕方なく先にいただいています。

「はぁ～。極楽極楽」

ちょっとジジ臭いですかね？

「風呂は命の洗濯、ってね」

どこかの秘密組織の女作戦部長さんも言っていましたが、その通りですね。

――ガチャ

「へっ！？」

そうして風呂に浸かっていると、突然お風呂場のドアが開きました。

「「失礼しま～す♪」」

ドアの向こうに立っていたのは身体にバスタオルを巻いた優子と瑞希でした。

「うわぁぁっ！？２人とも何してるのさ！？」

「何って、鏡護と一緒にお風呂に入ろうと思って」

「お背中お流ししますよ？」

僕の質問にそう返す２人。

「いや、『一緒にお風呂に入ろうと思って』じゃないでしょ！？」

「何恥ずかしがってるのよ。鏡護はアタシ達の裸だって見たじゃない」

「それとこれとは別問題だよ！」

「鏡護君は嫌でしたか？」

「うっ……」

瑞希が上目遣いで僕を見つめてきます。そ、それをやられると……

「ダメですか？」

瑞希はさらに瞳を潤ませて見つめてきます。

一・撃・必・殺！効果は抜群だ！

「グハッ！……い、嫌じゃないよ」

そんな瑞希に止めを刺された僕は、そう口にせざるを得ませんでした。

―Ｓｉｄｅ　？？

「……やっと帰って来れたわ。久しぶりね～」

私は8年ぶりに帰ってきた我が家の前にたどり着いていました。

「キョウ君は元気にやってるかしらね？」

今はこの家に1人暮らししているはずの弟の事を思い出します。
何せ8年ぶりの再会なのです。どんな感じに成長したのか、今から会うのが楽しみで仕方ありません。

「せっかくだから、こっそり入っていって驚かせてあげようかな？」

それはきっと楽しいでしょう。そう思った私は早速玄関の鍵を開けると、こっそり中に入ります。

「ただいま～（ボソッ）」

『……！？』

『……』

『……？』

なにやらお風呂場の方から鏡護の声と、女性と思われる2つの声が聞こえてきました。

・・・・・どういう事？

なぜ鏡護しかいないはずの我が家からそれ以外の声が聞こえてくるのかしら？

改めて玄関を見回すと、女物と思しき靴が2足置いてあった。

「……決まり、ね」

この家には鏡護以外の人間がいる。しかも女性だ。

「……いい度胸じゃない」

あの弟がまさか家に女を連れ込んでいるとは思わなかった。これは帰ってきて早々『お説教』が必要みたいね。私は足音を殺しつつ、お風呂場へと急いだ。

『もう！2人ともくすぐったいってば！』

『まったく少しくらい我慢しなさい！』

『もうちょっとで終わりますからね』

お風呂場のドアの前まで来た私にはっきりと中の声が聞こえる。・・・・さあ、どうしてあげようかしら？

私はドアに手を掛けて一気にそれを開くと――

「キョウ！大人しく降伏しなさい！抵抗は無駄よ！」

そう言い放った。

「うわぁぁぁっ！？」

「「きゃぁぁぁっ！？」」

浴室内からは3人の驚く声が。その中で鏡護が真っ先に私に気付くと、

「ね、姉さんっ！？」

さらに驚きで目を丸くしながらそう言った。

「「えっ！？レイ姉さん（黎夜さん）！？」」

次いで一緒にいた女の子2人がその声に反応する。・・・・・あら？私のことを知っているの？

「3人とも、今すぐあがって服を着なさい。それからリビングに集合！」

「「「は、はい！」」」

3人の返事を背中に聞いて、私は先にリビングへと向かった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

まさか姉さんが今日帰ってくるとは思ってもいませんでした。なんてタイミングが悪いんでしょう。

そして僕は今、優子と瑞希と一緒にリビングの床に正座させられています。

「えぇっと。おかえり、姉さん」

「ええ。ただいま、キョウ」

姉さん、笑顔が怖いです。

「そのー、あ、あれはですねぇ……」

「……その前に、こっちの2人は誰かしら?」

先程の光景の説明をしようとした僕を、姉さんがそう言って遮りました。・・・・・ん?

「あれ?姉さん覚えてないの?僕達の幼馴染の優子と瑞希だよ」

「久しぶりです、レイ姉さん」

「黎夜さん、お久しぶりです」

2人が姉さんに挨拶します。

「へぇ……気付かなかったわ。2人とも美人になったわね」

「「あ、ありがとうございます……」」

2人がお礼を返しますが、顔が強張っています。

「で、その2人がどうして我が家にいるのかしら?」

姉さんの矛先が再び僕に向きます。

「そ、それはですね……2人が僕の彼女で、今日は家に泊まりに来ていたんです」

正直に理由を話しました。ここで嘘を吐いたら僕の命が消されますからね。

「ふ~ん……2人は自分の彼氏が二股かけるのを許しているの?」

「はい。瑞希と話し合って、お互い納得の上です」

「はい。優子ちゃんの言った通りです」

「そう」

姉さんは2人の答えに短くそれだけ言うと、僕に向き直って言いました。

「キョウ。貴方はちゃんと2人を平等に愛しているの?」

「もちろん。どちらかが1番でどちらかが2番じゃない。2人ともが僕の1番なんだ」

「「鏡護（君）……／／／／」」

精一杯の誠意と共に答えます。

「……その言葉、もし違えた時は覚悟なさい」

「はい……」

暗く冷たい声で姉さんがそう宣言し、僕は頭を下げてそう答えました。

「……それなら、今回の一件は不問にしてあげる」

「「「え？」」」

姉さんの言葉の意味が飲み込めなくて、3人して聞き返してしまいました。

「だから、今回の件はお咎めなしにしてあげるって言ったのよ」

ふっ、と息を吐いて今まで纏っていた怒気を霧散させた姉さん。

「「「……やったぁー！ありがとう、姉さん（レイ姉さん／黎夜さん）！」」」

そんな姉さんに3人して抱きつきます。

「ちょ、ちょっと3人とも！いきなりどうしたの！？」

今度は逆に姉さんが驚く番でした。

姉さんによって僕達が強引に引き剥がされた後、3人で今の状況とそうなった事情を話しました。

「そんなことがあったのねぇ……キョウ君、やるわね！」

誘拐事件の話を聞いた姉さんが嬉しそうに笑ってそう言います。

「でも既に『そこ』までいってるのなら、余計に責任は重大よ。貴方にその覚悟はあるの？」

急に真面目な顔になって聞いてくる姉さん。

「うん。僕は何があっても2人を守るし、必ず幸せにするよ」

僕も目に決意を込めて姉さんを見返すと、そう答えます。

「……ふふっ。いい目をするようになったじゃない、男の子っ！」

優しく微笑むと、姉さんは指でおでこを小突いてきました。

「もうっ！最後の最後で茶化さなくてもいいじゃないか！」

そんな相変わらずな姉さんにちょっぴり意地になって突っ掛かる僕。

「はいはい、悪かったわね。でも、もしもの時は――」

「わかってる」

再び鋭い目になった姉さんに、僕も真面目な顔で答えました。

「ならいいわ。それじゃ今日はもう遅いし、寝ましょうか」

姉さんの鶴の一声で、今日はお開きという事になりました。

「そうだキョウ君。久しぶりに姉さんと一緒に寝よっか？」

「「レイ姉さん（黎夜さん）！？」」

突然の爆弾発言に優子と瑞希が驚きの声を上げます。

「姉さん！？それはほんとにシャレにならないから！」

僕も慌てて待ったをかけます。

「もう、3人とも必死になっちゃってカ～ワイイ！もちろん冗談だから安心して。愛されてるわね、キョウ君」

「「「……／／／／」」」

何も言えなくなってしまう僕達でした。

補習第４問　『災厄はいつも忘れた頃にやってくる』（後書き）

あとがき

母、登場！そして姉、襲来！

という訳で、新キャラの設定です。

名前　天水（あまみ）　黎夜（れいや）

性別　女

誕生日　１１月１１日

身長　１６８センチ

容姿　腰まで伸ばした碧銀の髪。
　ボディラインは出るところは出ている。俗に言うナイスバディ。

性格　基本的には優しいお姉さん。
　偶にお茶目な一面を覗かせることも。
　場をわきまえて話ができるくらいには大人。一人称は「私」。
　しかし、地雷を踏んだ相手に対しては容赦なく攻撃を仕掛けてくる。

追記　8年前に留学する為、家を出て海外に渡った鏡護の姉。
今回、あちらの大学院の博士課程を無事修了したので帰国してきた。

趣味は鏡護をイジること。
昔から鏡護の事はオモチャにしていた。
おかげで鏡護は黎夜には基本的に逆らえない。
（もし逆らった場合には『お説教』が待っている）

そんな黎夜だが、もちろん鏡護の事は家族として大事に思っている。

また身体を動かすことが好きで、運動神経は抜群。
その高い運動能力は鏡護に対する『お説教』においても如何なく発揮される。
ちなみに、優子のサブミッションは黎夜直伝である。

しかし反面、料理が壊滅的にできないという欠点がある。
料理をしようとすると何故か調理器具が壊れる。

瑞希と優子は昔から黎夜を実の姉のように慕っており、それは今も変わっていない。
むしろ、黎夜は今後『義妹』になる（予定）の2人を今まで以上に可愛がっている。

実は留学中にあちらで知り合った友人がいるのだが、その話はいずれどこかで・・・・・

補習第5問　『一難去って……まだ何かあるの！？』

翌朝。

目が覚めた僕が時間を確認すると、時計の針は7時を少し回ったところでした。

「うん。まあいつも通りだね」

学校のない休日は大体この時間に起きています。

着替えて顔を洗い、1階に下ります。

客間ではまだ3人が寝ているのでしょう。静かなものです。

「……そういえば昨日は姉さんが帰ってきたんだよね」

そうして昨晩の騒動を思い出します。同時に若干テンションが落ちる僕。

姉さんは落ち着いた優しい女性なのですが、僕をイジるのが趣味というちょっと困った人でもあります。

昔からイジり回されてきた僕にとって、姉さんはある意味天敵と言って差し支えありません。

「しかも姉さん、料理できないからな……」

割と何でも万能にこなす姉さんが唯一できないこと、それが料理です。

彼女が料理をし始めると、何故か台所からは破砕音や爆発音が聞こえてくるのです。

「……さて、それじゃ朝食を作り始めよう！」

そこで思考を切り替え、朝食の準備を始めます。

「う～ん。姉さんが帰ってきたばかりだから、和食がいいかな？」

料理のできない姉さんの事だから、きっと向こうではあまり和食は食べなかったでしょう。

そう考えた僕は、朝食の献立を和食に決めました。

「炊飯器はセットしたからご飯はオッケー。卵焼きは作ったし、煮物もできた。あとは味噌汁と……」

着々と準備を進める僕。

「ん～！なんかいい匂いがする～！」

すると客間の戸が開いて姉さんが出てきました。

「おはよう、姉さん。もうすぐ朝ご飯だから2人も起こしてくれる？」

「りょうか～い！」

まだ眠気が取れていないのか、若干間の抜けた声で姉さんが返事し

ました。

「「「「いただきま～す！」」」」

あの後すぐに起きてきた2人も一緒に、4人で朝食を取ります。

「姉さん嬉しいな～。和食にしてくれたんだね、キョウ君」

「姉さん、向こうじゃ和食はほとんど食べなかったんじゃないかと思ってね」

「流石キョウ君！姉さんの事よくわかってるわね」

やはり予想通りだったみたいです。

「でもやっぱりいつ食べても鏡護の料理って美味しいわよね」

「そうですね。でもそれだけに敗北感が……」

「そうなのよね～」

優子と瑞希は何やら落ち込んでいる様子。そんなに気にする事はないと思うのですが・・・・・

「2人だって料理できるんだから大丈夫だよ。そのうち僕なんか追い抜いちゃうって」

「う～ん……」

「……そうでしょうか？」

「大丈夫だって。姉さんなんて料理できないのに８年も海外で生活でき痛ぁぁっ！ご、ごめんなさい！お願いだから足を踏まないで！」

テーブルの下で姉さんが僕の足を思いきり踏みつけてきました。

「折角感心してたのに、その言い方はないんじゃないかな？かな？」

ハイライトの消えた目で迫ってくる姉さん。

「は、はい……申し訳ありませんでした」

僕も慌てて再度の謝罪をします。

「まったく……。キョウ君は一言余計なのよ！」

どうやら姉さんはヘソを曲げてしまったようです。

こうなってしまっては早く機嫌を直さないと、僕に命の危機が訪れる事になりかねません。

「わかった。なら、お詫びに買い物に付き合うから許してよ姉さん」

「……本当に？」

「うん」

「今日でもいい？」

「いいよ。どうせ休日で暇だからね」

「……いいわ。それで許してあげる。もちろん2人も一緒よね？」

「え？」

「……そう言えば鏡護。清涼祭での『お支払い』がまだだったわよね？」

「へ？」

突然謎の言葉を持ち出してきた優子。『お支払い』？一体何の事で……

「ああ。優子ちゃん、アレですね？」

「そう。アレよ瑞希」

……アレって、まさか！？あの時僕と雄二は売られたんですか！？

「拒否権は？」

「ない事もないけど、あの場にいた皆に迷惑が掛かるわよ？」

優子、それはないと言っているのと同義です……

「……わかった。2人も一緒に行こう」

「「やったぁー！」」

ハァ・・・・・こういう時、男ってつくづく無力ですよね・・・・・

結局その日は駅前のデパートに買い物へ行くことになり、大量に荷物持ちをさせられた挙句3人に1着ずつ服をプレゼントするハメになりました。
帰る時にはだいぶ懐が寂しくなりましたが、3人とも笑顔になってくれたので良しとしましょう。

補習第5問　『一難去って……まだ何かあるの！？』（後書き）

あとがき

作者　「いきなりですが次回予告！

次回、補習第６問『とある恋人達の素敵な休日（仮）』

を、乞うご期待ください！」

――清涼祭後、ある日の教室／昼休み

「明久」
「ん？何、雄二」
「そういえば、例のチケットはどうした？」
「例のチケットって――如月ハイランドのプレミアムペアチケットのこと？」
「ああ。確か今週末がプレオープンの予定日だっただろう？」
「そうだったね」
「で、チケットはどうしたんだ？」
「丁度僕の身近に結婚を考えている人がいたからね。その人にあげたよ」
「そうか。そんなヤツがいるなら都合がいいな。それで上手く結婚になれば、如月グループも喜ぶだろうしな」
「そうだね。上手くいけば全員が幸せだもんね」
「その連中、上手くいきそうなのか？」
「うん。あとは時間ときっかけの問題だと思うんだ」
「そうか。上手くいくといいな」
「大丈夫。きっと上手くいくよ」

補習第6問　『ミッションコードは“ウェディング上等！”（前編）』

――その週末、某巨大テーマパーク

「こちらウルズ1。各員状況を報告せよ」

『こちらウルズ2。現在こちらの準備は9割方終わったよ』

『Ｐｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒ』

「ウルズ2、どうした？」

『ゴメン。僕の携帯だ。……非通知設定？誰かな？はいもしもし？どちら様ですか？』

【……キサマヲコロス】

『え！？だ、誰！？メチャクチャ怖――』プッ、ツー、ツー、ツー

「……ウルズ2、達者でな……」

『ちょっと待って鏡護！僕に勝手に死亡フラグを立てるのは止めて！』

「他の者はどうだ？」

『……こちらウルズ3。ターゲットは今自宅を出たところ。30分程でそちらに到着するはず』

「了解。そのままターゲットの監視を続けてくれ」

『こちらウルズ４じゃ。お化け屋敷内の仕込みを完了したぞい。これよりウルズ２の援護に回るとする。……ところで何故こんな面倒な呼び方をしておるのじゃ？』

「その方が雰囲気出るじゃない。それに面白いでしょ？」

『そんなもんかのう？』

「そんなもんさ。さて５、６、７。準備どうだ？」

『ウルズ５、こっちはいつでもいけるわ！』

『ウルズ６、こちらも準備万端です！』

『ウルズ７、問題ないわよ。っていうかホント面倒だわ、コレ……』

「わかってないなウルズ７。こういう時大事なのはノリだよ、ノリ」

『ハァ……了解』

「よし！それではこれより我々はミッションコード“ウェディング上等！”を決行する。なお、今回のミッションは【ターゲット】の今後の人生を左右するものである！全員、覚悟はいいか？」

『『『うん（うむ／ええ／はい）！』』』

「よろしい！それから、作戦中は携帯電話の電源は切っておくように！もし鳴らした場合は厳罰に処す！約３０分後にはミッションス

タートだ！各自、心して臨むように！」

『『『サー、イエッサー！』』』

３０分後――

「いらっしゃいませ！如月ハイランドへようこそ！」

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「……はい」

「拝見します」

「……」

「……そのチケット、使えないの？」

「いえいえ。大丈夫ですよ。少々お待ちください。……ウルズ１からウルズ４へ。【ターゲット】が到着した。すぐにウェディングシフトの準備にかかれ。確実に仕留める！」

『ウルズ４、任務了解じゃ！』

「おいコラ！なんだ今の不穏当な会話は！」

「何でもございません。こちらの話です」

「……ところでそのウェディングシフトとやらは必要ないぞ。入場させてくれたら後は放っておいてくれていい」

「そんなことを言わずにお世話させてください」

「ダメだ」

「お願いします」

「断る」

「断れば貴方のご実家に腐ったザリガニを送りますよ？」

「やめてくれ！そんな事をすれば我が家は食中毒で大変な事になってしまう！」

腐ったザリガニが食卓に上がることなんてありえないでしょうに・・・・

どうしてそんなに焦っているんですか？

「それでは最初に記念写真を撮ります。……ウルズ3、カメラの用意を」

「……記念写真？」

「はい。最高にお似合いの2人の愛のメモリーを残しましょう」

霧島さんにそう言います。

「……雄二と、お似合い……」ポッ

「悪いがちょっと電話をさせてくれ」

「わかりました」

フフッ。どうせ明久にでも掛けているのでしょうが、皆の携帯の電源は切らせましたからね。抜かりはありませんよ？

Ｐｒｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒｒ

～～♪

なっ！？どうして着信音が聞こえてくるんですか！？・・・・・ま、まさか！？

恐る恐る音の聞こえた方を見てみると――

「あ、すみません。僕の携帯ですね。はい、もしもし？」

明久っ！君には失望しましたよ！

『いよう、明久。てめえ随分と面白い事してるじゃねえか……』

「……」

「……人違いですっ！」ダッ

「あ、待て！おいコラ係員、放せこの野郎！」

「彼はここの従業員のエリザベート・ハナコ（３５歳）、通称スティーブです。明久なんて人ではありません！」

とりあえず明久が逃げる時間を稼ぐ為、雄二を羽交い絞めにします。

・・・・・明久には後で制裁（おしおき）をしませんとね。

「黙れ！人種性別氏名年齢全てにおいて嘘を吐くな！それにどう考えてもその名前で通称スティーブはないだろう！……ん？待てよ？この声は……お前、鏡護だろう！」

「いいえ、違います。私は水月（みづき）　護（まもる）（２９歳）です。」

「クッ！あくまでシラを切る気か……」

もちろん。その通りですよ？

「それでは記念撮影を始めましょう」

「……チッ！翔子、すまんがちょっと我慢してくれ！」

そう言って、雄二は霧島さんのスカートの裾を下着が見えるかどうかギリギリの高さまで捲り上げました。

「……っ！！（パシャパシャ）」

「やはりムッツリーニも来ていたな！」

「……雄二、エッチ」

「なっ！違うぞ！俺はお前の下着になんて微塵も興味がなぎゃぁぁっ！」

「……それはそれで困る」

「理不尽だぁぁ！」

霧島さんが雄二にアイアンクローを掛けています。アレは痛いですねぇ・・・・・・

そんな2人を見ているうちに康太が写真を撮ってプリントアウトしてくれました。

「……なんだ、この写真は！」

アイアンクローを掛けている霧島さんの後ろ姿とそれに悶える雄二が写っています。

「サービスで加工を入れてみました。お気に召していただけましたか？」

2人を囲むようにハート形に切り取り、写真上部には『私達、結婚します』の文字が。さらに写真下部には2人を祝福するかのように天使が飛び回っています。

・・・・・この写真を余人が見たら、どういう経緯で結婚にまで至ったのかきっと気になることでしょう。

「これをパークの写真館に飾ってもよろしいですか？」

「キサマ正気か！？コレを飾ることでここに何のメリットがあるんだ！」

まあ間違いなくお客さんはドン引きですね。

「……雄二、照れてる？」

「すまない。この写真のどこにも照れる要素が見当たらないんだが」

『ああ、写真撮影してる！ねえねえ、リューター！私たちも撮って貰おうよ！』

『オレ達の結婚の記念に、か？おい、係員！オレ達も写ってやんよ』

と、そこに偉そうな態度で声を掛けてくるチャラいカップルが現れました。これは面倒なのが来ましたね・・・・・

「申し訳ありません、お客様。こちらは特別サービスとなっておりまして……」

『ああ！？いいじゃねえか！オレ達はオキャクサマだぞ！コラぁ！』

『キャー！リュウタ、カッコイイー！』

本当にウザいですね・・・・仕方ありません。これ以上ゴネられるのも嫌なのでさっさと撮影を終わらせましょう。

「それでは男性の方はこちらに立っていてください。で、女性の方は後ろ向きで……右手で男性の顔を掴んで……はい。そのまま力いっぱい握ってください」

『ぐ、ぐおぉぉっ！い、痛ェぞこの野郎！コレは明らかに写真を取

るポーズじゃねぇだろ！？』

「いいえ。こちらが当園の記念撮影のポーズでございます」

『ク、クソォー！それなら早く終わらせやがれ！』

「はいは～い♪それでは撮りますよ～。ハイ、チーズ！……プリントが終わるまでお客様はそのままお待ちください」

『ちょっと待てや！写真を撮り終わったらもういいだろ！？』

せっかくなので腹いせにそんな感じで遊んでいたら、すっかり雄二達を見失ってしまいました。失敗失敗・・・・・

―Ｓｉｄｅ　雄二

「さて。それじゃ適当に回るか」

「……楽しみ」

写真撮影を終え、鏡護と思しき係員から逃げてきた俺達は広い園内を歩いていた。

園内には前評判通りの最新アトラクションが沢山あった。３Ｄの体

感アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、知っているものは一通り揃っていた。
中には見た目からは想像のつかないようなのもある。確かにコレは凄いな。

「映画館でもあれば楽なんだがな」

「……せっかく2人一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく当たり障りのなさそうなアトラクションを探して歩く。すると、俺達の前にヒョコヒョコとキツネの着ぐるみが近寄ってきた。

『お兄さん達、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

着ぐるみから聞こえてきたのは若い女の声だった。ボイスチェンジャーは搭載していないのか、普通の人間の声だ。というか、この聞き覚えのある声はクラスメイトの優等生にそっくりなんだが……。

ちょっと確認してみるか。

「そういえば、さっき鏡護が女子大生2人に逆ナンされてたぞ」

『……』

チッ……これじゃ引っ掛からないか。それにしても鏡護の事を随分信頼してるんだな。ならば……

「すまん。間違えた。さっき鏡護が木下優子と2人きりだったんだ」

『えっ!?本当ですか?優子ちゃん、抜け駆けはダメですよーっ!』

「……おい姫路。アルバイトか?」

まんまと引っ掛かった姫路を問い質す。

『あっ!ち、違いますっ!私――じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ?見ての通りキツネの女の子だよ?』

それでも取り繕おうとするのだから、姫路は真面目だと思う。

「ならば、フィーとやら。お前のオススメを教えてもらおうか」

『あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

姫路――ではなくてフィーの手が噴水の向こうに建物を示す。・・・・・ふむ。廃病院を改造したとかいう例のアレか。

「そうか。ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてね!』

「翔子、お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中を押して歩き出す。すると姫路が慌てたように俺の腕を掴んできた。

『ままま待ってください！どうしてオススメ以外の所へ行こうとするんですか！？』

「その慌て様が何よりの証拠だ。どうせお化け屋敷には余計な仕掛けが施してあるんだろう？わざわざそんな所に行く必要はない」

『そ、そんなの困りますっ！お願いです～っ！お化け屋敷は絶対楽しいですから～っ！』

「イ・ヤ・だ！」

なおも縋り付くようについてくる姫路を振り払おうか考えていた時に、またしても何かが近寄ってきた。

『そこまでだっ！雄二――じゃなくて、そこのブサイクな男っ！』

「その頭の悪そうな仕草……明久かっ！」

颯爽と登場したのは雄ギツネの着ぐるみだった。

『失礼なっ！僕――じゃなくてノインのどこが頭が悪いって言うんだ！』

「黙れっ！頭部を前後逆につけているようなヤツをバカと言って何が悪い！」

そうなのだ。雄ギツネの着ぐるみは頭の前後が逆になっており、非常にシュールな生物になっていた。

「……雄二。ノイちゃんはうっかりさんだから」

「翔子。うっかりで頭部が前後逆になるような生物は自然界では生きていけないだろう……」

『あ、明久君っ！あ、頭が逆です！ああっ！今小さい子が明久君を見て泣き出しちゃいましたよ！？』

間違いなくその子にとって今日のこの光景はトラウマになっただろう。

『うわっ、しまった！どうりで前が見えないと思った！』

『は、早く直さないと坂本君達にバレちゃいますよっ！』

まだ誤魔化せると思っているのか、この2人は・・・・・

「すみませーん！お待たせ致しました」

また面倒なのが来たな。さっきの係員だ。もう追いついてきやがったのか。

「坂本雄二さん。お化け屋敷に行ってください」

「だからイヤだと言っているだろうが」

危険とわかっている場所に自分から足を踏み入れるヤツがいるはずないだろう。

「断れば、貴方のご実家に大量のプチプチの梱包材を送ります」

「やめろっ！そんな事をしたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

あのおふくろの事だ。全てのプチプチを潰し終えるまで他の事は何もしないに決まっている。なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ・・・・・

「坂本翔子さん。お化け屋敷では彼氏さんに抱きつき放題ですよ？」

「……雄二。お化け屋敷に行く」

「汚いぞキサマ、翔子を使って罠にハメようとするなんて！それにコイツの名字は霧島だ！勝手に入籍させるんじゃない！」

「……大丈夫。すぐに坂本に変わる」

油断しているうちに翔子に肘関節を極められてしまった。これじゃあ抵抗できない！

「では、こちらにサインをお願いします」

そう言って係員が何かの書類とペンを差し出してきた。・・・・・

何だコレは？

「ただの誓約書でございます」

誓約書が必要なお化け屋敷って何だ？そんなに危険なのか？

「ふむ。だがまぁ、面白そうではあるな」

少し楽しみになった俺はペンを受け取って、誓約書に目を通した。

【誓約書】

1．私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
2．婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。
3．どのような事態になっても、離縁しない事を誓います。

「……はい雄二。実印」

「朱肉はこちらです」

「俺だけかっ!?俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか!?」

コイツら、全員正気じゃない。

「冗談です。誓約書は必要ないので中に入ってください」

「……雄二、冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているのに冗談と言い張るのか!?」

「それではその鞄は邪魔になりそうですので、こちらでお預かり致します」

「……お願い」

「おいコラっ！無視するな！」

そういえば翔子は随分大きな鞄を持ってきているが、何が入っているのだろう？

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい。」

「この鞄を、ですか？わかりました。気をつけましょう。……それでは、行ってらっしゃいませ」

「……雄二、行こう」

「痛だだだっ！肘が、肘がねじ切れるっ！」

抵抗空しく、俺はお化け屋敷の扉の前に立たされる。演出なのか、自動ドアでありながら電気が通っていないらしく、手動で開けなければならないようだ。

『こちらウルズ1。【ターゲット】がお化け屋敷に入った。これよりウルズ2考案の作戦を実行せよ』

扉を閉める直前に、そんな台詞が聞こえた。畜生！やっぱり何か仕掛けてやがったな！

補習第7問　『ミッションコードは“ウェディング上等！”（後編）』

薄暗い廊下を翔子と2人で歩く。カツン、カツンとリノリウムの床は必要以上に足音を強調しているように思える。

「流石に廃病院を改造したというだけあって雰囲気があるな」

「……うん。ちょっと怖い」

「こういうのにあまりビビらないお前が怖がるなんて、意外だな」

「……そうかも」

時折壁に貼られている《順路》のポスターに従って先に進む。1階では特に何かが起きるでもなく、2階に上がって少し廊下を進んだところで何かの演出が顔を出した。

【――じの方が――よりも――】

冷たい風に乗って、幽かに聞こえてくる声。
これは怨嗟の声か何かの演出か？

「……この声、雄二の……？」

「ん？そうなのか？」

どうやら聞こえてきているのは俺の声であるらしい。大方、秀吉あ

たりに声真似でもさせたのだろう。確かに自分の声が聞こえてくるのは怖いかもしれないが、アイツらにしては普通すぎる気が・・・・・

【姫路の方が翔子よりも好きだな。胸も大きいし】

「……雄二。覚悟、できてる……？」

「怖ぇっ！急に翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だな！」

なんて恐ろしいことを考えるんだアイツら。まさか俺をここから生きて帰さないつもりか！？

俺が突然の翔子の変化にビビっていると、バンっと背後で何かの仕掛けが作動する音が聞こえた。
よっしゃ！ナイス演出！これで助かったぜ！

「おい翔子！何か出てきたぞ！」

音のした方に首を向けると、そこには先程まではなかったはずのあるものが出現していた。それは――

「……気が利いてる」

・・・・・釘バット、と日本刀！？

なになに・・・・・【お好きな方をご利用ください】・・・・・だ

と!?

「畜生っ!よりによって処刑道具まで用意してあるとは!趣旨は全く違うが、最強に恐ろしいお化け屋敷だっ!」

「……雄二。逃がさない」

結局、日本刀を選んだ翔子が俺を追い掛け回すという斬新なアトラクションが小1時間程続いた。
しかし、アイツらはこれで本当に俺と翔子がくっつくとでも思っているのか……?

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

お化け屋敷に入ってから、大体1時間ちょっとで雄二達は中から出てきました。
雄二の服の所々に何かで斬られたようなキズがあるところを見ると、霧島さんはどうやら日本刀（ｐｒｅｓｅｎｔｅｄ　ｂｙ　僕）を選んだようですね。

ん?どうして普通の高校生が日本刀なんて所持してるのか、ですって?……ふふっ。それは禁則事項ですっ♪

「お疲れ様でした。どうでしたか？結婚したくなりましたか？」

「アレと結婚を結び付けて考えられるのは明久くらいだろうよ……」

「ふむ……。危機的状況に陥った男女は強い絆で結ばれる、という話もあるのですが……」

「襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなるかもしれないがな……」

おっしゃる通りで。まぁ、これはあくまで明久考案の日頃の憂さ晴らし（ジョークイベント）ですからね。

「……そろそろお昼」

霧島さんが噴水上の時計を見ながら呟きました。時刻は午後1時を少し過ぎたところです。

「……あの、私のバッグ――」

「では、豪華なランチをご用意させていただいておりますので、こちらへどうぞ」

・・・・・霧島さんが何か言いたそうな顔をしていましたが、何かあったのでしょうか？

「こちらでランチをお楽しみください」

そうして2人を案内してきたのは、園内の一角にあるレストラン。しかし、もちろんただのレストランではありません。ここは本日のメインイベント会場なのです。

「……クイズ会場？」

「そうだな。なんだかそれっぽい感じがする」

流石に学年主席と元・神童。なかなか冴えてますね。ですが、それは後のお楽しみですよ。

「いらっしゃいませ。坂本雄二様、翔子様」

そこに秀吉が現れます。流石は演劇部ですね。見事にボーイを演じています。

「秀吉。ボーイの真似事か？」

流石に雄二には面が割れているので、そんな事を言われます。ですが、

「秀吉？何の事でしょうか？」

演技に徹している秀吉は決して揺らぐことはありません。本当に天晴れです。

「違うというのならば、確かめさせてもらおう」

雄二が明久の時のように携帯で秀吉を呼び出そうとしました。

「……チッ！お前、電源を切っているだろう！」

しかし、秀吉の携帯の電源が切られている事がわかったのでしょう。雄二が舌打ちをしています。

「きっと人違いですよ。お席はこちらでございます」

秀吉もサラリと流して2人を席に案内します。

そうして2人がデザートも食べ終わった時を見計らって、僕は会場にアナウンスを入れました。

〈皆様。本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご来場いただき、誠にありがとうございます！〉

それを聞いた雄二が席の方で目を見開いて驚いているのが見えました。ここには何もないと思って油断していたようですね。

〈なんと本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしゃっているのです！〉

あ、雄二が口に含んでいた水を吹き出してむせています。

〈そこで当如月グループは、そんなお2人を応援するための催しを企画させていただきました！題して、【如月ハイランドウェディング体験】プレゼントクイズ～！〉

アナウンスと同時に出入り口を完全封鎖します。雄二を逃がす訳に

はいきませんからね。

〈それでは、坂本雄二さん&翔子さん！ステージへどうぞ！〉

「……ウェディング体験……頑張る……！」

「俺は断固拒否だからな！そもそもこういうのは双方の合意の下に痛だだだっ！耳が千切れるっ！わ、わかった翔子！俺も行くから耳を放してくれ！」

〈本企画の内容は至ってシンプル！これからお2人に出題する5問のクイズに全問正解したら、賞品として弊社の提供するウェディングプランを体験していただけます！それではお2人とも、頑張ってください！〉

2人がステージに上がってくるまでの間に、会場に向けてルール説明をします。

〈準備はよろしいですか？それでは第1問！お2人の記念日はいつでしょうか？〉

雄二が問題の意味がわからないといった顔をしていますが、知ったことではありません。

――ピンポーン！

〈はいっ！答えをどうぞっ！〉

「……毎日が記念日」

「止めてくれ翔子！恥ずかしさでどうにかなってしまいそうだ！」

雄二が解答席で悶えていますが、どうでもいい事です。

〈お見事！正解です！〉

雄二がこっちを睨んできますが、僕はニヤリと笑って返します。これは最初から仕組まれた出来レースなんです。雄二もいい加減年貢の納め時ですよ？

〈第2問！お2人の結婚式はどちらで挙げるのでしょうかっ！〉

――ピンポーン！

「鯖の味噌煮！」

・・・・・まったく雄二も悪あがきを。そんなことをしても意味がないんですよ？

〈正解です！お2人の結婚式は当園内にある如月グランドホテル・鳳凰の間、通称【鯖の味噌煮】で開催の予定です〉

「待て！絶対にその命名は今この場でしただろう！強引過ぎるぞ！」

だから、これは出来レースなんですよ。

〈第3問！お2人の出会いはいつでしょうか？〉

「……させない」

ブスッ

あ、霧島さんがボタンを押そうとした雄二の目を潰しました。

「ぐおぉぉぉっ！目が！目がぁっ！」

――ピンポーン！

「……小学校」

〈正解です！お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るという、仲睦まじい幼馴染なのです！〉

さあ、カウントダウンラスト2です。

〈第4問！〉

――ピンポーン！

本当に往生際の悪い・・・・・

「わかり――」

〈正解です！それでは最終問題に参ります！〉

そっちが問題を無視するというのなら、こっちは解答を無視するだけです！

『ちょっとおかしくな～い？アタシらも結婚するつもりなのに、どうしてそんなコーセーだけトクベツ扱いなワケ～』

・・・・・この声はまさか!?

『お客様、ただ今イベント中ですので――』

『グダグダうるせぇんだよ!オレたちゃオキャクサマだぞ、コラぁ!』

やっぱり・・・・・入場口で絡んできたあのウザいカップルでした・・・・・

『アタシらもウエディング体験やってみたいんだけど～』

『で、ですが――』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルァ!オレ達もクイズに参加してやろうってんだ!ボケがっ!』

『うんうんっ!じゃあこうしよーよ。アタシらが問題出すから、答えられたらあの2人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで』

『そ、そんな――』

スタッフの静止も空しく、2人はステージに上がってくると、置いてあったもう1つのマイクをひったくりました。

完全に予想外の事態。雄二はこの2人を利用して、この状況から逃げ出す気満々です!

『じゃあ、問題だ』

ダメです！このままではミッション失敗に――

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

『『・・・・・・・・・』』

ヨーロッパ：六大州の一。ユーラシア大陸の西部をなす半島状の部分と、それに付属する諸島とから成り、面積役１０５０万平方キロメートル。人口約７億２６００万（１９９５）。ギリシア・ローマの高度古代文明を経て、中世の約千年間キリスト教的統一文明圏を形成。イギリス・ドイツ・フランス・イタリア・ロシアなど約４０の独立国に分れる。（『広辞苑』より抜粋）

解答：断じて国の名前ではなく、故に首都など存在しません。

『オラ！答えろよ！わかんねえのか！？』

〈……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます！【如月ハイランドウェディング体験】をプレゼント致します！〉

『おい待てよ！コイツラ答えられなかったじゃねえか！オレ達の勝ちだろコルァ！』

『マジありえなくない！？あの司会バカなんじゃないの！？』

まさか明久よりもバカな人間がいるとは思いもしませんでした。世

界って広いですねぇ・・・・・

〈それでは、いよいよ本日のメインイベント【如月ハイランドウェディング体験】を始めさせていただきます！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！〉

「坂本雄二さん、お願いします」

「鏡護、後で覚えてろよ！」

「はて？私の名前は水月ですが。それともし脱走など企てようものなら、ご実家にウニとタワシの活造りを送らせていただきますのでお忘れなきよう」

「……やれやれ。まあ、あくまで体験だしな。適当に付き合って終わらせるさ……」

諦めたようにそう呟く雄二ですが、これはおそらくポーズでしょう。相手は雄二ですから、安易に警戒を解く訳にはいきません。

〈それでは新郎のプロフィール紹介を……省略します〉

それはいくら何でも手を抜きすぎじゃありませんか！？

〈それではいよいよ新婦のご登場です！〉

雰囲気のあるＢＧＭが流れ出し、スポットライトに照らし出された先には――

〈本日の主役、霧島翔子さんです！〉

会場にいた誰もが一瞬呼吸を忘れる程に綺麗にドレスアップされた霧島さんがいました。

『綺麗……』

ため息と共に零れた誰かのそんな台詞が、会場の隅々まで届きます。それほどまでに会場は静まり返っていたんです・・・・・

「……雄二」

「翔子、か……？」

「……うん。……どう？私、お嫁さんに見えるかな……？」

「――ああ、大丈夫だ。少なくとも婿には見えないな」

「……嬉しい。ずっと夢だった……小さな頃からずっと……。私と雄二、２人で結婚式を挙げること。……私１人じゃ絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……」

霧島さんは静かに涙を流しながら、本当に一途な想いを告白しました。さて、雄二は何と答えるんでしょう？返答次第では・・・・・

「翔子、俺は『あーあ、つまんなーい！人のノロケなんかどうでもいいからさぁ、早く演出とか見せてよ～』

『だよな～。ってか、お嫁さんが夢ってオマエいくつだよ？なに？

キャラ作り？ここのスタッフの脚本？ぶっちゃけキメぇんだよ！』

『純愛ごっこでもやってんの？あのオンナ、マジで頭おかしいんじゃない？ギャグにしか思えないんだケドぉ』

『そっか！これコントじゃねぇ？あんなキモい夢ずっと持ってるヤツなんていねぇもんな！』

『え～！？これってコントだったの？だとしたら超ウケるんだケドぉ～！』

あのバカップル共・・・・・黙って聞いていれば好き放題言いやがって・・・・・・

もう我慢ならない。一生懸命な人を笑うヤツは大っ嫌いなんだよ・・・・

〈んだと、テメェらっ！もう一遍言ってみやがれ！〉

〈明久君、落ち着いてください！優子ちゃんも！今出て行ったらステージが台無しになっちゃいますよ！〉

〈止めないで瑞希！アイツら、１発ブン殴ってやらないとアタシの気が治まらないわ！〉

どうやら先に明久と優子がキレたらしい。瑞希は必死に止めようとしているが、俺は止める気などさらさらない。

あの２人をどう始末してやろうかと考えていると――

〈花嫁さん？花嫁さんはどこですか？〉

・・・・・霧島さんがいない？しまった！さっきのでショックを受けてどこかに行ってしまったのか！

「さ、坂本雄二さん！霧島さんを探すのを手伝ってください！」

スタッフの１人が、息を切らせながら雄二にも声を掛けました。

「悪いがパスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな……」

そう言って雄二は近くに落ちていた霧島さんのドレスのヴェールを拾い上げると、俺のいる会場出口に向かって歩いてきた。

「坂本さん、どちらへ行かれるのですか？」

もちろんそれを呼び止めない俺ではない。

「便所に寄ってから帰ろうと思ってな」

「そうですか。それではこれをお持ちください。――ゴミはきちんとゴミ箱に捨ててくださいね？」

そう言いながら、俺は雄二にスタンロッド（５０万ボルト、違法改造品）を手渡す。

「ありがとよ」

雄二がそう言って笑う。

「それから、もし小腹が空きましたらこちらをどうぞ。長々と引き止めてしまい、申し訳ございませんでした」

ついでに霧島さんのバッグと、ペットボトルのお茶も手渡した。

「わざわざすまないな」

「いいえ。それではごきげんよう」

そうしてお辞儀をして、俺はその場を後にした。

――週明け、教室／朝

「おい、明久。如月ハイランドでは随分色々とやってくれたな」

「あははっ。何を言ってるのさ。僕は1日中家でゲームをやってたんだよ？如月ハイランドになんて行ける訳ないじゃない」

「……そうか。お前がシラを切るならそれでもいい」

「な、何を言ってるのさ。変な雄二だなぁ～」

「ところで、お前にプレゼントがある」

「え？なになに？」

「今話題の恋愛映画のチケットだ。気になる相手がいれば一緒に行くといい」

「え？ペアチケット？こんなの貰っても使い道に困って――」

『アキ！そう言えばウチ、週末に映画を見たいと思ってたんだけど！』

『へっ？なになに？どうして美波はそんなに殺気立ってるの！？このチケットは換金して生活費の足しにって痛だぁぁっ！人体に必要なパーツが色々ともげるぅぅ！』

「鏡護」

「何かな雄二？もしかして僕にもペアチケットをくれるのかな？」

「いや、お前には別の仕返し方法を考えてある」

「仕返しをされるような事をした覚えがないんだけど……」

「シラを切るというのならそれで構わん。とりあえず後ろを見てみろ」

「？後ろに誰かいるの？……って、うわぁっ！？」

「「鏡護（君）！昨日瑞希（優子ちゃん）とこっそり2人きりになってたって本当なの（ですか）？」」

「な、何を言ってるのさ2人とも！？そんな事する暇なんてな――」

「「言い訳無用よっ（ですっ）！」」

「え、いや、ちょっと待って優子！その関節はそっちには曲がらな……ギャーーッ！み、瑞希！君も止めるんだ！そんなことをしたら僕に新しい関節が増え……ぐぁぁぁっ！」

「余計な事を企むからだ。バカ野郎共が」

補習第7問　『ミッションコードは“ウェディング上等！”（後編）』（後書き）

あとがき

作者　「今回もいきなり次回予告です！

次回、補習第８問『プールと水着と乙女達の戦い（仮）』

を、お楽しみに～！」

補習第8問　『プールと水着と乙女達の戦い』

―Ｓｉｄｅ　明久

先週末に行われた『雄二＆霧島さん結婚大作戦』も無事？に終わり、いつも通りの平穏な休日の夜。僕の家には雄二が泊まりで遊びに来ていた。

「あれっ？雄二、何か買ってきたの？」

「食い物だ。お前の家にはロクな物がないからな」

そう言って、テーブルの上にコンビニのビニール袋を置く雄二。

「へぇ～。差し入れなんて、気が利くね」

ガサゴソと袋の中を漁る。すると、中には食べ物と飲み物が入っていた。

・コーラ
・アイスコーヒー
・カップラーメン
・カップ焼きそば

食べ物と飲み物が2つずつだ。これはありがたい。

「で、雄二はどっちを食べるの？」

「俺か？俺はコーラとコーヒーとカップラーメンとカップ焼きそばだ」

「雄二キサマ！僕には割り箸しか食べさせない気だな！？」

「待て！割り箸だけでも食おうとするお前の思考に一瞬引いたぞ！？」

慌てて雄二が止めに入る。

「というか割り箸がないと、俺は素手でラーメンを食うハメになるだろうが」

・・・・・確かにそれはシュールな光景だ。見てみたい気がしなくもないけど。

「まぁ割り箸はやらんが、代わりに他の物をお前にもちゃんと用意してある」

「え？そうなの？」

「ああ。もう1つ袋があるだろ？そっちがお前の分だ」

よく見ると、1つ目の下敷きになって2つ目のビニール袋があった。

「まったく雄二ってば。僕の分があるなら早くそう言ってよ」

「すまんな。先週末は世話になったから、その礼だ」

「うんうん。そう言ってもらえると僕も頑張った甲斐があるよ」

下敷きになっている袋を取り出し、中を確認する。きちんと中には食べ物と飲み物が入っていた。

・こんにゃくゼリー
・ダイエットコーラ
・ところてん

「僕の貴重な栄養源がぁぁーっ！」

全てカロリーオフという事実に思わず涙が出た。

「気にするな。俺の感謝の気持ちだ」

「くそっ！全然感謝してないな！？あの計画の為に僕がどれだけ苦労したと思ってるんだ！」

袋からダイエットコーラを取り出して構える。

「うるせぇ！お前こそ、あれ以来俺がどれだけ苦労してるか知っているのか！」

雄二も袋に手を突っ込み、普通のコーラを取り出して構えた。

僕らの間に剣呑な空気が流れる。

「……やる気かい、雄二？」

「ああ。お前とはいつか決着をつける必要があると思っていたからな」

「上等だよ。早撃ちで僕に挑んだことを後悔するがいいさ！」

「ハッ！口だけは達者だな！」

互いに相手を睨みつけ、牽制しあう。ここで下手に動けば命取りになる。

一触即発の状況の中、キッチンから水が1滴落ちる音が聞こえてきた。

――ピチョン

「「――っ！！」」

その音をきっかけに、お互いがほとんど同時に動き出す。

シャカシャカシャカ（僕と雄二がペットボトルを振る音）

ブシャアアァァァァ（お互いに向けてコーラを射出する音）

バタバタバタバタ（僕と雄二が目を押さえてのたうち回る音）

「「目が、目がぁぁぁああっ！」」

染みる！コーラが目に染みるぅぅ！

「やってくれるじゃねぇか、明久！」

「雄二こそ。流石は僕がライバルと認めた男……！」

「だが、ここからは本気で行くぞ！」

「僕だって。望むところだ！」

そうして雄二はコーヒー、僕はところてんを武器にして、互いの尊厳を賭けた戦いに身を投じていった。

――しばらくお待ちください――

「……雄二。一時休戦にしない？」

「……そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」

気が付けば、お互いの食べ物で全身がベタベタになっていた。

「明久。シャワー借りるぞ」

「うん。タオルは適当なのを使っていいよ」

「言われなくてもそうする」

そう言うと、気持ち悪そうに着ているシャツを摘みながら雄二が脱衣所の方へと消えていった。

続いてバサバサ、と景気よく衣服を脱ぎ捨てる音が聞こえてくる。

「あ、そういえばさ、雄二。言い忘れていたんだけど」

『なんだ？』

バスルームからドア越しの声。その少し後に蛇口を捻る音が鳴った。

「今ガス止められてるから、水しか出ないんだ」

『ほわぁぁっ――っ！？』

ガチャ　ズカズカズカ

「……先に言えやコラ」

腰にタオルを巻いた雄二は寒さで全身に鳥肌を立てていた。

「ごめんごめん。言い忘れていたよ。えっとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると体に悪いから、まずは手や足の先にかけて

から徐々に――」

「誰が冷水シャワーの浴び方を説明しろって言った!?」

「なに熱くなってるのさ雄二。そうだ。冷たいシャワーでも浴びて冷静に」

「たった今浴びたから熱くなっているんだボケ!……くそっ。このままじゃ風邪引いちまう」

「う～ん。そんな事言われても、僕の家のお湯が出ないという事実は変わらないし……」

それにお金があったとしても、この時間では業者はやっていないだろう。

この辺に銭湯はないし、いきなり友達の家に行ってシャワーを借りるというのもおかしな話だ。

「やれやれ……。仕方ない。明久、外に出るぞ」

僕が考え事をしていたら、いつの間か服を着ていた雄二がそう言った。

「外？もしかして雄二の家に行くの？」

「それでもいいんだけどな。どうせならシャワーだけじゃなくてプールもあるところに行こうと思ってな」

「プールもあるところ？」

「ああ。シャワーもプールもあって、ここから近くて、なおかつ金もかからないところがあるだろうが」

シャワーもプールもあって、ここから近くて、なおかつお金もかからないところっていうと――ああ、あそこか。なるほど。

「オッケー。すぐに用意するよ。雄二は水着どうするの？」

「俺はボクサーパンツで泳ぐさ。水着と大して変わらないだろ」

「りょーかい」

手早く準備を済ませ、僕達は目的地である文月学園へと向かった……

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「――で、結局宿直の鉄人に見つかって朝まで鉄拳付きの補習を受けるハメになったんだ」

「おかげで散々な週末だったぜ……」

週明けの朝、ＨＲまでの時間に僕達はいつものメンバー（男のみ）

で卓袱台を囲んでいました。

「そうじゃったのか。それは災難じゃったのぅ……」

秀吉が気遣うように柔らかな表情を浮かべています。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はぁ……」

「……重労働」

康太がポツリと呟きました。

「だよね。あんなに広いところを掃除するなんて、考えただけでも気が滅入るよ」

「何か褒美みたいな事とかはないの？」

すると僕の質問に雄二がこんなことを言いました。

「褒美という程じゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「そうなんだ？」

「ああ。だから鏡護達も今週末にプールに来ないか？」

真っ先に康太が頷こうとして、

「ただし、ムッツリーニには掃除を手伝ってもらうけどな」

「……」

雄二の言葉にその動きを止めました。先程康太自身も言っていた通り、プール掃除は重労働ですからね。迷うのも無理はないでしょう。

「ちなみに、姫路と島田も誘うつもりだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

雄二の台詞を聞いて即決する康太。なんというか、正直なヤツです。

「うむ、そうじゃな。貸切のプールなぞ、こんな時でもなければなかなか体験できないじゃろうし、相伴させてもらうとするかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「僕も参加させてもらうよ。もちろん、掃除も手伝うからね」

「え？結構大変だと思うけど、２人ともいいの？」

「うむ」

「お安い御用さ」

「んじゃ、後は向こうの２人だな。おーい、姫路、島田！」

相変わらず良く通る声で雄二が２人を呼びます。

「どうしたの、坂本？何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「2人とも今週末は暇か？学校のプールを貸切で使えるんだが、良かったらどうだ？」

「「え……？」」

プール、という単語に反応して2人の表情が凍りました。

「あ、もしかして2人とも用事があったりする？」

「い、いや、別に用事はないんだけど。その、どうしようかな……？プールっていうとやっぱり水着だし……」

「そ、そうですよね。水着ですよね……。その、えっと……」

明久の質問に、島田さんは自身の胸部へ、瑞希は腹部へと視線を送っています。

まぁ思春期の女の子特有の悩みといったところなんでしょうが、そこまで気にする必要はないと思うのは僕だけでしょうか？

「まぁ、それぞれ個人の悩みはあるようだが……。1つ言っておくと、秀吉は来るぞ。もちろん水着で、な」

答えに窮している島田さんに、雄二は妙なことを告げます。・・・・・それは島田さんに対する発破のつもりですか？

「というか、瑞希は少し気にし過ぎじゃない？僕はありのままの瑞希が好きなんだよ？」

僕は僕で瑞希にそんな事を言います。ダイエットなんかで瑞希に無

理をして欲しくはありませんからね。

「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」

「???島田よ、お主は何を言っておるのじゃ？」

「は、はぅぅ／／／／きょ、鏡護君にそう言われちゃったら私……（ボソボソ）」

すると島田さんは突然秀吉を非難し、瑞希は瑞希で顔を真っ赤にして何やら呟いています。

「で、どうするんだ2人とも？」

「い、行くわ！その、イロイロと準備して……」

「は、はい！私も行きます！」

島田さんは複雑そうな顔で、一方の瑞希は笑顔で了承してくれました。

「そう言えば、いい加減水着を新調せねばならんのう。ちょうど良い機会じゃから買いに行くとするかの」

秀吉が顎に手を当てて呟きます。そんな事を言ったら――

「そ、それじゃウチも新しいのを買おうかな……？」

ほら。やっぱり島田さんが便乗してきました。

「あれ？でも美波ちゃん。この前水着の話をしていた時には『去年買ったばかりだから今年は要らない』って……」

「瑞希、そこはツッコんじゃいけないんだよ」

「み、瑞希も天水も余計なこと言わない！今回買うのは……そう！勝負用だから別口なのよ！」

「島田さん。それじゃ余計に墓穴を掘ってるよ？」

「……気のせいよ」

盛大に自爆して、島田さんが苦い顔をします。

「あ、そうだ雄二。霧島さんにもちゃんと声を掛けておいてよ？」

「……言われなくてもそのつもりだ」

「あれ？珍しい。今日は随分と素直なんだね」

「うんうん。雄二も大人になったね」

憮然とした態度ではあったけど、雄二が意外な返事をしたので驚きました。

「いや、そういう問題じゃない」

「ん？どういうこと？」

「いいか、想像してみろお前ら。俺の立場で、後々になってからこ

の事が翔子に知られたら……」

雄二が真剣な表情で聞いてくるので、こっちも真剣に考えてみます。

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「刀のサビ……いや、頑固なシミ……」

「俺の死体の処理方法や末路まで想像する必要はないが、まぁそんなところだ」

なるほど。納得がいきました。

明久としては、おかげで霧島さんの水着姿を見ることが出来るのですから願ったり叶ったりでしょうが。

「それなら、鏡護君は優子ちゃんにも声を掛けないとダメですよ？」

「もちろんだよ」

瑞希とそんな話をします。優子１人を仲間はずれにするわけにはいきませんからね。

「とにかく、全員オッケーのようだな。んじゃ、土曜の朝１０時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

雄二の締めの台詞とほぼ同時に、西村先生がドアを開けて教室に入ってきました。

＊　＊　＊

そして週末。

「おはよー！今日は絶好のプール日和だね」

雲1つない抜けるような青空の下、明久が僕達に声を掛けてきました。

「おはよう明久。今日は早いね」

「おはようじゃ明久。良い天気じゃな」

「おはようございます明久君。今日は良い1日になりそうですね」

「おはよう吉井君。今日はよろしく」

これで後は島田さんが来れば全員集合ですね。

「ムッツリーニ、おは――」

「……！！（カチャカチャカチャ）」

康太は先程から鬼気迫る表情でカメラの手入れをしています。

「あ、あのー、ムッツリーニ？」

「……今、忙しい」

明久を一瞥して、すぐに作業に戻ります。

康太にしてみれば、今日は絶好の撮影チャンスでもありますからね。

「ムッツリーニ。準備はいいけど、結局は無駄になるんじゃない？」

「……なぜ？」

「いや。だって、ムッツリーニはどうせ鼻血で倒れちゃうでしょ」

「そういえばそうだよね。清涼祭の時はチャイナドレスでも鼻血の海に沈んだ位だし」

僕も明久に賛同します。

しかし康太は肩をすくめると、傍に置いてあった大きなスポーツバッグを僕達に突きつけてきました。

「……甘く見てもらっちゃ困る」

言いながら、スポーツバッグを開けて中を見せてくれます。

「……輸血の準備は万全」

「どこで手に入れたかは聞かないけど、ある意味準備がいいね？」

「うん。最初から鼻血の予防を諦めてる当たりが男らしいよね」

中には鞄一杯に携行用の血液パックが入っていました。これなら救急車を呼ぶ必要はありませんね。

「……なんていうか、異様な光景よね」

「でも、これがFクラスですから」

「……瑞希もだいぶ染まってるわね」

優子と瑞希はそんな会話をしていました。優子の気持ちもわからないではありませんが、諦めてください。

「準備といえば、秀吉は水着を買い換えるとか言ってたよね？忘れずに買ってきた？」

「うむ。無論じゃ」

胸を張って、鞄を掲げて見せる秀吉。

「ちなみに買ってきた水着じゃが――」

「……！！（くわっ！）」

あ、康太が作業を中断して目を見開いていますね。そんなに興味があるんですか？

「――トランクスタイプじゃ」

「「バカなぁぁあああっ！！」」

秀吉の台詞を聞いて、明久と康太が2人して地面に突っ伏します。

「最近お主らはワシを女として見ておるようじゃからな。ここらで一度ワシが男だということを再認識させようと――って2人とも聞いておるか？」

「酷いよ秀吉！君は僕のことが嫌いなのかい！？」

「……見損なった……」

「な、何じゃ？何故ワシは責められておるのじゃ！？」

「気にしないほうがいいですよ、木下君」

「そうだね。２人はきっと今日の日差しに頭をちょっとやられちゃったんだよ」

「鏡護！君は秀吉の水着姿（女物）が見たくないのかい！？」

「別に。だって秀吉は男じゃないか」

「違うっ！秀吉は第３の性別『秀吉』なんだよっ！」

「……！！（コクコク）」

・・・・・ああ。やっぱり２人の認識ではそうだったんですね。

「……アタシ頭痛くなってきた……」

優子が頭を抱えてしまいました。・・・・・こんなヤツらでごめんなさい。

――タッタッタッタッ！

「おはようですっ！バカなお兄ちゃんっ！」

「わわっ」

「もう葉月ったら。いきなりアキに飛びついちゃダメじゃない！」

「びっくりしたよ。おはよう。葉月ちゃん、美波」

「おはよう、アキ。皆も」

「おはよう、島田さん。葉月ちゃんも一緒だったんだね」

「家を出る時に葉月に見つかっちゃってね。どうしても行くって聞かなかったから……」

「いいんじゃない？仲間はずれにしちゃうのは可哀想だよ」

「ありがと。……そう言えば坂本はまだ来てないの？てっきりウチが最後だと思ってたのに」

「いえ、もう来ていますよ。今職員室に鍵を借りに行って――あ、戻ってきたみたいです」

瑞希の説明の途中で、校舎の方から雄二と霧島さんが歩いてきました。

「おっ、揃ってるようだな」

「お兄さん、おはようですっ！」

葉月ちゃんが元気良く雄二に挨拶します。

「ん？チビッ子も来たのか？」

「チビッ子じゃないですっ！葉月ですっ！」

「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」

「はいっ！」

楽しそうに笑って、葉月ちゃんの頭に手を置く雄二。やっぱり子供好きなんですね。

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室の鍵は翔子に預けてあるからついて行ってくれ。着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉通り、一旦男女に分かれます。

瑞希と島田さん、優子は霧島さんに。

明久と僕と康太、秀吉に葉月ちゃんは雄二に――って、ちょっと！？

「こらこら。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ？霧島さんについていかないとダメだよ」

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……？」

「ほら、遊んでないで行くわよ葉月、木下」

「ま、待つのじゃ！ついに島田までワシをそのような目で見るよう

になってしもうたのか!?嫌じゃ!ワシは女子更衣室でなど着替えぬぞ!」

「だから、秀吉は男……」

「諦めて、優子。もう何を言っても無駄なんだ……」

「それなら、木下君は1人で別の場所で着替えればいいんじゃないですか?」

「ぬ、ぬぅ……。得心行かぬが、仕方あるまい……。水着姿を見れば、きっと皆の見る目も変わるはずじゃ……」

可哀想な気もするけど、それでは納得しない人がいる以上我慢してもらうしかありません。

「よし、決まったならさっさと行こうぜ。時間がもったいない」

そうして僕達はそれぞれの更衣室に向かいました。

――20分後

着替えを終えた僕達はプールサイドに出てきました。

「やっぱり女子はまだ着替え終わっていないか」

「そうみたいだね」

「……（コクリ）」

「こういう時女の子は時間がかかるからね」

「ムッツリーニ、心の準備はできてる？命に関わるからね？」

「……問題ない。イメージトレーニングを２５６パターン、昨晩のうちに済ませてある」

どんなパターンを想定したのか聞いてみたい気がしなくもありません。

「……そして２５６パターンの出血を確認した」

「致死率１００％じゃないか」

「ダメだこりゃ」

どうあっても康太は助からないようです。

「お、誰か来たぞ」

不意に聞こえた雄二の呟きに、全員が顔を向けると更衣室の方から小さな人影が歩いてくるのが見えました。

あれは葉月ちゃんですね。小学生らしいスクール水着を着ていますが……

「どどどどどどどうしよう雄二！？あれってスクール水着だよね！？そんなものを着た小学生と遊んでいたら、逮捕されたりしないかな！？」

「……弁護士を呼んでほしい（ボタボタボタ）」

「あのな……。落ち着け2人とも。小学生の水着姿でそこまで取り乱すな」

激しく動揺する2人に雄二が冷静なツッコミを入れます。

「お兄ちゃん達、お待たせですっ」

と、息を弾ませて駆け寄ってきた葉月ちゃん。

その間に2人はある程度落ち着いたのか、冷静な様子で――

「懲役は2年程度で済みそうだね」

「……実刑はやむおえない（ボタボタボタ）」

・・・・・全然冷静じゃありませんね。

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」

「というか、2人は捕まるような何かをする気なの!?」

「こ、コラ葉月っ！お姉ちゃんのソレ、勝手に持って行っちゃダメでしょ!?返しなさいっ！」

そんな声と共に現れたのは、胸元を手で隠している島田さんでした。

「……パッド」

「あぅっ。ズレちゃいました」

明久と康太を動揺させていた、小学生とは思えない胸のふくらみ。
それが今はお腹の方へ行っています。

「ん？ってことは、今美波が返しなさいって言ってたのは葉月ちゃんがつけている胸パッ……」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……！」

「ちょっと待った島田さん！その一撃はきっと明久の存在を記憶諸共消滅させかねない！」

流石に明久を見殺しにはできないので、島田さんを止めに入ります。

「そうよ美波。折角のプールなのに殺人事件なんて起こしたら台無しよ」

「優子！助かったよ。水着、よく似合ってるね」

「あ、ありがとう……／／／／」

いつの間にか来ていた優子も一緒に止めてくれました。
水着を褒めると、顔を真っ赤にして俯いてしまいます。可愛いですね。

島田さんが着ていたのはスポーツタイプのセパレート。なんだかビーチバレーの選手みたいで格好良いです。
優子は白地に赤いラインがアクセントになっているビキニタイプ。
こちらもスラリとした手足が良く映えて、本当に魅力的です。

「うぅ……。折角用意してきたのに……葉月のバカ」

「そんなに気にすることないんじゃない？島田さんのスレンダーな体型も充分魅力的だと思うよ。ねぇ、明久？」

「そうだね。手も足も胸もバストもほっそりしてて、凄く綺麗だと足の親指が踏み抜かれたように痛いぃぃっ！」

「今ウチの胸が小さいって2回言ったわよね！？」

相変わらずのうっかり発言をした明久は、島田さんに思いきり足を踏みつけられていました。

「まったく、明久も懲りないなぁ」

「そうね。せっかく鏡護がお膳立てしたのに」

僕は優子と一緒にそんな2人のやりとりを生温かい目で見守っていました。

「ぐあぁぁぁぁっ！目が、目がぁっ！！」

突然、プールサイドに雄二の悲鳴が響き渡りました。

皆が何事かと思ってそちらを見ると、そこには目を潰されてのたうち回る雄二の姿が。

そして雄二の傍には手をチョキにしている、霧島さんが立っていました。霧島さんの水着は、大人し目な白のビキニに水着用のミニス

カートを組み合わせたものでした。こちらもとても良く似合っています。

「凄いわ……。坂本の目を潰す仕草まで綺麗だなんて……」

「うん……。あの姿を見られるのなら、雄二の目なんて惜しくないね……」

「そりゃお前らには実害がないからなっ！」

「代表も何してるの……」

自分が所属するAクラスの代表である霧島さんのそんな行動に、優子は頭を悩ませているようです。

僕はのたうち回る雄二を見て、霧島さんに声を掛けました。

「霧島さん、雄二の目を潰しちゃったら水着の感想が聞けないんじゃない？」

「……いけない。それは失敗だった」

「うん。わざわざ目を潰さなくても、塞ぐだけでよかったと思うよ？」

「……そうする」

と、頷いて雄二へと近づいていく霧島さん。きっと何か思いついたのでしょう。

「これで後は瑞希と秀吉だけだね」

「……」

隣の優子に話しかけましたが、返事がありません。見ると、優子は前方を凝視して固まっています。

「どうしたの、優子？」

「……ちょっとね。改めて見せつけられた彼我の戦力差に絶望してたところ」

「？？？」

訳がわかりません。僕は優子の言葉に頭を捻るばかりでした。

すると――

「すみませーん！ちょっと背中の紐を結ぶのに時間がかかっちゃって……」

駆け足でこちらへやって来る瑞希の姿が。

それを視界に入れた途端、大量の鼻血を噴き出して倒れる康太と、同様に勢いよく鼻血を噴いて倒れる明久。

さらに、

「Worauf fur einem Standard hat Gott jene unterschieden, die haden, und jene. Die nicht hab

ｅｎ!?　Ｗａｓ　ｗａｒ　ｆｕｒ　ｍｉｃｈ　ｕｎｇｅｎｕｇｅｎｄ!（神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの!?　ウチに何が足りないっていうのよ!）」

聞き慣れない言語――ドイツ語でしょうか?で何かを叫ぶ島田さん。

「どうした?一体何が起こってるんだ?」

「……雄二、見ちゃダメ」

「おわっ!何だ、この柔らかい感触は!?おい翔子、俺に何をしてやがる!?」

「……目隠し」

「それでどうして俺は抱きかかえられてるんだ!?」

一瞬にしてカオスがプールサイドを支配しました。

「み、皆さん何をしているんでしょうか……?」

到着した瑞希が周りの惨状を見てそう聞いてきます。

「あはは……。まぁ、瑞希は気にしなくても大丈夫だよ」

カオス空間の原因に思い当たった僕は、とりあえず笑って誤魔化しました。

「???」

瑞希は頭に疑問符を浮かべていますが、言える訳がありません。原因は君の胸についているモノなんだよ、なんて・・・・・

「それより水着、可愛いね。とても似合ってるよ」

「そ、そうですか？嬉しいです……／／／／」

瑞希が着ているのは、露出の多いピンクのビキニにゆったりとしたパレオ。いつもは大人しい彼女がそんな大胆な格好をしていたら、それだけでもう・・・・・！

「瑞希……やっぱりアンタはウチの敵よ……。覚えていなさい……！」

「瑞希にはアタシや美波の気持ちは一生わからないのよ……！」

島田さんと優子は瑞希に恨みのこもった視線を送っています。まぁ、そうしたくなる気持ちもわからなくはありません。

「さて、これで残るは秀吉1人だね」

「……秀吉はトランクスタイプ……」

輸血が間に合ったのか、復活した康太が寂しそうに呟きます。明久も何故かとても残念そうな顔をしています。

「待たせてすまぬ。着替えはさほど苦労しなかったんじゃが、いかんせん校舎からここまで来るのは遠くての」

と、どうやら秀吉が来たようです。

「☆●◆△□♪◎×（ううん。そんなに待ってないよ秀吉）」

「落ち着いて明久。ここは地球だよ？」

何故かいきなり地球外の言語を喋りだした明久にツッコミを入れます。

「ど、どうじゃ……？これでワシも少しは男らしく見えるかの……？」

恥ずかしそうに、それでもちょっとだけ見せつけるように秀吉が水着姿を披露します。

「……秀吉、とっても言いにくいんだけど……」

僕はそれを見て、真実を伝えるべきかどうか若干迷いました。

「なんじゃ鏡護。言いたいことがあるならはっきり言って欲しいのじゃが」

そんな僕に、秀吉は先を促します。・・・・・後悔しないでくださいね？

「えっとね、秀吉。その水着なんだけど、僕には女物にしか見えないんだよ」

とうとう僕はその一言を口にしてしまいました。

「な、なんじゃと！？」

秀吉が着ていたのは、確かにトランクスでした。
ただし、その基本構成は島田さんと同じようなスポーツタイプ。上は肌に密着したショートタンクトップで、下はおそらく普通のパンツでしょう。その上にショートパンツのようなズボンを、一番上のボタンを外した状態で重ねています。

・・・・・要するに、女物のトランクスタイプだったのです。

「き、木下……！アンタ、どこまでウチの邪魔をすれば気が済むの……！」

「ひ、秀吉！アンタ、なんて格好をしてるのよっ！」

島田さんと優子がそれを見て憤慨しています。あ、優子が秀吉の腕を掴みました。

「秀吉！やっぱり秀吉は僕達の気持ちを察していてくれたんだね！」

「……永遠の友情と劣情をその水着に誓う」

一方こちらは先程までの落胆振りはどこへやら。明久と康太は2人して喝采をあげています。

「ち、違うのじゃ！ワシは確かに店員に『普通のトランクスタイプ』が欲しいと言ったのじゃ！あ、姉上！その関節はそっちには曲がらな……アアァァッ！」

秀吉は言い訳を試みましたが、優子の関節技によって血の海に沈められてしまいました・・・・・

補習第8問　『プールと水着と乙女達の戦い』（後書き）

あとがき

次回、補習第9問『プールと水着と漢達の戦い』に続きます！

補習第９問　『プールと水着と漢達の戦い』（前書き）

ＰＶ１０万、ユニーク７，５００を突破しました！
これも読者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。
これからも精進していきますので、応援よろしくお願いします！

というわけで、前回の続きをどうぞ！

補習第9問　『プールと水着と漢達の戦い』

「あの、鏡護君」

軽く準備運動をしてプールに飛び込むと、はしごを使って恐る恐るプールに入ってきた瑞希が声を掛けてきました。

「ん？どうしたの、瑞希？」

「鏡護君は水泳は得意ですか？」

「うん。基本の泳法は一通りできるよ」

「実は私……お、泳げないんです」

「あれ、そうなんだ？」

「はい……」

実は予想通りの答えでした。こう言っては何ですが、運動の苦手な瑞希が水泳だけ得意だとは思えませんからね。

「それなら僕が教えてあげるよ」

「い、いいんですか？」

「だって瑞希もそのつもりで声を掛けてくれたんじゃないの？」

「はい……。そうなんですけど……」

「じゃあ遠慮なんてしないでよ。さあ、やろう」

「あっ、鏡護君!?」

瑞希の手を取ってプールの中程まで歩きます。

「瑞希はどれくらいできるの?」

「えっと……水に浮く事はできます」

「そっか。じゃあバタ足をしてみよう。僕が手を持っていれば沈むこともないでしょ?」

「は、はい……。あの……絶対に放さないでくださいね?」

「大丈夫。絶対に放さないよ」

やはり怖いのか、少し震えている瑞希を安心させるように、ギュッと手を握ってあげます。

「は、はい」

――バシャバシャバシャ

「そうそう。身体の力は抜いて、足でしっかり水を蹴るように……」

瑞希は僕の言う事を理解・実践するのが早く、すぐに上達していき

ました。

「ふぅ……。泳ぐのって楽しいし、気持ちいいんですね！」

「凄いよ瑞希。もうバタ足は僕が手を持ってなくても完璧じゃないかな」

「えっ……」

そこで何故か残念そうな顔をする瑞希。僕が褒めたのに、どうしてそんな顔をするのでしょうか？

「鏡護！瑞希はもう泳げるようになったの？」

「ああ、優子か。うん。もう1人でも大丈夫じゃないかな」

「あっ！そ、それは困りま――」

「それならアタシと遊びましょ？」

「う～ん。それなら3人で何かしない？」

「……アタシは鏡護と2人がいい」

おや？優子が駄々を捏ねるなんて珍しいですね。・・・・・って、ああ。そういうことですか。

「ごめんね優子。1人蚊帳の外だったから寂しかったんだね？」

「／／／／べ、別にそういうわけじゃ――」

「ううん。気付かなくて本当にごめん……」

優子をギュッと抱きしめました。

「あ、うぅ……／／／／きょ、鏡護は卑怯よ……」

「あっ……。優子ちゃん、ズルいです……」

「瑞希もおいで？」

「は、はいっ／／／／」

瑞希も僕の胸に飛び込んできます。

「2人を平等に愛する。それが僕の誓いだったのに、ごめん」

「も、もういいわよ……こうしてもらえればそれで充分」

「私もです。……優子ちゃん、ごめんなさい」

「気にしなくていいわ瑞希。……それじゃ、3人で遊びましょ？」

「「うん（はいっ）！」」

そうして僕達は3人で一緒に遊びました。

―Ｓｉｄｅ　明久

鏡護が女の子2人とイチャイチャしているのを陰で妬み（羨み）ながらプールを泳いで（漂って）いると、不意に水の中に引きずり込まれた。

「お兄ちゃんっ」

「わぷっ！？な、何！？」

「えへへー。お兄ちゃん、葉月と遊ぶですっ」

水面に顔を出すと、そこには笑顔の葉月ちゃんが。そっか、さっきのは葉月ちゃんの仕業か。

「うん、いいよ。何して遊ぼうか？」

「じゃあ『水中鬼』をするですっ！」

「水中鬼？それって水中でやる鬼ごっこのことかな？」

確かに、それはそれで普通に外でやるのとはまた違った面白さがありそうだ。

「違うですっ！水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追いかけるです。そして鬼が他の人を」

葉月ちゃんが胸を張って説明してくれる。でも、それだとやっぱり僕の考えと同じものみたいだ。鬼が他の人をタッチして――

「鬼が他の人を水の中に引きずりこんで、溺れさせたら勝ちですっ！」

「鬼だっ！それは確かに鬼だ！」

通りで『ごっこ』の部分がない訳だ。それにしても、最近の小学生は恐ろしい遊びをしているなぁ・・・・・

「でもダメだよ、葉月ちゃん。そんな遊びは危ないよ。今からそれを教えてあげるから見ててね。――おーい、霧島さーん！」

そう言って、少し遠くにいた霧島さんを呼ぶ。

「……何？」

すると霧島さんはすぐに僕のところへ来てくれた。泳ぐのも上手いんだなぁ。

「雄二と水中鬼って遊びをやって見せてほしいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせた後で人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

「……行ってくる」

小さく頷くと、霧島さんは魚雷のように静かに、そして素早く雄二に接近していく。

「お？何だ？いきなり足が……おわぁっ！？だ、誰だ！？誰が俺を水中に（ガボガボガボ）」

「……雄二、早く溺れて」

「ぶはぁっ！しょ、翔子！？何をトチ狂って……！（ガボガボガボ）」

遠くで繰り広げられる水中鬼。

「ね？　危ないでしょ？」

「はいです……葉月、水中鬼は諦めるです……」

「明久っ！てめぇの差し金だな！？」

「うわっ！ダメだよ霧島さん！きちんと捕まえておいてくれないと！」

「……ごめん」

「わっ！お兄ちゃん達、泳ぐのとっても速いですっ」

僕と雄二と霧島さんの水中鬼、スタート。

雄二と命懸けの水中鬼をしていた時に、Ａクラスの工藤さんがプールにやってきた。水泳部が休みだったのを忘れて学校に来ちゃったけど、プールから人の声がしたので寄ってみたらしい。

さらにいつの間にかもう1人知らない女子が増えていたけど、彼女は一体?美波を追いかけているって事は知り合いなんだろうけど。

その後も皆でワイワイ騒ぎ、昼食も終わってゆっくりくつろいでいた時に事件は起きた。

「あっ、そういえば忘れていました!」

突然姫路さんが何かを思い出したかのように、ポンと手を打った。
それを聞いた瞬間、僕達男性陣は本能的に身の危険を察知していた。
これは、まさか・・・・・?

「ちょっと失敗しちゃって人数分は用意できなかったんですけど――」

姫路さんがにこやかに言葉を紡ぐ。
その間、僕達の間では高速でアイコンタクトが交わされていく。

(おい、この流れは……)

(うん。きっと間違いないね……)

(そうじゃな。……しかし姫路の料理はもう危なくないのではないか、鏡護?)

(確かに僕が見ていればもう大丈夫だよ。……瑞希が1人で作った

時はその限りじゃないけど）

（……つまり、今回はレッドカード）

（うん。多分……）

（仕方ない。こうなったら……）

時間にしておよそ2秒。僕達の結論は出た。

「――実は今朝作った私オリジナルのワッフルが4つ……」

「第1回っ！」（雄二の声）

「最速王者決定戦っ！」（僕の声）

「勝利の栄冠は誰の手にっ！」（鏡護の声）

「「「ガチンコ、水泳対決っ！！」」」（3人の声）

「「イェーイッ！！」」（秀吉と康太の合いの手）

「……はぁ。しょがないわね……」

姫路さんが全てを言い終える前に、僕達のタイトルコールが乱入する。

突然の事態に、何故か木下さんは呆れ、それ以外の女子は全員目を丸くしていた。

「明久、ルール説明だ！」

「オッケー！ルールはとっても簡単。ここのプールを往復して一番最初にゴールした人の勝ちという、誰にでもわかるシンプルな水泳勝負です！」

「バカなお兄ちゃん達、突然どうしたですかっ？急に水泳勝負だなんて、葉月びっくりですっ」

「葉月ちゃん。漢にはね、大切なものを賭けて闘わないといけない時っていうのがあるんだよ」

「ふぇ～。お兄ちゃん、かっこいいですっ。プライドを賭けた勝負ってやつですねっ！」

・・・・違うんだ葉月ちゃん。この勝負、賭け（ベット）されているのは僕達の命なんだよ。

「なんかよくわかんないけど、５人の中で誰が一番速いのかは興味あるわね」

「……体力なら雄二が一番」

「でも動きの速さなら、明久君や土屋君も引けを取らないと思いますよ？」

「鏡護は実力の程がイマイチだけど、どうなのかしら？」

女子の皆は暢気に１位は誰か予想をしている。

「面白そうだね。それじゃ、判定はボクがしてあげるよ」

工藤さんがスタート兼ゴール地点に立つ。２５メートルのプールなので、勝負は往復の５０メートルだ。

僕達はお互いに闘志を燃やしながらスタート位置に立った。審判側からムッツリーニ、雄二、僕、秀吉、鏡護の順で並ぶ。

「はい、行くよ～！位置について――」

工藤さんのコールが響く。

僕は飛び込みの姿勢を取りながら頭の中で考えた。

ムッツリーニは普段の状態なら強敵だけど、今日は大量の出血で弱っているから僕の敵ではない。

秀吉も弱いというわけではないけど、きっと体力で負けることはないはず。

鏡護は正直どの程度できるのかわからないけど、この際放っておいても大丈夫だと思う。

「よーい――」

罰を免れるのは１人だけ。それならば、僕が始末すべき敵はただ１人――

「――スタートっ！」

「「くたばれぇぇっ！」」

工藤さんの合図と同時に、僕と雄二は互いに向かって全力で跳び蹴りを放っていた。

「くそっ！やっぱり雄二も僕と同じ事を考えていたね！？」

水面に飛び込まずに真横にいる僕に飛び掛るなんて、どこまで外道なんだこの男はっ！

「てめぇこそ卑怯な真似してくれるじゃねぇか！この恥知らずがっ！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるっ！」

体勢を立て直して、もう一度雄二に飛び掛る。

お互いに水着しか身に着けていないから、雄二を黙らせるには拳しかない。しかもこの距離だ。マウントを制した者が勝負を制する・・・・！

『ねぇお姉ちゃん。どうして水泳なのに、バカなお兄ちゃん達はまだ水の中に入らないですか？』

『見ちゃダメよ葉月。バカがうつっちゃうからね？』

遠くから何か失礼な会話が聞こえた気がする。

「あのさ、２人とも。取っ組み合いもいいけど、３人はもうそろそろ折り返すよ？」

「「なにぃっ（なんだって）！？」」

審判から舞い込んできたあまり嬉しくない情報に思わず攻撃態勢を解く。

「おい明久！秀吉とムッツリーニはもう折り返してるぞ！？」

「ホントだ！雄二なんかを相手にしてる場合じゃないよ！」

ついつい雄二との格闘戦に夢中になりすぎたみたいだ。秀吉とムッツリーニの残りの距離は――マズい！あと２０メートルくらいしかない！

ついでに鏡護は――あ。今折り返したところだ。・・・・・ん？何だろう？今チラリとこっちを見たような・・・・？

「雄二！とにかく急いで２人を止めないと僕達の負けが確定するよ！？」

「わかっている！俺はムッツリーニを止める！お前は秀吉をやれ！」

「了解！ここは一時休戦だね！ちなみに鏡護はどうするの？」

「大丈夫だ。俺の見たところ、あいつは大した障害じゃない」

「わかった！」

雄二はムッツリーニのレーンに、僕は秀吉のレーンに飛び込んだ。

こうなったら多少卑怯な手を使ってでもゴールを阻止してみせる！

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

折り返した時に向こう岸を見たら、明久と雄二はまだ水の中にすら入っていませんでした。もしかしてとは思いましたが、２人してお互いに妨害しあっていたようです。

同時に、僕は今の自分の順位を確認します。現在僕は第３位。前を行く康太と秀吉からは多少のラグがあります。これなら、状況に焦った明久達は前の２人を止めようと動くはずです。

・・・・・この勝負、僕の勝ちです！

直後、２つの大きな水音が隣と一番奥のレーンから聞こえてきました。これは明久達のものでしょう。

狙い通りに事態が進むのを確認しながら、今まで抑えていたスピードを一気にトップに入れます。

『あれっ？一番右のお兄ちゃん、急に速くなったですっ！』

『ホントだわ。っていうか、変わりすぎでしょ！？』

『鏡護……アンタ手を抜いてたわね……』

『ゆ、優子ちゃん落ち着いて！』

『……意外な伏兵』

『うん。まさかのダークホース登場だね』

ゴール地点ではそんな会話が行われていたとかいないとか。

「なっ！バカなっ！鏡護のヤツ、ワザと遅く泳いでいたのか！？」

「どうしよう雄二！もう間に合わないよ！……って、あっ！」

雄二と明久が驚く声が聞こえますが、それも置いていくように――

――パシッ！

「やったぁーっ！勝ったぁーっ！」

僕は1着でゴールしました。大喜びでハシャいでいると――

「ア、アキっ！何してるのよっ！？」

何故か島田さんの焦ったような、そんな声が聞こえてきました。

「へっ？」

「それです、それ！」

続いて、明久の声と瑞希の声も聞こえます。

ここに至って、ようやく僕も周囲が騒然としている事に気が付きました。そこでプールに目を向けると――

「あはは。そういえば、コレって秀吉の水着に似てるね」

「んむ？そういえば胸元が涼しいのう」

秀吉の水着の上を手にした明久と、上半身裸になった秀吉がいました。

「……死して尚、一遍の悔い無し……！！」

遠くからは、康太のそんな声が聞こえてきた気がしました。

そしてたちまち朱に染まり始める水面。

「って、やっぱりコレ秀吉の水着!?ご、ごごごめんなさいっ！神に誓って僕は何も見てないから！」

「待つのじゃ明久！ワシは男じゃぞ!?どうしてそこまで慌てるのじゃ!?」

「うおっ！大丈夫かムッツリーニ!?この出血量はヤバいんじゃないか!?」

「……構わない。むしろ本望……」

「わああっ！？康太が本当に危険な状態に！？だ、誰か早く救急車を呼んで！」

「き、木下っ！アンタはとにかく胸を隠しなさい！土屋の血が止まらないから！」

「いいいイヤじゃ！ワシは男なのじゃ！胸を隠す必要はないのじゃ！」

「木下君！今は我が侭を言っている場合じゃありません！土屋君が死んじゃいます！」

「……愛子。救急車の手配、頼める？」

「はーい。やっぱりＦクラスの人達って面白いね」

「アタシは胃が痛いわ……」

「バカなお兄ちゃん達、いつも楽しそうで羨ましいですっ！」

「お姉さま、愛してます……」

結局、康太は何度も峠を迎えながらも、僕達と救助隊員の懸命な延命措置で一命を取り留めました。

そして、週明けの朝。

「……吉井に坂本に天水。ちょっと聞きたいことがある」

明久、雄二、僕の3人は、担任の西村先生から職員室に呼び出されていました。

「断る」

「黙秘します」

雄二と明久が拒否の構えを取ります。
すると、西村先生はプルプル震えだしました。

「……どうして……どうして掃除を命じたはずなのにプールが血で汚れるんだ!?」

そして職員室中に響き渡る大音響。
それに対し、2人は心外とばかりに抗議します。

「んなこたぁどうでもいい！むしろ死人を出さなかったことに感謝して欲しいくらいだ！」

「そうですよ！本当に危ないところだったんですからね！」

「黙れ！お前らの日本語はさっぱりわからん！天水、お前が事情を説明しろ！」

「今回ばかりは本当に2人の言う通りなんですよ……。実はですね、

――かくかくしかじか――で……」

西村先生のご指名だったので、プールで起きた殺人事件（未遂）について詳しく話しました。
それを聞いた西村先生はお咎め無しで僕達を解放してくれましたが、後に一言、

「……今度の強化合宿の風呂は、木下を別にする必要があるようだな」

と呟いたとか。

補習第９問　『プールと水着と漢達の戦い』（後書き）

あとがき

作者　「次回から本編に復帰します！というわけで、次回予告！

次回、第２０問『始まりは突然に！世間は広いようでやっぱり狭い（仮）』

を、よろしくお願いします！」

第２０問　『始まりは突然に！世間は広いようでやっぱり狭い』（前書き）

バカテスト　国語

問　傍線部『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。

父が沈痛の面持ちで私に告げた。
『彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい』
その話を聞いたとき、〈傍線部〉私は身を引き裂かれるような痛みを感じた。　彼のことはなんとも思っていなかった。彼がどうなろうとも知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ちが揺れるのだろう。

姫路瑞希の答え
『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』
教師のコメント
そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたということです。

天水鏡護の答え
『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在だったから』
教師のコメント
正解です。ですが、どうしてここの解答欄だけ答えが滲んでいるのでしょうか？

吉井明久の答え
『私にとって彼は自分の下半身のように大切な存在だったから』
教師のコメント

どうして下半身に限定するのですか。

土屋康太の答え

『私にとって彼は下半身の存在だったから』

教師のコメント

その認識はあんまりだと思います。

第２０問　『始まりは突然に！世間は広いようでやっぱり狭い』

――ある日、天水家／朝

「そういえば姉さん。こっちに戻ってきたって事は就職先はもう決まってるの？」

なんとなく、気になっていたことを聞いてみました。

「もちろん決まってるわよ？ちなみに今日から出勤ね」

「そうなんだ。で、どこなの？」

「んふふ～。それはヒ・ミ・ツ♪」

何故か姉さんは答えをはぐらかしました。

「どうしてさ？教えてくれたっていいじゃない」

「その方が私が楽しいからよ」

「……姉さん。そうやって僕で遊ぶのはそろそろ止めてくれないかな？」

「イ・ヤ♪」

イイ笑顔できっぱりと断られてしまいました。

「……わかったよ。じゃあ聞かない。っと、そろそろ2人が来る頃だから僕は行くね」

「行ってらっしゃ～い♪」

姉さんに送り出され、ドアの前で瑞希と優子の2人と合流した僕は学校へ向かいました。

朝のＨＲの時間になって、西村先生がこんな事を言いました。

「突然だが、今日からＦクラスに副担任が来ることになった」

途端に騒がしくなる教室内。

『おい、聞いたか？副担任の先生だってよ』

『ああ。女の先生か？』

『わからん。だがもし男だった場合は……』

『止めてくれ。そんな事は考えたくもない』

クラスメイト達は口々にそんな事を話しています。

・・・・・何故でしょう。僕には先程から嫌な予感しかしません。・・・・・まさかっ！？

「お前達、少しは静かにしろ！……それでは入ってきてください」

「はい」

女性と思しき高めの声と共に教室の扉が開けられます。

――ガラガラガラ

開いた扉の先には、ビシッとスーツを着こなしている1人の女性が立っていました。

腰まで伸ばした碧銀の髪に、非常に整った顔立ち。そしてスーツを着ているので、はっきりとわかる身体のメリハリ。

要するにとんでもない美人さんなのですが、あれは――

「天水先生。こちらへ来て自己紹介をお願いします」

「はい。……えっと、Fクラスの皆さんはじめまして。今日からこのクラスの副担任をすることになりました、天水黎夜です」

「「姉さん（黎夜さん）っ!?」」

僕と瑞希の声がハモります。そして、

『『なにぃっ!?天水のお姉さんだと!?』』

クラスメイト達がそれに反応しました。

「やっほ～！キョウ君、瑞希ちゃん、そういう事だからよろしくね♪」

壇上の姉さんは、僕達を見つけると笑顔で手を振ってきました。あ、頭が痛いです・・・・・

「……あ～、コホン。天水先生はＦクラスの副担任と共に試験召喚システムの開発チームにも所属することになっている」

西村先生が補足説明をしていますが、僕の耳には入ってきません。それよりも重要なことがあるのですから。

・・・・・今朝姉さんが答えをはぐらかした理由はコレだったんですね。まさか文月学園（ココ）に就職するなんて・・・・・

「そういうわけですので、これからよろしくお願いしますね」

外向けモードに戻った姉さんが笑顔で挨拶を締めくくりました。

『『は～いっ！』』

そんな姉さんに元気良く返事をするＦクラスの面々。

・・・・・本当にこういう時だけは無駄にまとまりがいいですね。

「さて、それでは明日から始まる『学力強化合宿』についてだが、詳しい事は今配っているしおりに書いてあるので各自しっかりと目を通しておくように」

西村先生がさらに話を進めてますが、僕は隣の瑞希と小声で話をします。

「（鏡護君。黎夜さんの事、知ってたんですか？）」

「（いいや。ちょうど今朝姉さんにその話をしたら答えをはぐらかされたんだ。で、今こうなってる事に驚いてる）」

「（そうだったんですか……。私もびっくりしましたよ）」

「（後で優子にも教えに行った方がいいね）」

「（そうですね）」

そうしていると僕のところにもしおりが回ってきたので、自分と瑞希の分を取って残りを後ろに回しました。

「それから、集合時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」

「後で忘れないように、今すぐ確認した方がいいよ」

確かに、姉さんの言う通りです。

そう思いながら、パラパラとしおりをめくって時間と場所を確認します。今回僕達が向かうのは卯月高原という避暑地で、ここからだと車で大体４時間、電車とバスを乗り継ぐと大体５時間といったところです。

「いいか。他のクラスと違って我がＦクラスは――現地集合だからな」

『『案内すらないのかよっ！？』』

あまりにもあんまりな扱いに全級友が涙しました。

第２０問　『始まりは突然に！世間は広いようでやっぱり狭い』（後書き）

あとがき

作者　「原作第3巻、突入～！」

鏡護　「今度は『学力強化合宿』が舞台になるんだね？」

作者　「そうだな。あ、今回はスペシャルゲストがいたんだった。どうぞ～！」

鏡護　「え？一体誰が――」

黎夜　「よろしくお願いします」

鏡護　「――って姉さんだったんだ……」

黎夜　「キョウ君？どうしてそんな嫌そうな顔をするの？」

鏡護　「あ、ごめんなさい。何でもありません」

作者　「弱いな、主人公」

鏡護　「うるさい」

作者　「さて、折角来ていただいたので質問してもいいですか？」

黎夜　「はい。どうぞ」

作者　「それでは早速……スリーサイ――」

――ドゴン！（近くの壁に黎夜の拳が突き刺さった音）

黎夜　「ごめんなさい。手が滑っちゃったわ♪」

作者　「……失礼しました。今のは忘れてください」

黎夜　「あら、そう？」

作者　「気を取り直して……鏡護の副担任となった、その抱負などを」

黎夜　「う～ん。抱負ねぇ……とりあえず鏡護はイジり倒したいわ♪」

鏡護　「止めて姉さん！学校に来てまでそんな事はしないで！」

黎夜　「冗談よ、鏡護。本当は弟とその恋人達を近くで見守る事、かな」

作者　「さすがは3人のお姉さんですね」

鏡護　「姉さん……僕達の事をそんなに思ってくれてたんだ……」

黎夜　「あ、でもやっぱりそれだけじゃつまらないから、鏡護の事はイジるわよ♪」

鏡護　「姉さんっ！？」

作者　「お約束ですね。ありがとうございました。それでは次回予告！

次回、第２１問『合宿スタート！移動と脅迫と冤罪と（仮）』

を、」

３人　「お楽しみに～！」

第２１問　『合宿スタート！移動と脅迫と冤罪（？）と』（前書き）

強化合宿の日誌

強化合宿１日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌
『バスが止まり合宿所に降り立つと、不意にめまいのような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵な事が起きる様な、そんな予感がしました』
教師のコメント
環境が変わる事でと良い刺激を得られたようですね。姫路さんに高校２年生という今この時にしか作ることのできない思い出がたくさんできる事を願っています。

天水鏡護の日誌
『朝、優子を学校まで送っていったら、何故か瑞希と一緒にＡクラスのバスに乗せられる事になっていました。道中はＡクラスの人達とお喋りをして楽しく過ごしました。合宿所は緑豊かな環境で空気が美味しく、普段の喧騒を忘れて勉学に集中できる気がしました』
教師のコメント
何やらトラブルはあったようですが、有意義な時間を過ごせたようですね。勉強の方もしっかり頑張ってください。

土屋康太の日誌
『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈の様な感覚が訪れた。あの感覚はなんだったのだろうか』
教師のコメント
乗り物酔いです。

坂本雄二の日誌

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘い様な、仄かに酸っぱい様な、不思議な何かの香りがした。これがこの町の持つ匂いなんだなと、感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければ、もっと違った香りがしたかもしれませんね。

第２１問　『合宿スタート！移動と脅迫と冤罪（？）と』

―Ｓｉｄｅ　優子

Ｐｒｒｒｒ　Ｐｒｒｒｒ

『はい、瑞希です。どうしました優子ちゃん？』

「ごめんね、こんな時間に。明日の事でちょっと話があってね」

『明日、ですか？』

「そう。明日なんだけど――」

アタシはかねてより考えていた計画を瑞希に話して聞かせた。

『……いいんでしょうか？』

「大丈夫よ。先生には許可を取ってあるわ」

『そうなんですか。だったら、よろしくお願いします』

「よかった。じゃあ後は鏡護の方だけど――」

その後も３０分くらい明日の話をして、通話を切った。

「さて、そうと決まれば早く寝ないとね」
そうしてアタシの意識は眠りに落ちていった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

姉さんが文月学園に着任した翌日。今日から僕達2年生は『学力強化合宿』に出掛けます。
「え？それじゃ、姉さんも来るの？」
「当然でしょ？私も２－Ｆの副担任なんだから」
どうやら姉さんも僕達について来るようです。
「キョウ君は姉さんが一緒だとイヤなのかな～？」
「そ、そんな事ないよ！」
姉さんに攻撃色がチラつき始めたので、慌てて否定します。
「ほんとに～？」

「ほんとだよ」

「うん。ならよろしい♪」

セーフ、です。

「そういえば、姉さんはどうやって合宿所に行くの？」

僕達Ｆクラスは現地集合という事になっています。

「ん？なんかね、Ａクラスのバスに一緒に乗せてくれるんだって」

・・・・・何なんでしょう。同じＦクラスなのに、教師と生徒というだけでこの扱いの差は。

「へぇ～」

若干恨みのこもった目で姉さんを見つめます。

「それより、優子ちゃんを送っていくんでしょ？そろそろ来るんじゃないの？」

姉さんの言葉に時計を確認すると、確かにもうそんな時間でした。

「ほんとだ。じゃあ先に出るね」

「は～い。またあとでね～」

そうして今日も瑞希、優子と一緒に学校へ行きました。今日は優子を送る事が目的だったのですが・・・・・

「……どうして僕と瑞希までAクラスのバスに乗せられてるんだ！？」

学校まで優子を送った僕と瑞希は、何故か今現在Aクラスのバスに便乗しています。

「まったく、いつまでも気にしてるんじゃないわよ」

向かいに座っている優子がそう言います。

「というか、どうして瑞希はそんなに落ち着いてるの！？」

同じく僕の向かい、優子の隣に座る瑞希に問い掛けます。

「あ、私は昨晩のうちに優子ちゃんから連絡をもらってたので……」

「優子！？どうして僕には教えてくれなかったのさ！？」

「だってサプライズの方が面白いでしょ？」

楽しそうな笑みを浮かべて、優子が答えました。

・・・・・幻覚でしょうか？一瞬、優子に姉さんの姿がダブって見えたような気が。

「まあまあ。おかげでこんな豪華なバスに乗れたんだし」

「工藤さん……」

通路を挟んで反対側の席から、工藤さんが話に入ってきました。

「……私も天水と話をしたかった」

「霧島さんまで……」

工藤さんと同席の霧島さんまでそんな事を言ってきます。

「キョウ君モテモテだね～」

さらには姉さんまで・・・・・って、

「さり気なく姉さんもいる！？」

「あれ？今朝言ったじゃない。Ａクラスのバスに乗るって」

「ハッ！？そういえば……」

うっかり忘れていました。

「ところで、随分『女の子のお友達』が多いのね？」

含みのある姉さんの言葉。・・・・・これはもしや！？

「いや、ちょっと待って姉さん。それは誤解だよ！工藤さんはわからないけど、霧島さんにはちゃんと彼氏がいるし！それに僕が好きなのは瑞希と優子だけ……って、あれ？」

「んふふ～。お姉さん別に何も言ってないのに、キョウ君ったら何を焦ってるのかな～？」

姉さんと周りの皆が笑っている（若干2名は顔が赤い）のに気付きました。

・・・・・しまった！ハメられたっ！

しかし気付いた頃には時既に遅し。

「いや～。天水君がここまで取り乱すところって新鮮だね～」

「……うん。珍しい」

「もうっ！こんな時にまで何言ってるのよ／／／／」

「あうぅ……恥ずかしいです／／／／」

「あらら、照れちゃって。優子ちゃんも瑞希ちゃんもカワイイ～！」

その後も皆に散々オモチャにされて、合宿所に着いた頃には精神的に疲れきっていました。

＊　＊　＊

電車でやってきた明久達と合流して部屋に入った僕は、ただいま絶賛くつろぎ中です。

「それにしても贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

「ってことは、ここでも召喚獣は喚べるようになってるの？」

「そのようじゃな」

「でも普段の環境から比べたら、ほんとに快適だよね」

「違いない」

皆で頷き合います。８人くらいは寝られそうな広い部屋に、今は僕、明久、雄二、秀吉の４人しかいません。ここに康太を加えた５人がこの部屋の住人です。

・・・・・まぁ、Ｆクラスの問題児を１部屋に詰め込んで管理し易いように、という教師側の魂胆が透けて見えますが。

――ガチャ！

「……ただいま」

と、到着してすぐにどこかへ行っていた康太が戻ってきました。

「おかえり康太。どこ行ってたのさ？」

「……情報収集」

「あっ、『例の件』はどう？」

「おう。どうだったムッツリーニ？」

明久と雄二が康太に何かを聞いています。『例の件』？何のことでしょう？

「ねぇ、２人とも何かあったの？」

気になったので、直接本人達に聞いてみる事にしました。

「ん？そういえば鏡護は知らないんだったな。実は……」

「そういえばそっか。僕も実は……」

２人がそれぞれ抱えている事情を話してくれました。ふむふむ。つまり要約すると・・・・・

「雄二は霧島さんとの結婚がカウントダウンに入ってて、明久はＷＥＢでネットアイドルとして全世界的に売り出されそうだ、と」

「イマイチ納得のいかない理解のされ方だが、そういう事だ」

「なんか明確に未来を予想されただけにダメージが大きいけど、そういう事だよ」

２人とも嫌そうな顔をしています。

「……で、康太はその犯人を捜しているんだね？」

「……（コクコク）」

「それでどうだった!?」

明久が康太に詰め寄ります。

「……昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた。2人の件は同一犯の犯行と見て間違いなさそう」

「流石だな。それで、犯人はわかったか?」

「……（フルフル）」

雄二が尋ねると、康太は申し訳なさそうに首を振りました。

「……すまない」

「気にするな。協力してくれるだけでも感謝している」

「……『犯人は女生徒で、お尻に火傷の痕がある』という事しかわからなかった」

「「君は一体何を調べたんだ」」

思わず、明久とツッコミが被りました。

「……校内に網を張った」

「網?盗聴器でも仕掛けたのか?」

「……（コク）」

それから康太が小型録音機を取り出し、スイッチを入れると中に収められた会話が流れ始める。

〈……らっしゃい〉

〈雄二のプロポーズを、もう1つお願い〉

〈毎度。二度目だから安くするよ〉

〈……値段はどうでも良いから、早く〉

〈流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃ明日……と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で〉

〈……わかった。我慢する〉

「この独特の話し方、片方は間違いなく霧島さんだね」

「しょ、翔子……！まさか既に動いていたとは……！」

「よっぽど早く欲しいんだね」

「しかし強化合宿があって助かった……」

「でも、それもタイムリミットが伸びたってだけだよ」

「……それで、こっちが犯人特定のヒント」

康太が機械を操作すると、先程とは別の会話が。

〈相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら、酷い目に遭うんじゃないですか？〉

〈ここだけの話、前に一度母親にバレてね〉

〈大丈夫だったんですか？〉

〈文字通り尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか〉

〈それはまた……〉

〈おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対してひどいと思わないかい？〉

「なるほどね。それでお尻に火傷の痕か」

「……わかったのはこれだけ」

確かに、これで犯人を特定する事はできる。でも・・・・・

「これ、もし確かめようとしたら間違いなく犯罪だよね」

「だよね。スカートを捲って回ったとしても、わからない可能性が

あるし」

「赤外線カメラでも、火傷の痕なんて映らないだろうしなぁ……」

「まったく……。事情を知っておっても、とんでもない会話じゃのう」

本当です。

「そうだっ！もうすぐお風呂の時間だし、秀吉に見てきてもらえばいいんだ！」

・・・・・明久？君は何を口走っているんですか？

「明久！？何故ワシが女子風呂に入る事を前提に話しておるのじゃ！？」

秀吉も突然の明久の妄言に戸惑っています。

「それは無理だ、明久」

雄二が冷静にツッコみます。

同時に合宿のしおりを放って寄越しましたが、どうしたのでしょう。

「３ページ目を見てみろ」

「？どういうこと？」

僕も明久と一緒に指示されたページを見てみます。そこには――

～合宿所での入浴について～

・男子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（女）

・Ｆクラス木下秀吉…２０：００～２１：００　個室風呂？

「……くそっ！これじゃ秀吉に見てきてもらうことができない！」

「そういうことだ」

「どうしてワシだけ個室風呂なんじゃ！？」

衝撃の事実に、秀吉が固まっています。まぁ無理もありません。

と、全員で途方に暮れていた時の事でした。

――ドバンっ！

「全員手を頭の後ろに組んでその場に伏せなさい！」

もの凄い勢いで僕達の部屋の扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと入って来ました。

「な、何事じゃ！？」

「木下はこっちへ！そっちのバカ3人は抵抗を止めなさい！」

先頭を切って入ってきた島田さんが、咄嗟に窓から脱出しようとした明久達の機先を制しました。

「どうして3人とも咄嗟の行動でそれだけの準備をして窓に向かえるんだ……？」

窓に向かった明久達は、皆一様に脇に貴重品類を抱えていました。

「まったく、こういう時のお主らの行動力は相変わらずじゃのう……」

秀吉も呆れています。

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

逃げるのを諦めたのか、雄二が窓を閉めて女子達の方へ向き直ります。

「よくもまぁ、そんなシラが切れるものね。貴方達が犯人だって事くらい、すぐわかるというのに」

そう言って島田さんの後ろから姿を現したのは、Cクラス代表の小山さんでした。

「犯人？犯人って何の事だ？」

まったく身に覚えがないので、とりあえず聞いてみます。

「コレの事よ」

今度はEクラス代表の中林さんが出てきて、僕達に何かを突きつけました。この人、召喚大会以来僕を目の敵にしてるから苦手なんですよね・・・・・

「……CCDカメラと小型集音マイク」

その手の物には詳しい康太が、その正体を教えてくれました。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

「え!?それって盗撮じゃないか!一体誰がそんな事を!」

「とぼけないで。貴方達以外に誰がこんな事をするっていうの?」

「ちょっと待って!疑われるのは仕方ないけど、確かな証拠もないのに断定される謂れは無いはずだよ!」

「そうじゃ!お主ら、少しはこちらの話を聞いてからでもよかろう?」

「言い訳なんて、聞く耳持たないわ!」

ダメです・・・・向こうにはもう何を言っても無駄みたいです・・・・

そういえば、雄二達は――

『……雄二、浮気は許さない』

『翔子、待て！落ち着ぎゃぁぁあああっ！』

『さて、真実を認めるまでたっぷりと可愛がってあげるからね？』

『あのね。僕、今まで美波ほどの巨乳を見たことがぎゃぁあああっ！』

『まずは1枚目ね』

『覚悟はできてる、土屋君？』

『……（フルフル）』

『そう……でもね、問答無用よっ！』

『……！（ジタバタ！）』

既に僕以外の3人に対しては、それぞれ私刑が執行されていました。

「「鏡護（君）」」

僕のところにも、優子と瑞希がやってきました。

「えぇっと……優子サンに瑞希サン？どうして2人して僕の腕を掴

んでるんデスカ？」

「詳しい話は後で聞いてあげるから」

「これはケジメですよ」

２人とも、笑顔が怖いです・・・・・

「あっ！優子、ちょっと待ぎゃぁぁあああっ！み、瑞希も止めぐぁぁあああっ！……」

２人掛りで両肩の関節を外され、僕は痛みで意識が遠くなっていくのを感じました・・・・・

――ゴキンっ

「ぐぉあああっ！？」

突然襲ってきた激痛に、僕の意識は一気に覚醒しました。
目を覚ました僕が周囲を確認すると、どうやらここは旅館のロビーのようです。

「あ、目を覚ましたわね」

「よ、よかったです……」

声のした方を向くと、そこには優子と瑞希がいました。

「あれ？どうして僕はここに？それに２人も……」

一瞬状況がわからず、首を傾げかけて――

「あーっ！お、思い出した！２人ともいきなり肩の関節を外すとか、なんて事をしてくれたのさ！？」

僕達の部屋で起きた先程の騒ぎを思い出しました。

「いいじゃない。ちゃんと元通りハメ直してあげたんだから」

「そういう問題じゃないよ！っていうか起きた時の激痛はそのせいだね！？」

悪びれる様子の無い優子にツッコミを入れる僕。

「さて、それじゃあ事情を聞かせてもらおうかしら」

「しかもスルー！？」

「鏡護君、お願いします」

瑞希．．．．君もですか？

「……わかった。事情っていうのはさっきの騒ぎの事だよね？」

「「ええ（はい）」」

「疑われるのも仕方ないけど、あれは本当に僕達の仕業じゃないよ。」

「そう」

「よかったです」

2人して安堵の表情を浮かべます。・・・・・というか、いやにあっさり納得しましたね。

「それよりも僕は2人に疑われた事の方がショックだったよ」

「私達は別に鏡護の事は最初から疑ってなかったわよ?ねぇ、瑞希?」

「はい。私達は鏡護君の事を信じていましたよ?」

「へっ?ならどうしてあんな事を?」

「あれはケジメよ」

「はい。ケジメです」

「それって誰に対するケジメ?」

「もちろん、あの場にいた他の女子生徒達に対してよ」

「あの場で疑われていたのは、鏡護君も含めた4人です。それなのに鏡護君だけ無罪放免されたら、納得しない子もいたと思いますか

ら……」

「ああ。なるほどね」

確かに、そういう事ならあの仕打ちも納得するしかありません。僕に余計な敵意が向けられないように、2人が考えて行動してくれた結果なのですから。・・・・・できればもう少し穏便な罰にしてくれると、なおよかったのですが。

「そういう事なら、お礼を言わなくちゃね。優子、瑞希、ありがとう」

「「どういたしまして」」

これにて一件落着、ですね。

ついでに騒ぎの前に僕達が話していた件について、2人の協力を仰げないかと思った僕は話をしてみました。

「――っとまぁそんな感じなんだけど」

「……ふ～ん。『お尻に火傷の痕がある女子』、ねぇ……」

「うん。犯人が見つからないと、雄二と明久がピンチなんだ。探すのを手伝ってくれないかな？」

「私は構いませんよ。そういう事でしたら、美波ちゃんにも頼んでみます」

「そうね。アタシも協力するわ」

「ありがとう」

これでもう犯人は捕まったも同然でしょう。僕がホッと胸を撫で下ろしていると――

『君たち、止まりなさい！』

『雄二、どうする！？布施先生だよ！』

『構わん！明久、ブチのめせ！』

『そこは構いなさい坂本君！私は一応教師ですよ！？』

『了解！一撃でケリをつける！』

『吉井君も了解じゃないでしょう！？』

・・・・・まさか、ね。

何やら聞き覚えのある声が聞こえた気がしました。しかも女子風呂に続く階段の方から。

その後しばらく地下が騒がしかったのですが、突然静かになりました。

それから5分くらい経った頃でしょうか。地下から明久、雄二、康太、秀吉を担いだ西村先生他、数名の教師が姿を現しました。

「西村先生！何があったんですか？」

とりあえず、西村先生に聞いてみる事にしました。

「何だ天水。お前の姿が見えないと思ったらここにいたのか。……お前も共犯か？」

「共犯？何のことですか？」

聞かれた事の意味がわからなかったので、問い返します。

「……本当に関係ないようだな。疑ってすまなかった」

じっと僕の目を見てきた西村先生は、一言僕に謝罪すると簡潔に何があったのかを教えてくれました。

「コイツらが女子風呂の覗きをしようとしたんだ」

・・・・・ああ、やっぱり。

「鏡護！今までどこにいたのさ！？」

先生に担がれた状態のまま、明久が僕に聞いてきました。

「優子と瑞希に拉致られて、ついさっきまで両腕を外された状態でロビーに寝かされてた」

「……ごめん。鏡護も苦労してたんだね……」

・・・・・明久達こそ、これからが地獄なのでは？

「お前らにはこれから『いつものヤツ』をやってもらうからな。天水、お前は早く自分の部屋に戻れ。そっちにいる木下と姫路もだぞ」

『いつものヤツ』：英語の反省文。文法や単語を間違えたら何度でもやり直しという、割と過酷な罰。

「わかりました。失礼します」

「「はい」」

そうして４人を指導室へと連れて行く西村先生を３人で見送りました。

「……まさか本当に明久達が覗き騒動を起こすとは思わなかったな」

「どうするのよ？これでもう言い逃れはできなくなったわよ？」

「そうですよ！またきっと大変な騒ぎになりますよ？」

「ハァ……。ほんと、少しはストッパーになる人の事を考えてほしいよ……」

何かを始めた彼らを止めるのは正直至難の業です。

「僕はとりあえず明久達の説得をしてみるよ。２人はとにかく早く犯人を見つけて欲しい。余計な騒動が起きる前に、ね」

「「わかったわ（りました）」」

「うん、よろしく。それじゃ、今日はもう部屋に帰ろう。お休み、優子、瑞希」

「ええ。お休み、鏡護」

「はい。鏡護君、お休みなさい」

こうして、強化合宿１日目の夜は更けていきました。

第２１問　『合宿スタート！移動と脅迫と冤罪（？）と』（後書き）

あとがき

鏡護　「うぅ……。２人から私刑を執行された……」

作者　「えー、例の如く主人公がネガティブモードなので、さくっと終わりたいと思います」

作者　「と、いう訳で次回予告！

次回、第２２問『そして若人は夢に生きる（仮）』

を、乞うご期待ください！」

第２２問　『“男”とは、夢に生き夢に散る者達の事を言う……のか？』（前書き）

強化合宿の日誌

強化合宿２日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌
『今日は少し苦手な物理を重点的に勉強しました。いつもと違ってＡクラスの人たちと交流しながら勉強もできたし、とても有意義な時間を過ごせました』
教師のコメント
Ａクラスと一緒に勉強する事で姫路さんに得られるものがあったようで何よりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくと良いでしょう。

天水鏡護の日誌
『今日は瑞希と優子の２人と一緒にお互いの苦手教科を勉強しました。得意教科は人に教える事で理解度の確認ができ、苦手教科は考え方のポイントを教わる事で理解を深めることができました』
教師のコメント
中身の濃い学習をする事ができたようですね。次の期末試験の３人の成績には期待ができそうです。

土屋康太の日誌
『前略。夜になって寝た』
教師のコメント
前略はそうやって使うものではありません。

吉井明久の日誌

『全略』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

第２２問　『“男”とは、夢に生き夢に散る者達の事を言う……のか？』

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子。当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

合宿２日目。今日のＦクラスの予定はＡクラスの合同学習となっています。と言っても学習内容は自由なので、実質自習のようなものですが。

「坂本君も素直じゃないわね」

「まぁいいんじゃない？あれが雄二なりの愛情表現なんだよ、きっと」

「そうですね。坂本君は翔子ちゃん関係では不器用な人ですから」

僕はというと、優子と瑞希と一緒に勉強しています。
今日はお互いの苦手教科を勉強しようという事になって、僕が数学を瑞希に、優子が現国を僕に、瑞希が物理を優子に、それぞれ教わっています。

「瑞希。この問題ってこの公式でいいの？」

「どれですか？……ああ。これはこっちの公式だともっと簡単になりますよ」

「おおっ！なるほどね」

「鏡護。ここの傍線部の解釈は？」

「ん？……えっと、ここは傍線部の前の内容を受けてるから――」

「そっか。そう考えればいいのね」

「優子ちゃん。この問題なんですけど……」

「どれどれ？……ああ。これならこういう考え方もできるわよ」

「あ！確かにそうですね」

とまぁ、そんな感じで勉強していました。

―Ｓｉｄｅ　明久

「そういえば、どうして自習なんだろう？授業はやらないのかな？」

１人で勉強していた僕は、ふとそんな事が気になった。

わざわざこんなところまで来て自習なんてもったいない気がしなくもない。僕としては助かってるけど。

「授業？そんなもんやるわけないだろ」

そんな僕の独り言を聞きつけて、雄二が霧島さんを置いて僕の隣へやってきた。

膝の上に座ろうとする霧島さんと座らせまいと押しのける雄二の攻防は、傍から見ている分には面白かっただけに残念だ。

「やらない？どうして？」

「なら聞くが、お前はＡクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるか？」

「失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはＦクラスもＡクラスも大差ないよ」

どちらも理解できないからね。

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

雄二を追いかけて霧島さんも僕のテーブルにやってきた。ポジションはもちろん雄二の隣だ。流石に膝の上は諦めたみたい。

「翔子、それだけじゃ明久にはわからんだろ。つまりだな、ＡクラスはＦクラスを見て『ああはなるまい』と、ＦクラスはＡクラスを見て『ああなりたい』と考える。そういったメンタル面の強化が目的だから、わざわざ授業をする必要はないって事だ」

霧島さんの言葉を雄二が補足する。やっぱりこの２人は息も合っているし、（外見を除けば）お似合いだと思う。

邪魔をするのも悪いから席を移動しようかな、なんて考えていたら、

「あれっ？代表ここにいたんだ。それならボクもここでやろうかな」

そこに聞き慣れない声が聞こえてきた。いそいそと僕の正面に勉強道具を広げている彼女は、確か・・・・・

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？久しぶり」

ニッと歯を見せて笑う工藤さん。ボーイッシュな雰囲気と相まって、その仕草はとても爽やかに見えた。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

なんだ！？今、最後の方にとても魅力的な単語が混じっていたぞ！？

「ん？どうしたの吉井君？」

「いや、工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その……」

それは特技と言っていいのだろうか？

「あ、さては疑ってるね？それなら、ここで実際に披露してみせようか？」

工藤さんがそう言って短いスカートの裾を摘んでいる。隣を見ると、

何故か雄二が目を押さえてのたうち回っていた。霧島さんが指をチョキにして「……浮気はダメ」と呟いているのは関係ないと思いたい。

「……明久。工藤愛子に騙されるな……！」

「あれっ？珍しく冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしてるんだから、ムッツリーニならとっくに鼻血の海に沈んでると思ったのに」

いつの間にか隣に来ていたムッツリーニが冷静に工藤さんの言葉を受け流している。カメラの準備はしなくていいのかな？

「……ヤツは、スパッツを穿いている……！」

「そ、そんな！？工藤さん、僕を騙したね！？」

畜生やられた！さっきの僕の胸の高鳴りを返して欲しい！それと隣で「俺は目を突かれ損じゃないか……」と落胆している雄二に謝って欲しい！

「あはは。バレちゃった。流石はムッツリーニ君だね。まぁ、特技ってわけじゃないけど、最近凝ってるのはコレかな？」

笑いながら彼女が取り出したのは小さな機械だった。なんだろコレ？

「……小型録音機」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば……」

そう言って機械をカチカチと操作する工藤さん。しばらくすると、

内蔵されているスピーカーから音声が聞こえてきた。

――ピッ　〈工藤さん〉〈僕〉〈こんなにドキドキしてるんだ〉〈やらない？〉

「わあああああっ！？僕はこんな事言ってないよ！？変なものを再生しないでよ！」

「ねっ？面白いでしょ？」

悪戯っぽい笑みを浮かべる工藤さんの視線は、何故か僕の背後に向いていた。・・・・・何だろう。僕の中の危険感知センサーがガンガン鳴ってる気がするんだけど。

「……ええ。最っっ高に面白いわ」

振り向くと、そこには極寒の微笑を浮かべた美波の姿が。

「これはまたアレを使う必要があるかしらね」

美波は勉強道具を机に置くと、そのまま教室を出て行ってしまった。その背中を見送っていると、入れ替わりで秀吉が入ってきた。何故か首を傾げながら。

「秀吉、どうしたの？」

「いや。先程、島田に石畳を運ぶのを手伝ってくれと言われたのじゃが、何かあったのかと思っての」

それを聞いた瞬間、僕の全身から冷や汗が噴き出してきた。

「工藤。今のは録音した音声を合成したのか？」

「うん。そうだよ」

そんな僕を気にした様子もなく、隣では雄二が真剣な表情で工藤さんに詰め寄っていた。

・・・・・これはきっと何かあるな。

そう思った僕は周りに聞かれないように、雄二に小声で話しかけてみた。

「（雄二、どうしたの？）」

「（今の手際を見ただろう。もしかすると、工藤が例の犯人かもしれないと思ってな）」

ジッと工藤さんが手にしている小型録音機を見つめる雄二。確かにさっきの行動を見る限り、彼女はこういった事に慣れているようだ。有力な犯人候補と言えるだろう。

「（よし、明久。ヤツが犯人かどうか確かめてみてくれ）」

「（うん。了解）」

工藤さんを正面に見据えて、

「工藤さん。キミが……」

と、途中まで口にしてふと思う。『キミが脅迫状を出した犯人なの？』なんて聞いて、バカ正直に答えてくれる人がいるだろうか？本当に工藤さんが犯人なら、逆に警戒されてしまうだけだ。それでは意味がない。

危ない危ない。ここは質問の仕方を変えないと。

「ん？なに、吉井君？」

「あ～、えっと、その、キミが――」

頭を使え吉井明久！相手に気取らせずに犯人を特定できる質問を考えるんだ！確か、犯人の特徴はお尻にある火傷の痕だから――そうだっ！

「ボクが？」

「キミが――僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！」

や、やってもうたぁぁ！

「……ぷっ。あはは。吉井君はお尻が好きなの？それともボクの胸が小さいから気を使ってくれたのかな？」

突然のセクハラ発言を笑って流してくれる工藤さん。器の大きい人だ。

「ご、誤解だよ！僕は別にお尻が好きって訳じゃなくて！」

「流石だな明久。録音機を目の前に、まさかそこまで言うとは」

「へ？」

雄二は何を言ってるんだろう。

「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

ピ、と電子音を上げて再生される僕の声。

〈僕にお尻を見せてくれると嬉しいっ！〉

「ひあぁぁっ！？これは合成すらしてない分ダメージが大きいよ！？お願い工藤さん！今のは消してください！」

「吉井君ってからかい甲斐があって面白いね。ついつい苛めたくなっちゃうよ」

――ピッ　〈お願い工藤さん！〉〈僕にお尻を見せて〉

「うあぁぁん！？僕がどんどん変態になってる気がするよ！」

直後、背後から殺気が凄まじい勢いで膨れ上がるのを感じた。

「……一体、今のは何かしらね？」

表情を変えず、僕の背後に石畳を積んでいく美波。

「まさか、ただでさえ問題クラスとして注意されているのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら？」

マズい！早く誤解を解かないと僕の命が危ない！

「美波！これは誤解なんだ！僕は問題を起こす気はなくて、ただ純粋に〈お尻が好きって〉だけなんだ――待って！今のは途中で音声を重ねられたんだ！お願いだから僕を後ろ手に縛らないで！あと、そっちの皆も笑ってないで助けてよ！特に雄二！」

既に僕の腕は関節を極められつつ背中に回されている。

「……工藤愛子、おふざけが過ぎる」

そんな僕のピンチを見て立ち上がってくれたのは、ムッツリーニだった。流石は友達だね！

「ムッツリーニ！助けてくれるの！？」

「……上手くやってみせる」

そう言うと、ムッツリーニは工藤さんと同じように小型録音機を構えた。そうか！それで工藤さんの音に別の音を重ねて打ち消してくれるんだね！よし。ここはムッツリーニを信じて、僕は僕のやるべきことをやろう！

「美波。落ち着いて聞いて欲しい。さっきのは誤解で、僕は〈お尻が好きって〉言いたかったんだ。〈特に雄二〉〈の〉〈が好き〉ってムッツリーニィィーッ！後半はキサマの仕業だな！？上手くやるって、工藤さんよりも上手に僕を追い込むって事なの！？」

「……工藤愛子。お前はまだまだ甘い」

「くっ！流石はムッツリーニ君……！」

2人はライバルのように睨みあっている。そういう事はできれば直接やり合って欲しい。

「……吉井。雄二は渡さない」

雄二と聞いて、霧島さんが反応している。安心してください。僕も要りません。

「アキ……。そんなに坂本のお尻がいいの……？ウチじゃダメなの……？」

「ちょっと待って美波！どうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの！？僕にそんな趣味は――」

ない、と言い切ろうとしたところで突然学習室のドアが開き、見覚えのある女子がつかつかと室内に入ってきた。そして僕らを険しい目つきで睥睨し、声高に告げる。

「同性愛を馬鹿にしないでください！」

ああ・・・・・また変な人が増えたよ・・・・・・。

「み、美春？どうしてここに？」

「お姉さまっ！美春は愛しのお姉さまに逢いたくて、こっそりＤクラスを抜け出してきちゃいましたっ！」

見事な縦ロールのツインドリルをつけた女子が、美波の姿を認めるなり勢いよく飛びつく。熱烈抱擁の構えだ。

「天水バリアー！」

「うわぁっ！？」

美波はちょうど通りかかった鏡護を盾に使った。・・・・・ドンマイ、鏡護。

「け、汚らわしい？」

「な、何故に疑問形！？」

「お姉さま、酷いですっ！美春は――……しかしこの殿方、よく見ればどことなく女性っぽい顔立ちをしていますし意外と……」

「「それはダメぇぇえええっ！」」

鏡護（の貞操）の危機を察知したのか、姫路さんと木下さんが飛んで来た。

「清水さん！鏡護君から早く離れてくださいっ！」

「そうよっ！鏡護は私達の共有財産（モノ）なんだからね！」

・・・・・木下さん、その台詞はどうかと思うよ？

そういえば何か見覚えがあると思ってたら、この人はDクラスの清水美春さんだ！美波の事を『お姉さま』って呼んでたから、多分間

違いないだろう。

「美春！何度も言ってるけど、ウチにはそんな趣味はないんだからね！」

結局、この騒ぎは鉄人が怒鳴り込んでくるまで収まることがなかった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

騒がしかった勉強時間が終わって夕食も食べ終わった今、明久達は部屋で犯人捜しの作戦会議をしていました。

「僕は工藤さんが犯人だと思うんだけど……」

「その可能性は高いだろうな」

「ならば、工藤を一気に取り押さえるべきかのう？」

「……それは止めた方がいい」

「ああ。チャンスは１度きりなんだ。もし取り押さえて犯人じゃなかった場合、真犯人は警戒して証拠の隠滅を図るだろうからな」

「けど、あんなに怪しいのに手が出せないなんて……」

・・・・・何だか、割と物騒な話になってきていますね。

「あのさ。ちょっといいかな？」

「ん？なんだ鏡護」

「その件なんだけど、昨日僕から優子と瑞希に協力を依頼したから、覗きをするのは止めにしない？」

「なに？それは本当か？」

「うん」

「そうか……。それはありがたいが、やはり俺達自身で犯人を見つけたいんでな。悪いが今夜も突入を行う」

どうやら、そこを譲る気はないようです。

「そっか……それじゃ、僕は手伝えないけど頑張ってね」

「なんだ。鏡護は乗ってこないのか？」

「ごめん。優子と瑞希を裏切りたくないんだ」

「……わかった。そういう事なら仕方ないな」

雄二がわかってくれて助かりました。今回はあまり首を突っ込みた

くはありませんでしたからね。

「……って、勝手に決めちゃったけどいいの？僕達だけじゃ昨日の二の舞じゃない？」

「……（コクコク）」

「明久の言う通りじゃ。何か策でもあるのか？」

「ああ。そろそろ来る頃なんだが……」

「坂本。俺たちに話って何だ？」

雄二がそう言ったタイミングで、須川君を先頭にしたＦクラスの男子がぞろぞろと部屋に入ってきました。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

部屋に入りきらないで廊下にいるメンバーにも聞こえるように、よく通る声で雄二が告げます。

『提案？』

『今度は何だよ？正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に帰ってダラダラしてぇな～』

全員がダルそうにしています。１日中勉強漬けだったのですから、わからなくもありません。

そうやってざわつく皆を見ても雄二は焦る事なく、静かになるのを待ってから話を進めました。

「――皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『詳しく話を聞かせろ』』

流石Ｆクラス。相変わらず無駄な団結力です。

「昨夜俺達は女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも教師達による妨害を受けたんだ」

『『ふむ、それで？』』

・・・・・雄二の台詞に誰もツッコまない事に対してツッコミを入れたいです。

「そこで、皆には風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬はその後に得られる理想郷（アガルタ）の光景だ。どうだ？」

『『乗った！』』

・・・・・まぁ話の中身はともかく、これで仲間が増えたようですね。

ただし、これで上手くいくかどうかは全くの別問題ですが。

「ムッツリーニ、現在の時刻は？」

「……２０時１０分」

入浴時間は前半組が２０時００分からですから、きっと時間的にはちょうどいいところなんでしょうね。

「今から隊を４つに分けるぞ。Ａ班は俺に、Ｂ班は明久、Ｃ班は秀吉、Ｄ班はムッツリーニにそれぞれ従ってくれ」

『『了解っ！』』

「いいか、俺たちの目的はただ１つ！理想郷（アガルタ）への到達だ！途中に何があろうとも、己が神気を四肢に込め、目的地まで突き進め！神魔必滅・見敵必殺！ここが我らの行く末の分水嶺と思え！」

『『おおおおっっ！』』

「全員気合を入れろ！Ｆクラス、出陣（で）るぞ！」

『『おっしゃぁぁーっ！』』

「行ってらっしゃ～い……」

今、男達はその夢の為に自ら戦場へと足を踏み入れたのでした。

――ピンポンパンポーン

〈――緊急連絡です。Ｆクラス吉井明久君。至急臨時指導室に来る

ように〉

・・・・・予想通りでしたね。

第２２問　『“男”とは、夢に生き夢に散る者達の事を言う……のか？』（後書き）

あとがき

作者　「主人公に同性愛疑惑！？」

鏡護　「ちょっと待った！いきなり何て事を言いだすのさ！？」

作者　「だって年頃の男子が覗きに興味がないなんて、不能かソッチ以外ありえないだろ」

鏡護　「僕ちゃんと説明したよね！？」

作者　「ああ、『彼女を裏切りたくない』ってヤツ？」

鏡護　「そうだよ」

作者　「こんな時くらいそんな細かい事は気にするなよ」

――ドドドドドドドドッ！

優＆瑞　「「『そんな細かい事』じゃない（です）！」」

――ガシッ　ドカッ　バキッ　ドシャ

作者　「ぐふぉあっ！」

鏡護　「……2人とも、何してるの？」

優子　「ちょっとした制裁（おしおき）をね」

瑞希　「はい。おイタをした子にお説教をしただけです」

作者　「い、今のが『ちょっとした』なわけあるか畜生……ガクッ」

鏡護　「あ、作者さんが気絶した」

優子　「自業自得よ」

瑞希　「天罰が下ったんですよ」

鏡護　「……そうだね。それじゃ、次回予告をしようか」

優子　「ええ。それでは、次回」

瑞希　「第２３問『仲間を集めて敵を倒せ！……ってどこかのＲＰＧは言っていた（仮）』を」

鏡＆優＆瑞　「「「お楽しみに～！」」」

第２３問　『仲間を集めて敵を倒せ！……ってどこかのＲＰＧは言っていた』

強化合宿の日誌

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌
『前略（※坂本雄二に続く）』
教師のコメント
今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思い付くものです。

坂本雄二の日誌
『そして翔子が俺の前で浴衣の帯を緩めようとした。俺は慌ててその手を押さえつけ、思い止まるように説得した。ところが、隣では島田が明久に、姫路と木下優子が鏡護に迫っていて妙な雰囲気になっており（※天水鏡護に続く）』
教師のコメント
君達に一体何があったのですか？土屋君が略した部分がとても気になります。

天水鏡護の日誌
『目が覚めたら何故か霧島さんが雄二の前で浴衣を脱ぎかけていて、明久のところには島田さんが来ていました。まったく状況を把握できないでいると、僕にも声を掛けてくる誰かが。そちらを見ると、そこには浴衣姿の瑞希と優子がいました。２人と話をしていると、何故かおもむろに浴衣を脱ぎ始め（※吉井明久に続く）』
教師のコメント
そこで切らないで下さい。

吉井明久の日誌
『後略』
教師のコメント
ここでその引きはないでしょう。

第２３問　『仲間を集めて敵を倒せ！……ってどこかのＲＰＧは言っていた』

翌朝。

「う～んっ！……って、また他人の布団に勝手に入ってきてるよ」

目を覚ました僕の隣では、秀吉が眠っていました。

「お～い。秀吉、朝だよ」

「む、鏡護か。……すまぬ、どうやらまたやってしまったようじゃな」

「おはよう。……まぁ、そろそろ直した方がいいかもね」

「うむ、善処しよう。おはようじゃ、鏡護」

「ぐふぁっ！」

ん？何の音でしょう？

・・・・・雄二が何故か明久の布団から蹴り出されてますね。

「なんじゃ。雄二はまた自分の布団から離れたところで寝ておったのか」

「秀吉、またってどういうこと？」

明久が秀吉に詰め寄ってきます。・・・・・・秀吉、今の明久に余計な事は言わない方が良さそうですよ?

「いや、別に大した事ではないのじゃが……雄二は大層寝相が悪いようでのう。明け方にはワシの布団の中に入ってきておって――って、やめるのじゃ明久!花瓶を振りかざしてどうするつもりなのじゃ!」

ほら、言わんこっちゃないです。

「殴る!コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける!」

明久はちょっと落ち着きなさい。

――ガチャッ

「おいお前達!起床時間だ――ぞ……?」

「死ね雄二!死んで詫びるんだ!あるいは法廷に出頭するんだ!」

「何だ!?朝からいきなり明久がキまっているぞ!?持病か!?」

「あ、西村先生!ちょうどいいところに!」

「済まぬが、こやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい!」

「……(コクコク)」

「……お前達は朝から何をやっているんだ」

＊　　＊　　＊

「それで、何か進展はあったの？」

朝食の席で、雄二に聞いてみました。

「いや。特には」

「あっ！そういえば昨日、工藤さんに『脱衣所にまだ見つかっていないカメラが1台残ってる』って言われたよ」

「何だと？」

明久の言葉に、雄二の箸の動きが止まりました。

「でも、怪しくない？そんな事を知ってるなんて」

「いや、そうとも限らんじゃろ。それならわざわざ怪しまれるような事を言うとは思えん」

「そうだね。でもそういう事なら、そのカメラさえ回収できれば犯人の特定は簡単にできるんじゃない？」

「……隠し場所なら5秒で見つける自信がある」

僕の言葉に康太が名乗り出ます。

「けど、本当にそんなカメラがあるかどうかも怪しいよ？」

「いや。最初に脱衣所でカメラが見つかった方がおかしいんだ。あんなに盗撮や盗聴に長けた犯人のカメラが簡単に素人に見つけられるはずがない。つまりこれは――」

「……二段構え」

「そうだね。となると、最初のはカムフラージュだったって事だ」

「用意周到じゃな」

犯人も馬鹿ではないという事ですね。結果として僕達に濡れ衣を着せる事に成功したのですから。

「けど、それならお風呂の時間を避けてカメラを取りに行けば解決だね」

「……それは無理」

「うん。時間外だと、確か脱衣所には厳重に鍵が掛けられてるはずだよ」

「そっか。て事は……」

「諦めて今まで通りの方法を貫けって事だ」

「そのようじゃな」

「そこでだ。明久、昨日の敗因は何だと思う？」

「え？う～ん、向こうが女子の半分を防衛に回してきた事かな」

・・・・・昨日はそんな事になっていたんですね。

「……敵の中には、工藤愛子もいた」

康太が悔しそうに呟きます。余程邪魔をされたのが腹に据えかねたのでしょう。

「そうだ。昨日の敗因はＡクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていた事だ」

なるほど。Ａクラスの人達まで防衛に加わっていては、Ｆクラスの戦力だけでの突破は無理です。

「そこで、こちらも戦力の増強を図ろうと思う。Ａクラスをはじめ、他のクラスの男子を味方につけて対抗するんだ」

「う～ん。何かその作戦っていつもの雄二らしくない気がするんだけど……」

おや。明久がそこに気付くとは、成長しましたね。雄二も感心したように頷いています。

「ほぅ……。明久もだいぶ頭が回るようになってきたな。その通りだ。この作戦の目的は、正面突破だけじゃない」

「へぇ。それで、他の目的って？」

「これは僕の予想だけど、自分達の保身じゃないかな？」

「鏡護、正解だ。いいか。今のところは未遂で終わっているから大した問題にはなっていないが、覗きは立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に至ったとしても、例の真犯人が見つからない限り俺達は処分を受ける事になる。それを回避する為の秘策がメンバーの増員だ」

やはりそうでしたか。人数を増やすことで相手の特定を難しくするのが狙いでしょう。

「なるほどのう。じゃがワシらは既に面が割れておるぞ。それはどうするつもりじゃ？」

「そこは文月学園の弱点を逆に利用させてもらう」

文月学園は世界中から注目されている試験校です。
それゆえ、今回のような不祥事があった場合はひた隠しにするかキッチリ関係者全員を処分するかのどちらかしか選べません。
もし仮に中途半端に一部だけを罰する事があれば、ただでさえ叩かれている『クラス間の扱いの差』についてマイナス要因を増やすだけですからね。

「流石は雄二。汚い事を考えさせたら右に出る人はいないね」

「知略に富んでいると言え」

明久の言う通りですね。さしずめ、《奸智の申し子》といったところでしょうか。

「ふむ。ならば今日は協力者の確保を主軸に行動するのじゃな？」

「ああ。幸い合同授業の上にほとんど自習みたいなものだからな。動きは取り易いはずだ」

「そうだね。まずはどこから行く？」

戦力的にはA～Cクラスは仲間にしたいですよね。

「もちろんAクラスだ。同じ手間なら、能力が高い方がいいからな」

「Aクラスならば昨日の合同授業で交流もあるしのう。話もしやすいじゃろうて」

「決まりだな。合同授業の間にAクラスと話をするぞ」

「了解。ムッツリーニもそれでいいよね？」

「……問題ない」

「そっか。じゃあ、頑張ってね」

本当なら僕も協力したいところですが、残念ながら応援する事しかできません。

「ああ。今日こそ犯人をとっ捕まえてやるさ」

―Ｓｉｄｅ　明久

「Ａクラスなら久保を説得するのが妥当だな。という訳で明久、お前が行ってこい」

「うむ。明久ならば適任じゃな」

「……頼んだ」

合同授業の時間になって早々、久保君の説得を何故か満場一致で委任されてしまった。

「あ、うん。別にいいけど、どうして僕なの？」

特に断る理由もなかったので引き受けたけど、気になった事は聞いておこう。

「「「……」」」

・・・・どうして３人ともそんな気まずそうな顔をして目を背けるんだろう？

「あ、あのさ。何か凄く嫌な予感がしてきたんだけど、本当に大丈

夫だよね？」

「そ、そうじゃな。一応久保はお主に悪意を抱いてはおらんと断言できる」

「……彼に悪気はない」

「何で2人ともそんな奥歯に物が挟まったような言い方をするの？」

何だろう。だんだん行くのが怖くなってきた。

「明久、早く行ってこい」

「え？でも……」

「大丈夫だ。この中ではお前が一番久保に好かれている。自信を持て」

「あ、うん」

「……ただし、いざという時はコレを使え」

そう言って雄二は僕のポケットに何かを押し込んできた。それを横目で確認してみる。

スタンガン（２０万ボルト）

・・・・・どうして同じ学校の生徒に頼み事をしに行くだけでスタ

ンガンを持たされるんだろう。雄二の考えがさっぱりわからない。

「そ、それじゃ、行って来るね」

何か釈然としないものを感じながらも、僕は久保君のいるテーブルへと近づいていった。

流石に学年次席だけあって、久保君は参考書を片手に真面目に勉強していた。邪魔をするのは悪いかな、とも思ったけどこっちも事情が事情なので声を掛けることにした。

「あのさ、久保君。ちょっといいかな？」

「吉井君かい？君が僕に用なんて珍しいね。まぁ座りなよ」

そう言って久保君は椅子に空きスペースを作ってくれた。でも久保君、わざわざ1人用の椅子に2人で座る必要はないよね？

そう思った僕は、しかし口には出さずに久保君の向かいの席に座った。

「……やっぱり僕はダメなのか……」

・・・・・おかしい。何故だか急に寒気が・・・・・

「と、ところで、お願いがあるんだけど」

「引き受けよう」

「実は――って、早っ！」

まだ内容も話していないのに。

「いや、すまない。少し冷静さを失っていた。話を聞かせてくれるかな？」

「あ、うん。実はその……」

覗きの仲間になってくれ、なんて言いにくくて口ごもってしまう。

「遠慮なく言ってくれ」

そんな僕をフォローするかのように、久保君は真摯に接してくれた。こんなに優しい相手になら、ストレートにお願いしても大丈夫なはず！とにかく久保君を信じて頼んでみよう！

「その……女子風呂を覗くのを手伝って欲しいんだ！」

「断る」

・・・・・何だか裏切られた気分だ。

「吉井君、それは本気で言っているのかい？」

「う……。こ、これには色々とワケがあって……」

「見損なったよ吉井君。人の集まりにはルールがあり、それを守ることで社会が形成されている。だから、人として間違った事をしようとするキミは社会に不適合な人間と言える。もうすぐ社会に出ようというのにそれでいいのかい？そもそも、入浴中の女子の身体を見ようという考え自体が不潔だよ」

取り付く島もなく僕の反論を切り捨てる久保君。彼はそのまま不機嫌そうに鼻を鳴らすと、参考書に没頭し始めてしまった。交渉失敗だ。

「邪魔してごめん。それじゃ、僕はこれで」

仕方がないので、一旦雄二達のところに戻ろう。

「……人として間違った事、か……」

去り際に久保君が何やら呟いていた。悩み事でもあるんだろうか？

「明久、どうだった」

「ごめん。失敗だったよ」

「そうか。まぁ、無事で何よりだ」

「いや、そんな危ない事はしてないんだけど」

そうやって心配するなら、もっと他の時にして欲しいもんだ。

「しかしそうなると、他のクラスとの交渉を迅速に進める必要があるな」

「それはそうだけど、今は授業中だよ？」

自習中とはいえ、監視の目がないわけではない。今も勉強するフリをしていなければ、監督の先生に注意されているだろう。

「それはわかってる。しかし全クラスに声を掛けるとなると、休み時間だけでは到底時間が足りないからな。何としても授業を抜け出す必要がある」

結局僕らは騒ぎを起こして、その隙に教室を抜け出すことになった。

＊　　＊　　＊

そんなわけで、恒例の出撃前ブリーフィング。

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃったな」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表があの《卑怯者》なだけにまとまりがないし、Cクラスは代表が小山だからな。男子が尻込みするのも無理はない」

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでも昨日よりだいぶ状況は良くなったよ」

「まぁそうじゃな。女子側とて、入浴の為に最大でも半数しか出てこられんじゃろうし、教師を抑えることができればなんとかなるじゃろ」

昨日以上の戦力を向こうは保有していないはずだから、今日こそは何とかなるはずだ。

「でも、ここまで大きな騒ぎにすると女子の入浴自体が中止にならないかな？」

「それはないだろ。教師側にもプライドがあるからな。『覗きを阻止できないかもしれないから入浴を控えてください』なんて言うと思うか？」

「ああ、そっか」

確かに先生達にも意地があるのだろう。召喚獣を使った勝負で、生徒に防衛線を抜かれるような事があってはならないのだから。

「それにこれは推測だが、教師達はこの事態を好ましく思っている可能性もあるな」

「え？僕らの覗きを？」

「ああ。あくまでこの合宿の目的は『生徒の学習意欲の向上』だからな。目的が何であれ、召喚獣を使って闘う以上、勉強はしなくてはならない。女子側も同様だ。防衛の為にも召喚獣は必要だからな」

雄二がもっともらしく説明している。

・・・・・もしかして、それだからこの時間に僕らを部屋に拘束するという手段を取ってこないんだろうか？先生達も絶対に抜かれない自信があるからって、大胆な事をするなぁ。

「さてムッツリーニ。両クラスに作戦開始時刻と集合場所は伝達してあるな？」

「……問題ない」

作戦開始予定時刻は２０時１０分、集合場所は１階にある大食堂だ。

「よし。それじゃ、そろそろ行くか」

「そうだね。もう皆待ってるかもしれないし」

D・Eクラスの男子全員が協力してくれたから、こっちの戦力は100人近くになった。これなら昨日のような結果にはならないはず――

「よ、吉井っ！大変だ！」

突然ドアが開いて、クラスメイトの須川君が部屋に駆け込んできた。

「須川君、どうしたの？作戦開始時刻まではもう少し時間があるはずだけど」

「やられた！大食堂で敵が待ち伏せしていたんだ！今は戦力が分断されて、各階に散り散りになっている！」

「なんだって！？」

まさか向こうに先手を取られるなんて。こっちの情報が漏れていたのか！？

「……情報が漏れるような事はない」

ムッツリーニが僕の不安を払拭してくれる。確かに、あのムッツリーニがそんなヘマをするはずがない。となると……

「こっちの考えを読まれていたか……！」

雄二が悔しげに呟く。

相手は雄二の思考回路を熟知していて、その上でこっちの作戦を潰しに来た。そんな事ができる人間を、僕は1人しか知らない。

「霧島翔子じゃな。流石、学年主席の名は伊達ではないのう」

「よっぽど雄二の覗きが許せないんだね」

こっちのアドバンテージは雄二の考える常識外れの作戦だけだったのに、それすらも許されないとあっては状況はかなり厳しい。

「……迷っている時間はない」

「そ、そうだね！どうする雄二！？」

「どうするも何も、こうなっては作戦なんてあってないようなものだ。分断された戦力を一旦編成し直すしかない！とにかく出るぞ！」

「「「了解っ！」」」

須川君を合わせた5人で廊下に飛び出す。すると、そこはもう既に戦場と化していた……

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「行っちゃった……」

明久達が慌しく部屋を出て行き、今は僕1人が部屋に残っています。

――コンコン

「は～い。開いてますよ」

ノックの音が聞こえたので、そう返します。

「「お邪魔しま～す」」

入ってきたのは優子と瑞希でした。

「いらっしゃい。下の様子はどう?」

「男子はズタボロにやられてるわ」

「はい。今日は高橋先生もいらっしゃるので、かなり大変な事になってます」

「そっか」

学年主任の高橋女史が出てきているようでは、明久達には万に一つ

の勝ち目もありませんね。

「それで、2人が来たって事は『例の件』かな？」

「ええ。犯人がわかったから、教えようと思って」

「ありがとう。で、結局誰だったの？」

「えぇっと、それがですね……――さんだったんですよ」

「やっぱり。何となく脅迫の内容から、そうじゃないかとは思ってたんだけど」

とりあえず、これで明久と雄二の依頼は完遂ですね。

「で、あの連中はどうするのよ？覗きを止めるのはもう無理だと思うけど」

「それなんだけど、明日はちょっと僕も参加しようかと思ってるんだ」

「え？鏡護君もですか？」

「うん。と言っても僕は2人以外には興味ないから、あくまで召喚獣による戦闘を楽しませてもらおうかと思って」

「「――っ／／／／」」

あれ、どうしたのでしょう？2人とも顔が真っ赤です。

「も、もう！そういう事をサラッと言わないの！」

「そ、そうです！鏡護君はいつも不意打ちで反則です！」

2人に怒られてしまいました。・・・・・なんでさ？

「ご、ごめん。……で、いいかな？一応2人が反対したら止めにするけど」

「まぁ鏡護の事は信じてるから、アタシは別にいいわよ」

「私も構いません。鏡護君を信じてますから。……でも、誰と戦いたいんですか？」

2人から了承を得ます。と同時に、瑞希がそんな事を聞いてきました。

「……驚いた。瑞希、よくわかったね。僕が特定の人物と戦いたいと思ってるって」

「なんとなく、だったんですけどね。で、誰なんですか？」

「高橋先生だよ」

「……呆れた。鏡護、それ本気で言ってるの？」

「もちろんだよ。こんな機会でもないと、あの人とは戦えないからね」

「でも珍しいですね。鏡護君がそんな事を言うなんて」

「そうかな?でもまぁ、日頃の補習の意趣返しをしようかなってね」

「何、もう勝った気でいるの?」

「まさか。でも、負ける気なんてさらさらないよ」

「言ったわね?」

「当然」

「じゃあ、もし負けたら今度1日全部鏡護のオゴリでデートしましょう?ね、瑞希♪」

「はい!楽しみです♪」

「わかった。じゃあ僕が勝ったら、今度2人には1つずつ僕の言う事を聞いてもらおうかな?」

「いいですよ」

「望むところよ」

そうして3人で笑いました。明日は楽しくなりそうです。

第２３問　『仲間を集めて敵を倒せ！……ってどこかのＲＰＧは言っていた』

あとがき

作者　「覗きは男の浪漫だ！」

鏡護　「今日もいきなり何を言い出すかと思えば……。覗きは犯罪だからね？」

作者　「うるさい！それでも覗くんだ！そこに理想郷がある限り！」

鏡護　「えぇっと、警察に連絡を……」

作者　「まぁ待て。話せばわかる」

鏡護　「……某首相の名言が残念な感じに……」

作者　「……というかだな。お前も最終日は参加するんだろ？」

鏡護　「そうだよ。でも僕はあくまで戦闘に参加するのであって、覗きには一切関与しないからね？」

作者　「ふ～ん。でも本当は覗きたいんだろう？」

鏡護　「……確かに、優子と瑞希だったら……（ボソボソ）」

作者　「だよな～！やっぱりお前もちゃんと“男”だったんだな！」

鏡護　「わかってくれたようでよかった」

作者　「ようしっ！ならば景気よく次回予告へいってみよーっ！

　次回、第２４問『浴衣撮影会と真夜中の珍事～どうしてこうなった！？～（仮）』

　を、」

作＆鏡　「「よろしくお願いしまーす！」」

第２４問　『浴衣撮影会と真夜中の会合～どうしてこうなった！？～』（前書き）

バカテスト　歴史

問　以下の（　）あてはまる歴史上の人物をに答えなさい。
『楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済を発展させたのは（　）である』

姫路瑞希の答え
『織田信長』
教師のコメント
正解です。

島田美波の答え
『ちょんまげ』
教師のコメント
日本にはもう慣れましたか？先生はこの解答を見て少し不安になりました。

吉井明久の答え
『ノブ』
教師のコメント
ちょっと慣れ慣れしいと思います。

天水鏡護の答え
『第六天魔王』
教師のコメント
先生もＢＡＳＡＲＡはよくやります。

第２４問　『浴衣撮影会と真夜中の会合～どうしてこうなった！？～』

「まさか高橋女史まで参戦してくるとはな」

「あの人、もう反則なまでの強さだったよ……」

「おかえり、皆。……今日もダメだったみたいだね」

結果はわかっていましたが、一応そう聞いておきます。

「ただいまじゃ、鏡護。……もしや鏡護なら高橋先生に勝てるのではないか？」

「……（コクコク）」

秀吉がそんな事を言い、康太がそれに同意するように頷きます。

「確かにそうかもしれん。だが、コイツは今回参加しないといっているからな」

「そうだよね。鏡護がいればもう少し何とかなると思うんだけどなぁ……」

雄二と明久も秀吉の意見には賛成のようです。・・・・・ここで『爆弾』を落とせば、面白い反応が見られそうですね。

「明日１日だったら、僕も力を貸すよ？」

「「「「なんだと（って／じゃと）！？」」」」

僕がそういった瞬間、全員が一斉にこちらを見ました。全員開いた口が塞がらない、といった様子です。ナイスリアクション。

「おい！それは本当か？」

雄二が凄い勢いで詰め寄ってきます。

「……と言っても、僕は除きには一切関与しないよ。戦闘に参加するだけだからね」

「いや、それだけでもかなり助かる。正直高橋女史は俺達の手に余るからな」

「しかしあの２人がよく許したのう」

「うん。それは本当に２人に感謝だよ」

「でもよかった！これで１００人力だね！」

「……（コクコク）」

これだけ気持ちよく迎えてもらえると、こちらもやる気になりますね。

「しかし、やはりＡ・Ｂ・Ｃクラスの協力は必要だな……」

「どうしてさ雄二？鏡護がいれば問題ないんじゃない？」

「少しは頭を使え明久。鏡護には高橋女史の相手をしてもらわなきゃならないんだ。無傷でそこまで連れて行かないとダメだろ」

「あ、そっか。いくら鏡護でも、点数を消耗した状態であの高橋先生に勝てるわけないもんね」

「そういうことだ。そこまでの女子の包囲網を突破するためには、どうしても上位3クラスの協力が必要不可欠だ。よって明日の作戦時刻まではその根回しに全力を費やす」

「う～ん。でも一度断られてるし、そう簡単にいくかな？」

「そこを何とかするのが俺達の仕事だ」

明久と話をしていた雄二は、そう言うとデジタルカメラと部屋に備え付けの浴衣を手に掲げました。

部屋の浴衣は使わないようにと言われていましたが、雄二がそんなルールを守るわけありませんよね。

「で、それをどうするのさ？」

答えはわかりきっていますが、一応聞いてみます。

「もちろん着せて写真を撮り、Ａ～Ｃクラスの野郎共の劣情を煽る。上手くいけば、覗きへの興味が湧いて協力を取り付けられるはずだ」

・・・・・まぁ、そうですよね。

「ふ～ん。何だか雄二の作戦はいつもそんな感じだよね」

そこに明久がツッコミを入れました。

「ほっとけ」

・・・・・自覚はあったんですね。

「でも、効果はありそうだしやってみる価値はあるね。はい、秀吉」

「……またワシが着るのかのう……？」

秀吉は不満そうな顔をしています。

「安心しろ。秀吉だけじゃない。島田と姫路と木下姉にも着てもらう」

「いや、ワシ1人で着るのが不満というわけではないのじゃが……」

・・・・・それは本当は不満ではないと言っているのと同義ですよ？

「それじゃ明久、お前は島田に連絡を取れ。鏡護は姫路と木下姉に頼んでみてくれ」

「「了解」」

「……（クイクイ）」

2人に連絡を取る為に携帯を出そうとしていると、康太が僕の服の裾を引っ張ってきました。

「どうしたの康太？」

「……（グイッ）」

康太は無言で僕に何かを押し付けてきました。・・・・・これは浴衣とカツラ、ですね。

「まさか僕にカツラを着けて浴衣を着ろって？」

「……（コクコク）」

僕の言葉に小さく何度も頷く康太。

「ハァ……わかった。僕もやるよ」

仕方なく僕も引き受けることにしました。

さて、それじゃ改めて2人にメールを送らないといけませんね。2人のメアドは・・・・・っと。あったあった。

カチカチと携帯を操作して、メールの本文を作成します。

【ちょっと話があるんだけど、僕達の部屋に来てくれない？】

――PiPiPiPiPi

送信ボタンを押して数分もしないうちに返信がありました。・・・・

・これは瑞希ですね。

【わかりました。お菓子とかを持って、後で遊びに行きますね】

瑞希は了承してくれたようです。

――ＰｉＰｉＰｉＰｉ

それから1分もしないうちに、今度は優子から返信がありました。

【いいわよ。後で顔を出すわね】

優子も了承してくれました。

2人には写真の件もありますから、後日何かお礼をしないといけませんね。

―Ｓｉｄｅ　明久

雄二に指示された通り、僕は携帯を取り出すと美波宛にメールを打った。

【ちょっと話があるんだけど、僕らの部屋に来てもらってもいいかな？】

――ＰｉＰｉＰｉＰｉ

しばらく待つと、美波から返信が。

【別にいいけど、こんな時間にどうしたの？】

あ、少し警戒してるみたいだ。それもそうか。美波から見たら、僕らは覗き魔なんだもんね。さて、何て返事をしたらいいかな？

美波を納得させられるような文章を考えていると、また僕の携帯電話にメールの着信があった。

「ん？誰からだろう？」

メールを開けてみる。送信者は――なんだ、須川君か。何だろ？

【気になったんだけど、どうしてお前は覗きにそこまで必死なんだ？そもそも本当に女が好きなのか？坂本や木下の尻が好きだって言っていた気がするんだけど】

須川君のメールを読んで、一瞬絶句する。

こ、これはとんでもない誤解だ！この文章を見ると、僕は女の子よりも雄二の事が好きみたいじゃないか！すぐにでも認識を改めさせないと！

勢いよく携帯電話のボタンを押して文章を作成する。

何で女子風呂を覗くのかって？そんなの、決まっている！

【もちろん好きだからに決まってるじゃないか！雄二なんかよりもずっと！】

まったく、どうしてそんな事に疑問を抱くんだ。普通に考えたらわかることじゃないか！

少し熱くなりながらも送信ボタンを押す。やれやれ。本当に僕の周りにはバカが多くて困――

【メール送信中……　↓　島田美波】

――あれ？

あはは、やだなぁ。どうやら僕は随分疲れているみたいだ。だってメールの宛先の表示が間違っているように見えるんだから。でも、目を擦ってもう一度ちゃんと確認すれば大丈夫だよね？

【メール送信完了……　↓　島田美波】

「ゴふっ」

改めて送信先を見た瞬間、僕の口からありえない音が出た。

・・・・・とにかく落ち着くんだ僕。メールの文章はさして危険なものではなかっただろう?冷静になって送った文章をもう一度見直してごらん?

【もちろん好きだからに決まってるじゃないか!雄二なんかよりもずっと!】

なんて男らしくて力強い告白文なんだ。

「バカぁっ!僕のバカぁっ!ある意味自分の才能にビックリだよ畜生!」

ここここイツは人生最大のピンチだ!よりにもよって僕をウジ虫かサンドバック位にしか思っていない美波にこんなメールを送ってしまうなんて!絶対に振られてしまうだろうし『振った相手と会うのは気まずいから』と部屋に来てくれることもないだろう。作戦失敗の上、僕には予期せぬ失恋!今日は厄日か!?

・・・・・ハッ!こ、こうしちゃいられない!とにかく急いでさっきのメールが事故だって事を弁明しないと!

「どうしたの明久?さっき何か悲鳴が聞こえたけど」

「そうだぞ明久。いつもより5割増しのアホ面で何やってるんだ？」

さっきの悲鳴を聞きつけたらしい鏡護と雄二がこっちに近づいてきた。

「色々と大変な事になっちゃったんだ！今は僕の邪魔をしないで――」

「大変な事？それは――っとと」

「雄二？――って、わわっ！？」

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタッ（雄二が鏡護と僕を巻き込んで倒れる音）

バキッ（鏡護が僕の携帯を踏み潰す音）

「明久。それで大変な事って何だ？」

「たった今キサマらが作った状況だ」

僕の携帯は、今やバラバラに分解されて見るも無残な姿へと変わっていた。これでは電話やメールでの弁明なんて明らかに無理だ。

「ん？あ、これもしかして明久の？ごめん。今度修理して返すよ」

今の僕には、誰が何と言おうとコイツらをしばき倒す権利があるはずだ。

「いや、今はそんな事はどうでもいいから、とりあえず雄二の携帯電話を貸して！」

「あ、ああ。別に構わんが」

そう言って携帯を取り出した雄二からそれを掻っ攫い、すぐに美波の番号を探し始める。

坂本雄二のアドレス帳登録……1件　↓　『霧島翔子』

「む。翔子のヤツ、また勝手に俺の携帯電話を弄りやがったか……。これでまた家でアドレス帳を入力し直さないとならないじゃないか」

「……」

当然美波のアドレスなんて覚えているわけがない。僕の中で何かが色々と終わってしまった気がした。

・・・・・仕方ない。こうなったらコイツらにも僕と同じ苦しみを味わわせてやる！

カチカチカチ。送信、っと。

【Ｔｏ：霧島翔子
　もう一度きちんとプロポーズがしたい。今夜浴衣を着て俺の部屋まで来てくれ】

「鏡護も携帯電話貸して！」

「どうしたのさ？」

「いいから早く！」

「わ、わかったよ」

そうして鏡護からも携帯を奪い取ると、同じようにメールを打つ。よし送信、っと。

【Ｔｏ：優子＆瑞希
　さっきのとは別件で２人に大事な話があるんだ。今夜改めて浴衣を着て僕の部屋に来て欲しい】

「うん？明久、俺の携帯電話で誰に何を送信し――ゴふっ、ななななんてことをしてくれるんだキサマ！」

「どうしたの雄二？明久も突然何を――って、ちょっと！？何でこんなメールを送ったのさ！？」

「黙れ！キサマらも僕と同じように色々なものを失え！どりゃあああーーーっ！」

お茶の中に2人の携帯を突っ込む。

「おわぁっ！俺の携帯電話になにしやがる！！これじゃ壊れて弁解もできないだろうがクズ野郎！」

「そう！それだよ！それが今僕が雄二に抱いている気持ちだよ！」

「何をわけのわからん事を！と、とにかく今は急いで翔子の部屋に行って誤解を解いてこないと大変な事になっちまう！」

「あっ！ダメだよ雄二！今外に出たら――」

ガラッ（雄二が廊下へと続くドアを開ける音）

ドゴッ（廊下にいた鉄人が雄二に拳を叩き込む音）

グシャベキグチャッ（雄二がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

「部屋を出るな」

「「了解です」」

ピクリとも動かない雄二の代わりに、僕と鏡護が返事をする。この部屋に対する教師達の警戒態勢は万全だ。

「もう雄二と鏡護を巻き込んだから、後はどうなってもいいや」

僕はもう自分の事を考えるのは止めにした。きっと美波もあのメールは冗談だと思ってくれるだろうと願いつつ・・・・・

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

あの後僕達の部屋にやってきた島田さん、瑞希、優子の３人と、秀吉とカツラをかぶった僕の合計５人で撮影会は行われました。

浴衣を着ていた秀吉に優子がキレたり、カツラをかぶった僕に瑞希と優子が異様にテンションを上げたり、逆に島田さんは落ち込んだり、僕達がポーズを取る度に例の如く康太が鼻血を噴き出したりと、また騒動があったけど無事終了しました。

・・・・・こっそりカツラを取った状態で瑞希と優子と３人で撮った写真は、皆に内緒の３人の思い出用という事で。

そうして女子３人はそれぞれの部屋へと帰り、今は皆寝静まっています。

「……きて、起きなさい鏡護……」

「……護君、起きてください……」

・・・・・何でしょう？誰かに身体を揺すられているような気がします。

ゆっくりと目を開けた僕の視界に入ったのは、

・ぐっすりと眠っている秀吉の寝顔

・カメラを構えている康太

・慌てる雄二の前で浴衣をはだけようとしている霧島さん

・明久に詰め寄っている島田さん

でした。

・・・・・一体どういう状況ですか？

「鏡護君」

「起きたみたいね」

背後から聞こえた声に振り向くと、瑞希と優子がいました。

「あれ？なんで？」

「なんでって、呼んだのは鏡護でしょ？」

「メールの事、忘れちゃったんですか？」

メール？はて、何か送りましたっけ？

・・・・・ポクポクポク、チーンっ！

「あぁ！あれか！」

ついつい大声を出してしまう僕。

「ちょっと！鏡護うるさい！」

「こ、声が大きいです鏡護君！」

「むぐぅっ！？」

慌てた様子で2人に口と鼻を押さえられます。

「落ち着きなさい。そしたら手を放すから」

「……（コクコクコク）」

優子の言葉にすぐに頷いて返します。いくら焦ったからとはいえ、口と鼻を塞がれたら息ができないんですよ？

「大声は出さないでくださいね？」

そうして手を放してくれる2人。呼吸を整えてから、正面の2人を見ます。

「え～っと。って事は、だ。2人は『大事な話』を聞きに来たんだよね？」

「「ええ（はい）、そうよ（です）」」

僕の言葉に頷く2人。やはりそうですか・・・・・しかしどうしましょう？あれは誤送信だったのですが、それで追い返すのも何だか申し訳ない気がします。

・・・・・そうです！2人にはアレを伝えましょう！

「わかった。ただ、ちょっとこの部屋じゃ言いにくいから場所を変えよう」

そう言うと、2人は首を傾げました。

「？どうして場所を変えるのよ？」

「そうですよ。ここでいいじゃないですか」

・・・・・もしかして2人とも、周りの状況が見えてないんでしょうか？

「……2人とも、周りを見てみようか」

「周り、ですか？」

「どういう事よ……って、えっ！？どうして代表と美波がいるの！？それに秀吉以外は皆起きてるじゃない！」

「ほ、本当です！気が付きませんでした……」

・・・・・本当に周りは目に入ってなかったんですね。

「そういうわけだから、移動してもいいかな？」

「ええ、そうね……」

「はい……」

今さら恥ずかしくなったようで、２人は静々と僕の後についてきます。

僕達はちょうど空き部屋だった隣室に入りました。

「それじゃ、さっきの続きを言わせてもらうよ」

２人が頷くのを待って、続けます。

「僕は２人と一緒にこれから全部の時間を共有したい。……もうしばらく先の話にはなるけど、僕と結婚してくれるかい？」

正直タイミング的にどうなんだ、という話ではありますが、いつか言おうと思っていた僕の偽らざる本心である事には違いありません。

「「――っっ！？／／／／」」

聞いた2人はやはり驚いています。暗くてあまりよくわかりませんが、顔も赤くなっているようです。

「な、ななな何て事を言い出すのよ！こんな時に！」

「う、嬉しいですけど、流石にこんな時に言われるのはちょっと…」

器用に小声で怒鳴る優子と、何やらボソボソと呟く瑞希。

「ごめん。本当は僕も色々と準備してから言うつもりだったんだけど、この合宿中に2人に伝えたくなってね」

「「鏡護（君）……」」

・・・・・ん？2人ともどうしたのでしょうか？突然俯いてしまいました。

「「アタシ（私）は――」」

そして、どちらからともなく話を始めた2人は――

「アタシは、いつでも『素のアタシ』を認めてくれる鏡護が大好き。だから――」

「私は、困っている時には必ず手を差し伸べてくれる鏡護君が大好きです。だから――」

「「だから、アタシ（私）を鏡護（君）のお嫁さんにしてください」」

そう言って浴衣を脱いで僕に近づいて・・・・・って、えぇっ!?

「2人ともストップ!こ、こんなところでそれはマズいよ!」

慌てて止めます。

「「そんな……」」

そこの2人!残念な顔をしないでください!

「とにかく、すぐに浴衣を着て!それにこんなところをもし先生に見つかったら――」

『あああああっ!皆そんなに騒いじゃダメだよっ!このままじゃ鉄人に気付かれて――』

『何事だっ!今吉井の声が聞こえたぞっ!』

「「「……」」」

隣から聞こえた明久の声に、階下にいる西村先生が反応したようです。

「……というわけでもうすぐ西村先生が来るはずだから、静かにしてやり過ごそう」

「……そうね」

「……わかりました」

・・・・・明久、頑張って生贄（みがわり）になって逃げてください。

『吉井に坂本ぉっ！お前らだという事はわかっているんだ！大人しくその場を動くなよっ！』

あ、雄二も巻き添えにされましたね。

しばらくして隣の部屋の前が騒がしくなり、２つの足音と少し遅れてもう１つの足音が廊下を走っていくのが聞こえました。

「ふぅ……。よかった。行ったみたいだね」

「「ええ（はい）」」

３人して胸を撫で下ろします。すると――

「もう大丈夫でしょ。……という訳で、鏡護……」

「鏡護君……」

再び僕に迫ってくる2人。いけません！ここで2人の誘惑に負けてしまっては！

「鏡護……」

「鏡護君……」

だ・か・ら、そうやって涙目＋上目遣いをするのは止めてください！

「だ、ダメだよ2人とも！このままじゃ僕は――」

結局そのまま朝まで2人と過ごしてしまった僕は、改めて2人には勝てない事を強く思い知らされてしまいました。

しかし部屋に差し込む朝日の中で見た2人の幸せそうな寝顔を見ると、「それもいいか」と思ってしまう僕でした。

第２４問　『浴衣撮影会と真夜中の会合～どうしてこうなった！？～』（後書き）

あとがき

作者　「なんというエロス」

――スパァァーンッ！

鏡護　「酷い！ここ数回のあとがきの中で１番酷い始まりだよっ！」

作者　「痛いわ！力の限り叩きやがって！」

鏡護　「今のを聞いたら誰でも叩きたくなるよ！」

作者　「元凶が何を言うか！」

鏡護　「う……。で、でもあれは２人が……」

作者　「言い訳なんて見苦しいぞ！自分に正直になれ！」

鏡護　「……よかっ……」

作者　「んん？聞こえないぞ？」

鏡護　「……もちよかっ……」

作者　「ヘイ！もっと大きな声で！」

鏡護　「っっ／／／／だから、気持ちよかったって言ったんだよっ！」

作者　「チッ……」

鏡護　「ちょっと!?人に恥ずかしい事言わせておいてなんで舌打ちするのさ!?」

作者　「これだからリア充は……」

鏡護　「僕が悪いの!?ねぇ!?おかしいでしょ!?」

作者　「リア充爆発しろ」

鏡護　「うわ、ヒドっ！」

作者　「え～、次回予告いきます。

次回、第２５問『挑むは最強の敵！男達の運命は……』

を、乞うご期待ください」

鏡護　「テンション低いなぁ……。あ、次回もよろしくお願いします！」

第２５問　『挑むは最強の敵！男達の運命は……』（前書き）

バカテスト　物理

問　以下の問いに答えなさい。
『観測者Ａが速度ｖで走っていると、正面から周波数ｆの音を発し、速度ｖ’で走行してくる救急車がやってきた。音速をＶとしたとき、観測者にどのようなことが起きるのかを書きなさい。また、その現象の名称も併せて答えなさい』

姫路瑞樹の答え
『観測者Ａには車の発する音の周波数がｆ×Ｖ＋ｖ／Ｖ－ｖ’になって聞こえる。
　現象の名称……ドップラー効果』
教師のコメント
Ｆ１マシンが通過する時も、これと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しいように思われますが、意外と身近に存在するものです。

吉井明久の答え
『観測者Ａが速度ｖ’＋ｖで撥ねられる。
　現象の名称……交通事故』
教師のコメント
きちんと相対速度を補正しているあたりが腹立たしいです。

第２５問　『挑むは最強の敵！男達の運命は……』

―Ｓｉｄｅ　明久

「ふぁ……あふ……」

自分でもだらしがないと思うくらい大きな欠伸が出る。
眠い。とにかく眠い。死ぬほど眠い。もし今が貴重な朝食の時間でなければ、ブッチぎって寝ているところだ。

「流石に眠いぞこら……」

隣の雄二も僕と同じように目を擦っている。
眠いのも当然だ。僕達２人は３日連続で朝まで鉄人の鉄拳付き補習を受けさせられているのだから。

「２人とも災難だったね……」

「済まなかったのう……」

鏡護と秀吉が声を掛けてくれた。鏡護は昨日どこかに行ってたみたいだからアレだけど、秀吉はただ寝てただけだから気にする事ないのに。

「まぁ災難と言えば災難だったかも――ふわぁぁあ～～」

ダメだ。欠伸が止まらない。今日は最終日だから、自習時間にきっ

ちりと点数を補給しなくちゃいけないのに・・・・・

「弱ったのぅ。お主らがその調子では、今夜はとても……」

「別にまったく寝てないわけじゃないから、気合さえ入れば目が覚めると思うんだけど――ふわあ～～」

口を開くたびに欠伸が出る。これは重症だ。どれくらい重症かと言うと、この僕が鮭の切り身や白いご飯を目の前にしているのに眠気を優先したくなるくらいだ。

「俺もダメだ……。全然気合が入ら――ふおぉぉおっ!?」

「ど、どうしたの雄二!?」

隣でダルそうにしていた雄二が、何かを見た瞬間一気に覚醒していた。何だ？何を見たんだ？

「……効果は抜群」

「あ、おはようムッツリーニ。」

僕の後ろの出入り口から入ってきたのはムッツリーニだった。手に何かを持っているみたいだけど・・・・・？

「ムッツリーニ。今しがた雄二に見せたのは何じゃ？えらく興奮しておるように見えるのじゃが？」

「……魔法の写真」

ムッツリーニには珍しく、誇らしげに胸を張っている。

「へぇ～。どんなの？僕達にも見せてよ」

「……（スッ）」

ムッツリーニが手にしている写真を僕らに手渡してくる。僕と秀吉と鏡護は3人の真ん中に写真を置いた。

「魔法の写真だって？何を言ってるんだか。僕らももう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合なんて入るわけがふおぉぉおっ！」

「ほぅ。これはまた……」

「凄いね。カメラのアングルがまた絶妙だよ……」

ムッツリーニが見せてくれた写真の1枚目は、昨夜撮影した姫路さんと秀吉と美波、木下さん、鏡護（ｗｉｔｈカツラ）の5人の浴衣姿の集合写真だった。

5人が皆恥ずかしそうな上目遣いで見つめてくるその破壊力は、言葉では言い尽くせないものがある。さらに女性陣＋鏡護は浴衣をはだけているせいで胸元や鎖骨が少し覗いていて・・・・・！

「僕、生きていて良かった……！」

そこまで肌を露出しているわけじゃないのに、この胸の内から湧き上がる興奮は何だろう！？この5人の入浴シーンを見る為なら、僕は何だってできるよ！

「明久。2枚目は何が写っておるのじゃ？」

「えっと……」

渡された写真を捲ってみる。

すると、今度は浴衣姿で雄二に迫る霧島さんとハーフパンツ姿の美波のツーショットが出てきた。

「す、凄いよムッツリーニ！今僕はキミを心から尊敬している！」

「確かに凄いのう……」

「うん。上手く雄二と明久が入らない角度で撮られているし、もはやプロの業だね」

まるでグラビア写真のように上手く写してある。特にあの美波までもが健康的ながらも色気を醸し出しているように見えるなんて、ムッツリーニは神の技術を持っていると言っても過言じゃない！

「で、３枚目は？」

「あ、うん。３枚目は――」

さらに写真を捲る。すると、そこに写っていたのは――セーラー服姿の僕（パンチラ☆エディション）

「……思わぬ出来の良さだったから印刷してしまった」

「放して鏡護、秀吉！このバカの頭をカチ割って、脳髄を引きずり出してやるんだ！」

「落ち着くのじゃ明久！よく撮れておるではないか！」

「ダメだ秀吉！それは今の明久には禁句だよ！明久、大丈夫。僕達は何も見なかった。だから落ち着いて！」

何はともあれこれで皆の協力も得られるだろうし、僕達の気合も最高潮だし、今夜はやってやるぞ！

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

――ピピッ

どこかから聞こえてきた電子音。これは８時を告げる時報。作戦開始の合図です。

「……よし。てめぇら、気合は入っているか！」

「「「おぅ！」」」

「女子も教師も、Ａクラスも Ｆクラスも関係ねぇ！男の底力、とくと見せてやろうじゃねぇか！」

「「「おぅ！」」」

「これがラストチャンスだ！俺たち４人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねぇ！」

「「「当然だっ！」」」

「強化合宿第４夜・最終決戦、出陣（で）るぞっ！」

「「「よっしゃぁーっ！！」」」

「あ……」

凄まじい気迫に思わず気圧されて出遅れてしまいました。・・・・・っと、呆けている場合じゃないですね。僕も早く行きませんと。

『翔子たん！翔子たん！はぁはぁはぁあっ！！』

『島田のぺったんこぉぉーっ！』

『木下さーん！断崖絶壁萌えーっ！！』

『姫路さん結婚しましょおーっ！』

廊下に出た途端、聞こえてくるＥ・Ｆクラスの男子達の叫び。

・・・・皆死んでしまえばいいと思います。特に最後の２人は僕が直々に私刑を執行して差し上げましょう。

とりあえず３階は大丈夫そうなので、先を急ぎます。

「C・Dクラスの野郎共、協力に感謝するっ！2階は――俺達の背中はお前らに預けるぞ！」

2階に降りてきたところで雄二の声が聞こえてきました。どうやら追いついたようです。

『協力なんざ、ったりめぇだ！』
『女子風呂覗かなくて何の為の男でぇっ！』
『てめぇらこそしくじるんじゃねぇぞっ！』

・・・・・士気が高いのは喜ぶべき事ですが、何故べらんめぇ口調になっているんでしょうか。ノリですかね？

「雄二っ！」

「鏡護か。遅いぞ」

「ごめん」

素直に頭を下げます。

「でも、この調子ならA・Bクラスもきっと協力してくれてるよね！」

「さて、それはどうだろうな」

再び階段を降りて先へ進みます。１階で戦闘の音が聞こえなければ、Ａ・Ｂクラスの協力はないという事ですが・・・・・

『……護してくれっ……』

『……メだっ！……倒的過ぎる……！』

「やった！これで１階の制圧も問題なく――」

「待って！様子がおかしいよ！」

踊り場で折り返すと、階下の様子が視界に入ってきました。そこには、教師女子連合軍に押されているＢクラス男子の姿がありました。

『Ａクラス　霧島翔子　＆　Ａクラス　木下優子　＆　Ｆクラス　姫路瑞希　ＶＳ　Ｂクラス　加西真一　総合科目　４７６２点　＆　４３６５点　＆　４５７９点　ＶＳ　１６９２点　』

「……雄二。悪戯はそこまで」

「残念だけど、もうお終いね」

「皆さん。ここは通しませんよ」

・・・・・これはもう一方的虐殺ですね。この３人が防衛に回って

いては、男子側の勝ち目は希薄です。

「Ａクラスがおらんようじゃな……」

周囲を確認して、秀吉が悔しそうにつぶやきます。確かに目の前の総合科目戦闘でも、離れたところの物理科目戦闘でも、Ａクラスの生徒らしき姿は見当たりません。結局協力してくれたのはＢクラスだけでしたか……

「オマケに随分と用心深い布陣だな、クソッ！」

階段前の向こうの配置を見て、雄二も悪態をつきます。中央には高橋先生がいて、そこから一切動く気配はありません。その周囲には霧島さん、優子、瑞樹の他Ａクラス女子が数人立っています。

「（雄二。ここは僕が出るよ）」

「（……仕方ない。やってくれるか？）」

「（任せて）」

短く言葉を交わして、僕は戦場へと足を踏み入れました。左目のコンタクトを外して――

「防衛組には悪いが、押し通らせてもらうぞ――試獣召喚（サモン）！」

『『『なっ！どうして貴方（彼／キミ／ヤツ／アイツ）がっ！？』』』

高橋女史をはじめ、その場にいたほとんど全員が驚きの声を上げた。
驚いてないのは雄二達と優子、瑞樹くらいだな。

『Ｆクラス　天水鏡護　総合科目　１００００点』

そして表示される俺の点数。

『総合１万点!?』
『に、人間じゃないわ……』
『おいおい、あの霧島翔子にダブルスコアってどういう事だよ……』
『ヤツは化け物かっ……！』

途端に周囲が騒がしくなる。だが、いつまでも呆けていてはいい的だぜ？

「一気に形勢逆転といこうか！出でよ『神の剣（アメノムラクモ）』！『亜空切断』！」

――ザンッ

腕輪の特殊能力で喚び出した剣でもって擬似空間断層を作り、衝撃波を発生させる。これが『神の剣（アメノムラクモ）』のもう１つの能力、『亜空切断』だ。

衝撃波は、俺の前面に展開されていた防衛組の召喚獣を残らず消し飛ばした。霧島や優子、瑞希も例外ではない。

「……これが天水の本気？」

霧島が俺に問い掛けてくる。

「そうだな。これが今の俺の全力だ」

「……そう」

そのまま霧島は黙ってしまった。

「まったく、ホント異常よね」

「驚きました。こんなに差があったなんて……」

「俺は不可能を可能にする男だ！ってな」

優子と瑞樹には茶化してそう答える。

「まさかここまでとはな……」

「次の試召戦争では頼りにしてくれていいぜ？」

「ああ。その力、存分に振るってもらうさ」

言って雄二と笑う。

「……まさかこれ程の力を秘めていたとは、正直私も驚きました」

「これも全て高橋先生の補習のおかげさ」

「そうですか」

「貴女とは1度戦ってみたかったんだ。戦闘ろうぜ！」

「いいでしょう。今の一撃で貴方の点数も減っていますからね。相手になりましょう――試獣召喚！」

高橋女史の喚び出しに応じて、その召喚獣が姿を現す。軍将校のような服を身に纏い、手には鞭を持っている。

「というわけだ雄二！お前達は先に行け！」

「おう！必ず勝てよ！」

「鏡護、頑張って！」

「お主の武運を祈っておるぞ！」

「……（コクコク）！」

そう言って4人が俺と高橋女史の横を通り抜けていく。

「……アイツらを追わなくていいのか？」

高橋女史に声を掛ける。

「貴方がそれをさせてくれるとは思えませんからね」

「当然だ」

『学年主任　高橋洋子　ＶＳ　Ｆクラス　天水鏡護
総合科目　７９８６点　ＶＳ　８０００点　』

そうして表示される互いの点数。俺の方は、さっきの腕輪の発動で点数が減っている。

「流石は学年主任。素晴らしい点数だな」

「それを上回っておいて、よく言いますね」

「違いない。……さあ、いくぜ！」

相手は召喚獣の扱いに長けていて、しかもあの点数だ。後手に回ってはマズい。そう考えた俺は迷わず打って出る。

「いい判断です。が、まだまだですね」

「なにっ！？」

『天水鏡護　８０００点　↓　７５６２点』

俺の召喚獣が吹き飛ばされ、同時に点数が大きく減少する。何が起きたんだ！？

「解析（アナリシス）、起動（アウェイクン）！」

天眼を発動して、高橋女史の召喚獣を見据える。

腕輪能力……『伸縮』：攻撃のレンジを自在に設定することができる

チッ・・・・・今のはこれか。

「……解析（アナリシス）、終了（オーバー）。面倒な能力だな……」

「……どうやら私の腕輪能力はわかったみたいですね」

「ああ」

これでは距離を開けてしまえば向こうの独壇場だ。何としても近接（インファイト）格闘に持ち込むしかない。

「そうと決まれば行動あるのみ！」

俺は再び召喚獣を突っ込ませます。

「ですが、わかったところでどうなるものでもありませんよ？」

「それはどうかな？」

「なっ！？」

高橋女史の召喚獣が繰り出す攻撃を紙一重でかわしながら、徐々に接近していく。

「くっ……。高速で移動する事で的を絞らせないなんて……」

いくら高得点を誇る高橋女史といえど、自分に匹敵する点数の持ち主と戦った事なんてないのだろう。こちらのスピードに対応しきれていない。

「もらったぁっ！」

――シュシュシュシュッ

相手の懐に飛び込んだ俺は、高速で万年筆による突きを繰り出す。

「くぅっ……。流石にこの距離はキツいですね……」

しかし高橋女史もただでやられてくれるはずもなく、必死に応戦してくる。

『学年主任　高橋洋子　ＶＳ　Ｆクラス　天水鏡護
総合科目　５４８２点　ＶＳ　５８１３点　』

このまま削り合いになるのもアレだな。・・・・・ここで勝負を決めるか！

「そろそろ決着をつけさせてもらう！出でよ『神の剣（アメノムラクモ）』！そして喰らえ、『虚空断裂』！」

「ならばこちらもいきます！『地這い大蛇』！」

『虚空断裂』：『亜空切断』の応用。多数の断層で空間に大きな穴を作って衝撃波で敵を切り刻み、全てを飲み込む最終奥義。

『地這い大蛇』：鞭をまるで大蛇のように振るって敵を薙ぎ払う最終奥義。

――ドォン！

そうして互いの最後の攻撃がぶつかり合い、爆発が起きる。しかし断層が作った穴に煙が吸い込まれて、視界が晴れていく。

そして――

『学年主任　高橋洋子　ＶＳ　Ｆクラス　天水鏡護
総合科目　３７点　ＶＳ　８４点』

煙が消えた先には地に膝をついた高橋女史の召喚獣と、その首筋に万年筆を突きつける俺の召喚獣の姿があった。

「……私の負け、ですね」

「ああ……そして俺の勝ちだ」

そして俺は高橋女史の召喚獣に止めを刺し、

「学年主任高橋洋子、Ｆクラス天水鏡護が討ち取ったりっ！！」

大音声で勝ち名乗りを上げた。

『『うぉおおおおっ！すげぇえええええっ！！』』

『『そ、そんな……高橋先生が……』』

その瞬間、男子軍からは大歓声が、女子教師連合軍からは絶望の声が上がる。

「……まさか」

「ホントにやってくれちゃったわね……」

「はい……」

霧島、優子、瑞希も呆然としている。

「ふぅ……」

近くの壁に寄りかかって、そのまま床に座り込む。

「俺のやりたかった事は果たした。後はもう知らん」

そうして俺はその場で意識を手放した。

・・・・・あ、しまった。明久達に脅迫犯の正体教えてなかったな。

・・・・・ま、いっか。

―Ｓｉｄｅ　明久

『学年主任高橋洋子、Ｆクラス天水鏡護が討ち取ったりっ！！』

『『うぉおおおおおっ！』』

「なっ、何ぃっ!?高橋先生が天水にやられただとっ!?」

「凄いよ鏡護！」

1階からの声を聞き、鉄人が予想外の事態に驚きの表情を見せる。

「おい吉井！何故天水が協力している！アイツはこの3日間何もしていなかっただろう！」

その表情のまま、鉄人は攻撃を中断して僕に問い掛けてくる。

「念の為言っておくと、鏡護の目的は覗きじゃありませんよ。純粋に高橋先生と戦いたかっただけだそうです」

流石に大偉業を果たしてくれた鏡護に、やってもいない罪まで被せるのは忍びなかったから釈明をする。

「……アイツもとんだ大バカ野郎だな。しかもそれで結果を出してしまうとは……」

あ、鉄人が呆れてる。

「しかしこうなっては、なおさらここを通す訳にはいかなくなったな」

そう言って表情を引き締めると、鉄人が再び構えを取る。

・・・・・さて、どうしようか？

拳、蹴り、木刀を駆使して鉄人を攻撃してはいるものの、全くダメージを与えられずにいる。

二重(ダブル)召喚を使っても、鉄人は頭部や鳩尾といった最低限の箇所だけを防御し、その他は頑強な肉体で弾き返す。

「……アンタ本当に人間なのか！？」

「鍛えているからな。これくらいは当然の事だ！」

「そんなの当然じゃないですよ！」

一見優勢なように見えているけど、実際には僕の方が旗色が悪い。
なぜなら僕は2体の召喚獣の動きを同時に考えなければならないからだ。放たれた攻撃をよけるのが主従か副獣か、ソレを瞬時に判断して個別に行動する。2人分の行動を1人で処理するなんて、いつまでも続けられない。

「どうした吉井！動きが鈍っているぞ！」

「くぅっ！」

そこで、右腕に鈍い衝撃が走った。
それをどちらが受けたのかと躊躇した瞬間を狙い、鉄人の拳が副獣の鳩尾に直撃。

「ぐ、ふぅ……っ！」

痛みに耐えかね、廊下に背中から倒れ込んでしまう。

「所詮、下心の為の集中力などそんなものだ」

「……集中？そうかっ！」

「ほう……まだやるのか？　根性だけは人一倍だな」

立ち上がった僕を見て、鉄人がどこか楽しげに口元を歪める。でも、笑っていられるのもここまでだ！

「鉄人、感謝するよ。今アンタは僕にヒントをくれた」

「ヒントだと？」

「そう、集中だ。狙いを絞るんだ。拳、蹴り、木刀。主獣も副獣も、今から放つ攻撃を全て――」

2体にそれぞれバラバラの指示を出すから混乱し、攻撃をバラバラに分散させるから威力が出ない。だから、今から全ての攻撃を――

「――鉄人、アンタの股間に集中させる……！」

「き、キサマ！何て恐ろしい事を考えるんだ！？」

「流石にあんたもそこだけは鍛えようがないはずだ！行くぞ鉄人っ！」

ローと見せかけて金的狙いに変わるキック。足元を狙ったと見せかけて股間を突きにいく木刀。鳩尾狙いから下腹部に軌道を修正した拳。とにかく全ての攻撃をただ一度の急所攻撃の為に……！

「こ、これほど執拗な急所攻撃をする奴は初めてだ……！」

「悶絶しろ鉄人！」

ガードで手一杯になっている鉄人。そっちが来ないならこっちからいくぞ！

「くっ……！」

副獣が力をためて大きく拳を振るうのを見て、股間のガードを固める。

「なんて、ウソです」

その瞬間、主獣が副獣を踏み台に鉄人の背後へ飛ぶ。

「しまっ――」

「もらったぁぁーっ！」

僕の召喚獣が手刀をふるい、それが無防備な鉄人の首に吸い込まれ、

「僕の勝ちだ、鉄人！」

「ぐぅ……っ！よ、吉井、キサマ……」

ドサリ、と重い音を立てて、鉄人はゆっくりと床に倒れ伏した。

「やった！やっと、やっと終わった……！」

本当に長かった。ここまでやってくるのに挫折したのは1度や2度じゃない。でも、今僕はこうしてここにいる。

「待ってろよ、美波のペッタンコ……！」

もう楽しみで仕方がな――ハッ！殺気！？

本能的な危機を感じて素早くその場にしゃがみこむ。すると僕の頭があった位置を、バチバチと音を立てて何かが通過していった。

「お姉さまの操は渡しません……！」

「清水さんか！」

見覚えのあるスタンガン（２０万ボルト）を構えて立っていたのは清水さんだった。

「昨晩からお姉さまの元気がないのも、美春に振り向いてくれないのも全て貴方のせいです！死んで美春に詫びて下さい！」

清水さんが凶器を振り回してくるけど、さっきまで鉄人の相手をしていた僕には楽々避ける事ができる。

「この……！言う事を聞かなければ、この写真をバラ撒きます！」

「え？写真って――うわっ！それは僕の恥ずかしい写真！？」

清水さんが取り出したのは僕のメイド服姿の写真。あれ？でもなんで彼女があんな写真を持ってるんだ？まさか――

「――まさか、清水さんは僕の事が好き、とか……？」

「吐き気がします！」

おかしいな？目から汗が・・・・・

「でも、それならどうしてそんな写真を？」

「お姉さまのチャイナドレスを撮影しようとしたら、ちょうどいい脅迫のネタが通りかかったので撮影したまでです！」

ん？という事は・・・・・？

「清水さんってもしかして、お尻に火傷の痕があったりする？」

「な、何故それを!?さては盗撮や盗聴をやっていますね!?」

これで決まりだ。例の脅迫犯は清水さんだったんだ。っていうか、本当にやってる人にそんな事を言われたくない。

「とにかく大人しくしてください!写真を公表されてもいいのですか?」

堂々と僕を脅してくる清水さん。・・・・・これはちょっとオシオキが必要かな?

「よっと」

「ああ!返してください!」

スタンガンを奪い取って、最低出力で押しつける。

――バチッ

「し、痺れますっっ!」

清水さんは呆気なく気絶した。

「これで全部片付いた、かな?」

悪の元凶はたった今滅びた。これでもう僕を邪魔するものは何もない。

「……明久」

「ムッツリーニ！無事だったんだね？」

「……当然」

ムッツリーニの全身から疲労が見て取れる。余程厳しい戦いだったんだろう。それでも、その顔はどこか晴れ晴れとしている。

「明久、よくやった」

「雄二！それに皆も！」

さらに後ろから雄二を筆頭に、各クラスの男子の面々がやってきた。全員が１つの目的を達成した喜びに、満面の笑みを浮かべている。

『吉井、よく鉄人を倒してくれた。』

『お前が今回のＭＶＰだ』

僕を称える声がそこら中から聞こえてくる。

「皆の協力があってこそだよ！本当にありがとう！」

それに僕個人としては、今回のＭＶＰは鏡護だと思う。なんせ高橋先生をはじめ、霧島さん、姫路さん、木下さんらを１人で倒してしまったのだから。

「それじゃ、そろそろ行くか」

雄二が珍しく顔を綻ばせている。コイツも正常な男子。この状況はやっぱり嬉しいんだろう。

「皆！これだけ人数がいれば人物の特定もできないし、邪魔も排除できる！停学や退学の心配もないから思う存分楽しんでくれ！」

『『おーっ！』』

「全員、心して見ろ！これが俺達の勝ち取った栄光だ！」

雄二が女子風呂の扉を開けた。

張りのある肌。
しなやかな肢体。
腰まで伸びた白髪。

見知った顔でありながら、衣服に包まれて一度も見ることのできなかった姿。
この機を逃せば二度と目にする事はできないと言える、そんな――

「な、なんだいアンタ達は！？雁首そろえて老人の裸見に来たのかい！？」

そんな学園長（ババア）の艶姿。

『『『割にあわねぇーっっ！！』』』

僕ら全員が、そのありえない光景に涙した・・・・・

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第２５問　『挑むは最強の敵！男達の運命は……』（後書き）

あとがき

作者　「まさかのオチだな」

鏡護　「行かなくてほんとによかった……」

作者　「確かに、今回は結局お前の判断が正しかったわけだ」

鏡護　「世の中そう簡単に上手くはいかないって事だね」

作者　「ああ。そうだな」

鏡護　「ところで、どうしよう？」

作者　「どうしよう、とは？」

鏡護　「いや。だって僕、学年主任の先生を倒しちゃったんだけど……」

作者　「ああ。そんな事もあったな」

鏡護　「……なんでそんなどうでもよさそうなのさ？」

作者　「だってホントにどうでもいい事じゃん」

鏡護　「僕にとっては一大事なんだよ！」

作者　「アレだろ？今後さらに補習の時間が増える、とかだろ？」

鏡護　「止めて！今は現実を見せつけないで！」

作者　「でもどうせいつかは直面することだぞ？」

鏡護　「そうしたらその時考えるよ……」

作者　「え～。鏡護が現実逃避に走ってしまったので、今回はこの辺で。次回で強化合宿編は完結です」

作者　「それでは次回予告！

次回、第２６問『夢追い人の終着点と、新たな物語の序章（仮）』

を、お楽しみに～！」

第２６問　『夢追い人の終着点と、新たな物語の序章』（前書き）

強化合宿の日誌

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい。

姫路瑞希のまとめ

『他のクラスの人と勉強する事で良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使い易い参考書についても教えてもらう事が出来たので、今後はさらに頑張っていきたいと思います。夜はいつもの様に騒ぎがありましたが、これはこれで私達の学校らしいと思います。ある人から素敵な写真ももらえて大満足です！』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので、伸び悩んで居る科目があったと言う事には驚きました。本来なら先生が気付くべきなので申し訳ないです。ですが、無事に解決できそうなので何よりです。やはり姫路さんにはＡクラスで学習する方が良い影響がありそうですね。次回の振り分け試験では是非とも頑張ってください。それと、バカ騒ぎについては悪影響を受けないように気を付けてください。

島田美波のまとめ

『三日目の夜のことが忘れられない。ウチはどうしたらいいんだろう。こんなことは誰にも相談できないし、アイツとはあれ以来話ができてないし……。ああもう！どうしていいのかわかんない！』

教師のコメント

いったい何があったのでしょうか？友達にも相談できないと言うのは尋常ではありませんね。良かったら先生に話してみて下さい。一

応あなた方よりも長く生きているので少しは力になれるはずです。ただ、気持ちと書いてあるということは恋愛の話でしょうか？それなら先生から言えることは一つです。自分が後から思い出して後悔することのないように行動するのが一番です。色々と悩んで立派な大人になるのが学生の仕事ですよ。

天水鏡護のまとめ

『今回の強化合宿はとても実りの多いものでした。覗き騒動に便乗して高橋先生と戦えた事は何よりの収穫です。ただ、おかげでいらぬ評価を得てしまった事は反省しています。優子や瑞希とも、より親密になれたので本当によかったと思います。しかし、これも後日姉さんから――』

教師のコメント

先生も流石に君が高橋先生を倒してしまったと聞いた時は驚きましたよ。勉強を頑張るのは良い事ですが、あまり騒動は起こさないで下さいね。それにしても、日誌の最後で文章が途切れているのは一体・・・・・？

吉井明久の日誌

『あまりに多くのトラブルがあって驚いた。初日はいきなり意識を失って宿泊所に運ばれたので記憶がない。その後は覗き犯の疑いをかけられて、自分に対する周りの見る目について悩まされた。勉強についても、女子風呂を覗く為に頑張ろうと思ったけど今のやり方でいいか不安が残るし、色々と考えさせられる強化合宿になったと思う』

教師のコメント

そうですか。

第２６問　『夢追い人の終着点と、新たな物語の序章』

――処分通知――

文月学園第２学年全男子生徒総勢１４９名（ただし、天水鏡護を除く）

上記の者達を１週間の停学処分とする

文月学園学園長　藤堂カヲル

ついムラッときてやった。
今は心の底から後悔している。

～とある生徒の反省文より抜粋～

「で、結局こうなった、と……」

「まぁ、当然よね」

「あはは……でも今回は仕方ない部分もありますし……」

強化合宿明けの月曜日。Ｆクラスの教室にいるのは僕と島田さん、瑞希の３人だけです。

今日から１週間、僕以外の２年男子は停学で自宅謹慎ですからね。

・・・・・何故僕だけ処分を免れたのかというと、何でも明久が西村先生に僕の無罪を主張してくれたからだそうです。

今度明久には何か奢ってあげる事にしましょう。

「でも、３人だけでは授業になりませんよね……どうするんでしょう？」

「そういえばそうね」

「自習にでもなるんじゃないかな」

そんな事を話していると、

「おはよう。今日から１週間、この教室はお前達３人だけだな」

西村先生がやってきました。

「「「おはようございます」」」

挨拶を返すと、早速瑞希が質問しました。

「先生、授業はどうなるんですか？」

「うむ。停学中の男子共にも課題が出ているからな。こっちはこっ

ちで授業を進める」

「そうですか」

・・・・・自習ではなかったんですね。少しはサボろうかとも考えたんですが。

「天水、顔に出ているぞ」

「何がですか？」

「自習だったらサボる気だっただろう」

「イヤだなぁ。そんな事考えるわけないじゃないですか」

「どうだかな。そういえば今朝の職員会議で、お前も改めて要注意人物としてマークしていく事が決まったぞ」

「そんな……！」

「当たり前だ。覗きに参加しなかったとはいえ、学年主任を総合科目勝負で倒してしまったんだからな」

「横暴です！僕は真面目な一般生徒ですよ！」

「それから、お前には高橋先生からの特別課題が出ている。ありがたく受け取れ」

――ドサドサドサッ

「待ってください！何ですかこのプリントの山は！？」

僕の目の前に置かれたのは、とんでもない量のプリントの山、山、山。

「それでは授業を始める。教科書の――」

「無視しないでください！」

結局、その1週間は課題の山と格闘している間にあっという間に過ぎてしまいました・・・・・

そして翌週。男子の停学も明けて、今日からは全員が揃います。

「あれ？明久、今日は早いんだね」

いつも通り瑞希と優子と3人で登校してくると、校門のところで明久に会いました。

「あ、鏡護。それに姫路さんと木下さんも。おはよう。久しぶりだね」

「はい。おはようございます、明久君」

「おはよう、吉井君」

「おはよう。まぁ、久しぶりって言えば久しぶりかな？」

そのまま合流して、４人で話しながら校舎へと歩いていきます。

「一番最初のは誤解でしたけど、もう覗きなんかしちゃダメですよ？」

「そうよ。少しは覗かれる女の子の事も考えなきゃ」

「あはは……そうだね。でもやっぱり覗きは男の浪漫だからさ」

「少しは懲りたりしようよ……」

「でも鏡護だって２人の事は覗きたかったんじゃないの？」

「う……そ、それは……」

「ほら、やっぱり」

「「っ／／／／」」

――バキッ　ドスッ

「ぐふぉっ!?優子はともかく、なんで瑞希まで……」

左右にいた２人から、それぞれボディブローと踏みつけを喰らいま

した。

「ちょっと！アタシはともかく、って何よ！？」

「は、恥ずかしいのは禁止ですっ！」

「り、理不尽だ……」

「あはは。ドンマイ、鏡護」

そんな僕達を見て明久が笑います。・・・・・元はといえば君のせいでしょう！

「アキっ！」

と、遠くから威勢の良い声がしました。この声は・・・・・

「ん。久しぶりだね、美波」

明久が声の方に振り向いて挨拶しました。元気よく駆け寄ってきたのはやはり島田さんでした。・・・・・ん？表情がいつになく真剣ですが、何かあったのでしょうか？

「え？あれ？どうしたの？」

明久も、いつもと違う彼女の様子に戸惑っているようです。

「美波ちゃん、どうしたんですか？」

「美波、何かあったの？」

瑞希と優子も、心配そうにしています。

「アキ、目を瞑りなさいっ！」

「え？は、はいっ！」

島田さんの剣幕に押されて思わず、といった感じで明久が目を瞑ります。

すると――

「えっ！？」

「なっ！？」

「へっ！？」

「――っ！？」

――チュッ

突然島田さんが明久にキスをしました。

第２６問　『夢追い人の終着点と、新たな物語の序章』（後書き）

あとがき

作者　「原作第３巻、強化合宿編終了～！」

鏡護　「そして、祝ＰＶ１５万＆ユニーク１万突破～！」

作者　「いやぁ～めでたい事の目白押しだな」

鏡護　「そうだね。特にＰＶとユニークは読者の皆様のおかげです！」

作者　「まったくだ。今後もどうぞ拙作をよろしくお願いします！」

鏡護　「……ところで、何だかまた一波乱ありそうな幕引きだったけど……」

作者　「まぁ、あれで何も起こらないわけがないわな」

鏡護　「やっぱり……」

作者　「気になる続きは次回からの原作第４巻、恋愛騒動編を待ってくれ」

鏡護　「何だか凄く気になるよ～！」

作者　「お前が焦ってもしょうがないだろ。っと、忘れるところだった」

鏡護　「ん？何を？」

作者　「ＰＶ１５万を記念して何かやろうと思うんだが、その企画を読者の皆様に募集してみようかと」

鏡護　「へぇ。いいんじゃない？」

作者　「ではそういう訳で、『こんな企画をやってほしい！』というご意見がありましたら、感想の方にお寄せください！」

鏡護　「皆様からのたくさんのご意見をお待ちしております！」

作者　「あ、もちろん普通の感想でも結構です。そちらもお待ちしております！」

鏡護　「それでは、次回予告です！」

作者　「次回、第２７問『自分の時はそうでもないが、他人にやられると何故かムカつく（仮）』

を、」

作＆鏡　「「乞うご期待ください！」」

第27問　『自分の時は気にならないが、他人がやってると何故かムカつく』

バカテスト　英語

問　次の言葉を正しい英語に直しなさい。
『ハートフル　ラブストーリー』

姫路瑞希の答え
『ｈｅａｒｔｆｕｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ』
教師のコメント
正解です。映画や本の謳い文句によく見かける単語ですが、たまに　ｈｅａｒｔ　の部分を間違える人がいます。身近にある英語なのですが、意外とわかり難いようですね。
ちなみに日本語に訳すと『愛に満ちた恋物語』となります。是非そのような青春を皆で過ごしてもらいたいと思います。

島田美波の答え
『ｈｕｒｔ　ｆｕｌｌ　ｒｏｕｇｈ　ｓｔｏｒｙ』
教師のコメント
・ｈｕｒｔ……怪我
・ｆｕｌｌ……一杯の
・ｒｏｕｇｈ……荒っぽい
・ｓｔｏｒｙ……物語
意図的に間違えたのではないかと思うほど綺麗に間違えていますね。
そのようなハートフルラブストーリーを演じるのは貴女だけだと思います。

霧島翔子の答え
『ｈｕｒｔ　ｆｕｌｌ　ｒｏｕｇｈ　ｓｔｏｒｙ』

教師のコメント
まさかもう1人いるとは。

第27問　『自分の時は気にならないが、他人がやってると何故かムカつく』

「アキ、目を瞑りなさいっ！」

そう言って突然明久の唇を奪った島田さん。

一緒にいた僕、瑞樹、優子は、このあまりの出来事に思わず開いた口が塞がらなくなりました。

そんな感じで明久を含めた全員が呆けていると、

「そ、その……冗談とかじゃ、ないから……っ！」

島田さんは一言そう告げて走り去ってしまいました。

「吉井、歯を食い縛れっ！」

まだ自失状態から復帰できずにいると、今度は別の声が聞こえてきました。

声の方を向くと、そこにいたのは――硬く拳を握ってこちらに走ってくる須川君でした。

須川君は、馬の疾走のように鋭い踏み込みからその拳を明久目掛けて振り抜きました。

そして頬に拳を受けてその場にハリ倒される明久。何が起きているのかわかっていないようで、首を傾げています。

さらに一体どこから湧いて出たのか、Ｆクラスの皆がそれぞれ手に

得物を持って明久を囲い始めました。

そんな中、須川君はバッと弾かれたかのように明久から離れると、

「そ、その……冗談とかじゃ、ないからな……っ！……本気でコロス」

手を挙げて周りのみんなに指示を出しました。

「え！？え！？待って待って！僕にも事情がわからな――ぎゃあああっ！」

明久が制止を呼び掛けるも、皆は構わず明久をフクロにします。

そうして気絶した明久をつれて、皆は行ってしまいました。

「……明久、安らかに眠れ」

「あはは……」

「……って、ちょっと！助けなくてよかったの？」

呟いた僕の言葉に思わず苦笑いする瑞樹。まぁ、僕らはもう慣れっこですしね。

優子の方は慌てていますが、他クラスですから知らないのも無理はありません。

「今のはね、２－Ｆ異端審問会って集団なんだけど――」

そう言って、僕は優子に簡単に説明をしました。

「……なるほど。要するに彼女のいないＦクラス男子が徒党を組んで、ああいう恋人的行為を妬んでは断罪してるってわけね」

「まぁそういう事だよ」

「あれ？でもそういう事なら、鏡護なんか真っ先に断罪されるんじゃないの？」

「はい。付き合いはじめた頃はそれこそ毎日のように襲われてたんですけど、１回鏡護君が徹底的に懲らしめてからはさっぱりなくなったんです」

「……あ、そう……」

優子が瑞樹の説明を聞いて呆れています。
しかし実は瑞樹の説明したそれだけが理由というわけではなく、僕は審問会と秘密裏に不可侵条約を結んでいるのです。その条約とは、

『今後天水鏡護とその恋人には一切干渉しない事。その代わりに、僕が空乃月夜名義で出している小説を常時３割引で購入できる権利を与える』

というものです。

僕が“あの”『空乃月夜』だったという事実に彼らは大いに驚いていましたが、それならばと快く調印してくれました。
康太の経営する『ムッツリ商会』では、僕の小説は１０００円付近の値段で取引されている為、常時３割引というのは魅力的な提案だったのでしょう。

そんなわけで、彼らは僕達に手出しする事はなくなったのです。

「多分審問会はうちのクラスの教室でやってるだろうから、しばらくＡクラスに寄ってもいいかな？」

「いいわよ」

僕達はそうしてＨＲの時間近くまでＡクラスの教室で時間を潰しました。

―Ｓｉｄｅ　明久

どうしたんだろう？
何故か今日は今までになかったくらい教室内が静まり返っている。
いつも騒がしいＦクラスが嘘のようだ。

「……ん？」

ふと誰かの視線を感じたので、周囲を見回してみる。
すると、目が合いそうになって慌てて顔を伏せた人がいた。――美波だ。

な、なんだろう。まさかずっと僕の方を見ていたんだろうか。それ

って何だかその・・・・・好きな相手にする仕草、みたいじゃないか・・・・・。
そうやって考えていると、鼓動がドンドン速くなっていく。
う、うわ・・・・・何だか僕も恥ずかしくなってきたよ・・・・・
顔も熱くなってきたし・・・・・

『では須川君、この場合３ｍｏｌのアンモニアを得る為に必要な薬品は何ですか？』

『塩酸を吉井の目に流し込みます』
『違います。それでは、朝倉君』
『塩酸を吉井の鼻に流し込みます』
『流し込む場所が違うという意味ではありません。それでは、有働君』
『濃硫酸を吉井の目と鼻に流し込みます』

『『それだっ！』』

『それだ、ではありません。それと答える時は吉井君の方ではなく先生の方を見るように』

そんないつもと違う空気の中、１時間目の終了を告げるチャイムが鳴った。

「えー……、今日はここまでにします」

先生は大きな溜め息を吐いて、教室を出て行く。

『吉井のヤツ、島田と目と目で通じあってたぞ……！』
『島田は狙い目だと思っていたのに、あのクソ野郎……！』
『畜生……！姫路さんが狙えない状況で、木下に続いて島田までヤツに持っていかれたら、このクラスの希望はアキちゃん、鏡子ちゃんしかいねぇじゃねぇか……！』
『最後の人、うちの姉さんを忘れてるよ～（ボソッ）』

殺意の籠められた視線が飛び交う中、誰かが僕の席に近づいてくるのが見えた。
ピコピコと馬の尻尾を動かしながら歩いてくるのは、

「み、美波？」

「アキ。お、おはよ……」

目を伏せたままの美波から挨拶が聞こえてくる。

「う、うん。おはよう」

何故か僕も目を見られないでいた。相手が凄く怒っていて目が合わせられない事は何度もあったけど、こんなのは初めてだ。

「あ、あのねアキ。お願いが２つあるんだけど、いいかな……？」

「お願い？な、何かな？」

お互いに目を合わせないまま、会話は続く。

「えっと、1つは、アキの卓袱台を一緒に使わせて欲しいんだけど……」

「へ？卓袱台？」

「うん。ウチの卓袱台、先週美春と色々あって使いにくくなっちゃって」

言われて見てみると、美波の卓袱台はボロボロになっていた。天板はキズだらけだし、脚も1本折れている。確かにあれでは使いにくい事この上ないだろう。

「アキ。ウチと一緒でもいい？」

「あ、うん。いいけど」

「そう。ありがとっ」

パッと花が咲くように笑うと、

「じゃ、す、座るわね……」

美波は僕の隣に座った。

うん。それはべつにいいんだけど・・・・・

「……」

「な、何よアキ。何で黙り込むのよ」

「いや。その、別に……」

き、気のせいかな・・・・・。妙に距離が近いような・・・・・？

「そ、それとねアキ。２つ目のお願いなんだけど……良かったら、その……今日のお昼、一緒に食べない？」

２つ目は昼食のお誘い。な、何だ？今日の美波はいつもと違うぞ？

「あ、そ、そうだね。それじゃ、お昼に水飲み場で……」

返事をするだけなのに、何だか異様に緊張した。

「ううん。そうじゃなくてね、ウチがアキの分も作ってきたから――」

美波が手に提げた鞄から何かを取り出そうとしたその時、

「お姉さまっ！何をしているんですか！？そんなに豚野郎に密着して！？」

突如教室内に悲鳴のような制止の声が響き渡った。

「み、美春！？ウチの邪魔をしに来たの！？」

「当然ですっ！そこの豚野郎がお姉さまに密着している姿を見て黙っていられるはずがありませんっ！」

血の涙を流さんばかりに僕を睨みつけてくるのは、Ｄクラスの清水美春さん。その名前の通り女の子なんだけど、何故か男子よりも女子の美波に恋心を抱いてしまったというちょっと変わった子だ。

「み、密着って、仕方ないでしょ！？代わりの卓袱台なんてないし、狭いんだからくっつかないとダメだし……」

「お姉さま。それなら姫路さんのところでいいじゃないですか！どうしてその豚野郎のところにする必要があるのです！」

「そ、それは……。だって、その、瑞樹は天水と一緒に勉強してるから邪魔しちゃ悪いし。その点アキなら邪魔になってもならなくても、どうせ成績は悪いから……」

「美波。僕、微妙に悪口を言われてる気がするんだけど」

それなのに、なぜかホッとしてしまった自分がいる。・・・・・僕はどれだけ罵倒に慣れているんだろう。

「美波ちゃん。私は別に構いませんけど、せっかくなので明久君に勉強を教えてあげてください」

「そう……ね。ありがとう瑞樹」

「いいえっ！席を移動して、手作りのお弁当は美春と一緒に食べましょう！お姉さまが昨日お弁当用の食材を買っているのを確認してから、美春は何も食べずにたっぷりとお腹を空かせておきましたから！」

「でも、これはその、アキの為に」

「お姉さまが朝の四時に起きてわざわざお手製のタレで下味をつけた唐揚げとか、ちょっと奮発して買った挽肉で作ったハンバーグと

か、産地に気を使って選んだじゃがいもで作ったポテトサラダとか、考えるだけで美春は、美春は・・・・！」

「待ちなさい美春！どうしてアンタがそこまで知っているの！？」

最近、彼女はムッツリーニとタメが張れる程の隠密行動をするようになってきたと思う。新たな犯罪者予備軍の予感がするよ。

「しかもご飯のところにはハートマークですよ！？」

「美春ーっ！？」

美波が首まで真っ赤になって叫んだ。余程恥ずかしいのだろう。

「あのね、美春。よく聞いて。今までは我慢してきたけど、これからはそういうことはやめて欲しいの。だって――――」

美波が赤い顔のまま、清水さんにはっきりと告げる。

「――――だって、ウチはアキと付き合っているんだから」

「畳返しっ！！」

――シュカカカカッ

とっさに畳を盾にした僕のもとに無数のカッターが飛んでくる。危なかった。フローリングの教室だったら命を落としているところだった。

『『――チッ』』

教室中から舌打ちが聞こえてくる。刺さっている本数から察するに、1人頭2本以上はカッターを投げているようだ。おかしい。学校にそんなにカッターは必要ないはずだ。

「お、お姉さま……？冗談、ですよね……？付き合っているなんて……」

打ちひしがれたようによろめく清水さん。そんな彼女に、美波は静かに首を横に振った。

「冗談なんかじゃないわ。ホントの事よ」

「そ、それじゃ、お姉さま。美春の幻覚だと思った今朝のキスも、本当に……？」

何かを思い返す様に一瞬の静寂が訪れ、

「……うん」

小さく頷いた。

や、やっぱりそうか。あれは夢でも僕の妄想でもなかったのか。

「だからね、美春。これからもウチの」

「……男なんか」

「あくまでもお友達として」

「……男なんかが存在するから、お姉さまが……」

清水さんがプルプルと震えだした。

「美春、聞いてる？」

「男なんかが存在するからお姉さまが惑わされるんですーっ！」

と思ったらその直後、彼女は弾かれるように動き出した。標的は――僕！？

「この豚野郎を始末します！そして美春が第２の吉井明久となってお姉さまと結ばれるのです！」

「ちょ、ちょっと清水さん！？かなり錯乱してない！？僕を始末しても入れ替わる事は難しいと思うけど！？」

それ以前に、僕と美波って付き合ってるんだっけ！？

「極力身体に傷をつけないように始末した後、剥いだ皮を被って吉井明久になりすまします！」

「怖っ！っていうか凄くグロいよそれ！ちょっと本当に考えてそうだし！」

「大丈夫です！昔話でも良くあることです！」

「しかも原点は意外と子供っぽい！」

襲いかかってくる清水さんの動きは予想以上に早い。彼女は本当に人間なのだろうか？

この動きに対抗できるのは、ヤツしかいない。

「助けてムッツリーニ！清水さんを止めて！」

現代社会の忍者、土屋康太こととムッツリーニ。きっと君ならこの動きについていけるだろう。任せたよ、ムッツリーニ・・・・・！

「……今、消しゴムのカスで練り消しを作るのに忙しい」

《練り消し》　＞　《友人の命》

僕の命も随分軽く見られたものだ。

「くそっ！練り消しを作ってるフリをして飛び回る清水さんのスカートを目で追ってるムッツリーニなんて大っ嫌いだ！」

「……！！（ブンブン）」

否定のポーズを取りながらも、目線は外さない。異名は伊達じゃない。

「男なんてこの世からいなくなってしまえばいいんですっ！お姉さまに必要なのは美春なんです！」

「待って、清水さん！君にだってお父さんがいるでしょう？男なんていなくなればいいなんてそんな悲しい事を言っちゃダメだよ！」

「アレは誰より先に消えるべき男ですっ！」

彼女の父親はどんな人なんだろう。

「とにかく豚野郎は消えるべきです！そして美春はお姉さまと結婚して、生まれてくる娘に『未来』と名付けるのです！」

「待つんだ清水さん！息子が生まれたらどうするんだ！？」

「男なんかが生まれるのなら『波平』で十分です！」

「そんな、あんまりだよ！」

「2人とも！その前にウチと美春じゃ子供が出来ないって気付きなさいよ！」

それでも一応美波から1文字取っているあたりは流石と言っておこう。

「さぁ、5秒あげます。神への祈りを済ませなさい！」

「く……っ！」

ゆっくりと清水さんが近づいてくる。万事休すか……？

――ガラッ

「さぁ、授業を始めるぞ！今日は遠藤先生が別件で外しているのでこのオレがビシビシ――ん？やれやれ……また清水か……。授業が始まるから自分の教室に戻る様に」

て、鉄人！今日ばかりはアンタがこのタイミングで来てくれた事を感謝するよ！

「きょ、今日は先週までと違って特に大事な用なんです！西村先生、今だけ美春を見逃してください！」

「特に大事な用？どんな用だ？まさか先週みたいに『邪魔者のいない教室でお姉さまと授業を受けたいんです』とかじゃないだろうな」

僕らが停学中だった先週にはそんな事があったのか。

「いいえ！今日は『この教室に存在するすべての男子を殲滅する』と言う特に大事な――」

「今後この教室への立ち入りを禁止する」

――ピシャン！

鉄人は清水さんを教室から締め出すと扉を閉めた。

『お、お姉さま！まだお話が！せめてその豚野郎から離れて貞操を

――』

追い出されてもなお、ドンドンと扉を叩いてくる清水さん。

「清水、最近のお前の行動には目に余るものがある。……そんなに生活指導を受けたいか？」

扉を叩く音がピタリと止んだ。

流石に清水さんも鉄人の鬼の補習は怖いみたいだ。

『お姉さま……！卓袱台だから豚野郎の近くにいると言うのなら、美春にも考えがありますからね……！』

覗き窓越しに僕を睨みつけながら不穏当な台詞を残して、清水さんは僕達の教室を後にした。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第２７問　『自分の時は気にならないが、他人がやってると何故かムカつく』

あとがき

作者　「何やら波乱の幕開けを予感させる幕引きだったな」

鏡護　「ほんと勘弁して欲しいよ……」

作者　「フッ、甘いな。むしろこれからが本番じゃないか！」

鏡護　「まぁ確かに……」

作者　「さてさて、次回は何が起こるのやら」

鏡護　「はぁ……どうせまたロクでもない事が始まるんだよね……」

作者　「理解が早くて助かるな」

鏡護　「いい加減慣れたよ……慣れたくなんてなかったけど」

作者　「いや。結構結構」

鏡護　「それでは次回予告です。

次回、第２８問『感情が振り切れると、人間は限界を突破する（仮）』

を、」

作＆鏡　「「よろしくお願いしまーす！」」

第２８問　『嫉妬に狂ったヤツは何をしでかすかわからない』（前書き）

バカテスト　世界史

問　以下の問いに答えなさい。
『西暦１４９２年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

天水鏡護の答え
『クリストファー・コロンブス』
教師のコメント
正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られていないことが多いです。意地悪問題のつもりでしたが、天水君には関係なかったようですね。よくできました。

清水美春の答え
『コロン・ブス』
教師のコメント
フルネームはわかりませんでしたか。コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームというわけではありません。気をつけましょう。

島田美波の答え
『ブス』
教師のコメント
過去の偉人になんて事を。

第２８問　『嫉妬に狂ったヤツは何をしでかすかわからない』

「さぁ全員席に着け。教科書８６ページから始めるぞ。今日の内容は――」

清水さんが立ち去り、何事もなかったかのように授業が始まりました。ですが――

「はぁ……。またやってるよ……」

「ふふっ。２人とも、完全に授業なんてそっちのけですね」

僕と瑞希の席から視界に入った明久と島田さんはまた何やらやっているようです。

・・・・・だんだんクラス中から殺気が溢れ始めているのがわからないんでしょうか。わからないんでしょうね反語。

イチャつくのは構いませんが、時と場所は選んだ方が身の為ですよ？

『『もう我慢ならねぇーっっ！！』』

あ、とうとうキレました。

『さっきから見てりゃあ、これ見よがしにイチャイチャしやがって！』

『殺す。マジ殺す。絶対的に殺す。魂まで殺す』

『……お姉さまの髪に触るなんて……八つ裂きにしても尚、赦されません……！』

『出入り口を固めろ！今ここでヤツを確実に仕留める！』

ん？何でしょう？何故か清水さんの声が聞こえた気がしたのですが……

『全員カッターを投擲終了後、間髪容れずに卓袱台を叩きつけるのですっ！決してお姉さまに当たらぬよう注意するのですよっ！』

『『了解！』』

……いつの間に入ってきていたんですか？というか、Ｆクラスの皆も清水さんの指示に従わないでください。

そして、明久への攻撃が今まさに始まろうとしたその時、

「お前ら！今は授業中だぞ！！」

西村先生が騒ぐ皆を一喝しました。

「清水、授業はどうした？」

「そ、それどころじゃありません……！お姉さまが」

「清水」

地鳴りのような低い声に、流石の清水さんも押し黙りました。

「二度目の警告だ。おとなしく自分の教室に帰れ。それと、もう一度言うがこの教室の出入りを禁止する。わかったな？」

「……わかりました」

渋々、といった調子で教室から出て行く清水さん。去り際に明久を親の敵のように睨みつけるのも忘れません。

「お前等も授業中に遊ぶんじゃない。そういうことは休み時間にやれ」

・・・・・それは休み時間だったら明久がどうなってもいいという事でしょうか？

そして休み時間。

西村先生の言葉通り、Ｆクラスの面々は明久に襲い掛かっています。

「まったく。何をやってるんだか……」

「だが、今回は完全に明久に非があるからな」

「それにしても凄まじい攻防じゃな」

僕はというと、教室の端っこで雄二と秀吉と一緒に話をしています。下手に巻き込まれたくはありませんからね。

「……3人とも、面倒な事になった」

あれ？康太ですか？

「ムッツリーニか。どうした？」

「なにかまた厄介事かのぅ？」

「……（コクリ）」

何でしょう？

「……Ｄクラスで試召戦争を始めようとする動きがある」

・・・・・清水さん、そんなに明久が許せませんか？

「清水か……」

「じゃろうな……」

「あれ？どうしたの？皆して真面目な顔しちゃって」

おや。明久が帰ってきたようです。そこはかとなく全身ボロボロになってますね。

「おお、明久か。ちょうど良いところに来おったな」

「何？またトラブル？」

「ああ。お前のせいでな」

「え？僕？」

「うん。実はね……」

そうして、僕はDクラス（というか清水さん）がFクラスを相手に試召戦争をしようとしている事を説明しました。

「そ、そんな！僕は別にそんなつもりは……」

「じゃが、お主にそんな気はなくとも清水はそうは思っておらん」

「それに清水さんが言ってたでしょ？卓袱台だからナントカって。彼女は明久と島田さんを引き離すために僕達の机をまたみかん箱にするつもりなんだよ」

「そこで、だ。明久、お前に1つ確認しておきたい事がある」

「ん？何？」

「島田とお前は付き合っているのか？」

そういえば、実は僕も今朝から気になっていたんですよ。騒動のせいで今まで聞けませんでしたし。

「う～ん。僕の記憶だと、付き合ってはいない、と思う……」

自信なさげな答えですね。

「じゃが、島田の態度は明らかに付き合っている者のそれじゃったぞ？」

「うん。それは多分、強化合宿の時に僕が送った間違いメールが原因で――」

明久が僕達に事情を説明します。

「つまり話をまとめると」

「今回の騒動は僕と雄二のせいって事？」

・・・・・何という事でしょう。

「そうだよ。２人とも、腹を切って詫びるべきだよ」

「まったく。最悪のタイミングでやらかしたものじゃな……」

「う……すまん明久」

「ごめん」

流石に申し訳なくなって２人で謝罪します。

「……けど、そもそもの原因は明久の確認不足」

「うっ。確かに」

康太の指摘に、明久もそれ以上は何も言いませんでした。

「だが何にせよ、誤解だというのなら話は早い」

「そうだね。Ｄクラス、っていうか清水さんに『島田さんと明久は

付き合っていない』って事実を伝えれば、事態は沈静化するはずだよ」

「そしてワシらはいつも通りの日常を取り戻せる、というわけじゃな」

「何だ。簡単じゃないか」

「……作業を始める」

そうですね。それは康太にお任せしましょう。

「あ、あの、明久君っ！聞きたい事がありますっ！」

瑞希？そんなに慌ててどうしたんですか？

「ど、どうしたの姫路さん？」

「そ、その……っ！あ、明久君が……美波ちゃんに告白したって本当ですか……？」

・・・・・ああ、なるほど。島田さんから話を聞いたんですね。

「え、えっと、その話なんだけど……」

流石に誤解だとは言い辛いんでしょう。

「姫路、その話なんだが、島田と一緒の方がいいだろう。どこにいるかわかるか？」

「美波ちゃんなら、さっきまで一緒に屋上にいましたけど……」

「よし、それなら俺達も屋上に行くか。ここで話すのもなんだしな」

移動ですね。それなら――

「康太。屋上に盗聴器があるか、調べられる？」

「……問題ない」

相変わらず、頼もしい限りです。

そして屋上に到着しました。

康太は早速盗聴器の有無を確認してくれています。

「あ、瑞希――とアンタ達も？皆揃ってどうしたのよ？」

驚いた様子で島田さんがこちらを見ています。

「ちょっと明久の話を聞いて欲しくてな」

「アキの話？」

そう言って明久の方を向く島田さん。

「あー、えっと……」

明久が言い淀みます。真実を話した後で自分がどうなるか考えて怖

気づいているのでしょうが、腹を括ってください。

「神よ、ご加護を……！」

「？何してるの、アキ？」

「うん。まぁ、ちょっとしたおまじないだよ」

明久が胸の前で十字を切ります。安心してください。骨は拾ってあげますから。

「美波、実は強化合宿の時に送ったメールなんだけど……」

「あ、あのメールがどうしたのよ？」

明久の台詞に、目に見えて動揺する島田さん。わかりやすいですねぇ。

「実はアレは――誤解なんだ」

「……え？」

真っ赤な顔のまま、島田さんがフリーズしてしまいました。

「いや、誤解っていうか、送り先を間違えたと言った方が正しいのかな」

「ま、間違えたって、だ、誰と……？」

まだフリーズしたままの島田さん。いつ復活しますかね？

「須川君、かな」

明久……あんなメールを送られたら、きっと須川君だって困りますよ？

「「えええっ！？」」

ほら案の定、というか瑞希まで一緒に驚いてます。

しかし、意外と簡単に復活しましたね。

「じゃ、じゃあ、アキはウチじゃなくて須川に告白したつもりだったの！？」

「そ、そんな！明久君は何だかんだ言っても女の子が好きなんだと思っていたのに、やっぱり男の子を、しかも坂本君でも木下君でも久保君でもなくて、須川君が好きだなんて……！」

瑞希、その認識はあんまりだと思いますよ？

ちなみにですが、今挙がったそれぞれが相手のＢＬ本は既に刊行済みです。

タイトルはそれぞれ、

『バカと次席と秘密の勉強会』（久保×明久）

『バカと野獣と狂乱の宴』（雄二×明久）

『バカと演劇バカと艶技指導』（明久×秀吉）

の3冊で、作者はもちろん僕です。

・・・・・え？自分の友人をＢＬのネタにするな、ですって？

大丈夫です。作家としての僕は普段の僕とは完全なる別人、という認識ですから。

あ、そういえば須川君のは書いてないですね。まぁ注文がないので今のところ書く予定もありませんが。

「で、でも、坂本より好きだなんて言われたら普通誤解するでしょ！？」

「しないよ！僕は普通に女の子が好きなんだから！」

・・・・・何だか指摘するポイントが違くないですか？

「あ、明久……。俺はどんな返事をしたらいいんだ……？」

雄二がいつぞやの秀吉を真似た返事をしました。まったく、悪ふざけも程々にしてくださいね？

「普通に嫌がれ！」

屋上に明久の絶叫が響き渡りました。

それを聞いて、雄二は楽しそうに笑っています。

「まぁとにかく、そんなワケで間違いメールだったんだよ」

「そっか。誤解だったのね。ウチもちょっとおかしいな、と思ったんだけど、やっと納得がいったわ」

「あはは。美波はそそっかしいなぁ」

「もうっ。送り先を間違えるアキには言われたくないわよ」

二人で楽しそうに笑って見つめ合う事しばし――

「どうしてくれんのよー!?ウチのファーストキスーっ!?」

突然島田さんが明久の胸倉を掴んでガックンガックン揺さぶりました。

「ごごごめんなさいっ!僕も悪気はなかったんですっ!」

もし悪気があったら大変ですよ?

「ごめんで済む問題じゃないでしょ!?」

その通りです。

「そ、その美波」

「何よ!?」

「えっと――僕も初めてだったから、おあいこって事じゃ、ダメか

な……？」

「「ダメに決まってんだろ（るでしょ）」」

この期に及んで何を言ってるんですか君は。

「え……？そ、そうなんだ……。それは、その……えっと……ご、ご馳走さま……？」

「ぅおぃっ！いいのか島田！？」

雄二が鋭いツッコミを入れます。まぁ本人が満足しているなら、僕は何も言いませんけどね。

「あのさ美波。怒らないで答えて欲しいんだけど」

「え？何？」

「僕と美波が付き合っているって話なんだけど、あれってもしかして、美波が僕の事を……その、す、好き、とか……？」

「あ……！そ、それは……っ！」

おや、何だか面白い展開になってますね。

「雄二、どう見る？」

小声で雄二に話を振ってみます。

「ん？ああ、アレか。まぁ島田の事だ。素直には答えないだろ」

「そっか。もったいないね。折角のチャンスに」

「だから島田なんだろ」

やはりツンデレはそう簡単にはデレないという事ですね。

「あ、あれはね、ほらっ。美春があまりにもしつこいから、彼氏でもいたら諦めてくれるかと思って、それでタイミングよくアキが告白してきたもんだから……」

「ああ、なるほど。そういうことか」

ん？何だか明久がガッカリしているようですね。・・・・・実は本当に脈アリなのでは？

「むぅ。島田にも困ったものじゃな」

「……見ていて歯痒い」

秀吉と康太も僕と同意見のようです。

「まぁ、どっちにしても苦しい言い訳だな」

「告白が誤解だなんて言われて、そうやって誤魔化したくなる気持ちもわかるけど……」

「1人以外にはバレバレじゃぞ？」

「……素直じゃない」

「べ、別に言い訳とかじゃなくてホントに……っ！だ、誰がこんなバカと！」

酷い言われようですね、明久。

その後、相変わらず余計な事を言って悲鳴を上げている明久は放っておきまして。

「これで誤解は解けたようじゃな」

「うん。後はこの話を清水さんに伝えれば、万事解決だね」

「そうだな。これで清水も納得するだろ」

「……話は上手く伝えておく」

「よろしく、康太」

「……（コクリ）」

これにて一件落着、となればいいんですが……何故か嫌な予感がするのは気のせいであって欲しいですね。

明久が島田さんの誤解を解いてから時間は過ぎて、今は昼休み。
康太がまた妙な情報を入手したと言って確認しに出て行きました。
やはりまだ何かありそうですね。

「……ただいま」

「あ、お帰り康太。で、どうだった？」

「どうした？また何かあったのか？」

「ムッツリーニ？またどこかに行ってたの？」

「今度は何事じゃ？」

僕のところに雄二、明久、秀吉もやってきました。

「……今朝よりも良くない状況になってきている」

そう言うと、康太はおなじみの小型録音機を卓袱台の上に置いてスイッチを入れました。
スピーカーからは雑音交じりの会話が聞こえてきます。

『土屋君。吉井君のセーラー服姿の写真を取り扱っているという噂を耳にしたのだが、それは本当かい？』

『……１枚１００円。二次配布は禁止』

『構わないよ。僕が個人的に楽しめればそれで』

――ブツッ

「……再生するファイルを間違えた」

「ねぇ何!?今の会話は何!?僕にとっては今の会話こそが十二分に良くない情報だったんだけど!」

「うるさいぞ明久。つまらん事でガタガタ喚くな」

「全然つまらない事じゃないよ!どうして僕の女装写真が秀吉の写真と同じように裏で取引されてるの!?」

「ちょっと待つのじゃ明久!今のお主の台詞の方がワシにとっては余程良くない情報なのじゃが!?」

思わぬ情報の暴露に明久と秀吉が騒ぎ出します。その隙に、僕は康太に小声で話し掛けます。

「久保君は色々吹っ切れちゃったみたいだね」

「……強化合宿以来、お得意さま」

「そっか……」

・・・・・明久、強く生きてください。

「……こっちが本物」

そう言って、同型の録音機を取り出す康太。持っている録音機は1

つじゃなかったんですね。

『Fクラスの様子はどうだ？』

『何かまたバカな事をやっていたようで午前中は点数補充もやっていないみたいだ。あの様子だと、こっちの意図に気付く事もないだろうな』

『そうか。それならいい。当面は俺達も点数補充をして、向こうにこちらの動きが気取られたら即座に宣戦布告を行おう』

『了解』

「……これはまた厄介な事になってるみたいだね」

嫌な予感は的中してしまったようです。

「これってDクラス？だとすると、まだ誤解が解けてないってだけなんじゃない？」

「……（フルフル）」

明久の質問に康太が首を振って答えます。

「Dクラスが既に大人しくなっているのは確認済みだ。これは恐らく別のクラス――指示を出しているのが男子生徒という事から見ても、これは」

「……Bクラスの会話」

やはりそうですか。

「Bクラス!?どうして!?」

「根本のヤツだよ。まったく……随分姑息な事を考えてくれるじゃないか。流石は腐っても《卑怯者》といったところだね」

「鏡護の言う通りだ。あのゲス野郎、フザけた真似をしやがって」

さて、ここからが問題ですね。

「おそらく根本の目的は試召戦争の時の仕返しと、自分への非難を抑える事だろうね。まぁ後者の方が理由としては大きいかな」

「ああ。いくらヤツがクラスでの立場がないに等しいとはいえ、『覗き騒ぎの主犯であるFクラスを粛清する』という大義名分があればクラスを動かせるだろうしな」

「そうしてFクラスを完全に打倒する事で発言力を取り戻し、なおかつ自分の恨みも晴らすって寸法だね」

「ふむ……そうなるとちょっとやそっとの理由では戦争は回避できんというわけじゃな？」

「……しかも今のFクラスは点数補充ができていない」

「そうだ。ただでさえ普通にやったら勝ち目のない相手から、まともに戦えるのが3人だけの今の状況で勝ちをもぎ取るのは不可能だ。

Dクラスならまだしも、Bクラス相手で今の状態じゃ万に一つも勝ち目はない」

先程康太が言っていた通り、今朝よりもさらに深刻な状況になっています。

「ならば今からでも申請をして、午後は補充テストを受けるべきではないか？」

「そうだね。それがいいよ」

「……いや、それじゃダメだ」

僕は秀吉と明久の提案を否定します。

「え？」

「どういう事じゃ鏡護？」

「今は時間稼ぎをするべきなんだよ。Bクラスから宣戦布告されるまでの時間をね」

「時間稼ぎ？そんな事をして何の意味があるの？」

「いいかい明久。今Bクラスから宣戦布告されたら、僕達は必ずBクラスと戦争をしなくちゃいけない。そしてもしそうなった場合、僕達は１００％負ける。でもまだ宣戦布告をされていないから、Bクラスとの戦争は回避できる可能性があるんだよ」

「でも、根本君には戦争を起こす理由がたくさんあるんだよね？と

ても取り止めてくれそうにないけど」

「うん。だから、Ｂクラスが戦争をできない状況を作るんだ。幸い、試召戦争のルールではクラス毎の１対１しか認めていないからね。つまり」

「他のクラスとＢクラスを戦わせるとか？」

「いや、そうじゃなくて僕達が他のクラスと戦うんだよ」

「他のクラスとワシらが戦う……なるほど。その間はＢクラスから宣戦布告をされずに済むし、戦争後は点数補充をする事ができるから、という事じゃな」

「その通りだよ」

試召戦争の細かなルールの１つに、１つの戦争が終わった後の点数補充というものがあります。例え連戦になったとしても、１つ戦争が終わる度に消耗した点数を補充する期間をもらえるのです。このルールがなかったら、どんなクラスでも簡単に負けてしまいますからね。

「先の戦いでは疎ましいと思ったルールじゃったが、今回はそのおかげで助かりそうじゃな」

「しっかり点数補充をして僕達にＢクラスと戦うのに充分な力があれば、向こうも迂闊に戦争を起こそうとは思わなくなるだろうからね」

「確かに、僕らが万全の状態だったらＢクラスは攻めてこないんだ

ろうけど……」

「じゃが、その相手はどうするのじゃ？ワシらは例のペナルティで試召戦争を仕掛けることはできん。どこかのクラスに攻め込まれるしかないはずじゃが」

明久と秀吉の懸念はもっともです。しかし、その点も抜かりありません。

「もちろん相手はＤクラスだよ。Ｂクラス相手じゃ危険だけど、Ｄクラスなら勝つ事は難しくても負けない程度の戦いはできるからね。ありがたい事に、Ｄクラスも開戦派と非開戦派の論争で点数補充がまだ終わってないんだよ。ね、雄二？」

「ったく、やっと俺に振ったと思ったらほとんど言いたい事は言われた後じゃねぇか」

雄二が不満を零します。

「まぁまぁ。で、もう作戦は決まってるんだよね？」

「ああ。当然だ」

そう言って不敵に笑う雄二。これは期待しても良さそうですね。

第２８問　『嫉妬に狂ったヤツは何をしでかすかわからない』（後書き）

あとがき

作者　「面白い事になってきたな！」

鏡護　「僕達にとってはまさに瀬戸際なんだけど……」

作者　「だって俺から見たら他人事だし」

鏡護　「……そうだよね。作者さんってそういう人だったよね」

作者　「他人の不幸は蜜の味、ってな」

鏡護　「もうツッコむ気も起きないよ……」

作者　「だが、回避の為の作戦はあるみたいじゃないか」

鏡護　「そうだね。雄二の頭脳に期待、かな」

作者　「まぁ、きっと何とかなるって」

鏡護　「うん」

作者　「さて、前々回から募集しているＰＶ１５万突破記念企画ですが……」

鏡護　「どうなった？」

作者　「まだ決まってません！」

鏡護　「……大丈夫なの？」

作者　「っていうか、このままだとＰＶ２０万突破記念に昇進しそうです！」

鏡護　「……ダメじゃない？」

作者　「というわけで、改めて告知します！『こんな話を書いて欲しい』というのがありましたら、感想の方にお寄せください！」

鏡護　「よろしくお願いします！」

作者　「宣伝も終わったところで次回予告！

次回、第２９問『恋人のフリをする話ってよくあるけど、これは……（仮）』

を、」

作＆鏡　「「ご期待ください！」」

第２９問　『恋人のフリをする話ってよくあるけど、これは何かが違う』（前書

皆さん、お久しぶりでございます。
『リリなの～蒼銀の守護者～』の方がある程度進んだので、こちらへ戻ってきました。

それでは、本編スタートです！

第２９問　『恋人のフリをする話ってよくあるけど、これは何かが違う』

「じゃが雄二に鏡護。勝算があるのなら、何ゆえＤクラスとの勝負を受けなかったのじゃ？」

先程の僕の言葉に引っ掛かったのか、秀吉がそんな事を聞いてきました。

「違うぞ秀吉。勝算はない。ただ、負けない勝負ができるというだけだ。勝つ事ができないから、ひたすら引き分けの為に戦う。そんな面倒な事、やらないで済むならやりたくないだろう？」

そういう事です。人間誰でも、無駄な事はなるべくしたくないと思うものですから。

「あれ？でもさっきの話だと、やっぱり戦争はするんだよね？だったら何で午後を点数補充に使わないの？」

「お前の耳は飾り物か？さっきのムッツリーニの話を思い出せ」

雄二に指摘されて明久が考え込む事しばし、

「ムッツリーニ！１枚１００円は安すぎるよ！秀吉は５００円なのに！」

「ほほぅ。５００円か……２人とも、ワシの写真について少々話を聞かせてはもらえんかの？」

明久からもたらされた情報に、秀吉が明久と康太へと詰め寄ります。

「……全て秘書がやった事」

「そんな政治家みたいな！」

「お前ら全然危機感を抱いてないだろ」

そんな3人を、頭に手を当てて呆れている雄二。確かにもうちょっと真面目に考えてください。

「さっきの情報で、根本は『こちらの動きを気取られたら即座に宣戦布告を行う』と言っただろう？」

「ああ、そっちね。確かにそんな事言ってた」

「つまり向こうは僕達が向こうの動きに気がつくまでは点数補充を続けるつもりって事だよ。これは逆に言うと、向こうの点数補充が終わるか僕達が向こうの動きに気付くまでは宣戦布告をしてこないっていう事になる」

Bクラスがかなり念入りに点数補充をしているのは、おそらく前回の戦争で僕達相手に苦汁を舐めさせられた事が効いているのでしょう。ある程度補充を終えないと不安になる気持ちはわからないでもありません。

「ふむ。ならば明日までは猶予がありそうじゃな」

「そうだね」

「そうなの？今日中に攻め込んでくる可能性はないの？」

秀吉の言葉に頷く僕に、明久が疑問を投げかけてきました。

「今朝西村先生が言ってたじゃない。試験召喚システムは今メンテナンス中で明日まで試召戦争はできないって」

「そうなんだ。今朝はそれどころじゃなかったから知らなかったよ……」

・・・・・そういえば、明久は朝から異端審問会にかけられてたんですよね。

「そういう訳で、これから俺達はＤクラスに宣戦布告させる為に工作を始める。期限は今日一杯。もし失敗すれば、俺達はまたみかん箱とござの教室に逆戻りだ」

この作戦、失敗は許されません。もしまた設備がみかん箱とござになれば、今度こそ瑞希は転校させられてしまうでしょうから。

「それで、具体的な案はどうなのじゃ？」

「今朝の一件を利用する。明久と島田をくっつけて清水を焚き付けるんだ」

なるほど。まぁ確かに、それが一番手っ取り早いですしね。

「え？でも、あの話は誤解だって」

「事実はこの際置いておこう。お前と島田はこのクラスの為に仲睦

まじい恋人同士を演じるんだ。清水が嫉妬に狂う程にな」

「えぇぇっ！？そ、そんなの無理だよ！美波はあの話ですっかりヘソ曲げちゃってるんだよ！？」

「明久、無理でもやらなきゃダメなんだよ」

「そうだ。演技に関しては秀吉に任せる。台本なんかも用意できるようなら頼む」

「了解じゃ」

「それからムッツリーニは情報収集及び操作の方を続けてくれ。鏡護は俺と一緒に作戦が成功した時の為に対Ｄクラス戦の準備だ」

「……わかった」

「了解」

「さて、そうと決まれば暢気に飯を食ってる暇はないぞ。姫路と島田が教室に戻ってき次第行動開始だ。ムッツリーニ。この教室の盗聴器は無力化されてるんだよな？」

「……大丈夫」

「な、何て事に……」

今回の作戦は、今までと違って外交戦と情報戦です。キーマンが明久という事に不安はありますが、やるしかありませんね！

「それで、ウチにどうしろって？」

教室に帰ってきた女子2人に早速事情を話したところ、島田さんが案の定明久を半眼で見ながらそう答えました。・・・・・どうやらまだ怒りは収まっていないようですね。

「明久と付き合っている演技をしてもらいたい。それも周りで見ているヤツらがムカついて血管が切れそうになる位ベタベタな感じでな」

そんな中で雄二がこちらの要求を告げます。

「絶対にイヤ」

当然断ってくる島田さん。まぁ今朝あんな事があったばかりで今度は付き合う演技をしろだなんて、質の悪い冗談にしか聞こえないでしょう。

「そこを曲げて何とか協力して欲しいのじゃ」

「ウチは何と言われてもイヤ。こんなバカと恋人同士だなんて、冗談じゃないもの」

島田さんは拒否の姿勢を崩す気は全くないようです。

仕方ないですね・・・・・あまり使いたくはありませんでしたが、『あの手』を使うとしましょう。

「島田さん。一度冷静になって考えてみてくれないかな。確かに色々と思うところはあると思うけど、もし今ここで静観を決め込んだりしたら、後になってきっと後悔する時が来るよ。例えば、瑞希の転校とかね。そうなった時に、島田さんは自分を責めないでいられる？」

「うっ……それは……」

もし今回の戦争に負けて設備が今よりも酷くなったら、清涼祭の時のように瑞希の転校話が浮上するかもしれません。そんな事は島田さんも望んではいないはずです。

ついでに瑞希にアイコンタクトを送ると、瑞希は小さく頷いてから島田さんに頭を下げて、

「美波ちゃん、明久君。気が乗らないかもしれませんけど、お願いしますっ。すごく個人的な理由で申し訳ないんですけど、私やっぱり転校なんてしたくないんですっ」

そんな事を言いました。上手く僕の前フリに便乗してくれましたね。

「え、あ、いや。僕はもちろん協力するけど……」

明久がそう言いながらチラっと島田さんに目をやると、島田さんは頭を掻き雀らんばかりの様子で一言。

「あ～、もうっ！わかったわよ！とりあえず形だけでもやればいいんでしょ！けど、演技の内容次第じゃ、どうするかは知らないからね！」

「美波ちゃん、ありがとうございます！」

瑞希がもう一度島田さんに向かって深く頭を下げます。

「ま、まぁ、確かに畳や卓袱台はこの前買ったばかりだし……別に瑞希の為だけってわけじゃないんだから、そこまで気にしなくても……」

瑞希から顔を背けながら、島田さんがそんな事を言っています。相変わらず、素直じゃないですねぇ。

「そうと決まれば、早速演技開始じゃな。2人とも、これを受け取るのじゃ」

秀吉がそう言って2人に台本を手渡します。

「これって台本？いつの間に用意したのさ」

「ほとんどがワシの持っておった台本からの引用じゃからな。さして手間は掛かっておらんぞい」

それにしてもさっき雄二から指示を受けてから5分程度で台本を書き上げてしまうなんて、演劇に関する秀吉の熱意は一味違いますね。

「それじゃ、お前らはそいつを持って屋上で演技開始だ。ムッツリーニ、清水の盗聴器はどうなっている？」

「……さっきは接触不良を装っただけだから、今はまた動くようにしてある」

「そうか。だとしたら、演技以外の会話は一切しないようにするんだ。清水にバレたら元も子もないからな」

「ちょっと待ってよ。まだ台本を憶えるどころか目を通してもいないのに」

「……大丈夫。屋上のカメラには死角がある。台本を読みながらの演技でいい」

そう言うと、康太は簡単な屋上の見取り図を紙に書いて死角となるポイントを明久に教えます。

「それは助かるけど……でも、せめて内容くらいは確認させてくれない？変なシーンとか入ってるかもしれないし。その……キスシーンとか……」

いや、いくら何でもそこまでは要求しないと思いますよ？

「安心せい。そのようなシーンは入れておらん。それよりも、時間がないから急ぐのじゃ」

取り付く島もなく、明久と島田さんは秀吉に背中を押されて教室から出て行ってしまいました。

僕達は教室で康太の盗聴器で一部始終を聞く事になっています。さて、どうなる事やら・・・・・

―Ｓｉｄｅ　明久

ムッツリーニに教えてもらった死角を伝って屋上の隅へと移動する。
そして台本を取り出して美波とアイコンタクトを交わした。さあ、演技開始だ。
台本の１ページ目を見る。そこにはそれぞれの名前と台詞が書いてあった。

島田『ねぇ、アキ』

明久『ん？なに、美波？』

島田『今さらだけど……アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの』

明久『え？そんなの今さら言われなくても……』

島田『それでも聞いて欲しいの。確かに今朝は気持ちが先走ってキスはしちゃったけど――でも、こういう事はハッキリさせておきたいから……』

明久『う、うん、わかった。それじゃあ聞かせて欲しい。美波の、本当の気持ち』

それぞれの台詞を見て血の気が引いていく。な、何だコレは。新手

の罰ゲームか何かなんだろうか。

「……」

隣では美波も同じように台本を見たまま固まっていた。
でも、今はとにかくやらなくちゃ。僕は美波ともう一度アイコンタクトを交わして演技を始めた。

「ねぇ、アキ」

「ん？なに、美波？」

台本通りの台詞を喋る。台本を見ながらだから楽だね。

「今さらだけど……アキにきちんとウチの気持ちを伝えておこうと思うの」

「え？そんなの今さら言われなくても……」

それにしてもこの台本、何故か僕の台詞にだけ丁寧にふり仮名が振ってある。
親切設計だけど――何だかバカにされているようで悔しい。僕だってこれくらいは読めるよ！

「それでも聞いて欲しいの。……こういう事はハッキリさせておきたいから……」

あれ？今何か台詞が飛んだみたいだけど・・・・・って、ああキスの部分か。そりゃこんなところで改めて言うのは恥ずかしいよね。
僕も面と向かって言われたら恥ずかしいし・・・・・。どうやら美

波は自分の意に沿わない部分はアドリブを入れながらやるようだ。

「う、うん、わかった。それじゃあ聞かせて欲しい。美波の、本当の気持ち」

台詞を言い終えてから自分の頬が熱くなっている事に気がつく。コレは想像以上に恥ずかしいぞ・・・・・！

それでも今さら止める訳にはいかないので次のページに進む。次は美波の台詞からだけど・・・・・

島田『わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ……。あのね、ウチは……アキの事が好きなのっ！』

読んだ瞬間鼻から胃液が逆流しそうになった。

こ、こんな台詞を言われるの！？っていうかこんな台詞、美波は言えるんだろうか？

「わ、わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ……」

しおらしく、弱々しく言葉を紡ぐ美波。

「あのね、ウチは……アキの事が――」

今の美波は本当の気持ちを告げる為に、僕を屋上に呼び出したいじらしい女の子という設定だ。きっと可愛らしい告白をしてくれると・・・・・

「アキの事が――嫌いなのっ！」

僕はそんな事を言われる為に呼び出されたのか。

「み、美波……？」

「初めて会った時からアキの事が嫌い！あれからずっと友達として傍にいるのが辛かった！本当は友達でいることなんて、我慢できなかったのに！」

なんだろうこの斬新過ぎる告白は。わざわざ屋上まで呼び出しておいて、初めて会った時からずっと嫌いだったと言われるなんて。

「美波……」

「アキ……」

と、とにかくこれはフォローしないと！僕は台本に目を走らせて次の台詞を確認すると、たっぷりと気持ちを込めて美波の目を見つめながら言葉を紡いだ。

「僕もずっと、同じ気持ちだった」

美波の繰り出す拳が、この時ばかりはとても理不尽なものに思えた。

「まったくお主らは、何という失態を……」

「流石にアレはないよ……」

教室に戻った僕らを待っていたのは、頭に手を当てて呆れ果てている秀吉達だった。

「だ、だって仕方ないじゃない！録音されているかもしれないのに、あんな台詞言えるわけないでしょ！？」

「そ、そうだよっ！それに美波があんな可愛い台詞を言える訳が――って、あれ？右手の感覚がなくなってるような？」

美波が掴んでる僕の右肘が酷い事になっているように見えるのは、きっと気のせいだろう。

「あ、それなら木下君。お手本を見せてもらえませんか？」

姫路さんが手をポン、と叩きながらそんな事を言った。なるほど。確かに演技のプロのお手本を見せてもらえば、僕らも少しはまともになるかもしれない。・・・・・まぁ手遅れ感は否めないけど。

「んむ？別に良いが」

そう言って秀吉は台本を手に取ると、少しの間じっと見つめていた。

「よし、と」

そして台本を置いて僕の手を取る秀吉。

「え？え？」

僕はいきなりの事に戸惑う。けれど秀吉は気にする事なくキュ、と弱々しく僕の手を握り締めて顔を上げた。

「わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ……。あのね、ウチは……アキの事が好きなのっ！」

「！？」

いきなりの秀吉の告白。僕の手を握って頬を染めながらも懸命に言葉を紡ぐ秀吉は言葉に言い表せない程に可愛かった。

「初めて会った時からずっとアキの事が好き！あれからただの友達として傍にいるだけなのがずっと辛かった！本当はただの友達でいるなんて、我慢できなかったのに！」

矢継ぎ早に繰り出される殺人級の台詞に頭がショートしそうになる。こんなに一生懸命に想ってくれるなんて、心の底から嬉しい。

「アキ……。あんな事しちゃった後で今さらだけど、改めて……貴方の事が好きです。ウチと、付き合ってください」

もうダメだ。こんな事を言われたら正気を保ってなんかいられない。

「母さん……。今僕は、初めて貴女に心から感謝します……。僕を産んでくれて、本当にありがとう……」

「――とまぁ、こんな具合じゃ」

スッと手から温かい感触が消える。あ、あれ？さっきの幸福感は？

「す、凄いわね……」

「そ、そうですね……。私が告白されたわけじゃないのに、思わずドキドキしちゃいました……」

「そこまで褒められると照れ臭いのじゃが……。まぁワシは勉強もせんでコレばかりやっているような人間じゃからの。これくらいは当然じゃ」

秀吉が頬をポリポリと掻いている。

そ、そっか。さっきのは演技のお手本だったのか・・・・・

「？明久君、どうして泣いているんですか？」

「何でもないよ姫路さん……。ただ、少しの間だけ僕をそっとしておいてくれないかな……？」

幸せな夢ほど目が覚めた時に辛いものはない。僕は今その事実を痛いほど実感している。

「とにかく、今ならまだ取り返せる範囲じゃ。ここからはきっちりと恋人同士を演じてもらうぞい」

「「え！？まだやるの！？」」

「当たり前じゃ。次は島田と明久が教室を抜け出して逢引をしているという設定でやるぞい。明久と島田は腕を組むのじゃ」

「「……」」

美波と顔を見合わせる。それはいきなりハードルを上げ過ぎじゃないだろうか？

「明久、島田。先程の失敗を取り戻す為に頑張るのじゃ。視覚的な効果は役作りの上でお主ら自身にも都合が良いのじゃ」

「わかったわよ。……一応腕を組むけど、他のところに触ったりしたら殺すからね……」

「りょ、了解。気をつけるよ」

そして腕を組んで2人で廊下を歩く。

「あはは。美波、そんなにギュッとされたら歩きにくいよ」

「ふふっ。別にいいでしょ？ウチらは付き合ってるんだから、これくらい」

僕の肘関節から嫌な音が聞こえてくるけど、それでも笑顔は崩さない。だって今の僕らは恋人同士なんだから。

「でも美波、そのせいでさっきから当たってるんだけど」

「え！？こ、この、スケベっ！」

「――アバラ骨が」

ゴキッ！

その瞬間、僕の肘関節が天に召された。

「うふふふ。アキってば、冗談が好きなんだから。本当に可愛いわね」

声を上げる事もできずに気絶してしまった僕には、美波の最後の言葉は耳に入らなかった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第２９問　『恋人のフリをする話ってよくあるけど、これは何かが違う』（後書き）

あとがき

作者　「皆さん、お久しぶりでございます！」

鏡護　「本当に久しぶりだね。１ヶ月ぶりくらい？」

作者　「おう。だいたいそんなもんだな」

鏡護　「こっちから何通もメール送ってたのに全部無視してたでしょ」

作者　「うっ……それは……」

鏡護　「まぁいいよ。こうして戻ってきてくれたから」

作者　「すまんかった。これからはもうちょっと上手くやるから」

鏡護　「はいはい。頑張ってね」

作者　「そういえば、長らく更新していなかった間に大変な事になってたな」

鏡護　「そうだね……」

作者　「という訳で……ＰＶ２５０，０００＆ユニーク１５，０００突破おめでと～！」

鏡護　「わー！パチパチパチ～！」

作者　「長きに渡り更新がなかったにもかかわらず足を運んでくださっていた皆さん、ありがとうございます！」

鏡護　「全ては読者の皆さんのおかげです。本当にありがとうございます！」

作者　「これからも不定期更新ながら頑張っていきますので、応援よろしくお願いします！」

鏡護　「それでは、次回予告です！

次回、第３０問『暗殺と交渉と不測の事態！？（仮）』

を、」

作＆鏡　「「お楽しみに～！」」

第３０問　『暗殺と交渉とまさかの逆境！？』（前書き）

バカテスト　化学

問　以下の文章の（　　）に入る正しい単語を答えなさい。
『分子で構成された固体や液体の状態にある物質において、分子を結集させている力のことを（　　）力という』

天水鏡護の答え
『（分子間）力』
教師のコメント
正解です。ファンデルワールス力ともいいます。ファンデルワールス力は、イオン結合の間に発生するクーロン力と間違えやすいので注意して下さい。

土屋康太の答え
『（ワンダーフォーゲル）力』
教師のコメント
何となく語感で覚えていたのだという事は伝わってきました。
惜しむらくは、その答えが分子の間ではなく登山家の間ではたらく力だったという事です。

吉井明久の答え
『（　努　）力』
教師のコメント
先生この解答は嫌いじゃありません。

第３０問　『暗殺と交渉とまさかの逆境！？』

「失敗もいいところだこのカス」

教室に戻ってきた明久に、雄二から痛烈な一言。
明久は泣きそうになっています。

「流石にもうフォローのしようもないのう」

秀吉も深く溜め息を吐いています。

「あんなモンを見て明久と島田が付き合ってると思うヤツがいるわけがない」

「そうだね。せめてもの救いは島田さんが明久に好意を持っている様子を見せていた事だけど、それだけじゃ清水さんが動く理由としては弱すぎるよ」

「オマケにもう一度トライしようにも、島田はあの調子じゃからの……」

チラッと島田さんの方を見ると、彼女は一度明久と目を合わせると「ふんっ」と不機嫌そうに鼻を鳴らして明後日の方を向いてしまいます。

「とりあえず、明久は島田さんにちゃんと謝罪した方がいいよ。このままにしておくのはどちらにとってもよくないから」

「うん、そうだね。行ってくるよ」

そうして明久は島田さんの席へ向かいました。

「それじゃあっちはアイツに任せて、俺達は別の動きを考えるぞ」

「大丈夫かな、明久……」

送り出しておいてなんですが、僕としてはかなり不安です・・・・・

「ダメだった時は後でお前がフォローしてくれ」

「……少しは自分でやろうとしてよ」

「そういう事は俺には向いてないからな。適材適所ってヤツだ」

「はぁ……わかったよ」

「よし。それじゃまずはDクラスを焚きつける前に時間稼ぎをしないとな。ムッツリーニ、『DクラスがBクラスに対して試召戦争を仕掛けようとしている』って感じで偽情報を流してくれ」

「……了解」

「それから秀吉」

「む。なんじゃ？」

「お前にはDクラスの清水を交渉の場に引っ張り出して欲しいんだが、頼めるか？」

「それは構わんが……交渉と言ってもどうするつもりじゃ？」

「どうするもこうするもこっちの目的は１つだ。清水を挑発して敵意を煽る。乗ってくれれば成功、そうでなければ失敗。それだけだ」

今の清水さんはＤクラスの代表に匹敵する発言力を持っています。彼女を動かせるかどうかで僕らの命運が決まると言っていいでしょう。

「それならば島田も一緒に連れて行く必要があるのじゃろう？」

「ああ。その方がより確実に挑発できるからな。下手に同席させると逆効果になるかもしれないが、そこは俺が何とかしよう」

「うむ。ならば、そちらも何とかしておこう。機嫌を戻すのは無理じゃろうが、交渉に同席してくれるよう頼むくらいなら可能じゃろう」

「そうしてもらえると助かる。今の島田に明久を近づける訳にはいかないからな」

「心得た。交渉の場は空き教室、時間は放課後すぐで良いか？」

「それでいい。それくらいまでならＢクラスの宣戦布告を遅らせる事ができるはずだ」

「了解じゃ」

そう言って秀吉は一度教室を出て行きました。後で時間を置いて島田さんを説得するつもりなのでしょう。

そして秀吉が教室から出て行ったちょうどその時――

『――もうウチに話しかけないで。アンタの顔なんて見たくない』

『ごめん。悪かったよ』

・・・・・どうやら向こうは最悪の結果で終わったみたいです。

「完全に怒らせちゃったよ……」

「そうみたいだね」

明久がそう言いながらこちらに戻ってきました。

「やれやれ……。明久、ほとぼりが冷めたら、後で鏡護と一緒にきっちりフォローしろよ？」

「うん。わかった」

「それじゃ今後の動きについてだが――」

そうして雄二は先程話し合った事を明久にも説明しました。

「――というわけだ。わかったな？」

「うん。了解」

「ところで明久、鏡護。腹減ってないか？」

明久が頷いたところで、何故か雄二が突然そんな話題を振ってきました。

「まぁ確かに昼はいつも通り水と塩しか食べてないから、お腹が減ってる事は減ってるけど……」

「雄二？今はそんな事言ってる場合じゃ――モガッ、モゴッ！？」

僕は雄二に意見しようとしたけど、その口を雄二の手で塞がれてしまいます。

「そうか！腹減ってるのか！」

何故かすごく嬉しそうな顔をしている雄二。あぁ、これは何か悪知恵を思いついた時の笑顔ですね。

「それならちょうどいい。姫路！」

「はい？坂本君、どうかしましたか？」

ここで雄二の考えがハッキリと読めました。

ですが瑞希の料理はこの２ヶ月程の僕との修業のおかげか、もうほぼ１００％失敗する事がなくなっているのは僕自身がよく知っています。

それなのにさっきから僕の第六感が激しく警鐘を鳴らしているのはどういう事なんでしょう？

「腹を空かせたこの２人に何か食べ物を作ってくれないか？できれば姫路のオリジナル料理がいいんだが……」

そ、そういう事ですか！
確かにレシピ本に載っているような普通の料理なら今の瑞希には何の問題もありません。しかし瑞希オリジナルとなれば話は別です。絶対におかしな事をしでかすでしょう。

「それは別に構いませんが、材料がありませんよ？」

「安心してくれ。調理室の鍵を（勝手に）借りてきた。材料もそこに用意してある」

「そうですか。そういう事でしたら私頑張ります！」

「ああ。任せた」

こ、これはいけません！あっという間に退路を断たれてしまいました！
隣の明久は小声で「ギブ、ギブ」と連呼しています。

「鏡護君、明久君。何か食べたいものはありますか？」

・・・・・ん？これはこの地獄から抜け出すチャンスでは？ここでオリジナルにできないような料理を言えばまだ何とかなるかもしれません！

「えっと、それじゃ「ゼリー」がいいな……って雄二っ！？」

まさかの雄二による台詞被せ。

ゼリー　↓　材料：不特定多数

数あるチョイスの中でも最悪の部類です・・・・・

「どうした鏡護。姫路の料理は美味しいんだろう？」

「……うん。そうなんだけど……」

残念ながら今回は上達したその腕が振るわれるメニューじゃないんですよ・・・・・

「ゼリーですか。わかりました！頑張ってみます！」

あぁ・・・・瑞希も既にやる気満々です・・・・・

「よろしく頼む。ドリンクゼリーに使われてるようなパックがあったはずだから、それに入れてきてくれ」

「はい。じゃあ、ちょっと行ってきますね」

「ああ。頼む」

雄二から鍵を受け取って、瑞希が教室を出て行きました。

「……で？これはどういう事なのかな雄二？」

「そうだよ！僕達を殺すつもりか！」

「別にお前らに恨みがあっての事じゃない。今回の作戦に必要なだけだ」

「瑞希の料理が？」

「そうだ」

「ふ～ん。なら別にいいか」

「だがああ言った手前、姫路は間違いなくお前らに食べさせようとするだろうな」

それは全然よくないです！

「こうしちゃいられない！明久、調理室を見に行こう！」

「そうだね！僕たちの命が懸かってるんだから！」

「それなら俺も行くかな。姫路の料理してるところを見てみたい」

必死な僕と明久に対して、１人暢気にそんな事を言う雄二。

程なくして僕達は調理室に到着しました。中では既に瑞希が料理を始めている気配があります。

「それじゃ、開けるよ」

「「うん（ああ）」」

瑞希に気付かれないようにこっそり扉を開けて中の様子を窺います。

「～～～♪」

鼻歌を歌いながら上機嫌で調理室の中を動き回る瑞希。

まだ調理を始めたばかりのようで、瑞希は棚から出した2つのボウルに何かを入れています。

作るものがゼリーですから、片方がゼラチン、もう片方が砂糖といったところでしょう。

「（なんだ。意外と普通だな）」

「（そうだね。ゼリーくらいなら大丈夫なんじゃない？）」

「（大丈夫だと逆に困るんだがな）」

・・・・・雄二は一体何を作らせる気だったんでしょう。

と、そこで調理中の瑞希の独り言が聞こえてきました。

『えーっと……まずは、ココアの粉末をコーンポタージュで溶いて――』

初手からありえない事が起きていました。

「（2人とも！彼女は一体何を作ろうとしているの！？何か既にゼリーとは程遠いものになってるような気がするんだけど！？）」

「（静かにしろ明久。姫路に見つかるぞ）」

「（やっぱり修行が足りなかったみたいだね……）」

瑞希にはまだまだ料理の常識を教える必要がありそうです。

『オレンジと長ネギ、どっちを入れると2人は喜んでくれるでしょうか……』

「（迷わない！その選択肢は迷わないよ姫路さん！）」

「（きっと2人の為に栄養価に重点を置いた特別料理を作ろうとしてるんだろうな。……味を度外視して）」

「（余計な気は回さなくていいよ瑞希！普通でいいから！）」

そうやって変な気遣いをするからいつも大惨事になるんですよ！

『あとは、隠し味にタバ――』

「（これ以上は聞かない方がいいな。行くぞ2人とも）」

「（待って！せめて最後に入れられたのが『タバコ』なのか『タバスコ』なのかだけでも確認させて！）」

お願いですから、せめて辛くて刺激的な調味料の方であってください・・・・・！

「（遊んでる時間はないんだ。我が侭を言うな）」

「（僕らの命に関わるんだけど！？）」

「（そうだよ！それくらいはいいじゃないか！）」

しかし必死の抵抗も虚しく、僕と明久は雄二に首根っこを掴まれて引き摺られてしまいます。こうなったら後で雄二も必ず巻き添えにしてやります・・・・・！

「よし。それじゃあ俺と明久はこのまま新校舎3階をうろつくぞ。暇そうにな」

「え？時間がないって言ってるのに目的もなくうろつくの？」

「それに僕はどうするのさ？」

「鏡護は教室に戻っててくれ。それから明久。これはBクラスとDクラスに俺達が何も知らないとアピールする為の作戦だ」

「「了解」」

僕と明久が同時に答えました。それでは僕は教室に戻りましょう。

「はぁ、はぁ、はぁ……あ、危なかった……」

「ま、まさか、鉄人が、あんなところにいた、なんてな……」

しばらくして息を切らせた明久と雄二が教室に戻ってきました。また何かやったみたいですね。

「2人ともおかえり。首尾はどう？」

「あ、ああ。とりあえず、目的は、達成した、ぞ……」

「う、うん。他の、クラスの人達も、見ていた、からね……」

「それはよかった。ちなみに、康太の方もバッチリだって」

「よし。それならムッツリーニには新たな仕事をしてもらう」

「……内容は？」

いつの間にか康太が音も立てずに近くにきていました。

「ああ。もうすぐ姫路が戻ってくる。そうしたら説明しよう」

「そういえば、どうしてわざわざ姫路さんに料理を作ってもらったのさ？」

「姫路の料理は暗殺用の武器だ」

・・・・・本人が聞いたら傷つきますよ、今の発言。

「暗殺用？誰を？」

「Bクラスのヤツだ」

「……なるほど、BクラスからDクラスへの同盟の使者が狙いだね？」

それが理由であれば納得です。

「そうだ。ムッツリーニの偽情報でDクラスに狙われていると知ったら、Bクラスの連中は当然その対処をする必要がある。そこで一番考えられるのが、Dクラスと同盟を結ぶ事だ。使者を出すだけで戦争を回避できるなら、それに越した事はないからな」

「そっか……って、ちょっと待って。それってかなりマズいんじゃない？Dクラスに話をしに行かれたら偽情報だってバレちゃうじゃないか」

「だからこそ、その同盟の使者を狙うんだよ。同盟に向かった使者がやられた事を知れば、BクラスはDクラスに間違いなく敵意を抱く。そうなれば同盟は成立しないし、Bクラスは疑心に駆られるだろうしね」

相変わらず雄二の考える作戦は卑劣というか何というかですね。

「けど、暗殺だったらスタンガンでもいいんじゃない？わざわざ姫路さんの料理で毒殺なんかしなくても」

明久、君も何気なく酷い事を言いますね。

「スタンガンは悲鳴を上げられるからな。それに口を塞ごうものならこっちまで感電するだろう？」

「でも……」

「それに今回の作戦に姫路の料理を選んだのは俺の趣味だ」

雄二が僕達の命を考慮していない外道な発言をしたその時、

「え？坂本君、私の料理が好きなんですか？」

ちょうど教室に戻ってきた瑞希が聞いていた。

「ひ、ひめ、じ……？」

一瞬で雄二の顔から血の気が引いていきます。天罰が下りましたね。

「良かった。そう言ってもらえると嬉しいです。でも、霧島さんが今のを聞いたらきっと怒りますよ？」

瑞希は嬉しそうに笑っています。

「は、はは、は……」

乾いた笑いを漏らす雄二を励ます為にアイコンタクトを交わした僕と明久は雄二の肩にそっと手を置き、

「「ウェルカム（グッ）」」

最高に清々しい笑顔でサムズアップ。

「テメェら、そのムカつく程爽やかな笑顔はなんだ……！」

これで道連れができました。まさか自爆してくれるとは、策を弄する手間が省けて助かります。

「坂本君の分もありますので、良かったらどうぞ」

そう言って瑞希が僕達3人にパック入りのゼリーを手渡してくれます。

「そ、そうか。すまないな。後で腹が減った時にでもいただこう」

「そうだね。僕もそうするよ。姫路さん、ありがとうね」

「ありがとう瑞希」

「いいえ。これくらいお安い御用ですよ」

本当に瑞希はいい子だ。だからこそ、せめて死線を彷徨う事になるような料理だけは作らないでください・・・・・

「んじゃ行くぞ、明久、ムッツリーニ。鏡護は教室にいてくれ」

「了解」

「……わかった」

「うん」

雄二達は瑞希の料理(さつじんへいき)を手に教室を後にして、新校舎の方へと向かいました。

それからしばらくして3人が戻ってきて、今は6時間目の途中。
使者の暗殺が効いたらしく、Bクラスが疑心暗鬼に陥っているとの情報が入りました。

「これで時間稼ぎは成功したかな？」

「そうだね。とりあえず明日くらいまでなら何とかなるんじゃない？」

「ああ。ところで秀吉、Dクラスとの交渉は大丈夫か？」

「うむ。清水を引っ張り出す事には成功した。放課後に旧校舎2階の空き教室で待ち合わせという手はずになっておる」

一応、舞台は整ったという事ですね。あとはいかにDクラスを挑発するかですが、その辺は雄二がちゃんと考えているでしょう。

「……1つ、気になる情報が」

近くで何かの機械を操作していた康太が口を開きました。

「どうしたの？何かあった？」

「……根本がAクラスに何かの情報を流していた」

はて？この状況になって根本がAクラスに用があるとは思えません。

何か嫌な予感がしますね・・・・・

皆で首を傾げていると――

――バンッ！

突然大きな音を立てて教室の扉が開け放たれました。

「……雄二……っ！」

その向こうから現れたのはAクラス代表の霧島さんでした。いつもはクールで落ち着いた性格の彼女が、何故か今は焦っているように見えます。何かあったんでしょうか？

「翔子？そんなに慌ててどうした？」

「……どうした、じゃない。雄二こそ、どうしてまだ学校にいるの……！」

ん？まだ学校にいる事の何がおかしいんでしょうか？今はまだ授業中で、放課後までは時間があるはずですが・・・・・

「？お前は何を言っているんだ？」

「……お義母さんが倒れたっていうのに、どうして様子を見に行かないの……！？」

霧島さんが珍しく怒っています。というか、雄二のお母さんが倒れ

た？そんなのは初耳です。

「はぁ？あのおふくろが？風邪すら引かない全身健康体だぞ？」

雄二も知らなかったようです。まぁもし知っていたなら流石にお母さんのところに行くでしょうしね。

「……とにかく、早く家に……！」

業を煮やしたように雄二の手を取って強引に連れ出そうとする霧島さん。余程雄二のお母さんの事が心配なんですね。

「お、おいっ！ちょっと待て！俺は今から大事な作戦が――」

「今はそんな事言ってる場合じゃない！」

聞いた事のない霧島さんの怒声に、Ｆクラスにいた全員がその様子を唖然として見ています。

「だから待て翔子！何かおかしい！どうして俺より先にお前が」

「いいからっ！」

「翔子、落ち着――」

抵抗虚しく、雄二は霧島さんにあっという間に連れ去られてしまいました。

「「「……」」」

一瞬の出来事に、呆然とするしかない僕達。

「代表！」

と、そこへ新たな来客がありました。しかもそれは――

「優子？」

「姉上ではないか。どうしたのじゃ？」

霧島さんと同じＡクラスの優子でした。何故か優子まで焦っているようですが・・・・・

「鏡護！ここに代表が来たわよね？」

「う、うん。今さっき来て、雄二を連れて早退しちゃったけど……」

「くっ……一歩遅かったか……」

僕の返事を聞いて苦々しげな顔をする優子。

「一体何があったの？霧島さんもいつもと違って様子がおかしかったけど……」

「さっきＢクラスから情報が流れてきたの。『Ｆクラス坂本雄二の母親が倒れたらしい』って」

「っ！それって……」

「アタシはすぐにおかしいと思ったわ。でも代表はそれを聞いてすぐ教室を飛び出して……」

「Fクラスに来て雄二を連れ去った、と」

「ええ」

「って事はさっきの根本君の話って！」

「……多分その偽情報で間違いない」

「なんじゃと！？」

途端に皆の顔色が変わりました。これは最大のピンチってやつですね・・・・・

「どうしよう！清水さんを挑発する為の作戦は全部雄二任せだったのに……」

その肝心の雄二が今はいません。

「鏡護、お主は雄二から何か聞いておるか？」

「残念ながら何も。多分雄二は盗聴の可能性を警戒していたから」

「つまり、誰にも話しておらんという事じゃな？」

「そうだね。同じような理由でメモみたいなものも残されてはいないだろうし」

こうなる事がわかっていたら事前に雄二から作戦を聞きだしておいたのですが、後悔先に立たずとはまさにこの事ですね。

「何だか鏡護達も大変な事になってるみたいね」

そこで優子が話に割って入ってきました。

「まぁね。けど、こっちは僕達で何とかするから大丈夫。優子は自分の教室に戻って霧島さんの事をクラスに説明してあげて」

「わかったわ。まぁ頑張りなさい」

「うん」

そうして優子はAクラスに戻っていきました。さて、こっちも何とかしないとですね。

「鏡護。何かいいアイデアはない？清水さんを上手い事挑発できるような」

「う～ん……難しいかな。平常時ならまだ何とかなるけど、今朝から色々と動いてきた今のこの状況ではね。それこそ、雄二でもなければ挑発は成功させられないと思う」

「……そろそろ、時間」

時計を見ると、確かに6時間目終了の時刻を示しています。交渉がもうすぐ始まってしまいます。

「……どうする？」

「どうするも何も、雄二がいない今は僕達でこの状況を乗り切るしかないよ」

「そうじゃな。ここまで来たんじゃ。もう後には退けん」

「とりあえず参加メンバーは僕達４人と美波かな？」

「いや。ムッツリーニには残ってもらった方が良いかもしれん。向こうには『覗き騒ぎの件で謝罪がしたい』と言ってあるからの。恐らく向こうのメンバーはクラス代表の平賀とＤクラス女子の代表といったところじゃろうから、それに倣ってこちらも人数を絞るべきじゃ」

「なるほど。だったら僕も行かない方がいいかな」

「うむ。交渉にはワシと明久、島田の３人で行くとしよう」

「わかった。それで、その場で謝罪そっちのけで相手を挑発すればいいんだね？」

「そうだね。そこは悪いけど２人で何とかして欲しい」

「「了解（じゃ）」」

こうして僕達はクラスの命運の懸かった交渉に、雄二抜きの無策で望まざるを得なくなりました。

応援くらいしかできませんが、２人とも頑張ってください。

そして翌朝。

『我々Ｄクラスは、Ｆクラスに対して宣戦布告を行う！』

朝のＨＲ終了直後にやって来たＤクラス男子が高らかにそう宣言しました。

第３０問　『暗殺と交渉とまさかの逆境！？』（後書き）

あとがき

作者　「さて、何だか大変な事になってたみたいだが……」

鏡護　「うん。今回は本当に焦ったよ」

作者　「でも、結果オーライだったっぽいな」

鏡護　「そうだね。一体何があったんだろう？」

作者　「その辺は最後にネタバレするからお楽しみに」

鏡護　「そう？なら楽しみにしてるよ」

作者　「それでは次回予告！

次回、第３１問『騒動の結末は実に些細なもの（仮）』

を、」

作＆鏡　「「よろしくお願いします！」」

第３１問　『騒動の規模に対して些細な結末という事はよくある』（前書き）

バカテスト　英語

問　以下の英文の（　）に単語を入れて正しい文章を作り、訳しなさい。

『Ｓｈｅ　（　）　ａ　ｂｕｓ．』

姫路瑞希の答え

『Ｓｈｅ　（ｔｏｏｋ）　ａ　ｂｕｓ．

訳：彼女はバスに乗りました。』

教師のコメント

正解です。他に”ｂｕｓ”に使われる単語としては”ｇｅｔ”などがありますね。

吉井明久の答え

『Ｓｈｅ　（ｉｓ）　ａ　ｂｕｓ．』

教師のコメント

なんて訳すのでしょうか。一見文章として正しく見えそうですが、明らかに間違いです。日本語として訳せないような文章を書くようではまだまだ――

土屋康太の答え

『訳：彼女はブスです。』

教師のコメント

目から鱗が落ちました。

第３１問　『騒動の規模に対して些細な結末という事はよくある』

『我々Ｄクラスは、Ｆクラスに対して宣戦布告を行う！』

翌日の朝のＨＲ終了直後にやって来たＤクラス男子のこの宣言に、僕達は驚きました。

「？なんじゃと？」

一緒に交渉に出ていた秀吉も怪訝そうな顔をしています。

「どういう事だ。昨日聞いた話だと清水の挑発は失敗のはずだが？」

そうなんです。昨日秀吉から聞いた話とは全く逆の結果が出ている事が解せません。

明久にも電話してみましたが、何故か繋がりませんでした。

「康太、状況はわかる？」

「……昨日何があったかはわからない。ただ、今日は朝から清水が興奮していた」

「清水が？だとしたら昨日の挑発は成功していたって事か？」

「いや、そんな事はないはずなんじゃが……。明久。お主、あの後に何か話しておったのか？」

「い、いや、別に。それよりも試召戦争だよ！Ｂクラスじゃないと

はいえ、今の僕らには厳しい相手なんだから早く準備を始めないと！」

・・・・・これは明久が何かしたみたいですね。誤魔化したがっているようなので今は聞きませんが、後で教えてもらうとしましょう。

「そうだね。折角ここまで来たんだ。ここでDクラスに負けたら意味がないよ」

「確かにそうじゃな。今ワシらの中でまともに戦える者は少ない。この戦力で凌ぎ切るのは至難の業じゃ。余計な事を考えている暇はあるまい」

「……防衛が優先」

僕の言葉に秀吉と康太が頷いて表情を引き締めます。

「それで雄二、作戦は？」

「考えてある。だがその前に戦力の確認だ。鏡護と姫路、島田以外に戦えるヤツがどれくらいいるのかを調べる」

そう言って雄二は教壇に上がると、

「野郎共、よく聞け！さっき言われた通り、これより俺達Fクラスは Dクラスとの試召戦争に突入する！まずは戦力の確認だ！各自、自分の持ち点を紙に書いて持ってくるように！」

「いいかお前ら！前回勝ったからと言って相手を舐めるなよ！この状況の上に相手は俺達より２つもクラスが上だ！下手に欲をかくと逆に手痛い目を見るハメになるからな！」

着々と準備は進んでいき、今は出撃前ブリーフィングとして雄二が教壇に立って説明を始めています。

「どんなに有利な状況でも決して深追いはするな！決められた場所でひたすら防衛に徹しろ！」

下手に追い討ちをすれば、こちらは一気に蹴散らされてしまうでしょう。何せ事前に行った点数調査では、僕と瑞希、島田さん、秀吉の４人以外のＦクラス全員の総合点数は１００００点にも満たなかったのですから。

補充を終えたＤクラス女子が１人当たり１５００点程度だと仮定すると、Ｄクラスは女子だけでも４００００点近い点数という事になります。それにプラスして男子もいるのですから、戦力差は歴然です。

「向こうは圧倒的に有利な女子の総合科目をメインに攻めてくる！島田と秀吉を主軸に上手く立ち回れ！限界まで粘ったら状況によっては教室前まで退いてもいい！以上だ！健闘を祈る！」

雄二が説明を終えるとほぼ同時に時計の針が開戦時刻の９時を示しました。さぁ、戦争を始めましょう！

『『いよっしゃぁああーっ！！』』

今回は渡り廊下や階段といった要所を確保するのが目的なので、先遣隊が開幕ダッシュで現場を目指します。
当然向こうもこちらに何かされる前に決着をつけようと電撃作戦でくるはずなので、最初はスピード勝負です。

そして前線メンバーが出て行った教室に残っているのは、点数補充組と僕と瑞希です。

「雄二、何で前線に出ちゃダメなのさ。護衛なら瑞希がいれば充分だろうし、牽制の為だとしても2人とも残しておく必要はないんじゃ……」

当然前に出て戦いたかった僕は不満を口にします。

「確かに2人には俺の護衛と敵への牽制の為にここに残ってもらってる訳だが、お前はそんなに戦いたいのか鏡護？」

「だって楽しいじゃない、戦争」

「鏡護君、その言い方はちょっと危ないですよ……」

「姫路の言う通りだな。お前はどこの危険思想家だ。それにお前には重要な仕事があるんだ。前線に出す訳にはいかん」

「雄二のケチ」

「何とでも言え。それに憂さ晴らしはさせてやる」

「……じゃあいいよ」

渋々承知します。・・・・・それにしても憂さ晴らし？一体何をさせる気なんでしょうか？

そうしている間にも戦況報告がひっきりなしに入ってきます。報告される戦死者の数がすごいですね。

「ただいま～」

と、そこに明久が帰ってきました。

「お帰り明久。首尾はどう？」

「ああ、うん。とりあえず雄二の指示通りにしてきたけど……それより今回の作戦を説明してよ」

「作戦の説明？さっき出撃前のブリーフィングでやっただろう？」

「そうじゃなくて、もっと細かい説明だよ。例えば、何で鏡護と姫路さんを前線に出さないのさ」

「それは姿の見えない僕達を警戒させてクラス代表の護衛に戦力を割かせる為だよ」

明久の問いに答えてあげます。

「なるほど。だから向こうの戦力はあんなに少なかったのか……」

どうやら納得できる根拠が前線にあったようですね。

「だが、それだけでは不十分かもしれないからな。向こうが強引に突っ込んでくる事がないように更にダメ押しをしておいた」

「ダメ押し？」

「情報操作だ。その為にムッツリーニには点数補充をさせてなかったんだからな」

点数のほとんど残っていない康太が教室にいない理由がコレです。
今頃康太はDクラスに対して『FクラスはDクラスとの開戦を望んでいた』という偽情報を流しているでしょう。
清水さんの仕掛けた盗聴器にそれとなく吹き込めば簡単に引っ掛かってくれるはずです。

その後も雄二による明久への作戦説明が続いていますが、まぁ聞かなくてもいいでしょう。

それにしても、Dクラス代表の平賀君は今頃開戦に踏み切った事を後悔しているでしょうね。
今回の戦争はDクラスが勝っても特に得るものはない上に、負ければ最低設備に格下げなんていうハイリスクノーリターンの戦争ですからね。
何かきっかけがあればすぐにでも休戦に応じてくれるはずです。

「というわけで明久。お前には空き教室で清水と一騎討ちをしてもらう」

「え？僕がやるの？」

おっと、あっちの話もそこに行き着いたようですね。というか明久、その役目は君以外では務まりませんよ？
そろそろ僕もあっちの会話に混ざるとしましょう。

「そうだよ明久。それに清水さんを引っ張り出すなら明久が好都合だからね。昨日の挑発もどういう訳か成功させたんだし」

「うっ……そ、それは……えっと……」

「とにかく、そういう事だから明久は今すぐ空き教室に移動して用意してね」

「そんなに上手くいくのかなぁ……？」

明久はまだイマイチ納得がいかないようですが、問題ありません。

「それは結果を見てのお楽しみってヤツだな」

明久の不安を拭うように、雄二が自信に満ちた笑みを浮かべて答えます。

「大丈夫だよ。必ず上手くいくから」

僕からもエールを送ります。

「まぁ、２人がそこまで言うならいいけど……」

とりあえず理解はしてくれたようで、明久はそのまま教室を出て隣の空き教室に向かいました。

「さて、これで後は清水が来るまでは待機だな」

「そうだね」

「そうですね……ふふっ」

「なんだ、姫路？突然人の顔を見て笑い出すなんて失礼なヤツだな」

「あ、ごめんなさい。そういうつもりじゃないんです」

「？じゃあどういうつもりだったの？」

「えっと、やっぱり何だかんだ言っても坂本君は明久君の事を理解しているんだなって思って」

「んなっ！？な、何をいきなり気色悪い事を……」

「……何で雄二もそこで照れるかな」

「いや、本気で気持ち悪いんだが……」

「だって明久君の事を理解してないと、さっき言っていた作戦を実行なんてできませんよね？」

「清水さんをおびき出す、って話の事だよね？」

「はい」

「……まぁ、理解云々はともかくだ。アイツの性格を考えれば、昨日の話し合いで秀吉達がいなくなった後にアイツが清水にどんな事

を言ったのかは何となく想像がつく」

「そうだね。そしてそれが清水さんにとって放っておけない内容だったって事もね」

「私も……何となく、ですけどわかる気がします。明久君がどんな事を言ったのか」

「アイツはバカな分、考えてる事がわかりやすいからな」

「素直なんですよ、きっと」

「それは同意しかねるな」

「雄二は素直じゃないよね。……ツンデレ？」

「鏡護、殴られたいのか？」

「あはは。冗談だよ、冗談」

なんてやりとりをしながら、僕達は持て余した時間を過ごしていました。

―Ｓｉｄｅ　明久

雄二の指示で空き教室に移動した僕は、特に何をするでもなくぼんやりと考え事をしていた。

脳裏をよぎるのは、美波の事。

僕の美波に接する態度は間違っていたんだろうか？

美波は僕が気を遣わないでいた事に傷付いていたんだろうか？

僕はもう徹底的に嫌われてしまったんだろうか？

そんな疑問がグルグルと頭を巡る。色々と考えてみるけど、考えれば考えるほど混乱していく。

そうして、気が付けば廊下での喧騒がこちらに近づいてきていた。

「そろそろ、かな……？」

頭の中からさっきまでの考えを一掃して思考を切り替える。今はとにかく試召戦争に集中しないと。

教室の方の防衛戦の様子も気になるけど、僕には僕の役目があるんだ。

そのまま待ち続けることしばし。

「こんなところに1人でいてくれて助かりました。貴方には話がありましたから」

待ちわびた相手がやってきた。
良かった。本当に来てくれたみたいだ。

「話って、何かな？」

歩み寄ってくる清水さんに問い掛ける。

「そう難しい話ではありません。要するに――白黒はっきりさせましょう、というだけです」

そう告げた彼女の目は敵愾心に満ちていた。余程僕が気に入らないらしい。

「幸いにも今は試召戦争の真っ最中です。わかりやすく決着をつける事ができます」

清水さんの後ろには布施先生の姿があった。
ここで逃げれば、僕は敵前逃亡で戦死扱い。でも、清水さんも僕が決着を望んでいると確信しているんだろう。

そして、その考えは恐らく正しい。

「わかったよ。勝負だ、清水さん」

「先生、召喚許可をお願いします」

「わかりました」

布施先生が許可を出したことによって化学のフィールドが展開され、

「「試獣召喚(サモン)！！」」

2人同時に召喚獣を喚び出す。
清水さんは簡単にあしらえる相手じゃないのだから、こっちも慎重に攻めないと。

「……そう言えば、勝負を始める前に1つ聞いておきたい事がありました」

「何かな？」

「昨日の話ですが」

「うん」

「あれは、戦争を起こすための狂言ですか？あの交渉も、最後の言葉も」

「それは……」

即座に言葉が出ない。
果たしてここで正直に答えたところで、彼女に信用してもらえるんだろうか？
そんな疑問が僕を縛る。

「どうなんですか？」

再び清水さんから問い掛けられる。

「……嘘は……吐いて、いない……っ！」

何とか吐き出した言葉は、僕の紛れもない本心だった。

「……」

僕が美波に酷い事をしてしまったのも事実。
僕が美波を傷つけて泣かせてしまったのも事実。

それでも、

「僕が言った事は、嘘じゃないんだ……！」

「……」

僕をじっと見ながら沈黙を貫く清水さん。
僕はそんな彼女に更に続けて告げる。

「僕みたいなバカでも言っていい嘘と悪い嘘くらいわかる！昨日のあれは、間違いなく僕の本心だ！」

『Ｄクラス　清水美春　ＶＳ　Ｆクラス　吉井明久
化学　　１１２点　ＶＳ　２２点　』

彼我の戦力差は約５倍。このまま戦えば圧倒的にこちらが不利だ。

「けど、逃げるもんか……！」

元はと言えば全ての原因は僕にあったこの騒動。迷惑をかけてしま

った人達の為にも、僕が責任を取らないでどうする！
もしこの役を他の誰かに任せていたら、僕は騒動を起こすだけ起こして逃げ出したロクデナシだ。そういう意味では、こうして責任を取る機会をくれた雄二には感謝――

『『試獣召喚（サモン）っ！』』

「「えっ！？」」

不意に教室内に響いた召喚の声。目をやると、そこには点数補充を終えたFクラスの人達と鏡護を従えた雄二がいた。

「伏兵、ですか……！卑怯な真似を……！」

「雄二！いくら大事な勝負だからってこんなやり方は――」

突然乱入してきた雄二を止めようとするけど、それも雄二に遮られる。

「悪いが、これは勝負じゃなくて戦争なんだ。俺にはクラスを守る義務がある」

「くっ……」

雄二が冷たく言い放ち、鏡護を先頭にした皆の召喚獣がそれぞれ武器を構えて――

「や、やめ――」

「やれ」

それらを振り下ろした。

――僕の召喚獣に。

「……え？」

予想もしていなかった事態に、僕の頭が一瞬思考を放棄した。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

「痛あぁぁあっ！ねぇ、何コレ！今までで一番痛いんだけど！？全身が！爪先から頭の天辺までのありとあらゆる部分に激痛が！」

明久がクラスメイトからの集団リンチを受けて床を転げまわっています。

「清水、この通り全ての元凶は粛清した。これで今回の件は水に流してくれないだろうか？」

「……そうですね。美春の怒りはまだまだ収まりませんが……」

1つ大きな溜め息を吐いて明久を見下ろす清水さん。

「わかった。ならば最後の仕上げをしよう。鏡護、やれ」

「了解。出でよ『神の剣（アメノムラクモ）』！そして『虚空断裂』！」

――バシュンっ！

僕の召喚獣が腕輪能力を発動し、明久の召喚獣を消し飛ばしました。

・・・・・ちょっとオーバーキルでしたかね？

「ぎゃぁぁあああああっ！」

――ガクッ

断末魔の叫び声を上げてその場にバタリと倒れる明久。

一撃で召喚獣の全身を消し飛ばす程のダメージのフィードバックに、流石の明久も気を失いましたか。

「……これで満足してくれないか？」

「わかりました。流石にここまでやればこの豚野郎も少しは反省するでしょう」

「ああ。それに今のでコイツは戦死したから補習室行きだ。後は放課後になるまで俺達はそれぞれの教室で点数補充でもしていればいい。その間コイツはずっと鉄人の餌食だ」

正直ここまで外道な取引もないですね・・・・・

「今回はこれで許してあげましょう」

「ありがとう」

一応お礼は言っておいた方がいいでしょうね。

「いいえ。ですがもし次があれば……」

「大丈夫だよ。これ以上バカな事はしないように、ちゃんと教育するから」

「そうですか」

そこで話は終わりとばかりに清水さんが教室を出て行きました。

「それじゃ、交渉も成立したし教室に戻るか。野郎共！引き上げるぞ！」

『『おーっ！！』』

そうしてFクラスの皆も教室を後にします。気絶した明久を放置し

て……

第３１問　『騒動の規模に対して些細な結末という事はよくある』（後書き）

あとがき

作者　「実にあっけない終わりだったな」

鏡護　「雄二の言った憂さ晴らしって……」

作者　「明久への私刑執行の事だったんだな」

鏡護　「まぁちょっとやりすぎちゃったけど……」

作者　「（あれで『ちょっと』だと!?）」

鏡護　「作者さん、何か言った？」

作者　「い、いや。別に……」

鏡護　「そう？ところで、次回が今回の騒動の最終回だよね？」

作者　「そうだな」

鏡護　「って事はいよいよネタバレがあるんだね？」

作者　「ふっふっふ。その通りだ」

鏡護　「そっか。楽しみだなぁ」

作者　「きっとお前の期待に添えるものだと思うぞ」

鏡護　「それでは次回予告です！

次回、第３２問『割と衝撃的な事件の真相（仮）』

を、」

作＆鏡　「「お楽しみに～！」」

第３２問　『割と衝撃的な事件の真相』（前書き）

バカ恋愛　心理テスト

以下の状況を想像して質問に答えてください。
『あなたは今、独りで森の中で道に迷っています。
明かりもなく暗い森の中を進むと、あなたは湖のほとりに小さな小屋を見つけました。これ幸いと中に入るあなた。すると、そこには椅子とベッドと肖像画が。さて、その肖像画に描かれている人物の特徴は?頭に浮かんだものを３つ挙げて下さい』

姫路瑞希の答え
『１．明るい表情
２．優しそうな瞳
３．温かい雰囲気』
教師のコメント
これは『あなたの好きな人の特徴』についてわかる心理テストです。暗い森はあなたの不安を表し、そんな時に見つけた小屋の中にある肖像画は『あなたの心を支えてくれる伴侶』を表します。
どうやら姫路さんの好きな人は温和で包容力があって明るい人のようですね。

清水美春の答え
『１．気の強そうな目
２．男らしい胸
３．ポニーテール』
教師のコメント
最後の１つがおかしい気がします。

島田美波の答え
『1．折れた指
2．捻じ曲げられた膝
3．外された手首』
教師のコメント
全部おかしい気がします。

第３２問　『割と衝撃的な事件の真相』

―Ｓｉｄｅ　明久

「うぅ……。今日も酷い目に遭った……」

気絶から目覚め、鉄人による補習も終えて後は家に帰るだけだ。

校舎内に残る人影は少ない。もう放課後だし、きっと皆は帰ってしまっただろう。姫路さんは用事があるって言ってたし、他の皆は僕の補習が終わるのを待っているとは思えない。

溜め息混じりにＦクラスの扉を開ける。さて、荷物を取ってさっさと帰ろう――ってあれ？

「皆、まだ帰ってなかったの？」

教室の中にはいつものメンバー、雄二と鏡護と秀吉とムッツリーニが残っていた。何だろう。なにか用事でもあったんだろうか。

「ちょっと気になる事があったからな」

「気になる事？」

雄二が妙に楽しそうな笑みを浮かべている。

「うむ。何でも、ムッツリーニが面白いものを聞かせてくれるらしいのじゃ」

その隣では秀吉も満面の笑みを浮かべていた。すごく楽しそうだ。

「明久とも一緒に聞こうと思って待ってたんだよ」

更には鏡護まで同じように笑っている。

「……明久を待っていた」

ムッツリーニがお馴染みの小型レコーダーを卓袱台の上に置く。

「面白いものねぇ……。何だろ？皆が楽しそうなんだから、よっぽどいいものなのかな？」

「まだムッツリーニも詳しい中身は聞いていないようだが、面白い事は間違いないらしい」

「……保障する」

自信満々に頷くムッツリーニ。コイツがここまで言うのだから、余程面白いものなんだろう。

「ねぇ、中身は何かな？」

「何でも、とある男女の会話らしいよ」

「男女の会話？」

誰かの告白シーンとかだろうか。それとも痴話喧嘩？どっちにしろ、そんな悪趣味な真似はこの４人も好きじゃなかったと思うけど．．．

・・・

「ワシらが気になっていた一件の顛末がよくわかる会話じゃ」

「え……？」

ここにきて、僕は初めて違和感に気付いた。何かがおかしい。４人とも笑顔は笑顔だけど、どことなく邪悪なものを感じる気がする。

「……スタート」

ムッツリーニがレコーダーのスイッチを入れると、レコーダーからは聞き覚えのある声が聞こえてきた。

『この話し合いに何の目的があったのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるような事はありません。お姉さまの魅力に気付かず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて、時間の無駄ですから。……お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

「あれ？この声って……」

「Ｄクラスの清水の声じゃな」

清水さんの声か。清水さんは美波が好きなはずなのに、男女の会話ってどういう事なんだろう？

『……何です？美春に何か言いたい事でもあるんですか？』

清水さんの声が続く。
けど……あれ？この会話、どっかで聞いた事があるような……？

「って、ちょ、ちょっと待って！この会話ってまさか！」

「ご名答。これは、お前と清水が昨日の放課後に何を話していたのか、その一部始終を録音した物だ」

雄二がどことなく、どころか明らかに邪悪な笑みを浮かべて僕を見ている。

『うん。１つだけ。清水さんの誤解を解いておきたいんだ』

『誤解？何がです？お姉さまと付き合っているのが演技だという話なら既に知っていますけど？』

聞こえてくるのは、清水さんの声と――僕の声。

「ちょちょちょっと！なんて物を再生してくれてるのさ！？冗談じゃない！早く止め――」

「鏡護、秀吉」

「「了解（じゃ）」」

雄二の指示で２人が動き、あっという間に組み伏せられてしまった。

これ以上聞かれたらヤバいのに！早く止めないと！

『いや、そうじゃなくて……その……美波の魅力を知っているのは何もキミだけじゃないってコト』

「くっ！放してよ2人ともっ！これだけは本当にダメなんだ！」

「ふっふっふ。そうはいかんのじゃ」

「ごめんね明久。でも、やっぱり気になるんだよ」

完全にホールドされているので身動きが取れない！ひぃぃ！

『何を言ってるんですかっ！いつもお姉さまに悪口ばかり言って、女の子として大切に扱おうともしないで！』

『うん。それは清水さんの言う通りかもしれない』

『だったら、お姉さまの魅力の何を知っているというんです！』

『確かにお姫様みたいに扱っている訳じゃない。男友達に接するみたいに雑な態度になっているかもしれない。けどね――』

僕の気持ちも知らず、レコーダーは無慈悲に話を進めていく。こうなったら……！

「わーっ！わーっ！聞くなーっ！！流すなーっ！！」

「うるさいぞ明久。少し黙れ」

「むぐっ！？んむーっ！！」

雄二に手で口を塞がれる。やめてーっ！お願いだから聞かないでーっ！

『けど、何ですか？』

『――けど、僕にとって美波は、ありのままの自分で話ができて、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちょっとした仕草がとても可愛い、とても魅力的な――女の子だよ』

ぎゃぁーっ！！

スピーカーから流れた声に、思わず目の前が真っ白になる。
聞いた！？聞かれた！？今の台詞を頭にインプットされた！？
恐る恐る確認の為に視線を巡らす。

「「「「……」」」」

４人は、少し驚いたような表情をして僕を見ていた。

「……いや、意外だったな……」

「う、うむ……。もう少し婉曲に言ったものと思っておったのじゃが……」

「……直球勝負だった」

「うん……。いや、実に明久らしいと言えばらしいんだけど……」

聞かれた・・・・・。誰にも聞かれちゃいけない会話を、よりにもよってこの４人に聞かれた・・・・・

「明久。お前、意外と言う時は言うんだな」

「な、何故かワシも鼓動が速くなってすごいのじゃが……」

「……男らしい」

「格好よかったよ、明久」

この４人の記憶を消してやりたい。どうしたらいいだろう。ひたすら殴り続ければ忘れるかな？

なんて事を考えていると、

「……っ！！（ダッ）」

ムッツリーニが急に厳しい表情になって廊下に飛び出していった。

「なんだ！？どうしたムッツリーニ」

「……油断した」

戻ってきたムッツリーニが苦々しく呟いた。

「油断したとはどういう事じゃ？まさか、廊下に誰かおったのか？」

「……今のを立ち聞きされたかもしれない」

ムッツリーニが静かに最悪の事を言ってのける。

え？聞かれたって・・・・・まさか、今の僕の恥ずかしい台詞を！？

「ムッツリーニ！相手は誰！？」

「……多分、張本人」

張本人、張本人・・・・・。それって清水さんの事だろうか？

そっか・・・・・。まぁ、それならそれで、恥ずかしいけど許容範囲内だ。何せ、一度直接聞かれているんだから。須川君辺りに聞かれるよりはずっとマシだ。

「そ、そうか。聞かれちまったか。すまん明久。まさかこれ程の物だとは思わなかった」

「すまぬ明久」

「……ごめん」

「ごめんね明久」

４人が頭を下げてくる。

「まぁ、別にいいよ。張本人が相手なら。それより、悪いと思うんなら美波との仲直りに協力してよ。アレ以来ずっと険悪なままなんだから」

設備の防衛は上手くいったけど、僕にはまだ問題が残っている。頭が痛いところだ。

「いや、それは多分大丈夫じゃろうな」

「ああ。むしろ仲直りどころか……」

「……うん」

「そうだね……」

今度は４人とも苦笑いを浮かべている。

「へ？何で大丈夫なの？」

仲直りのきっかけなんて何もないのに、どうして大丈夫なんだろう。４人とも何故か自信満々のようだけど――もしかして、僕の知らないところで何か手を打ってくれていたのかな？

それならそれでいっか。これで何もかも元通りだし、良かった良かった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

―Ｓｉｄｅ　美波

――ガチャッ

「あ！お姉ちゃん、お帰りなさいですっ！」

「た、ただいま……」

「？お姉ちゃん？どうかしたですか？お顔が真っ赤ですよ？」

「葉月、どうしよう……」

「？？？何がですか？学校で何かあったですか？」

「あのね、葉月……」

「はいです」

「お姉ちゃんね……もう、どうしようもないくらい人を好きになっちゃったかも……」

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第３２問　『割と衝撃的な事件の真相』（後書き）

あとがき

作者　「原作４巻恋愛騒動編、これにて終了～！」

鏡護　「いやぁ、結局はいつも通りの大団円だったね」

作者　「そして明らかになった意外な明久の男らしさ」

鏡護　「そうだね。僕もあれにはびっくりしたよ」

作者　「っていうか、結局状況的には今回の話が始まった時と同じじゃないか？」

鏡護　「……それは言わないお約束ってやつだよ」

作者　「いや、むしろ今回は本気だった分余計に……」

鏡護　「だから、それは言っちゃいけないんだって」

作者　「知らぬは明久ばかりなり、だけどな」

鏡護　「うん。まぁ、そこが一番残念なんだよね……」

作者　「しかしそれが明久クオリティ」

鏡護　「その一言で締めていいのかな？」

作者　「ちなみに次回は最近出番がなかった『あの人』にスポットを当てた外伝をお送りする予定です！」

鏡護　「『あの人』？う～ん……誰だろう？」

作者　「それでは次回予告！

次回、補習第１０問『私と弟と召喚システムと（仮）』

を、」

作＆鏡　「「ご期待ください！」」

補習第１０問　『私と学園長のとある計画』（前書き）

皆さんお久しぶりです。
・・・・・・まさか忘れちゃったなんて人はいませんよね？

い・ま・せ・ん・よ・ね？（ニコッ）

という訳で、改めましてこんにちは。キョウ君の姉の天水黎夜です。
私が文月学園に着任以降全く表舞台に出られなかったので、作者さんにお願いして全編私視点のお話を１本書いてもらいました。

それではどうぞ♪

補習第１０問　『私と学園長のとある計画』

―Ｓｉｄｅ　黎夜

「学園長、おはようございます」

「ああ」

私の挨拶に実にそっけない返事をする学園長。このやりとりにもだいぶ慣れてきました。

「先週の強化合宿も大変でしたが、戻ってきてもシステムの不調とはついてないですよね」

「まったくさね。強化合宿ではガキ共がまた騒ぎを起こすしね」

「あはは。まさかの学年男子全員による覗き騒動ですからね」

「……そういえばアンタの弟も大変な事をしでかしてたね」

学園長が露骨に顔を歪めて、話題を変えてきました。あまり思い出したくないんでしょう。

「ええ。学年主任の高橋先生を個人で倒してしまいました」

「今日の職員会議で要注意人物認定が下された訳だけど、アタシ個人としてはそれじゃもったいない気がしてるんだ」

「……と言いますと？」

「せっかくの力をただ抑え込むんじゃなくて、有効に使ってやろうってね」

「あぁ……もしかして『アレ』の……」

「そういう事さ。今日の放課後にでも呼び出しておくれ」

「はい。わかりました」

ふふっ。これはちょっと面白くなりそうです。

そしてその日の放課後。

私はキョウ君を連れて学園長室へ向かっていました。

「姉さん。僕に学園長から直々の呼び出しってどういう事さ？」

「別に怒る為じゃないから安心していいわよ」

「いや、それは最初からわかってるよ。どうせまた厄介事でしょ？」

流石はキョウ君。鋭いですね。

「さぁ？私も詳しくは聞かされてないから」

「う〜ん。何だろ……」

そうこうしているうちに学園長室の前に到着しました。

「さぁ、着いたわ」

「入りたくないなぁ……」

「そんな事言わないの。行くわよ」

「は〜い」

キョウ君の返事を聞いて扉をノックします。

――コンコン

「入りな」

中から学園長がそう言うのを聞いて扉を開けました。

「失礼します。２－Ｆの天水を連れてきました」

「失礼します」

「待ってたよ」

「それで学園長。今日はどんなご用件で？」

部屋に入るなり、キョウ君が学園長に質問を投げかけます。

「まぁ落ち着きな。別にお前さんにとっても悪い話じゃないよ」

「……どういう事ですか？」

「天水先生、『アレ』を持ってきてくれるかい？」

「わかりました」

私はキョウ君を学園長室に残して別室にある『アレ』を取りにいき、戻ってきます。

「どうぞ」

「ご苦労さん」

私は学園長の机に持ってきたものを置きました。それはガラスケースに入った1つの――

「……腕輪、ですか？雄二と明久の『白金の腕輪』とはまた別のものみたいですけど……」

キョウ君がその正体を言い当てます。

「そうさ。これはアタシと天水先生で新たに開発した『蒼穹の腕輪』だよ」

「いつも忙しそうにしてると思ったらこんな物を作ってたんだね、

姉さん……」

「えっへん、凄いでしょ！これは自信作なの！」

キョウ君が何故か呆れたような目で見てくるけど、私は胸を張って答えます。

「僕を呼び出してコレを見せたという事は……」

「理解が早くて助かるよ。お前さんの考えてる通りだよ。コレの実験に付き合ってもらおうと思ってね」

「やっぱり……」

「ちなみにこの実験が終わったら『蒼穹の腕輪』はキョウ君のものになるからね」

「えぇ！？どうして！？」

驚きのあまりキョウ君の口調が素に戻っています。

「この腕輪を渡すと同時に、お前さんには『ある役職』に就いてもらう」

「……拒否権は？」

「そんなもんはないよ。アタシ直々の勅命だからね」

「はぁ……わかりました。それで、僕は何をすればいいんです？」

「とりあえず天水先生が腕輪の試運転をするから、その相手をしておくれ」

「ね、姉さんの相手ですか！？」

「何だい。別にそれくらい問題ないだろう？」

「あ、いえ、確かにそうなんですけど……」

キョウ君ったらそんなに嫌がるなんて失礼ですね。ちょっと懲らしめてあげましょう。

「さぁキョウ君。姉さんと戦ってね」

そう言って私はガラスケースから腕輪を取り出して身に着けます。

「わかったよ……」

「じゃあフィールドは『総合科目』でいいわね？」

「えっ？姉さんの担当科目は理科科目だけのはずじゃ……」

「『蒼穹の腕輪』の能力の1つよ。任意の教科のフィールドが展開できるの。という訳で……『起動（アウェイクン）』！」

私の声に合わせて学園長室内に召喚フィールドが展開されました。

「なるほどね……それじゃあ」

「ええ」

「「試獣召喚(サモン)！」」

私とキョウ君の喚び声に応えてそれぞれの召喚獣が出てきます。

キョウ君の召喚獣は蒼いローブを着て、手には万年筆を持っています。

一方私の召喚獣は白い羽衣？のような服を着て、手には弓を持っています。

文月学園(ここ)に来てから初めて召喚獣を見ましたが、とても可愛いですね♪

「それじゃ、もう１つも……『改変(オルタレイション)』！」

私はもう１つの起動コードを口にします。

「今度の効果は何？」

キョウ君が私に聞いてきます。

「戦ってみればわかるわ。という訳でいくわよ！」

私は召喚獣に弓を構えさせると、矢を雨の如くに降らせました。

「そんないきなり！？……ぐっ！？」

「……その様子だとちゃんと機能してるみたいね。……『終了(エンド)』」

私の声と共に召喚フィールドが消え、私達の召喚獣が姿を消します。

「今の痛み……まさか2つ目の能力って！」

「そう。この腕輪のもう1つの能力は、フィールド内の全ての召喚獣にダメージフィードバックの特殊能力を付与するというものよ」

「いいんですか？そんな物騒な腕輪を作って」

キョウ君が学園長に問い掛けます。

「いいんだよ。コレを作った目的は『風紀を乱す生徒に対する抑止力』にする為だからね」

「という事は、僕に任せたい『役職』というのは……」

キョウ君の言葉を引き継ぐように学園長が告げます。

「今から2－F天水鏡護を『特務風紀委員』に任命する！」

特務風紀委員：『蒼穹の腕輪』を所持し、『素行の悪い生徒』に対して特別に『懲罰』を与える事ができる生徒の事。

こうしてキョウ君に新たな肩書が付け足される事になったのでした。

補習第１０問　『私と学園長のとある計画』（後書き）

あとがき

作者　「今日のあとがきはゲストと一緒にお送りします」

黎夜　「よろしくお願いしますね♪」

作者　「という訳で、ゲストは黎夜さんです！」

黎夜　「初登場以降私の出番がほとんどなくて、お姉さんちょっと悲しかったわ」

作者　「それについては申し訳ありませんでした」

黎夜　「でも、今回こうしてお願い通りに書いてくれたから許しちゃう♪」

作者　「俺のところに来るなり関節を極めて脅してきたのはどこの誰だったか（ボソッ）」

黎夜　「あら？何か言ったかしら？」

作者　「いいえ何も」

黎夜　「そう？それならいいんだけど」

作者　「次回からは原作第５巻、期末試験編がスタートします」

黎夜　「そうなの？ちなみに見どころは？」

作者　「Ｆクラスメンバーの家族達が登場します！」

黎夜　「それは楽しそうね。私の出番もあるのかしら？」

作者　「はい！それはもちろん！」

黎夜　「よかった！それはますます楽しみだわ♪」

作者　「それでは次回予告にいきましょう！

次回、第３３問『相変わらず始まりは突然に（仮）』

を、」

黎夜　「よろしくお願いしますね♪」

第３３問　『新たな嵐の前触れ』（前書き）

〈感謝コーナー〉

ＰＶが３０万、お気に入り登録件数が１５０件を超えました！

読者の皆さん、本当にありがとうございます！

これからもどうぞ拙作をよろしくお願いします！

それでは本編スタートします！

第３３問　『新たな嵐の前触れ』

梅雨に入っても前線の影響をあまり受けないこの地域には珍しく、午前中に雨が降った日曜の午後。
もはや恒例行事として定着した優子と瑞希の週末宿泊の後、２人をそれぞれの家まで送り届けた帰り道。

「まったく……姉さんも何て事を言い出すんだか……」

今朝の朝食の席での姉さんの発言（『もういっその事２人ともこの家で暮らす？』）を思い出して溜め息を吐きます。
そしてそんな姉さんにノリノリで賛同する２人の事も思い出して、更に溜め息を１つ。

「今回は何とか阻止できたけど、いつか実現させられそうで怖いよ……」

いくら何でも、流石に同棲はマズいです。僕の彼女達はその辺りのガードが緩すぎます。
そんな事を考えながらまた溜め息を吐いていると、

「溜め息ばかり吐いていると幸せが逃げてしまいますよ？」

突然背後から誰かに声を掛けられました。

「すいません。ちょっと最近癖になりつつあるのでつい……って、ええぇっ！？」

後ろを振り向きながら答える途中で、目に入ってきた光景に思わず

驚きの声を上げてしまいます。

「それはよくありませんね。今のうちに治した方がいいですよ」

「あ、はい……って、ちょっと待ってください！」

あまりにも自然に話を続ける目の前の女性に思わず僕も自然に返事をしかけて、慌てて待ったをかけます。

「はい？どうかしましたか？」

「どうしたも何も、どうしてあなたはこんな往来でバスローブなんてものを着ているんですか！？」

僕に声を掛けてきた女性は、何故かバスローブを着ていました。どこかへ行っていたのか、大きな旅行鞄も携えています。

「日本は暑いですよね」

「えぇっ！？スルーですか！？」

「いけませんよ。こんなところで大声を出したらご近所さんに迷惑です」

「しかもお説教！？」

・・・・この人は一体何なんでしょう。まさかこんなおかしな人に説教されるとは思いませんでした。

「それに何故そんなに驚いているのかわかりませんが、この格好に

はきちんとした理由があるんですよ」

「そうなんですか？」

正直これ以上話していたくなかったんですが、仕方ないので相手をする事にします。

「はい。今日はあまりに暑かった上に重い荷物を持って歩いた事もあって、私はたくさん汗を掻いてしまいました」

「なるほど」

「途中までは気にしなかったのですが、電車の窓に映った自分の姿を見てふと思ったのです。１年ぶりに会う弟に、最初に見せるのが汗だくの姿というのは姉としてどうでしょうか、と」

「へぇ。弟さんがいらっしゃるんですか」

「ええ。いくら会うのが肉親とはいえ私も女性ですから、身だしなみには気を遣うべきだと思いました」

「確かに、身だしなみは大事ですね」

「そこで、全身の汗を何とかする為に私はバスローブに着替えました」

「おかしい！そこは明らかに間違ってる！」

「持っている荷物の中で最も吸水性に優れている服だけあって、私の汗はみるみるうちに引いていきます」

「どうしてそこで『タオルで拭く』という選択肢が出ないんですか！」

「これなら私は姉としての尊厳を保つ事のできる清潔な姿で弟と再会できるという訳です」

「何だか急にその弟さんが可哀想になってきたよ……」

こんな人が自分の姉だったらと思うと、同情せずにはいられません。

「？何か言いましたか？」

「いいえ。何も……」

「そうですか？……それでは私にはアキくんの生活チェックをして母に報告するという重要な仕事がありますので、これで失礼します」

ん？『アキくん』？それってもしかして・・・・・

「あ、あの、すいません。つかぬ事をお聞きしますが、もしかして弟さんは『吉井明久』という名前ではありませんか？」

「ええ。その通りですが……アキくんの事をご存知なんですか？」

「はい。僕は彼のクラスメイトで、天水鏡護と言います」

「そうだったんですか。私はアキくんの姉の吉井玲です。弟がお世話になっています」

「いえ。僕も明久君には色々とお世話になってますから」

「そうですか。……それではそろそろ行かないといけませんので、これで」

「はい。またいずれ」

そうして僕は玲さんと別れました。それにしても明久にお姉さんがいたなんて知りませんでした。・・・・・まぁ明久が隠したくなる気持ちも何となくわかりましたけどね。

「そういえば玲さん、さっき明久の生活チェックがどうのって言ってたけど……まさかね」

何やら新たな騒動の予兆を感じながらもそれを振り払って、僕は家路に着きました。

翌朝。

今日は秀吉も朝練がなかったので４人で登校してきました。

「んむ？あそこにおるのは明久ではないか？」

「あ、ほんとだ。おーい明久！」

秀吉が指差した方を見ると、確かに明久がいました。早速声を掛けると、

――ビクッ！

明久は何故かその場で凍りついたかのように動きを止め、ゆっくりこっちを振り返りました。

「あ、何だ鏡護達だったのか。おはよう」

「おはよう」

「明久君、おはようございます」

「おはよう吉井君」

「おはようじゃ。はて……？何やら今日のお主はいつもとどこか違うような気がするのじゃが……？」

「うぇ！？き、気のせいじゃないかな？何も変わった事なんてないよ？」

秀吉の言葉に突然慌てだす明久。何かって．．．．．玲さん関係ですよね、間違いなく。

「言われてみれば、今朝は顔色がいつもよりもいいですね」

「ま、まぁちょっと……たまには僕だって、ね」

「それにシャツもズボンもピシッとアイロンがかかってるわ」

「そ、それはホラ。今日は週の初めなんだから、それくらいは」

次いで瑞希と優子からも指摘を受けて、いかにも苦し紛れな答えを返す明久。そんな事をしてもますます怪しまれるだけですよ？

「「「怪しい……」」」

案の定明久は３人に詰め寄られます。・・・・・仕方ありません。ここは助け舟を出してあげましょう。

「まぁ深く追求しなくてもいいじゃない。明久がまともな生活を送ろうと改心したみたいなんだから、むしろ喜ぶべきだよ」

「きょ、鏡護……」

何故か明久が僕をキラキラした目で見ています。僕はそんな明久に向かってアイコンタクトでこう告げます。

（とりあえず『お姉さん』の事は黙っててあげるよ。そのかわり、後で話を聞かせてね？）

（えぇっ！？ど、どうして鏡護が姉さんの事を！？）

（それも後で説明するから、今はとにかく話を合わせて）

「（わかった）そうなんだ。流石にそろそろ僕もこのままじゃいけないと思ってね」

指示した通り、明久が僕の言葉に乗っかってそう言いました。

「そうか。お主もようやく決心したんじゃな」

「明久君、偉いです」

「そうね。そう思えるようになったって事はいい事だわ」

そしてその言葉を信じてくれたのか、明久を褒める3人。とりあえずこの場はこれで一件落着ですね。

結局そのまま明久も合流して、僕達は教室へと向かいました。

「おはよ――って雄二、どうしたの？何で今日はズボンが体育用のハーフパンツになってるの？」

「ほんとだ。登校早々に汚したとか？」

Fクラスの教室に着いた僕達の目に入ってきたのは、いつもと違う服装で座布団に座る雄二の姿でした。

「どうしたじゃねぇ！テメェのせいだ明久！テメェのせいで俺は今朝下半身超クールビズで登校するハメに……！死んで償えこのクズ野郎！」

「えぇっ！？いきなりどうしたの！？」

「落ち着いて雄二！一体何があったのさ！？」

「黙れ！死ね！制服をよこせ！」

言っている事がイマイチ要領を得ません。雄二に今朝何があったと――

『おい、知ってるか？坂本の話』

『ああ。何でも裸Ｙシャツで登校してきたらしいな』

『まったく、流石としか言いようがないな……。最近女装は見慣れてきたが、アレには度肝を抜かれたぜ……』

そこでタイミングよく聞こえてきたクラスメイトの会話。

「……」

「……」

「……」

こういう時、何と言えばいいんでしょう。

「雄二……何か辛い事があるなら、相談に乗るからさ……」

「大丈夫。そんな雄二でも僕達は友達……ではいたくないかな、やっぱり」

「ち、違う！俺は自分から望んでそんな格好になったわけじゃない

！あと、トランクスは死守したからギリギリでセーフなはずだ！それに鏡護、お前はあっさりと俺を切り捨てるな！」

「うんうん。そうだね。辛い事があって、雄二の精神はギリギリのところまでいっちゃったんだよね……」

「だから違うといってるだろうが！」

「あはは。まぁ僕のは冗談だから安心して」

「……そうか」

そこで雄二はやっと落ち着きました。

「それで？本当の理由は何だったの？明久がどうこうって言ってたけど」

「ああ。明久が俺に送ってきたメールを翔子に読まれてな。浮気のお仕置きと称してズボンを奪われたんだ」

「何を言ってるのさ雄二。いくら霧島さんでも、男からのメールくらいでそんな事をするわけないじゃないか」

そうでもないですよ？何故か僕達の周りには性別の違いを些細なものとしか思っていない人が多いですからね。

「いや。正直、お前の文章はかなり際どい感じだったと思うぞ……」

「際どいって、どんなメールだったんですか？」

そこで初めて会話に入ってきたのは瑞希でした。どうやら優子とのお喋りを終えて今来たのでしょう。

「別にただの頼み事のメールのはずだけど？」

「ほほぅ。そう思うのなら、俺に送った文面を大きく声に出して読み上げてみろ」

「？わかったよ。それじゃ、えっと……コホンっ」

明久は雄二に促されて怪訝な顔をしながらも携帯を取り出すと1つ咳払いをして――

「雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……家に帰りたくないんだ！」

――ガラッ

メールを読み上げたその瞬間、教室のドアが音を立てて開かれました。

「……」

その扉の向こうにいたのは、クラスメイトの島田さん。何ともタイミングの悪い人ですね・・・・・

「ウチにはアキの本心が全然わからないっ！」

「え!?何!?何で美波は登場と同時に退場しているの!?」

島田さんはそう言ったきり、鞄を放り出して走り去ってしまいました。

「あ、明久君!?なんて事を言うんですか!そういうのはもっと、その……オトナになってからですっ!」

瑞希?君も少しばかり論点がおかしいですよ?

「相変わらず朝から賑やかじゃな……。島田が教室から飛び出していくとは、一体何があったのじゃ?」

と、今度は一応部室に顔を出すと言っていた秀吉がやってきました。

「いや、別に何もな――」

「聞いてくれ秀吉。実はこのバカがこんな時間から公序良俗に反するような発言をしたんだ」

何もない、と言いかけた明久を制して雄二が秀吉に訴えました。

「明久……。お主、朝っぱらから助平な事を言っておったのか?」

「ち、違うよ!僕はそんなムッツリーニみたいな真似はしないよ!」

「……失礼な」

噂をすれば、ですね。ムッとしたような呟きと共に、いつの間にか康太が登校してきていました。

「おはよう康太。何だか今日は随分と荷物が多いみたいだけど……」

康太の両手には学校の鞄の他に大きな包みやら袋やらが提げてありました。

「……注文を受けた枕カバー」

「枕カバー？それにしては荷物が大き過ぎない？」

「……そんな事はない」

ブンブンと首を振って否定のポーズを取る康太。これは絶対に何かを隠していますね。・・・・・怪しいです。

「ムッツリーニ。中身を見せてね」

「……あ」

そこに明久がやってきて、大きな荷物のせいで動きの鈍い康太からバッグを1つ奪い取ると、早速中身を物色し始めました。

「さて。何が入っているのか……な……」

明久が最初に取り出したものは――等身大の明久がプリントされた白い布（セーラー服着用）でした。

「……」

あまりの衝撃に声が出なくなる僕。

「……ムッツリーニ……。何、コレ……」

「……ただの抱き枕カバー」

「ただの、じゃないっ！枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たりがあるという事をよく覚えておくんだ！っていうかどうして僕の写真なの！？」

「……世の中には、マニアというものがいる」

確かに、僕にも2人ほど心当たりがあります。

「何を言っているのさ！僕の抱き枕カバーなんかを欲しがる人なんてどこにも――」

――コンコン

「失礼。土屋君はいるかな？前に頼んでいた枕カバーを――」

言ってる傍からそのうちの1人が登場

「あれ？珍しいね久保君。ムッツリーニに何か用？」

「――何でもない。少々用事を思い出したのでこれで失礼するよ」

したと思ったら明久の顔を見るなり、きびすを返してそそくさと退場してしまいました。そりゃ本人の前では買えませんよね。

「えっと……他には何が……って、あれ？これは……鏡護？」

「え！？」

更に鞄を漁っていた明久の声に反応してそちらを見ると、そこには等身大の僕（浴衣着崩れｖｅｒ．）がプリントされた抱き枕カバーが。

こんなものを注文する人物は２人しかいませんよね．．．．．

――ジッ

――サッ

僕はそのうちの片方、同じクラスにいる彼女に視線を送りましたが、見事に逸らされました。

「瑞希？」

「あ、あはは……ごめんなさい」

仕方ないので低い声を出して名前を呼ぶと、観念したのか素直に謝る瑞希。

「どうしてこんなものを？」

僕は自分がプリントされた枕カバーを手に問い掛けます。

「えっと、その……自分の家で寝る時に寂しくないようにって……優子ちゃんと相談して……」

「それで康太に注文した、と？」

「はい……そうです……」

「ふ～ん」

さて、どうしましょうか。

・・・・・と言っても、僕自身実は怒っているわけではありませんでした。むしろそこまで思ってくれる彼女達を嬉しく思ったくらいです。とは言え、若干やり過ぎな気はしましたけどね。

「……鏡護君？」

しかし、このまま無罪放免してしまうのはちょっともったいないですよねぇ・・・・・という訳で――

「今度2人には僕のお願いを1つずつ聞いてもらうという事で手を打つよ」

「うぅ……まぁそれくらいなら……」

「よし！それじゃこの話はここまで！」

「えっ？その……処分だ、とか言わないんですか？」

「うん？そんな事しなくていいよ、別に」

「そうですか？よかったぁ～」

そこで安心したのかふにゃっと笑顔になる瑞希。か、可愛い・・・・・その表情は卑怯ですよ・・・・・・

「ところで、先程の明久達の話は結局何だったんじゃ？」

「あ、えっと……何の話をしてたんだっけ？」

明久はすっかり忘れてしまっているようです。まぁあんな衝撃的なものを見せられたのですから、忘れるのも仕方ないかもしれませんけど。

「俺が明久にトランクス姿での登校を強要された、という話だ」

「明久、お主……」

「雄二っ！わざと誤解を招くような言い方をしないように！」

確かに、今の雄二の言い方では色々と説明の必要な部分が飛んでいます。

「まぁ、それは冗談だが……。要するに、明久が送ってきたメールのせいで翔子が何かを勘繰って、それが原因で俺が酷い目に遭ったって話だ」

「メール？それは今朝明久の様子が少しおかしかった事と何か関係があるのかの？」

あ、やっぱり秀吉はあの明久の様子をまだ不審に思ってたんですね。

「明久の様子？……確かに言われてみれば、いつもより血色がいい上に制服がきちんとしているな。おい明久。一体何があった？」

「……怪しい」

雄二だけでなく康太も明久の普段との違いに気がついたようです。さて、明久は2人の追及をどうかわしますか？

「あ、あはは。た、たまには僕にもそういう気分の日があるんだよ！それより、そろそろチャイムが鳴るよ？鉄人が来る前に席についてないと！んじゃ、そういう事で！」

・・・・・まさか強引に話を打ち切って誤魔化すとは思いませんでした。

「「「怪しい……」」」

おかげで皆の不信感が鰻登りに上昇中です。これは事情がバレるのも時間の問題でしょうね・・・・・

第３３問　『新たな嵐の前触れ』（後書き）

あとがき

作者　「という訳でＦクラスメンバーの家族その１、吉井玲さん登場の回でした」

鏡護　「いやぁ、あの人には度肝を抜かれたよ」

作者　「まさか屋外をバスローブで歩き回る人間がいたとはな……」

鏡護　「何だか明久も苦労してるんだろうなって思ったよ」

作者　「同じく扱いの面倒な姉を持つ身として？」

鏡護　「……そんな事言ってると姉さんに殺されるよ？」

作者　「うっ……確かに……」

鏡護　「まぁ似たような境遇にいるって事はわかったよ」

作者　「次回はそんな明久の秘密がバレるんだかバレないんだか、な感じです」

鏡護　「あの明久が隠し通せるとは思えないけどね」

作者　「確かに」

鏡護　「それでは次回予告です！

次回、第３４問『不幸とはたいてい連鎖するもの（仮）』

を、」

作＆鏡　「「お楽しみに！」」

第３４問　『悪い事はたいてい連鎖してやってくる』（前書き）

バカテスト　政治・経済

問　日本国憲法第７６条『裁判官の職権の独立』について、以下の（　）に正しい語句を記入しなさい。
『すべての裁判官は、その（　　）に従ひ（　　）してその（　　）を行ひ、この（　　）及び（　　）にのみ拘束される』

天水鏡護の答え
『すべての裁判官は、その（良心）に従ひ（独立）してその（職権）を行ひ、この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される』
教師のコメント
大変よくできました。これは日本国憲法における重要な条文の１つですね。裁判官の権限の行使にあたっては、政治的権力や裁判所の上級者からの指示には拘束されない事が憲法上保障され、それによって独立して職務を執行できるという事です。この内容には裁判官の身分保障なども含まれていますね。豆知識として覚えておくとよいでしょう。

吉井明久の答え
『すべての裁判官は、その（ピー）に従ひ（ピー）してその（ピー）を行ひ、この（ピー）及び（ピー）にのみ拘束される』
教師のコメント
憲法第７６条が大変な事に。

土屋康太の答え
『すべての裁判官は、その（本能）に従ひ（脱衣）してその（全裸体操）を行ひ、この（現行犯により警察の手が）及び（手錠）にの

み拘束される』
教師のコメント
全ての裁判官の皆様に対しての誠意ある謝罪文を要求します。

第３４問　『悪い事はたいてい連鎖してやってくる』

『吉井。保健室に行ってきなさい』

この台詞を、午前中の４つの授業だけで7回も聞きました。
まぁ真面目にノートを取って授業を聞いている明久なんて、先生達にとっては信じられない光景だという事は理解しています。
ですが流石にそこまで言うのは明久に失礼じゃないかとも思うんですが、どうでしょう？

「アキ、何かあったの？朝から様子がおかしいみたいだけど」

と、明久の机に島田さんが近づいていきます。『例の騒動』以降、今までよりも少し積極的になった気がしますね。

「別になんでもないよ。ちょっと真面目に勉強に取り組んでみようと思っただけで」

「アキ。おでこ出しなさい。今熱を測るから」

「だからどうして皆似たようなリアクションを取るんだろう……？」

明久が呆れたようにそう言うのも気にせず、島田さんが明久のおでこに手を伸ばします。

「って、これはダメだっ！」

「きゃっ」

突然飛び退いた明久に驚いて、小さく悲鳴を上げる島田さん。

「ちょっと！何よそのリアクションは！人が折角心配して熱を測ってあげようとしたのに！」

「ご、ごめん！でも、僕にも色々と事情があるんだ！」

また玲さん関連ですか。本当に一体どんな話になっているんでしょう？

「事情？何よそれ？」

挙動不審の明久に、島田さんは疑わしげな視線を送っています。

「う……。えっと……そ、それより、まずはお昼にしようよ！昼休みなんて短いんだからさ！」

強引に話を変えて、鞄から弁当箱を出して机に広げ始める明久。そんな事をしたら．．．．．

「え！？アキ、お弁当を持っているなんて、一体どうしたの！？」

言わんこっちゃないです。島田さんは余計に疑いを深めたみたいですよ？更に――

「「「「何ー（だと／じゃと／ですって）！？明久（君）が（お）弁当を！？」」」」

雄二、秀吉、康太、瑞希がそれぞれ驚いた顔で明久を見てきます。

「そこまで驚かなくてもよくない！？僕だって人間なんだから、たまには栄養を摂らないと死んじゃうんだよ！？」

それはそうでしょうけど、明らかに普段の明久を考えたら違和感があり過ぎです。

「明久。お前やっぱり俺達に何か隠しているな？」

「……素直に白状するべき」

「ワシらにも言えないような事なのかの？」

「アキ。今ならまだ何もしないで許してあげるから、正直に答えなさい」

「明久君、本当にどうしちゃったんですか？」

・・・・・万事休す、ですかね。まぁいい加減潮時でしょう。

「明久。もうこれ以上隠すのは無理だと思うよ。むしろ正直に話して協力してもらった方がいいんじゃない？」

という訳で、僕は明久にそんな提案を出します。

「鏡護……うん。そうだね。その方がいいような気がしてきたよ」

「でしょ？って事で説明よろしく」

「わかった。えっと、皆にちょっと協力して欲しい事があるんだ。実は――」

そうして、明久は今自分が置かれている状況を皆に説明し始めました。話の要点を纏めるとだいたい以下の通りです。

・母親からの指令を受けて海外にいた姉（玲さん）が帰国してきた。
・玲さんの目的は明久の生活チェックで、その結果次第では1人暮らし生活が終了する事になる。
・生活チェックは生活態度や学業成績に問題があった時に点数が減らされる減点方式で、期末テストの結果が出た時点での総計が0点以下になった場合はアウト。

「――って事になってるから、どうしても次の期末テストはいい点を取らなきゃいけないんだ」

どうやら明久の説明が終わったようです。

「なるほど……だが、それだけが俺達に隠していた理由じゃないな？」

「うっ……」

「何じゃ明久。まだ何か隠しておるのか？」

「えっとね。明久のお姉さん――玲さんって言うんだけど、実はかなり面白い性格をしているっていうか、常識が欠如しているっていうか、な人なんだよ」

「鏡護!?」

僕があっさりバラすと、明久が慌てて僕を見てきます。

「いいじゃない。いずれはバレるだろうし」

「そ、それはそうなんだけど……」

明久はまだ何か言いたそうにしていましたが、とりあえず引いてくれました。

「ちょっと待て。どうして鏡護が明久の姉貴の事を知ってるんだ?」

「昨日たまたま会ったんだよ。瑞希と優子を家まで送った帰り道で」

「って事は、鏡護は『アレ』を見てるの!?」

「まぁね。最初に『アレ』を見た時はびっくりし過ぎて声が出なかったよ」

「……最悪だ……」

ズーンという背景音が聞こえるくらい目に見えて明久が落ち込みました。気持ちはわかりますよ。

「何だかそこまで言われると逆に会いたくなってくるわね……」

「むぅ……。恐ろしくはあるが、気になるのう……」

「……是非本人に会ってみたい」

「そうですね。私もお会いしたいです」

もちろんそんな話を聞いて黙っているはずもなく、皆が口々にそんな事を言い出します。

その場にいる皆が玲さんに興味を抱いてしまったと思っていたのですが、

「あ～、その、なんだ。お前ら、そういう下世話な興味は良くないぞ。誰にだって隠したい姉とか母親とか、そんなもんがいるモンなんだから」

「ゆ、雄二……！」

天変地異でも起きたのかというくらい本当に珍しく、雄二が明久に助け舟を出しました。・・・・・どうやら雄二にとってはお母さんが鬼門のようですね。

「それで、鏡護と姫路さんと雄二には期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだけど……」

――ザワッ

明久がそう言った瞬間、教室がにわかにざわめき出しました。

『おい……聞いたか、今の……』
『あ、ああ。確かに聞いたぜ。正直とても信じられないんだが……』
『まさか“あの”吉井が……』

『『期末テストの存在を知っているなんて……』』

流石にそれは酷くありませんか？
・・・・・まぁ、とりあえず明久には返事をしてあげましょう。

「僕は別に構わないよ」

「私でよければお手伝いさせてください」

「確かにお前の1人暮らしは俺にも都合がいいからな。協力してやる」

「ありがとう3人とも！じゃあ今日の放課後から早速勉強会を――」

「明久の家でやろう」

あれ？雄二？

「――って、だから僕の家はダメだよ！姉さんと皆を会わせる訳にはいかない！」

「それを言ったら、僕はもう会っちゃってるんだけど」

「鏡護は偶然だったから仕方ないけど許す！でも他の皆はダメ、絶対！」

「ズルいわよアキ。そんなの不公平だわ！」

「そうじゃ。別によいではないか」

「……皆平等」

「明久君、ダメですか？」

あ、瑞希が上目遣いでお願いをしています。男ならアレは断れません。でも――

「うん。姫路さんはいいぎゃあぁぁあああっ！み、美波！手首が、僕の手首が砕けるよ！」

予想通り、島田さんが明久の手首を力の限りに握り潰そうとしています。

「どうして瑞希はよくてウチはダメなのかしらね……？」

「わ、わかった！皆家に来ていいから、早く僕の手首を解放して！」

その一言を聞いて、島田さんは掴んでいた明久の手を放しました。

「フンっ！最初から素直にそう言えばいいのよ！」

「よ、よかった……。まだちゃんと動く……」

「よし。それじゃ話も纏まったみたいだし、今日の放課後は皆で明久の家に行くか」

「「「「「おーっ！」」」」」

「……もうどうにでもなれ……」

そんな訳で、今日の放課後は吉井家のお宅訪問に決定しました。と、そこへ――

「キョウ君、いる～？」

「姉さん？」

姉さんが教室に顔を出しました。珍しいですね。

「あ、いたいた」

一通り教室を見渡して僕を見つけると、近づいてきて一言。

「えっとね、期末試験が終わるくらいまで召喚システムの調整をするから、お仕事はお休みね」

「あ、うん。了解……って、あれ？まだ終わってなかったの？」

「そうなの。で、調整のついでに試召戦争も2学期まで禁止という事になったわ」

「天水先生、その話は本当か？」

「もちろん本当よ。明日にでも正式に発表されるわ」

「そんな横暴な！」

「まったく……今回の処置の原因がどの面下げてそんな事を言うのかしらね？」

姉さんに睨まれた明久は、その迫力に何も言えなくなって黙りました。

「確かに雄二や明久が今までやって来た事といえば、校舎の壁の破壊に始まって、教頭室の爆破、学年全体を巻き込んでの覗き騒動、つい先日の試召戦争騒ぎ――学生の本分を逸脱するだけでなく悪い方向へばかり向かってるもんね」

「おい鏡護。さも当然のように自分の名前を除外するな」

「え？だって僕にはどれも関係なくない？」

「最初の壁破壊を指示したのは鏡護じゃないか！」

「そうだっけ？」

「しらばっくれるな！」

「……もちろんキョウ君も同罪だからね？」

「誠に申し訳ございませんでした」

イイ笑顔の姉さんに肩を掴まれてそう言われた瞬間、即座に謝罪しました。

「「変わり身早っ！」」

そこの2人はちょっと黙っててください。今の姉さんに逆らう事＝死を意味するんですから。

「とは言っても流石にそれじゃ他の生徒達も不満に思うだろうから、今回は特別に『オマケ』を用意したわ」

「『オマケ』？何ですか？」

「システムのリセットよ。メンテナンスのついでに、システムに蓄積されているデータを白紙に戻そうって事になったの」

「ほぅ……。それは悪くない話だな」

「……どういう事？」

姉さんの話を聞いてすぐに納得した雄二。それに引き換え、明久。君にもこれくらいはわかって欲しいんですけどね。

「システムのリセットっていう事は、要するに召喚獣の装備も白紙に戻るって事だよ」

「つまり、期末試験の点数次第では俺達の装備がまともなものになるかもしれないって事だ」

「え！？って事は、木刀に学ランとはおさらばできるの！？」

「本来勉強っていうのは誰の為でもなく自分の為にするものだから、こういうのは間違ってると思うんだけどね……。今回は事情が事情

だから特別よ」

そう言って苦笑する姉さん。

「そういう事なら、今回はウチも頑張ってみようかな」

「うむ。召喚獣の装備が一新されるとあれば、その価値はあるしの」

「……全力を尽くす」

「はい。私ももっと頑張ります！」

そこで今まで黙って聞いていた皆も話に乗ってきます。

「明久。これでお姉さんを見返す以外の目的もできたし、よかったね」

「うん！よぉし、やるぞっ！」

「うん？吉井君、お姉さんがいるの？」

と、姉さんが明久に質問をしてきました。

「へ？あ、はい。昨日こっちに帰ってきて、今は一緒に住んでます」

「……そのお姉さんの名前って『玲』じゃない？」

「そうですけど……よく知ってますね」

「やっぱり……」

「姉さん、どうしたの？もしかして知り合いだったり？」

「多分そうね。向こうで知り合って、お互いに弟がいるって話で盛り上がったわ」

冗談のつもりで言ったのに、まさか肯定されるとは思いませんでした。

「それじゃあ、今日の放課後に姉さんも明久の家に行かない？僕達は皆で勉強会をする事になってるんだけど」

「そうね……吉井君、私もお邪魔していいかしら？」

「いいですよ。多分姉さんも喜ぶと思いますし」

「ありがとう。それじゃ私は学園長と交渉しなきゃいけないから、もう行くわね」

「うん。じゃあ、放課後になったら職員室前で待ってるから」

「よろしく。それじゃ皆、また後でね♪」

そうして姉さんは教室を後にしました。

「まさかうちの姉さんと鏡護のお姉さんが知り合いだったなんて……世間って意外と狭いんだね」

「同感。僕もびっくりしたよ」

明久と2人顔を見合わせて、思わずそんな事を言いました。

・・・・・そういえば、優子も誘った方がいいですよね。後でメールしておきましょう。

第３４問　『悪い事はたいてい連鎖してやってくる』（後書き）

あとがき

作者　「という訳で、やっぱりバレたな」

鏡護　「最初から時間の問題だったけどね」

作者　「そのきっかけを作った張本人が何を言うか」

鏡護　「何の事かな？」

作者　「しらばっくれても無駄だぞ？」

鏡護　「ま、まぁいいじゃない。結局丸く収まった訳だし」

作者　「ちなみに、次回からお宅訪問シリーズが何本か続きます」

鏡護　「って事は、明久以外の人の家にも今後お邪魔するって事？」

作者　「そんなところだ」

鏡護　「へぇ。楽しみだな」

作者　「それでは、次回予告！

次回、第３５問『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家』

を、」

作＆鏡　「「よろしくお願いします！」」

第３５問　『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その１』（前書き）

天水鏡護の特別試験　家庭科

問　料理における調味料の“さしすせそ”とはそれぞれ何を指すか、正しい答えを挙げてください。

吉井明久の答え
『さ…砂糖　し…塩　す…酢　せ…しょうゆ　そ…味噌』
天水鏡護のコメント
流石は普段から料理をしているだけありますね。正解です。

姫路瑞希の答え
『さ…酢酸』
天水鏡護のコメント
・・・・・・いい加減、料理に化学薬品を使おうとするのはやめましょうか。

第３５問　『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その１』

―Ｓｉｄｅ　明久

放課後になって、僕は皆を連れて家に帰ってきた。
鏡護だけが少し遅れてお姉さんと一緒に来ると言っていたので、今ここにはいない。

「それにしてもアキのお姉さんか……う、ウチ、きちんと挨拶できるかな……？」

「……楽しみ」

「しかし姉上まで来るとはのう……」

「私だけ仲間はずれにしないようにっていう鏡護の気遣いを無碍にはできないでしょ？」

「そうですよ。でも、その分大人数になってしまったのは明久君には申し訳ないですけど」

「気にしなくていいよ姫路さん。むしろ大歓迎だよ」

「おい明久。早く鍵を開けろ」

「そんな急かさなくても、今開けるよ」

催促する雄二に答えて、家の鍵を開ける。
ドアを開けて玄関を見ると、姉さんの靴がない。

「あれ？姉さん、外出中みたいだ」

『『『ええぇ～！』』』

どれだけ楽しみにしていたんだ皆。そんな声を揃えて落胆しなくてもいいじゃないか。

「まぁそのうち帰ってくると思うよ。とりあえず先に勉強会をしていよう」

そう言って皆を家にあげて、リビングへと続く扉を開け放つ。
そしてその直後、僕らの視界に飛び込んできた物体が。

『『『……』』』

それは、室内に干された――ブラジャーという名の女物の下着だった。

「ね、姉さーん！？」

何てこった。まさか初っ端からこんなものを見せてしまうなんて。

「これは思った以上の人物みたいだな……」

「堂々と室内に下着を干しておくとはのう……」

「年頃の弟がいるっていうのに、全然気にしてないみたいね……」

「これはちょっと……」

「な、何ともコメントしにくいわね……」

さすがの皆もこの光景には若干引いていた。はぁ・・・・・だからイヤだったんだけどなぁ・・・・・

――ガチャ

その時、玄関のドアが開く音が聞こえてきた。

『あら……？買い物に出ている間に帰ってきていたんですね、アキくん』

・・・・・何でこのタイミングで帰ってくるかなぁ、姉さんは！これじゃあ気まずい事この上ないじゃないか！

緊張の一瞬の後、リビングへの扉が開かれた。

「あら、お客様ですか。ようこそいらっしゃいました。狭い家ですが、ゆっくりしていって下さいね」

『『『お、お邪魔してます……』』』

普通の服装に普通の挨拶。ごくごく一般的で常識的な姉さんの振舞いに、拍子抜けしたような表情を浮かべる皆。

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くして下さってありがとうございます」

そう言って深々とお辞儀する姉さん。お、おかしい・・・・・あの姉さんにこんな完璧な普通の姉のような振舞いができるはずがない！

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

真っ先に我に帰った雄二が慌てて頭を下げた。それを皮切りに、他の皆も次々に自己紹介をする。

「……土屋康太、です」

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく――」

「ええ、わかっています。男の子ですよね？」

「……っっ！！」

その言葉を聞いて、秀吉が驚いた様子で姉さんの顔を見上げた。

「わ、ワシを一目で男だとわかってくれたのは、主様だけじゃ……」

何だかわからないけど、秀吉が感動している。

「もちろんわかりますよ。だって……うちのバカでブサイクで甲斐性無しの弟に、女の子の友達なんて出来るわけがありませんから」

なんてイヤな確信の仕方なんだ。

どうツッコミを入れてやろうかと迷っていると、姉さんはそのまま姫路さん、美波、木下さんの方に視線を移して、

「ですから、こちらの3人も男の子ですよね？」

などとのたまった。

「ね、姉さん！？いきなりなんて失礼な事を言うのさ！４人ともきちんと女の子だからね！？」

「明久！？ワシは男で合っとるぞ！？」

こんな見るからに女の子の４人を相手にいきなり男の子呼ばわりだなんて、どこまで常識知らずな．．．．．！

すると僕の言葉に反応して、姉さんがゆっくりとこちらを向いた。

「……女の子、ですか……？まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……？」

し、しまった！女の子を家に呼んだって事が気に入らなかったみた

いだ！
手を繋ぐだけで不純異性交遊と見なすような姉さんの事だ。きっと怒っているに違いない。何とか弁明をしないと！

「あ、あの、姉さん？これには深い深～い事情があって――」

「……そうですか。女の子でしたか。変な事を言ってごめんなさい」

「実は……って。あれ？」

説明を始めようとした僕を置いて、姉さんが姫路さん達に頭を下げていた。殺気も出ていないし、もしかして怒ってないのかな？

「どうかしましたか、アキくん？」

「あ、いや……。姉さん、怒ってないのかな～、って思って」

「？あなたは何を言っているのです？どうして姉さんが怒る必要があるのですか？」

怒らないのが至極当然と言わんばかりに平然としている姉さん。
な、何だ。僕の取り越し苦労か……。まぁ友達が家に遊びに来るくらいは普通の事だし、それで怒る理由はないよね。

そうやって胸を撫で下ろしていた僕に、姉さんが笑顔のままで告げる。

「ところで、アキくん」

「ん？何？」

「お客様も大勢いらっしゃるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者さんごっこは明日でもいいですよね？」

ああ、わかった・・・・・この人、きっと僕を自殺に追い込む気なんだ・・・・・

「ね、姉さん何言ってんの！？まるで僕が日常的に実の姉とお医者さんごっこを嗜んでいるかのような物言いはやめてよ！僕は姉さんとそんな事をする気はサラサラないからね！？」

畜生！やっぱり怒ってたんじゃないか！しかも直接的な暴力じゃなくて、社会的に追い詰めるような罰を下すなんて酷い！

「あ、明久君……。お姉さんとお医者さんごっこって……」

「アキ……。血の繋がった、実のお姉さんが相手って、法律違反なのよ……？」

「よ、吉井君……。流石にアタシもそれはいけないと思うわ……」

ふぬあぁぁっ！やっぱり誤解されてるよっ！

「姉さん！説教なら後でいくらでも受けるから、さっきの台詞を訂正してよ！」

「何を慌てているのですかアキくん。それより、昨日アキくんに渡した姉さんのナース服がどこにあるか知りませんか？」

「このタイミングでそんな事聞くなぁーっ！！」

もういやだ！この人本当にいやだ！こんな事なら、公園で野宿でも何でもすればよかった！

「それと、不純異性交遊の現行犯として減点を１５０程追加します」

「１５０！？多過ぎるよ！まだ何もしてないのに！」

「……『まだ』？……２００に変更します」

「ふぎゃぁああっ！姉さんのバカぁーっ！」

２００点って！早速挽回できないような点数になってきているんだけど！

「……明久。お前も苦労しているんだな……」

「うん……。ありがとう雄二……。僕、生まれて初めて雄二に癒された気がするよ……」

外見も挨拶も普通だっただけに、僕も心の準備ができていなかった。この姉さん相手に油断なんて、絶対に命取りになるってわかってたはずなのに・・・・・！

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方のお名前を伺ってもよろしいですか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明久君のクラスメイトです」

「アタシは木下優子です。そっちにいる秀吉の双子の姉で、吉井君とはクラスは違いますが友達をさせてもらっています」

「ウチは島田美波です。アキとは――」

一瞬言葉を切って、美波が横目でこっちを見てくる。

「――友達、です」

む。友達じゃないとでも言いたかったんだろうか。・・・・・まさかクラス替えの挨拶みたいにサンドバッグなんて言う気だったとか!?

「瑞希さんに優子さん、美波さんですね。はじめまして」

――ピンポーン

と、そこでインターホンが鳴った。どうやら後から来た鏡護達が到着したみたいだ。

「あら。アキくん、またお客さんですか?」

「うん、まぁね。多分今度は姉さんもよく知ってる人達だと思うよ」

「?そうなんですか?」

姉さんに適当に答えつつ、インターホンに応対する。

「いらっしゃい。鍵は開いてるから入ってきて」

『『お邪魔しまーす』』

すぐに玄関の方から2人分の声が聞こえてきて、リビングに入ってきた。

「ごめん皆。ちょっと遅れちゃったよ」

「ごめんね。思ってたより仕事が片付くのが遅くなっちゃったの」

「あら、あなたは昨日の……。それにもう1人は……もしかして黎夜、ですか？」

「どうも。昨日ぶりです、玲さん」

「久しぶりね玲。こっちに帰ってきたなら連絡くれてもよかったんじゃない？」

「ごめんなさい。うちの愚弟の事でちょっと色々あったから」

「あはは。本人を目の前にして愚弟とは、流石は玲さん」

「鏡護、そこは笑うところじゃないよ……」

何はともあれ、これで全員集合だ。

「そういえば、どうして黎夜がここに？」

「実はね、ここにいるキョウ君が私の弟なの。それに私、今は文月学園で教師をしてるのよ」

「そうだったの。……確かに黎夜と鏡護君はよく見ると似ているわね」

「そうでしょ？キョウ君は私の自慢の弟なんだから」

「ちょ、ちょっと姉さん！こんな皆がいる前で抱きしめないで！」

「それに引き換えうちのアキくんは……。はぁ……」

「姉さん！何で僕を見て気の毒そうに溜め息を吐くのさ！」

何だか鏡護とは妙にシンパシーを感じる。どうやら鏡護もお姉さんのオモチャにされて苦労しているみたいだし。

「……ところで、姉さんは何で外出していたの？」

そろそろ話題を変えようと、姉さんにそう切り出した。

「お夕食の買い物に行ってきたのです」

姉さんが手に提げていた袋を掲げた。中にはアサリやベーコンなどの食材が見える。そうか、夕飯の買い物に行ってたのか。

「あれ？でも、随分と量が多いね」

２人分にしてはどれもこれも分量が多い。一家庭分にしてもまだ余

る位だ。

「いいえ。それで合っていますよ」

僕の指摘に対して少し不機嫌そうに口を尖らせて反論する姉さん。感情を余り顔に出さない姉さんにしては珍しいリアクションだ。さては、料理が苦手なくせに慣れない夕飯の買い物なんてしてきたもんだから、分量を間違えたな？図星を刺されて不機嫌になるなんて、あまり姉さんらしくないけど。

「折角皆さんがいらっしゃった事ですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？大したおもてなしは出来ませんが」

まるで最初からそのつもりだったと言わんばかりに皆を夕食に誘う姉さん。どうあっても分量を間違えた事を認める気はないらしい。

「それじゃ、ありがたく好意に甘えさせてもらうとするかな」

「……ご馳走になる」

「迷惑でなければワシも是非相伴させて頂きたい」

「ウチもご馳走になろうかな」

「それじゃあ、アタシも」

「わ、私もいいですか？」

「玲。お酒買ってきたから、一緒に飲みましょう？」

「僕もいいかな？少しだけど材料買ってきたからよかったらね」

全員が首を縦に振り、今日は大人数での夕飯が決定した。

「それは良かったです。ではアキくん、お願いしますね」

「うん。了解」

姉さんの手から材料の入った袋を受け取る。これは久々に贅沢な夕飯になりそうだ。

「え？アキが作るの？」

「うん。そうだけど」

美波が驚いている。そんなに驚くような事かな？

「今日のお昼の弁当、あれ僕が作ったんだけど」

「そ、そうだったんだ……」

どうにも美波は納得がいかない様子。

「そう不自然な事でもないだろう？俺だって料理くらい作るしな」

「……紳士の嗜み」

「嗜みかどうかは知らないけど、料理するのって楽しいしね」

「わ、ワシは、その……あまり得意では……」

雄二やムッツリーニ、鏡護の腕前は披露済みだから、それについては驚いていないみたいだ。

「ムッツリーニや鏡護はともかく、雄二はやっぱり家で夕飯を作って覚えたタイプでしょ」

「おう。その通りだが……やっぱりってのはどうしてだ？」

「あはは。だって、雄二は家の中で一番地位が低そうだもん」

「？お前は何を言っているんだ？」

「え？何って――夕飯って、家の中で一番立場の弱い人が作るもんなんでしょ？」

『『『……』』』

何故かその瞬間、皆から一斉に可哀想なものを見る目で見られた。

「玲？」

「母の方針で、我が家ではそういう事になってるの」

「アキのお母さんって、なんかパワフルな人っぽいわね……」

「普通は立場に関係なく、作れる人が作るもんなんじゃが……」

「え!?普通の家では違うの!?おのれ母さん!よくも今までずっと僕を騙し続けてくれたな!?」

「むしろ気付かなかった明久がすごいと思うよ……」

ん?鏡護が何か呟いたみたいだけど、何だったんだろう?

「んじゃ、ちょっと早いが先に夕飯の支度から始めるか。明久、手伝うぞ」

「……協力する」

「僕も手伝うよ」

「あ、うん。ありがとう3人とも」

そんなこんなで、結局まずは夕飯を食べて、それから皆でテスト勉強をするという運びになった。

「おい明久。何かちょうどいいサイズの鍋はないか?」

「へっへ~。実はそっちの棚の奥に、パエジェーラが入ってるんだよね」

「パエジェーラ?それってパエリア専用の鍋の事だよね?随分とまた珍しいものを持ってるんだね。うちにはないよ」

「……うちにもない」

「かなり昔に、母さんがもらってきたんだよ。それで折角だからってパエリアを作ってみたら結構美味しくってさ。それ以来、僕の好物の1つだよ」

「なるほどな」

我が家自慢のシステムキッチンで、僕と雄二と鏡護とムッツリーニが料理をしている。

そもそも僕の家は、元々家族で暮らす為に買った家だからそれなりの広さがある。

僕1人で暮らしているには広過ぎて寂しくなるくらいに。

それでもこうやって男4人が入れるのだから、人数がいる時はありがたい。流石にちょっと手狭にはなっちゃうけど。

「しかしまぁ、スペイン料理とはな。お前の姉貴はてっきり日本食をご所望かと思ったんだが」

「一応姉さんは何でもいいって言ってたけど」

「……この材料は、明らかにパエリア」

「そうだね。エビやアサリだけならペスカトーレとかも考えられるけど、サフランがあるから間違いないね」

「そうだね。サフランを使う料理なんて、他には知らないし……あれ？ホールトマトなんか何に使うんだろ？」

姉さんが買ってきた材料の中には、何故かホールトマトの缶詰が入

っていた。これってパエリアの材料なのかな?僕は知らないけど。

「それって多分ソフリットに使うやつじゃないかな?」

「ソフリット?何それ?」

「……トマトとタマネギとニンニクで作るトマトソースの事」

「へぇ〜、そうなんだ。今まで作った時は一度も使わなかったから知らなかったよ」

「何だ明久。お前、パエリアなんて面倒なものを何度も作ってたのか?」

「うん。好物だからね。よく作ったよ」

前に作ってから1年以上経つのかな。1人暮らしを始めてからはそんな余裕はなかったからなぁ・・・・・。

「何度も作っているのに、買ってきた材料が違った?それはおかしくないか?」

「そう?多分姉さんがうっかりしただけじゃないかな。いつもは買い出しも調理も僕の仕事だから」

「そうか。まぁ、そうかもしれないな」

イマイチ納得していないような、雄二の形だけの同意。別に大したことじゃないと思うんだけど。

「え～っと……うん。タマネギもニンニクも買ってあるね。それじゃ、僕がトマトソースを作るよ」

その時、袋の中を漁っていた鏡護がそう言ってきた。

「鏡護、作れるの？」

「うん。家で作った事があるんだ」

「そっか。じゃあ任せてもいい？」

「うん。任せておいて」

鏡護の料理のレパートリーは随分多岐に渡るみたいだ。

それにしても、今更だけど皆手際がいいというか何というか。特に雄二がここまで料理に慣れているなんて意外だ。

「あのさ、雄二って家で毎日夕飯を作ってるの？」

「ん？ああ。いや、流石に毎日ってわけじゃない。一応うちの母親も作るには作るんだが……」

「いいなぁ。そういう母親」

「……放っておくと、ヤツは何を作るかわからんからな……」

何故かそこで遠い目をする雄二。まるでウニとタワシを一緒に食卓に出された事があるかのような、そんな哀愁が漂っていた。

「それじゃ、そろそろお米を炊くよ？」

「ああ、そうしてくれ。鏡護はどうだ？」

「今終わったよ」

「よし。それじゃ、俺と鏡護とムッツリーニでサラダとデザート、後は簡単につまめるものを作るぞ」

「……了解」

「わかった」

雄二の指示で、またそれぞれに作業を始めるムッツリーニと鏡護。その間に、僕は野菜と生米を鉄鍋に入れて火にかける。これをある程度炒めたらスープの出番だ。

「明久。スープを入れたら鍋から目を離すなよ。炊きムラができるからな」

「大丈夫。わかってるって」

しばらく待って、程よく色が変わってきたところでスープを入れる。後はたまに鍋を揺らしながら炊き上がりを待つだけだ。

そんな訳で手持ち無沙汰な待ち時間。鍋を見ながらボーっとしていると、リビングから姉さんや待っている皆の声が聞こえてきた。そういえば、あのメンバーで一体どんな話をしているんだろう。

『良ければアルバムでも見ますか？アキくんの小さな頃の写真です

けど』

『え？いいんですか？』

『面白そうじゃな』

『アキの小さな頃って、どんな顔してたのかしら？』

『是非見てみたいわね』

『いいわね。玲、お願いできる？』

『では持ってきますね。少し待っていてください』

う・・・・小さい頃の写真か・・・・・。恥ずかしいな・・・・・。出来れば姉さんを止めに行きたいけど、鍋から目を離すわけにはいかないし、皆も見たいって言ってるし・・・・・

『お待たせしました』

なんて思っているうちに、姉さんがアルバムを持って戻ってきたようだ。

はぁ・・・・・仕方ない。皆の暇潰しの為に、多少の恥は我慢するか・・・・・

『こちらが、アキくんが2歳の頃のお風呂の写真です』

『す、すッごく可愛いですっ！』

『うむ。愛くるしい顔をしておるのう』

『素直そうで可愛いわね～』

『それでこっちが、アキくんが４歳の時のお風呂の写真です』

『あははっ。吉井君ってばお風呂で寝ちゃってるわ』

『温かくて気持ちよかったからでしょうね。可愛いじゃない』

『そしてこっちが、アキくんが７歳の時のお風呂の写真です』

『小学生の頃ですね。懐かしいです』

『かなり背丈も伸びておるのう』

『だいぶ大きくなってるわね』

『更にこちらが、アキくんが１０歳の時のお風呂の写真です』

「待った姉さん！どうしてさっきからお風呂の写真ばっかりなの！？そのアルバムは何の写真を集めてるのさ！」

持ち場を離れるわけにもいかないので、台所から呼びかける。けど、返事はない。まったく、いくら小学生の頃の写真だからって、お風呂ばっかりだなんて――

『――そして、これが昨晩のアキくんのお風呂の写真です』

『『『……（ゴクリ）』』』

「このバカ姉がぁーっ！！いつの間にそんな写真を！？さては着替えか！脱衣所に着替えを持って来た時かっ！」

「明久。鍋から目を離すな。吹き零れるぞ」

「もうそんな事はどうでもいい！それよりもあのバカの脳天をフライパンでカチ割ってやる事の方が大事なんだ！」

「明久。料理を疎かにしちゃダメだって。ちゃんと鍋を見ててよ」

「放せーっ！雄二のバカーっ！」

いや、きっと大丈夫だ！姫路さんや美波、木下さんは姉さんと違って良識ある女の子だ。そんな写真、見ないで済ませてくれるに違いない！

第３５問　『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その１』（後書き）

あとがき

作者　「思ったより長くなりそうだったので次回に続けます。ごめんなさい！

次回、第３６問『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その２』

を、」

作＆鏡　「「お楽しみにー！」」

第３６問　『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その２』（前書き）

〈感謝コーナー〉

ユニークが２０，０００を超えました！

毎度の事ながら、読者の皆様へ感謝申し上げます。本当にありがとうございます！

それでは、本編へどうぞ！

第３６問　『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その２』

――そんなこんなで時間は過ぎて――

「皆、待たせたな。夕飯が出来たぞ」

「ありがとうございます。お客様なのにアキくんのお手伝いまでして頂いて」

「気にしないでください。料理するのは嫌いじゃありませんから」

「……この程度、お安い御用」

やっと完成した夕飯が予備のテーブルを使って拡張されたリビングのテーブルに並ぶ。うん、美味しそうだ。

「あ、ありがとうございます……（ポッ）」

「お、美味しそうね……（ポッ）」

「へ、へぇ～豪華ね……（ポッ）」

「姫路さんに美波に木下さん。どうして僕を見て顔を赤らめるの？」

まさか見てないよね？姉さんが言っていた写真なんて絶対に見てないよね？

「すごい。ご馳走じゃない」

鏡護のお姉さんだけ平然としているのが何だか逆に僕の不安を煽った。

「それにしても、アキくん。あなたはどうしてそんなに落ち着きがないのですか。リビングにまであなたの大きな声が聞こえてきましたよ？」

「それは姉さんの行動が原因なんだからね！？」

自分の行動を棚に上げて、よくそんな事が言えるよね！

「ほら、またそうやって大声を出して……。カルシウムが足りないのではありませんか？」

そう言いながら、姉さんは僕の目の前のパエリアをよけて、代わりに深皿を1つ置いた。何だ？これは何のお皿だ？

「皆さん、貝の殻はこのお皿に入れてください」

「何それ！？僕の夕飯は貝の殻だけなの！？カルシウム不足とか言ってるけど、これってただのイジメだよね！？」

というか、薄々思っていた事だけど、

「姉さん……。もしかして姉さんって僕の事が嫌いなの……？」

帰ってくるなり殴られるし、恥ずかしい写真を公開されるし、嫌われているとしか思えない行動ばっかりだ。

そんな僕の疑問に、姉さんは「心外です」と前置きしてから答えた。

「何を言っているのですか？姉さんがアキくんを嫌うわけがないでしょう？」

その割には扱いが酷過ぎやしないだろうか。

「むしろ、その逆です」

「え？嫌いの反対っていう事は」

「無論、大好きです」

「そ、そうなんだ……」

「はい。姉さんはアキくんの事を愛しています」

思わず照れてしまう。そこまで言われると、流石に僕も恥ずかしい。だって、いくら何でも皆の前で『愛しています』だなんて――

「――1人の異性として」

最悪だ。

「最後の一言は冗談だよね！？それならむしろ嫌いでいてくれた方が嬉しいんだけど！？」

やっぱりこの人は僕を追い詰めて自殺させる気なんだ！そうだ！そうに決まっている！絶対に僕の事が嫌いなはずだ！

「日本の諺にはこういうものがありますよね」

「何!?まだ余計な事を言うの!?」

「バカな子ほど可愛い、と」

「明久、諦めろ。世界でこの人ほどお前を愛している人はいないぞ」

「待って!それは僕が世界で一番バカだと思われてるって事なの!?」

「う、ウチだってアキの事を世界で一番のバカだと思ってるわよ!」

「やめて美波!僕の心をこれ以上傷つけないで!」

ひ、酷い・・・・・まさか美波にまでそんな事を言われるなんて・・・・

「まぁ、そんなどうでもいい事は置いておくとして」

「ど、どうでもいいんだ……。結構僕の人生を左右しそうな内容の会話だったんだけど……」

まさか、僕の人生も含めてどうでもいいってわけじゃないよね・・・・?

「とにかく、冷めないうちに頂きましょう」

姉さんの声で、目の前で湯気を立てている料理に視線を移す。さっきの話がどうでもいいわけじゃないけど、折角作った料理が冷めて

しまうのはもったいない。今は夕飯を優先しよう。

『『『いただきまーす！』』』

皆で手を合わせて、目の前の料理に取り掛かる。

「む。これはまた美味いもんじゃな」

「そうか。口にあったようで何よりだ」

「そう言ってもらえると作った甲斐があるよ」

「……（こくり）」

秀吉がニコニコとパエリアを頬張っている姿は、額縁に入れて飾っておきたいほどに可愛らしかった。

そして、それとは対照的に砂を噛んだような表情をしている姫路さん、美波、木下さんの3人。

「あれ？3人ともパエリアは苦手だった？」

「ううん……。嫌いじゃないし、すごく美味しいんだけど……」

「だからこそ、ちょっと悔しいと言いますか……」

「どうしてアタシ達の周りの秀吉以外の男子って皆こんなに料理が出来るのかしら……」

よくわからないけど、女の子は色々と複雑なようだ。

「上手に出来ていますね。アキくんの知っているレシピとは違う材料も用意していたのですが、このトマトソースを作ったのは？」

「あ、それは僕です。前に一度作った事があったのでやってみたんです。どうですか？」

「ええ。とても美味しいです」

「それはよかったです」

「偉そうに言うわね。玲は料理が全然ダメなくせに」

「黎夜。その台詞はあなたにだけは言われたくないわね」

「玲さんの言う通りだよ。姉さんは料理しようとすると必ず調理器具を壊すんだから」

・・・・・鏡護のお姉さんはどれだけ料理が出来ないんだろう。料理で器具が壊れるなんて普通ありえない。

「そういえば、姉さんよくパプリカとかの材料を買ってこれたよね」

何となく気になっていた事を姉さんに聞いてみた。パプリカとピーマンくらい間違えると思ってたのに。

「そこは抜かりありません。レシピを店員さんに渡して用意してもらいましたから」

「人頼みかいっ！」

ダメだ。やっぱり変わってない。いや、以前までだったら作ろうとすらしなかったんだから、一応レシピを用意した分、前に進んではいるのかもしれないけど。

「ところで、皆さん」

ここからが本題、と言わんばかりに姉さんが話を切り出した。何だ？

「うちの愚弟の学校生活はどんな感じでしょうか？例えば、成績や異性関係など」

やけに後者が強調される。

ふっ、姉さん。それを聞き出す為に皆を夕飯に誘ったんだろうけど、残念ながらここにいる皆には既に事情を話して余計な事は言わないように頼んであるんだよ。

「えっと、明久君はすごく頑張っていると思います。最近は成績も伸びてきているみたいですし」

「そうね。たまにドキッとさせられる時があるわ」

流石は姫路さんと美波。雄二と違って本人やその家族を前に、悪い事なんて言わない良識人。

「そうですか。それで、異性関係は？」

「えっと、その、よくわかりません……。異性関係は」

「ウチもあまり知らないわね……。異性関係は」

どうして2人は異性を強調するんだろう。

「そうですか。他の皆さんは如何ですか？」

『『『異性関係については何も』』』

・・・・・どうして皆まで？

「わかりました。それでは……今度アキくん自身に、ぼっきりと聞かせてもらうとしましょう」

『『『それがいいと思います』』』

「姉さん『ぼっきり』って何！？普通そこは『じっくり』とか『ゆっくり』だよね！？それに皆も満場一致で肯定するな！」

明確な悪意と殺意をそこに感じる。来るべき生命の危機に備えて、今からカルシウムを多めに摂っておく必要がありそうだ。

「明日のおかずは魚にしようかな……」

「まだ今日の夕飯を食べている最中だというのに、もう明日の献立を考えているのですか。アキくんは食いしん坊ですね」

「いや、そういうわけじゃないよ」

骨折対策だから。

「そういえば、言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくても結構ですよ」

「え？そうなの？」

「はい。こちらで済ませておかないといけない仕事があって、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうなのです」

仕事って言うと、姉さんが手伝っている例の父さんの会社か。まぁ何をやっている会社なのか知らないから、詳しい事はよくわからないけど。

何にせよ、この話はありがたい。これで少しは姉さんの圧力から解放される．．．．．っ！

「……アキくん、嬉しそうですね」

「ぅえ！？い、いや、そんな事はないよっ。むしろ折角帰ってきた姉さんがいなくなって残念だよ」

「英語で言ってみてください」

「Ｈａｐｐｙ」

「……」

「あっ！痛っ！姉さっ……！食事中にビンタは……っ！」

口の中が切れたせいで、デザートは血の味が混ざっていた。

てきぱきと後片付けを終えて全員がリビングに集まると、姫路さんがいよいよ今日の集まりの本題を切り出した。

「そろそろお勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕飯の支度が早かったせいか、現在時刻はまだ7時。今からでもたっぷりと勉強は出来そうだ。あまりやりたくはないけど、これも僕の自由の為だ。頑張らないと！

「ならばワシも一緒に教えてもらうとするかの」

「……同じく」

Fクラスのメンバーとは思えないほど真面目な姿だ。是非ともこの光景を鉄人に見せてやりたい。

「そうだね。テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強を始めようか！」

妙な勘繰りを受けないように姉さんを牽制しておく。

「皆さんでお勉強ですか。それでしたら良い物がありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきますね」

トタトタとリビングを出て行く姉さん。その後何かを取り出す音がして、再び部屋に戻ってきた。

「参考書というのも何ですが、役に立つかもしれませんので」

姉さんが持ってきた本がテーブルの上に置かれる。何だか見覚えのある本だなぁ。

『女子高生　魅惑の大胆写真集』

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがぁーっ！！」

何持ってきてんのこの人!?そんなに弟を追い詰めて楽しいの!?

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！こんなもんが参考になるかぁーっ！あと僕の部屋に勝手に入ったね!?あんなに入らないでって言ったのに！」

「いいえ。昨日、確かにアキくんは部屋に入って良いと言いました」

「それってもしかして着替えを取りに行く時の事!?あの時の会話はこれが目的だったのか！なんて陰湿卑劣迂遠な作戦なんだ！」

「そ、それじゃあ、ウチの勉強の参考書として……」

「美波！？無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ！？というか、お願いだから見ないで！」

僕の趣味がバレちゃうじゃないか！

「アキくん。ベッドの下に置いてあった他の参考書も全て確認しましたが、あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで！いくら言い方を変えて取り繕ってもそれが僕の趣味傾向だって事がバレちゃうんだから！」

「ポニーテールに大きなバスト、ねぇ……」

雄二がいかにも邪悪な笑顔を浮かべたまま僕を見てきた。

「な、何かな雄二」

「ん？いや、別に何も？」

嘘だ。そんな笑顔なのに何もないわけがない。イヤなネタを握られてしまった。

「お主ら、勉強は良いのか？」

「そ、そうだね。秀吉の言う通りだよ！さぁ勉強を始めるよ皆！」

美波から本を取り上げて、空気を入れ替えるようにそう声を掛ける。
さぁ勉強勉強！

「まぁ明久のエロ本なんて正直どうでもいいしな。勉強するならさっさと始めようぜ」

雄二が一転してそんな事を言う。腹立たしいけど、ここは大人しくしていた方がいいだろう。

「お勉強なら、よろしければ私が見て差し上げましょうか？」

「あ、そういう事なら私も見るわよ？私は皆の先生だしね」

「え？お2人が見てくださるんですか？」

その提案に、姫路さんがちょっと驚いた顔をしている。
確かに鏡護のお姉さんは頭がいいのはよくわかるけど、うちの姉さんはさっきまでの行動を見ていたら疑問に思うのも無理はない。

でも、

「そうですね。日本ではなくアメリカのボストンにある学校ではありますが、一応大学の教育課程を修了しています。多少はお力になれるかと」

「ぼ、ボストンの大学だと！？それってまさか、世界に名高いハーバード――」

「よくご存知ですね。その通りです」

『『『えぇぇっ！？』』』

僕と鏡護のお姉さん以外の全員の驚く声。
不思議な事に、この姉は何故か勉強だけは異様に出来る。その分常識が圧倒的に不足しているけど。

「なるほど、出涸らしか……」

「雄二。その言葉の真意を聞かせてもらえるかな？」

憐れむような視線が余計に腹立たしい。

「あ、ちなみに私はそのご近所のＭＩＴ出身よ。理系科目は任せてね」

『『『えぇぇっ！？』』』

鏡護のお姉さんの一言に、今度は鏡護と姉さん以外の全員が驚く。
そうか。だから姉さんと鏡護のお姉さんは知り合いだったのか。

「こっちは紛れもないエリートの血だな」

「だから雄二。その言葉の真意を教えてくれない？」

今すぐにでもコイツをしばき倒してやりたい。

「しかし、そういう事なら教えてもらおうぜ。本場の英語とか、こっちの教師が教えてくれないような事も色々知ってそうだしな」

「……頼もしい」

「わかりました。それでは、私の方はまずは英語から始めましょうか」

「それじゃ、私は物理あたりにしようかな。話を聞きたい子はおいで」

『『『よろしくお願いします』』』

結局この後１０時くらいまでみっちり勉強して、その日は解散となった。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第３６問　『突撃！家庭訪問！　第１回：吉井家編その２』（後書き）

あとがき

作者　「家庭訪問シリーズのあとがきは毎回ゲストを呼んでお送りします。という事で、今日はこの人！」

明久　「ど、どうも。吉井明久です」

作者　「そういえば、明久はこのコーナー初登場だよな」

明久　「そうだね。もっと早く呼んでくれてもよかったんじゃない？」

作者　「だって呼ぶ機会が……」

明久　「いや、いくらでも呼ぼうと思えば呼べたよね！？」

作者　「まぁそれは冗談として。玲さんってスゲェ人だな。色んな意味で」

明久　「あ～、まぁ、そうだね」

作者　「いきなりテンションダダ下がりだな、おい」

明久　「あの姉さんがせめてもう少し常識を身につけてくれれば文句はないんだけどね」

作者　「贅沢抜かすな。学業優秀でプロポーション抜群。それだけ

でも充分だろう」

明久　「いや、だからこそ余計に常識知らずなのが残念なんだよ…」

作者　「まぁいいや。俺にとっては所詮他人事だし」

明久　「うわ、酷っ！」

作者　「次回は家庭訪問シリーズの第２回、坂本家編を予定しています」

明久　「あ、そうなんだ。それはちょっと楽しみかも」

作者　「それでは次回予告！

次回、第３７問『突撃！家庭訪問！　第２回：坂本家編』

を、」

作＆明　「「よろしくお願いします！」」

第３７問　『突撃！家庭訪問！　第２回：坂本家編』（前書き）

バカテスト　英語

問　下線部の英単語の正しいアクセントを答えなさい。
『Ｄｏｎ'ｔ　ｍｉｎｄ.　Ｉｔ'ｓ　ｙｏｕｒ　〈下線部〉ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ.　Ｈｅ　ｈａｄ　ｓｔａｙｅｄ　ｏｎ　ｂｕｓｉｎｅｓｓ　ｉｎ　Ｎｅｗ　Ｙｏｒｋ　ｙｅｓｔｅｒｄａｙ.』

天水鏡護の答え
『Ｉｔ'ｓ　ｙｏｕｒ　ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ.』
教師のコメント
正解です。一般的に”－ｔｉｏｎ”という単語は”ｔｉｏｎ”の前の母音にアクセントがつきます。覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え
『Ｉｔ'ｓ　ｙｏｕｒ　ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ.』
教師のコメント
数を撃てば当たると言うものでもありません。

吉井明久の答え
『Ｉｔ'ｓ　ｙｏｕｒ　ｉｍａｇｉｎａｔｉｏｎ!』
教師のコメント
たまに君は天才なんじゃないかと錯覚する事があります。

第３７問　『突撃！家庭訪問！　第２回：坂本家編』

―Ｓｉｄｅ　雄二

「という訳で雄二。今日も楽しく勉強会をしよう！」

翌日の放課後。帰り支度を整えた明久が俺のところにやってきた。

「……明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

「何とでも言ってよ。今の僕には体裁を気にしている余裕はないんだから」

「どうしたの？また減点されたの？」

そこに鏡護も近づいてきた。

「あ、鏡護……。うん。実は今朝起き抜けにいきなり英語の問題を出されてね……」

そんな事を言う明久だが、コイツの事だ。起き抜けだろうがなかろうが、結局は答えられなかっただろう。

「そうか。それで、今の減点はどのくらいなんだ？」

「確か、合計で２９０点。もうかなり厳しいんだよね」

「２９０か。となると、期末の総合目標は１０９０点くらいって事になるね」

「そうなんだよ。今までは絶好調でも１０００点ちょっとだったから、それに更に５０点以上アップさせないと……」

総合１１００点程度となると、だいたいＥクラスの中堅くらいか。

今の明久では確かに難しいところだな。

だが、

「まぁ、その程度ならまだ何とかなるだろ」

「え？そうかな？」

俺の言葉に暗くなっていた明久の表情が一転した。

「暗記科目を中心に今から死ぬ気で根性入れたら、それなりに上がるはずだからな」

「そうだね。明久の場合、伸び代が残っている世界史辺りが狙い目かな。確か今までは５０～６０点くらいだったよね？」

俺の言葉を継いで鏡護が話を進める。

「うん。でも、よく知ってるね」

「Ｆクラスのメンバーの点数くらいなら一応把握しているからね」

鏡護のヤツが何でもない事のようにサラッと言っているが、普通ク

ラス代表でもなければそんな事を一々覚えておいたりはしない。

「お前にはありがたい話だと思うが、振り分け試験の時とは違って、今回の期末の問題を作るのは田中らしい。よかったな」

「田中先生か……。それなら確かに点数を取り易いかも」

世界史の田中はおっとりした初老の教師で、テストの問題が解き易いという事で生徒達の評判がいい。他人との差ではなく、点数そのものを必要としている今の明久には願ってもない状況だろう。

「下手に理数系に時間を使うよりも、暗記科目に集中した方が点数には結び付き易いはずだよ」

「そうだね。今から数学なんて勉強してもあまり点数は上がらなそうだし」

などと3人で明久のテスト対策について話をしていると、鞄を抱えた秀吉がやってきた。

「何じゃお主ら。今日も明久の家で勉強会かの？」

「僕の家？う～ん……。今日からは姉さんが仕事でいないから、それでもいいんだけど……」

「けど？」

「今日は雄二の家にしようよ。たまには僕の家以外にも行ってみたいし、何より僕の部屋には参考書とかの勉強道具があまり揃ってないしね」

明久がそんな事を提案してきた。恐らく、会場を俺の家にする事で俺を確実に巻き込もうという算段なんだろう。

「いいよね、雄二？昨日は無理を押して僕の家に来たんだし」

まぁ、確かに昨日は無理やり押し入ったようなもんだしな・・・・・

「わかった。今日は俺の家でやるか。幸い、おふくろも温泉旅行で不在だからな」

明久が姉貴の事を隠したがったように、俺も『あの』おふくろの存在を皆に知られたくはないからな。

「それならば、ワシも同行させてもらっていいかの？1人では勉強する気が起きんのじゃ」

「もちろんオッケーだ。というか、どうせ昨日のメンツは全員来るんだろ？だったらさっさと行こうぜ」

「そうだね。おーい、ムッツリーニ、姫路さん、美波ー！」

「それじゃ僕は優子を迎えに行って来るよ」

明久がまだ教室内に残っていた3人に声を掛け、鏡護が木下姉を呼びに教室を出ていった。

「はい。何でしょうか明久君？」

「何か用？」

「……どっかに行くとか？」

名前を呼ばれた3人は、それぞれ帰り支度をしてこちらに寄ってきた。

「うん。今日は雄二の家でテスト勉強をしようと思うんだけど、良かったら――」

3人もテストに向けて気合が入っているのか、勉強会には二つ返事で参加だった。

「……どうしてお前が2人と一緒にいるんだ？」

鏡護と木下姉と合流した時に、当然のように一緒にいた翔子に俺は問い掛けた。

「……私としては、むしろ雄二に今すぐにでもお仕置きをしたいところ」

それに対してサラッと恐ろしい返事をする翔子。

「少しは僕に感謝してよね。霧島さんを落ち着かせるのにどれだけ骨を折った事か」

俺に近づいてくると、鏡護がそう耳打ちしてきた。

「……そうだな。お前のおかげで命拾いしたようだしな」

確かに翔子に何も伝える事なく、翔子以外の女子と一緒に出掛けていた事が知れれば、普通ならそれだけで俺の命はなかっただろう。

「連絡しなかったのは俺のミスだ。すまなかったな翔子」

「……もういい。今回は許してあげる。その代わり、今日からは私も参加する」

「わかった」

まぁ、このメンバーに勉強を教える側の人間が増えるのは悪い事じゃないしな。別に翔子1人が増えたところでどうって事はない。

「よし。それじゃ行くぞ」

『『『おーっ！』』』

そうして、俺は皆を連れて家路に着いた。

「んじゃ、入ってくれ」

学校から歩くこと15分程度。住宅地の一角にある俺の家に到着した。

『『『お邪魔しまーす！』』』

ちなみに俺の家は2階建ての一軒家だ。明久の家よりも広いから、勉強はし易いはずだ。

「ねぇ雄二。家には誰もいないの？」

皆の先頭に立って居間へ案内する途中で、明久に話し掛けられた。

「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校時代の同級生と温泉旅行らしい。だから何も気兼ねせずゆっくりしてくれ」

「そうなんだ。そう言えば、前に来た時も雄二の家族は留守だったよね」

「ああ。その方が都合がいいからな。色々と」

『あの』おふくろの事を知られる訳にはいかないからな。今までも万全を期してきたんだ。今日も抜かりない。

そんな事を考えながら、俺はリビングのドアを開けた。すると、

「……！！（ぷちぷちぷちぷち）」

居間には一心不乱にプチプチを潰している女の姿があった。

「……」

――パタン

俺は一言も発する事なくドアを閉めた。

何だ!?今俺が見た光景は一体何だったんだ!?何故いないはずの人間がここにいる!?

俺の頭は状況を整理する事ができず、すっかり混乱していた。

「ゆ、雄二……?今の、山ほどあるプチプチを潰していた人ってもしかして――」

「……赤の他人だ」

「さ、坂本のお母さんなの……?何だか、随分と凄い量を潰していたわよね……」

「う、うむ。あれほどの量、費やした時間は恐らく1時間や2時間ではきくまい」

「……凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をされているのでしょうか?」

「瑞希。そんな職業聞いた事がないわよ」

様々な憶測が飛び交う。早く収集をつけないとマズい!

「……今のはお義母――」

「は、ははは……。恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの方法でこの家に侵入したに違いない。何せ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

翔子が決定的な一言を告げようとしたのを遮って、早口で捲し立てる。自分でもわかるくらい苦しい嘘だが、吐かない方が俺の精神衛生上よろしくない。

俺がドアを閉めてしまったせいで全員が廊下で立ち往生していると、中から女の声が聞こえてきた。

『あら……？もうこんな時間。さっき雄二を送り出したと思ったのに』

どうやら8時間近くあの作業を続けていたらしい。

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

しかもまだ続ける気でいるらしい。

・・・・・もうダメだ！我慢できねぇ！

「おふくろっ！何やってんだ！？」

ついに耐えきれなくなって居間に踏み込んだ。

「あら雄二。おかえりなさい」

「おかえりじゃねぇ！何で家にいるんだ！？今日は泊まりで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。７月と１０月って、パッと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似ているんだ！？数字の形どころか、文字数すら合ってないだろ！？」

「こら雄二。またそうやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「サラッと図々しい台詞をぬかすな！あんたの黄金期は１０年以上前に終わっているはずだ！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「だから俺の話を聞けぇっ！」

『『『あ、あはははは……』』』

俺とおふくろの怒涛の応酬の一部始終を見ていた皆が、呆気にとられて苦笑している。

くそっ！だから知られたくなかったんだ！

「皆さんいらっしゃい。うちの雄二がいつもお世話になっています。私はこの子の母親の雪乃と言います」

おふくろは俺の事を無視して皆に向き直ると、自己紹介をした。
正面からおふくろを見た皆が一様に驚いているが、まぁそれも無理はないかもしれない。

何故なら、

「さ、坂本のお母さんって……若過ぎない！？」

「むぅ……。とても子を産んでいるとは思えん……」

「……美人」

「まるでお姉さんみたいですね～」

「羨ましいわね……」

「っていうか、雄二との血のつながりが全く想像できないよ……」

皆の言う通り、おふくろはその見た目だけならちょっと年の離れた姉といった感じなのだ。
・・・・・明久、テメェは後でしばいてやるから覚悟しとけ。

とにかく、今は一刻も早くコイツらを移動させた方がいいな。

「皆、とりあえずおふくろは見なかった事にして、俺の部屋に来てくれ……」

「う、うん。それじゃ、お邪魔します」

『皆さん、後でお茶を持っていきますね』

居間からおふくろの声が聞こえてきたが、無視して2階にある俺の部屋に向かった。

「ここが俺の部屋だ。入ってくれ」

俺の言葉に従って、皆が部屋に入る。

「そういえば、雄二の部屋に来たのは久しぶりかも」

「ワシもじゃな」

「……同じく」

「言われてみると、確かに……」

明久、秀吉、ムッツリーニ、鏡護が部屋に入るなりそんな事を言った。確かに、コイツらがここに来るのは去年の秋くらい以来か。

「あれ、そうなの？アンタ達のことだからもっと頻繁に来てるのかと思ったのに」

「たいてい集まる時は僕の家だったからね。雄二の家だけじゃなくて秀吉やムッツリーニ、鏡護の家でもあまり遊んだ事はないんだよ」

「場所といい、広さといい、明久の家は色々と都合がいいからな」

「家族用のマンションで1人暮らしですもんね。贅沢です」

「まぁ食生活についてはとても贅沢とは言えないけどね」

その1人暮らしの存続が今回の期末テストの結果によっては終わるというわけだ。

「それはそうと……やっぱりこの人数でこの部屋は狭すぎるか。参ったな……」

俺達は全員で9人だ。座って話をするくらいならともかく、道具を広げて勉強をするにはスペース的にキツい。

「居間じゃダメかな」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

「……雄二。お義母さんの事を悪く言っちゃダメ」

「そうですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いするのはいけませんっ」

「そうは言うがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんな事が言えるんだ。四六時中一緒にいてみると、ツッコミどころが多過ぎて――」

――Ｐｒｒｒ！　Ｐｒｒｒ！

俺が反論していると、突然室内に電子音が鳴り響いた。これは誰かの携帯の呼び出し音か。

「あ、ゴメン。ウチの携帯だわ」

島田がスカートのポケットから携帯を取り出して耳に当てる。メールではなく、電話での連絡という事は急用なんだろう。

「もしもし？あ、Ｍｕｔ――お母さん。どうしたの？……うん。……うん。そう。わかった」

1分もしないうちに通話が終わった。

「美波、何かあったの？」

「うん……。今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど……ちょっと急な仕事が入って家にいられなくなっちゃったみたい」

「あ、そうなの？それじゃ、葉月ちゃんが家に1人か……」

「そうね。だからウチは今日は帰るわ。勉強はまた今度ね」

そうか……。まぁ妹思いの島田の事だ。チビッ子を家に1人にしてはおけないだろう。

ならば――

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

鞄を持って部屋を出ようとしていた島田を引き留めた。

「え？ウチの家？」

「それは良いのう。島田の妹とはここにいる全員が顔見知りじゃし、雄二の部屋はちと手狭だったところじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「……何なら、夕飯を作る」

俺の提案に他の皆も乗り気になる。俺としてはとにかく会場さえ変われば何でもいいんだ。

「美波さえ良かったら、どうかな？」

「う……。そ、そうね……」

ん？島田はイマイチ乗り気じゃないみたいだな。・・・・・さては皆（特に明久）に見られちゃ困るようなものが家にあるのか。

「じゃ、じゃあ、ウチの家にしましょうか……」

それでも少し考えた後、島田の承認が下りた。

「ただし！絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

明久の目を見てそんな事を口にする島田。まったく、わかりやすいヤツだ。

「よしっ！そうと決まれば早速移動だ。チビッ子も1人じゃ寂しいだろうからな！」

俺は背中を押すような勢いで皆を玄関へと追いやると、自分は居間にいるおふくろに出掛ける旨を伝える為に声を掛けた。

「おふくろ。ちょっと出掛けてくる。夕飯は昨日の残りが冷蔵庫にあるから、それを温めて食べてくれ」

「あら、もう行っちゃうの？お茶を用意しているところなのに」

「悪い。事情が変わったんだ。……ところで、その麺つゆのボトルは何に使うんだ？」

「麺つゆ？あらら……。てっきり、アイスコーヒーだとばかり……」

「おふくろ……。色や匂いで気付いてくれとは言わないから、せめてラベルで気付いてくれ……」

ダメだ。やっぱりこの家から皆を連れ出して正解だった。これ以上身内の恥を曝すわけにはいかないからな。

そうして俺達は目的地を島田の家に変更して、俺の家を後にした。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第３７問　『突撃！家庭訪問！　第２回：坂本家編』（後書き）

あとがき

作者　「今日のゲストは坂本雄二です」

雄二　「よろしく」

作者　「何ていうか、登場から凄まじいインパクトだったな」

雄二　「……」

作者　「でも、若くて綺麗な母親だったら普通自慢するだろ？」

雄二　「それだけだったら、どんなによかったか……」

作者　「まぁ流石にコーヒーと麺つゆを間違えたってのには俺も引いたけどな」

雄二　「頼むからもう『アレ』には触れないでくれ……」

作者　「母親を『アレ』呼ばわりとは……そんなにショックか」

雄二　「『アレ』の存在が皆に知られただけでももう終わりだ……」

作者　「あ～、ダメだこりゃ。雄二がちょっと壊れちゃったので、今日はこの辺で失礼します」

雄二　「ブツブツ……」

作者　「次回は島田家に突撃します！葉月ちゃん大暴れ（？）です！」

作者　「という訳で次回予告！

次回、第３８問『突撃！家庭訪問！　第３回：島田家編』

を、ご期待下さい！」

第３８問　『突撃！家庭訪問！　第３回：島田家編』（前書き）

大変長らくぶりです。天叢雲です。

昨年夏以降、身辺が慌しくなり更新が途絶えていましたが、この度ようやく復帰することができました。

拙作の読者の皆様には大変なご心配をおかけしまして、申し訳ありませんでした。

それでは久しぶりの『バカと天眼の賢者と召喚獣』、始まります！

第３８問　『突撃！家庭訪問！　第３回：島田家編』

―Ｓｉｄｅ　美波

「ただいまー。葉月、いるー？」

玄関の扉を開けて、家の中に呼びかける。すると、

「わわっ、お姉ちゃんですかっ！？お、おかえりなさいですっ」

廊下に面した部屋から、小さな影が勢いよく飛び出してきた。

「？葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

どうして葉月がウチの部屋に居たんだろう？

「あ、あぅ……。じ、実はその……独りで寂しかったから、お姉ちゃんの部屋に行って……」

言い難そうながら、着ているパーカーの大きなポケットに何かを隠す葉月。

・・・・・あぁ、そっか。

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？そのくらい、お姉ちゃんは別に怒らないのに」

「そ、そうですか？お姉ちゃん、ありがとうですっ」

ウチは葉月の頭をよしよしと撫でてあげた。

そんなウチと葉月の会話が落ち着くのを待っていたかのように、ウチの背中からアキが真っ先に姿を見せた。

「こんにちは、葉月ちゃん」

「あっ！バカなお兄ちゃんっ！」

葉月はアキの顔を見るなり、ドンッと勢いよく腰にしがみついた。

まったく、葉月ったら・・・・・

それにしてもアキが何だか苦しそうにしてるんだけど、どうかしたのかな？

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わぁっ。綺麗なお姉ちゃんたちまで。今日はお客さんがいっぱいですっ」

次いで顔を見せた瑞希以下残りのメンバーを見て、葉月が顔を綻ばせる。

やっぱり一人で留守番するのは寂しかったのね。皆を連れてきて正解だったみたい。

「ほらほら葉月、アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ？」

「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃんたち、こっちにどう

ぞっ」

「っとと、そんなに引っ張らなくても大丈――ん？」

葉月に手を引かれたアキが廊下の途中で足を止めた。

・・・・・って、あぁ！？そ、そこはウチの部屋！？

さっき葉月が出てきたときにドアが閉まりきってなかったみたいで、少し開いたドアの隙間から中を見ようとしている。

「ちょ、ちょっとアキっっ！？」

「ほぇ？」

ウチは慌てて駆け寄ると、アキが振り向いた瞬間に脳天・鼻先・下顎の三ヵ所に打撃を加え、バランスを崩したところで両手首の関節を外した。

「何見てるのよ！？！？いい？この部屋は絶っっっ対に入っちゃダメだからねっ！」

ウチは大急ぎでドアを閉めると外された両手首を土屋にはめてもらっているアキに指を突きつけた。

「やれやれ。お前らは何をやってるんだか……。チビッ子、元気だったか？」

「はいですっ。おっきなお兄ちゃん」

「そうかそうか。それはよかった」

葉月の頭にポンポンと手を載せる坂本。何だかんだで子ども好きよね、坂本って。

「それで、リビングってこっちでいいのか？」

「はいですっ。こっちですっ」

自分の家から離れたからか、坂本の調子はすっかりいつも通りに戻っている。

「とりあえず適当に座ってもらえる？今テーブルを持ってくるから」

皆をリビングに通して、ウチは自分の部屋に勉強道具を広げるためのテーブルを取りに行こうとした。

「？お姉ちゃん、テーブルなんて何するです？トランプですか？」

それを見ていた葉月が首を傾げている。そういえば葉月には皆が来た理由を説明してなかったわね。

「葉月、今日はお姉ちゃんたちね、うちでテストのお勉強をするの」

ウチがそう言うと、葉月は少し寂しげに目を伏せた。

「あぅ……。テストのお勉強ですか……。それじゃあ、葉月は自分のお部屋でおとなしくしてるです……」

葉月はそのままリビングを出て行こうとする。

こうして大勢の人がいるのにかまってあげられないのは申し訳ないけど、仕方ないよね。

そう思っていたんだけど・・・・・

「待って葉月ちゃん。良かったら、僕らと一緒にお勉強しよっか？学校の宿題とか、予習とかはないかな？」

アキがそんな事を言って葉月を引き止めた。

「えっ？葉月も一緒にお勉強していいですかっ？」

パッと表情を輝かせる葉月。

「もちろんだよ。ね？」

「ああ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないからな」

「雄二。それは僕が小学校五年生レベルだと言っているのかな？」

「まあまあ、抑えて明久。いいんじゃないかな。一緒にやろうよ」

「そうですね。葉月ちゃん、一緒にお勉強しましょうね」

「お姉さんたちが教えてあげるわよ」

「……任せて」

「ワシはあまり教えてやれることはないかもしれんが、一緒に勉強

するのは大歓迎じゃ」

「……保健体育なら教えてあげられる」

アキの提案に、口々に賛同してくれる皆。それはウチとしては嬉しいんだけど・・・・・

（アキ、いいの？今度のテストはかなり頑張らないといけないんでしょ？）

アキの事情を知っているウチとしてはちょっと心配になって小声で呼びかけてみた。

（大丈夫だよ。葉月ちゃんはいい子だから邪魔にならないし。それに部屋に一人にしておいたら、その方が可哀想で、かえって勉強にならないよ）

アキが葉月の事を気にしてくれたのが嬉しくて、

（……ありがと、アキ）

そう囁いたウチの頬は、ちょっと熱かった。

二時間ほどワイワイと勉強をした後に、注文した宅配ピザを皆で食べてからまた勉強。

そうして、このメンバーにしては珍しく何のトラブルもないまま時間が進んで――

「あれ？もうこんな時間なんだ。今日はそろそろ終わりにした方がいいんじゃない？」

気がつくと時計は九時半を指していた。

「そうね。これ以上遅くなるのは色々とよくないし」

「なんじゃ、あっという間じゃったな」

「……集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

天水の一言で皆がペンを置いた。Ａクラスの霧島さんや優子、瑞希や天水に坂本の教え方が良かったおかげで、サクサクと勉強を進められたと思う。

「続きはまた今度ってことで、今日は帰ろうぜ」

「……今日はありがとう、島田」

「あ、ううん。こっちこそありがと。ほら葉月、お礼を言いなさ――葉月？」

「Ｚｚｚｚ……」

「あはは、疲れちゃったみたいだね」

葉月はいつの間にかアキの膝の上で眠っていたみたい。

「もう、葉月ってば……。アキ、悪いけどこっちに寝かしてもらえる？」

「あ、うん。そうしたいんだけど……」

歯切れの悪い返事を返すアキを不思議に思ってよく見てみると、寝ている葉月がアキのシャツを握り締めていた。

これじゃアキは身動きが取れないわね。

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

ウチは声を掛けながら葉月の肩を叩いた。

「んぅ……」

すると葉月は少しだけ目を開けて、

「帰っちゃ、嫌です……」

そう言って更にアキのシャツを強く握り締めた。

「葉月。あんまり我儘言うと、お姉ちゃん怒るからね」

仕方なく少しだけ語気を強くして葉月に声をかける。

「……お姉ちゃんには、わからないです……」

「え？何が？」

「……お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです……。でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです……」

「「「……」」」

寝惚けていたからこそ聞けた、葉月の思わぬ本音に思わずその場に居た全員が顔を見合わせてしまった。

葉月ってば、そんなにアキに懐いてたのね・・・・・

「あのさ、美波。良かったら、僕はもう少しここで勉強していってもいいかな？」

「え？」

「だな。今のチビッ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」

「そうじゃな。明久よ、モテる男は辛いのう」

「……人気者」

皆から口々にからかわれるアキだったけど、ウチにはその顔はどこか嬉しそうに見えた。

「そ、それじゃあ、悪いけどもう少し葉月に付き合ってもらえる？」

「うん」

ぐ、偶然の産物とはいえ、アキと一緒にいられる時間が増えるのはちょっと嬉しいかも。

「（せっかくのチャンスなんですから、頑張ってくださいね）」

「へ？」

背後から囁かれた声に振り向くと、そこには瑞希と優子、霧島さんの３人がいた。

「（そうよ。いい機会なんだから、ものにしちゃいなさい）」

「（……女は度胸）」

「ちょ、ちょっと……！」

「美波？どうかしたの？」

「な、何でもないわ。気にしないで」

３人からの思わぬ不意打ちについ大声で返してしまったのを慌てて誤魔化すウチ。

「（何でこのタイミングでそんな事言うのよ！）」

「（いや、だって……ねぇ？）」

「「（コクコク）」」

小声で抗議するウチにしたり顔で返す優子と、それに激しく同意す

る瑞希と霧島さん。

「（こんな滅多なチャンス、もうないかもしれないのよ？だったら有効に使わなきゃダメじゃない）」

「（そ、それはそうかもしれないけど……）」

「（とにかく、頑張りなさい）」グッ

「（美波ちゃん、ファイトです）」グッ

「（……頑張って）」グッ

3人はそれを最後に玄関へ向かってしまった。

「（だから、そのガッツポーズは何！？）」

ウチは心の中で叫んだけれど、当然ながら返事はない。

「それじゃ、島田。今日はありがとうな」

「大勢で押し掛けてすまなかったのう」

「……ありがとう」

「島田さん、今日はありがとう。また明日ね」

先に部屋を出た女性陣を追うように、男性陣もウチに声を掛けて玄関に向かう。

「こっちこそありがとね。外まで送るわ。アキは勉強してて」

「了解。じゃ、また明日。皆」

さっきのやりとりを頭の隅に追いやって、平静を装いつつ皆の後を追った。

外に出てから、改めて全員からお節介を焼かれたのはここだけの秘密。

「ごめんね、アキ。迷惑かけちゃったわね」

皆を送り出してリビングに戻ったウチは改めてアキに謝罪した。

「ううん。別に迷惑だなんて、そんなこと思ってないよ」

「……ありがと」

アキに笑顔で返されて照れくさくなったウチは短く答えてアキの隣に座ると葉月の頭をそっと撫でた。

「んにゅ……」

「まったく、この子ってば……」

頭を撫でていると、葉月はくすぐったそうに頭を動かす。

「美波と葉月ちゃんって仲がいいよね」

「そうね。悪くはないかも」

「見ていて微笑ましいよ」

「っ／／／な、何言ってるのよ。あ、アキの方こそお姉さんと随分仲がいいじゃない」

不意にアキの優しい笑顔を見せられて、思わず焦ってしまった。

「え？どこが？ずっと監視されてるし、家のことは全部やらされるし、口うるさいし、仲良く見える要素なんてないと思うけど」

「でも、ホラ。『アキくんのことを愛しています』って」

「……アレは忘れてよ」

「まぁ、その後の台詞はウチも冗談だとは思うけどね」

「当たり前だよ」

というか、そうじゃないとウチが困るというか……って何を考えてるのウチ！

「「……」」

葉月の寝顔を見ながらの沈黙の時間が流れる。

「……あのね、アキ」

「うん？何？」

「ウチの部屋に置いてあった、あのぬいぐるみのことなんだけど……」

「ああ、あの大きなキツネのぬいぐるみ？」

「そう。――あれなんだけど、アキが買ってくれたんでしょ？」

「ん？……ああ、そういえばそんな事もあったかな？」

「それで清涼祭の後にね、どうしてアキと知り合いだったのかが気になったから、葉月に話を聞いたの」

「ああそっか。そう言えばあの時は説明してなかったよね」

「その話を聞いたらね、すごく……嬉しくなっちゃったの」

「そりゃそうだよ。妹が自分の為に頑張ってくれたんだから。嬉しくないわけがないよ」

「……」

そうよね。これで気が付くようなアキじゃないものね。

「はぁ……。アンタって、本当に察しが悪いわね」

ある意味予想通りのアキの反応に思わず大きな溜息が漏れる。

「さっきウチの部屋を見た時、そのぬいぐるみが見えたでしょ？」

「あ、うん。写真立てか何かを持っている大きなぬいぐるみがチラッと見えたよ」

「その写真立てなんだけど……」

「うん」

「誰が写っていたのか、知りたくない……？」

「ふぇ？」

最大限歩み寄った、これがウチの妥協点。この流れであの写真を見せれば、流石のアキでも気付くはず。そうしたら……

「んにゅっ！」

「「ひゃぁっ！？」」

その時、寝ていた葉月が突然身体を起こした。び、びっくりしたじゃないっ！

「にゅぅ……」

そして再び身体を横たえる葉月。ね、寝惚けただけみたいね……

「あ、あはは……びっくりしたね」

「そ、そうね。びっくりよね」

少しの間、2人でぎこちなく笑い合う。
さっきまでの会話のせいで妙な雰囲気のまま不自然な沈黙が生まれてしまった。

「あ。今のうちで葉月ちゃんが手を離してくれたみたいだ」

「え？あ、ホントね」

沈黙を破るアキの言葉に合わせて葉月に目を向けると、確かに手を離していた。

「それじゃ、そろそろ僕も帰るよ」

アキが葉月を抱き上げてソファーに寝かせてくれた。

「そう。それじゃ、また明日ね」

「うん」

勉強道具を鞄にしまって、リビングから出て行こうとするアキの背中にウチは声を掛けた。

「……アキ」

「うん？」

「……ウチの部屋の写真……見て帰っても、いいから」

ウチはそれだけ言うと恥ずかしくなってアキから顔を背けた。

「う、うん……それじゃあ」

それだけ言って、アキはリビングから出て行った。

それからしばらくして、玄関のドアが閉まる音がした。

「あ、アキは見たかしら……。あの写真……。見たら、流石にあのバカでもわかるわよね……」

「んにゅ……」

1人でそう呟いていると、ソファーで横になっていた葉月が身体を起こした。

「あ。葉月、起きた？」

「はいです……」

「それなら、きちんと着替えてお部屋で寝なさい。1人が寂しいなら、一緒に寝てあげるから」

「だいじょうぶです……。お姉ちゃんのお部屋から借りてきた写真があるから、寂しくないです……」

「そう。それならいいけど……って、え？」

・・・・・ん？今何か聞き捨てならない単語が聞こえたような？確か・・・・・

「しゃ、写真？ウチの部屋からって」

「さっき、バカなお兄ちゃんの写真をお姉ちゃんのお部屋から借りてきたです。だから、寂しくないです……」

「ええっ？じゃ、じゃあ、今ウチの部屋にある写真は……？」

「代わりに、学校の図画で使ったオランウータンさんの写真を置いといたです……」

「いやぁぁーっ！」

な、何でこんなことになっちゃうのよーっ！

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

第３８問　『突撃！家庭訪問！　第３回：島田家編』（後書き）

あとがき

作者　「本日のゲストは島田美波さんです……と言いたかったのですが、当のゲスト本人が」

美波　『今はそれどころじゃないのよ！むしろ、どうすれば誤解が解けるのかアンタも考えなさい！』

作者　「とまぁ、そんな感じで荒れていましたので仕方なく代理の方に来ていただきました。というわけでどうぞ！」

葉月　「作者さん、こんにちはです！」

作者　「はい、こんにちは。改めまして、本日のゲスト代理、島田葉月ちゃんです」

葉月　「よろしくお願いしますっ」

作者　「うんうん。元気が良くて礼儀正しくて、葉月ちゃんはいい子だなぁ」

葉月　「えへへ。葉月、褒められたです」

作者　「今回はバカなお兄ちゃんたちとお勉強会だったけど、どうだったかな？」

葉月　「とっても楽しかったですっ！」

作者　「そうかそうか。それはよかった」

葉月　「はいですっ！」

作者　「今後も葉月ちゃんには補習の時に出演してもらう予定だからよろしくね」

葉月　「はいですっ！」

作者　「葉月ちゃんの笑顔に癒されたところで、今回は締めましょう。それでは次回、

第３９問『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編』

を」

作＆葉　「「よろしくお願いします！」」

第３９問　『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その１』（前書き）

吉井玲先生の特別英語試験

こちらでは私、吉井玲が学校のテストとは異なる形式の問題を出していきたいと思います。正解が１つに限られる画一的なものではなく、もっと自由に幅広い解答が可能な出題形式です。決して個人的な調査を目的としているわけではありませんが、質問には正直に答えてください。

問　あなたの今までの異性とのお付き合いや経験について、英語で答えてください。

姫路瑞希の答え

『Ｉ　ｈａｖｅ　ｂｅｅｎ　ｓｅｅｉｎｇ　ｈｉｍ　ｆｏｒ　ａｂｏｕｔ　ｔｈｒｅｅ　ｍｏｎｔｈ.』

吉井玲のコメント

瑞希さんは鏡護君とお付き合いしているという事でしたね。どうぞお幸せに。ですが学生の本分は勉強ですから、節度を守って交際を続けてください。

“ｓｅｅ”には恋人と付き合うという意味があり、通例として進行形で用いられるのですが、しっかりと勉強していますね。

天水鏡護の答え

『Ｉ　ｇｏ　ｏｕｔ　ｗｉｔｈ　ｔｗｏ　ｇｉｒｌｓ.』

吉井玲のコメント

最初に黎夜から話を聞いた時は私も驚きましたが、相応の覚悟を持ってお付き合いしているようなので私から言う事はありません。頑張ってください。

なお、この英作文の“ｇｏ　ｏｕｔ”は結婚を前提に異性と付き合うという意味ですね。

坂本雄二の答え
『Ｉ　ｗａｓ　ｋｉｓｓｅｄ　ｗｈｉｌｅ　ｓｌｅｅｐｉｎｇ.』
吉井玲のコメント
英文としては正解ですが、内容が少々気になります。寝ている間に接吻をするとは、最近の日本の高校生は随分と進んでいるのですね。我が家の愚弟がそのような真似をしていないのか、あの子の解答がとても気になってしまいます。

吉井明久の答え
『英作文ができませんでした。』
吉井玲のコメント
……。

第３９問　『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その１』

「・・・・・何だかすごく久しぶりにメインで喋っている気がするなぁ」

「ん？鏡護、何か言った？」

「どうかしましたか？」

僕の呟きが耳に入ったのでしょう、隣を歩いていた優子と瑞希が僕の方を見てきました。

「あぁ、何でもないよ」

僕がそう答えると２人もそれ以上追及しようとはしません。

「そう言えば、昨日あの後美波はどうしたかしらね？」

「そうですね。何か進展があるといいんですけど」

「どうだろうね。何もなかったって可能性も否定はできないし」

状況の説明がまだでしたが、今日は坂本家→島田家と渡り歩いて勉強会をした日の翌日、僕達は登校の途中です。

「ねぇ、あれって吉井君じゃない？」

しばらく話しながら歩いていると、優子が前方を指してそう言いました。それを追って目を向けると、

「あ、ホントだ。あれは確かに明久だね」

「そうですね」

先ほどまで話題に上っていた本人がいました。どうやら1人で登校中のようです。

「これは事の次第を確かめるチャンスね」

「はい。早速聞きに行きましょう」

「2人とも楽しそうだね」

まったく、どうして女の子はこういう話題になると目をキラキラさせるんでしょうね。

まぁ、かく言う僕も興味がないといえば嘘になるんですけど。

そんなわけで僕達は明久に近づいて声を掛けました。

「おはよう、明久」

「おはようございます、明久君」

「おはよう、吉井君」

「あ、おはよう……」

「「「？？？」」」

何故か覇気のない声で挨拶を返す明久に、僕たちは疑問符を浮かべてしまいます。

「ねぇ、明久。もしかして、昨日あれから何かあったの？」

――ビクッ！

僕がカマをかけてみると、明久がわかりやすく身体の動きを止めました。

「あ、いや、べ、別にナニモナカッタヨ？」

ふむ。これは何かあったみたいですね。

「何かあったんですね？」

「そ、ソンナコトナイヨー」

「嘘ね」

「言い難いことなら無理には聞かないけど、“何か”はあったんだね」

「もうっ、何でわかっちゃうのさ！」

必死の誤魔化しも僕達にはまったく効いていない事がわかると、明久は開き直って叫びました。

「むしろ、あれで誤魔化せる人なんているんでしょうか？」

「いないでしょ」

「そうだね」

「うわーん！３人揃ってヒドいよ！」

と、冗談はこれくらいにしてそろそろ事情を聞いてみますか。

「で？もしよければ昨日何があったか聞かせてくれる？」

「う、うん……実は――」

――明久説明中

「「「はぁっ！？」」」

明久の説明を聞き終えた僕達は揃って素っ頓狂な声をあげてしまいました。

「（き、昨日そんな事があったなんて……）」

「（み、美波ちゃん、どうして……？）」

「（これは何らかの事故が起こったと見るべきじゃないか？）」

「（そ、そうよね。普通に考えて絶対にありえないものね……）」

「（そ、そうですよ。ありえませんって。そんな――）」

「「「（島田さん（美波）の『好きな人』がオランウータンだなんて……）」」」

つまるところ、昨夜の島田家で何故か明久の中にそのような認識が確立されるような事態が発生したらしいです。

「ねぇ、明久。きっとそれは何かの間違いだよ。オランウータンを恋愛対象と見る人なんているわけないって」

「そうです。美波ちゃんにもそうせざるをえなかった事情があるんですよ」

「ええ。だから昨日見たものについて美波に余計な質問とかしちゃダメよ？」

とりあえず僕達にできそうなこと、という事で、明久に変な誤解をこれ以上持たせないよう島田さんをフォローします。

「そ、そうかな……うん、そうだね。いくら何でもありえないよね」

「「「（ホッ……）」」」

どうやら上手く軌道修正できたようです。あとは島田さん本人に何とかしてもらいましょう。

というわけでこの話題はこれ以上広げるべきでないと判断して、僕は話題を変えました。

「ところで明久、玲さんの評価はどうなってる？」

「うっ……それがそっちもかなりピンチで、今は減点３４０なんだ」

「となると、期末は総合１２００点くらいが目標になりますね」

「今までの吉井君の成績を考えると、もうかなりギリギリのラインね」

「そうなんだ。だから、もうこれ以上減点が増えたら正直アウトかも」

そうなると、テスト前最後の土日である今週末が山場ですね。ふむ、そういう事なら．．．．．

「明久、今週末は僕の家に泊まりで勉強会をしようか？もちろん昨日までのメンバーも呼んで」

「えっ！いいの、鏡護？」

「うん。一応姉さんに確認を取る必要はあるけど、多分大丈夫だよ。あ、瑞希と優子はいいよね？」

「はい。問題ありません」

「大丈夫よ。いつも週末はお世話になってるしね」

あ、優子が余計なことを．．．．

「鏡護？今の木下さんの言葉の意味を聞かせてくれないかな？」

ほら、やっぱり！

「落ち着こう、明久。それよりも今は試験の方に集中しないと。明久自身の未来の為に」

「確かに……。でも、いずれそっちの話も聞かせてもらうからね」

ふぅ・・・・・とりあえずこの場は何とか収められましたかね。

さて、それじゃあ他の皆にも話をして、姉さんに話を通すとしましょう。

――その週末

『『『お邪魔しまーす！』』』

「皆いらっしゃい。よく来てくれたわね」

「いらっしゃい。とりあえず上がって」

我が家へと集まった皆を姉さんと一緒に出迎えます。

「意外とデカいな、お前の家」

「……素敵なお家」

「内装もオシャレね」

「……本がたくさんある」

初めて我が家を訪れたメンバーはあちこちを見て回っています。
一方、我が家に馴染みのあるメンバーはというと、

「おお、また本が増えたみたいじゃな」

「やっぱり鏡護の家の方が落ち着くなぁ」

「同感。アタシも自分の家よりもこっちの方が落ち着くのよね」

「鏡護君、私皆さんにお出しする飲み物の準備をしますね」

・・・・・ちょっと和みすぎじゃないでしょうか、約2名。

「秀吉、読みたい本があったら休憩時間にでも読んでいいからね。明久は来て早々ソファーで寝ない。誰の為の泊まりでの勉強会だかわかってる?それから優子は素が出てるよ。ここにいるメンバーに知られてもいいの?あと瑞希、お茶出しは僕がやるよ」

「何だか今日は賑やかになりそうね」

そんな僕達の様子を見ていた姉さんが楽しそうに笑っています。

「そういえば、今日明日は姉さんも休みなんだっけ」

「そうよ。あ、でも今日はちょっと夕飯まで篭もるから、時間になったら呼んで頂戴」

「わかった。まぁ程々に頑張って」

「ありがと、キョウ君。じゃあよろしくね」

そう言って姉さんはリビングを出て行きました。

「なぁ、鏡護。お前の姉さんは何処に行ったんだ？」

姉さんを送り出したところで皆がこっちを見ていたことに気付きました。そこに雄二から質問が。

「実は家の地下に姉さんの私室兼研究室があるんだけど、今日は夕食までそこに篭もるって」

『『『研究室！？』』』

優子と瑞希、秀吉を除いたメンバーが揃って驚きの声を上げます。

「って、あれ？明久は知ってたよね？」

「いや、家の地下に研究室なんて冗談だろうと思ってたから」

「あぁ、なるほど」

まぁ、普通の家なら地下に研究室なんてものはないですしね。

「それより、そろそろ荷物を部屋に置いて勉強を始めよう。女子は1階の客間で、男子は2階だよ」

「それじゃ代表と美波はアタシと瑞希が案内するわ」

女子の方は2人に任せておけば大丈夫ですね。

「よろしく。じゃあ雄二たちは僕についてきて」

というわけで、僕は雄二たちを2階に案内します。

「ところで鏡護。姫路と木下姉は随分この家に馴染んでいるようだが？」

ギクッ！・・・・・やっぱり見る人が見ればわかりますか。これは誤魔化せませんよね。

「まぁ、しばらく前からあの2人は週末になると家に泊まりに来てるんだよね」

「「よし、コイツを殺そう。今ここで」」

僕が答えた瞬間、雄二と明久が声をハモらせて物騒な事を言い出しました。

「まぁ落ち着くのじゃ、2人とも」

そこに秀吉が僕たちの間に割って入ってくれます。

「止めるな秀吉。やっぱりコイツは俺達の敵だったんだ」

「そうだそうだ！」

「冷静になって考えてみるのじゃ。お主らこそ、もし今回の事がＦクラスの皆に知れたらどうなるかのう？」

「「うっ、確かに……」」

２年生の中でも屈指の美少女達と泊まりで勉強会をしたなんて事がバレれば、異端審問会による極刑は確実でしょう。

「こうして集まった時点で僕達は運命共同体って事だよ」

「……仕方ない。納得はできないがここは矛を収めてやる」

「わかった。流石に僕も異端審問会（アレ）の世話になるのは勘弁だし」

とりあえず僕の生命はまだ続くようです。

「代わりと言っては何だけど、今日の夕飯は僕が腕によりをかけて用意するよ」

「……それは期待大」

と、ここまで無言だった康太がやっと口を開きました。

康太と僕の間には不可侵条約が結ばれていますから（※第１９問参照）、先程は何のアクションも起こさなかったわけです。

「部屋割については僕の部屋に１人と、来客用の部屋に３人って感

じでよろしく」

「それならジャンケンで決めるぞ。最初に勝った1人が鏡護と相部屋な」

「「「オッケー」」」

「んじゃ、いくぞ。ジャンケン――」

「「「「ポン！」」」」

ジャンケンの結果、僕の部屋に雄二、来客用の部屋に明久・秀吉・康太という事になりました。

「ここが僕の部屋で、3人の部屋はその2つ隣ね。その奥のドアがトイレだよ」

そうして簡単に2階の部屋の位置を伝えます。

「それじゃあ部屋に荷物を置いたら、勉強道具を持ってリビングに集合ってことで」

「「「了解」」」

客室に向かう3人に声を掛けて、僕は自分の部屋のドアを開けました。

「ほぅ、ここが鏡護の部屋か。……本が多いな」

「一応、読書が趣味だからね」

「さて、エロ本は何処に隠してあるか……」

「あ、探しても無駄だよ。１冊もないから」

「何、だと……」

「前は持ってたけど、全部康太にあげちゃったんだ」

「バカ野郎！何で俺にもくれなかったんだ！」

「え？だって雄二にあげたら霧島さんに悪いじゃない」

「……お前、もしかして彼女に悪いからって理由でエロ本を手放したのか？」

「ん？そうだけど？」

何を言うかと思えばそんな事ですか。・・・・・普通はそういうもののじゃないんですかね？

「……今時珍しいヤツだな、お前」

何だか眩しいものを見たかのように、雄二は目を細めました。

「それより、早く下に行こう。多分もう皆待ってるよ」

「そうだな」

それから僕と雄二は勉強道具を用意して1階に向かうと、やっぱりそこには残りのメンバーが揃っていました。

「ねぇ鏡護、今日はどんな感じで勉強するの？」

「う～ん……明久は瑞希と世界史、秀吉と島田さんは僕と古典、康太は優子と霧島さんと英語、雄二には特製の課題って感じでどう？」

「わかった。よろしくね、姫路さん」

「はい。私も力になれるよう精一杯頑張りますね」

「な、何故ワシらは古典なんじゃ……」

「そうよ天水。他の教科にしない？」

「ダメだよ。2人は一番弱い古典さえ克服すれば、かなりの戦力になるんだから」

「……Aクラス2人に教わるなんて滅多にない機会」

「そうね。せっかくだからビシバシ鍛えてあげるわ」

「……私は雄二と一緒がよかった」

教師役と生徒に分かれて教科を決め、さぁ始めようとしたところで、

「ちょっと待て、鏡護。どうして俺だけ別メニューなんだ？」

雄二が疑問を投げてきました。

「それはね……雄二はFクラスの代表なわけじゃない？だから2学期の試召戦争に向けて、より一層学力をアップしてもらいたくてね。今回の期末試験の結果次第では召喚獣の装備も一新されるって話だし。それで、今回雄二には僕が監修した雄二専用の問題集を解いてもらおうと思ったんだよ」

「……何時の間にそんな問題集を作ったんだ？」

「強化合宿が終わってすぐあたりからかな。みんなのデータを揃えて、それぞれの弱点を補強するような形で作ったんだ。ちなみに瑞希と優子にはもう自分の分を渡してあるよ」

「ということは、もしかしてここにいるメンバーの分は問題集があるのか？」

「そうだね。あ、霧島さんのは用意できてないんだ。他クラスで正確なデータは集められなかったから。……霧島さんも欲しい？」

「……うん。ちょっと気になる」

「わかった。じゃあ期末の結果が出たらそれを見せてくれる？夏休みには間に合うように作るよ」

「……ありがとう、天水」

「それから雄二と瑞希、優子以外のみんなには、夏休み中の課題として渡す予定だからそれまで待ってね」

『『『えっ!?夏休み中の課題!?』』』

僕のその一言に驚く該当者一同。

「そんなに身構えなくても大丈夫だよ。学校の課題と合わせても、それ程負担にならないようにはしてあるから」

『『『ホッ……』』』

続く補足に、今度は安堵のため息を吐きました。・・・・・・そんなに嫌ですか?

「今回の勉強会で少し進めるだけでも期末試験で効果は出ると思うから、雄二はちょっと頑張ってね」

「そういうことならやらないわけにはいかないな。よし、いっちょ気合入れるか」

「それじゃあ僕達も始めようか。とりあえず2時間、集中していこう!」

『『『はーい!』』』

「鏡護よ、やはり他の教科にせんか?」

「そうしましょうよ。正直もう日本語は見たくないわ」

勉強を始めてそろそろ1時間という頃になって、秀吉と島田さんがそんな事を言い出しました。

「何言ってるのさ、2人共。ほら、続けるよ」

「「えぇ～」」

「はいはい。文句を言ってないで問題を解く。次の問題は【『はべり』の已然形を用いた例文を書け】だって」

「「以前食べたケーキはベリーデリシャスでした」」

「オッケー。2人は晩御飯抜きで」

「「ごめんなさい。真面目にやります」」

「まったくもう……」

そんな感じで時間は過ぎていき――

「皆、2時間お疲れさま。休憩にしよう」

『『『はーい！』』』

休憩と聞いて皆がペンを置く音が聞こえます。

「それじゃあお茶とお菓子を持ってくるから、ちょっと待ってて」

それだけ言って、僕はキッチンへ用意しておいたモノを取りに行き

ます。

『今日は何が出てくるのかしらね』

『先週はクッキーでしたよね。とても美味しかったです』

『……お菓子は天水の手作り？』

『はい。多分そうだと思います』

『ほう。それは期待が持てるな』

『……楽しみ』

『ホント、天水って器用よね』

『まったくじゃ。少しは姉上も見習――』

『ひ・で・よ・し？』

『な、何でもないのじゃ』

『ふんっ。私だって少しはできるようになったんだから』

『頭が良くて料理もできて優しくて、鏡護はいいお嫁さんになるだろうね』

『『あげないわよ（ませんよ）！』』

・・・・・優子、瑞希、『お嫁さん』って言葉にツッコミがないの

は何故ですか？

とにかく皆が待っているので早く持っていくとしましょう。

「お待たせ。今日のお菓子はチョコレートケーキだよ」

『『『おおっ！』』』

テーブルに置かれたケーキを見て皆が喝采をあげました。

「お茶とケーキがない人はいる？」

『『『大丈夫でーす！』』』

「それじゃ、どうぞ召し上がれ。最近作った中では一番よくできたと思うんだけど……」

『『『お、美味しい！』』』

「あ、そう？よかった」

やっぱり自分の作った料理を誰かに「美味しい」と言って食べてもらえるのは嬉しいですね。

「休憩が終わったら、皆はもう1時間勉強を頑張ってね。僕は夕飯の支度があるから」

「「やった！これで古典から解放される（のじゃ）！」」

約2名からそんな声が聞こえます。

「そうそう、僕が抜けたところは霧島さんに代わってもらっていいかな。教科はそのままでお願いしたいんだけど」

「……うん。任せて」

「よかった。それじゃよろしく」

「「そ、そんな殺生な！」」

約2名の悲鳴を聞き流しながら、僕はキッチンへ戻りました。

「そうだ。姉さんにアレの使用許可をもらわないと」

思い立ったら即行動です。内線で姉さんを呼び出すと、すぐに出てくれました。

「キョウ君？夕飯にはちょっと早いみたいだけど、どうしたの？」

「あ、ごめんね。今日の夕飯に庭のアレを使いたいんだけど、いいかな？」

「ああ、アレね。いいわよ」

「よかった。聞きたかったことはそれだけだから。夕飯はもうちょっと待っててね」

「ええ。また連絡してね」

「うん。それじゃ」

姉さんの許可も下りたことだし、張り切って準備しましょう！

第３９問　『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その１』（後書き）

あとがき

作者　「今回はあとがきなしで予告に入ります。

次回、第４０問『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その２』

を」

鏡護　「よろしくお願いします！」

第４０問　『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その２』（前書き）

吉井玲先生の特別英語（？）試験

問　あなたの今までの異性とのお付き合いや経験について、日本語でもいいから答えなさい。

吉井明久の答え

『もうコレただの質問じゃないの！？』

吉井玲のコメント

これはテストです。異性と抱擁を交わしたことがあるなら、抱擁と、接吻したことがあるのなら接吻と、きちんと正直に解答して下さい。アキくんには後ほど尋も――補習を行います。姉さんと今夜はぼっきりとお勉強をしましょう。

島田美波の答え

『前に一度だけ、節分をしたことがあります』

吉井玲のコメント

豆まきは異性とのお付き合いに含まなくても大丈夫です。

第４０問　『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その２』

「よし、これでいいかな」

夕食の準備に取り掛かってからちょうど１時間が経過した頃に、僕は全ての作業を終えました。

リビングで勉強していた皆は少し前に切り上げたらしく、今は談笑しています。

「皆、準備が終わったから庭に出てくれる？」

内線で姉さんの部屋にワンコール入れてから皆の方に声を掛けます。

『『『庭？』』』

すると皆が僕の言葉に首を傾げました。

「スイッチオン！」

――カチッ

皆の疑問には答えずに、キッチン脇にあるスイッチの１つを押して庭の方へ歩いていきます。

すると、

――ズズズズッ！

『『『へ！？』』』

――ゴゴゴゴゴッ！

『『『な、な、な……』』』

――ウィーン・・・・・ガチャガチャガチャ・・・・・ガシュゥゥゥン！

『『『なんじゃこりゃあぁぁぁ！？』』』

庭の下から大型の機械とテーブルセットが姿を現しました。

「……よかった。最近使ってなかったからちょっと心配だったけど、ちゃんと動くね」

出てきた機械に近づき、パネルを操作して動作チェックをすると、どこも問題なく稼動している様子。

「おい鏡護！何なんだコレは！」

背後から掛けられた声に振り向くと、そこには信じられないものでも見たように目を丸くしている皆がいました。

「コレはね、『流しそうめん装置』なんだ」

予想以上の反応を得られた事に満足した僕は、機械の正体をバラしました。

『『『流しそうめん？』』』

「そう。今日は暑いし、皆で騒ぎながら食べるには丁度いいかと思ってね」

「なるほど。確かに今日は暑いから、そうめんは嬉しいね」

「うむ。日本の夏の定番じゃな」

僕の言葉に同意するように頷いてくれたのは明久と秀吉でした。

「確かにそうめんという選択には賛成だ。だがな、何でこんな機械が庭の地下にあるんだ？」

「うーん……それは僕よりも開発者に直接聞いた方がいいと思うよ。ね、姉さん？」

「そうね」

『『『え？』』』

自分達の更に後ろから聞こえた声に皆が振り返ると、そこには白衣

を羽織った姉さんがいました。

「ちょっと待って。ってことは、この機械を作ったのって……」

「ええ。私よ」

『『『え、えええぇぇぇっ！？』』』

島田さんの疑問にあっさりと答えた姉さんに、再び皆が驚きの声をあげました。

「黎夜さん、本当ですか？」

「そうよ。こんなことで嘘吐いても仕方ないでしょう？」

「いやそれはそうですけど……驚きました」

瑞希と優子も流石に驚いていますね。

「で、鏡護の姉さん。アンタがコレを作った理由を聞かせてもらえないか？」

皆が驚き冷めやらぬ中、雄二が落ち着いた調子で姉さんに尋ねました。

「コレを作った理由？そんなの、家で流しそうめんが食べたかったからよ。それに、コレは全自動だから麺をセットしたら流れてくるのを待ってるだけでいいのよ。いいでしょ？」

――ズコッ

姉さんが笑顔で語ったあまりにもあんまりな理由に、その場に居た僕以外のメンバーは盛大な肩透かしを喰らってコケてしまいました。

その後、テーブルやイスを綺麗に拭いたところで料理を運びます。

「今日は和食と中華のオードブルにしてみたんだ。皆の口に合うといいんだけど」

そう言いながらテーブルの上に並べたのは、筑前煮や出汁巻き玉子、唐揚げ、チンジャオロース、エビチリ、八宝菜ｅｔｃ．の大皿。

『『『美味しそう！』』』

「好きなものを適当に取り皿に取って食べてね」

『『『はーい！』』』

「それじゃあ食べようか。いただきます」

『『『いただきまーす！』』』

挨拶するや否や、皆が思い思いの料理に手を伸ばします。

「……美味い」

「うむ。何時食べても鏡護の料理は絶品じゃな」

「カロリーが、僕の好物のカロリーがこんなにたくさん……っ！」

「もう、アキったら。そんなに急がなくても料理は逃げないわよ」

「……雄二。あーん」

「翔子、止めるんだ。明久が箸を逆手に持ってこっちに突撃しようと構えている」

「……雄二、恥ずかしがり屋さん？」

「それは断じて違う」

「むむぅ……やっぱりまだまだ鏡護には勝てる気がしないわね」

「はい……私も家でお母さんにも習いながら練習しているんですが」

そんな中、

「キョウ君、姉さんそうめんが食べたいなー」

ぺちぺちと手で機械のパネルを叩きながら声を掛けてくる姉さん。

「はいはい。それじゃつゆを用意して下流の方で待ってて」

「はーい」

姉さんは僕の指示通りレーンの終わりの方へ歩いていきます。

僕はそうめんの入った器から1回分の麺を手に取って機械にセットしました。

「姉さん、そっちは準備オッケー？」

「いつでもいいわよ」

「いくよー」

――ポチッ

――ザザァァ

「来た来た……とっ、ほっ」

――ズズー

「うん。やっぱり暑い日に食べるそうめんは格別ね」

「鏡護。次、いいか？」

姉さんが満足げに頷いている横から、雄二が声を掛けてきました。

「いいよ。つゆと薬味をそこの器に入れて待ってて」

「おう」

「それじゃ雄二の次に僕もいいかな」

「もちろん」

『『『俺／ワシ／私／ウチ／アタシも！』』』

雄二、明久と続いて注文したのを見て、他のメンバーからも注文がきました。

「了解。順番に流すから用意してて」

『『『はーい！』』』

こういう時は皆素直ですよね、ホント。

「麺のセット完了っと。それじゃ３０秒間隔で流していくから、頑張って取ってね」

そうして皆でそうめんをすすっていると、

「キョウ君、『いつもの』お願いできる？」

ワイワイ騒ぐ皆を見ていた姉さんがそんな事を言い出しました。

「え？姉さん、『アレ』をやるの？」

「ええ。久しぶりにやりたくなっちゃったの」

「わかった。ちょっと待って」

僕はパネルを操作して『とある機能』を起動させます。

『『何だ何だ？』』

それを見ていた皆がこちらに注目するのがわかりました。

「……チェック終了、異常なし。いくよ、姉さん」

「いつでも来なさい」

「スタート！」

――ウィーン

――シュボッ！

『『『は！？』』』

「……フッ！」

――シュパッ！

――チャポン・・・・・ズズー

「うん。美味し（ハート」

『『『いやいやいや！？』』』

笑顔でそうめんを食べる姉さんに皆から総ツッコミが入ります。

「今の何！？ありえないスピードで麺が流れてたよね！？」

「う、うむ。じゃが、それを造作なく箸で掴んだ黎夜殿も凄まじいのぅ」

「で、鏡護。今のは何なんだ」

「加速装置がついてるんだ、コレ。最高２００キロまで出せる……んだよね、姉さん？」

「そうよー」

僕の質問に手をヒラヒラ振って姉さんが答えました。

その答えを聞いて再び唖然とする皆。

「２００キロって……誰も取れないでしょ、そんなの」

「いや、実は母さんはできるんだ」

「鏡護君のお母さんっていうと……月姫さんですか？」

「うん、そうだよ」

「うちの母さんは人間じゃないんじゃないか、なんて疑った時期もあったわね」

「姉さん、迂闊な事を言って後でどうなっても知らないよ？」

「あ」

慌てて手で口に蓋をした姉さんだけど、恐らく手遅れだと思います。

心の中で姉さんに合掌しておきました。軽い“お説教”で済めばいいんですけど。

「ちなみにやってみたい人はいる？」

そう聞くと、2人の手が上がりました。明久と雄二です。

「なんだ明久。お前もやるのか」

「そう言う雄二こそ。止めておいた方がいいんじゃない？」

「ほざけ。何なら勝負するか？」

「いいね。受けて立つよ」

「あはは……それで、どっちが先にやる？」

「明久、いくぞ。じゃんけん――」

「「ぽん！」」

明久がチョキで雄二がパーなので、先攻は明久ですね。

「とりあえずスピードは２０キロくらいからいってみようか。徐々に速度を上げていって、先に3回ミスした方が負けね。……準備はいい？」

「いつでもいいよ」

「ああ。いいぜ」

「それじゃあスタート！」

こうして明久と雄二の勝負の火蓋が切って落とされました。

そこから5キロ刻みで速度を上げていき、７５キロまできました。

始めのうちは余裕でこなしていた2人ですが、５０キロを越えてからミスが出始めて、今はどちらも後がありません。

更に、

「おい、明久。今ギブアップすれば許してやるぞ……ゲップ」

「その言葉、そのまま雄二にお返しするよ……ウップ」

流しなので1玉の量は少ないものの、もう１１玉もそうめんを食べているので、２人の胃もそろそろ限界が近いようです。

「明久、いくよ」

「来い！……そこっ！」

――シュパッ！

『『『おおっ！！』』』

「へへっ」

瞬間、勝負を見守っていたギャラリーが湧きました。

「明久は成功！これは雄二にとってプレッシャーとなるか！？」

思わず実況風にコメントをはさんでしまいました。

「やるな、明久。だが俺も負けるわけにはいかないんだよ。来い、鏡護！」

「スタート！」

「……ふっ、見切ったぁっ！」

――シュパッ！

『『『おおっ！！』』』

――ツルッ

『『『あぁぁぁぁぁ……』』』

「ば、バカな……」

雄二が掴んだかに見えたそうめんは、箸をすり抜けて下に落ちてしまいました。

「雄二、痛恨のミス！勝利の女神は無情にも雄二には味方しなかった！というわけで、勝者は吉井明久！」

『『『わぁぁぁぁ！！』』』

「いやぁ、どうもどうも。ありがとう、ありがとう」

勝者の明久が両手を上げてギャラリーに応えます。

「勝者の明久には後日僕が特製弁当を差し入れてあげるよ」

「ほ、本当に？鏡護、ありがとう！」

まぁこれくらいの景品ならあってもいいですよね。

その後は特に何事もなく、夕食の時間は平和に過ぎていきました。

リビングに戻ってまったり食休みをしていると、姉さんが女の子達に声を掛けました。

「そろそろお風呂に入りましょうか。地下に大浴場があるから、用意をしてちょうだい」

「え？地下にお風呂があるんですか？」

「そうなの。凄いでしょ」

「それに地下の大浴場には温泉を引いているんです」

「……それは凄い」

「そういうわけだから、早く準備をしてらっしゃい。それから男子諸君、合宿の時みたいに覗きはしちゃダメよ？」

そう言う姉さんは笑っていたけど、纏う空気が『覗いたら死刑』と雄弁に語っていました。

『『『い、イエスマム！』』』

これには流石の明久達も頷かざるをえなかったようで、直立不動で敬礼しています。

「まぁ実際のところ地下へ続く道は1ヶ所だけだし、扉は中からしか開けられないロック式だから無理だと思うよ」

「それでも一応釘は刺しておくわ。この子達なら“もしも”を起こしちゃうかもしれないからね」

流石にFクラスの副担任をしているだけあって、明久達の事をよく理解していますね。

『『『準備できました！』』』

客間から出てきた女の子達はそれぞれ手に入浴道具を持っています。

「オッケー。それじゃあ私についてきてね」

『『『はーい！』』』

こうして女の子達は退場し、リビングには男子だけが残りました。

「俺達は風呂はどうすればいいんだ？」

「この階に普通の風呂があるから、そこを使うことになるかな。一応3人は同時に入れる広さだけど、1人ずつでいいんじゃない？」

「そうだね。野郎の裸は見たくないし」

「……同感」

「うむ。ならば順番はどうするかの？」

「じゃんけんで適当に決めるか。勝った順でいいな？」

『『『オッケー』』』

その結果、雄二→康太→秀吉→明久→僕の順で入る事になりました。

とは言っても長々と風呂に入っているようなメンツではないので、あっという間に順番が回ってきます。

僕はゆっくり風呂に浸かりたいタイプなので、順番が最後だったのは逆に都合が良かったです。

僕がリビングに戻ると、ちょうど雄二達がゲームを始めたところでした。

「坂本雄二から始まるっ」（雄二のコール）

「「「イェーイ！」」」（明久と秀吉と康太の合いの手）

「古今東西っ」

「「「イェーイ！」」」

「一部生徒の間で話題になっている明久の恋人の名前っ」

・・・・・ブフッ！？

パンパン（手拍子）　↓　雄二の番

「【久保利光】！」

「ダウト！それダウト！久保君は男だから！」

残念ながら真実です、明久。

パンパン（手拍子）　↓　康太の番

「……【坂本雄二】」

「嫌だぁっ！それは何となく知っていたけど改めて言われると凄く嫌だぁっ！」

「俺だって嫌だボケ！」

言われたくないのなら、２人はもう少しお互いの距離感に注意すべきですよ。

パンパン（手拍子）　↓　秀吉の番

「え、えっとえっと……ワ、ワシじゃ！」

「……」

「あ、明久！？そこで黙り込んで頬を染められるとワシも困るのじゃが！？」

秀吉、見事な自爆ですね。

パンパン（手拍子）　↓　明久の番

「し、【島田美波】！」

「「「罰ゲーム決定っ！」」」

「どうして！？」

まぁ当然の帰結と言いますか、ご愁傷様です。

「一体どういう状況？」

とりあえず1ゲーム終わったところで声を掛けます。

「お、鏡護か。お前が出てくるまで暇だったんでな。罰ありでちょっとしたゲームをしてたんだ」

「今は古今東西を始めたところじゃ」

「へぇ、その前は何をやってたの？」

「……簡単なトランプゲーム」

「どんなの？」

「山にしたトランプを1枚ずつ引いていって、出たマークに該当するヤツが『今までの人生で一番恥ずかしかった事』を暴露するゲームだ」

「その結果は？」

「16回やって、僕が『人生で16番目に恥ずかしかった話』をしたところで終わったよ……」

「あはは……ドンマイ、明久」

そういうゲームでの明久の引きの弱さは神懸かってますからね。相性が悪かったとしか言い様がありません。

「とりあえず、さっきの罰ゲームを決めるぞ。明久、くじを引け」

「うぅ……納得がいかない……」

「安心しろ。お前以外の全員はきちんと納得している」

それはそうでしょう。自分が被害者ではないのですから。

明久は雄二に差し出された袋に手を突っ込んで1枚の紙を取り出すと、それを開いて内容を読み上げました。

「えっと、何々……『本気女装写真集の撮影』、だと……？」

「おお、それはワシが書いたものじゃな。明久よ、お主もワシの苦しみを味わうがよい」

「そ、そんなバカな……」

明久がその場に崩れ落ちました。まぁ無理もありませんか。

「……撮影は任せろ」

「よかったな、明久――アキちゃん」

「ちっともよくないよ、コンチキショウッ！」

サムズアップしてカメラを構える康太と、ニヤニヤ笑いを隠そうともしない雄二。2人とも楽しそうですねぇ。

そんな2人に吠える明久ですが、当の本人達はどこ吹く風です。

「さて、それじゃ鏡護も交えて2回戦といくか？」

雄二のその声に全員（明久を除く）が頷き、ゲームを始めようとしたところで、

「あら？何だか楽しそうなことをやってるみたいね？」

姉さんを先頭に女の子達が戻ってきたようです。

「あれ？アキが倒れてるけど、何かあったの？」

「本当です。明久君、どうかしたんですか？」

「あー、今はそっとしておいてあげて。ちょっと立ち上がれないくらいの精神的ダメージを受けちゃってるから」

「……わかった」

「深くは聞かない方がよさそうね」

「そうしてくれると助かるよ」

女性陣が戻ってきたので、僕達はゲームを切り上げることにしました。

「これからどうしようか？寝るにはまだ少し早いけど……」

「あ、そうだわ。キョウ君、父さん達が夏休みに戻ってくるって話は聞いてるわよね？」

皆に声を掛けたところで、姉さんが何かを思い出したかのように僕にそう尋ねてきました。

「え？ああ、うん。一応聞いてるけど、それがどうかしたの？」

「父さん達がね、久しぶりに帰ってくるから今年は『別荘』に行こうって話をしてるみたいなの」

「なるほど。試験が明ければ夏休みだから、丁度いいかもね」

「それでね、その旅行にはなるべく大勢で行きたいって言ってたから……」

「それじゃあここにいるメンバーは全員誘ってもいいのかな？」

「ええ。いいんじゃないかしら」

「ってことなんだけど、皆は大丈夫？」

『『『もちろん！』』』

全員即答ですね。

「後は工藤さんも誘った方がいいかな。ね、康太？」

「……何故俺に聞く」

「うん、何となく？」

「私は玲を誘おうかしら。吉井君、玲の夏休みの予定はわかる？」

「うーん、ちょっとわからないです。僕のテストの結果次第では海外に戻るかもしれないので」

「そういえばそうだったわね。まぁもしもの時は無理矢理引き止めるからいいかな？」

「は、はは……」

「鏡護君の家の『別荘』っていうと、やっぱりあそこですよね？」

「やっぱり瑞希も行ったことあるんだ。まぁ場所が変わることはないでしょうから、多分そうじゃない？」

「うむ。これは今から夏休みが楽しみになってきたのう」

「お、何だ何だ。幼馴染組はどういう場所か知ってるのか？」

「……話を聞かせて欲しい」

その後はこの話をきっかけに夏休みの予定について色々と話をしました。

まだ試験は残っていますが、その先に楽しみがあればやる気も漲るというものですしね。

かくいう僕も楽しい夏休みを迎える為に、良い結果を残せるよう頑張りたいと思います！

第４０問　『突撃！家庭訪問！　第４回：天水家編その２』（後書き）

あとがき

作者　「今回は主人公宅だったのでゲストなし……と言いたいところですが、この方に来ていただきました！」

黎夜　「皆さん、こんにちは。天水黎夜です」

作者　「黎夜さんがあとがきに登場するのは今回で３回目ですね」

黎夜　「そうね。……本当はもっと出してくれてもいいと思うのだけど（ボソッ）」

作者　「どうかしましたか？」

黎夜　「いいえ。何でもありませんよ」

作者　「今回の話で天水家の設備的なものがいくつか出てきましたが、作ったのは貴女ですよね？」

黎夜　「ええ、そうよ。今回は出てこなかったけど、他にも色々あるわ」

作者　「弟さん曰く、『そのうち我が家は空を飛ぶんじゃないかと心配で』とのことですが？」

黎夜　「あら、キョウ君ったらいい勘して――コホン。……そんなわけないでしょう？」

作者　「（な、何かやっていらっしゃる!?）そ、そうですよね。アハハハハ」

黎夜　「ウフフフフ」

作者　「（こ、怖えぇぇぇっ！）」

黎夜　「とりあえずキョウ君達には期末テストを頑張ってもらいたいわね」

作者　「（あ、話題を逸らした）まぁそうですね。というか、次回が原作第５巻・期末試験編の最終回になります」

黎夜　「そうだったの。吉井君の努力が報われるといいわね」

作者　「その結末も含め、全ては次回で明らかになります。というわけで次回予告!」

黎夜　「次回、第４１問『報われる努力、報われぬ努力（仮）』

を」

作&黎　「「よろしくお願いします」」

第４１問　『報われる努力、報われぬ努力』（前書き）

バカテスト　世界史

問　以下の文章の（　　）にあてはまる正しい人名と出来事を答えなさい。

『紀元前３３４年　アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス３世を破った、（　　）による（　　）が始まる』

天水鏡護の答え

『紀元前３３４年　アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス３世を破った、（アレクサンドロス大王）による（東方遠征）が始まる』

教師のコメント

正解です。この後、アレクサンドロス大王の遠征はイッソス・アルベラで敗北して失敗に終わるという一連の流れも含めて覚えておくとより良いでしょう。

土屋康太の答え

『紀元前３３４年　アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス３世を破った、（光の勇者・アーク）による（ファイナルクエスト～国王最後の聖戦～）が始まる』

教師のコメント

“ファイナル”や“最後”という単語があるのに続編がありそうな気配がするから不思議です。

坂本雄二の答え

『紀元前３３４年　アケメネス朝ペルシアの最後の国王となるダレイオス３世を破った、（アレクサンドロス大王）による（東方遠征）

が始まる』
教師のコメント
おや?坂本君でFクラスの解答用紙は最後ですか?まだ吉井君の珍解答を見ていないような気がするのですが・・・・・まさか正解していたのでしょうか?

第４１問　『報われる努力、報われぬ努力』

我が家でのお泊り勉強会も終わって、今日はテスト当日。

「おはよー……って、あれ？早いね、明久」

「おはようございます……っと、本当ですね」

「ああ、鏡護と姫路さんか。おはよう」

朝、教室に着いた僕達を出迎えたのは数人のクラスメイトと、１人教科書とにらめっこをしていた明久でした。

「最後の追い込み？頑張るね」

「うん、やれるだけのことはやろうと思って。ただ、詰め込んだものが出ていっちゃいそうだから、あまり話しかけないでくれると助かるかも」

「わかりました。明久君、ファイトです」

「ありがとう」

瑞希の応援で更にエンジンが掛かったのでしょう。明久の教科書をめくるスピードが上がりました。

「それじゃあ僕達も最終チェックをしようか。明久には負けてられないしね」

「はい。頑張りましょう」

僕達も自分の席に移動してそれぞれに参考書などを広げます。

ＨＲの時間が近づくにつれて、雄二や秀吉、康太、島田さんも登校してきました。

明久が既に教室にいる事に驚いた様子で僕や瑞希に話を聞きに来たのですが、その辺りの事情は察して下さい。

その後、時間通りにやって来た西村先生が簡単に連絡事項を告げるだけの短いＨＲが終わると、教室内の雰囲気が緊迫したものに変わりました。

初日の今日は、現代国語・英語Ｒ・世界史・数学?・化学・保健体育というラインナップです。

明久にとってのキーである世界史がありますから、頑張って欲しいですね。

「はい、勉強道具をしまって下さい。これから1時間目のテストを始めますよ」

しばらくして、1時間目の監督の先生が来ました。

「毎度のことですが、注意事項です。机の上には筆記用具意外は置かないこと。また、机に何かが書かれている場合はカンニングと見なされることがありますので、自分で書いた覚えがなくても確認するようにして下さい。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、余程のことがない限りは――」

先生の話を聞きながら、回ってきた問題用紙を裏向きのまま後ろへ流します。

さぁ、いよいよ試験開始です！

～現代国語～

問　傍線部?が指す内容を本文中の言葉を用いて答えなさい。

この手の問題は解き方がパターン化されているから、それさえ知っていれば何の問題もありません。傍線部?は「そういった状況」なので、ここより前の部分で「状況」という単語が用いられている箇所を探せば……っと、ありましたね。後は解答欄に合わせて言葉を抜きながら答えを作ればオッケーです。

～英語Ｒ～

問　下記文中の“Ｉｔ”の意味する内容を日本語で書きなさい。

Ｉｔ　ｗｏｎ'ｔ　ｔａｋｅ　ｙｏｕ　ｍｏｒｅ　ｔｈａｎ　ｔｅｎ　ｍｉｎｕｔｅｓ　ｔｏ　ｇｅｔ　ｔｏ　ｙｏｕｒ　ｈｏｍｅ.

※警告　『それ』と書いた生徒は問答無用で職員室への出頭を命じます

この文章における“Ｉｔ”が指すものは『家に到着するまでの時間』ですね。それにしてもこんな警告文をつけるなんて、“特定（だれかさん）の生徒”を想定しているとしか思えませんよ、先生。

そんな感じで2科目の試験が終わり、次はいよいよ世界史です。

明久の方を見てみると、何やら目を閉じてブツブツ呟いています。

「よしお前ら。テストを始めるぞ。筆記用具意外は全部しまうように」

3時間目の試験監督は西村先生のようです。

「1枚ずつ取って後ろに回すように。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておくこと。いいな？」

前の席から回ってきた問題用紙と解答用紙を1枚ずつ取って、残りを後ろの人に渡しました。

――キーンコーンカーンコーン

「始めなさい」

チャイムが鳴り、先生が開始の合図を出すと同時に問題用紙と解答用紙を表にします。

最初にしっかりと解答用紙に名前を記入してから、問題を読み始めます。

田中先生が作った問題という事もあって、基本的な語句を答えたり、語句の簡単な説明を書いたりといった平易な問題が多いですね。今回の世界史の平均点は高めになりそうです。

文月学園の試験は点数に上限がないので、時間の許す限り問題を解き続けます。

問題も後半に入ってくるとマイナーな語句を聞いてくるなど、難易度が上昇します。

それでも一定のペースを保ちつつ問題を解いていくと、

――キーンコーンカーンコーン

終了のチャイムが鳴りました。

「よし。ペンを置け。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」

西村先生の言葉に教室中から大きく息を吐く音が響き、一番後ろに座っている人が解答用紙を回収していきます。

『おい朝倉。往生際が悪いぞ。早く渡せよ』

『ま、待ってくれ！せめてここだけ直してから！』

『朝倉！チャイムは鳴ったぞ！諦めてペンを置け！』

チャイムが鳴ってからミスに気付いたのか、朝倉君が解答用紙を渡さずに粘っているのを西村先生に叱られています。

最後まで足掻きたくなる気持ちはわからないでもないですが、こればかりは仕方ありません。

全員分の解答用紙がある事を確認して、西村先生が教室から出て行きました。

明久の事が気になった僕は、彼の席へと向かいます。

「明久、勝負の世界史はどうだった？きちんと解けたのか？」

すると、雄二も僕と同じように明久のところへやってきました。

「問題的にはそこまで難しくはなかったから、結構いけたんじゃない？」

雄二に続いて僕も声を掛けます。

「ああ、うん。ちょっと間違えちゃったけど、今までで一番解けたよ」

笑顔でそう答える明久。・・・・・おや？どこか様子がおかしいような？

「何だ、つまらんな。折角お前が真っ青になって今後の対策を考え

る姿を笑いに来たってのに」

雄二は肩をすくめてそんな答えを返します。どうやら明久の異変には気付いていないようです。

「何を言ってるのさ雄二。まったく、洒落にならないよ」

「まぁ、あれだけ勉強したんだもんな。点数が下がるわけがないよな」

「まったくだよ。いやだなぁ、あははははっ」

とりあえず笑っている明久ですが、その笑いが渇いています。

「ははっ。そうだよな」

ひとしきり笑いあってから、雄二は自分の席に戻っていきました。

聞くなら今ですかね。

「で、明久。本当のところは？」

「うん、終わったよ。僕の気ままな1人暮らしライフが、ね……」

「やっぱり……」

がっくりと項垂れる明久に掛ける言葉が見つからなかったので、とりあえず僕はポンポンとその肩を叩きました。

ちなみに後日返却されたFクラスメンバーのテスト結果を見ると、

秀吉、康太、島田さん　→　単科あたり5～15点アップ。総合で平均140点アップ。

雄二　→　単科あたり20～40点アップ。総合で280点アップ。

瑞希　→　単科あたり80～100点アップ。総合で960点アップ。（総合：5439点）

自分　→　単科あたり20～25点アップ。総合で260点アップ。（総合科目：10184点）

明久　→　単科あたり15～30点アップ。総合でほぼ変化なし。

今回勉強会に参加した全員が成績アップしていました。特に瑞希の成長には目を見張るばかりです。

明久については・・・・止めましょう。不憫すぎて泣けてきますから。

そんなわけで期末試験も無事に終了し、いよいよ待ちに待った夏休みがやって来――

「おい、お前ら。わかってるとは思うが、休みの最初の10日間は補習があるからな」

夏休みが――

「1学期の試召戦争やその他の騒ぎで潰れた授業分を補うためのものだ」

夏――

「サボろうなんて考えずに、素直に受講するように。以上だ」

『『『ば、バカなぁぁぁあああっ!?』』』

どうやら、今年の夏休みはもうしばらくお預けのようです。シクシク・・・・・

第４１問　『報われる努力、報われぬ努力』（後書き）

あとがき

作者　「というわけで、原作第５巻期末試験編終了！」

鏡護　「今回は玲さんと雪乃さんが新キャラとして登場したね」

作者　「うむ。どちらも強烈な個性を持ってたな」

鏡護　「確かに。明久も雄二も苦労してるんだろうね」

作者　「しかし明久はアレだな。肝心なところで大ポカをかますとは」

鏡護　「いや、まぁ、うん……その話題にはあまり触れないであげて欲しいかな」

作者　「まだショックから立ち直ってないのか？」

鏡護　「しばらくは復帰できないかも」

作者　「今回の件、そんなにショックだったのか……」

鏡護　「ところで、次回からはどんな話になるの？」

作者　「原作の流れに沿うなら第６巻の肝試し編になるが、この作品では取り扱わない予定だ」

鏡護　「え？どうして？」

作者　「肝試し編の事の発端は召喚システムの調整ミスなんだよ」

鏡護　「……あ、わかった。姉さんか」

作者　「Ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ．　黎夜さんがいたからミスが起こらなかった、という設定で進めるからだ」

鏡護　「ということは？」

作者　「次回からは夏休み旅行編のスタートだ！」

鏡護　「ブラボー！作者さん、ブラボー！」

作者　「まぁ落ち着け。旅行編では新キャラが２人登場するぞ」

鏡護　「新キャラ？……あ、父さんと母さんだね」

作者　「前に一度母親は登場してる（補習第４問）けど、覚えてる人は少ないだろうな」

鏡護　「そういえば、あの時の電話で夏休みに帰ってくるって話をしてたんだよね」

作者　「あのフラグを回収する時がついにやって来たということだ」

鏡護　「皆で旅行か。楽しみだなぁ」

作者　「それでは今回はこの辺で。次回予告いってみよ～！」

鏡護　「次回、第４２問『父と母、帰還す（仮）』

を」

作＆鏡　「「お楽しみに～」」

第４２問　『父と母、帰宅す』（前書き）

もうすぐＰＶ７０万＆ユニーク４万超えという事で記念に１～２本話を書きたいと思っているのですが、その話のネタを読者の皆さんから募集したいと思います。

〈募集要項〉

？キャラの指定（１人～複数）

？シチュエーションの指定

？ストーリーの方向性（コメディー、恋愛、バトル、ｅｔｃ．）

以上の３点を明記の上、感想ページに書き込みをお願いします。

採用するネタはこちらで選考にかけさせていただきますが、面白そうなものが多ければ採用枠を増やすかもしれません。

・・・・・応募が０だと企画倒れになってしまうので、本当によろしくお願いします（涙

沢山のご応募を心よりお待ちしておりますｍ（＿　＿）ｍ

第４２問　『父と母、帰宅す』

１学期の終業式が終わり、１０日間の補習も乗り越え、ついに夏休みを迎えました。

「長かった……本当に長かった……」

時刻は午前。僕は今、自宅リビングにてぐったりと身体を横たえています。

ちなみに姉さんは今日まで学校の仕事があるそうなので、今家にいるのは僕だけです。

「高橋先生、容赦なさすぎだよ……」

例のごとく、僕は瑞樹と共にＦクラスの皆と別れて学年主任の高橋先生による補習を受ける事になっていました。

夏休み前であっても、高橋先生の辞書には手加減という言葉はないらしく、毎日１００ページのドリルを国・数・英３科目分課されるという苦行を強いられたのです。

昨日までそんな日々を送っていたのですから、愚痴の１つも零したくなるというものです。

「でも、これで心おきなく夏休みを楽しむことができる！」

そう言ってその場で立ち上がります。

「父さん達は明日帰ってくるって話だったよね……」

これに関しては3日前に母さんから電話があったので間違いありません。

旅行は明後日からなので、準備でもしておきましょうか。

「それにしても、6泊7日とはまた随分長い旅行だよね……」

3日前の電話では、旅行の詳細についても話がありました。

この話を聞いて、島田さんの妹の葉月ちゃんも旅行へ参加する事になりました。流石に1週間も家に残していくのは可哀想ですからね。

「何はともあれ、楽しい旅行になるといいな」

仲の良い友人達と行く旅行ですから、楽しくならないわけがないと思いますけど。

「よし。準備するとなったら2階に戻らないと」

僕が部屋に戻る為にリビングを出ようとしたところで、

――ピンポーン

インターホンが鳴りました。

「あれ?誰か来た?」

うーん・・・・・こんな時間に誰でしょう？とりあえず出てみますか。

「はい、どちら様……って、瑞希？どうしたの？」

インターホンのモニターの向こうに立っていたのは瑞希でした。

『こんにちは。えっと、暇だったので遊びに来たんですけど、今大丈夫ですか？』

「ああ、うん。大丈夫だよ。僕も暇してたところだから。優子も呼んだ方がいいかな？」

『お気遣いどうも。でも大丈夫よ。私も一緒だから』

そんな台詞と共に画面の中に優子が入ってきます。

「そっか。じゃあ今鍵を開けにいくから、ちょっと待ってて」

『『はーい』』

2人の返事を聞いてから、僕は受話器を置いて玄関へ向かいました。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

―Ｓｉｄｅ　？？

「あのー、これでよかったんでしょうか？」

「まぁいいんじゃない？別に悪いことしてるわけじゃないんだし」

みーちゃんがちょっと心配そうに、ゆっこちゃんは平然とした様子で話をしています。

「いーのいーの。こういうことはサプライズでやらないと面白くないからね～」

私もゆっこちゃんに同意するように明るい調子で会話に加わりました。

「で、でも、何だか不意打ちするみたいで……」

「もぅ、みーちゃんは本当に優しくていい子ねぇ～。私がいいって言うんだからいいのよ～。それに、キョウくんはこれくらいで怒ったりしないわ～」

「まぁ、仮に怒ったとしてもキチンと謝れば鏡護なら許してくれるだろうし」

「そ、そうですよね」

「ええ。だから大丈夫よ」

「はい」

「2人ともキョウくんの事をよくわかってるのね～。流石は恋人さんなだけあるわ～」

「「あっ、そ、それは、その……はぃ……／／／／」」

私が投げた言葉に顔を真っ赤にして、モジモジしながら小さく頷くみーちゃんとゆっこちゃん。

「あ～んもぅ、2人とも可愛い～。キョウくんは本当に幸せ者ね～」

「「きゃっ！？」」

たまらず私は2人を抱き寄せていました。

その時、

――ガチャッ

――サッ

「いらっしゃい……って、大丈夫！？何だか顔が真っ赤なんだけど！？」

玄関のドアが開いて、中からキョウくんが顔を出しました。目の前の2人の様子に気付いて慌てています。

「あ、はい。大丈夫です……」

「へ、平気よ。ちょっと暑かっただけだから……」

ドアの鍵が開いた瞬間、私は気配を消してキョウくんの背後に回りました。

キョウくんは2人の方に気を配っているので、私にはまったく気付いていません。

――ソロ～リソロ～リ

私は音を立てないようにゆっくりキョウくんに近づいていきます。

それでは、カウントダウン3、2、1・・・・・

――ギュッ

「え、な、何!?誰!?」

突然後ろから抱きしめられたキョウくんは首を回して背後を確認しようとしますが、私が軽く絞めているのでそれができません。

なので、私の方から正体を明かしてあげる事にします。

「キョウくん、私よ、私～。貴方の可愛い月ちゃんですよ～」

「か、母さん!?あれ、でも母さん達が帰ってくるのって明日のはずじゃ……」

ふふっ。驚いて慌てるキョウくんってば、やっぱり可愛いです。

「早くキョウくんと黎ちゃんに会いたかったから～、超特急で帰ってきちゃったの～」

「へぇ、そうなんだ。……で、本当は？」

「サプライズにした方がもっと可愛いキョウくんを見れると思いひ(痛)やいいひゃいいひゃい(痛)～」

台詞の途中で器用に拘束を解いたキョウくんが私の頬を両手でグニグニしてきたので、私は最後まで喋ることができませんでした。

「はぁ……そんな事だろうと思った」

「以心伝心だなんて、流石は私とキョウくんの仲ね～」

「親子だからね。母さんの考えそうなことは何となくわかるよ。……っと、忘れてた。おかえり、母さん」

そこで今までのやりとりを仕切り直すように笑顔を向けてくれるキョウくん。

「うん、ただいま～」

私もそれにならって、改めて笑顔で答えました。

―Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ

―Ｓｉｄｅ　鏡護

「それで、父さんは？」

サプライズで帰ってきた母さんに向かって、この場にいないもう１人について尋ねました。

「星哉さんはね～、置いてきちゃった～。てへっ（ハート」

「「「何処に！？」」」

母さんの答えに、僕・瑞希・優子の声がハモりました。

「っていうのは冗談で～、星哉さんは旅行で使う乗り物の整備を終わらせてから帰るって～」

「「ほっ……」」

「じゃあ父さんは今日は帰ってこないの？」

「う～ん、早ければ今日中に帰ってくると思うわよ～」

「わかった。で、今気付いたんだけど門の影にもう1人いるよね。誰？」

僕がそう言うと、母さんは悪戯が見つかった子供みたいに舌をペロッと出して、そこにいる人物に声を掛けました。

「ありゃりゃ、バレちゃったか～。というわけで、見つかっちゃったので出てきて下さい～」

「あらあら、残念」

そうして姿を見せたのは、

「あれ？瑞穂さん？」

瑞希の母・姫路瑞穂さんでした。

「鏡護君、こんにちは」

「はい、こんにちは。今日はどうしたんですか？」

何となく理由に当たりはつけられるものの確証はないので、直接の関係者に尋ねる事にしました。

「実はさっき月ちゃんが家に来てね～」

「……把握しました。それ以上の説明は大丈夫です」

「あら、そぉ～？」

どうやら予想通り、姫路家を訪問　↓　途中で優子を招集　↓　瑞穂さんも含めた４人で我が家へ、という流れだったようです。

ところで、いい加減皆を外にいさせるわけにもいきませんよね。

「とりあえず中に入りませんか？ここは暑いですし、冷たいものを出しますから」

「そうですね～。それではお邪魔します～」

「母さんと瑞希と優子も」

「「「はーい」」」

そうして４人を招き入れ（約１名にとっては自宅ですが）、リビングに通しました。

「えっ、瑞穂さんも旅行に来るんですか？旦那さんは？」

しばらく話しているうちに、話題は明後日からの旅行に移りました。

「あの人は仕事だから無理なんですって～。まぁ私と瑞希がいなくても１週間くらいなら生きていられるから大丈夫ですよ～」

「はい。お父さんなら問題ありません」

瑞穂さんの言葉に瑞希も同意します。一瞬２人の背後に黒いオーラが見えたような気がしましたが、気のせいでしょう。ええ、気のせいに決まっています。

――チョイチョイ

「ん？」

軽く現実から目を背けていると、優子が僕の肘をつついているのに気がつきました。

「優子、どうしたの？」

「何かあまりにも自然に状況が進んでるから聞くに聞けなかったんだけど、瑞穂さんって本当に瑞希のお母さんなの？」

「ああ、そのことね」

まぁ恐らく今日が初対面の優子からすれば、疑問に思うのも当然でしょう。

瑞穂さんの身長は僕の胸くらい（目算で１５０センチ前半）で、どう見ても中学生くらいにしか見えません。

実際、瑞穂さんの旦那さん（＝瑞希のお父さん）は今でも夫婦２人で歩いていると偶に職質されるらしいです。

百聞は一見に如かず、優子には確たる証拠を見てもらう事にしましょう。

「瑞穂さん、免許証持ってますか？あったら見せて欲しいんですけ

ど」

「持ってますよ～。はい、どうぞ」

「ありがとうございます。ほら優子、ここを見て」

そうして受け取った瑞穂さんの免許証の生年月日欄を指さしました。

「どれどれ……わ、ホントだ。この生年月日だと……」

「私、今年で４１歳になります～」

瑞穂さんがニコニコしながら自分の年齢をバラしました。正直なところ、数字を入れ替えても全然通用すると思います。

「信じられないくらい若いですよね。……まぁ、“ある一部”が瑞希との血の繋がりを激しく主張してますけど」

優子の言いたい事はよくわかります。瑞穂さんは小柄ではあるものの、その身長に不釣合いなほど出るところは出ていますからね。

「それに瑞穂さんはちょっと度が過ぎるけど、年齢よりも若く見えるといえば月姫さんや雪乃さんもそうよね」

優子に言われて思い出しましたが、確かに母さんも見た目は充分若いんですよね。とても【ピー】歳には見えません。

「言われてみると、確かにそうですよね。私達の周りにはどうしてそういう人が多いんでしょうか？」

「ねぇねぇキョウく～ん、雪乃さんって誰～？」

「友達のお母さんだよ。母さんみたいに永遠の２０代を地で行く人なんだ」

「へぇ～、そんな人がいるんだ～。……もしかして“ゆきのん”かなぁ～？（ボソッ）」

話を聞いて母さんが感心したように頷いています。何やら呟いていたみたいですが、気にしない事にしましょう。

――くうぅぅぅ

『『『！！』』』

その音が聞こえた瞬間、場の空気が止まりました。と同時に、激しいアイコンタクトが飛び交います。

「アハハ、ごめんね～。今のは私～」

しかし、犯人探しを始めたところであっさり本人が自白しました。

「そういえばそろそろお昼だもんね。何か作るよ。リクエストはある？」

「キョウくんが作ってくれるなら何でもいいよ～」

「了解。瑞希と優子も食べていくよね？それから瑞穂さんも」

「「もちろん」」

「あら、いいんですか～？それではお言葉に甘えさせていただきますね～」

全員の意思を確認してキッチンに向かいながら、冷蔵庫の中身を思い浮かべます。

確か野菜室にトマトとキュウリとレタスがあって、棚にハムも入ってたはず。それにツナ缶もあるから・・・・・よし。

作るものが決まれば、後は時間との勝負です。

各作業にかかる時間を考えて効率良く素材を調理していき、

「お待たせしました」

『『『早っ！？』』』

料理を出すまでにかかった時間は１０分でした。

「今日のお昼は夏の定番、冷たくて美味しいサラダうどんです。特製の胡麻ドレッシングか韓国風ピリ辛ドレッシングをかけて食べて下さい」

『『『おおーっ！（パチパチパチ）』』』

「器が冷えているうちに食べましょう。いただきます！」

『『『いただきまーす！』』』

さて、皆の口に合うかどうかちょっと心配――

『『『美味し～い！』』』

する必要はありませんでしたね。皆笑顔でうどんを啜っています。

「鏡護君、お皿の底に少し液体が溜まってますけど、これは？」

「麺つゆだよ。うどんは乾くと麺がくっついて固まっちゃうから、それを防ぐために器に盛った時にかけておいたんだ」

「ゆっこちゃん、そっちの胡麻ドレかけたの食べたいな～？」

「いいですよ。代わりに月姫さんのピリ辛のもいいですか？」

「どうぞどうぞ～」

「ねぇ、鏡護く～ん。このドレッシングの作り方を教えて欲しいんだけど～？」

「すいません瑞穂さん。レシピは秘密です。自分の家でも使いたい場合は、言ってもらえれば用意しますから」

「あら、残念～。じゃあお持ち帰り用に両方お願いできますか～？」

「いいですよ」

「鏡護、アタシも両方欲しい！」

「了解。用意しておくよ」

皆でワイワイしながらの昼食が終わると、優子と姫路母娘（おやこ）はお土産を手にそれぞれの家へ帰っていきました。

皆が帰ると、母さんは夕飯まで寝ると言って自室に篭もってしまいました。

そうして再び1人になった僕は、

「父さんも今日帰ってくるとなると夕飯分の食材が心許ないから、買い物に行ってこよう」

というわけで、夕方になってから近くの商店街へと足を運んでいました。この商店街はスーパーよりも若干値は張りますが質の良い食材が揃っているので、僕はいつもここを使っています。

「おやっさん、今日おすすめは？」

「お、鏡護か。そうだな……このナスなんてどうだ？煮て良し、焼いて良し、炒めて良しだぜ」

最初に顔を出したのは八百屋です。

「どれどれ……あー、確かに。これはいいですね」

「だろう？」

「それじゃあこのナスと……あとピーマンとニンジンをください」

「へい、まいど。いつものオマケ、つけといたぜ」

会計を済ませて受け取った袋を覗くと、トウモロコシが2本入っていました。

「おやっさん、ありがとう。また来ます」

そう言って八百屋を後にした僕は、2軒先の魚屋に立ち寄ります。

「大将、今日はどう?」

「おう、鏡護。今日はしじみのいいのが入ったんだ。汁物にするといい出汁が出るぞ」

「じゃあそれください。あと、アジを3尾」

「あいよ。しじみは2人分でいいかい?」

「あ、両親が帰ってきてるので4人分で」

「お、2人とも帰ってきたのか。よかったな」

「はい」

「よし。アジ2尾オマケしとくぜ。ご両親によろしく言っといてくれ」

「ありがとう大将。伝えておきます」

そうして魚屋から出ると、今度は向かいの肉屋に行きます。

「ご主人、豚バラが２００くらい欲しいんだけど、いいのありますか？」

「いらっしゃい鏡護君。そうだねぇ……今日は三元豚、やまと豚、赤城豚が入ってるけど、どれがいいかな？」

「うーん……それじゃ、やまと豚でお願いします」

「やまと豚ね。ちょっと待ってて……はい、これ。ちょっとオマケしておいたよ」

「ありがとうございます」

「また来てくれよ」

「はい、必ず」

夕食用の食材はこれで全部ですね。

「お？そこ行く背中はもしかして鏡護か？」

その後、牛乳やパンをスーパーで買った帰り道の途中で背後からそんな声が掛かりました。

「その声……やっぱり父さんか」

振り返った先にいたのは、我が父・天水星哉でした。

「ただいま息子よ。ついさっきこの街に着いたところだ」

「おかえり。先に帰ってきた母さんは家にいるよ。夕飯までは寝てるって」

「何だ、我が姫は眠りの最中か。帰ってきた夫を出迎えてはくれないんだな」

何やら芝居がかった調子で話す父さんでしたが、僕は付き合わずに普段通りの調子で返します。

「案外、父さんが帰ったら起きるかもよ?」

「そうだな。その可能性は充分にあり得るな。ところで、黎夜はどうしている?」

「姉さんなら、今日は仕事で学園だよ。もうそろそろ帰ってくる頃だと思うけど」

「そうか。ならば急いで帰って娘を出迎えるとしよう」

どうやら父さんは姉さんに対してサプライズを仕掛けるつもりのようです。

「まぁ程々にしておいてね」

「誰に物を言っている。俺がそこら辺の加減を見誤ったことがあったか?」

「……割と見誤ってばかりだったような気がするよ」

「そ、そんなことはないぞ？」

どもった上に疑問形で言われても説得力は皆無です。

そうこうしている間に家に着きました。

「久しぶりの我が家だが、やはりいいものだな」

「僕としては、もう少し家に寄り付いてくれる方が嬉しいんだけど」

1度家を離れると平均2～3年は帰ってきませんからね、家の両親は。

鍵を開けて玄関のドアを開けると、

「あなた、お帰りなさい」

「おう。今帰ったぞ」

「やっぱり起きてたか……」

母さんがニコニコ笑顔で待っていました。

「月。帰宅早々で悪いが、ちょっと準備を手伝ってくれ」

「いいですよ～。黎ちゃんのお出迎えですよね～？」

「ああ、そうだ」

父さんと母さんはそのまま2階へと上がっていってしまいました。

「さてと、それじゃあ僕は夕飯の準備をしないと」

買ってきた物をキッチンに運んで、早速調理に取り掛かります。

それからしばらくして、

――ガチャッ

「ただいひゃあぁぁぁぁぁっ！？」

ドアの開く音と姉さんの悲鳴が聞こえてきました。何をしたか知りませんが、両親の悪戯は成功したようです。

ただ、夕飯の時間になっても不機嫌な姉さんとひたすら謝り続ける父さんの姿を見て、いつものようにやり過ぎた事だけはわかりました。

第４２問　『父と母、帰宅す』（後書き）

あとがき

作者　「まずは本日のゲストにご登場いただきましょう。どうぞ！」

月姫　「皆さん、こんにちは～。キョウくんの母の月ちゃんで～す！」

作者　「というわけで、今日のゲストは天水月姫さんです」

月姫　「よろしくお願いしますね～」

作者　「まぁ、今日のあとがきは新キャラである天水夫妻の紹介なわけですが……」

月姫　「あらあら～、そうなの～？」

作者　「ええ、そうなんです。とりあえず、こちらをご覧ください」

名前　天水（あまみ）　星哉（せいや）

性別　男

誕生日　４月１日

身長　１８２センチ

容姿　短く刈った黒髪。
　仕事関係で鍛え上げられた、がっしりとした体格。

性格　基本的には優しくて頼りがいのある父親。
　しかし、子供達や親しい友人に対して悪戯を仕掛ける子供っぽい一面もある。
　（仕掛ける悪戯は、その９割近くが加減を見誤ったものである）

名前　天水（あまみ）　月姫（つきひめ）

性別　女

誕生日　７月７日

身長　１５９センチ

容姿　腰まで伸ばした銀髪。
　出るところはしっかり出ているナイスバディ。
　永遠の２０代。

性格　優しさと愛に溢れた母親。（本人談）
　しかし、実際にはお茶目で悪戯っ子な部分が前面に出ている。
　語尾が伸びる独特の喋り方をする。

追記　（共通）仕事で世界を飛び回っている為家を長期間空ける事が多く、めったに帰ってこない。
仕事については一切を語ろうとしないので、子供達は両親が何をしているか知らない。
とある業界では名の知れた有名人なのだが、それでも子供達は知らない。

（星哉）各種格闘技を修める武道家で、運動神経抜群。
幼い黎夜に稽古をつけて、サブミッションその他を仕込んだ張本人である。
奥さん大好きだが、最近あまり相手にされなくてちょっと寂しい。

（月姫）息子が大好き。もしかしたら旦那以上かも、とは本人談。
家事は一通りこなせるものの、今では息子の方が上手だと思っている。
「おばさん」と呼ぶと黒いオーラを発するので、皆必ず名前で呼ぶ。

嫁達（瑞希と優子）の事は昔から可愛がっていたが、最近可愛がり方がヒートアップしているらしい。

月姫　「こうして改めて紹介されると何だか恥ずかしいわね～」

作者　「実は今回でこの作品に登場するオリキャラは全員紹介したことになります」

月姫　「つまり～、今後増える予定はないってことかしら～？」

作者　「まったくないかと言われるとちょっとわかりませんが、一応そのつもりです」

月姫　「ちなみに～、旅行編以降は私と星哉さんってどうなるの～？」

作者　「少なくとも夏休み中は家にいられると思います」

月姫　「よかった～。それを聞いて安心したわ～」

作者　「それでは今日はこの辺で失礼します。次回は？」

月姫　「次回～、第４３問『目的地に向かう航程も旅の楽しみの１つ（仮）』

を～」

作者　「よろしくお願いします！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5426m/

バカと天眼の賢者と召喚獣

2011年10月7日13時57分発行